

寄	贈
大石悠二氏	平成 年月 E

DB
1169
1995
11G

冷戦下の中東紛争

イスラエルの軍事的覇権確立に至る

中東地域の変動過程

(1948～1970)

大石 悠二

目次

凡 例

地 図

緒 言

- 第一部 中東紛争の史的背景
- 第二部 政治的シオン主義の生成
- 第三部 東アラブ統治機構の解体と再編
- 第四部 ユダヤ国家の創建めぐる米国の役割
- 第五部 国際連合主導のパレスチナ分割
- 第六部 イスラエルの建国と中東動乱
- 第七部 アラブ民族主義の盛衰
- 第八部 六日戦争の破局
- 第九部 停戦後の新たな戦争

結 語

資料一覽

凡 例

凡 例

- ◆ 外国語を日本語に音訳するのは、言語構造と音韻の違いから困難を伴う。本論は地名や人名の固有名詞を片仮名で表記するのに、平成三年六月二十八日の内閣告示第二号「外来語の表記」や新聞雑誌の慣用に必ずしも従わず、独自の方式に基いている。

- ※ 欧米語の固有名詞が日本語のローマ字綴りの発音に影響されて転訛した結果、その片仮名表記は長音符を乱用しがちである。本論の音訳は原音にない長音を排し、また、弱母音のアがエに、二重母音が長音化する傾向も改めた。さらに欧米語の表記で、母音+Rで終わる人名も語尾を長音化せず、片仮名のみで表した。[例 トーマス・エドワード・ローレンス→トマス・エドワード・ロランス（英国のアラブ研究者、軍人）、アドルフ・ヒトラー→アードルフ・ヒトラル（ドイツ第三帝国総統）、ゴルダ・メイヤー（ゴルダ・メリアル）イスラエル首相]

- ※ アラビア語の片仮名表記については、英語の音訳に準拠した。欧米語の場合とは逆に、長音符の欠落が目立つので、くどいようでも音引きの符号を入れた。[例、イスラム→イスラーム、イスマイリア→イスマーイーリア]

- ※ アラビア語のアとエの音は、しばしば容易に変換する。したがって、二通りの表記が可能で、必ずしも統一しなかった。[例、フセイン=フサイン、ファイサル→フェイサル、ネギブ=ナギブ]

- ※ アラビア語の定冠詞のアル（あるいはエル）と被修飾語の間は、記号の=で結んだ。[例、エル=アリシュ（シナイ半島の町）] 定冠詞は次に来る特定の音と結合して、促音となる場合がある。[例、ヌーリー・エル=サーイード→ヌーリー・エッ=サーイード（イラクの首相）、アル=ラー→アッ=ラー（イスラーム教の唯一神）] 記号の=は初出だけに用い、二度目から省略される場合もある。[例、アル=イスカンデーリヤ→イスカンデーリヤ（エジプトの大都市、海港）]

- ※ 仏語で貴族の姓を示す de、ヘブライ語やアラビア語で「～の息子」の意味のベンやイブンも、記号の=で結んだ。[ド=レセップス（仏外交官、スエズ運河の掘削者、

ベン＝グリオン（政治的シオン主義指導者、イスラエル初代首相）、イブン＝サウード（サウディ・アラビア国王）

※ 固有名詞が二つ以上の単語から成る場合でも、一つのまとまった意味を持つならば、単語の間に記号の・を入れずに、一語で表記した。[例、テル・アヴィヴ→テラヴィヴ（「春の丘」の意、イスラエルの都会）、アブド・アル＝ラー→アブダッラー（人名で「神の僕」の意、トランスヨルダン首長）、ニュー・ヨーク→ニューヨーク（ニューヨーク、米国の都会）]

※ 日本で一般的に用いられる国名の片仮名表記は、ほとんどが英語の転訛したものである。本論でも原語によらず、英語の発音に準じた。[例、ポルスカ→ポウランド、エースタルライヒ→オーストリア。ただし、ドイチュラントはジャーマニでなく、ドイツと表記した] アラビア語の国名も英語に準じた。[例、ミスル→エジプト、サウード家アラビア王国→サウディ・アラビア] 英語の発音のラシャとターキは、それぞれ転訛のロシアとトルコの表記を採用した。

※ 都市名は必ずしも英語の発音に従わず、原音に基いた場合もある。[例、モスクワ→マスキヴァ、ベルリン→ベルリーン、ヴィエンナ→ヴィーン]

米国や英国の場合でも、英語の原音になるべく近付けるよう努めた。[例、ロンドン→ランダン、ワシントン→ウォシングタン]

中東地域の都市名は、アラビア語に従った。[例、カイロ→アル＝カーヒラ、ダマスカス→ディマシュク、アンマン→アマーン]

※ 聖書ゆかりの地名と人名は、日本聖書協会刊行の旧約、新約聖書の各版を参考にしながら、筆者の判断で取捨選択した。[例、パレスチナ、ガリラヤ湖、ヨルダン川、エリコ、エルサレム、シオン、シナイ、エジプト、アブラハム、イサク、モーセ、ゴリアテ、ペリシテ人、イエス]

※ 国名の短縮表記は、漢字、あるいは漢字と片仮名の組み合わせを用いた。アメリカ合衆国→米国、大ブリテンならびに北アイルランド連合王国→英国、フランス→仏、オーストリア→奥、ロシア→露、トルコ→土。ソヴィエト社会主義共和国連邦→ソ連

※ 以下、人名、国名、地名について、新聞雑誌の慣用表記との対比を列挙する。括弧の中が、従来の慣用的表記である。(順不同)

【人名】

アーサー・ジェイムズ・バルファ(アーサー・ジェイムズ・バルフォア)、ドワイト・デイヴィッド・アイザンハウア(ドワイト・デーヴィッド・アイゼンハワー)、ハーバート・ヘンリー。アスクウィス(ハーバート・ヘンリー・アスキス)、クレマント・リチャード・アトリ(クレメント・リチャード・アトリー)、ネヴィル・チェンバリン(ネヴィル・チェンバレン)、ロバート・アンタニ・イーデン(ロバート・アンソニー・イーデン)、モウシャ・ダーヤーン(モッシュェ・ダヤン)、ジョン・フォスタ・ダリス(ジョン・フォスター・ダレス)

【国名】

アルジアリア(アルジェリア)、アージュンティーナ(アルゼンチン)、イタリ(イタリア)、イーシオウピア(エチオピア)、パルー(ペルー)、ヘイティ(ハイチ)、ライビアリア(リベリア)、ユーガンダ(ウガンダ)、エスタウニア(エストニア)、グワタマーラ(グアテマラ)、ノーウェイ(ノルウエー)、ホランド(オランダ)、マロコウ(モロッコ)、バルゲアリア(ブルガリア)、バーマ(ビルマ)、ベルジャム(ベルギー)、スウィードン(スウェーデン)、リースエイニア(リトアニア)、ルーメイニア(ルーマニア)、レバナン(レバノン)、ポーチュガル(ポルトガル)、チェカスロウヴァーキア(チェコスロバキア)、ユーゴウスラーヴィア(ユーゴスラビア)、ユルグアイ(ウルグアイ)

【地域、都市名】

アナトウリア半島(アナトリア半島)、アイビアリア半島(イベリア半島)、エイデン(アデン)、クリート島(クレタ島)、サイプラス島(キプロス島)、テアラーン(テヘラン)、ブキュレシュティ(ブカレスト)、ビューダペスト(ブダペスト)、ボールカン半島(バルカン半島)、マンチスタ(マンチェスター)、モールタ島(マルタ島)、

◆ 数字の表記は、次の基準を定めた。

* 序数詞、世紀、概数、熟語には、漢数字を用いる。

[例、第一次世界大戦、第二次中東戦争、第三帝国、十九世紀、十万人の 難民、一つ、二日間、三日、六日戦争]

* 端数の付いた統計数字、国際連合安全保障理事会の決議番号、年月日、標高、百分比には、算用数字を用いる。

[例、1939年のパレスチナの総人口 1,422,955 のうち、アラブ人の数は 977,498人、ユダヤ教徒の数は 445,457人。安全保障理事会決議242号。1948年 5月14日のイスラエル独立宣言、海拔 2,814mのヘルモン山、地中海の海面下 394mの死海、ユダヤ側の所有地はパレスチナ全土の 6,5%。国際連合総会の聖地分割案は、英委任統治領・パレスチナの面積の 57%をユダヤ国家に割り当てた。]

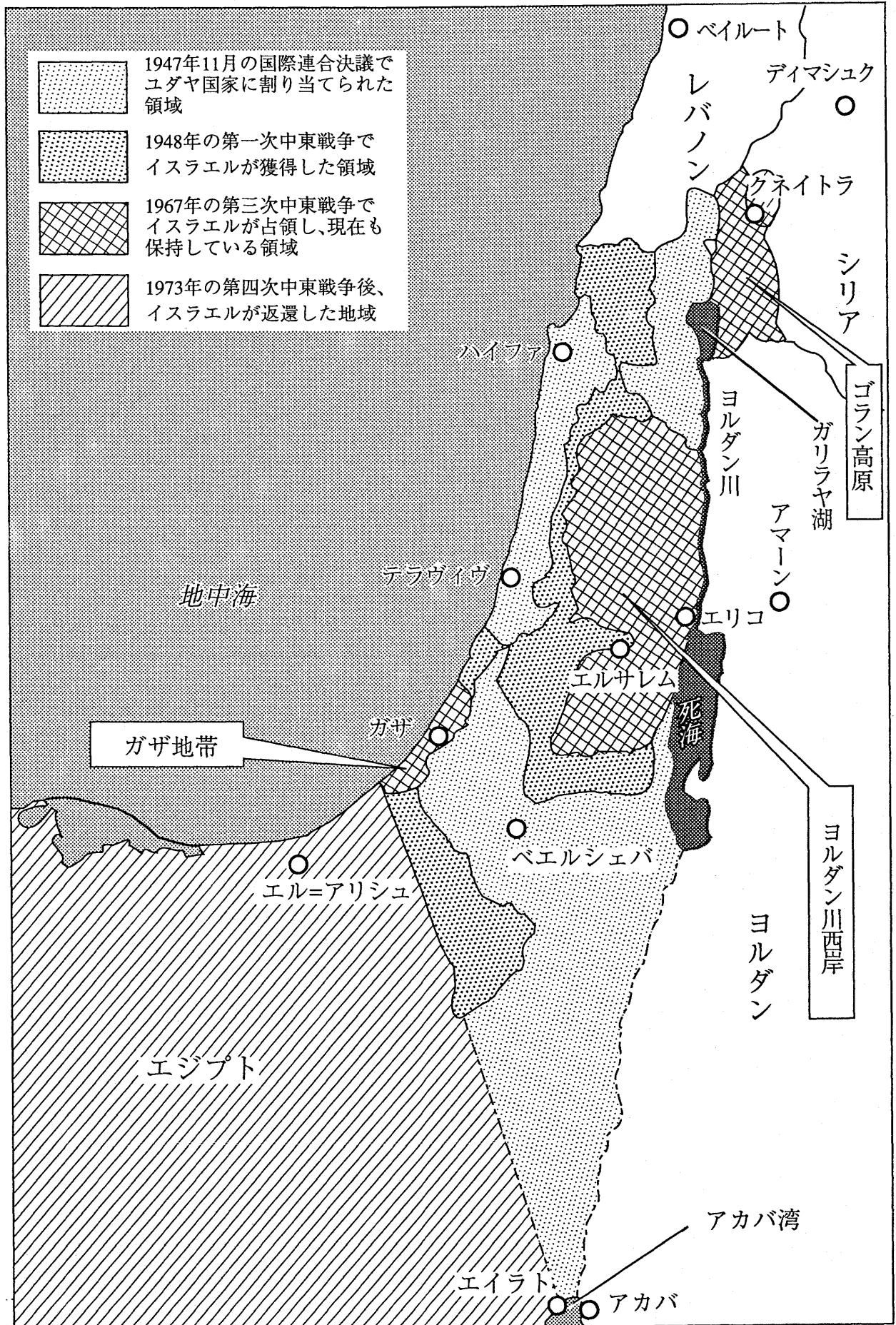
- ◆ 年号は西暦（グレゴリウス暦）で記し、特に断らない限り、ユダヤ暦やイスラーム暦を用いない。

- ◆ 註は各部の終わりにまとめ、参考文献を次の通り記載した。〔著者、あるいは編者の名前、本の題名：副題（発行地、出版社、刊行年）、参照頁〕 同一の書物が同じ部で註に取り上げられる場合、前掲書と記した。ただし、部が更まれば、再び上記の例に倣っている。

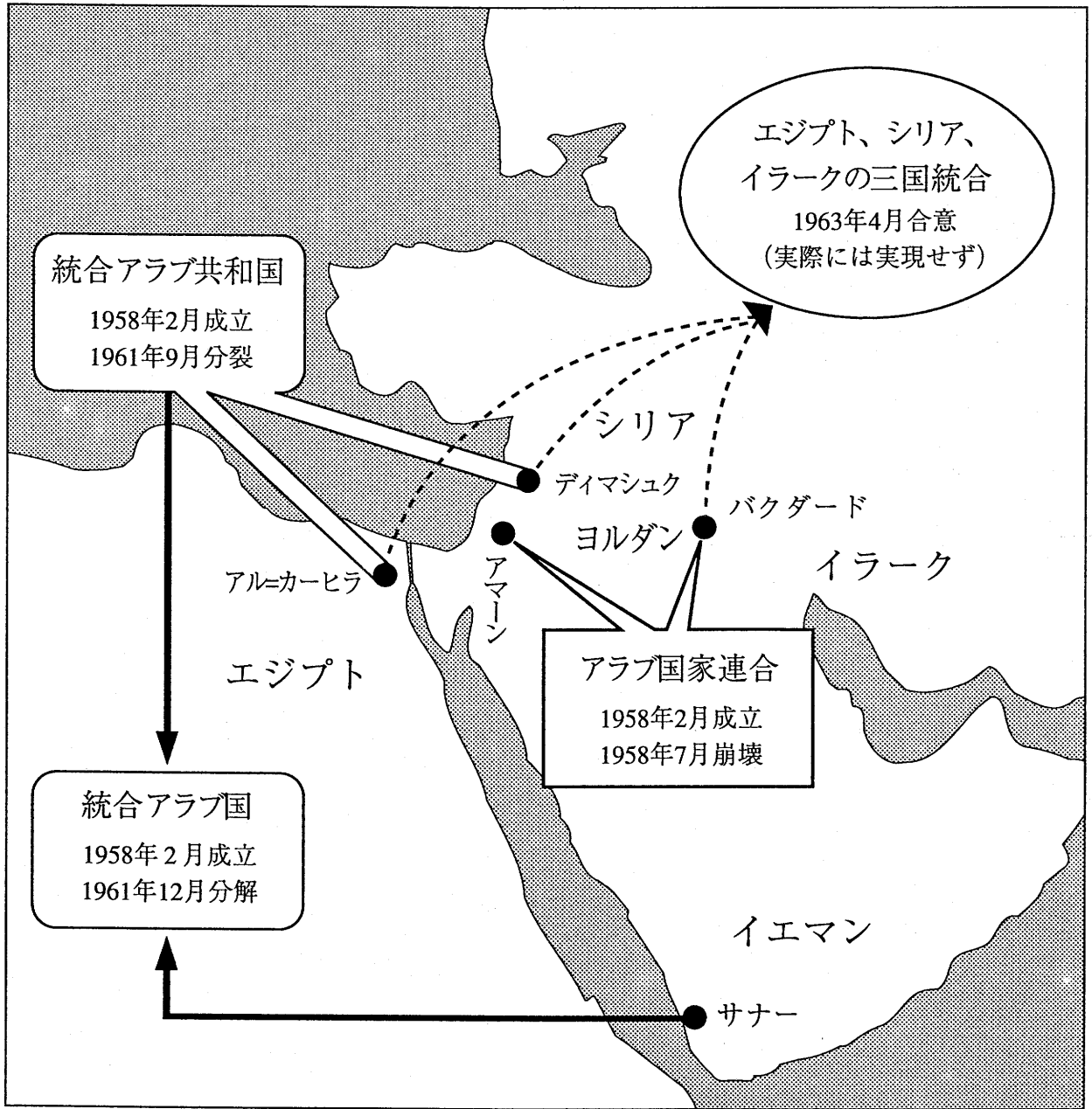
#

地 図

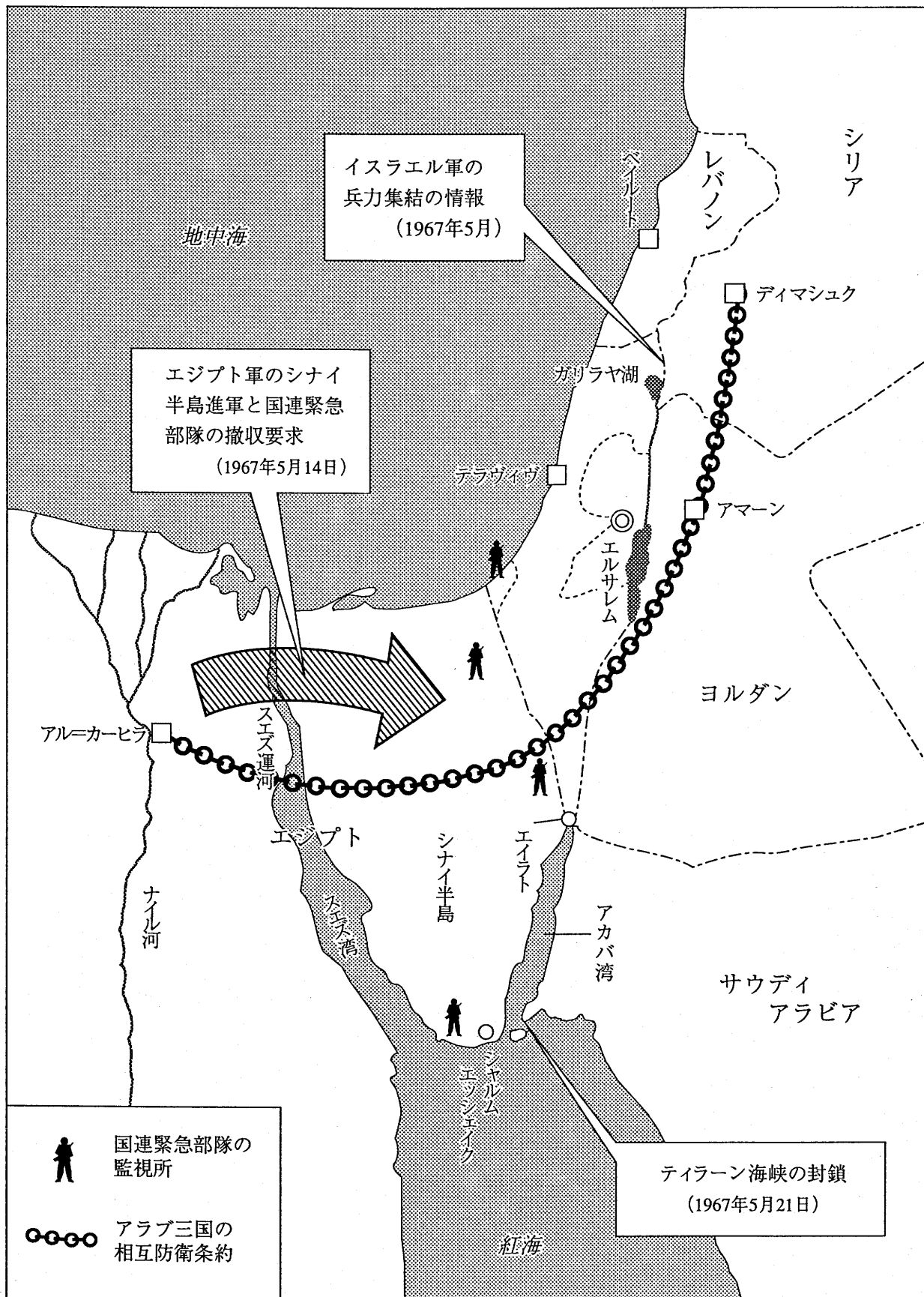
パレスチナの分割とイスラエルの拡大



アラブ世界の統合と分裂



六日戦争前の中東情勢



緒 言

本論の目的 1948年に建国のユダヤ国家・イスラエルは、当初、中立外交を指向しながら、冷戦の深化と共に西側陣営に加わり、米国とソ連の両超大国の角逐の狭間で軍事力を増強した末に、1967年から1970年にかけて、エジプトを筆頭とするアラブ諸国とパレスチナ人の抵抗運動を制圧した。本論の目的は、脆弱なイスラエルが米国との緊密な関係を利用しつつ、中東地域¹に軍事的覇権を確立するまでの過程を検証することである。

ユダヤ国家の軍事的優勢は、中東地域からソ連の影響力を大幅に減殺する。アラブ・イスラエル対決は、本来、地域紛争でありながら、冷戦構造に組み込まれたために、当事者間の自主的解決を困難に陥れた。イスラエルの軍事的覇権の確立こそ米国の世界戦略に適い、ウォシントンが中東地域に米国主導の平和（パックス・アメリカーナ）を課すのに、必須の要件となったのである。

* * * * *

中東紛争の軌跡 現代の中東紛争は、聖書ゆかりの地パレスチナのアラブ原住民が近隣アラブ諸国の、欧州から聖地に移住のユダヤ教徒が欧米列強の、それぞれ物心両面の支援を受けて、同一の土地の支配権を争ったことに起因する。それは二つの民族主義——西欧の植民地主義から解放を求めるアラブ民族主義と、欧州キリスト教社会の差別と迫害から逃れてシオンの地（パレスチナ）に国家創建を求めるユダヤ民族主義——の相克に他ならない。

ユダヤ建国運動の政治的シオン主義は、十九世紀も終わり近い頃、当時の欧州における反セム主義（反ユダヤ主義）の風潮の中から生まれた。当初、この運動は少数の信奉者を得たに過ぎなかったが、第一次世界大戦中の1917年に英国政府の後援を受け、大戦後に国際連盟から認証されて、1924年、英委任統治領・パレスチナの創設によって、ひとまず目的を達成する。

この時、欧米列強主導の国際連盟は、アラブ住民がパレスチナ人口の圧倒的多数を占めている実情を無視して、欧州からユダヤ教徒の組織的移住を認めた。それ以来、世界三大宗教（ユダヤ、キリスト、イスラーム教）の聖地は、長い歳月にわたって紛糾の場と化す。

第二次世界大戦後、国際連盟は解散し、新しい組織の国際連合²に引き継がれた。この世界平和維持機構は、パレスチナ問題について、前車の轍を踏む。1947年11月29日、国際連合総会はアラブ側の猛反対を多数決で押し切り、聖地の分割とユダヤ国家の創建を決定した。この日から現地のパレスチナでは、アラブとユダヤの住民の間で、流血の衝突事件が続発する。

それから約半年後の1948年5月15日、英国は委任統治体制に終止符を打った。イスラエルが独立宣言を発すると、アラブ諸国の正規軍はパレスチナに侵攻し、

武力で新生ユダヤ国家の打倒を図る。この第一次中東戦争で、イスラエルはアラブ側の軍事介入を撃退したばかりか、国際連合の決議で割り当てられた領域よりも広い土地を支配下に収めた。この時、多数のパレスチナ・アラブ人が戦火を逃れて、近隣諸国に流入する。この難民の大量発生は中東地域の将来に禍根を残し、その後のアラブ・イスラエル対決の原因となった。

アラブ諸国の戦争目的は、まずイスラエルを中東地域の政治地図から抹殺することだった。しかし、軍事的敗北の現実の前に、難民の帰還や民族自決の権利擁護に力点を変更する。この大目的は〈パレスチナの大義〉と呼ばれ、アラブ諸国の軍事行動と外交活動の基本原則となった。

当時、この地域紛争は一定の冷却期間を置いて、交戦諸国の中で自主的解決に至ると期待された。だが、アラブ側は敗戦の屈辱を忘れず、講和条約の締結どころか、イスラエルを国家として承認しなかった。イスラエルも支配下の領域内にアラブ難民の帰還を認めず、強硬な対決姿勢を維持する。やがて米国とソ連の冷戦が中東地域で激化するにつれて、アラブとイスラエルの対決は東西両陣営の対立の構図に組み込まれる。

超大国の思惑一致 1945年、第二次世界大戦が終結すると、世界地図は米国とソ連の二超大国の勢力圏にほぼ塗り分けられた。日本とドイツの枢軸陣営は無条件降伏によって完全に崩壊したが、その一方で米英ソの連合陣営も分裂した。昨日までの味方が今日の敵となり、米国とソ連は冷戦の下で睨み合いながら、超大国同士の直接対決を回避した。

イスラエルの創建は、冷戦の初期段階³で、米ソ両超大国の思惑が図らずも一致した所産である。ウォシントン⁴の民主党政権は大統領選挙でユダヤ教徒の支持票を確保するために、マスクヴァは中東地域における英国の軍事的、外交的影響力に揺さぶりをかけるために、それぞれ異なる動機から国際連合でパレスチナの分割とイスラエルの独立に賛同した。

実際、米ソ両国の態度決定は一貫した政策から導き出されたのではなく、長期的見通しのない権道に過ぎなかった。ホワイトハウスはユダヤ圧力団体の執拗な要求に屈して、石油資源の確保のためアラブに気兼ねする国務省の強い反対を押し切り、クレムリンは政治的シオン主義を敵視する従来の方針に反して、ユダヤ建国運動の反英的、かつ社会主義的性格を過大に評価したのである。

1948年の第一次中東戦争でイスラエルは米ソ両国の支持を背景に戦い、アラブ諸国の軍勢を撃ち破る。国際連合の禁輸措置にもかかわらず、新生ユダヤ国家は米国製の余剰武器を密輸入し、さらにソ連の衛星国になったばかりのチェコスロヴァキアから旧独軍の航空機や重火器を公然と調達して、独立戦争に勝利を収めた。

建国後しばらくの間、イスラエルは東西両陣営のいずれにも属さず、新生国家の将来像を模索する。米国もソ連も相次いでイスラエルを承認し、1949年にはアラブ諸国の反撥を承知の上で、両国ともユダヤ国家の国連加盟に賛成票を投ずる。両超大国の便宜的協調は中東紛争の原因を造り出し、アラブ・イスラエル対立を一層激化させる契機となった。

新生ユダヤ国家は周辺アラブ諸国の敵意に囲まれ、第一次中東戦争で獲得した領域を防衛しながら、戦後の国造りの事業を成し遂げるために、物心両面で米国の援助を必要とした。イスラエルは社会の指導部にソ連・東欧圏出身の元革命家や社会主義者を擁しながら、複数政党の議会制度を採用し、米国流の価値観を尊重した。1950年6月25日、東北アジアの冷戦が朝鮮戦争となって熱戦に転ずると、イスラエルは国際連合で米国支持の態度を表明する。

ソ連はイスラエルの建国に手を貸しながらも、その後は実質的援助を与えなかった。やがてクレムリンは反ユダヤ的姿勢を強化し、イスラエルの反撥を買う。さらにソ連は東欧の衛星国と共に反シオン主義態度を募らせ、イスラエルを敵視するに至った。⁴

米ソ両国の代理として 1950年代の前半、中東地域も世界各地の紛争地帯と同様に、二つの超大国の角逐の場となる。第二次世界大戦後、この地域から英仏両国の勢力が退潮し、西アジアから北アフリカに至る広大な地域は、軍事的にも外交的にも、真空状態に陥った。しかし、この地域の国際水路や石油資源の確保は、西側陣営に不可欠である。米国は西欧列強の凋落に代わって積極的役割を担い、中東地域からソ連の影響力の排除を意図した。1947年、米国大統領のハリ・トルーマンはソ連の〈封じ込め〉を画策し、議会から権限と予算を獲得する。

冷戦体制の下で、米ソ両国は勢力圏の維持に腐心する。現状の変更は超大国同士の直接対決を招き、新たな世界大戦を引き起こしかねない。そこで米国もソ連も勢力圏内に相手側からの浸透を排除するために、特定の国を代理⁵として利用し、敵対陣営内部の攪乱を図る。

1953年、米国の政権は民主党から共和党に移り、それまでの親イスラエル外交路線を修正する。軍人出身のドワイト・デイヴィッド・アイゼンハウア大統領の登場に、ソ連は警戒を強めた。実際、新大統領は強硬な反共主義者で中東地域を重視し、トルーマンの〈封じ込め〉政策から一段と進んだ〈巻き返し〉政策の採用で、ソ連の影響力を排除しようと努める。

共和党政権の中東政策は、表向きアラブとイスラエルのいずれにも偏ることなく、双方に等距離を置いた。だが、実際には前者に傾き、対ソ防衛の戦列にアラブ諸国の組織化を意図する。ところが、アラブの盟主国・エジプトは西側

陣営の代理の役割を拒否し、他のアラブ諸国に呼びかけて、この構想に強い異論を唱えた。しかし、米英両国はエジプトの反対を無視して、1955年、イラクを抱き込んで、ソ連包囲網のバグダード条約機構を樹立させる。

イスラエルの報復作戦 第一次中東戦争でアラブ側は敗北を喫し、イスラエルの領域拡大を許した。それでもエジプトは旧英国委任統治領・パレスチナから地中海の沿岸部のガザ地帯を、トランスヨルダンにはヨルダン川の西岸一帯を占領してユダヤ国家に渡さず、それぞれの施政下に置いた。

停戦の成立後、最前線は事実上の国境として、アラブ農民や遊牧民の生活圏を分断する。後に残した土地、家屋、財産が気懸かりで、難民はしばしば故郷に潜入を図り、イスラエル軍の銃弾を浴びた。血気に逸る若者は軍事境界線を越え、敵地に潜入して復讐の機会を窺う。イスラエルは境界線の侵犯に強い姿勢で臨み、たびたび報復作戦を繰り返す。

エジプトはガザ地帯の難民に武器を与え、対イスラエル武装活動を支援した。そこでユダヤ国家は報復攻撃の矛先をアラブ村落や難民収容所だけでなく、背後のエジプト軍基地にも向ける。1955年2月28日、イスラエル国防軍の部隊はガザ地帯のエジプト軍駐屯地を急襲し、戦死と負傷者を合わせて百人近い大損害を与えた。

このガザ事件で、エジプトはイスラエルの軍事的脅威を改めて痛感する。アラブ陣営随一の大国でありながら、エジプトは第一次中東戦争で軍事力をほとんど消耗し尽くしていた。そこで、アラブの盟主国が軍備増強のために西側陣営に武器供与を求めたところ、イスラエルに対する配慮から素気なく拒否される。五年前の1950年5月25日、西側陣営の米英仏三国は共同宣言を発し、休戦境界線の変更をもたらしかねない軍事力の増強に歯止めをかけて、中東地域に武器の禁輸を決めたからである。

この三国宣言はパレスチナの平和と安定をめざすようでも、実際にはユダヤ国家の軍事征服を追認し、アラブ対イスラエルの力関係を後者に有利なまま固定化すると同時に、中東地域にソ連の介入を排除するよう意図した。

そこで、エジプトはクレムリンに急接近し、チェコスロヴァキア経由でソ連製の兵器を入手する。イスラーム世界の反共国家はユダヤ国家に対抗するために、無神論の共産主義国家と連携した。ソ連は中東地域の中心部に楔を打ち込み、アラブの盟主国を代理に仕立てあげる。

一方、イスラエルはエジプトの軍備拡張を脅威と受け止め、フランスから近代兵器を購入した。これで三国宣言の武器禁輸は、事実上、骨抜きされる。しかし、米国は財政的援助を与え続けたものの、武器の供与を控えた。

超大国の 協調体制 1956年10月30日、イスラエルは対ゲリラ報復攻撃に擬装して、エジプトのシナイ半島に侵攻し、英仏両国の軍事冒険の露払いを務める。この第二次中東戦争で、西欧の二大強国はスエズ運河の奪回とエジプト政権の打倒を図った。この国際水路は西側の対エジプト借款取り消しの報復に、三カ月前に国有化されたばかりだった。イスラエル軍は英仏軍の攻撃に先立って尖兵の役割を果し、予防戦争を仕掛けたのである。

またもやウォシントンとマスクヴァは別々の動機から共同歩調を取り、前回とは逆にイスラエルを抑えこんで、中東地域の戦火を消し止める。米国は大統領選挙を目前に控え、世界大戦の可能性を危惧して、早期停戦に向けて盟邦の英仏両国に外交的、経済的圧力をかけた。ソ連は中東地域にようやく得た友好国の敗北を座視できず、 لندن、パリ、テラヴィヴに核攻撃をほのめかす。そればかりか、クレムリンは中東地域に米ソ二カ国で共同出兵するようホワイトハウスに提案した。

戦後、この奇妙な米ソ協調体制は、長続きせずに終わる。停戦後、アイザンハウア大統領はイスラエルに強い外交的圧力を加え、占領地からの全面撤退を実現させた。三国宣言に謳われた通り、軍事境界線の現状維持をイスラエルに順守させたのである。

その一方で、1957年1月、米国の共和党政権は新外交政策を提唱し、中東地域からソ連の影響排除を画策した。このアイザンハウア・ドクトリンは〈国際共産主義の脅威〉を強調して、中東の地域紛争を冷戦構造の中に組み入れる。⁶ その結果、米ソ超大国間の対立が継続する限り、中東紛争の自主的解決は困難となった。⁶

冷戦の 熱い戦場 1961年、米国では民主党が政権に復帰し、冷戦は新局面を迎える。新大統領のジャン・フィツジェラルド・ケネディはユダヤ教徒の支持で辛うじて当選したが、中東政策では新方針を打ち出さず、共和党の前任者の等距離外交を踏襲した。実際、ケネディは米ソ直接対決の危険をはらんだキューバ危機に忙殺され、中東地域に対して副次的関心しか払わなかった。

だが、この民主党の大統領はアラブ対イスラエルの抗争をめぐって、米国の態度を決定的に変更する。1962年、ホワイトハウスは長年の武器禁輸措置を解除し、イスラエルに〈防御用兵器〉として地対空誘導弾のホークを供与した。翌年、ケネディが暗殺されると、大統領に地位はリンダン・ベインズ・ジョンソンに引き継がれる。ホワイトハウスの新しい主人は親イスラエルの姿勢を明らかにし、アラブ陣営の軍備増強に対して均衡を図るとの理由から、積極的に〈攻撃的兵器〉の戦闘爆撃機と戦車を供与した。

1967年春、シリアとイスラエルの国境付近の地と空で両国軍の衝突が発生し、中東地域の軍事的緊張を一挙に高めた。それまでアラブ陣営は内部抗争で足並みを乱していたが、ここで大同団結してユダヤ国家に矛先を向ける。イスラエルはエジプト、シリア、ヨルダンの三国に包囲され、建国以来、最大の危機に直面した。だが、ユダヤ国家は十二分に軍備を固めて、先制の奇襲攻撃で劣勢を一挙に挽回する。この第三次中東戦争で、イスラエルは僅か六日間の戦闘で、ガザ地帯とヨルダン川の西岸を征服したばかりか、エジプトとシリアの固有領土のシナイ半島とゴラン高原をそれぞれ占領した。

ソ連はアラブ陣営の敗北を悟ると、国際連合の安全保障理事会で妥協に応じ、停戦決議に賛同した。また、同理事会が戦後処理に関して 第242号決議を採択した際にも、クレムリンは柔軟に対応し、文言をめぐって譲歩した。

だが、停戦決議の成立後も、スエズ運河地帯では、砲爆撃の轟音は絶えることがなかった。エジプトは敗戦で失った兵器をソ連からすぐに補充し、占領の恒久化を防ぐために、イスラエル軍に攪乱攻撃を加えたのである。

当時、ジャンソンは東南アジア地域でベトナム戦争の泥沼に足を取られながらも、中東地域でソ連の影響力を減殺するために、イスラエルに最新鋭のファントム戦闘爆撃機を供与する。1969年、エジプトとイスラエル間の軍事衝突——いわゆる消耗戦争が激化するにつれて、中東地域は冷戦の熱い戦場となり、米ソ製兵器の実験場と化した。この戦後の戦争で、米国製兵器の高性能が実証され、エジプトは前線の正規軍だけでなく、銃後の非戦闘員にも、多数の犠牲者を出す。

1969年、共和党は政権に復帰する。新大統領のリチャド・ミルハウス・ニクソンはジャンソンのイスラエル寄り姿勢を修正し、中東紛争の当事者の双方に〈公正〉に対処する方針で臨んだ。就任の三カ月後、ニクソンは冷戦の相手と交渉を始め、さらには英仏両国の参加を求めて、消耗戦争の終結を図る。だが、この時には両超大国の協調が成らず、それ以後、米国はソ連を排除して単独で和平工作に乗り出す。

ニクソン政権の中東外交は、米国とイスラエルの間に緊張をもたらした。国務長官のウィリアム・ラジャズが米国独自の和平案を双方に提示し、占領地からイスラエル軍の撤退を呼びかけたからである。さらにニクソン大統領は公正の原則から、ファントム機の追加引き渡しを一時停止するほどだったが、イスラエルの猛反撥で、間もなく戦闘爆撃機や他の装備の供与を再開しなければならなかった。

しかし、ニクソンとラジャズは、イスラエル、エジプト、それにヨルダンの三国首脳を説得し、1970年 8月、消耗戦争に終止符を打たせる。ホワイトハウ

スの意図は、この敵対行動の停止がアラブ陣営の内部でソ連の影響力を低下させ、かわって米国の地位を向上させることだった。

武装闘争の激化 米国主導の中東和平の実現に、パレスチナ人の抵抗組織は強く反対を唱え、対イスラエル武装活動をやめようとしなかった。和平の成立で、パレスチナ難民の窮状が忘れられるのを恐れたからである。武装集団はヨルダン国内に根拠地を築き、第三次中東戦争の停戦後も、イスラエルにゲリラ闘争を挑んでいた。米国が消耗戦争の直接の当事者でないヨルダンを和平交渉に引き入れたのは、パレスチナ難民の武装闘争を禁止させるためである。

建国以来、イスラエルは難民の武装活動に報復攻撃を加え続けたが、必ずしも抑止効果を挙げなかった。難民の第一世代は敗戦の屈辱と苦難の日々を忘れず、第二世代は難民収容所の厳しい生活から復讐の念に駆り立てられる。1964年、エジプトは難民の組織化を図り、アラブ諸国首脳会議の承認を取り付けて、パレスチナ解放機構（英文略称・PLO）を発足させた。その設立の意図は戦闘的名称とは裏腹に、難民の武装活動を統制下に置くことだった。エジプトはガザ事件と第二次中東戦争の手痛い教訓を忘れなかったからである。

1960年代の半ば、幾つもの武装集団がエジプトに頼らずシリアの庇護を求めて、PLOとは別個に対イスラエル抵抗運動を始める。この遊撃隊はシリアからソ連製の火器やロケット弾を入手し、ユダヤ国家に執拗な攻撃を繰り返した。イスラエルはフィダイーン（アラビア語でゲリラの意）活動の激化を深刻に受け止め、その出撃地点と疑われたヨルダン領のアラブ村落に報復攻撃を加える一方、国際連合の安全保障理事会に提訴する。

第三次中東戦争の後、パレスチナ人の武装集団は難民収容所を要塞化し、イスラエル占領地で破壊活動を強化した。1969年2月、強硬派の武装集団の連合体が、PLO執行部の実権を掌握する。フィダイーンはヨルダン国内に軍事拠点を築き、対イスラエル武装活動を一段と強化した。いまや難民の武装集団は対イスラエル闘争の前面に立ち、ユダヤ国家にとってアラブ諸国の正規軍よりも脅威となる。

1970年8月、消耗戦争の停戦が成立した後、武装集団は西側の民間旅客機を次々に乗っ取り、和平反対の意思を表明した。さらに、フィダイーンは地方都市に人民政府の樹立を宣言する。ついにヨルダン軍は武装集団の討伐に乗り出し、国内各地の難民収容所に攻撃を加えた。このアラブの同士討ちはヨルダンの内戦と呼ばれたが、実際には国際化の危険性をはらんでいた。

この小国はアラブ陣営の一員として反イスラエルの旗印を掲げながらも、親西側の立場を守っていた。ここがフィダイーンに奪われ、アラブ陣営で最強硬

派のシリアと結ぶ事態に至れば、ユダヤ国家は危殆に瀕するだろう。イスラエルは軍事介入の構えを固め、国民に動員令を布告した。米国も第六艦隊を東地中海に派遣し、イスラエル支援の準備を進める。米国は冷戦下の国際秩序の変更を座視できず、親米国のヨルダンの王制がシリア支援のフィダイーンとの戦闘で崩壊するのを危惧したからである。

この情勢の中でヨルダンはフィダイーン勢力を迅速に武力で制圧し、残存勢力を国外に追放した。アラブ陣営内部の兄弟殺しの戦闘で、イスラエルは労せずして漁夫の利を得る。1967～70年の動乱で、イスラエルはソ連の代理のエジプトとパレスチナ人の抵抗運動に痛烈な打撃を加え、中東地域に軍事的覇権を確立した。クレムリンはアラブ陣営の敗北と内部抗争で、この地域への影響力を大幅に喪失した。いまやイスラエルは事実上の軍事同盟国として、米国の代理の域を脱し、中東地域にアメリカ主導の平和を課す。

紛争要因 パレスチナが戦乱の地となったのは、第一次世界大戦中の**重層性**に、英国が敵国のオスマン・トルコ帝国の領土をめぐって、アラブとユダヤの双方に相矛盾する約束を与えたからである。ランダン（London）はアラブ側に聖地を含む西アジア一円の独立を保証し、ユダヤ建国運動のシオン主義団体にはパレスチナに準国家（ナショナル・ホーム）の設立を承認した。この二重取引は、中東地域の将来に禍根を残す。

だが、今日のアラブ・イスラエル対決を解明するには、英国の外交的背信行為に先立って、紛争要因の歴史的**重層性**も探らねばならない。政治的シオン主義運動は、欧州キリスト教社会の反セム主義的土壌から生成した。ユダヤ教徒は差別と迫害の体験から、パレスチナ（シオンの地）に対して強い憧憬の念を育む。旧約聖書の時代の苦難の歴史——強制連行や離散の故事は、このユダヤ建国運動に投影され、聖書の記述——神の約束の地はイスラエル独立宣言の中で、ユダヤの民の本来的権利として強調された。一方、アラブ側は七世紀のイスラーム教の成立とアラブ世界の形成以後、千二百年にわたるパレスチナ定住の歴史から、聖地の正統な住民としての権利を主張する。

本論はまず古代から現代に至るまで、中東地域の歴史を総合的に概観し、次に政治的シオン主義が第一次世界大戦中に英国に利用された末に、戦後に国際連盟に認証された経過をたどる。そして、第二次世界大戦中にナチ・ドイツの犯したユダヤ教徒虐殺の大罪の贖いとして、国際連合がパレスチナのアラブ住民の犠牲において、シオン主義国家の誕生を認知するに至った経緯を探り、同時に米国の演じた役割を考察する。最後に、中東地域の相次ぐ戦乱を通じ、冷戦体制の下で小国イスラエルが軍事強国として台頭し、この地域に覇権を確立するまでの外交・軍事戦略を分析して、中東紛争の深層を解明する。

〈緒言の註と参考文献〉

1 この用語は、英語の Middle East あるいは Mideast、仏語の Moyen Orient の直訳で、西欧中心の視点に立脚している。日本の研究者には、この地域が東洋と西洋の間に介在することから、新しい呼称の「中洋」を提言する人々もいる。〔松本重治監修、板垣雄三編、『中東ハンドブック』（東京：講談社、1979年）、5頁〕本論では、中洋を採用せず、中東を踏襲した。

1902年、米国の海軍史家 Alfred Thayer Mahan は、ペルシア湾を中心にアラビア半島とインド大陸との間の地域を〈中東〉と名付けた。この新造語はやがて新聞で用いられ、後に英国政府も採用して、広く使用されるようになった。〔Bernard Lewis, The Middle East and the West (New York: Harper Torchbooks, 1966年)、9頁〕

中東の範囲は、論者によってさまざまである。英国の外交史家によれば、東地中海からインドの北西辺境州（現在のパーキスターンの一部）に至る地域が「便宜的に」中東と呼ばれている。〔E. H. Carr, International Relations Between the Two World Wars, 1919-1939 (London: Macmillan, 1959年)、232頁〕

本論は中東の範囲を狭く限定し、エジプト以东のアラブ世界を指すよう定める。従って、非アラブのイラン、トルコは除外される。アフガニスタンやパーキスターンが含まれないことは、言うまでもない。

2 1945年春、五十カ国の代表がサンフランシスコに参集し、4月25日から7月26日までの期間を起草作業に費やした末、国際連合憲章を採択した。1945年10月24日、二十九カ国の批准を得て、この世界平和維持機構は正式に発足する。〔Geoffrey Bruun, The World in the Twentieth Century (Boston: D. C. Heath and Company, 1957年)、545~546頁〕

原加盟国の中で、アラブ諸国はエジプト、イラク、レバナン、サウディ・アラビアに過ぎなかった。

この世界機構は、もともと第二次世界大戦中に日独の枢軸陣営に対して〈団結した国家集団〉に由来し、その名称の訳語の〈国際連合〉（略称・国連）は正確とは言い難い。しかし、本論の表記は、慣用に従った。

3 狭義の中東の周辺（イラン、トルコ）と外延（ギリシャ）の国々で、米国とソ連の対立はすでに激化していた。

イランは第二次世界大戦中に中立を宣言したが、実際には親独的だった。このため連合軍陣営のソ連と英国によって国土を占領され、多数の米国人の軍事要員を国内に受け入れねばならなかった。連合軍側はイラン経由でソ連に米国製の軍需物資を送りこみ、その交通路の確保すると同時に、ドイツ人諜報員の排除を意図したからである。1942年1月、イラン、ソ連、英国の三国は協定を締結し、大戦の終結から半年以内に連合軍の軍隊が撤兵するよう定めた。

ところが、大戦中の合意に反して、ソ連は戦後もイランから撤兵しないばかりか、北部のアジールバイジャン州に親ソ自治政権を樹立した。そこでイランは国際連合の安全保障理事会に提訴したが、問題の解決に至らなかった。結局、ソ連は協定の取り決めよりニカ

月以上も遅い1946年 5月に、イランから軍隊を引き揚げる。クレムリンの態度変更は、米国と英国の西側陣営が強い態度を示したからである。

トルコは第二次世界大戦中にソ連から対独宣戦を迫られたが、参戦せずに最後まで中立を維持した。ドイツの降伏後、クレムリンは一部のトルコ領土の割譲、黒海からエーゲ海に抜けるバスパラスとダアダネルズの二つの海峡にソ連の軍事基地設置などを要求して、露土間の緊張が高まった。第二次世界大戦後、ギリシャではソ連支援のゲリラ活動が活発化したが、英国は大戦で疲弊して軍事介入できなかった。そこで1947年 3月、米国はトルコとギリシャ救援のため、経済的・軍事的目的の財政援助を確約した。この措置は、米国がソ連の脅威を認識し、それに固い決意で対処した最初の大きな一歩である。その結果、トルコはソ連の圧力をはねのけて、戦略的に重要な海峡と領土を確保できた。また、ギリシャ政府と軍は左翼ゲリラの討伐に成功し、ポールカン半島の国々と同じ運命を免れた。〔George Lenczowski, The Middle East in World Affairs (Ithaca: Cornell University Press, 1980)、134~137頁、178頁~184頁、794頁~795頁〕

4 1953年の新春早々、ソ連共産党中央委員会機関紙『プラヴダ』は、九人の医師団がクレムリンの要人暗殺を謀って裁判に付されたと伝え、反シオン主義の宣伝に大々的に乗り出す。被告のうち六人までがユダヤ教徒であると、この報道はことさら強調した。同じ頃、チェコスロヴァキアでは、ユダヤ教徒の共産党書記長ルードルフ・スランスキの裁判が進行中で、反セム主義の風潮を盛り上げる。その結果、イスラエルとソ連は、外交的に対立を深めた。〔Georg von Rauch, A History of Soviet Russia (London: Thames & Hudson, 1957年)、426頁〕

5 この〈代理(国)〉と超大国とは、宗主国と保護国のように支配と従属の関係で結ばれているのではないので、時には不協和音を生じる。両者の社会経済体制の違いにもかかわらず、超大国は世界戦略の大目的のために、代理国は自国の安全保障のために、相互に軍事と外交面で提携した。エジプトは軍事面で全面的にソ連に依存しながらも、内政面で共産党を弾圧し、イスラエルは米国から援助の恩恵に浴しながら、ホワイトハウスの中東政策に親アラブ的要素を見出すと、強く抵抗した。冷戦体制の下で、代理国は超大国に対して自己の利用価値を高く吊り上げ、より多くの武器と資金を引き出す。

6 アイザンハウア・ドクトリンの主要な欠点は、この中東外交政策が冷戦をめぐって米国流の思い込みばかりに偏り、アラブ諸国の懸念や希求に殆ど関心を払わなかったことである。すでにソ連から相当な援助を受けている国にとっても、共産主義の脅威よりイスラエルの脅威の方がはるかに大きかった。〔Tareq Y. Ismael, International Relations of the Contemporary Middle East: A Study in World Politics (Syracuse: Syracuse University Press, 1986), 145頁〕

7 ヨルダンの内戦の最中、クレムリンがホワイトハウスに覚書を送り、超大国の不介入を呼びかけたのに対し、ニクソン大統領はイスラエルに必要なならば軍事行動を起こすよう示唆した。イスラエルが動員令の布告で強硬姿勢を示すと、シリアは軟化して内戦に介入しなかった。戦後、米国がイスラエルに多額の軍事援助を与えたのは、ユダヤ国家の軍事的能力を高めて、アラブ側にイスラエルの課す条件で中東紛争解決を強制するためであり、その意図は明白であった。〔Alan R. Taylor, The Superpowers and the Middle East (Syracuse: Syracuse University Press, 1991), 83~84頁〕

第一部

中東紛争の史的背景

1 神の約束の地

**本来的、歴史 西暦1948年 5月14日 (ユダヤ暦5708年イーヤア
的権利の主張 月 5日)**、政治的シオン主義運動の指導部は地中海に臨むパレスチナ第一の都会テラヴィヴに暫定国民評議会を招集し、臨時政府首相のディヴィド・ベン＝グリオンが独立宣言を朗読した。

……英国の委任統治の終了するこの日、われわれはユダヤの民の本来的、歴史的権利、ならびに国際連合の総会決議に基づいて、パレスチナにユダヤ国家の建設を宣言し、イスラエル国と称する。¹

新生国家は建国の根拠を国連加盟国の多数の意志にだけでなく、遙かな昔にさかのぼる〈権利〉に求めた。シオン主義者の主張によれば、パレスチナにおける故国再興は『旧約聖書』に記された神の約束の実現であり、約二千年前に起きた国家滅亡、民族離散の悲劇の原状回復に他ならない。アラブ側はユダヤ側の一方的主張に基く〈権利〉を認めず、イスラエルの打倒めざして武力に訴えた。それ以来、中東地域は長年にわたって、度重なる戦乱に見舞われる。

アラブ諸国とイスラエルの軍事対決が大規模な戦争に発展するごとに、国際社会は仲裁に乗り出して、戦火の消し止めに躍起となった。しかし、停戦の成立は和平の実現を意味しない。双方の軍勢は軍事境界線をはさんで睨み合い、しばしば砲火を交えた。パレスチナ・アラブ人のゲリラ活動はイスラエル側か報復攻撃を招き、無辜の民に流血と破壊の惨禍をもたらす。積年の憎悪と敵意は相互不信を募らせ、戦争から戦争への悪循環を繰り返した。

ユダヤ教の聖典『旧約聖書』は、まず天地創造から説き起こし、中東地域の神話、伝承、歴史、律法、詩歌などを集大成している。その「創世記」によると、神はユダヤ人の先祖アブラム（後にアブラハムと改名）と永遠の契約を結び、カナン（パレスチナ）の地を子々孫々に至るまで永久の所有地として与えると約束した。²

聖書ゆかりの地は、かつてユダヤ³（ヘブライ、あるいはイスラエル）人の支配下にあった。その先祖は唯一絶対神のヤハウェを崇拝する漂泊の民で、遙かな遠い昔、パレスチナに侵入して先住民を武力で征服し、聖都エルサレムに建立した神殿を信仰の拠り所と定める。しかし、その繁栄の時期は長続きしなかった。古代のユダヤ国家は何度も異国の軍勢に蹂躪され、幾多の苦難を経験

した末に、約二千年前、地中海世界の超大国・ローマに服属する。異教徒の権力者に対する数度の武装抵抗は、いつも失敗に終わった。

西暦135年、叛乱がローマの武力で徹底的に鎮圧されると、ユダヤ人は唯一絶対神の信仰と独自の宗教的儀式や習慣に固執する限り、もはやパレスチナに住めなくなった。ヤハウエの信徒は故国を捨てて、西アジア、北アフリカ、ヨーロッパの異郷に散り散りとなる。離散の民は行く先々の居留地に小さな宗教共同体を形成し、唯一神の崇拜を護持すると共に、パレスチナに強い望郷の念を抱き続けた。とりわけ聖都のシオン山⁴は忘れがたい地名として、流浪の民の信仰心に刻みこまれる。

この宗教共同体は移住先によって、さまざまな運命をたどった。欧州に渡った者の子孫は、受け入れ地で白眼視される。唯一絶対神の信徒は堅固な信仰のために現地の社会になじもうとせず、いつまでも異質の存在だったからである。中世以降、離散の民の末裔に対する偏見は増幅され、欧州の各地で差別と迫害が繰り返された。

十九世紀の終わり近く、欧州のユダヤ教徒の一部は政治的シオン主義を提唱し、聖地に故国の復興を夢想する。その指導部はキリスト教社会で虐待された同胞をパレスチナに移民として送り込み、ユダヤ問題の解決を図ろうとした。第一次世界大戦中、英国はドイツ、オーストリア、トルコを敵に回した戦争に勝ち抜くため、この祖国再興運動を利用し、将来に禍根を残す。

パレスチナの地勢 紛糾の地は東地中海に面して南北に細長く伸び、日本列島に置き換えても、四国ぐらいの面積に過ぎない。だが、その狭い領域にもかかわらず、風土は場所によって驚くほど異なっている。神の約束の地は聖書で「乳と蜜の流れる地」と形容されているが、実際は大半が乾いた不毛の荒野である。雨の多い北部の山地でも、年間降水量は七百ミリ程度で、南部の砂漠では百ミリにも満たない。乾燥地だけに一日の温度差が大きく、昼間は強い日差しと熱風で焦げるように暑くとも、夜間は反対にぐんと冷え込む。

パレスチナの内陸部には世界最大の地溝帯が北から南に走り、際立った地勢の変化を示している。北辺の盆地ではガリラヤ湖が紺碧の水を湛え、その湖面は地中海より 208メートルも低い。湖畔の町テベリアから見やれば、ヘルモン山が聳える。この高峰は海拔 2,814メートル、聖書にしばしば言及され、シリアの西南のはずれに位置して、半年間も白雪の冠を戴いている。

その雪解け水はゴラン高原の斜面を駆け下り、オアシスの湧泉からの流れを合わせてヨルダン川となり、ひとまずガリラヤ湖にそそぎこむ。これは中東地域に珍しい淡水湖で、魚類の棲息を可能にしている。『新約聖書』の記述によ

ると、イエスはここで捕れた二匹の魚で数千人の聴衆を満腹させるなど、さまざまな奇跡を具現しながら、湖畔で福音を説いた。

ガリラヤの水は天然の貯水地から流れ出し、再びヨルダン川となって大地の裂け目を南へ向かう。この流れはナイルのように水量豊かな大河ではないが、カナンの地を貫流する生命線である。上流部の両岸には藪が生い茂り、緑に事欠かない。しかし、下流部の谷底平野は植生のまばらな半砂漠となる。沿岸の耕作地はヨルダン川から引いた灌漑用水で潤い、作物が青々と育っている。

ヨルダン川の流れは曲がりくねっているため、総延長が直線距離の約三倍にも達し、最後に海面下 394m の死海にそそぎこむ。これは大陥没地形の底にできた塩の湖で、名前の通り水中に生物の影をとどめない。周辺部にはほとんど雨が降らず、真冬でも汗ばむほどの日差しである。ヨルダン川の淡水は出口のない湖で蒸発し、ついに濃厚な塩水となった。この内陸の海に身を浸せば、沈むことなく浮いてしまう。死海の西岸の山地には、ユダの荒野が、南部にはネゲヴ砂漠がひろがる。

建国神話 カナン（パレスチナ）は、古代文明の発祥地——ナイルの背景 河流域のエジプトと、チグリス河、ユーフラテス河に潤されたメソポタミアの中間に位置し、〈肥沃な三日月地帯〉の一角を占めていた。イスラエルの建国神話はエジプトとメソポタミアを背景に展開し、カナンの地で総仕上げを迎える。

『旧約聖書』の「創世記」によると、アブラムはユーフラテス河の下流にあるカルデア地方のウルの出身で、父の代に上流のハランに移住した。その後、ユダヤの民の祖は神の指示に従い、全財産を携えて家族と牧者と共にカナンにたどり着く。

伝承はなお続く。アブラムの子孫は〈神の約束の地〉に安住できず、異郷で苦難に耐えねばならない。飢餓がカナンを襲ったため、孫のヤコブ（後にイスラエルと改名）は一族を率いてナイル河の三角洲に移住し、エジプトの王のもとに寄留した。当初、異国の民は厚遇される。しかし、その勢力が四百年の間に増大すると、昔のことを知らぬ王は国内の異邦人に警戒心を抱き、重い奴隷的労役を課した。その苦しみの声を耳にして、神は古い契約を思い出す。預言者モーセは神の命令を受けて、専制君主（ファラオ、あるいはパロ）の圧迫から同胞を解放した。

『旧約聖書』の「出エジプト記」によると、イスラエルの民はエジプト王の軍勢の追撃から逃れて、シナイ半島へ集団脱出に成功する。モーセは荒野の真只中の高い山に登り、神から十戒と数々の律法を授けられた。この時からアブラハムの子孫は、唯一絶対神ヤハウェに選ばれた民となる。その部族宗教はユ

ダヤ教に発展をとげ、独自の選民意識を培った。

モーセは同胞を率いて遠いカナンの地に向かうが、乳と蜜の流れる地にたどりつくまで、四十年間もシナイ半島の砂漠をさまよわねばならなかった。イスラエルの民は目的地めざして地中海沿いの最短路を取らず、内陸を大きく迂回してヨルダン川の東岸から〈神の約束の地〉に入る。ここでは先住民のカナン人が各地に城郭都市を築き、独自の文明の花を咲かせていた。

現代のヨルダン王国の首都アマンから南へ約百韃、マダバの町は死海の東岸の台地に位置し、古い歴史を秘めている。町から北西の方角に平坦な野を進むと、間もなく小高い丘が見える。これが聖書に出てくるネボ山で、その頂上に立てば、眼下の雄大な景観に思わず息を呑む。

標高約八百韃の高原は、ここから世界最大の地溝帯——地中海の水面よりも四百韃も低いヨルダン溪谷へ一挙になだれ落ちる。千二百韃下の谷底平野ではヨルダン川の流れが一筋の緑の帯となって、乾いた大地を蛇のようにうねりながら死海に達する。その向こうの山並みは、荒々しい岩肌をむきだしている。山麓の灰褐色の野面で、ひときわ目立つ緑地は、エリコのオアシスである。

この肥沃な田園が、〈乳と蜜の流れる地〉だった。しかし、『旧約聖書』の「申命記」によれば、モーセは神の約束の地を目前にしなが、ついにカナンに足を踏み入れることなく、ネボ山で百二十歳の生涯を終えた。イスラエルの民は指導者を失ったが、モーセの従者ヨシュアが後継者になり、ヨルダン川を東から西へ渡ってエリコの町を攻略する。

廃墟の難民収容所 『旧約聖書』の「ヨシュア記」は、このオアシス都市の征服をめぐる血生臭い物語を伝えている。カナン人の都は、六日の間、寄せ手に包囲された。七人の祭司が雄羊の角笛を吹き鳴らし、神の契約の箱を肩に担いで町の周囲を回る。この神聖な箱の中には、モーセの十戒を刻んだ石板が納められていた。ヨシュアの厳命に従って、兵士たちは固い沈黙を守る。七日目、攻撃側がエリコの城壁を七度めぐった後、一斉に角笛を吹き鳴らし、大声を上げると、堅固な石垣は崩れ落ちた。

イスラエルの民は城内に突入し、手当たり次第に剣をふるった。町の住民は老若男女を問わず、偵察の兵士をかくまった遊女とその一族以外は、一人残らず虐殺される。牛、羊、驢馬の家畜も、皆殺しの憂き目に遭った。西暦紀元前十三世紀も末頃のことである。

今日のエリコは旧約時代と変わらぬ緑豊かな町で、周辺にオレンジやバナナの農園がひろがる。ここはヨルダン川から離れているが、背後の山地に降る僅かな雨が近くの渴れ川の伏流水となって土地を潤すからである。オアシスの定住民が耕す農地は、まさに乳と蜜の流れる楽園のように、砂漠の遊牧民の目に

映ったことであろう。町外れの小高い盛り土は、考古学者が発掘した跡である。その頂上から深い穴の底をのぞくと、石積みの遺構が見える。

遙かな昔をしのびながら周囲を見回せば、たちまち現実に引き戻される。遺跡のすぐ近くに、難民収容所が無人の廃墟と化している。泥壁の粗末な小屋が数百戸もひしめいているのに、人っ子一人いない。半ば崩れかかった家々は不気味なまでに静まりかえり、破れた窓、壊れた扉がぼっかりと空いて、遠目に黒く見える。1948年、パレスチナの分割と戦争は多数のアラブ住民を先祖伝来の地から追い出した。難民は帰郷の日を待ちわびながら、この仮の宿で二十年近い歳月を過ごす。

だが、望郷の夢は、叶えられなかった。それどころか、1967年の第三次中東戦争で、難民は再び流浪の旅に出なければならない。この戦いでイスラエル軍は迅速に進撃して要衝エリコを陥れ、三千三百年前、ヨシュアの軍勢が攻めてきた方角に収容所の住民を追い立てた。わずかな身の回りの品を手や背に、二十世紀の離散の民はヨルダン川を渡って東岸に逃れる。

エリコの征服後、ヨシュアは次々に他の城郭都市を襲い、カナンに占領地を拡大した。だが、アブラハムの末裔が〈神の約束の地〉に支配権を固めるまで、それから二百年以上の歳月を要した。当時、ペリシテ人が地中海の沿岸地方に勢力を扶植し、しばしば内陸部の奥深くまで攻め込んだからである。この尚武の民はギリシャとトルコの間が多島海の島々から渡来した海洋民族で、鉄製の強力な武器を使用した。パレスチナの地名の語源は、ペリシテ人の国（フィリスティア）に由来する。⁵

ダヴィデ・ソロモン 長い歳月が過ぎ去るうちに、いつしか時代は神話と伝承から歴史に移り行く。イエス・キリスト生誕の約千年前、英雄ダヴィデがカナン南部の王となり、さらに北部も併わせて強大な連合国家を樹立した。その軍事力はペリシテ人の脅威を封じ込め、四方八方に領土を拡大する。ダヴィデは先住民のエブス人からシオンの要害を奪い、そこに新都エルサレムを建設した。

次の王ソロモンは戦争よりも商業に努力を払い、平和的手段で大いに国を富ませる。父王が軍事力で築き上げた帝国は面積こそ広大ではなかったが、エジプト、メソポタミア、小アジアの中間に位置し、当時の重要な通商路を抑えていた。各地の物産は駱駝や驢馬の背に積まれて領内を通過し、砂漠を越えて遠い目的地まで運ばれる。この地理上の恵まれた条件を活用して、ソロモンは隊商に通行税を課し、あるいは自ら近隣諸国との貿易に乗り出した。

ソロモンは莫大な通商利益を惜し気もなく注ぎこみ、父王の都に唯一絶対神ヤハウエの壮麗な神殿を造営する。その至聖所には、神の姿を刻んだ彫像では

なく、契約の箱が安置された。イスラエルの民の宗教は、モーセによって偶像崇拝を固く禁じていたからである。唯一絶対神はエリコ攻略の際の奇蹟と同様に、この神聖な箱に降臨すると信じられた。この神殿の建立で、ダヴィデの街は、文字通り聖都となる。

ダヴィデとソロモン父子の統治期間は合わせて八十年にも及び、神に選ばれた民の最盛期——そして、来たるべき黄金時代の先触れ——として未永く記憶される。だが、その栄華の絶頂期に、早くも衰退の影がしのびよっていた。ソロモンの死後、連合王国は南北に分裂する。それから約二百年後の西暦前 721 年、北のイスラエル王国はメソポタミアの大国アッシリアに攻められて滅亡し、歴史から消え去った。南のユダ王国はもう少し長く生き延びたが、新興バビロニアの攻撃で、西暦前586年、最後の日を迎える。

バビロンの 大河のほとりの二つの文明圏——エジプトとメソポタミアの 虜 囚 アの古代帝国が興亡の歴史を繰り返す間、カナンの地は時には相対する勢力の緩衝地帯に、時には決戦場となった。前六世紀の初頭、ユダ王国はバビロニアの支配下にあったが、エジプトにそそのかされて叛旗を翻す。ダヴィデの都はネブカドネザル王の遠征軍に占領され、ソロモンの建立した神殿の宝物を奪われた。さらに王族、祭司、官僚などの支配層を始め、人口のほとんどが、遠く千六百里も離れたバビロンへ強制連行される。⁶

征服者は先王の弟をユダの王位に据えた。新王は十年近く従順だったが、まともやエジプトに教唆されて叛旗を翻す。バビロニアの大軍はエルサレムを包囲し、エジプトの援軍を撃退した。約二年に及ぶ籠城戦の末、聖都の命脈は尽きた。西暦前 586年、バビロニアの軍勢はヤハウエの神殿を徹底的に破壊して、生き残った者のほとんどをメソポタミアへ連れ去る。⁷ イスラエルの滅亡から数えて百三十余年、ユダも同じ運命をたどった。

このような悲劇と試練を経験して、シオンの地——エルサレムは、ユダの民にとって、魂の故郷となった。『旧約聖書』の「詩篇」(137)は、バビロンの虜囚が故国をしのんで詠んだ望郷の歌を収めている。

われら、バビロンの河のほとりに座り、
シオンの思い出に涙流しぬ。

.....

おお、エルサレムよ
もし、汝を忘るることあらば
わが右の手を萎えさせよ。

強制移住から数十年の歳月が過ぎる間に、古代世界の情勢に大きな変化が生じた。前六世紀の半ば、ペルシアが急速に興隆してバビロニアを打倒し、メソポタミアの全域を併呑したばかりか、やがてエジプトまで支配下に収める。新帝国のクロス王の施政は寛大で、被征服民の宗教を尊重した。囚われのユダヤ人は自由の身となり、五十年ぶりに故国の土を踏む。しかし、帰国より残留を選んだ者の数も少なくなかった。間もなくエルサレムでは、神殿の再建工事が始まる。

多神教徒の支配 次にカナン—パレスチナの命運は、ギリシャ人の手中に握られた。前四世紀、マケドニアの若い征服王アレクサンドロスは欧州の東南端から兵を進め、東方の巨人・ペルシアを撃ち破った。その軍勢はエジプト遠征に向かう途中、エルサレムを占領する。西暦前 323年、大王がまだ三十歳台も前半の若さで病没すると、広大な領土は武将たちに分割された。エジプトと東地中海の沿岸部はプトレマイオス家に、メソポタミア、シリア、その他の東方領はセレウコス家に、それぞれ統治される。当初、パレスチナは前者に服属したが、ほどなく二つのギリシャ系勢力の争奪の的となった。長年の軍事対決の末に、前三世紀の初頭から、神の約束の地は後者に支配される。アレクサンドロスの後継者たちは占領地にギリシャ文化を導入し、同時に異教の神々の偶像をもたらず。多神教徒の権力者は支配下の住民の信仰を無視して、ヤハウエの神殿にギリシャ神話の最高神ゼウスのために祭壇を築き、ユダヤ人の忌み嫌う豚を犠牲に捧げた。この冒瀆行為は民心の離反を招き、ついに大規模な叛乱を招く。

西暦前167年、セレウコス王朝のユダヤ教弾圧策は、大多数の住民を敵に回した。この抵抗活動は宗教的感情から始まったが、外国勢力の圧政に対する民族的反抗に他ならない。古くからヤハウエ信仰の大祭司を務めるハスモン家が武装闘争を指揮し、各地で多神教徒の軍隊に勝利を収めた。西暦前 164年、エルサレムの神殿は異教徒の汚れから浄められて、再び唯一絶対神の宮居となる。実に北王国の滅亡から五百数十年、南王国の瓦解から四百数十年ぶりに、イスラエルの民は異民族の政治的、宗教的支配から脱した。

だが、祭政一致の神権国家は長続きせず、約百年で崩壊する。ハスモン家の治世は内紛で動揺し、地中海世界の覇者・ローマの干渉を招いた。共和制ローマの将軍ポンペイウスはすでに弱体化したシリアを征服していたが、西暦前63年、エルサレムに入城してハスモン家の統治に終止符を打つ。ユダヤ教の重要な祭日のヨム・キプール（大贖罪の日）に、ヤハウエの神殿はローマ軍に攻略され、内部に立て籠もる多数の信徒が虐殺された。この時からイスラエルの建国に至る約二千年の間、ユダヤ人は亡国の民となった。

ローマ人もギリシャ人と同様に多神教徒で、支配下の一神教徒の宗教心を理解しなかった。ポンペイウスは神殿の至聖所に足を踏み入れ、ヤハウエの信徒の神経を逆撫です。新しい権力者は唯一神の神殿に異教の神々の偶像を祭り、さらにローマ帝政の施行後には皇帝を神として崇拜するよう強要した。このため、西暦66~73年と132~135年に大叛乱が繰り返されるが、いずれもローマの強力な武力で手荒く鎮圧されてしまう。ユダヤの民の信仰の中心となる神殿は、またもや打ち壊された。

皇帝ハドリアヌスは不穏な響きのあるユダヤの地名を廃してシリア・パレスチナと改称したばかりか、エルサレムをローマの植民都市として再建する。ヤハウエの信徒は聖都に立ち入りを厳禁され、もはや神殿に参詣することもできなくなった。異民族の強権政治の下で、ある者は唯一神の信仰を捨てて支配者の多神教に改宗し、ある者は新興宗教のキリスト教に引き寄せられる。ユダヤ人は独得の選民意識、篤い信仰、特定の宗教的習慣を保持する限り、神の約束の地から逃散するしかなかった。

エルサレム 橄欖の古木が四方八方に枝を拡げ、その無数の小さな葉は強い日差しを浴びて銀白色に輝く。橄欖山の頂上に立つと、深い谷の向こう側にエルサレムの旧市街が一望の内に見おろされる。ダヴィデの都は海拔八百シの高地にあり、三方を谷間で囲まれた城塞都市だった。現在も周囲に堅固な城壁をめぐるせているが、これはオスマン・トルコ帝国の支配時代に修復、あるいは建設されたものである。

市街地の左手に目をやれば、城壁の外側に教会の尖塔がそびえ立つ。その辺りがシオンの丘⁸である。この地名は先住民の築いた要害に由来するが、ダヴィデによる征服と建都後にも神聖な町の別称として受け継がれ、さらに亡国のユダヤ人の故国を意味するに至った。『旧約聖書』の「詩篇」(48--2)は、次の通り、この地を称えてやまない。

シオンの山は北の端高く、麗しの極み、
全土の喜び、大いなる王の都。

西暦70年、将軍ティツス（後に皇帝）指揮下のローマ軍団はユダヤ叛徒を討伐するため橄欖山に集結し、総攻撃の前に山頂から城内の布陣を見渡した。異教徒の軍勢は聖都に乱入すると、ヤハウエの神殿を徹底的に破壊する。唯一絶対神の宮居は、それから二度と再建されなかった。⁹ エルサレムの陥落から千九百年の星霜を経た今日、その面影は〈嘆きの壁〉に僅かに見出される。これは高さ約二十シの石垣で、神殿跡地の西端に現存する。ただし、上部の石組

みは、ずっと時代が下がって、オスマン・トルコの支配した時期に、に新しく積み重ねられたものである。

キリスト教の聖蹟 エルサレムの旧市街や橄欖山の周辺には、キリスト教の聖蹟が少なくない。ゆかりの場所には、それぞれ壮麗な教会が建っている。『新約聖書』の記述によると、イエスは弟子たちと最後の晩餐を済ませた後、この山のふもとの園で夜もすがら祈った。翌日、彼は弟子ユダの裏切りで捕えられ、後にローマ人の総督ピラトの前に引き出される。当時、ユダヤ教の祭司や律法学者は偽善ぶりをイエスに批判され、悩み多い庶民に神の国の到来を説く彼の言動に我慢ならず、この異端者を亡き者にしようとたくらむ。

ピラトはイエスの無実を信じたが、口々に死刑を叫ぶ群衆の圧力に屈した。神の子は同胞の要求で十字架にかけられ、刑場で息絶えた。ローマ軍団が神殿を打ち壊す四十年ほど前の出来事である。クリスチャン世界に根強い反ユダヤ感情の根源は、この故事にさかのぼる。欧州がキリスト教化されたのは、ずっと後世のことであるが、離散の民は子々孫々に至るまでイエス殺しの下手人の汚名をかぶせられ、果ては悪魔の手先とさえ罵られた。

刑死の悲劇にもかかわらず、イエスの教えは使徒たちの活動でパレスチナからローマ帝国の各地に広く伝えられた。神の子の説いた福音は旧来のユダヤ教から分離した新しい宗教の礎となり、多数の信徒を異邦人の間に獲得する。その教えが神の普遍的な愛を説き、唯一絶対至高の存在を特定の選民の守護者としなかったからである。しかし、新興宗教のキリスト教はローマの為政者に何度も弾圧され、多数の殉教者を出した。

やがて迫害の歴史に、大きな転換期が到来する。西暦 313年、コンスタンチヌス大帝はキリスト教を公認した。母后ヘリナは巡礼としてパレスチナを訪れ、イエスの処刑場跡と伝えられる場所に聖墳墓教会を寄進する。西暦 391年、キリスト教はローマ帝国の国教と定められ、エルサレムを始めとしてパレスチナの各地に、数々の教会や修道院が建てられた。こうしてシオンの地——ダヴィデの都は、キリスト教の聖地ともなる。

2 イスラーム教の成立

1988年11月12日、パレスチナ解放機構（P L O）は最高決定機関のパレスチナ国民評議会をアルジャーリアの首都アルジェで開催し、最終日の15日、満場一致で独立宣言を採択した。

パレスチナ国民評議会は、神の名において、パレスチナ人民の名において、我々のパレスチナの領土にパレスチナ国の樹立を宣言し、その首都をエルサレムに置く。¹⁰

この独立宣言は、P L Oが従来の武力闘争路線を放棄し、国際連合の諸決議に基づいて、中東和平の実現をめざすものとして、全世界の注目を集める。しかし、新国家の版図はイスラエルの統治下、あるいは占領下にあつて、P L Oの実効支配が及んでいなかった。

当のイスラエルは宿敵の独立宣言に強く反撥し、新生国家と亡命政府を全く無視した。米国とソ連の両超大国、それに欧米諸国はP L Oの軟化に好意的反応を示したが、国家として承認を与えなかった。だが、先進工業諸国の思惑をよそに、パレスチナ国は独立宣言の発表から半月で、アジア・アフリカ諸国を主体に五十カ国以上から認知された。

金色に輝く大円蓋 橄欖山の展望台から、エルサレムを見渡す。パレスチナ国の首都と定められた聖都は、すでに二十一年前の1967年6月、第三次中東戦争の直後にイスラエルに併合されている。『新約聖書』の記述によると、神の子・イエスは十字架にかけられた三日後に復活し、この山頂から白雲に包まれて昇天した。今から二千年前には、ここからヤハウエの神殿がよく見えたはずだ。しかし、壮麗な石造建築物は、イエスの預言通りに、跡形もなくなってしまった。現在、谷越しにエルサレムの旧市街を見やれば、城壁の向こうに巨大な丸屋根が金色に輝いている。これイスラーム教の礼拝堂〈ウマルのモスク〉で、ユダヤ人がパレスチナから離散した約六百年後、ヤハウエの宮居の跡地に建てられた。

この建造物は黄金張りの半球状の屋根に彩色紋様の外壁で、別名を〈岩の円天井〉という。その名の通り、大きな円蓋が神聖な岩をすっぽりと覆っている。イスラーム教の開祖ムハンマドは天馬の背にまたがり、ここから天界を訪れたと伝えられる。

かつてヤハウエの神殿の至聖所は同じ岩の上であり、そこに契約の箱が安置されていた。さらに『旧約聖書』の「創世記」の昔にさかのぼれば、アブラハムが神の命ずるまま最愛の子イサクを犠牲に捧げようとしたモリヤ山は、同じ場所と信じられている。このようにイスラーム教の霊場は、ユダヤ教の聖地と重なり合う。

唯一神の啓示 預言者ムハンマドはアラビア半島の商業都市メッカの出身で、隊商貿易に従事した。しかし、中年期に達してから世俗の生業に飽き足らず、砂漠の洞窟にこもって冥想にふけり、ついに唯一絶対神アッ＝ラーの啓示を受ける。七世紀の初頭、日本では聖徳太子の時代である。超越者の言葉はムハンマドの口を通じてアラビア語で発せられ、後にイスラーム教の聖典『クルアーン（コーラン）』にまとめられた。

新しい宗教は宇宙の創造神アッ＝ラーに対する絶対的帰依を唱え、同時に既存の一神教の聖典、『旧約聖書』と『新約聖書』の内容を認めている。つまり、ユダヤ、キリストの両教徒は〈経典の民〉として、イスラーム教徒と同じ起源の神話と伝承を共有する。ムハンマドはアブラハム、モーセ、イエスなどに続き、最後の預言者としてアラビアの地に出現した。もっとも、ヤハウエの選民も、神の子の信徒も、この教義を斥けている。

預言者ムハンマドは神の啓示を同胞に説いたが、故郷の人々に受け入れられなかった。彼の生まれたハーシム家は、メッカの支配層のクライシュ部族に属しながら、父の代にすっかり零落し、住民の信仰を左右するほどの強い影響力を持っていない。しかも、未来の教祖は生後僅か二カ月で父を、さらに六歳で母を失ったため、親戚の家で育てられる。親も財産もない若者は早くから奉公に出て、生活の苦勞を肌身で知った。だが、勤め先の商家で女主人に熱心な働きぶりを認められ、やがて十五歳も年上の彼女と結婚する。その時、花婿はまだ二十五歳の青年だった。

回心までの長い年月、ムハンマドは勤勉な商人であり、また誠実な夫だった。家長が神の言葉を伝え始めると、真先に妻のハジージャが信者となる。初期の入信者は血縁に連なる者か、それとも使用人に限られていた。メッカの支配層は彼の布教活動を軽視したが、間もなく新しい宗教の危険性を悟る。

この商業都市は隊商貿易の中継地として繁栄していたが、同時に土俗信仰の門前町で、アラビア全土から巡礼者を引き寄せる。町外れの聖地カーバの神殿には、神像が数多く安置されていた。

ところが、イスラーム教徒は「アッ＝ラーの他に神はない」と断言し、偶像崇拜を根本から否定する。クライシュ部族の有力者はムハンマドと彼の信奉者を敵視し、強い圧迫を加えた。

神殿の偶像を破壊 西暦 622年、唯一絶対神の信者たちは、住み慣れたメッカを立ち去り、約五百里も離れたヤスリブに移る。この集団移住はヒジュラ（聖遷）と呼ばれ、イスラーム暦の紀元となった。新天地は砂漠の中のオアシスで、土俗信仰のアラビア人のほかに、ユダヤ教徒の諸部族が住み着き、主として農業を営んでいた。この地は、間もなく預言者の町（アル＝メディーナ）と称されるようになった。

商人のムハンマドは故郷を捨ててから新興宗教の教祖にとどまらず、軍事指導者として武器を取って不信心者と戦う。アッ＝ラーの信徒たちはいつまでも移住先の隣人の好意に頼らず、自力で生き抜くために、メッカへ向かう隊商を襲撃し、積み荷を略奪した。

当時のアラビア社会は部族を単位として、血縁の強い絆で結ばれていた。オアシスに定住の商人や農民を除けば、人口の大半が遊牧民で、家畜の群れと共に不毛の砂漠を移動し、一所不在の日々を過ごす。漂泊の民は尚武の気風を尊び、自由の精神を重んじたが、厳しい風土のため常に飢餓の脅威にさらされた。荒野に生える僅かな草は、気まぐれな降雨によって成育が左右される。遊牧民は食糧難に直面すると、他の部族を襲って家畜を奪い、辛うじて生き延びた。ムハンマドは砂漠の掟に従い、非常手段を用いて危機を乗り切る。神を信じぬ者に剣を取ることは、聖戦（ジハード）として正当化された。

メッカとメディーナの武力抗争が、近隣の遊牧民を巻き込んで長びくにつれて、両者の力関係は次第に後者に有利となる。砂漠の民は勝ちそうな側に味方して、戦利品の分け前にあずかるのを得策と考えた。やがてメッカの有力者の中にも将来を見越してイスラーム教に改宗し、ムハンマドの陣営に参加する者さえ現れる。ヒジュラから八年の歳月が過ぎた 630年、アッ＝ラーの使徒はみずから大軍を率いて故郷の町に入城し、カーバ神殿の神像破壊を命令した。それ以来、偶像崇拜の中心地は、唯一絶対神の聖地となる。

メッカの征服後、ムハンマドはアラビア半島の全土に揺るぎない威信を確立した。土俗信仰の遊牧部族はイスラーム教に改宗し、聖俗界の最高権威者に臣従を誓うか、あるいは同盟関係を結ぶ。ユダヤ、キリスト両教徒は、それぞれの信仰護持の代償に貢物を納める。預言者ムハンマドは神の言葉の直接的伝達者として、また卓越した軍事、政治指導者として尊崇を一身に集めた。彼の権威の下で、広大なアラビアの砂漠は、歴史上初めて政治的に統一される。砂漠の民は唯一絶対神と預言者の命令に従い、もはや互いに武力で争うことはなくなった。¹¹

ヒジュラ暦11年（西暦632年）、アッ＝ラーの使徒が波乱に満ちた生涯の幕を閉じると、揺籃期の神権国家はたちまち瓦解の危機に直面する。カリスマ的指

導者の死後、多くの部族はメディーナとの関係を清算しようと試みた。砂漠の遊牧民はムハンマドの個人的声望に服従していただけで、いまや行動の自由を得た。さらに叛徒の中には、預言者を自称する者さえ出てくる。

しかし、ムハンマドの側近たちは後継者にアブー・バクルを選出して、ハリーフア・ラスール・アッ＝ラー（神の使徒の代理）の地位に据えた。¹² 新指導者は初期の入信者の一人で、娘のアーイシャを予言者に嫁がせていたので、ムハンマドの義父に当たる。彼の指揮下、イスラームの軍勢は背教者の叛乱を粉碎し、再びアラビアの統一を取り戻す。

二大帝国 アブー・バクルはムハンマドより三歳も年長だったので、**を撃破** その治世は僅か二年で終わった。だが、この間にイスラーム国家は外に向かって拡大の準備を整え、二代目ハリーフアのウマル・イブン＝アル＝ハッターブの時代に近隣の諸地域へ大規模な征服戦争に乗り出す。彼はかつて預言者に敵対したメッカのクライシュ部族の出身で、後にイスラーム教に改宗し、やはり娘をムハンマドに嫁がせていた。だから、新しい代理は神の使徒よりずっと年少でありながら、その義父という特別な関係にある。初期の神権王国の支配層は強固な姻戚関係の網の目に組み込まれ、預言者との血縁の絆を何よりも重視した。¹³

ムハンマドは存命中から北方の二つの大帝国——ペルシアとビザンティウムの動向に注目し、しばしば周辺地帯に出兵して武力衝突を繰り返す。アラビア全土がイスラーム教で統一と平和を達成して以来、遊牧部族の好戦的エネルギーは吐き口をどこかに見出さねばならない。国土のほとんどが不毛の荒野だけに、新興の宗教国家は内部抗争の停止で急速に増加する人口を養えなかった。両帝国の領土は〈肥沃な三日月地帯〉にひろがり、豊かな都市と農村を抱えている。ここを襲撃すれば、莫大な戦利品が得られよう。

当時のペルシア帝国はササン王朝の統治下にあり、イラン高原からメソポタミアに領土を拡大し、一時はエジプトまで支配下に収めた。ビザンティウム帝国は南ヨーロッパ、西アジア、北アフリカにまたがり、地中海を取り囲んでいた。395年、ローマ帝国が東西に分立してから、西の本家は百年と経たぬうちに滅亡したが、東のローマはキリスト教を公認した大帝ゆかりの港町コンスタンチノウプル（ビザンティウム）に都を置き、それから千年以上の長い歳月にわたって存続する。

七世紀の前半、アラビア半島から砂漠の戦士がイスラームの旗を高く掲げて攻撃を仕掛けてきた時、両帝国は長年に及ぶ戦争の結果、互いに国力をすっかり消耗していた。唯一絶対神の軍勢は異教の大国を同時に敵に回しながら、予想外の大勝利を収める。ウマルの治世の二年目にビザンティウム軍をシリアで

破り、やがてパレスチナと聖都エルサレムを占領した。¹⁴ 翌 637年、ペルシア領のメソポタミアを攻略し、チグリス河畔の帝都クテシフォンを陥れる。引き続いて 642年、エジプトに進撃してコンスタンチノウプルの支配からナイル河の三角洲を奪う。エジプトとシリアの喪失で、ビザンティウム帝国は大幅に版図を削減された。

アラブ世界 アラビア遊牧民の進撃は、とどまる所を知らない。

の 成 立 ムハンマドの死から約百年の間に、東はイラン高原を経てインド亜大陸の西端のインダス河畔に、北は中央アジアの草原に奥深く、西は地中海の南岸の北アフリカを席卷して大西洋の浜辺へ、さらに海を渡ってアイベリア半島を征服し、一時はゴール（現在のフランス）まで攻め込む。新しい支配者は、アラビア語とイスラーム教を占領地にもたらした。

この軍事的成功には、さまざまな理由が挙げられよう。まず、軽装備の遊牧戦士は馬と駱駝を巧みに乗りこなし、砂漠を迅速に移動して奇襲攻撃を仕掛け、重装備の敵を用兵面で圧倒する。¹⁵ また、先進文明圏の都市は略奪の対象として、将兵の戦意をかきたてた。さらに、物質的な動機だけではなく、イスラームの戦士はアッラーのために死地に赴く。その教義によれば、異教徒との戦いに倒れた者は、殉教者として必ず天国に迎え入れられるからである。

しかし、ビザンティウム、ペルシア両帝国で、現地住民の間に経済的、社会的、宗教的不満がみなぎっていなければ、これほど容易に勝利は得られなかったことであろう。実際、イスラーム教徒の遠征軍は各地で、圧政からの解放者として歓迎された。¹⁶ しかも、遠来の征服者は占領地の住民に新しい宗教を強制しなかった。だが、アッラーの信徒には税金免除の特典があると知って、住民は続々と改宗する。ユダヤ、キリスト両教徒者は特別税を支払いさえすれば、一神教の系譜に連なる〈經典の民〉として保護された。この措置は、やがてペルシアのゾロウアスタ教徒にも適用される。

砂漠の戦士が樹立したイスラーム国家は後進性から脱却するために、両帝国の遺産——ギリシャ・ローマ、ペルシア文明を吸収・消化し、急速に独自の文化を発展させた。『クルアーン』のアラビア語は神の言葉としてだけではなく、軍事支配者の言語として、占領地に普及する。当初、征服者は純血の維持を試みたが、やがて先住民との間に混血が進んだ。こうしてアラビア海から大西洋に至る広大な地域に、共通の言語、宗教、文化を基盤とするアラブ世界が形成された。

イスラーム教が成立する過程で、ムハンマドとユダヤ教徒との関係は、決して良好でなかった。メディーナに以前から在住するヤハウエの信徒は、彼をアブラハムやモーセと同じ預言者と絶対に認めなかったからである。それどころ

か、メッカが大軍を派遣してメディーナを包囲した際、ユダヤ教徒の部族は機会を窺って背後から攻める構えを見せた。故郷の町と戦うのと並行して、アッ＝ラーの使徒はヤハウエの信徒と対決する。ある時には武力で屈服させた部族を追放し、別の機会には降伏した六百人の男を処刑して、その家族の女子供を奴隷に売った。¹⁷

だが、アラブの長征で広大な地域がイスラーム化された後、ユダヤ教徒は二級市民の地位に甘んずるなら、旧来の信仰と風習を保証され、少数派の宗教共同体を維持できた。時代の流れと共にヘブライ語は宗教儀式だけの用語となり、日常の会話には隣人と同じアラビア語が用いられる。欧州に移住した離散の民の末裔が、キリスト教徒の社会で差別と迫害にさらされたのとは大きく異なり、アラブ世界の各地ではイスラーム、ユダヤの両教徒は長い歳月にわたって共存を続けた。¹⁸

3 イスラーム帝国の興亡

内部抗争の激化 アラブの軍勢が征服戦争で版図を拡大している一方で、イスラーム国家は深刻な内部分裂に直面する。644年、第二代ハリーファのウマルが私怨のため暗殺された後、神権体制の支配層は後継者にウスマーン・イブン＝アッファンを選出した。この人物は預言者に敵対したメッカのクライシュ部族の名門ウマイヤ家の出身で、早い時期に改宗してムハンマドの娘と結婚した（ただし、先立たれる）。この人事はメッカの旧支配層からは拍手喝采で、メディーナの熱心な信徒からは憤激の嵐で迎えられた。新しいハリーファはイスラーム帝国の要職に多数のクライシュ派を登用し、内部抗争の種を蒔く。

ウスマーンは批判勢力に白眼視されながら十年以上も最高権威者の座にとどまったが、656年、自宅で祈りの最中、待遇の不満から強訴にきた兵士たちの襲撃で聖典を血に染めて死亡した。この事件を契機に、叛乱兵士やメディーナの反対派信徒はムハンマドの従兄弟で女婿のアリーを担ぎ、祭政一致国家の首長に推挙する。彼は預言者の愛娘ファーティマの夫として、以前から岳父の代理者の地位を望んでいたが、ようやく年来の野望を果たす。だが、この継承劇はイスラーム教徒の間に深い亀裂をもたらし、シーア派とスンナ派の対立として、現代にも尾を引いている。

アリーはムハンマドの未亡人アーイシャに第四代ハリーファ就任を強く反対され、彼女の同調者の武力反抗に遭遇したが、どうにか内乱の鎮圧に成功する。しかし、シリア大守のムアーウィヤはアリーをウスマーン殺害の扇動者と疑って、その権威を認めないばかりか、仇討ちの戦いを挑んだ。大守自身、ウマイヤ家の出身で、故人の従兄弟に当たり、あの縁故びいきの人事で任命されたからである。アリーはメソポタミアに政権の足場を固め、657年春、ムアーウィヤの軍勢とユーフラテス河畔で衝突する。この権力闘争の内戦で、アリーは戦局を有利に運びながら、決定的勝利を収められなかった。

戦闘は奇計から中断されて、中途半端に終わる。ムアーウィヤ陣営は『クルアーン』の数章を槍の穂先に結び付けて敵陣に投げ入れ、口々に「勝敗を神に決めさせよ」と叫んだ。アリーは神の使徒の代理として、信仰の擁護者だけに、アッラーの調停に応ずるほかない。思いがけぬ停戦はアリー陣営に不満を生じ、一部の強硬派は戦場から立ち去った。双方は仲裁役を出して、和平交渉を一任する。その談合は長引いた末に、アリー側に不利な結論を出した。ハリー

ファは神の調停を受け入れられず、自ら誓約を破る羽目に追い込まれる。ムアーウィヤ陣営はアリーの権威を否定して、事実上の独立政権を築く。

ウマイヤ 結局のところ、第四代ハリーファは帝国の全域に及ぶ正統権力の確立に失敗し、661年、かつての味方で、いまや強力な敵対者に転じた強硬派に暗殺されてしまう。アリーの子ハサンは巨額の金銭と引き換えに、父の地位の継承権を放棄した。既に前年、ムアーウィヤはエルサレムで支持者から臣従の誓いを受けていたが、この取り引きで正式にハリーファに就任し、シリアのディマシュクを首都にウマイヤ王朝を樹立した。

発展期のアラブ帝国は最高権力の継承をめぐる大揺れに揺れたが、やがて内戦のため一時停止していた対外膨張を再開する。すでに東方のペルシア帝国は、651年、最後の王が逃亡先で裏切りのため殺され、名実ともに滅亡していた。もう一つの強敵のビザンティウム帝国も 670年までに北アフリカの領土を全部喪失した。

アラブ帝国はウマイヤ家の統治下、目覚ましい勢いで領土の拡張を続けたが、またもや内部抗争の危機に直面する。680年、ムアーウィヤの死を機会に、反対勢力はアリーの子フセインを正統なハリーファとして擁立した。批判派の目には、ウマイヤ家は政治権力の横領者に過ぎず、信仰の擁護者とは映らなかった。やはりハーシム家の血筋を引く者こそ、イスラーム帝国の支配者にふさわしい。フセインは預言者ムハンマドの孫であり、ハリーファの資格を十分に備えている。だが、挙兵は失敗に終わり、フセインは無惨な最後を遂げる。

この時は権力奪取に成功しなかったものの、抵抗運動の火は消えずに絶えずくすぶり続ける。数十年後、ファーティマとは別の母から生まれたアリーの子孫は、イスラーム世界の最高権力の継承権を預言者ムハンマドの叔父アッバースの子孫に譲った。両勢力は提携してアラブ人移住者の多いペルシア東部のホラーサーン地方を根拠地に、ディマシュクのハリーファに叛旗を翻す。

アラブ帝国の支配者が血みどろの権力闘争に明け暮れる間、実際に戦闘の最先鋒となったのはペルシア人の兵士だった。すでにアラビア砂漠出身の戦士は占領地で貴族層を形成し、生活様式も遊牧から定住に変化する。その結果、新たにイスラーム教に改宗した非アラブ人が、領土拡張の征服戦争や政権奪取の内戦に主導的役割を果たすようになった。彼らは帰依した宗教の平等原則に反する差別待遇——給与や戦利品の分配——に不満を抱いていただけに、内戦の際に一方に加担して発言権を高める。アッバース勢力の蜂起は、血統の正統性を根拠にした権力奪取運動にとどまらず、同時に多数の異民族から成るアラブ帝国の矛盾を露呈するに至った。

アッバース 反ウマイヤ革命の火の手はまずイラン高原に上がり、
王朝の成立 たちまちメソポタミアへ燃えひろがる。アッバース
勢力はペルシア人の有能な武将アブー・ムスリムに率いられ、750年、決定的
勝利を収め、ついにウマイヤ王朝を打倒した。さらに、仇敵の残党をシリアと
エジプトから一掃した後、762年、アッバース政権はチグリス河畔に新都市の
バグダードを建設し、ディマシュクから遷都する。新しい帝都は地中海とペル
シア湾とを結ぶ交通の要衝に位置し、東西貿易の中心地として急速な発展をと
げた。メソポタミアの肥沃な平原は、農業用水路の整備で生産力を飛躍的に高
め、イスラーム帝国の経済的基盤を固める。

アッバース王朝のハリーファはもはや〈神の使徒の代理〉にとどまらず、現
世における神の直接的代行者として、絶大な権威をふるった。その栄華は『千
一夜物語』からも推察できよう。だが、この神権国家は支配層がアラブ人でも、
宮廷や軍隊の要職はペルシア人の手に握られる。イスラーム世界の拡大過程で、
アラブ人は軍事的勝利者として占領地の住民に臨んだが、その社会では一握り
の少数派に過ぎず、何よりも異民族を統治する経験に事欠いた。そこで旧来の
官僚機構を温存し、征服地の行政を現地出身の役人に任せる。アラブ帝国が預
言者ムハンマドの血統に連なる権力者の下で再編された後、宰相、大守、イス
ラーム法学者、宮廷詩人に多数のペルシア人が登用された。

イスラーム＝アラブ帝国はすでに拡大の極に達し、アッバース時代には新た
な軍事的膨張をほとんど停止する。歴代のハリーファは各地で続発の叛乱鎮圧
に忙殺され、大規模な征服戦争を仕掛ける余裕がなかった。アッバース王朝自
体は約五百年もの長期にわたって存続するが、バグダードの宮廷が栄華を極め
たのは、最初の百年にも満たない。やがて中央の統制が緩むにつれて、大守や
武将は派遣先の任地に半独立政権を樹立する。

広大な帝国の各地に割拠する諸勢力に対して、ハリーファは名ばかりの宗主
権を保持するだけだった。帝都バグダード自体、ペルシア人の軍事政権に支配
される。しかし、ハリーファは政治的実権を喪失しても、預言者ムハンマドの
血筋を引くことから、宗教的権威を保持できた。

十世紀の初頭、北アフリカ中央部の有力な地方政権はチュニジアの本拠地
から東進してエジプトを征服し、ナイル河畔に新都アル＝カーヒラ（勝利者の
町）を建設する。¹⁹ 新王朝の統治者は第四代ハリーファのアリーと、その妻で
預言者の娘のファーティマの子孫と称し、新たにハリーファを名乗ってアッバ
ース家と正統性を争った。

また同じ頃、スペインにもバグダードの権威に挑戦する者が現れる。かつて
ウマイヤ王朝が滅亡した際、一族の生き残りはイスララーム世界の西端アイビ

アリア半島に逃れ、コルドバを都に後ウマイヤ王朝を樹立する。ここでもエジプトの例にならい、ハリーファと称した。

トルコ人の台頭 かつてアラブ世界が驚異の拡張を続けた時、歴代のハリーファは軍事力の源泉をアラビア砂漠の精強な戦士に求めた。だが、時代の流れに連れて、アラブ遊牧民は定住と混血の末に弱体化し、代わって傭兵隊がイスラーム帝国の支柱となる。とりわけ中央アジア出身のトルコ人は勇敢な兵士として、ペルシア人に代わってバグダードの権力者に重用された。

この草原の騎馬民族の戦士は、もともと捕虜や奴隷の身分で、イスラーム教に改宗させられた末に、規律厳格な軍事教練を受ける。トルコ人は主君に忠勤を励み、やがて軍隊だけでなく宮廷でも頭角を現す。アラブ人の権力者にとって、異民族出身の軍人や官僚は、同族よりも信頼できた。そのうちに奴隷出身のトルコ人が帝国を内部から乗っ取り、ついにはハリーファの地位を左右するほどになった。

このような動きとは別に、トルコ人は大規模な民族移動を始め、イスラーム＝アラブ帝国に大波となって押し寄せる。十世紀、草原の遊牧民はまず現在のアフガニスタンに移住すると、持ち前の武力で異郷に地歩を固めた。やがて有力なセルチュク（セルジューク）家はトルコ系諸部族を糾合し、西方に向けて進撃を開始する。1055年、バグダードに入城して帝都のペルシア人政権を打倒し、アッバース家の宗教的権威を回復した。その功労者はハリーファの妹と結婚し、世俗の最高権力者スルタンの称号を与えられる。

やがてセルジューク帝国の軍隊は西アジアのほとんど全域を席卷し、エジプトのファーティマ王朝と対決する。パレスチナは両勢力の接点となり、聖都エルサレムは争奪の的となった。だが、第三代スルタンのマリク・シャーの死後、トルコ人の築き上げた領土は分解し、群雄割拠の混乱に陥る。

十字軍の来襲 西アジアのあちこちに、十字軍時代の城塞がいまも残っている。クラック・デ・シェヴァリエ城はシリアの西部、レバノンとの国境に近い山頂にあり、数多い廃墟の中でも原型をよくとどめている。軍馬のいななき、鯨波の声も、遠い昔の物語となった。歳月の経過に連れて、無人の城塞はすっかり荒廃し、ただ無気味に静まり返る。

西欧のキリスト教国はカトリック教皇ウルバヌス二世の呼び掛けに応じて、十一世紀の末から聖地に侵略を繰り返し、西アジアにエルサレム・ラテン王国など幾つかの小国家を樹立した。しかし、異質文明の飛び地は現地社会と融合することなく、二百年後にイスラームの地から一掃される。だが、異教徒の騎士と兵卒は、中東地域に消しがたい記憶を残した。今日でもアラブ人はイスラ

エルの建国を十字軍の再来にたとえ、シオン主義国家も長期的観点から見れば、十字軍国家と同様の運命をたどるに違いない——と主張する。

十一世紀も終わり近く、エルサレムの支配権はバグダードからカーヒラに移る。同じ頃、キリスト教徒の大部隊はビザンティウム帝国領を通過し、アナトウリア、シリア経由でパレスナをめざした。西暦1099年(ヒジュラ暦492年)、十字軍は六週間の包囲の末に聖都を陥れ、イスラーム、ユダヤ教徒を問わず、住民を虐殺する。遠来の軍勢はイエスの処刑跡地に建立された聖墳墓教会を異教徒の手から奪還し、ひとまず戦争目的を達成した。遠征軍の一部は本国へ引き揚げたが、大半は占領地に残留してパレスチナの植民地化を図る。

なぜキリスト教の軍勢は、異郷で軍事的成功を容易に収め得たのか。当時の西アジア情勢はセルジューク帝国の瓦解で、すっかり政治的混乱に陥っていた。各地のイスラーム教徒の領主は互いに抗争を繰り返し、同信者と戦うためには異教徒と手を結ぶことさえ辞さない。バグダードのハリーファはもとより無力で、何の対抗策も取れなかった。カーヒラのハリーファは遠征軍の進撃に鈍感で、エルサレムを攻撃されてから、ようやく真の脅威を悟る。²⁰

イスラーム 世界の反撃 イスラーム世界は聖都の喪失から五十年近く過ぎてから、やっとキリスト教徒の侵略者に対して反撃に出る。セルジューク武将イマダッディーン・ゼンギーはメソポタミアの一地方の大守だったが、動乱に乗じて支配地をシリアに拡大した。1144年、このトルコ人の武弁は反攻の口火を切り、十字軍の主要拠点のエデッサを奪う。

ところが、ゼンギーが間もなく身内の奴隷に暗殺されたので、異教徒に対する聖戦の事業は息子のヌーラッディーン・マフムードに引き継がれた。その後、キリスト教徒とイスラーム教徒の軍勢はたびたび戦うが、真の立役者は部下のサラハッディーン(西欧では訛って、サラディンと呼ばれる)で、その勇名と騎士道精神を敵陣営からも称えられるほどだった。

彼はチグリス河上流のクルディスタン高原の出身で、親子二代にわたってトルコ人の武将に仕えた末に、一介の傭兵からスルターンにまで立身出世をとげる。当時、エジプトのファーティマ王朝は内紛に明け暮れ、エルサレム王国の十字軍とヌーラッディーンの軍隊の軍事介入を招く。サラハッディーンは主君の命を受けてたびたびシリアから出陣し、やがてエジプトの全権を手中に収める。ヌーラッディーンの死後、このクルド人の武将は旧主の遺したシリアとメソポタミアを支配し、アッバース家のハリーファの宗教的権威の下に独立政権を樹立した。これは父の名前にちなんでアイユーブ王朝と呼ばれ、イスラーム教徒の義務——異教徒に対する聖戦を続行する。

1187年、この伝説的英雄はエルサレムをキリスト教徒から奪回し、さらにパ

レスチナの大半をイスラーム世界に取り戻した。西欧諸国は増援部隊を派遣し、足掛け五年に及ぶ戦闘で聖都の奪還をめざす。その企ては失敗に終わり、港町アッコの占領で満足せねばならなかった。それから約百年の間、十字軍は地中海沿いの細長い土地にしがみいたが、最後に全面撤収に追い込まれる。

モンゴル 軍を撃退 十三世紀の中葉、新たな脅威がイスラーム世界に襲いかかり、アッバース家のハリーファ制は名実ともに滅亡した。1258年、モンゴルの軍勢はバグダードを占領し、市街を徹底的に破壊したばかりか、約百万の住民を虐殺する。半世紀前、この草原の騎馬民族は英雄テムチン（チンギス・ハーン）の下で中央アジアに遊牧帝国を樹立し、孫のフレグの代にペルシアからメソポタミアへ攻め込んできた。

モンゴルの軍勢は西進してシリアを支配下に収めると、さらにエジプトをめざす。それを撃退したのは、同じ中央アジアから来た遊牧戦士——トルコ人の将兵だった。その先祖はチンギス・ハーンの手で故地を追われ、西アジアにたどりつく。モンゴルの脅威が高まった時、カーヒラの権力はサラハッディーンの後継者からトルコ人傭兵のマムルークに移っていた。

これはアラビア語で〈所有された者〉を意味し、奴隷身分の職業軍人である。アイユーブ王朝の権力者はアッバース王朝と同様に、軍事力を外人部隊に頼った。やがて武将たちは宮廷内の陰謀に参画し、ついには政治権力を乗っ取る。非常時に際してマムルークの将兵は奮戦し、1259年、パレスチナの戦場でモンゴルの遠征軍を決定的に撃ち破った。

マムルーク王朝のスルターンは、武将たちとの派閥抗争で決まる。文武両面で最も秀でた者が権力闘争に勝ち抜き、王冠を手に入れた。その一人はモンゴルに滅ぼされたばかりのアッバース家から生き残りの王子をカーヒラへ呼び寄せ、新ハリーファに担ぎ上げる。こうして自らの地位を権威づけ、同時にサラハッディーンの子孫の王位継承要求を封じた。

その後、モンゴル勢力は東へ退き、ペルシアとメソポタミアにまたがるイル＝ハーン国を樹立する。マムルーク勢力はシリアに領土を拡大し、強敵と小競り合いを繰り返した。しばらくの間、中東地域はトルコとモンゴルの両勢力に二分されたが、またもや中央アジアから新たな侵略にさらされる。十四世紀の後半、北方の草原の覇者ティムールはペルシアとメソポタミアに進出して、すでに滅亡していたイル＝ハーン王朝の後継諸国を踏みにじった。

この軍事的天才はサマルカンドを都にイスラーム化したモンゴル諸勢力を糾合し、チンギス・ハーンの大帝国の再建を夢想する。その軍勢はインドとロシアに遠征後、西アジアの各地を荒らし回り、破壊と虐殺の限りを尽くす。十五世紀の初頭にはシリアを占領して、マムルーク王朝の支配を脅かした。

4 オスマン帝国統治下のパレスチナ

ビザンティウム 帝国の滅亡 この激動の時期、アナトウリア半島にトルコ系の新興勢力が台頭し、やがて中東地域の覇者となったばかりか、アジア、ヨーロッパ、アフリカの三大陸に版図を押しひろげる。かつてセルジューク帝国が分解した際、その残存勢力は小アジアの一角に生き延びた。十三世紀の末頃、ある部族は有力な首領オスマン（ウスマーン）に率いられて急速に実力を蓄え、ビザンティウム帝国を蚕食する。

それから約百年の間に、オスマン・トルコの軍勢はダダネルズ海峡でマーマラ海を渡り、東欧のボールカン半島に兵を進めた。一方、アジア側のアナトウリア半島に領土の拡大を図ると、折りから最盛期を迎えたティムールの帝国と衝突を引き起こす。十五世紀の初頭、アンカラ（現代のトルコ共和国の首都）付近の決戦でオスマン側は大敗を喫し、陣頭指揮のスルターンまで捕虜となった。1405年、ティムールが中国遠征の準備中に急死したため、間もなく草原の大帝国は後継者争いの内戦で分裂する。思いがけぬ事態を迎えて、オスマン政権は息を吹き返し、やがて陣容を立て直す。

1453年、第七代スルターンのメフメト（ムハンマド）二世は大軍を動員し、宿敵のビザンティウムに最後の戦いを挑む。東のローマ帝国はオスマン・トルコとの度重なる戦争で大半の領土を喪失し、東欧の南端で周囲を敵地に囲まれた小さな飛び地になっていた。コンスタンティノウプルは二カ月間の包囲の末に陥落し、イスタンブールと改称されてオスマン帝国の都となる。²¹ 七世紀にアラブ人が新しい宗教と共に台頭して以来、このクリスチャン超大国はやむことなくイスラーム教徒の軍勢と戦い続けてきたが、この敗北でついに千年の歴史を閉じた。

聖地の保護者 十六世紀に入ると、オスマン帝国は西アジアのイスラーム世界に鋒先を転じ、東と南へ支配地を拡大した。まず1514年、モンゴルとトルコの支配から脱したばかりのサファールウィード王朝のペルシアからチグリス、ユーフラテス両河の上流地方を奪い、クルディスタンの高地とメソポタミアの平原へ進出する。続いて1516年にはシリアへ出兵し、アレポウ北方の戦場でエジプトのマムルーク王朝の軍勢を撃ち破った。

かつてエジプトの奴隷軍団は勇名を轟かせたが、もはや新時代に対応できなかった。オスマン・トルコの軍勢は新式の火砲を装備し、昔ながらの戦法のマ

ムルーク騎兵を容易に撃退する。それまでの三百年の間に、エジプトは将兵の供給源をトルコ人からクルド人へ、そして黒海の東岸地方出身のサーカシア人に変えた。その軍事力はスルターン位をめぐる権力闘争に利用され、往年の活力を失う。オスマン側も戦力を外人部隊に依存することは同じだったが、人的資源を主として東欧諸国に求め、キリスト教徒の家庭から若者を徴募して、改宗と軍事訓練でイスラーム軍の精鋭に仕立て上げた。

オスマン帝国のセリーム一世はみずから出陣し、シリアとエジプトの戦場で陣頭指揮を執る。シリアを喪失し、最後の楯のパレスチナも奪われて、エジプトの命脈は尽きた。1517年早々、カーヒラの落城後、ムルーク最後のスルターンは処刑された。飾り物のハリーファはイスタンブールへ連れ去られ、命だけは助かったものの、由緒ある〈神の使徒の代理〉の肩書を剥奪される。

オスマン帝国のセリーム一世は戦場の勝利者にとどまらず、信仰の護持者としての権威を獲得した。アラビア半島から使者がナイル河畔の〈勝利者の町〉を訪れ、そこに滞在中のスルターンに〈聖地メッカとメディーナの保護者〉の称号と城門の鍵を献上したからである。聖都エルサレムも同様に、セリーム一世の保護と監督の下に置かれた。

トルコ人の帝国はエジプトの征服だけに満足せず、さらに領土拡張を続ける。次のスルターンのシュレイマーン一世の時代に、北アフリカのリビア、チュニジア、アルジアリアを支配下に収めた。その結果、オスマン帝国の版図は西端のマロコウを除いて、ほぼアラブ世界と重なり合う。一方、キリスト教世界に対する攻勢をゆるめず、ハンガリを征服した後、オーストリアの都ウィーンの城壁に迫る勢いだった。

ユダヤ教徒の追放 オスマン帝国が東欧に領土を拡大したのと並行して、イスラーム圏はキリスト教勢力の巻き返して西欧の支配地を縮小する。八世紀にアイビタリア半島がアラブ世界に組み込まれて以来、イスラーム文化はコルドバを中心に花開いた。寛容な宗教政策の下で、ユダヤ教徒はイスラーム君主の宮廷に宰相や財務官として仕え、あるいは医師、哲学者、詩人として名声を得た者も少なくない。²²

しかし、スペインのカトリック教徒はイスラーム勢力に宗教戦争を挑み、宿敵を次第にアイビタリア半島の南部へ追い詰め、ついに国土回復の事業を成し遂げる。1492年、イスラーム政権の最後の拠点グラナダが長期間の包囲の末に降伏すると、非キリスト教徒の住民は、大半が対岸のマロコウに逃れた。後に残った者には、やがて異端審問の恐るべき運命が待ち受ける。

カトリック教徒の力で統一されたアイビタリア半島に、ユダヤ教徒追放の嵐が吹きすさぶ。1492年にはスペイン、四年後にはポーチュガルから、ヤハウエ

の信徒はまたもや離散せねばならなかった。多くの者がオスマン帝国に避難場所を見出し、とりわけアナトウリア、ボールカン両半島に移住する。また、北アフリカ各地の港町に落ち着く者も少なからずいた。トルコ人の権力者は宗教上の難民に偏見を持たず、むしろ領土内にユダヤ教徒の商人や医師の定住を奨励するほどだった。

スペイン、ポーチュガル系ユダヤ教徒は、セファーディムと呼ばれる。古代ヘブライ語でアイビタリア半島の国をセファーラードと称したからである。やがて、この呼び名はカトリック教徒の権力者に追い立てられた者に限らず、広く西アジア、北アフリカに在住の東方系ユダヤ教徒を指すようになる。²³

聖地のユダヤ人口 かつてヤハウエの信徒の武装抵抗がローマ軍団に容赦なく鎮圧されて以来、パレスチナのユダヤ人口は離散と改宗のため激減した。しかし、穏健派はローマ当局の庇護を得て、ガリラヤ湖畔の都市テベリアを中心に宗教共同体を維持する。七世紀にパレスチナがアラブ世界に編入されて以来、聖地のユダヤ教徒は、イスラーム教徒の権力者によって、宗教上の少数派として保護された。

オスマン帝国がパレスチナを統治下に置いてから、聖地のユダヤ教徒の数はセファーディムの受け入れで増加した。さらに十九世紀の中葉になると、欧州から新たな移住者の群れが、シオンの地にたどりつく。新参者はアシュキナジムと呼ばれ、主としてロシア、ポウランドの出身だった。同じユダヤ教徒であっても、セファーディムとアシュキナジムは、髪、肌、瞳の色が異なり、言葉も通じなかった。

エルサレムの旧市街を取り囲む城壁は、オスマン・トルコのシュレイマーン大帝の時代に増改修され、今日もなお偉容を誇る。東面の壁の直下、さらには谷を隔てた橄欖山の斜面に、ユダヤ教徒の墓地がひろがる。離散の民の願いは、神の約束の地に戻り、そこで生涯を終えて聖都に葬られることだった。救世主の出現を待ち受け、最後の審判の日に復活するよう望んだからである。

1825年、皇帝ニコライ二世が即位してから、ロシア帝国内のユダヤ教徒はさまざまな圧迫を受けた。ロシア化、キリスト教徒化の強制を嫌って、ごく一握りの幸運な者はシオンの地へ逃れる。有効期限一年の旅券を持って巡礼として聖地に赴き、そのまま帰国せずに居着いてしまう。その人数は多くなかったが、着実に増えた。

ロシアから来たアシュキナジムは信仰心の篤い正統派教徒で、高齢者の割合が非常に高く、もっぱら祈りとタルムド（ユダヤ教の律法と伝承）の学習に余生を捧げた。彼らはエルサレムで生計の手段を持たず、本国に残した家族からわずかな仕送りを得て、極貧の生活を過ごす。あまりの窮乏ぶりを見かねて、

西欧在住の富裕な同信者が救援基金を募り、なんとか暮らして行くだけの援助を与えた。

だが、聖都のアシュキナジムがいつまでも外部の慈善資金に頼ってばかりいるのは、ヤハウエの信徒の立場からも決して好ましいことではない。そこで欧州の博愛事業家たちはユダヤ教徒の自力更生をめざし、パレスチナで小規模工業や農園の経営に乗り出す。富裕な実業家のモンテフィオールはエルサレムに風車小屋の製粉工場を建て、国際金融資本家として高名なロスチャイルドやヒルシュは豊富な資金でアラブ人の地主から荒れ地を買収し、開拓農場にユダヤ教徒を入植させた。

十九世紀も半ばに差しかかると、聖都のユダヤ人口は住民の過半数を越す。1837年に北部のガリラヤ地方を襲った大地震のため、多数のセファードイムが住む家を失ってエルサレムに移住し、これにアシュキナジムが加わったからである。だが、1860年の推計でパレスチナ全体のユダヤ教徒は二万四千人程度に過ぎず、四十四万人のアラブ人口とは比べ物にならなかった。

ところが、1880年代に入ると、様相は一変した。帝政ロシアで反セム主義の暴動が続発し、多数のユダヤ難民を国外に追い立てる。その大半が米国と中・西欧に移住したが、少数の者はシオンの地に逃れた。新しいアシュキナジムの人口増大は、アラブ社会の伝統的基盤を揺さぶる。反ユダヤの時代風潮はドイツやフランスにもひろがり、欧州在住の離散の民の末裔を苦境に陥れた。ここに政治的シオン主義が勃興し、パレスチナにユダヤ国家の樹立をめざす。だが、当の聖地でヤハウエの信徒は昔ながらの生活と信仰を守り、神の約束の地に現世の国家を創建する運動とは全く無縁だった。

〈第一部の註と参考文献〉

1 この引用箇所は、イスラエル独立四十周年を祝う『エルサレム・ポスト』紙の付録〔The Jerusalem Post Magazine, 1988年4月20日付〕に掲載された英訳と、中東関係の資料集〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), The Israel-Arab Reader: A Documentary History of the Middle East Conflict, Revised and updated edition (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)〕とを参考にして日本語に訳出した。

2 『旧約聖書』の「創世記」第十三章の記述によると、神はユダヤ人の始祖の族長と契約を結び、エジプトの河からメソポタミアの大河ユーフラテスまでの土地を子孫に与えると語った。また同第十七章によると、この族長が九十九歳の時、全能の神は再び契約を結んで、彼に名前をアブラムからアブラハムに変えるよう指示した。そして、カナンの全土を永久の所有地として与えると告げた。イスラエル独立宣言の主張する「本来的、歴史的権利」とは、この神話に由来する。

3 アジアも西端の地域に出没した遊牧民は、オアシスの定住民からハビル、あるいはアピルと呼ばれた。これがヘブライの語源と信じられている。イスラエルとはアブラハムの孫のヤコブの異名で、彼と共にパレスチナからエジプトへ移住した部族を指す。とりわけモーセの指揮下、ナイル河畔からシナイ半島に逃れて以来、この呼称が用いられる。ユダヤとはヤコブの子のユダの子孫のことであるが、ダヴィデとソロモン父子の築いた帝国が南北に分裂した後、南朝のユダ王国の住民を、後にはローマ帝国支配下の住民を意味するようになった。これらの呼称は厳密には使い分けられず、しばしば混用されている。さらにユダヤという言葉自体が、宗教的、文化的、人種的にも、多岐にわたる意味合いを帯びるようになった。〔Michael Grant, The History of Ancient Israel (New York: Charles Scribner's Sons, 1984年)、29~30頁、283~284頁〕

本論では、ローマの不寛容な宗教政策のために、パレスチナから離散するまでのヤハウエの信徒をユダヤ人、その後はユダヤ教徒と表記する。彼らは西アジア、北アフリカ、ヨーロッパの各地に移住した後も、宗教的同一性を維持したが、現地人と混血した結果、人種的にも、言語的にも、さらには文化的にも、多様化したからである。

4 ヘブライ語ではツィヨーン、ギリシャ語ではセオーン、ラテン語ではシオーン、古代英語ではシオンと発音され、現代英語ではザイオンに転訛した。本論では聖書の邦訳表記に従い、シオンを用いる。もともとシオンとは丘を意味し、先住民が砦を築いた小高い土地だった。ダヴィデがここを征服し、ソロモンが神殿を建設して以来、シオンはエルサレムの別称、あるいは古代ユダヤ国家の支配領域を指すようになった。

5 十九世紀、英国の文人たちが英語の単語の Philistine を芸術や文学に縁遠い無教養な俗物の意味に使って以来、この語は原義から逸脱して、西欧諸国の反アラブ感情を醸成するのに貢献した。〔John K. Cooley, Green March, Black September: The Story of the Palestinian Arabs (London: Frank Cass, 1973年)、16頁〕

6 強制連行は、これが初めてではない。西暦紀元前721年、北王国のイスラエルがアッシリア帝国に敗れた際、27,290人(多分、この数字は婦女子を含んでいない)の住民が連れ

去られ、代わりに帝国各地から移住者がやって来た。〔Michael Grant, 前掲書、121頁〕

7 バビロニアはアッシリアと異なり、住民の入れ換えで征服地の性格を変えようとはしなかった。約一万五千人の強制連行対象者は、行政官、聖職者、学者と、彼らの家族で、ユダ王国の精華ともいべき階層だった。移住者たちは遠いメソポタミア南部の流刑地で主として農業に従事し、強い望郷の念に囚われる。だが、その篤農ぶりは高く評価され、モーセ時代のエジプトのように重い労役を課せられなかった。彼らは信仰を護持でき、後世のユダヤ教の発展に寄与した。〔Chaim Raphael, The Road from Babylon: The Story of Sephardi and Oriental Jews (London Weidenfeld and Nicolson, 1985年)、25頁〕

1948年のイスラエル建国まで、メソポタミア（イラク）にはアラブ世界でも屈指のユダヤ共同体が存在し、繁栄を誇っていた。だが、同信者の独立宣言により、強制連行者の子孫たちは住み慣れた土地から放逐された。

8 エルサレムの旧市街を取り巻く城壁には、出入り口の城門が幾つもある。その一つのシオン門にちなんで、付近はシオンの丘（あるいは山）と呼ばれている。本来、この地名は城門の周辺だけでなく、聖都全体を指す。なお、ダヴィデの墓、イエスの最後の晩餐の部屋と伝えられる旧跡が、シオン門の近くに現存する。

9 ヘロデ王はローマの権力の下で従属国の王となり、イエスの誕生後、多数の幼児の殺害を命じて、歴史に悪名を残した。だが、彼の治世下、エルサレムは大規模な土木事業で面目を一新する。ヤハウエの神殿は増改築され、その境内も拡張された。〔Herbert G. May(Ed.), Oxford Bible Atlas, Third Edition, revised by John Day (Oxford: Oxford University Press, 1984年)、97頁〕

10 独立宣言の正文はアラビア語で書かれているが、本論ではパレスチナ解放機構の総代表部（在東京）提供の英訳に基いて、日本語に訳した。

11 この政治的統一こそイスラーム体制の最初の成果であり、唯一神と預言者に対する忠誠を部族や家族の絆よりも優先させるようになった。〔Malise Ruthven, Islam in the World (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、89頁〕

12 このアラビア語をローマ字に転記すれば、Khalifa となり、片仮名でカーリーファと表記できる。英語の Caliph とは、この転訛したものである。本論では喉の奥で発音する kha を片仮名のハで表し、ハリーフアと表記する。

13 『旧約聖書』の「創世記」の時代から、中東地域の社会では一夫多妻制度が存在した。イスラーム教の聖典『クルアーン』も、平等な待遇を条件に妻の数を四人まで認めている。最初の妻のハジージャの存命中、ムハンマドは彼女以外の女性に心を動かすことはなかったが、その死後は多数の妻妾を得た。多くの場合は政略結婚で、遊牧部族との軍事同盟を確認する証だった。しかし、異教徒との戦いで戦死した信徒の家族の生活を保障するため、寡婦を妻の一人に加えた例も何度かあった。〔Arthur Goldschmidt, Jr., A Concise History of the Middle East, Second edition, revised and updated (Boulder: Westview Press, 1983年)、34頁〕

14 アラブの征服者は聖都を破壊したり、住民を強制連行したりすることはなかった。エルサレムがイスラーム戦士の遠征軍に包囲されると、防御側は現地の指揮官を降伏談判の相手とせず、ハリーフアのウマルとの直接交渉を求めた。神の使徒の代理はアラビア半島のメディーナからシリア経由でエルサレムを訪れ、交渉でムハンマドゆかりの聖都を開

城させた。〔Fred McGraw Donner, The Early Islamic Conquests (Princeton: Princeton University Press, 1981年)、151~152頁〕

15 イスラームの軍勢は歩兵（剣士と射手）と槍騎兵で編成され、駱駝が兵員と物資を輸送した。当時、騎兵は戦術的に重要な役割を果たしたが、乾燥地帯のアラビア半島で馬の供給は乏しかった。そこで歩兵が戦闘の先鋒となり、ビザンティウムやペルシアの軍勢に勝利を収める。射手は楯で身を守り、重装騎兵の攻撃に対抗した。〔Fred McGraw Donner, 前掲書、222~223頁〕

16 それまでキリスト教徒の支配下にあった地域では、為政者の経済的、宗教的圧迫で、住民の不満が高まっていた。とりわけアイビアリア半島のユダヤ教徒はイスラーム教徒の戦士を解放軍として歓迎した。〔Peter Mansfield, The Arabs (Harmondsworth: Penguin Books, 1981年)、43頁〕

17 その数はもっと多く、八百人に達したともいう。この血の惨劇は西側の中東史家に厳しく非難されたが、千三百年前の出来事を現代の感覚で判断することはできない。歴史を振り返れば、女子供も容赦しない“皆殺し”の戦争こそ敵の戦意をくじき、その後の一層の流血を避けるのに役立つと信じて、虐殺を正当視する民族もいた。〔Alfred Guillaume, Islam (Harmondsworth: Penguin Books, 1981年)、48頁〕

純粹に政治的観点に立てば、捕虜の大量処刑は極めて賢明な措置で、将来の禍根を断つ最良の解決策だったことは否定できない。このユダヤ教徒の部族は、メディーナに絶えず脅威を与えており、もし捕虜を釈放すれば、反イスラームの温床を強化するだけだった。

〔Maxime Rodinson, Mohammed, Translated from the French by Anne Carter (Harmondsworth: Penguin Books, 1973年)、214頁〕

この事件が一つの要因となって、イスラーム教の聖典『クルアーン』はユダヤ教徒に対して厳しい語句を用いている。だが、ムハンマドの対ユダヤ政策が、今日のアラブ・イスラエル紛争の主要原因であるとは断定できない。〔Arthur Goldschmidt, 前掲書、35頁〕

18 イスラーム教徒の権力者は一般にユダヤ教徒を寛大に扱ったが、時代や場所によっては、キリスト教国ほどではなくとも、差別と圧迫を加えた。イスラエルの駐日大使は、東京発行の英字新聞に掲載された独立記念日の記事広告で、ユダヤの民は過去千三百年の間、アラブの地で迫害されたと述べている。〔Yaacov Cohen, “Israel Marks 38th Anniversary of Independence”, The Japan Times, 1986年 5月14日付〕

19 アル=カーヒラの発音が転訛して、フランス語ではル・ケールに、英語では冠詞を省略してカイアラウになった。片仮名表記のカイロは、英語の綴りを日本語のローマ字の読み方にならって音写したものである。

20 ファーティマ王朝は使者を十字軍の陣屋に派遣し、共通の敵セルジュークに共同で対抗しようと持ちかけ、シリアの分割を提案したほどだった。〔P. M. Holt, Ann K. S. Lambton and Bernard Lewis (Eds.), The Cambridge History of Islam, Volume 1A: The Central Islamic Lands from Pre-Islamic Times to the First World War (Cambridge: Cambridge University Press, 1980年)、196頁〕

21 この勝利で、メフメト（ムハンマド）二世は征服王の異名を捧げられ、イスラーム世界で勢威並ぶ者のない支配者となった。彼は自分自身をキリスト教文明圏を含めた世界帝国の相続者と見做したばかりか、その権力の絶対性を信じた。このスルターンは約三十

年に及ぶ治世を通じて、すべての点でイスタンブールを世界の中心たらしめようと尽力し、オスマン帝国の明瞭な特色を打ち出した。また、彼は統治権の起源をイスラーム教に求めた。〔Carl Brockelmann (Ed.), History of the Islamic Peoples, Translated by Joel Carmichael and Moshe Perlmann (London: Routledge & Kegan Paul, 1982年)、296頁〕

22 イスラーム文化は各地からコルドバに最良の知識人を引き寄せ、天文学、占星術、薬学に関する書物、さらに哲学書がアラビア語から翻訳された。しかし、文学作品は除外された。〔Joseph Schacht and C. E. Bosworth (Eds.), The Legacy of Islam, Second edition (Oxford: Oxford University Press, 1979年)、380~381頁〕

23 セファードームは支配者や隣人と話す時には、トルコ語やアラビア語を使い、仲間内ではスペイン語にヘブライ語の混交したラディノ語を用いた。1840年代になっても、パレスチナのユダヤ人口のかなりの部分が、このスペイン古語の方言を日常的に話した。しかし、三百年の間に、この言葉はアラビア語とトルコ語から多数の単語を取り入れる。新参のアシュキナジムは、高地ドイツ語にヘブライ語の混じったイード語を話す。その先祖が中世の迫害でドイツから追放されて、東方へ移住したからである。〔Arnold Blumberg, Zion Before Zionism, 1838-1880 (Syracuse: Syracuse University Press, 1985年)、27頁、109頁〕

第二部

政治的シオン主義の生成

5 差別と迫害の所産

反セム主義の猛威 パレスチナにイスラエルの建国を実現した政治的シオン主義は、十九世紀の最後の約二十年間に欧州大陸で荒れ狂った反セム主義の逆説的所産である。ユダヤ嫌いの時代風潮は、後進国のロシアにとどまらず、先進国のフランス、ドイツにも広くはびこった。

この反セム主義、すなわちユダヤ排斥運動は、ロシア皇帝の強権支配下、まだ因襲の根強い東欧で、無知蒙昧の貧民階層が日頃の欲求不満を社会的弱者に向けて発散させる形を取っただけでなく、時代遅れの呪縛からとうに脱したはずの開明的な中・西欧でも、大学教授や著述家の知識人までが反ユダヤ思想の論陣を張り、大衆を扇動したために、欧州全土で猖獗を極めた。¹

『旧約聖書』の「創世記」は、メソポタミアの大洪水説話を伝えている。その記述によると、義人ノアは神の指示に忠実に従い、箱舟に一族と動物を乗せて生き延びた。長子のセムの子孫は時代と共に増加し、ヘブライ(ユダヤ)、フェニキア、アラーム、アッシリア、アラブ人になったという。十八世紀のドイツ歴史学者は古代の中東地域に共通する言語に、聖書ゆかりの人物の名前を借りてセム語と名付けた。

ところが、西アジア諸民族の先祖の名は、のちにヤハウエの信徒だけに堅く結び付けられる。中世以来、反ユダヤ感情は欧州のキリスト教社会の底流となっていたが、この時期に偏狭な排外思想となってセムの末裔に迫害を加えた。とりわけロシア帝国の版図内で、暴徒はしばしばユダヤ居住区を襲撃する。無抵抗の住民は多数の死傷者を出しながら、この打ち壊しにじっと耐えるしかない。古い時代から宗教的少数派の被差別民は武器を取り上げられ、暴動に刃向かうことはできなかった。

1896年 2月、オーストリア・ハンガリ二重帝国の首都ウィーンで、ユダヤ教徒の新聞記者テーオードール・ヘルツルは『ユダヤ国家——ユダヤ問題の現代的解決試論』と題した小冊子を世に問い、約二千年前にローマの攻撃で滅亡した故国の再興を提唱した。この警醒の書の刊行と共に、政治的シオン主義の歴史が始まる。²

ヘルツルは預言的な題名の著作を通じて、大胆な論旨を展開した。反ユダヤ感情は人心に深く根差し、簡単に消え去るものではない。ヤハウエの信徒が迫害の及ばぬ土地に欧州から集団移住し、国際法で保障された主権国家を創設するならば、積年の〈ユダヤ問題〉は解決されよう——と。

ヘルツルは同胞の信仰心に培われた望郷の念を宗教の枠内にとどめず、祖国復興運動に駆り立てる。彼の主張は単なる夢想ではなく、国際政治の場でユダヤ国家の実現をもくろんだ。この理論と運動は政治的シオン主義と呼ばれ、当初は少数の信奉者しか獲得できなかったが、1917年秋、欧州の戦乱に乗じて英国の認知を取り付けた。さらに第二次世界大戦中のナチ・ドイツによる組織的大虐殺にもめげず、この悲運をむしろ逆手に取って、1948年5月、ついに建国の大目的を達成する。あの小冊子の出版から数えて、五十二年と三カ月の歳月が流れていた。

反ユダヤ主義の軌跡 欧州における反ユダヤ主義の根源を探れば、古い時代にまでさかのぼる。二世紀の前半、反ローマの武力闘争が鎮圧された後、ヤハウエの信徒はパレスチナから逃れて、ボールカンからアイビタリア半島に至る南欧の各地に広範囲に住み着いた。離散から約百年後、ユダヤ教徒もローマ帝国内の他民族と同様に市民権を認められる。だが、キリスト教の公認、さらに国教化に伴い、せっかく獲得できた権利は制限されてしまう。その独特の選民意識、偶像崇拜の厳格な否定が、権力者の不興と民衆の反感を買ったからである。³

その後、十世紀までの間に、離散の民の居留地は数を増し、中・西欧の全域に広く散在するようになった。しかし、カトリック教会の権威と支配が確立するにつれて、ヤハウエの信徒の立場は微妙となる。クリスチャン社会の真只中で、少数派の宗教共同体は神の子を十字架の上で磔の極刑に処した者の子孫として、遠い祖先の行為を糾弾された。

唯一絶対神の信徒は憎悪と侮蔑の視線にさらされながら、過密状態の特定居住区（ゲットウ）で肩を寄せあって暮らし、ユダヤ教会堂（シナゴグ）を信仰と伝統保持の拠り所とした。

長い歳月の間に、非差別者の共同体でも、現地人との混血が進行する。青い瞳、茶褐色の髪、白い肌——もはや容貌と肉体の特徴から、セムの末裔をケルト人やゲルマン人の子孫と区別できなくなった。ユダヤ教徒に特有の鷹鼻とは、根拠のない俗説に過ぎない。

離散の民に対する迫害は、十字軍の遠征で本格化する。この時代の宗教的熱狂は、聖地への軍事的冒険で増幅された。キリスト教徒の軍勢は手近な所に敵の姿を捜し求め、パレスチナへ向かう途上、まず欧州在住のユダヤ教徒を血祭りに上げる。この蛮行を阻止するため、大司教など高位の聖職者が各地で尽力したが、多くの場合、無駄な努力に終わった。

さらに唯一絶対神の信徒は、数々の差別と偏見に耐えねばならない。例えば、遠目にもすぐに見分けのつく衣服の着用を強要された。またユダヤ教の儀式の

ためにクリスチャンの子供の生き血を抜く——という奇怪な噂のために、理不尽な圧迫を加えられた。⁴

再び離散の途 十一世紀から十五世紀にかけて、欧州在住のユダヤ教徒の一部の地方から1012年に、イングランドからは1290年に、フランスからは1306年に、離散の民の末裔は追い立てられて、またもや散り散りになる。

十四世紀の中葉、黒死病（ペスト）が欧州一円に流行すると、ヤハウエの信徒は苛酷な運命にさらされた。この死に至る病の脅威にユダヤ教徒も等しく襲われたが、周囲のキリスト教徒は伝染病の原因を社会の異端分子に求め、毒が井戸に投げ込まれたと疑う。このため少数派の宗教共同体を標的に、流血の打ち壊し騒動が相次いだ。

この嵐の時代にドイツでは約三百五十もの特定居住区が襲撃され、多数のユダヤ教徒は東方の辺地に避難する。欧州の外れの後進地域で、領主の中には宗教的難民の群れを歓迎する者もいた。⁵ その集団移住が辺境に西方の先進文化をもたらし、同時に商業活動を刺激したからである。当時のリスーエイニアは東欧に広い領土を擁し、離散の民を喜んで受け入れた。しかし、この国はポウランドの台頭で弱体化し、ついには併呑されてしまう。

そのポウランドもやがて新興のロシアに圧迫され、戦争のたびに領地を縮小した。結局は隣接のロシア、プロシア、オーストリアの強国に国土を分割された末に滅亡する。その結果、スラヴ世界にユダヤ共同体の飛び地が取り残され、ドイツ文化圏はかつて追い出したユダヤ人口を再び抱え込んだ。

啓蒙思想の影響 パレスチナからヤハウエの信徒が欧州に渡って以来、その子孫は移住先でさまざまな職業に従事した。例えば、イタリでは織工や縫製工、それに芸人、ドイツでは奴隷売買業、スペインではオリヴや葡萄栽培の農奴に。だが、中世以降、その活動の場は制約を受ける。ユダヤ教徒は土地所有を禁じられ、公職の道を閉ざされ、同業組合から締め出されて、仲買人、小商人、行商人などになるしかなかった。

しかし、時代が下がるにつれて、被圧迫民の社会的、経済的地位に、大きな変化が生じる。一部の者は少数派の立場を逆用し、キリスト教徒に禁じられた分野の金融業に参入して財を築く。小は零細な商人や貧しい農民を相手に、大は貴族や王侯を顧客に、高利貸しは大いに繁盛した。だが、その活動は一方で世間の偏見を増幅し、借金の返済に苦しむ者から恨みを買う。⁶

そのうちに金融業の成功者の中には、宮廷に出入りを許され、王室財政の切り盛りを任せられたばかりか、貴族の末席に連なる者さえ現れた。欧州の王侯が互いに戦争を繰り返すたびに、ユダヤ教徒の大銀行家は公債の形で戦費の調

達を引き受ける。とりわけフランクフルトのロートシルト（ロスチャイルド）家は時流に巧みに乗って事業を拡大し、分家が لندن、パリ、ウィーンで活躍する国際的な金融資本に発展を遂げた。

長い歳月の辛酸の果てに、ユダヤ教徒は経済的実力を蓄えると、社会的地位の向上を求める。折りしも欧州は理性の時代を迎え、啓蒙思想がひろまった。この新思潮の前に、キリスト教は現世の規範力を弱め、宗教的寛容が社会に受容されるに至った。さらにフランス大革命は自由・平等・博愛を合い言葉に旧来の観念を打ち砕き、その結果、ユダヤ教徒に対する差別撤廃の機運を促す。一世の風雲児ナポレオン・ボナパルトは欧州諸国に兵を進め、革命の理念をもたらすと同時に、各地でユダヤ教徒の特定居住区を解放した。⁷

同化と 孤立と しかし、離散の民の末裔が長年の束縛から自由となり、市民として同等の扱いを受けるようになるまで、さらに数世代を要した。十九世紀の前半、ナポレオンの没落後、欧州では反動勢力が巻き返す。ユダヤ教徒がようやく獲得した権利は、かなり取り消されてしまった。しかし、その一方で、工業化の進展に伴う社会構造の変動は、法制上の改革よりも人々の意識を変える。新興都市の生活は伝統的価値体系を断ち切り、偏狭な思考や宗教感情から人心を解き放った。

その結果、中・西欧諸国では、差別と偏見が次第に薄らいだ。何よりもユダヤ教徒自身が大きく変わり、その国の社会と文化に同化する。もはやヤハウエの信徒は外見から区別できず、言語も服装も同じとなった。キリスト教徒との通婚も珍しくなく、伝統的信仰を捨てて、クリスチャンに改宗する者の数も増加する。

十九世紀の半ば、中・西欧諸国ではユダヤ教徒の解放が一段と進み、参政権、居住地や職業選択の自由などで、キリスト教徒と同等の権利を保障されるようになった。大学がヤハウエの信徒の子弟にも門戸を開くと、多くの家庭では進学費用を惜しまなかった。新時代の到来と共に、それまで機会を奪われていた高等教育に将来の希望を託したからである。

その結果、ユダヤ教徒は小さな人口比率にもかかわらず、大学教授、医師、弁護士などの知的専門職で大きな割合を占め、さらに芸術や文学の分野でも傑出した人物を輩出する。また実業界で成功を収め、財産を築いた者も少なくない。このほか知識の商人——書籍販売や出版業を始め、新しい職業のジャーナリズムに身を投じた者もいる。軍人、官僚、政治家にも、ユダヤ教徒の進出は目覚ましかった。⁸

このように英独仏の先進諸国で、離散の民の末裔は閉鎖的な特定居住区から抜け出し、幅広い中産階級を形成する。しかし、東欧の専制帝国ロシアでは、

事情は全く異なっていた。このユダヤ教徒は西部地方の指定居留地⁹に押し込められ、貧困のどん底に沈む。その大多数は厳格な正統派教徒で、昔ながらの律法を厳守し、周囲のクリスチャン社会に同化することなく、敵意の真只中で孤立していた。そして、積年の圧迫に対する心理的逃避からも、シオンの地に限りない憧憬の念を抱き続ける。

続発する 大暴動 1880年代の初頭、ロシア帝国の各地で、反セム主義の暴動がしばしば荒れ狂った。皇帝アレクサンドル二世がユダヤ教徒の革命家に暗殺されると、信仰を共にする同胞は血の代償を支払わねばならない。それまでもヤハウエの信徒に対する暴力沙汰は珍しくなかったが、この時から官憲は被害者を流血の惨事から保護するどころか、むしろ暴徒の行動を黙認し、時には公然と破壊と略奪を教唆する。

非業の死を遂げる二十年前、アレクサンドル二世は農奴を解放して歴史に名を残した。その四半世紀を超える統治において、彼は〈進歩的皇帝〉の異名にふさわしく、臣民の中の異分子にも寛大な姿勢を示し、差別を制度化した諸法令の見直しに尽力する。そこで、帝政ロシアも中・西欧諸国なみの市民的権利をユダヤ教徒に認めるのではないかと、過大な期待感さえ生じた。一方、その農奴解放は不徹底な改革に終わり、地主と農民の対立をかえって激化させて、人民主義者（ナロードニキ）の運動を高揚させる。その活動家の中には、ユダヤ教徒の青年男女も少なからず含まれていた。¹⁰

皇帝アレクサンドル三世は即位すると、すぐに亡父の復讐に乗り出す。一片の布告によって、数十万人のユダヤ教徒が住み慣れた土地から追放された。それ以来、権力者は当時の社会にみなぎる革命的風潮の安全弁として、離散の民の末裔に対する偏見を巧みに利用する。大衆は容易に扇動されて、無抵抗の羊に襲いかかった。彼らは真の敵を見極めることなく、苦しい生活の不満の吐け口を見出すために、宗教的少数派の社会的弱者に乱暴狼藉を働き、住居と家財道具を打ち壊した。

この嵐の時代、極右団体が音頭を取って、暴徒の熱狂をかきたてる。しかも、流血の暴動に参加する者は、無学で貧しい大衆にとどまらない。大学生や知識層までも、積極的に迫害を支援する。人民主義者でさえ反ユダヤ感情を煽るのに一役買った。社会の〈寄生虫〉に対する蜂起が、究極的には革命運動に転化して、帝室、貴族、地主、資本家に矛先を向ける――と信じて。

大迫害の嵐は、1884年にひとまず過ぎ去った。その後も各地で散発的暴動が繰り返されたが、1902年から五年以上にわたり、またもや嵐は指定居留地の全域で吹きすさぶ。この受難の時代、ヤハウエの信徒は暴力に無抵抗で、ただ耐えるしかなかった。しかし、その数は多くはないとはいえ、ユダヤ教徒出身の

青年は革命運動に参加し、キリスト教徒出身の社会主義者、無政府主義者と連携する。彼らは信じた。ラマナフ王朝打倒の革命が成功した暁には、反セム主義は自然に消滅するに違いない——と。

だが、大多数の被差別民にとって、国外移住が迫害から逃れる唯一の方策だった。難民の群れは手近な中・西欧諸国へ、さらには大西洋の彼方の新世界へ渡る。少数の集団が奔流から脇へそれて、オスマン・トルコ帝国の支配下のシオンの地をめざした。反ユダヤ暴動が荒れ狂う前年の1880年から第一次世界大戦の始まる1914年までの間に、ロシア帝国の版図から二百万人以上のユダヤ教徒が米国に、二十万人が英国に、六万人がパレスチナに移住した——と見積もられている。¹¹

6 ユダヤ民族主義の形成

贖罪の羊 政治的シオン主義の唱道者・ヘルツルは1860年、オーストリア・ハンガリー帝国のビューダダペストで生まれた。父親は衣料関係の商売を営み、家庭内に宗教的雰囲気をもていたものの、生活様式はハプスブルク王朝支配下の社会にすっかり同化していた。¹² 息子はウィーンで法律を学び、法曹協会の一員となるが、法律家よりも文筆家の道を進む。彼はベルリーンの新聞に寄稿してジャーナリストとして認められ、やがてウィーンの有権紙『新自由新聞』に勤務した。

半世紀後、ユダヤ国家の父と仰がれる人物は、文化的にも言語的にもドイツ圏の知的環境で育ち、その出自をほとんど意識していなかった。ロシアからユダヤ教徒の窮状が伝えられても、職業意識を鋭敏に働かせることはない。その頃のヘルツルは随筆や旅行記で一定の評価を得ていたが、内心では劇作家として文名を高めようと野心満々だった。

ところが、1891年、パリ駐在の特派員に任命されると、思いがけず人生の転機に遭遇する。当時のヘルツルは三十歳の初めで、欧州大陸の政治と文化の中心地で充実した日々を過ごした。この任地で彼は職業活動を通じ、否応なしに自己の属する少数派共同体の立場に目覚める。

その頃、反セム主義の傾向はユダヤ教徒の解放の最も進んだはずのフランスでも、政界疑獄の追及とからんで勢いを得、さらに大革命以来の共和派と王党派の対立を煽り立てる。とりわけ1894年に起きたドレフュス事件は、あの小冊子の執筆動機となった。それ以来、ヘルツルは劇作家志望の夢を捨てて、みずから始めたユダヤ国家の再興運動に挺身する。

フランス陸軍大尉アルフレド・ドレフュスは、ユダヤ教徒ながら職業軍人として出世街道を歩み、参謀本部に勤務していた。ところが、軍事機密を仮想敵国のドイツに漏洩した容疑から、軍法会議で終身禁固の判決を受けて、大西洋の孤島に島流しとなる。このスパイ事件はでっちあげで、自然主義作家のエミル・ゾラを始め、共和派の知識人や政治家が救援運動に乗り出し、無実の罪をかぶせられた将校の釈放を迫った。しかし、この事件は図らずも啓蒙思想の本家本元で、反セム主義が根強くはびこっている事実を露呈する。大革命からすでに百年以上も経過し、フランスは欧州で最もユダヤ教徒に対する偏見と差別の少ない国のはずだった。その人口は八万程度で比較的少なく、カトリック主流の社会によく同化して、共和国の市民になりきっていた。¹³

ヘルツルはパリの街頭で反ユダヤの示威行進に集まった大群衆を眺め、自身自身の存立基盤の危機を悟る。過去数十年間、欧州の各地で実現したユダヤ教徒の解放は、全くの幻想に過ぎなかった。この新聞記者は冷厳な事実から、直ちに明確な（そして、独善的な）結論を引き出す。ユダヤ教徒がクリスチャン社会に同化しても、決して問題の根本的解決にならない——と。彼はヴィーンに帰任後、やがて中東の歴史を変える小冊子の執筆に没頭する。

実際、十九世紀末の欧州で離散の民は贖罪の羊となり、あらゆる社会的、経済的矛盾がユダヤ教徒の陰謀のせいにされた。教会は敬神の念が薄れたことに、資本家は労働運動が激化したことに、労働者は搾取がひどくなったことに、商店主は商売が振るわぬことに、職人は仕事が奪われたことに、それぞれ共通の元凶を見出す。反セム主義は社会の上層から下層まで広範な支持を得て、欧州の東西を問わず至る所で荒れ狂った。改宗でクリスチャンとなった者でさえ、いつまでも烙印は消えず、疑いの眼で見られる。

同化を 「この小冊子で著者が展開した所論は、非常に古いものであ
否 定 る。それはユダヤ国家の再興に他ならない」¹⁴

ヘルツルは精魂こめて書き上げた著作の序文で、このように述べている。彼の所論に従えば、ユダヤ問題は宗教や社会問題の域を超えて、民族問題として把握されねばならない。これは世界的な規模の政治問題となつてこそ、初めて解決され得る。すなわち、世界の文明国が国際会議で議論して、この難問は解答を見出すことができよう——と。

当時の欧州では大国の統治の下で呻吟していた諸民族の間で、民族主義の機運が高まっていた。ポウランド人、エスタウニア人、チェク人、サービア人など、さまざまな少数民族が、帝国の支配民族の首枷を脱し、自らの言語、文化、主権、領土を求める。この時代の風潮に影響されて、ヘルツルもユダヤ教徒をキリスト教社会の宗教的少数派と見做さず、帝国の圧政から解放を求める被圧迫民族と同様に考える。「われわれは一つの民族——国民である」と、彼は断言してはばからない。¹⁵

そこでヘルツルは具体的な計画を提言した。まず地球上のどこかにユダヤ教徒の安住の地を取得し、列国から主権の承認を取り付ける。新しい約束の地はパレスチナに限らず、アージュンティーナでもよい。欧州で迫害された民は新天地めざして直に出発する訳ではなく、数十年の歳月をかけて漸進的かつ継続的に移住する。まず貧窮のどん底で苦しむ者が、真先に移住して土地を耕す。多少ましな階層——高等教育の門戸開放で社会に大量に送り出された小知識層——が、その後にくだらう。ただし、この移住は完全に自由意志に基き、厭な者は欧州に残留すればよい——と。

ヘルツルの所論は反響を呼び起こし、ユダヤ教徒の間で論議的となった。その所説が反セム主義者に絶好の口実を与え、長い苦難の歳月の末に、営々と築き上げた同胞の社会的基盤を根底から掘り崩しかねないからである。

彼は離散の民の末裔の苦境を述べているが、他のユダヤ論客のように反セム主義そのものを論駁しなかった。むしろ人心に深く根差した反ユダヤ感情を前提とした上で、差別と迫害から免れる緊急避難策として、新しい〈出エジプト〉を提議する。ヘルツルはジャーナリストらしい行動力で、自分の理想を実行に移そうと粉骨砕身した。そのためには、私財を注ぎ込み、家族を犠牲にし、挙句の果てには命まで縮める。

国際会議 ヘルツルは警醒の書を出版する前に、二人のユダヤ慈善家を開催 事業家——モーリツ・フォン＝ヒルシュとエドモン・ド＝ロッチルド——に会って協力を求めた。前者はロシアから脱出した同胞に救いの手を差し延べ、みずからユダヤ植民協会を設立して、南米のアージャンティーナに開設の農園に送り込む。後者はドイツのロートシルト家の分家の当主でフランスに住み、パレスチナで農園を経営して東欧から移住のユダヤ農民に働き場所を提供する。だが、二人の億万長者はいずれも歓迎せざる客を冷たくあしらい、その言に耳を傾けようとはしなかった。¹⁶

両者の態度が示す通り、概して富裕なユダヤ教徒ほど政治的シオン主義に警戒心を抱く。ヘルツルの主張は、同化を正面から否定している。このような提言は、同じ信仰の同胞の平穏な生活に波紋を投げかけ、ユダヤ教徒はキリスト教国家にとって獅子身中の虫という非難の裏付けとなる。

一方、ヘルツルも金満家の同胞を見限り、自力で運動体の結成に踏み切った。熱情溢れる青年層から支持を取り付ければ、いかなる障害も乗り越えられよう——と。それ以来、彼は国際的団体の設立に奔走し、欧州の各地に支部の網を張りめぐらす。

ヘルツルの言動は、年来の友人知己からも批判された。しかし、彼はさまざま反対や妨害を押し切り、1897年 8月29日、約二百人の代表をスイスのバーザルに集め、第一回世界シオン主義会議を開催した。あの小冊子の刊行から、わずか一年半後のことである。ヘルツルは世紀末の預言者として、大会の基調演説で熱弁をふるう。「ここに参集する者は、ユダヤ民族が難を避ける建物の礎石を置いた」と。

この会議は一握りの陰謀者が官憲の目をかすめて開く地下の秘密集会ではなく、全世界に向けて公然と運動の方向を宣言した。政治的シオン主義の目的は、ユダヤの民のために国際法で保証された故地をパレスチナに創設することである——と。ヘルツルはもはや一介のジャーナリストにとどまらず、あたかも未

来の国家元首のように振る舞い、この小さな国際機構を率いて目標貫徹に猪突猛進する。

政治的シオン主義の唱道者は新聞記者時代に培った人脈を利用し、持ち前の雄弁と強固な意志力で理論を実践に移そうとした。彼は書き上げたばかりの台本を手にも、国際政治の舞台上で自作自演する。主役はヘルツル自身で、相手は大国の皇帝、国王である。彼は政府を代表する貴族出身の外交官でもなく、単なる民間団体の代表者に過ぎなかったが、列国の宮廷を巡って個人外交を展開した。だが、事態は脚本のようにうまく運ばなかった。

聖地に移住を認めず 手初めにヘルツルはイスタンブールに赴き、トルコ皇帝に拝謁を願い出て、パレスチナに移住の許可を得ようと試みる。当時、オスマン帝国の政府は〈壮麗の門〉と呼ばれていたが、突然の申し出に扉を堅く閉ざすだけだった。

そこで彼は目標をベルリンに転じ、再興ユダヤ国家がトルコの宗主権の下でドイツの保護国となるよう望んだ。彼自身は同化ユダヤ教徒としてヘブライ語を知らず、ドイツ語を母国語として話すだけに、プロシアのホーアンツォラルン家に期待と親近感を抱く。この王朝の下でドイツは国家統一を達成し、急速に世界の強国にのしあがった。そして欧州大陸の新興国として、トルコと友好関係を樹立する。¹⁷

1898年秋、皇帝ヴィルヘルム二世がエルサレムを訪問した機会に、ヘルツルは後を追って聖都に向かう。現地のユダヤ教徒はトルコ官憲を恐れて、シオン主義運動の立役者を敬遠した。

しかも接見は失望に終わる。皇帝は何の言質も与えず、ただ一層の調査が必要と答えただけだった。イスタンブール駐在のドイツ大使、ベルリンの外務省高官も、トルコ側の反対を見越して、ヘルツルの唐突な申し入れに乗り気ではなかった。¹⁸

最初の目論見は、実を結ばなかった。だが、ヘルツルはあきらめずに個人外交を続行する。彼はあちこちに賄賂をばらまいた末に、1901年6月、ようやくイスタンブールでオスマン帝国の皇帝アブダルハミード二世に会見できた。先祖のスルターンはかつてヴィーンを包囲し、強大な軍事力で欧州のキリスト教世界を脅かしたが、その子孫は旧敵からの巨額の借金で、ほとんど破産状態に陥っていた。そこで海の物とも山の物とも知れぬユダヤ団体の代表に会い、外債の肩代わりという奇妙な申し出を聞いてみる。

ヘルツルは世界中の富裕なユダヤ資産家から出資を得て、老大国の近代化に貢献できると大風呂敷をひろげた。かわりにトルコ側は聖地移住に許可を与え、各種の開発事業を認可する。この提案に皇帝は直接答えず、イスラーム世界に

おける聖俗の最高権力者にふさわしい威厳をもって、帝国の領土内に〈経典の民〉が避難してくれば、将来にわたって保護すると述べた。

念願の会見が実現した後、ヘルツルはトルコ当局者と具体的な交渉を始める。だが、その要求はユダヤ側で三千万英ポンドを調達し、対外負債の返済に充当するという法外なものだった。彼は同胞の金融資本家と決裂しただけに、これほどの巨費を工面できる当ては全くない。しかも見返り条件とは、パレスチナ以外のトルコ各地にユダヤ教徒を分散して受け入れるというもので、シオン主義運動の望む大量集団移住ではなかった。これではユダヤ国家の再興どころか、ユダヤ教徒の移民はイスラーム帝国の臣民とならねばならない。

その後、二度もヘルツルはイスタンブールに呼ばれ、話し合いを続行する。だが、トルコ側は並行して欧州の銀行団と交渉を進めていた。ヘルツルの提案は駆け引き材料としてに利用されるだけで、皇帝はどんなに金に困っても聖地を〈売り渡す〉ことまでしなかった。結局、ヘルツルはトルコ・ユダヤ共同拓殖協会の免許状を入手できず、パレスチナに集団移住の構想を断念するしかなかった。¹⁹

入国制限の代償に ヘルツルはドイツ、トルコとの交渉に失敗し、今度は英国に目を転ずる。ユダヤ教徒の安住の地は、欧州の強国の庇護下に置かれなければならない。大国の後押しがあってこそ、頑迷なトルコもユダヤ移民をパレスチナに受け入れるだろう。1900年、世界シオン主義会議は初めて欧州大陸を離れて、第四回大会を英京のランダンで開いた。この世界最大の植民地帝国なら、移住問題に理解を示すだろう。

それまで英国は非クリスチャンの少数派に対して相対的に寛容で、ユダヤ教徒も社会環境によく同化していた。ところが、過去十数年にわたって東欧からユダヤ難民が流入を続け、ランダンの貧民街に住み着く。その存在は低賃金労働者の供給源となり、社会的摩擦を引き起こすに至った。当時の首相アーサー・ジェイムズ・バルファはユダヤ移民の締め出しを真剣に検討し、そのために審議会を設置した。英国のシオン主義者は政府に働きかけ、ヘルツルを公聴会の席に参考人として招くのに成功する。

この審議会の一員に、英国ロスチャイルド家の当主ナサニャル・マイアがいた。彼はシオン主義に反対で、パレスチナに集団移住の計画など頭から斥け、ヘルツルの出席に消極的態度を示す。このユダヤ銀行家は信じた。ドレフュス事件で揺れたフランスとは違い、ドウヴァ海峡のこちら側には反セム主義など存在しない――と。政治的シオン主義の代表が公聴会で持論を展開すれば、ユダヤ教徒は英国社会に同化できぬ異分子であることを立証し、入国制限の法律制定につながる――と、彼は心配したからである。

しかし、この機会を逃さずにヘルツルはロスチャイルド一族に会い、熱心に自説を吹き込む。彼はかつてパリの分家にシオン主義の理想を説くのに失敗してから、この億万長者の一族に悪感情を抱く。だが、英国政府の支持を得るにしても、この有名な国際金融資本の了解なしには何もできない。ヘルツルはロスチャイルドの好まぬパレスチナ案を引っ込めて、代わりにサイプラス島とシナイ半島の抱き合わせ案を作成し、英国政府に持ち込んだ。

植民地省と外務省はヘルツルに好意的態度を示し、この代案を真剣に検討する。外国人取り締まり法の制定で東欧のユダヤ難民を締め出すためにも、どこかに受け皿を用意しなければ、英国内の世論が承知しない。二十世紀に入ってから、ロシアのラマナフ王朝はますます末期的症状に陥り、新たなユダヤ教徒の迫害が始まった。

だが、東地中海の孤島に離散の民の末裔を送り込めば、英領になって日が浅い島の戦略的価値を危うくするだろう。住民はキリスト教徒のギリシャ人とイスラーム教徒のトルコ人で、ここにユダヤ教徒が割り込めば、三つ巴の紛争は避けられまい。

ナイル河の分水計画 英国政府はユダヤ教徒の入植地として、シナイ半島のエル＝アリシュに賛意を表した。ここはガザの西南約八十キロの海辺の町で、濁れ川の河口に位置する。『旧約聖書』の記述によると、神は「エジプトの河から大河のユーフラテスまで」の地をアブラハムの子々孫々に与えると約束した。エジプトの河とはナイルの流れではなく、この砂漠の水無し川だという。

シナイ半島はパレスチナに隣接し、モーセがイスラエルの民を率いて四十年もさまよった荒野である。トルコの反対で聖地へ移住できないからには、ここは次善の候補地となろう。ただし、シナイ入植計画はランダンの一存では決まらず、カーヒラの承認を取り付けねばならない。

1517年、マムルーク王朝が滅亡して以来、エジプトはオスマン帝国領となった。しかし、十九世紀の前半、アルバニア出身のトルコ武将メフメト（ムハンマド）・アリーが四十年以上もナイル河の三角洲に覇を唱えると、エジプトの歴代の太守はイスタンブールの束縛から脱し、事実上の独立を獲得した。だが、近代エジプトの創始者の子孫はトルコの宗主と同様に外国から借金を重ね、返済不能の状態に陥り、欧州諸国の干渉を受ける羽目となった。1882年、英駐屯軍は内乱に軍事介入して、とうとう全土を占領する。それ以来、エジプトの真の支配者は、英国人となった。²⁰

今度もヘルツルの意図は挫折した。砂漠の乾燥地を開墾するためには、ナイル河から灌漑用水を引かねばならない。エジプト政府は専門家の調査報告に基

き、この分水案を却下した。その計算によれば、入植計画が成功するには、当初の見積もりより約五倍の水を必要としたからである。

そこで1903年、英国政府はシナイ半島に代わって、アフリカ中東部のユーガンダを持ち出した。新たな候補地は内陸の高地に位置し、高温多湿の海岸地方に比べれば、気候風土はまずまずで、欧州人の入植地に適している。政治的シオン主義運動は発足から六年目を迎えながら、ヘルツルの努力にもかかわらず、一片の土地も確保できなかった。歳月が空しく過ぎ去る間に、東欧のユダヤ教徒の窮状は、絶望的に悪化している。さしあたり、緊急の避難場所は、この奥地以外にあるまい。

分裂の危 機に直面 英国政府の意向がバーザルで開催の第六回世界シオン主義会議に伝えられると、賛否両論の嵐を巻き起こした。ある者は手放して喜ぶ。ついに大国が故国回復運動を承認し、援助の手を差し延べた——と。ある者は逆に憤激の意を表明する。ユーガンダは絶対にシオンの地とはなり得ない——と。東アフリカの代替案をめぐる議論が沸騰し、大会は大荒れに荒れた。執行部はユーガンダ入植計画の賛否を問わず、現地に調査団の派遣を求める決議で、事態の収拾を図る。大会は賛成二百九十五、反対百七十八、棄権百で原案を採択し、どうにか分裂を回避できた。²¹

この大会で政治的シオン主義は歴史的転換点にさしかかり、同時に深刻な内部矛盾を露呈する。六年前に同じバーザルで第一回大会を開催して以来、この運動体には基本路線をめぐる、二つの潮流——ドイツ、フランスなどの中・西欧派とロシア、ルーメイニアなどの東欧派——が対立した。両者の立場の相違は、それぞれの地域でユダヤ教徒の置かれた社会的環境の差に由来する。

反セム主義は時代の風潮として欧州全域にひろがったが、東と西では様相を異にしていた。西側社会では離散の民の末裔に対する偏見や蔑視が相変わらず残っていても、ユダヤ教徒はそれぞれの国民として市民的権利を享受する。仮に政治的シオン主義運動の夢が現実となっても、同化ユダヤ教徒が現在の生活と社会的地位をなげうって、自然環境の厳しいパレスチナへ移住するかどうか、極めて疑問視された。²²

極言すれば、中・西欧派にとって、ユダヤ国家を再興する場所は、迫害のない地ならどこでもよい。実際、シオン主義運動の聖典となった小冊子で、ヘルツルは移住先として必ずしもパレスチナだけにこだわらないで、候補地として南米のアージャンティーナを挙げている。だが、第一回大会で採択された宣言は、東欧派の強い要望を反映して、パレスチナにユダヤ教徒の故国創設をうたいあげた。

実際、迫害が激しければ激しいほど、反射的にシオンの地へ憧憬の念は強ま

る。東欧からヘルツルの運動に参加した者は、多くが社会主義者であり、あるいは革命家であった。その急進性は指定居留地における積年の抑圧と窮乏から、そして厳格なユダヤ教正統派の宗教的風土から生まれた。国外脱出は迫害から逃れる唯一の解決策であり、移住者が安住の地を求めるなら、それはシオンの地・パレスチナでなければならない——と。

ヘルツルの死 欧で概して冷たくあしらわれたのと対照的に、東欧では救世主のように迎えられる。彼自身は貴族趣味の自由主義者であり、当時の欧州にひろまった社会主義的傾向とは無縁で、性急な革命よりも漸進的改革をめざした。だが、彼の雄弁と行動力は社会主義者の間からも信奉者を引き付け、絶望的窮状にあえぐ多数の被抑圧民に一縷の希望を与える。

しかし、ユダヤ国家再興運動がようやく軌道に乗ると、このカリスマ的人物も東欧派の批判を免れない。ヘルツルはユーガンダ問題で、出席者から面と向かって裏切り者と罵られる。もともと世界シオン主義会議はさまざまな傾向の分子の集まりで、決して一枚岩の組織ではなかった。東欧派は幾つもの派閥に分かれ、舞台裏の工作を繰りひろげる。大会の終了後、ロシア出身の一部の代表は帰国してから分派的行動を起こし、政治的シオン主義運動の開祖に事実上の退陣勧告を突き付けるほどだった。

1904年 7月 3日、ヘルツルはまだ四十四歳の若さで、心臓発作のため急死した。健康状態の悪化にもかかわらず、その早過ぎる死の数カ月前、彼は最後の力を振り絞ってローマに出かけ、イタリア国王エマニュエレ三世と教皇ピオ十世に会う。

だが、最後の個人外交は何の実も結ばなかった。国王はかつて聖地巡礼に出かけただけに、ある程度まで現地事情を知っていたが、訪問客の議論を真剣に取り合おうとしはなかった。カトリックの首長はシオン主義運動に共感を示さず、相変わらず教会の頑なな態度を示す。

八年前、ヘルツルは徒手空拳で国家再興運動を始め、その目標実現のため文字通り東奔西走する。現代のモーセは虐げられた同胞を反セム主義の時代風潮から救い出そうとしたが、約束の地を確保できぬまま世を去った。しかし、彼の最大の功績は、欧州各国の元首、政府高官、政治家に、ユダヤ教徒の窮状と希求を幾らかでも認識させたことである。

ヘルツルの身命を投げうった努力にもかかわらず、政治的シオン主義運動は英独仏などの先進諸国で、同信者の間にごく少数の支持者しか獲得できなかった。とりわけ同化の進んだ英国では、この運動の同調者のほとんどが東方から流入した難民だった。

一方、支持基盤の固い東欧では、情勢が急速に悪化する。ヘルツルの死と符節を合わせるかのように、ロシアで迫害が再燃した。

文明の前哨基地 ヘルツルはユダヤ国家の再興を論ずるに際して、パレスチナ住民の反応をほとんど考慮に入れなかった。政治的シオン主義の提唱された時代は、欧州の帝国主義列強がアフリカを分割した時期に一致する。このユダヤ民族主義者も時代の子として、白人が強大な軍事力を背景として、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカに植民地を獲得するのに、何の疑問も抱かなかった。彼は例の小冊子『ユダヤ国家論』の中で、次の通り率直に述べている。

…皇帝陛下がパレスチナを下賜されるなら、われわれはお返しにトルコの全財政の立て直しを引き受けできよう。アジアに対するヨーロッパの防壁の一角を、われわれはパレスチナに築き上げねばならない。これこそ野蛮に対抗する文明の前哨基地である。われわれは（ユダヤ国家再興の暁には）中立国としてとどまり、欧州全体と友誼を保たねばならない。われわれの存在を、欧州が保証せねばならぬからである。

1880年代のロシアの大迫害後、ヘルツルの所論より十数年も先立って、少数の先駆者がトルコ政府の許可を得てパレスチナに移住し、沼地や荒野の開墾に励んでいた。この集団は農業の経験を全く持たなかったが、ユダヤ教徒も〈生産的労働〉に従事できると固く信じて、額に汗しながら慣れぬ農作業にいそしむ。ある者は病に倒れて聖地の土に帰り、ある者は絶望のあまりアメリカに渡るか、あるいはロシアへ戻った。しかし、少数の開拓農民は困難を乗り越えて、神の約束の地に再び根をおろす。

ヘルツルは政治的シオン主義の聖典の中で、この種の移民を〈浸透〉と呼び、誤った原則に基くと斥けた。現地住民は移住者の増加に脅威を感じ、トルコ政府に移民の流入停止を働きかけるだろう。だから、ユダヤ教徒が一定の土地に主権を獲得できなければ、移住は徒労に終わるだろう。そこで特定地域の支配者と取り引きして、その地を欧州の大国の保護領とするなら、見返りに負債の肩代わりや道路の建設など巨大な利益を提供できよう。ユダヤ国家の創設は近隣諸国にも好都合である。（現在は荒れるに任せた）土地が耕作されるようになれば、計り知れぬほどの規模で周辺部の価値を高めよう――と。

彼は利に聡いユダヤ商人の家に生まれただけに、勘定尽くでシオンを論ずる。だが、現地の反撥について、その見通しは誤っていなかった。すでに1891年、エルサレム在住のアラブ人有力者たちは異教徒の急増に不安を感じ、五百人の

署名を集めてイスタンブールの壮麗の門にロシア移民の禁止を陳情する。1893年と1901年、トルコ政府は入国制限令を布告した。もっとも、綱紀の緩んだオスマン帝国の統治下、禁令は汚職役人の買収で容易に骨抜きできた。

ヘルツルの死の翌年の1905年、世界シオン主義会議は第七回大会を前回と同じバーザルで開き、ユーガンダ入植案を最終的に葬り去る。ユダヤ国家再興運動は〈アフリカのシオン〉をめぐる対立から大揺れに揺れたが、やはりヘルツルあってこそその組織だった。卓越した指導者を失って、会議は将来への展望を欠く。政治的シオン主義が息を吹き返すには、十年後の欧州大動乱を待たねばならなかった。

7 バルフア宣言

民族的故地の樹立 一枚の紙片が中東地域の歴史を変え、数世代にわたってユダヤ、アラブ双方の命運に重大な影響を及ぼす。第一次世界大戦もたけなわの1917年11月 2日、英国のロイド＝ジョージ内閣は国策として政治的シオン主義に肩入れするよう閣議で了解し、バルファ外相の名で次の書簡を在英ユダヤ社会の大御所ロスチャイルド卿宛てに送った。

…陛下の政府はユダヤの民のために民族的故地をパレスチナに樹立するのに賛同し、この目的実現を促進するために最善の努力を払うものとする。しかしながら、次の点は明確に了解されなければならない。すなわち、パレスチナに現存する非ユダヤ共同体の公民的、宗教的諸利を侵害し、あるいは他のいかなる国においても、ユダヤ教徒が享受している諸権利ならびに政治的地位を侵害する恐れのあることは一切してはならない。²³

ヘルツルの死から数えて十数年、ここに政治的シオン主義運動は欧州の大国から認知された。この対ユダヤ政策はバルファ宣言として知られ、やがて聖地を騒乱の淵に投げ込む。当時のパレスチナはオスマン帝国の領土で、英国の主権の及ぶ土地ではなかった。もちろん、住民は事前の相談を受けることなく、遠い外国の首都でなされた政治的決定について知る由もない。ただ英国の遠征軍がエルサレムをめざして進撃中だったので、支配者の交替は現地住民の間で予感された。

1914年 8月、オーストリア皇太子フランツ・フェルディナンドの暗殺事件が発火点となり、戦火はたちまち欧州全域に燃えひろがった。同年10月末、トルコも独逸の同盟国陣営に加わり、英仏露の連合国に宣戦を布告する。その結果、中東のパレスチナも、欧州大戦の戦場の一部となった。トルコの駐屯軍がシナイ半島の砂漠を越えてスエズ運河に迫ると、エジプトに駐屯の英軍は欧亜の連絡水路のスエズ運河を守るため、必死になって反撃した。²⁴

欧州の大動乱は、ユダヤ国家再興運動にも深刻な影響を及ぼす。大戦の勃発当時、世界シオン主義会議は本拠をベルリンに置き、細々ながら活動を続けていた。その執行部の顔触れは、三人がロシア人、二人がドイツ人、一人がオーストリア人（ロシアから帰化したばかりだった）で、敵対陣営に二分された。

政治的シオン主義は分裂回避のために中立を標榜したが、事実上、活動停止の状態に追い込まれる。

しかし、傘下の組織は参戦諸国を襲った熱狂的愛国主義の虜となって、それぞれの政府を支持した。その傾向はとりわけ独逸両国で著しく、同化ユダヤ教徒がいかにか〈祖国〉に忠誠を誓っているか、兵役志願の具体的行動で証明する。ヤハウエの信徒は信じた。この戦争に勝てば、ロシア皇帝の専制支配下で苦しむ東欧の同胞を解放できるだろう。そのためにも英仏露の連合軍を撃ち破らなければならない——と。

実際、戦争の開始と共に、新たな迫害がロシア帝国で始まる。軍部と官憲はユダヤ住民の内通を恐れて、敵国に隣接の指定居留地から数十万人を強制的に立ち退かせた。唯一絶対神の信徒が内心ひそかにロシアの敗北をを待望しても、決して不思議ではない。連合軍側の勝利は反セム主義的圧政を恒久化し、離散の民の末裔をいつまでも隷従的地位にとどめ置きかねない——と、憂慮されたからである。

大戦初期の状況下では、政治的シオン主義運動は中立の原則をよそに、一般にドイツ支持に傾く。トルコ政府は東欧からパレスチナに入植したユダヤ開拓農民をロシアのスパイと疑い、国外追放さえ真剣に考慮する。だが、その出身地の大半が独逸の占領下に入ると、聖地のユダヤ移民はすべて敵の回し者とばかりは極め付けられなくなった。独逸陣営のシオン主義者はパレスチナ在住の同胞を保護するためにも、イスタンブールを味方に取り込んだベルリンの権力者と手を結んだ。

ヴァイツマン しかし、英国内の活動家は同盟国陣営の同志と
の政界工作 は異なり、連合軍側の究極的勝利を信ずる。その代表的人物がハイム・ヴァイツマンで、精力的に政界工作を推進した結果、ついにバルファ宣言を獲得した。

未来のイスラエル初代大統領はロシア出身の化学者で、ユダヤ教徒に高等教育の機会をほとんど奪った差別的制度のため、ドイツとスイスに留学する。彼は学業を終えた後、生まれ故郷に帰らなかった。英国に移住してマンチスタ大学で研究生生活を送り、爆薬の原料製造工程の改善に実績を挙げ、軍需産業に大いに貢献した。彼は若い頃から政治的シオン主義運動に加わり、例のユーガンダ入植案をめぐる論争で、ヘルツルに抵抗した一人だった。

バルファとヴァイツマンの出会いは、〈アフリカのシオン〉にからむ思惑から始まる。この政治家は反セム主義の批判者を自任していたが、首相在任中には不本意ながら東欧系ユダヤ難民の入国を締め出す法律の制定に尽力せねばならなかった。

1906年、バルファは首相を辞任して総選挙に臨み、選挙運動の忙しい日程を割いて、このシオン主義活動家の学者と会い、ユーガンダ案に反対した理由をたずねる。この機会を逃さず、ヴァイツマンはバルファに政治的シオン主義の教義を吹き込み、移住先としてパレスチナ以外の土地は論外と説明した。²⁵ 将来、この個人的関係は、大いに役立つ。

ヴァイツマンの政界工作は、ベルリートの本部で決定した中立原則から明らかに逸脱していた。しかし、彼は執行部の一員でなかったため、この方針を無視して個人的活動に打ち込む。手初めにマンチスタ大学の人脈を利用して政界有力者に近づき、パレスチナの戦略的重要性を熱心に説いて回った。

彼は政治家を相手にひたむきに語る。欧州大戦が連合国側の勝利に終われば、当然、オスマン帝国は解体されよう。トルコ領の中東地域は英本国と植民地インドとの間に横たわり、大英帝国の生命線を押さえている。その一角に親英ユダヤ国家が設立されれば、スエズ運河の防壁となるだろう——と。

この政治的シオン主義の使徒は話術に巧みで、相手が信心深いクリスチャンならば、話題を政治と軍事の問題から宗教に転じた。千八百年前、ローマの圧政のためパレスチナから散り散りになったイスラエルの民の末裔が、異郷で筆舌に尽くせぬ辛酸を嘗めた末に、いま祖先の地へ戻ろうとしている。それには英国の後押しが是非とも必要だ——と。

彼の説得工作の対象になった政界有力者は十九世紀の教育を受け、幼い頃から聖書の物語に親しんでいたため、ヴァイツマンの熱弁に一も二もなく感動する。ヘルツルが欧州各国の皇帝や国王から支援を得るために東奔西走したように、ヴァイツマンは英国各界の要人の理解を求めて、実に二千人と面談した。その努力が効を奏して、国際シオン主義運動は政治家の間だけでなく、外務省や植民地省の高官の間にも支持者を次第に獲得した。

閣議に覚書を提出 ヴァイツマンはアスクウィス内閣のデイヴィッド・ロイドジョージ蔵相に会見を求める。だが、この自由党の実力者大臣は多忙を極め、代わりに地方自治相でユダヤ教徒のハーバート・サミュアルに会うよう勧めた。せっかくの紹介だったが、ヴァイツマンは鹽回しの面会にあまり乗り気でなかった。英国のユダヤ共同体の有力指導者はロスチャイルドに代表される通り、一般に政治的シオン主義に好意を抱いていなかったからである。

渋々ながらの会談は、予想外の結果を産む。ヴァイツマンはサミュアルから最大の好意で迎えられたばかりか、もっと大きな要求を出すよう逆に激励された。このユダヤ教徒の政治家はシオン主義運動の要望事項——大戦の勝利後、パレスチナを英国の保護領とする——を自ら長文の覚書にまとめ、閣議に提出

する。だが、問題がトルコ領の分割にかかわるだけに、戦時下の盟邦フランスとの外交関係を顧慮して、この提案はすぐに受け入れられなかった。

実際、閣内でサミュアルの支持者はロイド＝ジョージだけで、首相のハーバート・ヘンリ・アスクウィスは何の関心も示さなかった。政治的シオン主義の目標は白日夢に過ぎず、大英帝国に不必要なばかりか、むしろ好ましくない重荷を背負わせると判断したからである。有力閣僚のエドウィン・モンタギューはユダヤ教徒だったが、強硬な反対意見の持ち主で、シオン主義者はドイツ帝国主義の手先に他ならず、利敵行為者と決めつけるほどだった。

1916年の暮れ、アスクウィスはアイルランドの騒乱事件や戦争指導態勢をめぐる閣内対立から辞任し、ロイド＝ジョージが首班となる。この政権交替は閣内の雰囲気を一変し、やがて事態をヴァイツマンに有利に運んだ。親シオン主義者のサミュアルは閣外に去ったが、ロウレンス・モンタギューも閣僚から外された。バルフォアは海軍大臣から横すべりして、新内閣で外務を担当する。折りしも中東の戦線で、軍事情勢は新たな展開を示す。アスクウィスの退陣と符節を合わせるように、英軍はシナイ半島を占領し、翌年春の攻勢でパレスチナ西南端のガザ地帯に兵を進める。しかし、ガザの町そのものの攻略には失敗して、しばらく進撃を停止せねばならなかった。

1917年 5月、ロイド＝ジョージ内閣は大英帝国の安全保障を長期的視野から考慮するなら、トルコ領のメソポタミアとパレスチナ、ドイツ領の東アフリカを保有せねばならぬとの見解に達した。聖地が帝国防衛に不可欠の一環として取り上げられて、英国のシオン主義者は活気づき、宣伝工作を強化する。

宣言の草案を作成 いまや流れは変わった。政治的シオン主義は英国の政官界に深い影響を及ぼし、外交政策を左右する。パレスチナは大英帝国の安全保障に必要なばかりか、連合側側の勝利の前提条件ともいふべき意味合いを帯びるに至った。ヴァイツマンは警告を発する。英国が早く公式に態度を明らかにしなければ、ドイツのシオン主義者が先手を打って、トルコからパレスチナを獲得するだろう。このような事態に至れば、ロシアとアメリカ在住のユダヤ教徒に大きな心理的打撃を与え、戦局に不利に響くかも知れない――と。

実際、ロシアは相次ぐ軍事的敗北と国内の不穏な情勢で、戦争から脱落する一歩手前だった。パレスチナが英国を筆頭とする連合側側の手中に確保されるなら、ロシア国内のシオン主義者は勇気づけられて、対独単独講和の動きを封じることができよう。一方、アメリカ合衆国は1917年 4月、ようやく英仏露の陣営に加わった。しかし、米国のユダヤ教徒は東欧系が多いだけに、あの大迫害の記憶はまだ薄らいでいない。

米国の参戦は帝政ロシアに挺入れすることになり、ユダヤ系米国市民の間で不評を買う。大統領のウ드로ウ・ウィルソンが戦時公債の引き受けを要請した時、ユダヤ銀行家の反応は消極的だった。だが、英仏の連合軍は欧州の西部戦線で死力を尽くしているだけに、大西洋の向こう岸からの援軍到来で大いに励まされる。その上、アメリカのユダヤ教徒の積極的協力が得られるならば、心強い限りに違いない。

十九世紀の末以降、離散の民の末裔は新大陸に根を下ろして、金融、実業、言論の分野に大勢力を築き上げている。大戦の勃発以来、この国でも政治的シオン主義運動の支持者が急増した。米国内の支持を視界に入れて、在英のシオン主義者は政治工作を進める。もし、英国政府がパレスチナに関して何らかの言質を与えれば、米国内の世論に好影響を及ぼし、ひいてはアメリカの国力を勝利に向けて動員できるだろう——と。²⁶

バルファはアスクウィス内閣の海相時代にヴァイツマンと会い、因縁の個人的関係を復活した。当時、このシオン主義活動家の化学者は海軍省の技術顧問を務めていたので、海軍大臣は官僚組織の中で上司に当たる。1917年7月、すでに外相に転じたバルファはパレスチナに関する公式政策の表明を準備し、政治的シオン主義運動側の望むような宣言草案の提示を求めた。ヴァイツマンの政界工作はついに実を結ぶ。

難航の閣議決定 ロスチャイルド家はかつてヘルツルに冷淡だったが、時流の変化を敏感に悟って宗旨がえし、英国シオン主義連合の会長の座に収まっていた。最初の原案はロスチャイルドの名でロイド＝ジョージ内閣に提出され、「パレスチナをユダヤの民の民族的故地として承認する原則」²⁷を盛り込む。首相と外相の支持を得て、この草案は問題なく閣議で了承されるはずだった。

ところが、折りも折り、ユダヤ教徒でありながら、熱烈な反シオン主義者のモンタギューが、内閣改造で閣僚に返り咲く。彼の猛烈な反対で、議論はまとまらなかった。枢密院議長として閣内で第二の地位を占めるジョージ・ナサニヤル・カーズンも、この宣言案に大きな疑問を投げかける。不毛の地のパレスチナは、大規模なユダヤ移民を吸収できるか？ 現地のアラブ人をどうするつもりか？ カーズンはかつてインド総督を務めただけに、植民地経営の観点から民族主義的反撥を憂慮した。

バルファは閣内の慎重論に反撃して、最後の切り札を持ち出す。ドイツ政府は国内のシオン主義者の歓心を買うのに、いま全力を尽くしている。その試みが成功すれば、全世界のユダヤ教徒の大多数は敵陣営に味方するだろう。とりわけアメリカのユダヤ系市民は、心情的にドイツに傾いている——と。

閣議は何度も決定を延ばした末に、1917年10月31日、バルファ宣言の文案を承認した。それは11月 2日の日付で、ロスチャイルドに伝達される。しかし、その内容は原案とはかなり異なった。民族的故地とパレスチナの関係は、慎重な言い回しで和らげられた。その樹立について英国は最大限の努力を惜しまぬが、文面上は何の具体的な義務を負わない。しかも、人口の九割に及ぶ現地のアラブ住民を〈非ユダヤ〉という奇妙な表現で片付けながらも、その権利を侵害してはならぬと釘を刺す。

バーザルで開催された世界シオン主義会議の第一回大会から数えて丁度二十年、ユダヤ国家再興運動は欧州の大国から承認され、ここに新時代を迎える。しかし、バルファ宣言のいう〈民族的故地〉は、そのまま主権国家を意味する訳ではない。ヘルツルの夢が実現するまでには、さらに三十年の歳月を要する。その間、パレスチナは争乱の地と化し、乳と蜜の代わりに血と涙が流れた。

〈第二部の註と参考文献〉

1 この時期の反セム主義の性格について、論者によって見解が分かれている。欧州のキリスト教社会におけるユダヤ嫌いの風潮は、イエスを磔刑に処した責任を問う宗教的感情、社会の少数派に対する警戒心から生じた人種差別的偏見に基いていたが、十九世紀の末には経済的理由が大きくなった。〔G. P. Gooch, A History of Our Time, 1885-1914 (Oxford: Oxford University Press, Reprinted by Maruzen, Tokyo, 1960年)、170頁〕

それまで蔑視された被差別民が経済的実力を付け、特に一部の者が巨万の富を積んだため、社会の貧しい多数派から羨望と反感を買ったからである。

反セム主義の盛衰と景気の変動には、一連の相関関係を見出すことができよう。経済危機の時代、反ユダヤ主義は勢いを得る。興隆期の資本主義体制が社会の旧秩序を揺さぶると、自由競争の脱落者は張本人を手近な所に求めた。一部のユダヤ商人や金融業者が買い占めや投機に走り、不利益をこうむった階層に憎しみと恨みを植え付ける。だが、世間全般にみなぎる反ユダヤの気風は、経済的理由からだけでは説明できず、根底に人種主義的衝動を秘めている。

とりわけドイツでは、ユダヤ嫌いの風潮が宗教的反セム主義から人種的反セム主義に転換した。〔Walter Laqueur, A History of Zionism (New York: Schocken Books, 1976年)、29頁〕

後に、これはユダヤ〈劣等民族〉の抹殺を意図する人種差別主義に発展し、ヒトラル支配下の欧州各地で猛威を振るう。

2 ヘルツルの著作について、本稿では次の資料集の英文抄訳を参考にした。〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), The Israel-Arab Reader: A Documentary History of the Middle East Conflict, Revised and updated (Harmondsworth: Penguin Books, 1985年)、6~11頁〕 引用はすべて同書から訳した。

3 212年、カラカラ帝はユダヤ教徒にもローマ市民権を付与したが、417年にはコンスタンティヌス帝、423年にはテオドシウス帝によって、その権利を縮小された。さらに六世紀には、ユスティニアヌス帝も同様の措置を取っている。〔Hermann Kinder and Werner Hilgemann, The Penguin Atlas of World History: Vol. 1 (Harmondsworth: Penguin Books, 1979年)、155頁〕

4 ユダヤ教徒は過ぎ越しの祭日（エジプトのパロ〔ファラオ〕がイスラエルの民の集団出国を認めぬため、ヤハウエはすべての家の長男を殺した。ただし、唯一神は信徒の住む家の前を通り過ぎた——との故事にちなむ）に酵母を入れぬパンを焼く。中世以来、ユダヤ教徒は過ぎ越しの儀式にキリスト教徒の子供を殺し、その血をパンに混ぜている——と、根拠のない非難を浴びた。

1144年、この儀式殺人の最初の犠牲者になったと伝えられる少年は、ローマ・カトリック教会によって、聖人かつ殉教者として正式に認定されて、今日もなお尊崇を集めている。

〔Peter Calvocoressi and Guy Wint, Total War: Causes and Courses of the Second World War (Harmondsworth: Penguin Books, 1974年)、236頁〕

5 ガリチア地方の領主はユダヤ教徒の移住者に土地所有を許し、十四世紀の半ばに一定の自治を認めた。〔Martin Gilbert, Jewish History Atlas, Third edition (London: Weidenfeld and Nicolson, 1985年)、33頁〕

6 金融の支配力や大銀行に対する非難攻撃は、勃興期の資本主義社会で特に目立つ存在のユダヤ教徒に容易に矛先を転じた。同時に、地方の零細な金貸し業も贖罪の羊に仕立てられて、借金返済に苦しむ農民や地主の憎悪を一身に集めた。〔James Joll, Europe Since 1870: An International History (Harmondsworth: Penguin Books, 1983年)、106頁〕

7 フランス軍は占領地にナポレオン法典を布告し、ユダヤ教徒にも法の前の平等の原則を適用した。

ヴェネチアでは1797年に、マインツでは1798年に、ローマでは1810年に、フランクフルトでは1811年に、それぞれユダヤ教徒の特定居住区(ゲットウ)が解放されたが、1815年のナポレオンの失脚後、旧態に復した。〔Martin Gilbert, 前掲書、58頁〕

8 1850年から1860年にかけて、ドイツ、オーストリア、イタリ、それにスカンディネヴィア諸国で、ユダヤ教徒は完全な市民的平等を獲得した。英国では1858年に最初のユダヤ系下院議員が選出され、1870年に最初のユダヤ学生が大学に進学した。

ドイツで高等教育の門戸が開放されたことにより、ユダヤ教徒の子弟は百人のうち二十六人が大学進学課程のギムナジウムで学んだ。しかし、キリス教徒の子弟は百人のうち僅か三人に過ぎなかった。その結果、第一次世界大戦前のプロシアで、弁護士は四人に一人、医師は六人に一人をユダヤ教徒が占めた。〔Walter Laqueur, 前掲書、26頁〕

9 十八世紀、ロシア帝国がポウランドを併合して国境を西へ押し広げると、領土内に三百万のユダヤ人口を擁することになった。女帝エカチェリーナ二世は黒海からバルト海に至る地域を指定居留地と定め、そこにユダヤ教徒を囲いこむ。この領域は歴代の皇帝の気まぐれな方針次第で、拡大あるいは縮小した。1880年代にはロシア全土の五百二十万のユダヤ教徒のうち、四百八十万が指定居留地に住んでいた。〔Amos Elon, The Israelis: Founders and Sons (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、50~52頁〕

10 十九世紀の中葉、ロシアの知識層の青年男女は社会改革の理想に燃え、とくに農民に絶対的信頼を置いて、「人民の中へ」を合い言葉に革命運動に献身した。だが、農民が知識階級に本能的な不信の念を抱き、皇帝に変わらぬ忠誠心を寄せていたので、人民主義者の運動は失敗に終わった。しかし、農奴は解放された後、期待したような自作農になり得ず、農村プロレタリアート化したので、革命宣伝の絶好の標的となった。

その後、革命運動は政治的テロリズムをめぐって分裂し、強硬派が〈人民の意志〉と称する団体を結成した。皇帝は過去十五年にわたって命を狙われていたが、この過激派のために爆死した。〔Georg von Rauch, A History of Soviet Russia (London: Thames and Hudson, 1957年)、5~7頁〕

このテロリスト集団は人民の耐え忍んでいる苦難の原因を離散の民の末裔に求め、ロシアの大衆に〈腐敗墮落のユダヤ教徒〉に対する蜂起を呼びかけた。〔Amos Elon, 前掲書、70頁〕

11 この数字は、次の資料集による。〔Martin Gilbert, The Jews of Russia: Their History in Maps and Photographs, Third edition (Jerusalem: Steimatzky and the

Jerusalem Post, 1979年)、27頁]

オーストリア統治下のガリチア地方は、帝政ロシアの支配下にあるよりは、ましな状況だったが、ここからも多数のユダヤ教徒がアメリカに移住した。

12 1860年以降、オーストリア皇帝はユダヤ教徒の有力者に恩恵を施すことにより、絶対専制主義から立憲主義への転換を示そうと試みて、ユダヤ教徒の富豪（銀行家、鉄道事業家、株式投資家など）を次々と貴族に叙した。〔William O. McCagg Jr., A History of Hapsburg Jews, 1670-1918 (Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1992年)、153頁〕ヘルツルが生まれたのは、まさにユダヤ教徒の富裕層が王権に取り込まれた時期だった。

1860年代、ウィーン在住のユダヤ教徒はハプスブルク王朝支配下の社会に同化し、彼らの成功は間近と思われた。ところが、1873年の株式市場の大暴落はキリスト教徒の国民に対するユダヤ教徒の裏切りと見做され、やがて反セム主義が猛威を振るう要因となった。〔William O. McCagg Jr., 前掲書、156頁〕

13 当時の反セム主義の論者は、ドレフュスの宗教だけでなく、出身地を問題にした。彼は普仏戦争でプロシアに併合されたアルザス地方の生まれだったので、本来的に親ドイツの裏切り者だ——と。ドレフュスの支持者たちは、彼の高い同化の程度を評価した。彼自身はユダヤ教徒の子弟として誕生しながら、私生活の信仰を軍人としての公的立場から切り離し、敵対者たちから指弾されたのとは反対に、ヤハウエの信徒に対して一定の距離を置いていた。彼の獄中書簡はユダヤの民について全く言及せず、事件の原因を宗教に求めなかった——と。〔Frances Malino & David Sorken (Eds.), From East and West: Jews in a Changing Europe, 1750-1780 (Cambridge: Basil Blackwell, 1991年)、58~60頁〕

14 例えば、ナポレオン占領下のドイツに生まれた初期社会主義者の Moses Hess は、1862年に刊行した著書『ローマとエルサレム』の中で、パレスチナにユダヤ国家の再興を夢想し、社会主義の原理に基く共和国の樹立を論じた。〔Shlomo Avineri, Moses Hess: Prophet of Communism and Zionism (New York: New York University Press, 1985年)、228~230頁〕

二十年後、ロシア生まれの医師 Leo Pinsker はドイツ語の小冊子『自力解放論』をベルリンの書店から出版し、医者らしい発想から反セム主義を不治の病と診断して、その対症療法としてユダヤ国家の再興を提唱した。〔Walter Laqueur, 前掲書、70~75頁〕

ヘルツルは先駆者たちの著作を読まなかったが、独自の思索の末に十九世紀末の社会・経済的環境から同じ結論を引き出す。

15 ガリチア生まれの Nachman Krochmal はナポレオン戦争による社会変動を目の当たりにし、それまでの差別と偏見から解放されたユダヤ教徒の第一世代に属する。彼はヘーゲル哲学の影響を受けて、ユダヤ〈民族精神〉を想定した。死後の1851年に出版された著書で、この哲学者はヤハウエの信徒を世界史に貢献した諸民族の一つと位置づける。そこで、彼はユダヤ教徒の歴史を単なる宗教共同体のそれではなく、ある特定の〈民族〉の歴史と見做した。またドイツ生まれのユダヤ教徒の歴史家 Heinrich Graetz は、十九世紀の民族主義の高揚期に育ち、ヘーゲル哲学とランケ史学に影響された。彼もユダヤの民を信仰集団と考えず、一つの民族、一つの国民と主張する。〔Shlomo Avineri, The Making of Modern Zionism: The Intellectual Origins of the Jewish State (New York: Basic

Books, 1981年)、14~35頁]

16 バイアルン生まれの銀行家ヒルシュは主としてフランスとベルジウムに住み、フランス名のモーリス・ド＝ヒルシュとして知られている。彼はトルコ領内の鉄道建設事業に投資し、巨財を積んだ。しかし、息子を若くして失ったのを契機に、反セム主義のために困窮した同胞の救済事業に物心両面で貢献する。1895年6月、パリでヒルシュはヘルツルに会い、後者が長広舌をふるったので言葉をはさんだところ、ヘルツルは憤然として席を蹴った。ヒルシュは手紙で後日の再会を約束したが、二人が二度と会うことはない。このユダヤ銀行家は間もなく急死したからである。[Theodore Norman, An Outstretched Arm: A History of the Jewish Colonization Association (London: Routledge & Kegan Paul, 1985年)、9~14頁、57~58頁]

また、ヘルツルはフランスのロートシルト(ロスチャイルド)家のエドモンに面会したが、この会見も決裂に終わる。ヘルツルは知人宛ての手紙で「あの一家はユダヤにとって民族的災厄だ」と酷評した。[Walter Laqueur, 前掲書、102頁]

17 1890年代の後半、ドイツ帝国は拡張主義的傾向を強化して欧州の列強に警戒される一方、同時に投資や通商面でオスマン帝国に深く食い込んだ。[Marian Kent(Ed), The Great Power and the End of the Ottoman Empire (London: George Allen & Unwin, 1984年)、111~112頁]

18 ヴィルヘルム二世はパレスチナでヘルツルと二度も接見した。聖地訪問のドイツ皇帝は最初の引見で、政治的シオン主義の運動に好意的反応を示したが、二度目には消極的態度に転じる。ヘルツルの構想がスルターンの不興を買っている旨、随行のトルコ高官が明らかにしたからである。[Alan Palmer, The Decline and Fall of the Ottoman Empire (London: John Murray, 1992年)、193頁]

19 ヘルツルが提示した勅許状の草案には、ユダヤ側に現地住民を立ち退かせる権利があると定めていた。[The ABC of the Palestine Problem, Part I, 1896-1949 (Beirut: The Arab Women's Information Committee), 5頁]

20 1867年、イスタンブールはカーヒラの権力者イスマーイール・パシャに新称号のヒディーヴ(都督)を与えた。彼が無計画に外国から借金を重ねたので、その額は十年後に千万ポンドに達する。英仏両国は放漫財政を立て直すために、国際機関を設立して収入と支出を監督することになった。これは必然的にエジプトの内政に外国の干渉を招く。都督は対抗措置を取ろうとして失敗し、宗主国のトルコから解任された。エジプトの民族主義者は外国勢力とトルコ系支配層に強く反撥して、ついに英国の駐留軍と衝突する。[P. M. Holt, Ann K. S. Lambton and Bernard Lewis (Eds), The Cambridge History of Islam, Volume 1A, The Central Islamic Land from Pre-Islamic Times to the First World War (London: Cambridge University Press, 1980年)、387~388頁] 占領下のエジプトで最高位の英国官吏は、トルコの宗主権を尊重して、大使ではなく総領事だった。

21 閉会式の挨拶でヘルツルは片手を高く挙げ、ヘブライ語でバビロンの虜囚の望郷歌を朗唱する。「おお、エルサレムよ。もし、汝を忘るることあらば、わが右の手を萎えさせよ」と。それまでの大会でも、ヘルツルは演説にユダヤ教の祈祷の語句を織り込むことがあったが、同化ユダヤ教徒の彼はヘブライ語をよく知らないので、引用句をあらかじめローマ字に音訳しておいた。[G. H. Jansen, Zionism, Israel and Asian Nationalism

(Beirut: The Institute for Palestine Studies, 1971年)、28頁]

22 英国のイスラエル・ザングウィルらはパレスチナに固執せず、世界シオン主義会議から脱退して別組織を結成した。この分派は移住候補地の西アフリカのアンゴウラを实地調査し、そのほか北アフリカのリビア、米大陸のメキシコ、アメリカ、カナダ、大洋州のオーストラリアの可能性を検討した。だが、具体的には何の実も結ばず、1925年、組織自体が解散してしまう。〔Walter Laqueur、前掲書、414頁〕

23 引用箇所は、前掲の Walter Laqueur 著、A History of Zionism の312頁と313頁の間に挿入されたバルファの署名入り原本の写真版による。この原文では〈民族的故地〉を“a national home”と表記して普通名詞として扱っている。だが、この箇所が他の英語文献に引用されるうちに、しばしば“a National Home”と大文字で誤記され、あたかも準国家のように記されている。

24 1914年 8月、トルコはドイツと秘密条約を締結し、同盟国陣営に味方した。だが、大戦初期の軍事情勢から即時参戦をためらう。ベルリンはイスタンブールに巡洋艦隊を派遣し、それをトルコ海軍に編入した。ドイツ人の提督は艦隊を黒海に出撃させて沿岸諸都市に艦砲射撃を浴びせ、トルコを対露開戦に踏み切らせた。

1915年 2月、パレスチナに駐屯のトルコ軍はスエズ運河に接近し、小兵力の決死隊が砂嵐に乗じて水路を渡る。だが、英国軍の反撃で全員が戦死するか、それとも捕虜になった。トルコ軍の主力部隊は運河に停泊中の英仏軍艦に砲撃され、全面退却を余儀なくされた。〔Cyril Falls, The Great War: 1914-1918 (New York: Capricorn Books, 1959年)、95頁、160~161頁〕

25 1900年と1906年の下院選挙に際し、英国シオン主義連合会は候補者たちに書簡を送り、その運動に共感を表明する見返りとして、選挙戦の助力を申し出た。だが、第一次世界大戦の始まる1914年まで、シオン主義者の投票は選挙結果を左右するほどの力量を欠いた。バルファはヴァイツマンらの運動が英国のユダヤ社会のごく一部を代表するに過ぎないことを知りながら、1906年の選挙で苦戦していたので、その支持を当て込んだに違いない。折りしもバルファが遊説に訪れたマンチスタの隣の選挙区では、未来の植民地相で、親シオン主義の論客ウィンスタン・チャーチルが、東アフリカのユダヤ自治植民地構想に賛意を表明していた。〔Jehuda Reinharz, Chaim Weizmann: The Making of a Zionist Leader (Oxford: Oxford University Press, 1985年)、273頁〕

26 後にユダヤ教徒として初の米最高裁判所判事となる Louis Brandeis は、大戦の始まった年に米国シオン主義会議の会長に就任し、この運動を政治的勢力に仕立て上げる。彼の活動のおかげで、「シオン主義者たることは、突如として尊敬に値するようになった」。彼がウィルソン大統領の親密な相談相手だった点を、ランダンのシオン主義運動家は英国政府との交渉に利用した。〔Walter Laqueur、前掲書、159~160頁、179~180頁〕

27 英語の原文は、“the principle of recognizing Palestine as the National Home of the Jewish People” で、バルファ宣言の“the establishment in Palestine a na-tional home for the Jewish people” (下線=筆者) と比較すれば、前置詞や冠詞の僅かな違いや大文字と小文字の使い分けで、意味に大差を生ずる。

第三部

東アラブ統治機構の解体と再編

8 反古にされた約束

アラブの叛乱を教唆 ヴァイツマンがランダンでパレスチナの重要性を説いて回っていた頃、カーヒラ駐在の英高等弁務官ヘンリ・マクマホンはイスラーム教の聖都メッカの大守（シェリーフ）フセイン・イブン＝アリーと何度も密書を交わす。連合国対同盟国の戦争で、アラブ世界で最高の名門が英国に味方し、宗主国のトルコを背後から攻めるよう、この英高官は公然と教唆した。

フセインは裏切りの見返りとして、東アラブ独立構想の支持を英国に要求した。その新国家の領域はオスマン帝国支配下の西アジアを網羅し、現在のシリア、レバノン、イラク、ヨルダン、サウディ・アラビア、ペルシア湾岸諸国にイエマン、それにイスラエルを含んでいた。

1915年10月24日付の書簡で、マクマホンは本国政府の意向を伝え、「メッカの大守によって要求された領域内のすべての地域において、英国はアラブの独立を承認し、かつ支持する用意がある」と、叛乱の代償を具体的に示す。ただし、これには留保条件が付き、「ダマースカス、ホウムス、ハーマー、アレポウの西方に位置するシリアの一部は、純粹にアラブとは言い難いので要求地域から除外する」と付け加えている。¹

マクマホン書簡の留保に対して、フセインは明確な返答をしなかった。これら四つの都市の西側にある地域はパレスチナの北方に位置し、現在のレバノンと一部で重なり合う。

英帝国の保護国・エジプトに駐在の高等弁務官と聖都メッカの大守との往復親書の中で、パレスチナの地名は直接に言及されていない。だが、東アラブの独立が実現した暁には、当然のことながら新国家の領域内に聖地も含まれると、フセインは疑う余地なく信じた。

この取り引きについて、ヴァイツマンは英当局から何も聞かされなかった。一方、フセインは政治的シオン主義者の工作を知らない。二年後のバルファア宣言で、英国政府はパレスチナについて、アラブとユダヤの双方に相矛盾する約束を与えたことになる。将来、この二重取り引きは取り返しのつかぬ紛争を引き起こす。しかも全く同じ時期、英外務省は露仏両国と秘密交渉を進め、トルコ領東アラブの分割を画策していた。

1915年から翌年にかけて、英国の中東専門家マーク・サイクスとフランスの外交官で前バイルート領事のシャルル・ジョルジュ・ピコは会談を重ね、西ア

ジアの地図を塗り変える。英仏両国の外相は分割案を確認し合い、その内容を盟邦のロシアに伝達した。この大国間の秘密合意は、交渉役にちなんでサイクス・ピコ協定と呼ばれる。

密約の骨子は、トルコの敗北後、英国がメソポタミア南部からシナイ半島にかけて、フランスがシリアとメソポタミア北部にアナトウリア半島の一部を、それぞれ直接・間接の支配下に収め、エルサレムと周辺の聖地をロシアの希望通り国際管理下に置く――というものだった。

遊牧戦士の武装蜂起 フセインはイスラーム教の開祖ハンマドの生まれたハーシム家の当主で、預言者から数えて三十七代目の子孫である。1908年、トルコ政府から故郷メッカの守護役の地位に任ぜられたが、それまでの十五年間もイスタンブールで四人の息子たちと一緒に人質同然の日々を過ごす。聖地に帰ってからも、その生活は必ずしも安穩ではない。現地のトルコ官憲は新任の大守を警戒の眼で眺め、たちまち摩擦を引き起こしたからである。

約四百年前の1517年、エジプトのマムルーク王朝がオスマン・トルコに攻められて滅亡すると、メッカとメディーナの支配階級は直ちにカーヒラに使者を送り、新しい権力者に恭順の意を表した。それ以来、イスラーム教の聖地は、トルコ人のスルターンの統治下に置かれる。だが、長年の異民族支配に人心はすっかり倦んで、東アラブの各地に抵抗の芽が萌し始めた。

欧州の大動乱が始まる前、フセインは次男のアブダッラーを密使としてカーヒラへ派遣し、英国の意向をひそかに打診した。将来、メッカがイスタンブールと事を構えるような事態に至った場合、ランダンの支援を当て込めるか、どうか――と。

エジプトの事実上の支配者で、総領事のホレイショウ・ハーバト・キッチナはアラブの特使に会ったものの、否定的な回答を与えるにとどまった。大戦前の英国はオスマン・トルコの現状維持を得策と考え、老大国の基盤を揺るがせたくなかったからである。

しかし、第一次世界大戦の勃発後、オスマン帝国がドイツとオーストリアの同盟国陣営に加わったので、英国政府は伝統的な外交政策を転換した。そこでランダンはパリと語らって〈欧州の病人〉の息の根を止め、トルコの広大な領土の分割を画策する。

この戦争に勝ち抜くためには、ランダンは手段を選ばない。イスラーム世界の遊牧戦士だろうが、クリスチャン社会の被差別民だろうが、どんな勢力でも利用しよう――と。こうして一度は立ち消えになったフセインの申し入れを、英当局者は真剣に再検討した。

大戦の開始後、英国は三十数年も軍事占領中のエジプトを正式に保護国とし、オスマン帝国の宗主権を奪い取る。カーヒラの実権者の職名は、総領事から高等弁務官（英帝国内の大使）に変更された。キッチナは本国に呼び戻されて戦争大臣に就任し、後任にマクマホンが着任する。英当局はアブダラーの打診を再考し、敵陣営の内側に楔を打ち込もうとたくらむ。秘密の伝書使がトルコの官憲に気づかれぬよう、カーヒラとメッカの間を往復した。

フセイン イスタンプールはメッカに圧力をかけ、英仏露の連合国の**選択**に対して聖戦（ジハード）を布告するよう求めた。異教徒討伐の宣言はイスラーム教の聖地から発せられてこそ、大きな効果が期待できる。英軍にはインドから、仏軍にはアルジャリアやマロコウから、多数のイスラーム教徒の兵士が徴募されている。帝政ロシアも前世紀の半ばに中央アジアを征服してから、大きなイスラーム人口を抱えこんだ。聖戦の呼びかけがクリスチャン陣営のイスラーム教徒にどんな波紋をひろげるか、連合国側の政府と軍部は固唾を呑む。

十九世紀の末、オスマン皇帝のアブダルハミード二世は、有名無実化していたハリーファの地位を強化し、その称号を誇示した。² トルコの参戦は図らずも、イスラーム教徒の忠誠を試す機会となる。実際、イスラーム教徒のインド人兵士はスエズ運河の防衛のためにエジプトに派遣されたが、信仰上の最高権威に刃向かうことを拒否して、二箇大隊が集団脱走したほどである。英国政府と軍部は事態を深刻に受け止めた。

メッカの大守は、困難な選択に直面する。勝者は独逸土の同盟国か、それとも英仏露の連合国か？ 世界大戦の帰趨は、まだ見通しが容易につかなかった。仮に前者が勝った場合、老帝国は戦争協力の代償に何を与えるだろうか。念願のアラブの独立まで認めることはあるまい。もしクリスチャン国家に内通して、イスラーム世界の最高権威ハリーファに弓を引いた場合、どうなるか。連合国側が勝てば、十分な報奨を期待できよう。しかし、逆の結果になれば、裏切り者に容赦ない報復の手が下されるだろう。

フセインはトルコ政府に面従腹背の姿勢で対応し、聖戦布告の圧力を巧みにかわす。神が異教徒を滅ぼし、ハリーファに大勝利をもたらされんことを。しかし、早まった行動はアラビア半島の聖地に英軍の攻撃を誘い、アラブ住民を反トルコ陣営に追いやりかねない――と。ハーシム家の当主は逃げ口上を並べ立て、時を稼いだ。

その間、メッカの大守は有利な条件を引き出すためにカーヒラの高等弁務官と交渉を続け、同時にディマシュクなど各地のアラブ民族主義者と極秘裏に接触する。ところが、ハーシム家の内部では、意見が二つに分かれた。次男のア

ブダッラーはかつて特使としてカーヒラを訪れただけに、自然に英国支持に傾き、三男のファイサルは軽挙妄動を慎しんで従来通りトルコに忠誠を誓うよう、父のフセインに進言する。

トルコに 十九世紀の末期から、秘密結社の〈青年オスマン運動〉が帝国の内部改革をめざして、地下活動を続けた。この組織は後に〈青年トルコ党〉の名で知られ、1908年の革命で政治の実権を握る。皇帝（スルターン）は国家元首と宗教的権威の地位を維持したものの、もはや名目的君主に過ぎない。

当初、アラブ人は改革を歓迎するが、間もなく大きな期待は深い失望に変わる。新体制は内外の危機を乗り切るため独裁的傾向に陥り、多民族国家の中でトルコ人の優位を押し付けたからである。³

この時期、アラブ人の間に幾つもの民族主義団体が生まれ、独立実現に向けて若者の熱情をかきたてる。穏健派はイスタンブールの宗主権の下でオスマン帝国内のアラブ全域に統一王国を樹立し、オーストリア・ハンガリ帝国のようなトルコ・アラブ二重君主政体の実現を想定した。一方、急進派の〈青年アラブ協会〉はアラブの完全独立を主張し、会員の数をディマシュクやベイルートで急速にふやした。

参戦後、トルコの実力者ジェマル・パシャはシリア総督兼駐屯軍総司令官としてディマシュクに乗り込み、戦争遂行のため物資の徴発や人員の強制徴募などの強権措置で住民を締め上げる。公安当局はアラブ民族主義者を監視して、反トルコの陰謀を摘発した。1915年 8月と翌年 1月に、合計三十三人がディマシュクとベイルートで公開処刑された。だが、総督の強硬策はむしろ逆効果で、慎重派のファイサルさえも反トルコ感情に駆られる。⁴

1916年 6月10日、決断の末にフセインは叛乱に踏み切り、みずから陣頭指揮に立ってトルコ駐屯軍の兵営を襲撃した。その手兵は僅かな数の遊牧部族の戦士で、武器弾薬も不十分だった。しかもメッカの大守は決起の前にカーヒラの高等弁務官とひとまず合意に達したものの、取り引き条件の細部まで詰めていない。しかし、トルコ側がすでにフセインの二心を見抜いていたので、対決は遅かれ早かれ不可避の形勢となっていた。

当時の軍事情勢は、連合側側に不利に展開する。ほんの二カ月前、メソポタミアの戦線で、英印軍はバグダードに向けて進撃したところ、チグリス河畔で包囲されて大敗を喫した。それだけに反トルコの決起は、フセインの大きな賭けである。ハーシム家はイスラーム世界の由緒ある家柄でありながら、ハリファを裏切ってキリスト教徒の陣営に寝返った。その行動は東アラブの全域に反響を巻き起こし、宗教的、心理的影響は極めて大きい。

勝者の側 武装蜂起の四カ月後、英国の使節団がカーヒラからメッカを
側 に 訪れ、軍事援助と共同作戦についてフセインと協議する。大
戦の開始後、英国はエジプトの首都に特務機関の〈アラブ局〉を設置し、軍人、
外交官、学者を集め、トルコ領の西アジアで諜報活動や謀略工作に従事させた。
まだ三十歳前の若い考古学者のトマス・エドワード・ロランズは陸軍大尉の資格
で使節団に加わり、ハーシム家の知遇を得る。この人物はアラビア語に堪能で、
アラブの民族衣装をまとい、フセインの四人の息子たちの中でも、特にファイ
サルと親交を深めた。⁵

英国から軍資金と装備を支給されて、ファイサルは遊牧民から徴募した戦士
で〈アラブ解放軍〉を編成し、自ら指揮を執る。その主要任務はトルコ軍の後
方を攪乱し、補給路を切断することだった。

1900年から八年の歳月をかけて、イスラーム教徒の聖地巡礼の便宜を計るた
め、鉄道がディマシュクからメディーナまで砂漠を縦断して敷設される。その
建設には世界各地の信者たちが浄財を寄付し、費用の約三分の一を賄った。だ
が、この近代的輸送手段は巡礼だけでなく、兵員と軍需物資の大量輸送を可能
にする。

同盟国側はアラビア半島南部のイエマンに混成部隊の派遣し、半島先端の英
植民地エイドンを脅かそうとした。この港町は欧亜を結ぶ航路にあり、石炭や
水の重要な補給地である。イエマンの首長はイスタンブールに臣従を誓い、領
内にトルコ軍の駐留を認めていた。ここに増援兵力を送り込めば、ドイツ領の
東アフリカ駐屯軍と呼応して、紅海の出入り口を封鎖することも夢ではない。
派遣部隊はメディーナまで巡礼用の鉄道を利用し、大幅に行軍の日程を短縮で
きる。そこで遊牧民の戦士は砂漠の真只中で列車を襲撃し、戦略的に重要な鉄
道を切断した。

アラブのゲリラ部隊は砂漠を駆け巡り、随所で奇襲攻撃を仕掛け、トルコ軍
の士気を低下させる。また水の乏しい荒野を横断して、1917年 6月、アカバ湾
の最奥部にある港町を攻略した。英軍はエジプトからパレスチナに進撃するに
際して、アカバ駐屯のトルコ軍に側面を脅やかされていたが、その心配はもう
なくなった。⁶

英軍はガザ攻略の失敗でパレスチナ侵攻作戦に一頓挫を来たしたが、司令官
の更迭で陣容を建て直す。将軍エドモンド・アレンビの率いる英遠征軍はエジ
プトからパレスチナに攻め込み、1917年12月 9日、エルサレムに入城した。第
一次十字軍から数えて八百十八年ぶりに、聖都はキリスト教徒の軍勢に占領さ
れる。バルファア宣言が出されてから、ほぼ一カ月後のことである。

トルコ軍の抵抗は、まだ一年近く続く。ファイサルの軍勢は各地の遊牧部族

の参加を得て、大兵力に膨れあがった。これに英仏軍の分遣隊が付随して、ゲリラ作戦を支援する。1918年10月1日、アラブ解放軍は二年あまり砂漠で戦い続けた末に、シリアの古都ディマシュクを陥れた。一番乗りは大英帝国のオーストラリア軍の騎兵隊のはずだったが、ロランスが画策してファイサルに入城式の榮譽を譲らせる。

アラブの軍勢は敗走するトルコ軍を追って、さらに進撃を続けた。ホウムス、ハーマー、アレポウ—マクマホン書簡に出てくる都市が次々に攻略されたところで、オスマン帝国は連合国に屈服し、1918年10月30日、休戦協定に調印する。その十二日後の11月11日、ドイツも連合国の軍門に下った。こうして第一次世界大戦は終結する。フセインの目算は外れることなく、アラブを勝者の側に置くことができた。

英国の マクマホンが書簡の中で述べた通り、「英国と強固で永続する同盟を結べば、その成果は直ちにアラブの国土からトルコ人の追放、長年にわたって抑圧を続けたトルコの支配からアラブ人の解放として現れる」はずだった。しかし、ハーシム家の当主は英国の権謀術数のために、すでに戦争中から何度も苦汁を嘗なめる。

まず、メッカの大守はイスタンブールの権威に叛旗を翻した五カ月後に、彼の許に馳せ参じた砂漠の部族に推戴されて、〈アラブ諸国の王〉と称した。だが、味方の連合国側は、この称号を断じて認めない。フランスは東アラブに領土的野心を抱いているだけに、英国がハーシム家にばかり肩入れするのを嫌ったからである。結局、フセインはメッカとメディーナ周辺のヒジャーズ地方の王としてのみ、英仏両国から承認された。

さらにフセインは聖地の守護役として、ハリーファの地位を取り戻そうとする。〈神の使徒の代理〉の称号は、中央アジアから移住したトルコ人のスルターンよりも、イスラーム教の宗祖ムハンマドの血統に連なる者にこそふさわしい。だが、彼の野望は大国の意向で封じられた。戦後処理の取り引き材料を考慮すれば、英仏両国は簡単に同意できない。

1917年、フセインが英仏間の密約に薄々ながら気づいた様子なので、英国政府はこともあろうにサイクスを派遣し、ヒジャーズ王の疑惑を解こうとした。この秘密協定の起草者は東地中海の沿岸地方を狙うフランスの野心に関して詳しく論じたが、密約の存在については口をぬぐった。フセインはマクマホン書簡の留保条項を取り上げ、この地方が「純粹にアラブとは言い難い」との見解に反論する。

バルファア宣言が出されて間もなく、ロシアにボルシェヴィキ革命が起きた。ニコライ・リェニインの労農政府は帝国主義戦争から離脱し、ブレストリトウ

スクで単独講和を締結する。新政権は帝政時代の秘密条約を暴露し、サイクス・ピコ協定を白日の下に曝す。イスタンブールはヒジャーズの叛逆者に写しを送り、邪悪な異教徒の真の意図を知らせた。

フセインが英国に説明を求めると、当局者は返答に窮し、ただ弁解するしかない。この協定は過去の一時期における暫定取り決めに過ぎず、アラブの叛乱とロシアの革命で、いまや新しい局面が生まれた——と。しかし、マクマホンもアレンビも、ハーシム家の弱みを握っていた。いまさらフセインがトルコに帰順できないからには、最後まで連合軍に味方して戦うしかない。ハーシム家は砂漠の遊牧部族の忠誠心をつなぎとめる軍資金も武器弾薬も、すべてを英国に依存していたからである。

東アラブの分割 戦争は終わった。しかし、フセインが胸中に描いた壮大な構想、すなわち東アラブの統一と独立は、画餅に帰す。英仏の大国は〈肥沃な三日月地帯〉を両国の間で好きなように切り取り、アラブの願望など眼中にない。しかもフセインの権威はアラビア半島の全域に及ばず、ヒジャーズ地方だけに限定された。広大な半島ではサウード家が勢力を増大し、ハーシム家とは別に英国と友誼を結んでいたからである。⁷

しかも英国は東アラブの独立を承認すると約束しながら、バルファア宣言でユダヤの民の民族的故地の建設地としてパレスチナに特別の地位を保証した。これを知らされた時、フセインは疑惑を深める。将来はアラブの地の一角がユダヤ国家になるのではあるまいか——と。カーヒラのアラブ局から特使が説明のために急派され、真の意図を隠して相手を丸め込むのに懸命となった。ユダヤ移民は欧州から資本と技術をもたらし、長年にわたるトルコの支配で疲弊した地域の開発に役立つ——と。

1919年、ファイサルはパリ近郊のヴェルサイユで開催の平和会議に出席し、ロランスに補佐されて父王の名代を務める。⁸ フランスはトルコ領の戦後処理にからんでアラブ代表の参加に反対したが、英国の強力な後押しで渋々ながらファイサルの出席を認めた。

しかし、大国の策謀が渦巻くヴェルサイユ宮殿で、アラブの独立を求める声はかき消されてしまう。英仏両国はアラブの希望など一顧だにせず、舞台裏の折衝でサイクス・ピコ協定を手直しする。

大戦の最中にロシアが戦線離脱したからには、問題は英仏二カ国の間で解決できる。カーヒラ駐在の高等弁務官がフセインに与えた戦時中の約束など、もはや両国の眼中になかった。フランスはトルコの旧領からシリアとレバナンをせしめ、英国はメソポタミア（イラク）の全域とパレスチナを取る。この取り引きで英国は燃料革命の到来に備えて、石油の涌く地域を手中に収めた。

ロランスなどの親アラブ派は、フランスの分け前が大き過ぎると、秘密協定の改訂に憤慨した。英遠征軍とファイサルの軍勢がトルコ軍の駆逐に血を流す一方で、仏軍は何の貢献もしていない。だが、両国間に多少の不協和音があっても、フランスは英国にとって欧州大陸で掛け替えのない盟邦であり、講和会議でドイツを抑えこむためにも絶対に必要な味方である。その配慮が優先すれば、対アラブの誓約は簡単に反古にされた。

フランスの 武力行使 ファイサルがヴェルサイユの平和会議に出席している留守に、東アラブの各地では民族主義運動が盛んになった。〈青年アラブ協会〉は〈アラブ独立党〉を結成し、解放の機運を一層高める。〈全シリア評議会〉がディマシュクに招集され、シリアとイラクの独立承認、サイクス・ピコ協定とバルファア宣言の廃棄を要求した。

だが、英国の強い圧力に屈し、ファイサルはフランスと妥協を余儀なくされる。英軍は地中海の沿岸部から撤兵し、代わって仏軍がバイルートに上陸した。アラブ民族主義者は欧州の大国の行動に激高し、反仏感情を煽り立てる。1920年3月、全シリア評議会が再びディマシュクで開かれ、パレスチナとレバナンを含めた大シリアの独立を決議し、ファイサルを国王に推戴した。同日、シリアの古都に滞在中のメソポタミアの民族主義者はイラクの独立を宣言し、アブダッラーを国王に担ぐ。

英仏両国は思いがけぬ事態の進展に驚き、全シリア評議会の独立決議を否認すると共に、すぐに対抗措置を取る。1920年5月、国際連盟の最高理事会がイタリの保養地サンレモで開催され、英仏伊の主要戦勝国に日本も加わって、改訂された密約に基く東アラブの分割を承認した。その結果、シリアとレバナンはフランスの、イラクとパレスチナは英国の、それぞれ〈委任統治〉の下に置かれる。

フランスは戦勝国間の取り決めによる分け前の確保のため、新生シリアに対して武力を行使した。バイルート駐屯の仏軍総司令官は、即位後まだ三カ月のファイサルに最後通牒を突き付け、委任統治の無条件受諾を要求する。新国王は強力な大国の威嚇に屈し、強硬論を吐く支持者の説得に努めた。しかし、フランス軍部隊はディマシュクめざして進撃し、1920年6月25日、ウマイヤ王朝の古都を陥れる。

ファイサルの軍隊は勇敢に抵抗したが、第一次世界大戦で実用化された新兵器——飛行機と戦車——にとうてい太刀打ちできない。しかも仏軍の主力は植民地兵で、北アフリカのアラブ地域出身のイスラーム教徒が少なくなかった。この事実はシリア・アラブ人の心に苦い屈辱感と根強い反仏感情を植え付ける。ここに短命のシリア王国は滅亡し、傷心の廃王ファイサルは英国に亡命した

国際法で承認 欧州の大動乱はアジア、アフリカにも波及して、旧来の国際秩序を崩壊させた。中東地域のアラブ人は四百年に及ぶトルコ人の支配から解放されたが、すぐに欧州の二大国の支配下に置かれる。ハーシム家はもとより、アラブ民族主義者の間には、英国に二重にだまされたという不信感ばかり残った。だが、政治的シオン主義運動は世界を根底から揺さぶった帝国主義戦争を奇貨として、戦後の西アジアに足場を固める。

マクマホンが高等弁務官として、バルファアは外相として、それぞれ英国政府を代表して交渉役を務めた。だが、外交的取り引きの結末は、相手によって大きく違ってくる。アラブ人に対する誓約があっさりとして反古にされたのとは対照的に、ユダヤ教徒にに対するそれは誠実に履行され、戦後の新しい国際秩序の中に組み込まれる。英国がパレスチナを委任統治下に置いたのも、バルファア宣言で約束した「ユダヤの民のための民族的故地の樹立」を実現するために他ならない。

1920年 1月10日、国際連盟が正式に発足する。⁹ 連盟規約の第二十二条は委任統治の新しい概念を導入し、英仏の戦勝国が新設の国際機構に代わって、ドイツ、トルコの敗戦国の旧領の住民で「まだ自立段階に至らぬ民族」の後見役を務めるよう定めた。もはや時代の流れは過去の植民地獲得競争の再現を許さず、このような偽善的装いを凝らさなければならない。

英国は連盟規約にうたわれた「文明の神聖な委託」を公式に担うことになった。国際連盟の理事会は、1922年 7月24日、パレスチナの委任統治に関する文書を採択する。その前文の中では、バルファア宣言の文言がそっくり繰り返された。英国の対ユダヤ政策はすでに米国などから個別の了承を取り付けていたが、これで国際社会の認証も得た。

第一回世界シオン主義会議の開催から四半世紀の歳月を経て、ユダヤ国家再興運動はついに目的の第一段階を達成した。この大会の決議は開催地にちなんでバーザル宣言と呼ばれ、冒頭に「シオン主義の目的は国際法で保証されたユダヤ教徒の故地をパレスチナに創設することである」¹⁰と述べている。ここにヘルツルの夢は、ひとまず実現した。

それから二十五年後、新しい世界機構の国際連合は、パレスチナの分割とユダヤ国家の独立を決議する。それに至るまでの歳月、聖地は紛糾と流血に明け暮れた。ユダヤの民が宗教上の祖先の地に帰参することは、アラブ人が先祖伝来の地から離散する事態を生む。しかも国際連合の決議はヘルツルの想定したユダヤ問題を解決することなく、かえって新たな紛争を引き起こす。

9 トランスヨルダンの建国

反仏抵抗 1920年7月、フランス軍が新生シリアを攻め、首都のディマシクを占領すると、ファイサルは南部の町デラに逃れた。解放戦争の英雄は手痛い敗北を喫したが、ここで陣容を立て直し、武力闘争の継続を試みる。仏軍司令官は最後通牒を突き付け、シリア国王を恫喝した。兵を引かなければ、空から町を攻撃する——と。

砂漠の戦士がいかに勇敢でも、欧州の戦場で実用化された最新鋭兵器の航空機に刃向かえない。この軍事的脅迫の前にファイサルは屈服し、英国支配下のエルサレム経由でロンドンに亡命した。

欧州列強の背信と軍事力によって、東アラブ独立の悲願は挫折する。遊牧部族の軍勢は一敗地に塗れて、追撃の手の及ばぬ奥地にまで落ち延びた。しかし、族長たちは徹底抗戦を叫んで、ファイサルの父——メッカの大守で、いまやヒジャーズ王の称号を持つフセイン——に助力を求める。

アラブ側は近代的装備を欠いたが、砂漠の真只中で文明の利器を利用できた。聖地巡礼用の鉄道が大戦前に開通し、ディマシクとメディーナを結んでいる。その線路沿いに電信線が架設され、アラビア半島の終着駅まで延びていた。とある停車場で部族の有力者たちは談合し、衆議一決、フセイン宛てに電報を打つ。ハーシム家の王子を派遣し、反仏闘争の指揮を執ってほしい——と。

その後の武力衝突で、アラブの軍勢はまたも優勢な仏軍に蹴散らされた。敗残の戦士はさらに南下し、ヨルダン川や死海の東岸の荒野に逃れる。この地は広義のパレスチナの一角で、英国の委任統治下に入るはずだったが、まだ実効支配の及ばぬ真空地帯だった。ある族長は死海の南東のオアシス町マアン——かつてトルコ軍とファイサルの解放軍が激突した戦場——にたどり着くと、その停車場から電報を打ち、重ねてヒジャーズ国王の助太刀を要請する。

仇討ち この時、次男のアブダラーが遊牧民の軍勢の要望に応えて、**に出陣** 僅かな手兵を率いて巡礼用の列車で出発した。彼はファイサルのすぐ上の兄で、砂漠の王国で外務大臣の要職にあったが、父王の許しを得て出陣する。1920年11月、ハーシム家の王子はマアンに到着後、対仏武装蜂起を呼びかけ、やがてディマシクに攻めのぼって弟ファイサルの仇を討つと宣言した。

この時代がかかった行動は大きな反響を呼び起こし、多数の東アラブ独立運動家がフランス支配下のシリアから砂漠の中の町に逃れて来た。思いがけぬ事態

を迎えて、ディマシユク駐留の仏軍司令官はパレスチナの英軍政当局に抗議し、アブダッラーの追放を要求する。だが、当時のマアンはヒジャーズ王国の北端に位置し、フセインの主権下にあった。ランタンはパリの強硬な申し入れに当惑したが、むやみに手出しできない。

砂漠の各地で再起を図るアラブ独立派の間に、誇大な幻想が生じた。アブダッラーは英国の後押しを得て、新鋭兵器で武装の大軍を擁している——と。ところが、その軍勢はたかだか五百人に過ぎず、小火器を持つだけだった。英国政府から強い圧力を一身に受け、ランタンに滞在中のファイサルは、しきりに兄と父に自重を求める。シリアの廃王は亡命先で交渉を進め、アラブ側の年来の主張を少しでも実現するよう尽力していたからである。フセインも三男の忠言に従い、軍事行動の中止を次男に指示した。

実際のところ、アブダッラーは必要な軍資金にも事欠き、近代装備の仏軍と正面切って戦うのは無理だった。そこで四カ月もマアンで形勢を観望した末に、1921年 3月初め、アマーンの町へ列車で向かう。

この砂漠の中の古い都市はプトレマイオス王朝の支配時代にフィラデルフィアと呼ばれ、地図の上では英国の委任統治領の一角にあるが、エルサレムの政庁の権威がまだ確立されていない。遠来の王子はここに到着すると、遊牧民の族長や定住民から熱狂的歓迎を受ける。仏軍はアブダッラーの軍勢の進撃を阻止するため、鉄道線路を取り外した。

ヨルダン川 英国政府はアブダッラーの出陣で沸騰点に達した東の東と西 アラブ情勢の鎮静化を図り、フランスのように武力に訴えることなく、政治的解決を画策する。植民地相のウィンスタン・チャーチルは自ら現地視察の旅に出て、中東各地から高等弁務官、アラブ問題専門家をカーヒラで開催の会議に招集した。その結果、英国の委任統治領の将来図が、次の通り描き出された。

まずメソポタミアにイラク王国を建国し、その元首にシリアから放逐されたファイサルを据える。¹¹ こうして対トルコ戦争の功労者に誠意を示せば、多少なりとも過去の背信行為を償い、さらに戦略的に重要な産油地を確保できよう。問題はパレスチナで、バルファ宣言で約束した通り、地中海の沿岸部をシオン主義者の移住先として保留し、内陸部を切り離してアブダッラーに任せる。ヨルダン川と死海が、分割される両地域の天然の境界となるだろう。

1921年 3月末、アブダッラーとチャーチルはエルサレムで四度も会い、反トルコの武装蜂起に関与したロランスも同席して、交渉を重ねた末に合意に達した。地中海側から見たヨルダン川の向こう岸（トランスヨルダン）に新国家を創設し、アブダッラーが君主に就任する——と。¹²

このため国際連盟のパレスチナ委任統治に関する協約は特に一カ条を設けて、この地を対象地域から除外する。本来、パレスチナとはヨルダン川の両岸にまたがる地名だったが、この時から川の西岸に狭く限定されるようになった。いかにも辺境を思わせる呼称は、そのまま新しい国名となる。アブダッラーが兵を進めたアマーンは、新国家の首都となった。

砂漠の人工国家 トランスヨルダンは砂漠にでっちあげられた人工国家で、英国に財政、軍事、外交のすべてを握られる。アブダッラーの称号は〈首長〉で、父フセインや弟ファイサルの〈国王〉に比べて、一段と低く格付けされた。住民の大半が遊牧民で、近代国家と呼ぶには程遠い。各地の部族はかつてアブダッラーを対仏闘争の盟主と仰いだが、やがて英国に任ぜられた首長の権威に武力でしばしば挑戦する。

世界大戦の終結から二年余、フセインの東アラブ独立構想から大きく後退したとはいえ、英国の委任統治の大枠の中でハーシム家は二つの王冠を得た。しかし、本家のヒジャーズ国王は大国の背信を決して忘れず、英国がどんなに迫っても、戦後の西アジアの国際新秩序を認めようとはしなかった。¹³ その頑固さのゆえに、やがて老フセインは代償を支払わねばならない。

1920年代の半ば、アラビア半島ではサ우드家が英国の支持の下で急速に勢力を伸張し、ハーシム家と覇権を争った末に、とうとうイスラーム教の聖都メッカとメディーナを攻略する。英国と条約を締結しておけば、ヒジャーズ王国は領土の保全を保証されたはずだった。フセインは競争相手の一族に本拠地から武力で追われて、預言者ムハンマドの血統に連なる者として最大の恥辱を嘗める。彼は王位を長子のアリーに譲り、再び故郷の土を踏むことなく、やがて亡命先で生涯を終えた。¹⁴

10 英国の委任統治

歴史的関係 1922年 7月24日、国際連盟は英国をパレスチナの委任統治国に正式に選任した。それから二十五年間にわたって、ランタンは連盟規約の謳いあげた〈文明の神聖な信託〉の美名の下に問題の地を支配する。しかし、聖地はすでに二年前から、実質的に英国の統治下に置かれていた。1920年 4月のサンレモ会議はトルコから奪った西アジアの旧領を分割し、欧州の大国に委ねたからである。大戦中から戦後にかけての軍政期間を含めれば、英国のパレスチナ支配は実に三十年も続く。

この委任統治に関する合意文書は二十八カ条から成り、まず前文でユダヤの民とパレスチナとの〈歴史的関係〉を承認している。さらに第四条は特定のユダヤ組織を〈公共団体〉として認知し、現地の英政庁に協力させることにした。これは〈ユダヤ機構〉と呼ばれ、後に事実上の政府に発展して、イスラエルの基盤を造る。また第六条はユダヤ教徒の移住に便宜を図り、公有地や荒野の開拓を奨励した。

この委任統治の協約がシオン主義者のユダヤ教徒に対する配慮に充ちているのに比べ、人口の九割を占める現地のイスラーム、キリスト教徒については、一度もアラブの名で言及せず、単に「非ユダヤ共同体」とか「住民の他の階層」と呼ぶにすぎない。委任統治の目的自体が、初めから多数のアラブ住民など眼中になかったからである。

第一次世界大戦の最中、ランタンの政策決定者は目先の利害に惑わされ、バルファ宣言で将来に災厄の種を蒔いた。英国の委任統治時代、アラブ人の武力抵抗とユダヤ過激派のテロリズムで、この神と国際連盟の〈約束の地〉は騒乱と流血の場と化す。英国政府は自ら原因を創り出した紛争に手を焼き、最後には委任統治国としての責任を投げ出した。その後のパレスチナの命運は、アラブ対ユダヤの力関係に委ねられる。

最初の衝突 1917年12月 9日、エルサレムが英遠征軍の手に落ちると、総司令官のアレンビ將軍は戒厳令を布告する。その一カ月ほど前、ランタンでバルファ宣言が公表され、欧州各地に広く知れ渡った。¹⁵ しかし、当のパレスチナでは、この対ユダヤ政策は堅く秘密にされた。聖都の住民は十字軍以来のクリスチャン軍勢を歓迎したが、新しい支配者から見れば、相変わらず敵国の臣民に他ならなかった。しかも、戦争はまだまだ続く。現地の住民感情を逆撫でする事態を避けるのは、占領軍として賢明な措置に違いない。

エルサレムの陥落当時、アレンビは英国の戦争目的を美辞麗句で飾りたてる。それは長年にわたるトルコの圧政からの解放であり、人民の自由な意志に由来する民族政府の樹立だった。戦争の末期、トルコ官憲の手の及ばぬカーヒラで結成された〈シリア統一党〉の質問に答え、英仏両国は明確に戦後の独立を保証した。ところが、その固い約束は、一向に実現しそうにもない。大戦の終結からすでに一年余、東アラブでは連合国の占領に対する不満が募る一方だった。アラブの民族主義運動家たちがしびれを切らせてファイサルを君主に担ぎ出し、1920年 3月 8日にシリア王国の建国を宣言すると、戦時中の味方は新国家の承認を拒否する。

折りも折り、軍政司令官のルイス・ボースはアラブ人の有力者を集め、バルファ宣言とサンレモ会議の内容を公表した。つまり、パレスチナはユダヤ移住者の受け皿となり、独立アラブ国家の一部となるどころか、新しい形態の植民地、つまり委任統治領になる――と。この発表は電撃のように聖地を走り抜け、反シオン主義の暴動を引き起こす。この衝突で五人のユダヤ教徒が殺され、二百人以上が重軽傷を負った。この流血の惨事は、それから果てしなく繰り返される騒乱の序曲に過ぎない。

日の目を見ぬ 報 告 書 第一次世界大戦後の東アラブで、アメリカ合衆国に寄せる期待感は絶大だった。大統領のウ드로ウ・ウィルソンの提唱した十四項目の講和条件の中で、とりわけ秘密外交の廃止、民族自決権の承認は、広範な共感を呼ぶ。欧州大動乱の終わった翌年の1919年 5月、西アジアのオスマン帝国領の戦後処理をめぐって、米国政府はヘンリ・キングとチャールズ・クレインの二人を現地に派遣し、アラブ側の意向を汲み取ろうとした。¹⁶

トルコの支配から脱したばかりのアラブ人が、大国間の秘密協定によらずに将来を自ら決めてこそ、ウィルソンの理想は実現できよう。しかし、東アラブの現状から即時独立が無理なら、さしあたって先進国の委任統治を受け入れるしかない。その場合、住民の大多数の意志として、どの戦勝国に当面の運命を託したいのだろうか――。現地で民意の動向を探るのが、二人のアメリカ人に課せられた任務だった。この調査団は六週間にわたって、シリアの各地で聴聞会を開いたり、陳情を受けたりする。

この時、全シリア評議会の代表者はキング・クレイン調査団に覚書を送り、シリアを民主的立憲君主制の完全独立国とするよう求め、ファイサルを国王に推戴した。さらに、この覚書は委任統治について定めた国際連盟規約の第二十二条に強く抗議する。この条項が敗戦国の旧領を発展段階に応じて分類し、委任統治の適用を独断的に決めたからである。連盟規約の文言によると、東アラ

ブは独立国として存在する段階に達したとひとまず認められながらも、自立できる時の到来まで「委任統治国による行政上の助言と助力」に従うことになっていた。

アラブ独立運動家たちは英仏両大国の真意を見抜いて、偽善的な委任統治に強く反撥する。だが、戦後の国際情勢に柔軟に対応して、この制度が完全独立を損わない経済的、技術的援助に限定されると解釈した。そして、二十年以内の期限付きで、米国からの援助受け入れを表明する。さらに米国がアラブの要望に応えられぬ場合、次善の策として完全独立と国土統一の条件付きで英国を指名した。その一方、フランスの野望を厳しい言葉で撥ねつける。

さらに覚書は政治的シオン主義の国家再興運動、それに伴うユダヤ教徒の移住に明確な反対を表明した。パレスチナとは歴史的にシリア南部の総称¹⁷で、その分離を認めることはできない。ウィルソン大統領が提唱した秘密条約を排する高邁な原則に基き、全シリア評議会はアラブ国土の分割を決めた条約、シオン主義の樹立を目指す約束に断固として抗議し、これらの協定や合意の廃棄を要求する――と。

1919年 8月、キング・クレイン調査団は、報告書をまとめあげた。その内容は現地の世論をよく汲み上げ、現在から見ても驚くほどの洞察力に富んでいる。それはシリアの統一維持、ファイサルの元首就任を勧告した後、ユダヤ教徒の無制限移民に歯止めをかけるよう提唱した。シオン主義運動の移住計画が行き着くところ、パレスチナは紛れもないユダヤ国家になり、〈民族的故地の樹立〉が、バルファア宣言のいうように「パレスチナに現存する非ユダヤ共同体の公民的、宗教的諸権利を犯してはならない」どころか、その重大な侵害を必ず伴うと見通したからである。¹⁸

もし二人の勧告が米国の外交政策に反映されたならば、中東の現代史はかなり異なった経過をたどったに違いない。しかし、この報告書はついに日の目を見ることはなかった。米上院は合衆国の国際連盟加盟を阻み、理想家肌の大統領に大打撃を与える。キングとクレインの勧告はウィルソンに無用となり、もはや顧みられることもなかった。三年後、この調査報告書が公刊された時には、シリアはとうにフランスの支配下に組み入れられ、パレスチナはユダヤ移民問題で大揺れに揺れていた。

またもや 1920年 7月、パレスチナの軍政は民政に移管され、**暴動が発生** 初代の高等弁務官にハーバート・サミュエルが任命された。このユダヤ教徒の政治家はアスクウィス内閣の閣僚時代に聖地の将来に関する覚書を同僚に配布し、シオン主義運動の主張を代弁した人物である。その年の 4月に開催されたサンレモ会議の決定を受けて、英国は国際連盟から正

式に委任統治国として選任される前に、民族的故地の実現に向けて地ならしを始めた。この人事が植民地官僚や職業軍人でなく極め付けのシオン主義同調者を起用したことは、英国政府の意図を雄弁に物語る。¹⁹

サミュエルは本国政府とシオン主義運動の代表者と協議し、当時のパレスチナの受け入れ態勢を考慮して、1920年 8月、ユダヤ移民の年間枠を一万六千五百人と定めた。この時から新しい支配者の庇護を得て、戦乱で疲弊した東欧から離散の民の末裔がハイファやヤッフォ港にぞくぞくと上陸する。地元のアラブ人は移住者の到来を不安な面持ちで迎えた。

1921年 4月、またもや反シオン主義の暴動が発生した。ユダヤ移民の一時収容施設や開拓農園が、真先に襲撃の対象となる。その頃、多数の密入国者が割り当て枠を無視してパレスチナへ入りこみ、アラブ人の怒りを買った。彼らはロシアやルーメイニアからの移住者で、黒海の港から乗船してレバノンのベイルート港に到着する。そして、フランスの官憲の黙認の下に陸路を南へ取り、容易に英国の委任統治領にもぐりこんだ。この事態を見過ごせず、アラブ側はバルファ宣言の廃棄を叫び、不法移民の増大に抗議の同盟罷業を決行する。不穏な空気がパレスチナ全土にみなぎり、暴力沙汰となって爆発した。

この流血の騒乱で、双方ともに多大の損害を出す。ユダヤ側は四十七人が殺され、百四十六人が重軽傷を負った。アラブ側の死者は四十八人、負傷者は七十三人。大半が英駐留軍と警察の発砲による犠牲者だった。高等弁務官のサミュエルは事態収拾のためアラブ人の有力者を招集し、ユダヤ移民の一時停止を発表せねばならないほどだった。この措置はユダヤ側に衝撃を与える。現地の英当局が常に無条件でシオン主義運動に味方するとは限らぬことを、この事件は早くも例証したからである。

実際、人口の九割を占める非ユダヤ共同体の協力なしでは、委任統治の将来は覚束つかない。サミュエルはアラブ側を懐柔するために、折りから空位になったエルサレムのマフティ（イスラーム教の法学者兼指導者）に熱烈な民族主義活動家を起用し、後に新設の〈最高ムスリム評議会〉の会長に任命する。この人物は聖都の名門アル＝フセイニ家の若い当主アミンで、ファイサルの盟友でもあり、反シオン主義暴動の黒幕と目されていた。彼の強烈な個性と行動力は、やがてパレスチナに大波瀾を呼び起こす。

11 シオン主義社会の基盤整備

微妙な解釈の変更 民政開始後すぐに二年続きの暴動に直面して、英国政府は聖地の現実をようやく思い知った。1922年6月、植民地相のチャーチルは現地の高等弁務官のサミュエルと協議して当面のパレスチナ政策を発表し、「バルファ宣言に定められた条件は、パレスチナ全体がユダヤの民族的故地に転換されることを意図するものではない。このような故地がパレスチナに建設されるよう期待しているのである」と断言した。²⁰

この長文の白書は戦時下の対ユダヤ約束を改めて確認しているものの、そこには微妙な解釈の変更が読み取れる。戦争に勝ち抜くための権道とはいえ、とんだ重荷を背負いこんだことに、ランダンの政策決定者はやっと気付いた。

チャーチルは「イングランドがイングリッシュであるように、パレスチナはユダヤとなる」と述べたヴァイツマンの発言をわざわざ引用し、このような期待を実行不可能と決め付けたばかりか、英国政府の方針として論外と斥けた。そして、アラブ側が憂慮するような住民、言語、文化の消滅や従属化はあり得ないと強調して、前述の通り確言する。

戦時中、マクマホンがフセインに独立を約束した誓約について、チャーチルは詭弁を弄して苦しい言い訳をしなければならない。オスマン帝国の統治下、パレスチナはシリア南部の総称で、一つの行政単位にまとまっていなかった。ヨルダン川の東岸の内陸部はディマシュク州の一部で、地中海の沿岸部はベイルート州に属する。州はいくつかの県に分かれ、聖都エルサレムとその周辺部は帝国直轄領として、特別の扱いを受けた。

マクマホン書簡はフセインの要求した地域から、ディマシュクなどの三都市の西方に位置するシリアの地中海沿岸部を「純粋なアラブと言えない」との理由で除外している。この地域はベイルート州の北部に合致する。そこでチャーチルは無理な拡大解釈を試み、同じベイルート州の南部まで、さらには、その南側に位置するエルサレムまでをマクマホンの留保した地域に組み込んでしまう。この強引な措置は、シオン主義運動に民族的故地を確保するためで、その代償にアラブ側はトランスヨルダンを与えられたではないか——これが植民地相の本音だった。

新社会の建設をめざす 英国の委任統治下、多数のユダヤ教徒がパレスチナへ組織的に移住を始める。その出身地は、やはりロシアが多かった。1917年2月に起きた革命で帝政が覆されても、かつて信じられたように、ユダヤ問題は解決されるものではない。多くの革命家、その同調者は期待を裏切られ、アレクサンドル・キリエンスキイの臨時政府、そしてボルシェヴィキ政権に失望する。少なからぬ数のユダヤ教徒の社会主義者が〈労働者の祖国〉を見捨ててシオンの地に向かい、無神論のマルクス主義者までが〈神の約束の地〉に渡った。

ヘルツルがスイスのバーザルで第一回世界大会を開催した時、政治的シオン主義は社会主義とは全く無縁だった。しかし、大会が回を重ねるにつれて、頭数の多いロシアからの代議員は国内の時代風潮を反映して、社会主義の色彩を濃厚に帯びてくる。ヘルツルの夢が英国の庇護を得て民族的故地の形で実現すると、1920年、早くもパレスチナ・ユダヤ労働総同盟（ヒスタドルート）がシオンの地に結成された。折りから英政界では労働党が台頭し、1924年には政権を担当するに至っただけに、パレスチナにおけるシオン主義者の新動向はロンドンで好感をもって迎えらる。

政治的シオン主義運動は何よりも組織力に長じ、在パレスチナのユダヤ移民の秘密投票で自前の議会を選出した。これは年に一度の大会を開くだけなので、日常業務を常設の国民評議会に委ねる。この評議会は対英翼賛機関に認定されたユダヤ機構と表裏一体をなし、事実上の政府として機能した。この〈影の政庁〉は英国の委任統治の枠内で、教育、衛生、社会福祉などの分野で広範な自治権を行使したばかりか、秘密の自衛団（ハーガナー）に若者を徴集して軍事訓練を施す。この地下の武装組織はやがてアラブ人と英国官憲と戦い、後にイスラエル国防軍の基礎となる。

バルファ宣言の約束が着々と実行に移されるのと並行し、ヴァイツマンは世界シオン主義会議の会長として各国のユダヤ社会の代表と交渉し、非シオン主義のユダヤ諸団体にも幅広く協力を求めて、パレスチナの対英協力機関へ参加してもらった。これでユダヤ機構の地位は国際的に一段と強化され、委任統治国や国際連盟と対等の立場で交渉するに至った。²¹

ユダヤ移民の変遷 西暦135年、ユダヤの民が最後の反ローマ蜂起に失敗してパレスチナから離散して以来、その子孫はいつの日にかシオンの地へ戻ることを祈念した。この望郷の想いはクリスチャン社会の差別と迫害で増幅され、宗教的イデオロギーとなって欧州在住のユダヤ教徒の間に継承される。「では来年、エルサレムで」と、ユダヤ暦の年末に挨拶の言葉が交わされた。

交通の不便な昔、パレスチナはあまりにも遠い。ヤハウエの信徒たちは熱烈な憧憬の念にもかかわらず、実際にダヴィデの都を訪れる者はほとんどなかった。十九世紀に入って蒸汽船と汽車の時代が到来してから、巡礼はずっと容易になった。ロシアのユダヤ教徒は聖地の旅から帰らずに、そのままパレスチナに居着く者も出てくる。

1880年代の大迫害を契機に、ロシアからパレスチナへ移民の第一波が押し寄せた。彼らは宗教的シオン主義者で、憧れのシオンの地にたどり着くと、荒野の開墾に従事した。過酷な農作業に耐え、額に汗しながら〈生産的労働〉の喜びを味わう。やがて大半の者はフランスのロッチルド家の保護下に入り、北アフリカのアルジャリアやチュニジアと同じ形態の植民地式農業を営む。

十九世紀の終わり近く、ヘルツルの始めた国家再興運動は、シオン主義の宗教的イデオロギーを民族主義的、政治的イデオロギーに変換する。さらに二十世紀の初頭、日露戦争と革命に伴うロシア国内の混乱は、またもや迫害を巻き起こす。この時、移民の第二波がパレスチナへ押し寄せた。

その大半は未婚の若い青年男女で、さまざまな困難に直面しながら、シオンの地に理想境の樹立を夢想する。彼らはヤハウエ信仰を維持したものの、厳格な正統派教徒と異なり、宗教より社会問題に関心を向けた。ある集団は搾取なき社会の実現をめざし、別の集団は私有財産制否定の農業共同生活体（キブツ）を築く。²²

1920年代に入って、移民の第三波がパレスチナへ押し寄せた。それまでの移民がトルコ政府の許可を得て小規模だったのとは異なり、今回は受け入れ地で津波のように感じられる。しかも大国の支持と援助を得ているだけに、アラブ人は欧州の軍事的、文化的侵略と受け止める。二年続きの暴動は、地元の反撥と不安の端的な表現だった。²³

第一次世界大戦後のヴェルサイユ体制は、欧州地図を大幅に塗り替えた。かつてロシア、プロシア、オーストリアに分割されたポーランドが、独立国としてよみがえる。しかし、ユダヤ教徒はカトリック勢力の強い再興国家で、相変わらず少数派信仰集団の悲哀をかこつ。1924年からユダヤ移民の第四波がパレスチナへ押し寄せ、その大半はポーランドの中産階級の出身だった。

この頃になると、移住者の性格が大きく変わり、第三波までの農業指向、社会主義的色彩は薄らいだ。ポーランド系移民は都市に好んで定住し、小工場や商店を経営する。テラヴィヴの町は、二十世紀の初頭、第二波の移民によってアラブの港町ヤッフォ近くの砂丘に建設された。第四波の移民がここに集中して住み着いたので、地中海岸の新開地は欧州風の大都会に発展する。

第一次世界大戦後の十年間に、十万人以上の東欧系ユダヤ教徒がシオンの地

に移住する。しかし、チャーチル白書が述べた通り、パレスチナ全体はすぐにユダヤ化されなかった。かなりの人数が憧れの地にたどり着いたものの、その厳しい風土になじめず、思わしい働き口もないまま、米国へ再移住したからである。とはいえ、外来の影響は大きな社会的・経済的変動をもたらし、アラブ人の伝統的生活を根底から揺り動かす。²⁴

最初の二年続きの暴動を除いて、1920年代は意外にも平穏に過ぎ去ろうとした。もちろん、アラブ側は抵抗をすっかり諦めた訳ではない。1925年、バルファがパレスチナを訪れると、同盟罷業の手荒い歓迎を受けた。この相対的に安定した時代は、次の危機をはらんでいた。1929年 8月、またもや大暴動が火の手を上げ、英官憲の肝を冷やす。英国政府はアラブ人の民心の動向を見誤り、その前年に駐留部隊の大半を本国に引き揚げていた。

12 土地買収の制限

聖地揺るがす大暴動 暴動は些末なことから始まり、パレスチナ全土に荒れ狂う。1928年、ユダヤ教徒は長年の宗教的慣習と英当局の禁令を無視して、エルサレムの嘆きの壁の前の広場を衝立で仕切り、男女の礼拝者を分離した。遙かな昔、将軍ティツス指揮下のローマ軍団は聖都に籠城のユダヤ叛徒を討伐し、抵抗拠点のヤハウエ神殿を徹底的に打ち壊す。それから千八百年の風霜を経て、この石壁だけが唯一神の宮居の跡をしのばせる。その後、広大な跡地にはイスラーム教の壮麗な礼拝堂が建ち、異教徒の立ち入りを禁じた。ユダヤ教徒は神域の外の広場に集まり、聖なる石壁に祈りを捧げる。この衝立をめぐる紛争が、暴動の発火点となった。

アミン・アル＝フセイニは英委任統治当局から要職のマフティに任命されながら、対英協力者に転向しなかった。むしろ、その特権的立場を利用して民族主義運動に挺身し、この事件を絶好の宣伝材料として取り上げる。ユダヤ側の意図は侵犯の既成事実を積み重ねて、行く行くは神域を乗っ取り、そしてイスラーム礼拝堂を取り壊し、ヤハウエの神殿を再建する魂胆だ――と。

この扇動は第三者の耳に荒唐無稽に響いても、ユダヤ移民の増加に不安を感じたアラブ民衆の間に深く浸透する。翌1929年 8月、両者の対立は流血の衝突に発展した。この大暴動でユダヤ側は百三十三人の死者と三百三十九人の負傷者を出し、アラブ側は百十六人の死者と二百三十二人の負傷者を出す。

一見したところ平穏な情勢が、なぜ急転して最悪の事態を招いたのか。流血の事件は積もり積もった不満と不安の直接的表現に他ならず、英委任統治体制の下で内向した敵意を発散させた。この時期、反シオン主義運動の矛先は、まず何よりも土地買収に向けられる。いかにチャーチルが心配無用と保証しても、アラブ側はパレスチナ全土のユダヤ化を危惧した。

土地の買いあさり 十九世紀の終わり近く、宗教的シオン主義者が聖地へ入り植して以来、欧州から移住のユダヤ教徒はパレスチナで土地を買いあさる。現地のオスマン当局は許可を得た農業移民に対し、開墾用地として国有地を払い下げた。二十世紀に入って、政治的シオン主義運動は土地買収基金を設け、積極的に土地買収に乗り出す。外国人が相場よりも高く買い取るので、負債に苦しむアラブ人の小地主は耕作地を手放した。

英国の委任統治が始まると、ユダヤ側の土地買収はますます盛んになる。この時期、大地主は広大な土地を売り渡し、濡れ手に粟の巨利をつかんだ。彼ら

の多くはディマシク、ベイルート、カーヒラ在住の不在地主で、無価値の荒地まで高値で売れるのを喜んだ。アラブ社会は俄か景気に浮かれ、伝統的価値観を揺さぶられる。²⁵ 一部の者はますます富み、大多数の者は物価上昇で窮乏感を味わう。

シオン主義運動の土地買収がいかに合法的でも、パレスチナの社会的緊張を尖鋭化せずにはおれない。土地の所有権移転により、貧しい小作人は耕作地を取り上げられて、生計手段を奪われた。一昔前までユダヤ農園は低賃金ながらアラブ人の農業労働者を雇ったが、買収された農地では労働力をユダヤ移民だけに依存し、アラブ人を排除する。遊牧民は家畜を自由に放し飼いでいた土地に、突然、ある日から立ち入りを禁じられる。そこがユダヤ側に買い取られたからである。²⁶

土地の買いあさりにはアラブ人の敵意をかきたて、反シオン主義暴動の底流となった。事態の鎮静化後、英国政府は現地に調査団を派遣し、原因究明に当たらせる。その報告書は紛争の真因をユダヤ移民の急増に求め、アラブ側の憂慮を的確に指摘した。²⁷ マフティのフセイニに率いられた代表団はランダムに出掛けて首相や植民地相と会見し、ユダヤ側の土地買収禁止、移民停止などの要求を突き付けた。

ヴァイツマンは報告書の分析と結論に不安を抱き、成立したばかりの第二次労働党政権に働きかける。首相のラムジ・マクドナルドはシオン主義支持を表明し、再調査を約した。そこで英国政府は別の調査団を送り、土地問題に焦点を絞って、改めて現地事情をさぐらせる。その報告書も同じ結論を導き出した。ユダヤ教徒の移住がアラブ人を土地から追い立て、もはやパレスチナに移民を吸収できる余地はない——と。²⁸

新白書 これら二つの報告書を踏まえて、1930年10月、植民地相のパスフィールド卿は新しい白書を発表した。フェビアン協会派の漸進的社会主義者、また経済学者、社会学者として高名なシドニ・ウェップは貴族に叙せられ、労働党政権に入閣してから大英帝国の海外領を統括する立場にあった。あのチャーチル白書からすでに十年を経過し、植民地省も現地の委任統治当局も、パレスチナの情勢を的確に認識するに至った。

この白書はアラブ側の不満の根源をよく理解し、ユダヤ移民の無制限流入と土地買収に歯止めをかける。具体的には、将来の五年間に合計七万五千人の受け入れを認め、その後は移民を停止する——と。パスフィールドの新方針はバルファア宣言を実質的に変更し、パレスチナ委任統治の根幹に触れるものだった。英国の急速な政策転換に、シオン主義者は怒り心頭に発した。ヴァイツマンは白書に対する抗議の意思表示として、ユダヤ機構の会長を辞任する。

シオン主義者は大々的な反対運動を盛り上げ、マクドナルド政権に揺さぶりをかける。その前年、この対英協力機関は組織を拡大して、世界各地の非シオン主義ユダヤ団体まで内部に取り込んだ。このため白書撤回運動は国際的な拡がりを見せ、大西洋の対岸にも飛び火して、しばらく英米関係を冷却させる。労働党はもともと親シオン主義的傾向を持っているので、内部からも白書に批判の声が高まった。

マクドナルドは内外の圧力に屈し、パスフィールド白書を実質的に骨抜きしてしまう。1931年 2月18日、英国首相は誤解を解くためと称して、ヴァイツマン宛てに長文の書簡を送り、弁解に終始した。英国は委任統治の責務を忠実に履行する。移民の制限は現地の経済的吸収能力によるもので、他意はない。白書はユダヤ側の土地取得をこれ以上禁止するものでなく、英国政府は移民の停止や禁止を指示したこともなければ、想定したこともない――と。

シオン主義運動側の強い政治的圧力で、英国政府は公式に表明した立場からあっさりと後退しまう。今度はアラブ側がいきりたつ番で、マクドナルド首相の詫び状を〈暗黒の書簡〉と名付ける。その年の暮れ、マフティのフセイニはエルサレムでイスラーム会議を開催し、二十二カ国から代表を集めて反シオン主義の氣勢をあげた。いまやパレスチナ問題は、イスラーム世界全体の関心事となる。しかし、国際的支援態勢は、ユダヤ側がはるかに優っていた。

実際、英国のパレスチナ政策は振り子のように揺れ動く。当初の親シオン主義的色彩は時の流れと共に次第に薄れ、代わってアラブ側の主張に理解を増す。委任統治の当局者は暴動から教訓を得、現地の情勢を知るに連れて、ユダヤ側に一方的に肩入れするのをやめた。しかし、本国政府の首尾一貫せぬ方針は、かえって双方から不信感を招く。

激増する ユダヤ移民 その頃、ドイツの政治情勢は国内のユダヤ社会に恐慌を巻き起こし、パレスチナにまで深刻な影響を及ぼす。1933 1月、国家社会主義ドイツ労働党（ナチ党）のアドルフ・ヒトラーは政権を獲得し、やがて全権を掌握すると、国策として反セム主義を推進した。²⁹ それまでユダヤ移民の大多数はロシア、ポウランド、ルーメイニアなどの東欧から来たが、この時から中欧のドイツ出身者が目立って増加する。同時に全体の人数も、飛躍的に跳ね上がった。

1930年、ドイツ系ユダヤ教徒のパレスチナ移住者数は、たかだか三百五十人に過ぎなかった。それが1933年には七千六百人に、1934年には九千八百人に急増する。1935年には少し減って八千六百人となったが、1936年には再び増えて八千七百人を数えた。ユダヤ移民の総数も、1930年代には著しく伸びる。1930と1931の両年は大恐慌の後遺症で、四千人台にとどまったが、1932年には一万

人の大台に迫り、1933年には三万人、1934年には四万二千人、1935年には六万九千九百人に達し、1936年には二万九千七百人にまで反落した。³⁰

パレスチナ高等弁務官を始め、現地の英政庁当局者は悲鳴を上げた。一年に二万人以上の移民は、現地の経済的吸収能力をはるかに上回る――と。ユダヤ移民の急増は、必然的に土地の需要を拡大する。アラブ小作農民は、それまで耕やしていた畑から追い立てられた。さらにユダヤ優先の雇用策は、アラブ労働者の失業率を押し上げる。

一度は忘れかけた悪夢が、現実味を帯びてよみがえった。この勢いで欧州からユダヤ移住者が増加を続ければ、アラブ住民は遠からず少数派に転落し、政治的にも、経済的にも強大な外国人の支配下に組みこまれてしまうだろう。実際、パレスチナのユダヤ人口は1919年には僅か五万五千人、1929年には十六万人に過ぎなかったのに、1939年には四十四五千人を超え、総人口の三割を占めるに至った。

この時期、奇妙なことにヒトラルの第三帝国はシオン主義運動に協力を惜しまず、ドイツ系ユダヤ教徒のパレスチナ移住に便宜を図る。ナチ政権は国内から速やかにユダヤ住民を追い出すために、まとまった受け入れ先を必要とした。一方、シオン主義者側は数の劣勢を補うため、可能な限り多数の同信者をパレスチナに集めようとした。両者は不倶戴天の敵同士でありながら、利害関係の一致から協定を結ぶ。³¹

これにより、ドイツのユダヤ教徒は出国に際して、資本や物資の持ち出しを認められた。ヒトラルがナチ政権を樹立した1933年から第二次世界大戦の始まる1939年までの足掛け七年間に、総額一億マルク以上の資本がドイツから聖地へ合法的に移される。これはパレスチナの工業化に役立ったばかりか、アラブ側に対するユダヤ側の優越的立場を確保した。

13 パレスチナの分割試案

半年間の同盟罷業 アラブ側がパスフィールド白書を歓迎したのも束の間、出来事、ユダヤ側は政治力を発揮して巻き返しに成功した。1930年代の半ば、パレスチナのアラブ社会には、英国の委任統治に対する不満が渦を巻く。東アラブ一帯の旧トルコ領を見渡せば、イラクもトランスヨルダンも名目的とはいえ、独立、あるいは半独立の地位を獲得した。フランスの支配下のシリア、レバノンでさえ、一定の自治を認められている。それに比べると、パレスチナのアラブ住民は政治的意思を全く表現できない。しかもユダヤ人口の増加は、暗雲のように重苦しくのしかかってくる。

1935年11月、パレスチナのアラブ諸政党は統一要求を作成し、議会の開設、土地売買の禁止、ユダヤ移民の停止を高等弁務官に要望した。英政庁はアラブ側の不満を宥めるため、他の要求はさておいて議会の設置に応ずる。委任統治の初期、初代高等弁務官のサミュエルは選挙を実施しようとしたが、アラブ側の忌避で実現しなかった。それから十数年、変化の風が吹き始める。

英政庁は代表民主制の実現に向けて動き出す。ところが、議席の配分案がアラブに十四、ユダヤに八となっているので、今度はユダヤ側に拒否される。ユダヤ側は当時の人口比率よりも大きい議席数を割り当てられても、決して満足しなかった。ドイツからの移住者が急増している折りに、代表権を劣勢のまま固定されたくなかったからである。パレスチナの二つの社会は一つの土地で融和することなく、ますます対立を深める。

1936年4月、反シオン主義の諸団体は〈アラブ高等委員会〉を結成し、マフティのフセイニの指導の下で長期間の同盟罷業を決行する。その頃、ユダヤ移民は奔流のようにパレスチナへ流れ込み、同時に武器の密輸入の噂が拡まった。各地で起きた小競り合いの末に、港町のヤッフォと隣接のテラヴィヴで流血の大衝突が発生する。アラブ側はユダヤ移民の停止実現まで同盟罷業の継続を呼号し、さらに税金の不払い運動を始めた。³²

情勢が陰悪化する真最中、英国政府は向こう六カ月間に四千五百人のユダヤ移民を受け入れると発表し、火に油を注ぐ。同じ日、ランダムは対パレスチナ政策の変更をほのめかし、騒乱の原因追究に調査団の派遣を決めたが、とうてい出発できる情勢ではなかった。

この同盟罷業は秋まで半年間も続き、近隣アラブ諸国の仲裁でようやく解除される。³³ しかし、英政庁が移民の停止に応じなかったため、その目的は達成

されなかった。治安の回復までに、ユダヤ側は八十人、アラブ側には百四十五人、英国には三十八人の犠牲者を出す。

深まる — 方の対立 パレスチナに法と秩序がよみがえった1936年11月、やっと調査団が現地に到着した。団長のピール卿はかつてインド相を務め、植民地行政にくわしい。しかし、病身だったので、報告書の取りまとめは前駐独大使のホレイス・ランボルドの手に委ねられる。この外交官は国家社会主義の台頭と反セム主義の猛威をベルリンで目撃していた。ピール調査団は現地に二カ月間滞在し、六十六回にわたってアラブとユダヤの双方の関係者に問題点を質した。

当初、アラブ側は調査を受け入れず、事情聴取に応じなかった。ヴァイツマンも英国流の調査団方式を好まなかった。これまでの経験から、植民地省が調査報告書を楯に取って、移民の停止や土地買収の制限を押し付けると警戒したからである。だが、英労働党の親シオン主義議員たちはユダヤ側を説得し、調査に協力を勧告する。英国政府も調査期間中に移民の停止はないと、ヴァイツマンに保証した。

ユダヤ側はピール調査団に提出した覚書や公聴会で述べた意見で、予想以上に協調的姿勢を示す。ヴァイツマンは対等の原則を主張した。流血の衝突にもかかわらず、ユダヤとアラブの妥協は不可能でない。パレスチナの二つの社会の人口に大小の差はあっても、一方が他方を支配することがあってはならない。もし議会が開設されるなら、この原則が適用されるべきだ——と。対英協力機関の現地責任者で、十数年後にイスラエルの初代首相となるベン＝グリオンは、次の公式見解を強調した。シオン主義の目的はパレスチナをユダヤ国家にすることではない——と。

ピール調査団の帰国直前、アラブ側は戦術を転換し、フセイニが公聴会に参考人として出席する。バルファア宣言はアラブの立場を侵害し、シオン主義者に肥沃な土地の奪取を許したばかりか、パレスチナの独立を阻害している。ユダヤ側の究極の目的はイスラーム教の聖域に侵入し、そこにヤハウエの神殿を再建することだ。英国は直ちにユダヤ移民を停止し、土地の買収を禁止すべきだ——と。彼は従来の主張を繰り返し、バルファア宣言の破棄、委任統治の失効を要求した。

ユダヤ側はアラブ側の意見陳述に対し、公聴会で反論する。英国は国際連盟のパレスチナ委任統治協約の条項に違反し、吸収能力の限度までユダヤ移民を受け入れていない。フセイニの主張する即時独立は、ユダヤ社会をアラブの支配下に置き、それを危険な状態に追いやる。英国はアラブの暴力行為を鎮圧し、民族的故地の建設にもっと力を貸すべきだ——と。

分割こそ唯一の解決策 双方の主張は平行線をたどるだけで、全く相容れなかった。ピール調査団は「アジア的性格のアラブ」と「ヨーロッパ的性格のユダヤ」の共存を不可能と判断し、1937年7月に公刊した報告書でパレスチナの分割を提議した。英国は委任統治をやめ、係争の地をアラブ地域とユダヤ国家に分ける。ただし、聖都エルサレムとイエス生誕の地ベツレヘムは、引き続いて英国の統治下にとどまる——と。

この分割試案では、ユダヤ国家の領域は地中海の沿岸部の北半分とガリラヤ湖の周辺部で、パレスチナ全土の約二割を占める。ここが独立国家になれば、たとえ面積は広大でなくとも、ヒトラル独裁下のドイツから多数のユダヤ難民を収容できよう。もはや移民の受け入れに、英政庁の許可を必要としない。一方、アラブ側はパレスチナの大部分を得て、先祖伝来の地を乗っ取られる心配はもはや無用となる。しかも念願の独立を獲得するからには、土地の一部をユダヤ側に譲ることぐらい我慢してもよいではないか……。

この報告書は率直に過去の失敗を認め、分割こそ唯一の解決策と断じた。しかし、ピール調査団の結論は自画自賛するように「計り知れないほどの平和の恩恵」をもたらすどころか、アラブとユダヤの双方から反撥を買う。

アラブ側はたちどころに拒否した。この提案が民族政府の樹立——独立と引き換えに、不可分の国土を分割するからである。一方、ユダヤ側は戸惑いを見せた。この勧告があっさりとユダヤ国家を認めたからである。それまで英国政府はパレスチナに〈国家〉でなく〈故地〉を樹立すると称した。シオン主義運動の指導部も真の意図を隠して、ベン＝グリオンが公聴会で力説した通り、ユダヤ〈国家〉という表現を意図的に避けていた。

実現不可 パレスチナ分割試案はシオン主義運動に大きな波紋を投じ、三十三年前のユーガンダ論議を想起させる。ある者は手放しで喜んだ。悲願の故国再興が近付いた——と。だが、別の者はピール報告書の内容を吟味し、たちまち怒り狂った。シオンなきユダヤ国家に絶対反対——と。報告書発表の翌月、世界シオン主義会議はチューリヒで第二十回大会を開き、会場には賛否両論が渦を巻く。

もともとシオン主義運動の右派は、委任統治の領域に大きな不満を抱いていた。英国がハーシム家のアブダッラーを懐柔するため、ヨルダン川の東岸を切り離したからである。国際連盟がユダヤ側のパレスチナに対する歴史的関係を認めるからには、英委任統治下の領域は旧約聖書に基いてトランスヨルダンを含めねばならない。この〈エレッツ・イスラエル〉（字義は「イスラエルの地」で、大イスラエルの意）の要求は極めて根強く、政治的シオン主義運動に分裂をもたらす。³⁴

ヴァイツマンは大会で批判の矢面に立たされた。過去二十年以上、この功労者はシオン主義運動の成否を英国の善意に賭けてきたので、ピール調査団報告書の内容に多少の問題があっても、パレスチナ分割試案に賛成の意向を固める。その面積が狭いにせよ、独立ユダヤ国家はドイツ第三帝国の迫害から逃れた同胞の避難所となり得る。最新農業技術の導入で荒れ地の開墾を進めれば、二百万人の吸収は可能となるだろう。ピール提案を非難するのは簡単だが、これに代わる名案があるだろうか——と。

大会は紛糾した末に、三百対百五十八の表決で、ヴァイツマン指導の執行部に対英交渉権を付与した。大会決議自体はピール報告書の分割試案を受諾せず、ユダヤ国家の樹立に関する条件を詰めるよう定めただけである。大会の決定を受けて、ユダヤ機構が会議を開くと、出席の非シオン主義者たちはパレスチナの分割について疑念を呈した。1929年にユダヤ機構の組織が拡大されて以来、彼らは対英協力機関に加わったが、ユダヤ国家の構想そのものには賛成できなかったからである。

1938年秋、英国政府は分割案の細部を詰めるためと称して、別の調査団を現地に派遣した。だが、その頃のパレスチナは大騒乱の真只中にあり、ピール報告書の提案について実現不可能の結論を出す。そこでランダムは改めて声明を出し、分割と独立の抱き合わせによる問題解決が不首尾に終わったことを公式に認め、委任統治の継続を表明せねばならなかった。こうしてパレスチナの分割案は、アラブとユダヤの賛同を得られぬまま、当の英国政府さえ諦める。

血みどろの戦場に チューリヒで世界シオン主義会議が分割案の是非を論じていた頃、シリアのブルダンで汎アラブ会議が約四百人の代表を集めて開催され、満場一致でピール調査団の提案を拒否した。大会決議は、強硬な文言でちりばめられた。パレスチナはアラブの地であり、それを守り抜くのはアラブ国家の神聖な責務である。聖地の分割でユダヤ国家が出現すれば、それはアラブ世界に敵対する外国勢力の基地となろう——と。

パレスチナの情勢は、前年秋の同盟罷業解除後、しばらく小康を得ていたが、ピール調査団の報告書が論議を呼んでから、急速に悪化する。1937年10月、英国人官吏の暗殺事件を契機に、英政庁はアラブ高等委員会を非合法化し、さらにフセイニをマフティの地位から解任した。

フセイニは英官憲の手の及ばぬ嘆きの壁の奥の神域に逃げ込み、ついでレバノンへ脱出に成功する。そこから仏当局の黙認の下で、反英、反シオン主義闘争を指揮した。高等委員会の主要幹部は逮捕され、流刑囚としてインド洋のセイシェル諸島に送られる。しかし、アラブ側の抵抗運動は英国の強硬策でも終わらなかった。それから一年半にわたって、聖地は血みどろの戦場と化す。

すでに二年前、ゲリラ戦は始まっていた。この闘争は従来の突発的暴動と異なり、パレスチナから武力で外国勢力——英官憲とシオン主義者——の排除をめざす。民族主義者のイッジディン・アル＝カーシムは人里離れた岩山の洞窟に根拠地を構え、同志に軍事訓練を施した。彼の組織は単なる武装集団にとどまらず、対外宣伝機関まで設ける。1935年秋、このゲリラ部隊はユダヤ武装勢力と衝突し、増援の英国軍とも戦った。だが、激しい銃撃戦の末に壊滅し、カーシム自身も戦死を遂げる。³⁵

莫大な数の犠牲者 当時の悪い道路事情では、警察や軍の装甲車は村落へ容易に入りこめない。アラブの戦士は交通不便で近付き難い丘陵地に立てこもって、折りを見てユダヤ開拓農園を襲撃し、英軍や警察の哨所を攻撃する。道路に地雷を埋設し、障害物を築く。列車の脱線や送油管の切断の破壊工作を行う。さらにシリアやイラクから義勇兵が馳せ参じ、解放闘争の戦列に加わった。

英軍も反撃に出る。地上部隊がゲリラを包囲して追い詰め、飛行機が空から爆弾を投下する。ある村落が武装集団の巣窟と疑われると、家屋は片端から爆破される。住民の一部が戦士をかくまったり、食糧を与えたりすると、治安当局は村全体の連帯責任を問い、法外な金額の罰金を科す。さらに外出禁止令を出して、農民の野良仕事を妨害し、武器所有禁止令を布告して、違反者に死刑の極刑を課した。

対英武装闘争は次第に内向化し、たびたび同胞まで血祭りに上げる。英官憲の協力者と疑われると、誘い出されて人民裁判にかけられる。不運な者は即決処刑され、幸運な者は拷問で半死半生の目に遭ってから釈放された。英政庁はアラブ穏健派の育成で事態収拾を図ろうとして、名門のフセイニ家と対抗関係にあるナシャビ家を交渉相手に取り立てる。だが、前のマフティはすぐに刺客を送り、裏切り者を暗殺した。

いまやアラブ人同士が血を流し合う。英政庁に勤務の職員、ユダヤ側に土地を売った地主、ゲリラに献金を渋った資産家、それぞれに容赦ない運命が待ち受ける。フセイニは亡命先のディマシュクから反英、反シオン主義闘争を指揮したが、現地のゲリラ活動は相互の関係を欠いた。指導者間の個人的反目、主導権争いの派閥抗争から、ついには武装集団同士の衝突さえ起きる。

1939年に入ると、アラブの抵抗も次第に力尽きた。この武力闘争は莫大な犠牲を伴い、アラブ側に約五千人の死傷者を出す。この時、パレスチナの情勢に大きな変化が生じた。英国政府は対独戦争を不可避と判断し、アラブ諸国の支持をつなぎとめるために、ユダヤ側への一方的肩入れをやめ、政策転換を断行した。それは新しい白書で具体的に明確化される。

14 親アラブ政策へ急転回

欧州戦争 1930年代の後半、ロンドンではベルリンの脅威を日増しに感じ、戦争の危機に備え始める。イラクの石油を確保し、スエズ運河の航行を維持するには、是が非でもアラブ世界の支持と協力を取りつけねばならない。パレスチナ問題の解決は、英帝国の安全保障のため緊急事となった。

第三帝国の宣伝機関は英軍の強硬手段に大々的な非難を浴びせ、アラブの民心を引き寄せようと試みる。³⁶ 亡命中のフセイニはとうに英国を見限り、ドイツ、イタリの枢軸国に接近した。ある時期まで反セム主義のドイツは国内からユダヤ教徒を追い出すため、シオン主義者と奇妙な利害の一致を見た。だが、ナチ・ドイツはユダヤ国家の出現を座視できない。それが英国の後ろ楯を得て、反ヒトラル運動の砦となるのを恐れたからである。

英外務省は植民地省よりも、広い見地から中東政策の再検討を迫られた。アラブ諸国に駐在の外交官から、警報がぞくぞくと届く。パレスチナの分割を強行すれば、大衆運動に火を着けるどころか、親英的な国王や首長の離反さえ招きかねない——と。イラク、トランスヨルダン、サウディ・アラビア、エジプトなど、場所は異なっても、現地の情勢分析は一致する。

パレスチナ問題をめぐって、外務省と植民地省とは対立を深めた。しかし、政府としてはピール調査団の報告書をすでに承認している。そこで前者は後者の反対を押し切り、分割実施の技術的細目を詰める名目で、別の調査団の派遣を提案した。首相のネヴィル・チェンバリンは閣内の対立に断を下し、外務省の肩を持つ。ヒトラルはすでにオーストリアを支配下に収め、次にチェコスロヴァキアのズデータン地方を狙った。もし中東にも触手を伸ばしたら、反英勢力に大きな励ましとなるだろう。

1938年5月の内閣改造で、自治領相のマルカム・マクドナルドが植民地相に横すべりした。この人事異動はユダヤ側から歓呼の声で迎えられ、まだ三十歳代後半の若い閣僚に過大な期待が寄せられる。³⁷ 八年前、彼はオックスフォードの学生時代の指導教官から依頼されて、シオン主義者を父の首相に引き合わせ、パスフィールド白書を骨抜きするのに一役買った。

マクドナルドはヴァイツマンと個人的親交を深め、かねてからシオン主義運動に好意を持っていた。しかし、就任早々、閣僚として重大な任務を悟る。この危機の時代には何よりもまず大英帝国の利益を優先させねばならない——と。

間もなく新任の植民地相は私情を殺してまで、何度も苦しい決断に迫られた。ヒトラルに迫害されたユダヤ教徒だけに特別に配慮して、アラブ世界を失ってはならないからである。

当時、戦争の暗雲が欧州の空に低く垂れこめる。ズデータン危機はチェインバリンの宥和政策で、ひとまず回避された。老首相は自らドイツへ飛び、ヒトラルと会談して束の間の平和を得る。だが、この独裁者の領土的野望はとどまるところを知らず、オーストリア、チェカスロヴァキアの次にはポウランドの併呑をめざす。遅かれ早かれ、英独の軍事的対決は避けられまい。

円卓会議 中東情勢について、英国軍部も外務省と同じ認識を抱いて**を開催**した。もし対独戦争が始まれば、アラブ世界の油田、運河、軍港、飛行場は戦略的見地から絶対に確保せねばならない。ピール調査団の勧告通りユダヤ国家の建国が強行されれば、アラブ諸国の決定的離反を招くだろう。そのような事態に至らぬために、パレスチナの分割を取りやめ、戦乱を終わらせることが、何よりも急務である——と。

外務省の画策した新しい調査団は、1938年11月、パレスチナの分割について実行不可能の結論を出した。これでユダヤ国家の創設は棚上げされ、当分の間、アラブ世界を英国の陣営につなぎとめられよう。ついで英国政府は善後策を講ずるために、ユダヤとアラブの代表をランダンに招いて、円卓会議を開くことにした。

これには付帯条件が付いた。会議に出席の代表団の顔触れについて、英国は拒否権を留保する。これでマクドナルドはフセイニの参加を封じた。前のマフティが公然と出席すれば、英国の屈服と解釈されるからである。もう一つ、この三者会議がパレスチナの将来について合意に至らぬ場合、英国としては独自の方針を定めて実行に移す。土地買収、移民の割り当て枠——いずれの問題もユダヤとアラブの立場が尖鋭に対立し、まず妥協はむずかしい。初めから英国政府は会議の結末を見越し、あらかじめ釘を刺す。

1939年 2月、英京で円卓会議が開かれたものの、アラブ側はユダヤ側と同席するのを拒んだ。このため英国は双方と別々に交渉を進めなければならない。会議は実りないまま、3月に決裂してしまう。

対独戦に際して英国がアラブ諸国を味方に引き留める——少なくとも好意的中立を取り付けるために、マクドナルドはひそかに舞台裏でアラブ代表団に接触し、ユダヤ移民の受け入れの許容限度を打診した。その結果、今後五年間に七万五千人ならば反対されないとの感触を得る。この秘密工作は閣内の親シオン主義者からユダヤ側に筒抜けとなった。ヴァイツマンは大いに怒って、マクドナルドに裏切り者との悪罵を浴びせ掛ける。³⁸

新白書 1939年 5月17日、マクドナルドは新しいパレスチナ政策を**発表**した。ランダンの円卓会議が物別れに終わったからには、英国政府は留保条件の通り、独自の方針を一方的に宣言したのである。

この長文の覚書はピール報告書の主要な柱——パレスチナの分割、ユダヤ国家の独立——を斥け、アラブ側の主張を大幅に取り入れた。新白書は、政体、移民、土地の三部に分かれ、第一次世界大戦後の対パレスチナ政策の総決算を意図する。³⁹

まず将来の政体について。白書は十年以内にアラブでもユダヤでもない単一〈パレスチナ国家〉の独立を想定する。双方の社会とも、それぞれの本質的権利を保障されつつ、国政に参与する。独立に至る経過期間中、英国は委任統治国としての責任を負うが、政庁の主要役職にはアラブとユダヤの人口比に応じて人材を登用する。彼らは高等弁務官の監督と英国人顧問の助力の下に職責を果たし、高等弁務官の諮問会議——ゆくゆくはパレスチナ国家の内閣——に出席する。

次に移民について。ユダヤ教徒の将来の比率がパレスチナ全体の人口のほぼ三分の一になるよう、今後五年間に経済的吸収能力に基いて七万五千人を受け入れる。それ以上の移民は、アラブの同意なしには認められない。不法移民の取り締まりに努力を払うが、国外に追放できぬ密入国者の人数は、年間の割り当て枠から差し引く。

最後に土地について。アラブとユダヤ間の売買は、ある地域では禁止し、別の地域では制限する。この白書の発表の日から高等弁務官は所有権移転の禁止、あるいは制限に関して総括的権限を付与され、独立達成に至る経過期間、この権限を保持する。

シオン主義者は怒り狂った。ユダヤ機構は抗議声明を発表し、激烈な言葉を並べ立てる。パレスチナの権力は、アラブ側に引き渡された。いつまでもユダヤ側は少数派の地位に甘んじねばならず、さらに多数派のアラブの意のままになってしまう。この政策変更は英国の信義違反、アラブのテロリズムへの屈服に他ならない。英国はこともあろうに、ユダヤの歴史で最も暗黒の時期に、迫害された民から最後の希望を奪い、母国へ帰る道を閉ざした——と。

この声明は強調する。これまでユダヤ側はアラブ側の暴力に対して報復することなく自制に努めてきたが、決してテロリズムに屈したことはないし、将来も屈することはないだろう。だが、ユダヤ開拓者は今日から移民、民族的故地、自由を守るため、先駆者が見捨てられた故国の再興に尽くしたのと同様の力を発揮するだろう——と。⁴⁰ 間もなく英政庁はアラブの武力抵抗に代わって、ユダヤ過激派の実力行使に手を焼く。

アラブ側も白書の受け入れを拒否した。英国の対パレスチナ新政策が相当な譲歩を示しながらも、アラブ国家としての即時独立、ユダヤ移民の全面禁止など、年来の要求を盛り込んでいないからである。円卓会議に出席のアラブ代表団の中には、白書の内容に満足する者もいた。しかし、うっかり妥協的態度を見せれば、どんな批判にさらされることか。強硬論の陰に、穏健派の意見は隠れてしまう。

再び世界大動乱に 1939年 9月 1日、ナチ・ドイツはポーランドに対して電撃戦を仕掛けた。二日後の9月3日、英国は第三帝国に宣戦を布告する。またもや欧州大陸は大動乱に突入した。マクドナルド白書の狙いは、見事に的中する。ヒトラー・ドイツの緒戦の勝利が目覚ましかったにもかかわらず、英国はアラブ世界を味方の陣営につなぎとめ、中東各地の戦略的要衝を維持できた。

英国の政策が親アラブに急転回したため、世界シオン主義運動の指導部、パレスチナ在住のユダヤ住民は大打撃を受けたが、大戦中はひとまずヒトラー打倒の戦争努力に協力する他なかった。多数のユダヤ青年が内心に複雑な気持ちを抱きながらも、英軍の志願兵として軍務に服す。パレスチナは巨大な兵站基地と化し、軍需産業が興隆した。ナチ・ドイツから聖地に持ち込まれた資本は、反独戦争に有効な用途を見出す。

マクドナルドはパレスチナの現実を認識し、バルファ宣言以来の過ちの積み重ねを、ある程度まで、この新政策で是正しようと試みた。だが、それは最大の同盟国・アメリカと外交的摩擦を引き起こす。大戦中から戦後にかけて、シオン主義運動はユダヤ人口の多い合衆国に支持基盤を固め、国内政治とからめて米国の外交政策に圧力を掛けた。

マクドナルド白書は十年後にパレスチナの独立を想定したが、発表から七年後に破棄されてしまう。英国政府はシオン主義過激分子の武装抵抗に悩まされ、聖地のユダヤ社会の敵意と非協力の前に屈し、二十五年に及ぶ委任統治の放棄に追い込まれた。その結果、パレスチナは分割され、ユダヤ国家のイスラエルが神の約束の地に出現する。ここにユダヤ移民が無制限に流入し、相次ぐ戦乱でアラブ側は土地を奪われた。

バルファ宣言から三十年後、かつてヴァイツマンが預言した通り（そして、チャーチルが否定したのとは正反対に）、イングランドがイングリッシュであるように、パレスチナはユダヤの地となった。アラブ側の懸念は決して杞憂ではなかったが、ことさらに英国の為政者から無視されたのである。

〈第三部の註と参考文献〉

1 マクマホン書簡は英国政府の白書の中で部分的に引用されるにとどまったが、十二年後の1937年になって、ようやく全文がランダム発行の『タイムズ』紙に公表された。引用箇所は、次の資料集による。〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), The Arab-Israel Reader: A Documentary History of the Middle East Conflict, Revised and updated (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、15~17頁〕

2 十六世紀、エジプトのマムルーク王朝が滅亡した際、カーヒラのハリーフはイスタンブールに連行されて肩書を奪われる。その後、この地位は有名無実化し、地方の領主が勝手に名乗ることさえあった。やがてオスマン帝国の歴代スルターンは単なる軍事征服者でないことを示すにも、この称号を併用するに至った。十八世紀、ロシアが対トルコ戦争に勝利を収めて、黒海の沿岸地方を独立させた(後に併合する)際の平和条約で、スルターンは他国の主権下のイスラーム教徒にも、宗教上の権威を保持できると認められた。〔P. M. Holt, Ann K. S. Lambton and Bernard Lewis(Eds.), The Cambridge History of Islam, Volume 1A: The Central Islamic Lands from Pre-Islamic Times to the First World War (Cambridge: Cambridge University Press, 1970年)、355頁〕

こうしてハリーフの地位は、近代的意味において、国際的承認を得たことになる。その後、この宗教的権威は英領インドのイスラーム教徒にも及んで、ハリーフはしばしばカトリック教皇になぞらえられた。しかし、オスマン帝国の国力衰退に連れて、この称号は殆ど実体を伴わなくなった。

3 改革派の軍人は〈統一・進歩委員会〉を権力基盤に内政面で一定の成果を挙げたが、対外関係では失敗と後退を繰り返す。権力掌握から第一次世界大戦までの五年余の短期間に、欧州のボールカン半島の領土をほとんど喪失し、北アフリカのリビアをイタリに奪われた。それだけにアラブ人の動向に注目し、鉄の棒で締め上げた。

4 トルコの官憲は金貨で決済するのを禁じて紙幣を押し付けたり、砂漠の生活に欠かせない駱駝を没収したりするなど、戦時強権を発動する。当初、アラブ人は長年の従属関係からトルコの戦争努力に協力したが、壮丁の徴兵と物資の徴発、性急なトルコ化の強要に、やがて民族的反撥を強めた。〔Y. T. Toni and Suleiman Mousa, Jordan: Land and People (Ministry of Culture and Information, Government of the Hashemite Kingdom of Jordan)、25頁〕

5 この考古学者の秘密工作員は後に〈アラビアのロランズ〉として知られ、英国内で活躍ぶりを大々的に喧伝される。当時、欧州の戦況は手詰まり状態に陥っていたので、英軍部は戦意高揚のために英雄を必要とした。彼のようにアラブの軍勢と行動を共にした工作員は他にもいたが、宣伝材料に取り上げられなかった。その結果、ロランズが徒手空拳でアラブの蜂起を指揮し、ついには勝利に導いた——という神話まで生まれる。〔Peter Mansfield, The Arabs (Harmondsworth: Penguin Books, 1978年)、198頁〕

戦後、ロランズは回顧録を執筆し、列車襲撃やアカバ攻略などを活劇風に描写した。この Seven Pillars of Wisdom は、現在も版を重ねている。

6 英国の戦史家は、アラブの叛乱がトルコ軍の兵力を分散させ、英軍の戦力を消耗させることなく、戦局の挽回に貢献した——と述べ、ファイサル指揮下のゲリラ部隊の役割を高く評価している。〔B. H. Liddell Hart, History of the First World War (London: Pan Books, 1982年)、212頁〕

7 英国は親トルコのアラブ部族に対抗させるために、ハーシム家と敵対関係にあるサウード家にも武器や軍資金を供与した。〔David Holden and Richard Johns, The House of Saud (London: Pan Books, 1983年)、63~65頁〕

8 ファイサルは平和会議に出席するためパリに出かけた際、ロランスの強い勧めでヴァイツマンに会う。両者が署名した1919年1月3日付の合意文書は、バルファア宣言を認め、パレスチナにユダヤ教徒の大量移住、開墾の促進をうたいあげた。この文書がユダヤ国家とか民族的故地などの刺激的表現を慎重に避けたので、ファイサルは独立アラブの経済的基礎の確立にユダヤ教徒の協力を当て込み、シオン主義者との取り引きに応じた。しかし、念願の独立が実現しない場合、この合意は無効になると、ファイサルは文書の末尾に手書きで留保条件を書き足した。〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), 前掲の資料集、18~20頁〕

9 国際連盟は世界平和維持機構として、ウィルソン米国大統領の提唱により、ヴェルサイユ条約と表裏一体をなす形で発足した。しかし、米国上院は批准を否決して孤立主義の伝統を守り、ウィルソンは失意のうちに間もなく世を去った。〔Frederick L. Schuman, International Politics: The Western State System and the World Community (New York: McGraw-Hill, Reprinted by Kogakusha: Tokyo, 1958年)、94頁、211~214頁〕

10 バーザル宣言の引用箇所は、次の資料集の英訳によった。〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), 前掲書、11頁〕

11 1921年 8月27日、ファイサルは、英国の委任統治の枠内で新たに創設されたイラク王国の元首として、正式に即位する。その前に英国の裏工作で、国会は満場一致で彼を国王に推戴した。続いて実施された国民投票で、新国王は96%の支持を獲得する。しかし、この政治劇の舞台裏で、英国はファイサルの権威に挑戦しかねない有力族長のターリブ・アル＝ナキーブの勢力を取り除き、この実力者を国民投票の前に英領のセイロン島に送り出す。〔Phebe Marr, The Modern History of Iraq (Boulder: Westview Press, 1985年)、36頁〕

12 アブダッラーはヨルダン川の両岸にまたがるアラブ国家の創設を要求したが、チャーチルはバルファア宣言でシオン主義者に与えた約束の手前、この要求を会談の論議の対象外として蹴った。〔Y. T. Toni and Suleiman Mousa, 前掲書、35頁〕

13 フセインは英仏両国の委任統治の押し付けに憤り、ヴェルサイユ平和条約の批准を拒否して、国際連盟に加盟する道を自ら閉ざす。その結果、隣国ネジドの支配者サウード家から侵略されても、国際社会から同情を集め得なかった。〔George Lenczowski, The Middle East in World Affairs, Fourth edition (Ithaca: Cornell University Press, 1982年)、575~576頁〕

14 フセインは1924年10月に退位し、長男のアリーに王冠を譲った。新しいヒジャーズ国王も翌年暮れにサウード家の軍勢の攻撃で領土の大半を喪失し、イラク国王の弟ファイサルの許に身を寄せる。これでハーシム本家は完全に没落した。老残のフセインはキサ

イプラス島で晩年を過ごす。1931年、次男アブダラーを頼ってアマーンへ行き、そこで客死する。

ヒジャーズ王国は滅亡する前に、北部地方のアカバ、マアン周辺一帯の領土を同じハーシム家のトランスヨルダン首長国に割譲した。〔Y. T. Toni and Suleiman Mousa, 前掲書、40頁〕

1932年 8月、アブダル=アジーズ・イブン=サウードは〈ネジド王国ならびに服属諸国〉を、1925年にフセインから奪ったヒジャーズ王国と統合して〈サウード家アラビア王国〉を樹立した。サウディ・アラビアとはサウード王家の支配するアラビアの意味である。こうして二重政体は解消されて、単一王権が確立された。〔David Holden and Richard Johns, 前掲書、78頁〕

15 英国では閣議決定の六日後の1917年11月 8日、有力各紙が報じた。この報道はすぐに米露両国に伝わり、ユダヤ社会に熱狂を巻き起こす。〔Walter Laqueur, A History of Zionism (New York: Schocken Books, 1976年)、198~199頁〕

エルサレムの陥落後、連合国側はバルファ宣言の内容を宣伝ビラに印刷して前線ではまき、独逸陣営のユダヤ系兵士の動揺を狙った。〔Fancis R. Nicosia, The Third Reich and the Palestine Question (Austin, University of Texas Press, 1985年)、4~5頁〕

当時の報道機関の発達状況や戦時下の言論統制から、パレスチナの一般住民がバルファ宣言を知らずにいても不思議ではない。

16 キングは米国のオウバーリン大学の学長。クレインは実業家でウィルソン大統領の有力支持者、政治任命の公使として北京に駐在した経験を持つ。ファイサルはウィルソン大統領の提唱した民族自決権を根拠にアラブの独立実現をめざし、住民の意思を探るためにシリア（パレスチナを含む）に調査団の派遣を求めた。ウィルソンは米英仏伊の四カ国で構成の調査団を提案したが、英仏両国の参加を得られず、キングとクレインの二人だけが現地調査に向かう。〔Peter Mansfield, 前掲書、210~211頁〕

17 ローマ帝国の支配下、この地域はシリア・パレスチナと呼ばれた。オスマン帝国統治下の東アラブで、シリアの地名は現代のシリア・アラブ共和国、レバノン共和国、ヨルダン王国、イスラエル国のすべてを包含した。

18 キング・クレイン調査団の報告書は率直にアラブの立場を支持し、シオン主義運動の意図を非難したので、後に歴史家の間でも賛否両論を巻き起こす。支持派は二人の現地調査を高く評価し、（報告書が公刊されたならば）アメリカ人だけでなく全世界の自由主義者の「大いなる満足」となっただろうと惜しんでいる。批判派は報告書を親アラブ、反シオン主義的と弾劾し、調査団が中東で活動中のアメリカ新教徒の伝道団体の影響下にあったと非難した。〔George Lenczowski, 前掲書、92頁〕

19 サミュアルの高等弁務官任命に関して、ヴァイツマンは次の通り語って、人事に関与した事実を公然と認めた。「サー・ハーバート・サミュアルは、われわれの友人だ。彼はわれわれの頼みを聞き入れて、この困難な役目を引き受けてくれた」。〔Joseph Jeffries, Palestine: The Reality, 234~235頁。この発言は、次の資料集に引用されている。 The ABC of the Palestine Problems: Part I, 1896-1949 (Beirut: The Arab Women's Information Committee)、13頁〕

20 “Statement of British Policy in Palestine issued by Mr. Churchill in June,

1922”から引用。〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), 前掲の資料集、46頁〕

21 ヴァイツマンは民族的故地の実現のために支持基盤の拡大を必須と考えたが、急進派はシオン主義イデオロギーの衰弱を招くのを恐れて、必ずしも乗り気でなかった。一方、英国の主要ユダヤ団体はシオン主義運動に協力を拒否した。だが、米国のユダヤ団体が参加したことは、この機構の財政的基盤を固めるのに貢献した。〔Walter Laqueur, 前掲書、462~463頁、467~468頁〕

22 キブツ（複数形はキブチム）はヘブライ語の小集団を意味する単語に由来し、集団農業を営んで、自給自足的共同生活体を形成した。構成員は家庭、個人財産を持たず、炊事、育児、教育などすべてを共同化する。最初のキブツは、1909年、東欧から移住した青年男女によって設立され、シオン主義と社会主義を結び合わせて、理想境の新社会建設をめざした。〔Bernard Reich, Israel: Land of Tradition and Conflict (Boulder: Westview Press, 1985年)、9~10頁〕

23 1921年の暴動は、ユダヤ移民同士の小競り合いが発火点となった。ロシアから移住したボルシェヴィキ派が別の左翼集団と対立し、5月1日の労働祭の行進中に衝突する。アラブ人の目撃者が仰天して「ボルシェヴィキ」と叫ぶと、イスラーム教の礼拝堂が無神論者の外国人に襲撃されたと町中に伝わり、たちまち暴動に発展した。〔John K. Cooley, Green March, Black September: The Story of the Palestinian Arabs (London: Frank Cass, 1973年)、36頁〕

24 第一次世界大戦の戦前、戦中、戦後を通じて、パレスチナの農村経済は弱体だったので、シオン主義者側からの土地買収攻勢にひとたまりもなかった。〔Kenneth W. Stein, The Land Question in Palestine, 1917-1939 (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1987年)、212頁〕

オスマン時代のパレスチナは農業に基礎を置く村落社会だったが、ユダヤ人口の増加は必然的に近代化、都市化を促し、宗教心、風俗習慣にも影響を及ぼす。女性が黒い被衣に包まれ、男女の隔離が当然視される社会で、ユダヤ移民——とりわけキブツの若い男女たち——の開放的服装、態度、行動が旧習墨守のアラブ人の不快感をそそったことは、容易に推察できる。

25 1922年と1936年の統計数字を比較すると、パレスチナの地価は十五年間に四倍弱も跳ね上がった。さらに、1936年から1942年までの間には、地価は二倍強に上昇している。〔Baruch Kimmerling, Zionism and Economy (Cambridge: Schenkman Publishing Company, 1983年)、24頁〕

奇妙なことに土地をユダヤ側に売り渡すアラブ人の地主の間には、反シオン主義を唱える民族主義者が少なくなかった。彼らは村の有力者で、土地の売却と政治的立場に何の矛盾も感じなかった。〔Ylana N. Miller, Government and Society in Rural Palestine 1920-1948 (Austin: University of Texas Press, 1985年)、8頁〕

26 モウシャ・ダーヤーンはロシア移民の子としてキブツに生まれ、後にイスラエル国防軍幕僚長、国防相、外相を歴任した。彼は自叙伝で少年時代を回想し、十代の子供たちが騎馬隊を編成して、開墾地の中に入りこんでくるアラブ遊牧民を追い払ったと記している。〔Moshe Dayan, Story of My Life (London: Spere Books, 1978年)、32頁〕

27 これは調査団長のウォータ・ショーにちなんで『ショー報告書』と呼ばれ、まず流血

の責任をアラブ側に求めた。それと同時に移民の流入と土地買収の結果、アラブ人が生計手段を奪われ、やがてユダヤ移住者の支配下に組み込まれるのを恐れていると指摘し、さらにアラブ側にユダヤ機構のような組織がないため、英政庁と意思の疎通を欠くとも述べている。〔Walter Laqueur, 前掲書、490~491頁〕

28 これは調査団長のジョン・ホープ・シンプソン（インド政庁に勤務した退職官吏）にちなんで『シンプソン報告書』と呼ばれるが、その内容はシオン主義者側にとって藪蛇の結果となった。パレスチナの土地不足を指摘し、工業化の見込みに懐疑的な結論を下したからである。〔Walter Laqueur, 前掲書、491~492頁〕

29 ヒトラル政権が成立してから僅か三カ月後、ユダヤ系の医師、弁護士、商店の集団排斥運動が公に推進されて、教育機関からユダヤ学生、生徒を締め出す要求が高まった。1935年9月、国家社会主義ドイツ労働党は全国大会をニュルンベルクで開催し、ヒトラルの権威を内外に誇示する。続いて帝国議会の特別会が同じ都市に招集され、反セム主義の法案を採択した。これらの人種主義的立法は悪名高いニュルンベルク法として知られ、ユダヤの血を引く者からドイツ市民権を剥奪した。さらにユダヤ教徒との通婚を禁止し、ユダヤ教徒によるドイツ人の家事使用人の雇用を禁じた。1936年、ベルリンで五輪競技大会が開催されたため、しばらくの間、反セム主義の宣伝は下火になった。〔Alan Bullock, Hitler, A Study in Tyranny (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、339頁〕
〔Richard Grunberger, A Social History of the Third Reich (Harmondsworth: Penguin Books, 1974年)、587頁〕〔Lucy S. Dawidwicz, The War against the Jews, 1933-45, Tenth anniversary edition (Harmondsworth: Penguin Books, 1987年)、50~77頁〕

30 1929年の大暴動後、英政庁は1930年から2000年に至る期間のパレスチナの人口増加をアラブ、ユダヤ社会ごとに予測した。その見積もりによると、ユダヤ側の年間移民数が二万五千人なら1948年に、一万五千人なら1956年に、一万人なら1969年に、双方の人口が同じとなり、その後はユダヤ側が多数となる。〔Martin Gilbert, The Arab-Israeli Conflict: Its History in Maps, Third edition (London: Weidenfeld and Nicolson, 1979年)、18頁〕

それだけに1930年代のユダヤ移民の急増は、アラブ側の深刻な危機感を深めた。

31 ヒトラルの反セム主義政策の激化に対抗して、欧米諸国はナチ・ドイツに経済制裁を課したが、かえって第三帝国内のユダヤ教徒を一層の苦境に追い込んだ。国外の非シオン主義者のユダヤ団体は経済制裁でドイツに圧力を加えれば、ナチ支配下の同胞の奪われた諸権利を回復できると考える。

この時、一部のパレスチナ在住のシオン主義者は将来を見通し、同胞の国外脱出——パレスチナへの移住こそ現実的解決策と判断して、ドイツ外務省の当局者と交渉を進めた。その結果、移民が受け入れ先の重荷とならぬために、出国に際して財産の携帯をドイツ側に認めさせる。世界大恐慌の後、ドイツは国外に資本の持ち出しを禁止していたので、対独交渉に当たっては、この制限の撤廃を求めねばならなかった。

このシオン主義者とナチ・ドイツの協定は、1933年の締結から第二次世界大戦の始まった1939年の年末まで、足掛け七年にわたって機能する。この間、ユダヤ移民の資産はドイツ製品の形でパレスチナへ輸出されて、反独ボイコットを骨抜きにした。〔Francis R. Nicosia, 前掲書、41~49頁〕

32 この時、ヴァイツマンがパレスチナ情勢を〈砂漠の勢力、破壊の勢力〉と〈文明の勢力、建設の勢力〉の間の闘争と定義づけたので、アラブ側の敵対心をかきたて、事態を悪化させた。〔Ritchie Ovendale, The Origins of the Arab-Israeli Wars (London: Longman, 1984年)、66頁〕

33 換金農産物の柑橘類の収穫期を目前に控え、アラブ側は農民に及ぼす影響を考慮して、長引いた同盟罷業の収束に踏み切った。アラブ高等委員会の事務局長はトランスヨルダンのアブダッラー首長と会い、面子を失わずに事態を收拾する方策について相談する。その結果、アブダッラーが音頭を取り、イラクとサウディ・アラビア国王と共同で同盟罷業の中止を呼び掛けた。〔Nicholas Bethell, The Palestine Triangle: The Struggle between the British, the Jews and the Arabs, 1935~48 (Tel Aviv: Steimatzky's Agency, 1979年)、27頁〕

これ以来、近隣アラブ諸国はパレスチナをめぐる対英交渉に参加できる権利を「集団的に」獲得した。(Barry Rubin, The Arab States and the Palestine Conflict (Syracuse: Syracuse University Press, 1982年)、78頁)

34 強硬派のヴラジミール・ジープ・ヤボティンスキはヨルダン川の両岸にまたがるユダヤ国家の建国を提唱し、委任統治の条件の改訂を要求した。彼はヴァイツマンらの主流派と決別して、別派の〈新シオン主義機構〉を結成し、今日のイスラエルの右翼政党のイデオロギー的基礎を形成する。1925年、この急進派は〈改訂党〉を旗揚げして大イスラエル主義を唱え、ユダヤ移民の制限、パレスチナの分割に強く反対した。〔Bernard Reich, 前掲書、55頁〕

35 この軍事指導者は1920年代にフランス統治下のシリアで抵抗活動を組織し、仏当局から有罪判決を宣告された。〔John K. Cooley, 前掲書、37頁〕

ダーヤーンも回想録の中でカーシムの地下組織に言及し、彼のアラブ人の知己が、この武闘集団を称賛していたと記録している。〔Moshe Dayan, 前掲書、33頁〕

36 1933年、フセイニはエルサレム駐在のドイツ総領事に会い、ヒトラルの首相就任を歓迎した。そして、第三帝国の反ユダヤ政策を支持し、ドイツからユダヤ教徒のパレスチナ移住に反対を申し入れた。〔Francis R. Nicosia, 前掲書、85~86頁〕

翌年、ムソリーニ支配下のイタリがイーシオウピアを征服すると、アラブ世界に動揺を引き起こす。とりわけ、紅海の対岸のサウディ・アラビアは、枢軸国側の勢力拡大に微妙に反応した。第二次世界大戦の開始後、フセイニはドイツに赴き、ヒトラル総統、リッペントロップ外相らのナチ指導部と何度も会い、第三帝国の助力を得てアラブの解放を実現しようと試みた。

37 マクドナルドの植民地相任命を聞いて、バルファの姪で親シオン主義者として高名なブランチ・ダグデイルは、日記に「ユダヤの観点から、これは最良の人事」と書いた。〔Nicholas Bethell, 前掲書、38頁〕

38 当初、マクドナルドは今後十年間のユダヤ移民の受け入れ限度数を四十五万人と胸算用したが、アラブ側の穏健派と交渉するに際し、自ら三十万人に切り下げる。ところが、この数字が予想外に強く拒否されたため、十五万人に目標を下げた。その後、彼はアラブの合意を得られる数字を五万から十万（ただし、期間を五年間に短縮）と見積もる。首相のチェーンバリンは米国に対する外交的配慮から、できるだけ多い数字の十万を望んだ。

結局のところ舞台裏の交渉で、サウディ・アラビア、エジプト、イラクのアラブ諸国は七万五千に合意し、この線でパレスチナ代表団を説得することに落ち着いた。〔Nicholas Bethell, 前掲書、63~64頁〕〔Ritchie Ovendale, 前掲書、69頁〕

39 マクドナルド白書の内容は、次の資料集による。〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), 前掲書、64~75頁〕

40 ユダヤ機構の声明は、同じ資料集による。〔Walter Laqueur and Barry Rubin(Eds.), 前掲書、76~77頁〕

第四部

ユダヤ国家の創建をめぐる米国の役割

15 アメリカを後ろ楯に

バルファ 第二次世界大戦もたけなわの1942年 5月11日、米国のシオン主義者たちはニューヨークで開催した緊急大会で、次の内容の決議を採択した。

この大会は、次の諸点を強く要求する。すなわち、パレスチナの門戸は開放されること。そして、ユダヤ機構はパレスチナ移住の許可権を有し、さらに国土開発に必要な権限を付与されること。また、パレスチナはユダヤ共和国（コモンウェルス）として創設され、新しい民主的世界機構の中に組み入れられること。……その時には、かつ、その時にのみ、ユダヤの民に対する積年の不当な仕打ちが、是正されるだろう。¹

これは会場のホテルにちなんでビルトモア宣言と呼ばれ、ユダヤ故国再興運動の大きな転換点となり、やがて英国のパレスチナ委任統治を根底から揺り動かした。

この大会決議は八項目の要点を掲げ、その六番目でバルファ宣言とパレスチナ委任統治の〈本来の目的〉の履行を要求した。その主張に従えば、この目的とは、ユダヤ国家の樹立に他ならない。さらに同じ項目は、マクドナルド白書の拒否を再確認する。とくに白書の課した移民制限に対しては、ナチ・ドイツの迫害から逃れたユダヤ亡命者を締め出すものとして、最大限の非難の言葉を浴びせかけた。

しかし、ビルトモア宣言は神の約束の地に現世の共和国の樹立を声高に要求する一方で、その主張に都合の悪い箇所——パレスチナに現存する非ユダヤ共同体の諸権利擁護——を無視している。そして、本来の目的の履行を要求しながら、その根拠のバルファ宣言自体と国際連盟の協約を否定する自己矛盾に陥っている。ともあれ、ここで国際シオン主義運動は従来の曖昧な態度をかなぐり捨て、公然とユダヤ国家の建国を目標に掲げるに至った。

前世紀の終わり近くヘルツルが故国の再興運動を始めて以来、ユダヤ国家の樹立はシオン主義者の変わらぬ念願であった。しかし、バルファ宣言を獲得するためには、英国政府の意向を体して独立主権国家の要求を切り下げ、民族的故地という不明瞭な表現に甘んじなければならなかった。初代高等弁務官のサ

ミューアルでさえ、その親シオン主義的信念にもかかわらず、この宣言にユダヤ国家の約束は含まれていないと主張した。高名なシオン主義者の間にも、ユダヤ国家を否定する者は少なくなかった。

正式の運動方針に 大戦中の特殊事情から世界シオン主義会議は正規の大会を招集できないため、ビルトモア宣言は少人数の常任委員会で検討される。アメリカ風に理想を性急に追い、換言すれば戦時下の国際情勢や同盟関係を顧慮しない決議に対して、このシオン主義者の世界機構の内部では慎重論もあった。だが、半年後の1942年11月、パレスチナの門戸開放、ユダヤ国家の創設は、エルサレムで開催の執行委員会で承認され、正式にシオン主義の運動方針となる。

1937年にピール調査団がパレスチナの分割を勧告して以来、ヴァイツマンは公然たるユダヤ国家の創設論者となった。いまやバルファ宣言の民族的故地を超え、独立国家そのものを要求しても、英国政府の不興を買うことはない。たとえ新生国家の領域が狭くとも、それはヒトラル政権に迫害された同信者の避難所になり得る——と判断したからである。

だが、聖地の分割によるユダヤ国家の実現は、当時の険悪な情勢から頓挫した。しかも、ランタンはアラブの意に添うよう対パレスチナ政策を変更する。ヴァイツマンは対英協調を第一と心掛けてきただけに、1939年のマクドナルド白書で煮え湯を飲まされる思いだった。それから三年後、ビルトモア宣言はヴァイツマンの側近の手で起草され、年来の要求を明文化する。

ユダヤ機構の最高幹部ベン＝グリオンはパレスチナの分割による小国家の樹立に乗り気でなく、ピール調査団の公聴会でもユダヤ国家の構想を明確に否定した。ところが、欧州戦争の勃発後、このシオン主義者はヒトラルの敗北と英国の弱体化を見通し、従来立場から一変して熱烈な建国論者に転向する。彼はビルトモア宣言の採択された会議に出席し、さらに六年後の1948年、イスラエルの独立宣言を朗読する役回りとなった。²

ポーランドの滅亡と分割 マクドナルド白書からビルトモア宣言に至るまでの激動の三年間、戦争の嵐はまず欧州で荒れ狂い、やがて全世界を覆い尽くす。1939年 9月17日、ソ連の赤軍はドイツ軍の猛攻で崩壊寸前のポーランドに背後から襲いかかり、その国土の東半分を占領した。8月23日に締結されたばかりの独ソ不可侵条約の秘密条項によって、ソ連は労せず大きな分け前を得る。

もともとポーランドの大半は帝政ロシア時代の指定居留地で、ヤハウエの信徒が人口の少なからぬ割合を占めた。ヒトラルの全権掌握後、隣国の同信者たちがたどった運命は、ここでもよく知れ渡っている。開戦後、ユダヤ系住民は

あまりにも急速な独軍の進撃に逃げ惑うばかりで、やがてドイツ占領軍の強権支配体制の下で恐るべき境遇に投げ込まれる。一方、ポウランド東部の住民、あるいは東へ逃れた者は、ほどなく赤軍の占領下に組み入れられた。

ポウランドが二つの軍事強国の挟撃で滅亡する前に、少数のユダヤ教徒は北隣のリスーエイニアへ亡命できた。そのうちの幸運な者はシベリア鉄道で極東の港町へ向かい、そこから日本経由で米国へたどり着く。だが、この隠れ家は長続きせず、やがてソ連に併呑されてしまう。³ リスーエイニアはラトヴィア、エストニアのバルト海の沿岸諸国と並んで、昔から多数のユダヤ人口を擁し、第一次世界大戦後に独立を達成したものの、強大な隣国の威嚇には、あまりにも無力な存在だった。

チャーチル 首相の登場 1940年 5月、ヒトラルの軍勢は矛先を東から西へ転じ、短期間の作戦でデンマーク、ノーウェイを征服する。さらにホランドとベルジウムを席卷して、7月にはフランスを屈服させた。連合側側の敗北は英国の政局に大波紋を投じ、ノーウェイの失陥後間もなく政変を招いた。チェインバリン首相は引責辞職し、後任の内閣首班にチャーチル海相が就任する。

この非常時宰相は以前からシオン主義の理解者として知られ、1920年代の初めに植民地相としてトランスヨルダンの建国に手腕を振るった。そしてハーシム家の要求を巧みに封じ、バルファ宣言の対ユダヤ約束の実現に尽力しただけに、マクドナルド白書に厳しい批判を加える。対独開戦後、チェインバリンの戦時内閣に迎えられたが、パレスチナについて年来の持論を変えようとはしなかった。⁴

対独強硬論者チャーチルの登場に、シオン主義運動の首脳部は大きな期待を抱く。前任者チェインバリンの宥和政策はチェカスロヴァキアの解体を黙認し、ついでポウランド侵略の道を拓いた。開戦後間もなく、ヴァイツマンは当時まだ海相のチャーチルに会い、ユダヤ国家の構想に賛同を得る。その人物がいまや政権を担い、ヒトラルと最後まで戦う決意を内外に示している。シオン主義者にとって、願ってもない機会が巡って来た。

しかし、欧州大戦の緒戦の形勢は圧倒的に第三帝国に有利だった。ユダヤ国家の樹立は、まず何よりも対独戦の勝利が前提となる。1940年の後半、英国は独空軍の激しい空襲にさらされたが、不撓不屈のチャーチルの戦争指導の下、甚大な損害に耐えながら本土上空の航空決戦に勝ち抜く。ヒトラルは制空権を確保できずに、英本国への上陸作戦を断念せねばならなかった。

空襲が激化する最中、ヴァイツマンはチャーチルに会い、パレスチナのユダヤ住民だけで部隊を編成するよう申し入れた。この提案に英国首相は全面的に

同意するが、彼の一存だけで決定できず、陸軍参謀総長と相談する。軍部はさまざまな口実を設けて、その実現を引き延ばした。外務省、植民地省は、何よりもアラブの反応を懸念する。英国がユダヤ国家を樹立するため、シオン主義者を武装している——と。⁵

政界工作 欧州動乱の開始後、政治的シオン主義運動は活動の重心を推進を英国から米国に移す。マクドナルド白書の発表以後、もはやランタンは頼るべき相手ではなくなった。親ユダヤのチャーチルが首相に就任しても、大英帝国の存亡を賭けた戦争に忙殺されて、シオン主義者の要求だけを特別に考慮する訳には行かない。合衆国のユダヤ社会は一億三千万の総人口のうち四百五十万程度の少数派にすぎなかったが、政治、経済、言論の分野に固い基盤を築き上げ、ユダヤ国家の樹立に共感を示していた。

ヴァイツマン、ベン＝グリオンはそれぞれ別々に二度も渡米し、長期間の滞在中に精力的に世論の支持を求める。米国内のシオン主義運動は卓抜した組織力と宣伝力を持ち、ナチ支配下の同胞の窮状を大々的に訴えた。その結果、各地に親シオン主義団体が幾つも結成され、ユダヤ教徒以外の米国民の関心をかきたてる。

なかでも1941年に設立の〈米国パレスチナ委員会〉はとくに強力で、ローマ・カトリック教徒の上院議員ロバート・ワグナを会長に据え、約七十人の上院議員、二百人の下院議員を擁した。彼は労働組合結成の自由、団体交渉権の保証を定めた法律の制定に尽力したので、その人脈から労働界の有力指導者も抱き込んだ。この団体は〈シオン主義非常事態協議会〉と提携し、影響力の大きい政治的圧力団体として活動する。

米国のシオン主義者と同調者たちは選挙時の投票を切り札に政界工作を推進し、まず議会内に支持勢力を固める。そして数の威力を背景にして、ウォシingtonからランタンに外交的圧力をかけようとたくらんだ。当時の米国はローズヴェルト大統領のもとで英国に軍事援助を惜しまなかったが、表向きは欧州の戦乱に中立の立場を守っていた。それだけにシオン主義者の活発な運動は米国を戦争に引きずり込みかねないと、伝統的な孤立主義者の批判を浴びる。

1941年12月、日本の海軍が米太平洋艦隊の根拠地ハワイを攻撃すると、ナチ・ドイツも米国に宣戦を布告した。ウォシingtonとベルリンが敵対関係に入ってから、米国内のシオン主義運動は障害を取り払われる。ビルトモア宣言が採択されたのは、その半年後のことである。同じ年の暮れ、シオン主義団体はユダヤ部隊の創設を求める宣伝活動を大々的に展開し、多数の著名人や政治家が賛成の署名に応じた。ホワイトハウスに趣意書と署名簿が届けられ、大統領に圧力をかける。⁶

16 英国を敵として

反英感情の高まり 欧州戦乱の開始から半年過ぎた1940年 2月、土地所有権の移転規制令がマクドナルド白書に基いて布告され、パレスチナのユダヤ社会を強く刺激する。エルサレムを始めとする各地で抗議の示威行進が組織され、警官隊と衝突の末に死者まで出した。それまで英政庁は白書で明確化した新政策をよそに、九カ月も土地売買の禁止を実行に移さず、聖地のアラブ人はもとより近隣諸国からも不信を買う。その間も、国際シオン主義運動は国際的基金の財源で、土地の買収をやめなかった。

同じ頃、ユダヤ側は不法移民の取り締まりに強く反撥した。すでに開戦前の1939年 7月、マクドナルドは密入国者の急増を理由に、同年10月から翌年 3月まで、移民の一時停止を指示する。シオン主義者はパレスチナで二十四時間の同盟罷業を執行し、この措置に反対の氣勢を上げた。しかし、英国政府にとって、土地売買の規制と移民枠の厳守は白書の根幹をなし、アラブ側の信頼を得るかどうかの試金石である。この二点に関して、ユダヤ側に譲歩することは絶対にできない。

独軍の勝利の結果、欧州大陸はヒトラルの支配下に組み込まれる。占領地や従属国は反セム主義の怒涛に洗われた末に、ユダヤ難民の群れを絶えず外部世界に排出した。⁷ 赤錆びた老朽船が、船室はもとより上甲板まで文字通り立錐の余地がないほど難民を詰め込み、木の葉のように荒波にもてあそばれながらパレスチナの岸辺をめざす。彼らは全財産を失ったばかりか、法外な船賃を払わねばならなかった。

密航船は悲惨な状態の難民を荷物のように満載し、英海軍の哨戒の目をかすめて地中海を航行する。だが、パレスチナは約束の地ではなかった。どうにかたどり着いても、すぐに密入国者としてつかまってしまう。英政庁は不法移民の激増に手を焼き、難民をサイプラス島の収容所に送りこむ。後にはインド洋の火山島モーリシャスも、ユダヤ密入国者の流刑地となった。

1940年の暮れ、英政庁は不法移民のパレスチナ定住を認めず、汽船パトリア号でハイファからサイプラスに送り出す手筈を整える。この不運な船はドイツに降伏のフランスから没収した戦利品で、すっかり老朽化していた。海外追放の強硬措置は同胞の間に大きな反響を呼び、反英感情を一層かきたてる。シオン主義者の抵抗組織は難民の移送を阻止するため、出港前に船底に爆薬を仕掛けた。この破壊工作の目的は船を沈めるのではなく、航海できぬ程度に船体を

損傷させることだった。しかし、爆発の威力は予想以上に強烈で、多数の難民が転覆した船から脱出できぬまま溺死する。⁸

反英武装闘争 シオン主義急進派から見れば、いまや英国もナチに踏み切るチ・ドイツと同罪になった。マクドナルドはヒトラルに擬せられ、土地売買規制令はニュルンベルク法にたとえられる。ナチ政権が悪名高い一連の反セム主義的立法で、ユダヤ教徒の土地所有を禁じたからである。一部の尖鋭分子は英国のパレスチナ委任統治にいかなる幻想も抱かず、反英武装闘争の決意を固めるに至った。

対英協力機関のユダヤ機構は傘下に秘密の軍事組織ハーガナーを擁し、第二次世界大戦前の三年に及ぶ騒乱の時期に自衛態勢を強化する。1935年、右派の改訂党が世界シオン主義機構から脱退後、その支持者は別個の武装集団〈ハーガナーB〉を結成した。これは〈イルグーン・ツヴァーイ・レーユミー〉(民族軍事組織=略称・イルグーン、あるいはIZL)と称し、1930年代後半の騒乱期に対アラブ報復活動に乗り出した。この実力行使はユダヤ機構とハーガナーの基本方針の〈自制〉に対する挑戦行為だけに、主流の穏健派から厳しく非難される。⁹

ナチ・ドイツがポーランドに侵攻して以来、シオン主義運動の各派は反ヒトラルの戦いのために対英協力を誓う。イルグーンも対アラブのテロ活動に休戦を宣言したので、パレスチナのユダヤ自衛組織に再統一の機運が生じた。しかし、一部の過激派は独自の組織〈ロハメイ・ヘルート・イスラエル〉(イスラエル自由戦士団=略称・レヒ)を旗揚げし、対英武力抵抗を呼号する。この分派は指導者の名前にちなんで、シュテルン暴力団とも呼ばれた。¹⁰ このテロリスト集団はアラブ人を殺害したばかりか、同胞にも銃口を向け、活動資金調達のために銀行強盗まで働く。

アラブ世界の動揺 1940年代の初頭、中東の政治・軍事情勢は英国に不利に展開し、ランダンの戦争指導部を深刻な危機感に追い込む。前マフティのフセイニは英官憲の追及から逃れてイラクの首都バグダードに移り、ドイツ側と連絡をとりながら反英闘争を継続した。1941年5月、イラクは政変で大きく揺れた末に、正規軍が決起して英軍基地を攻撃する。この時、英軍は迅速に軍事行動を起こし、どうにか非常事態を乗り切った。ヒトラルはソ連に戦争を仕掛ける直前だったので、みすみす介入の好機を逃してしまう。¹¹

1941年6月22日、ドイツ第三帝国は友邦のはずのソ連に奇襲攻撃を加え、短時日でポーランド東部を席卷すると、ロシア固有の領土内に深く攻め入る。ヒトラルにとって、真の敵は共産主義国で、もともと英国との戦争は不本意だっ

た。しかし、チャーチルは断固として妥協を排し、あくまでもヒトラル打倒の闘争を続行する。ソ連の最高指導者のヨーゼフ・スターリンはチャーチルからヒトラルの意図について事前に通報を受けたが、なかなか信用しようとしなかった。赤軍は戦備不足のまま不意打ちを食い、手痛い敗北を喫する。

英ソ両国は政治・経済体制の相違にもかかわらず、いまや共通の敵に対して共同戦線を結成した。ヒトラルは自ら始めた二正面戦争のため、やがて墓穴を掘ることになる。しかし、緒戦の戦果はめざましく、占領地を東方へ拡大し、首都マスクヴァまで脅かす。チャーチルはスターリンを思いがけず味方に引き入れて、究極の勝利を確信するに至ったとはいえ、その後も四年間にわたって苦しい戦いを続けなければならない。

赤軍の敗北が伝えられる一方で、独軍の戦車部隊は北アフリカに渡り、リビアからエジプトに迫った。カーヒラの支配層は先行きを見越して、親枢軸、反連合国の感情を高める。この時も英国は軍事力の誇示で内政干渉に成功し、強引に反英傾向を押さえこんだ。1942年 1月、戦車部隊が王宮を包囲する一方で、英大使と軍司令官は国王に首相の更迭を要求する。親英派首相の任命か、それとも退位か——二者択一を迫られ、まだ若い国王のファルーク一世は屈服するしかなかった。¹²

連合国側が悪戦苦闘を続けている最中、パレスチナは英国人の心に茨のように突き刺さる。とりわけ現地で治安維持の任に当たる警察官、やがて戦場に赴く将兵の間には、一種の反セム感情が醸成された。ヒトラル打倒の戦争に生命を賭けているのに、その努力が報いられるどころか、ユダヤ住民から絶えず不平ばかり聞かされる。ユダヤ機構は表向きテロ行為を非難しても、内心で反英活動に喝采を送っているのではないか——と。

ユダヤ側にも、それなりの言い分があった。バルファ宣言の約束はどうなったのか。英国の委任統治は、パレスチナに対するユダヤの権利を認めたではないか。マクドナルド白書はアラブに気兼し、過去の誓約を一片の反古にしてしまった。イラクやエジプトの例が明らかにした通り、アラブは張り子の虎に過ぎない。英国が決然と実力を行使すれば、その抵抗などたちまち腰砕けとなってしまう——と。

難民を 1941年 2月の内閣改造で、植民地相のマクドナルドは自
見殺しに 治領カナダの高等弁務官に転出し、後任にウォールタ・モインが就任した。この人事異動はユダヤ社会で歓呼の声で迎えられ、新任の大臣に期待感が高まる。マクドナルドは親アラブ・反ユダヤ政策推進の張本人であり、バルファ宣言を完全に骨抜きにして、ユダヤ移民の受け入れと土地の売買に厳しい制限を課した。十年後のパレスチナ独立を約束したものの、それ

はユダヤ国家ではない。アラブとユダヤの両住民で構成の単一国家で、ユダヤの数的劣勢を永久に固定化する。モインはチャーチルの親しい友であり、親シオン主義者の首相の意を体して、前任者マクドナルドのアラブ寄り路線を変更し、行く行くはユダヤ国家の創建を支持してくれるだろう——と。

新植民地相は就任早々、四十数人のハーガナー幹部を釈放し、名声を博する。これら地下の軍隊の将兵は武器不法携帯の理由で懲役十年の刑を宣告され、それまでに一年余り服役していた。¹³ しかし、間もなくモインの人気は、地に墜ちる。パレスチナ行政の最高責任者として、ルーメイニアの難民船の受け入れを強硬に拒否したからである。

1941年12月、難民船のシュトルーマ号は黒海の港コンスタンツァからユダヤ亡命者を満載して出港し、パレスチナの岸辺へ向かう。だが、機関の故障で漂流同然となり、ようやくトルコの領海に入った。悲劇の船はイスタンブール港まで曳航されたものの、厄介な外交問題を引き起こす。この船が果たして難破せずに外洋を航海できるか危ぶまれたばかりか、船内の衛生状態は極度に悪化していた。

英政庁はユダヤ難民の密入国に神経を尖らせ、取り締まりを強化していた。ところが、トルコ外務省の照会に答えて、アンカラ駐在の英大使は、この難民船がパレスチナへ無事にたどりついた場合、亡命者の人道的処遇をほのめかす。モインは現地情勢を顧慮せぬ軽率な発言に怒り、大使宛てに詰問の書簡を送った。密入国者は満員の収容所から溢れるばかりで、モーリシャス島送りの順番を待っている。安易に不法入国を認めれば、親独陣営のボールカン諸国はユダヤ難民の大群を続々と送り出すだろう。その中にはスパイが紛れこんでいるかも知れない——と。

1941年初頭、ブキュレシュティがベルリーンの要求に屈して独軍の駐留を認めたので、ランタンは外交関係を断絶する。それ以来、ルーメイニアは英国と正式の戦争状態にないまでも、事実上の敵国視された。従って、同国籍のユダヤ教徒は英委任統治領のパレスチナに亡命を図っても、敵性国民であることに変わりはない。

難民船はイスタンブールに二カ月以上も停泊する。その間、さまざまな救済策が試みられるが、いずれも結実しなかった。トルコ政府は困惑した末に、出港地までシュトルーマ号を送り返すよう決定する。1942年2月24日、不運な船は黒海のトルコ領海外まで曳航され、そこから自力航行を始めた。そして間もなく謎の爆発を起こして沈没し、七百六十余人が死亡する。生存者は男女一人ずつの僅か二人に過ぎなかった。

この惨事はシオン主義運動にとって大きな衝撃であり、同時に絶好の反英宣

伝材料として利用される。シュトルーマ号の悲劇を契機に、シオン主義者はユダヤ国家の必要性を以前にも増して確信するに至った。それから三カ月とたたぬうちに、ニューヨークでビルトモア宣言が採択される。

荒れ狂う 同じ頃、ヒトラルと側近はユダヤ教徒の組織的抹殺を決**テロの嵐** 定し、やがて占領下のポウランド各地に強制収容所が建設された。¹⁴ 不運な人々は家畜の群れのように鉄条網で囲いこまれ、やがて悲惨な最期を遂げる。毒ガス室と死体焼却場の地獄絵図（ホラコースト）は極秘にされ、実情が外界に漏れて来ない。それでも大量虐殺の情報が、断片的ながら連合側国側に届く。だが、当時の戦況では、英軍は手をこまねくばかりで、効果的手段が取れない。ユダヤ強硬派はいらだちを募らせ、多数の同信者がみすみす見殺しにされたと信じこむ。とりわけ血気にはやる過激分子から、英国はナチ・ドイツと同一視された。

1944年 2月 1日、イルグーンの最高幹部メナヘム・ベギンは英国に宣戦を布告し、四年余の休戦を破棄した。このポウランド出身の戦闘的指導者の指揮下、反英武装集団は次々に委任統治体制の象徴——移民局、税務署、警察署を爆破した。¹⁵ 未来のイスラエル首相は宣言する。パレスチナはトランスヨルダンの一部を含めて、世界のユダヤの民すべての土地である。ここを支配する権利は、多数派住民のアラブ人ではなく、ユダヤ教徒が保有している。この権利のために、イルグーンは英国とアラブを敵に回して戦い抜く——と。

レヒもイルグーンに遅れを取らず、テロ行為に訴える。この過激派の前衛は二年前に首領のシュテルンを英官憲に射殺されたが、地下組織としてしぶとく生き延びた。その銃口はかつての植民地相で、いまやカーヒラ駐在の中東担当相モインに向けられる。

彼は難民船の爆沈事件で憎まれ、議会の答弁で揚げ足を取られた。パレスチナへの大量移住を実行不能の夢と述べたからである。さらに「百万人ものユダヤ難民をどうしたら良いのだ？」と伝えられた発言で、反セム主義の権化のように非難された。その後、この政治家は贖罪の羊に仕立てられる。英国が在欧ユダヤ囚人の救出努力を怠り、みすみす見殺しにしたという一方的非難の責任を一身に担わされて——。

1944年11月 6日の白昼、モインはカーヒラの公邸前で、自動車から降りたところ二人の暗殺者に襲われた。犯人はすぐにつかまって、のちに二人とも処刑される。四十年後、ベギンの後を襲ってイスラエル首相となるイツハク・シャミルは、襲撃の実行計画を立案した過激派団体レヒの幹部だった。

皮肉なことに暗殺される少し前、モインはユダヤ国家に賛成の立場を明らかにする。チャーチルはシオン主義者の宥和のために閣内に関係閣僚懇談会を設

置し、その一員に中東担当相も加えた。ここでピール調査団の勧告が手直しされ、新しい分割案としてよみがえる。だが、過激派のテロ活動は、すべてをぶち壊してしまった。このユダヤ国家案は正式に閣議に提出されず、葬り去られてしまう。チャーチルは非業の死を遂げた親友を心から悼み、それ以後はシオン主義に背を向けた。¹⁶

17 政争の道具として

米英陣営の 不協和音 1942年の終わりから1943年の初頭にかけて、東西の戦線で戦争の潮は逆転し、連合側が有利となり始める。西では米英軍はマロコウとアルジャリアに上陸し、北アフリカを反攻の足掛かりとした。東ではソ連の赤軍はヴォルガ河畔のスタリングラトで、半年に及ぶ激戦の末に独軍の精鋭部隊を撃ち破る。しかし、連合側がヒトラーを最終的に打倒するまで、なお二年半の歳月を要した。

この間、米英の陣営ではパレスチナをめぐる、不協和音が高まる。シオン主義者の強引な政界工作はランダンとウォシグタンの関係に摩擦を生じ、西側同盟の結束を乱しかねなかった。ロウザヴァルト大統領は老練な政治家として国内のユダヤ勢力をないがしろにしなかったが、同時に大国の戦時指導者としてシオン主義者の一方的見解に簡単に同調しなかった。とくにアラビア半島の石油利権を考慮すれば、ユダヤ国家に創建について軽々しく言質を取られてはならない。

ロウザヴァルトの消極的姿勢は、国務省の考えを反映していた。中東政策の立案者たちは、サウディ・アラビア国王のイブン＝サウードをアラブ世界の中心人物として評価する。対独戦争の勝利を確実にするには、この地域の情勢を波立たせてはならない。1943年5月、米国大統領はアラビア砂漠の覇者に約束した。パレスチナの基本体制は、アラブとユダヤの双方と協議なしには、変更されることはない——と。¹⁷

そこでシオン主義運動の活動家たちは議会を動かして、ロウザヴァルトに揺さぶりをかけた。1944年早々、米国パレスチナ委員会の工作で上下両院に別個に決議案が提出され、ビルトモア宣言の履行を求める。ランダンはウォシグタンの情勢を憂慮するが、表立って決議案の阻止に回れば、内政干渉の非難を免れない。米國務長官コーデル・ハルは英外相ロバート・アンタニ・イードンの意を受け、米陸軍参謀総長ジョージ・マーシャルの助力を求める。

この職業軍人はただの武弁ではなく、後に國務長官、国防長官を歴任するだけのことはあって、軍事情勢を外交・政治と関連づけて上院外交関係委員会に説明する。米国の立法府がユダヤ国家の建国を後押しするなら、イスラーム世界の緊張を激化させることになるろう。中東地域だけでなく、北アフリカ、さらにはインドまで、騒乱の渦に巻き込まれかねない。そのような事態を招けば、米英連合軍の地上部隊はナチ・ドイツと戦うどころか、治安維持のために貴重

な兵力を釘付けされよう。また中東の石油供給に支障を生じ、海空軍の作戦にも甚大な影響を及ぼすだろう——と。結局のところ、軍部の厳しい警告の前に、二つの決議案は日の目を見なかった。

大統領選挙 米国パレスチナ委員会が性急に要求の実現を焦った**を 利 用** ため、米議会でビルトモア宣言の支持を取り付けようとする狙いは、ひとまず失敗に終わる。しかし、この程度の挫折で諦めることなく、シオン主義者は次の機会を狙う。1944年11月には、四年ごとの大統領選挙の時期がめぐってきた。ロウザヴァルトはすでに三期も務めていたが、もう一度の野心を燃やす。

二年前の中間選挙の結果は、与党の民主党と野党の共和党の勢力がほぼ伯仲した。ユダヤ票を当て込んで、パレスチナ問題は選挙の争点となる。1944年7月、共和党は選挙綱領にユダヤ移民と土地所有の制限撤廃を掲げた。そしてビルトモア宣言と同様に、パレスチナにユダヤ共和国の実現を提唱する。

この点で民主党は遅れを取り、ユダヤ票の向背が懸念された。とくにユダヤ人口の多いニューヨーク州を制することは、大統領選挙に勝ち抜くための必須条件である。¹⁸ ロウザヴァルトはシオン主義者の圧力に屈し、一札を入れねばならなかった。1944年10月15日、折りから開催中の米国シオン主義会議の大会に書簡を送り、当選の暁にはユダヤ共和国の創建に尽力する——と約束する。それまで大統領は政治家として挨拶を送っても、ユダヤ国家の支持と解釈される言い回しを慎重に避け、バルファ宣言の用語通り〈民族的故地〉としか表現しなかった。

米国の選挙の季節は、パレスチナでは暴力の季節だった。ユダヤ住民の土地買収の制限、密入国の取り締まりに対する直接行動として、土地登記所や警察署が爆破される。ついには中東担当相のモインが暗殺された。この死はニューヨークやウォシントンにも直ちに伝わったが、ロウザヴァルトの四選で沸き返る米国で大した関心も同情を集めなかった。親シオン主義団体の刊行物は非業の死を遂げた盟邦の高官に弔意を表すどころか、相変わらずランタンを非難する。ある下院議員はユダヤ迫害に関してヒトラルのドイツも英国も同罪と論難し、最大の同盟国の政府機関——植民地省を〈鬼畜ナチ〉の実質的共犯者とまで決め付けた。

前代未聞の暴挙 1945年1月、ロウザヴァルトは大統領として前人未踏の四期目に入り、シオン主義者から選挙戦の約束履行を迫られる。その要求は膨れ上がった。ユダヤ共和国は版図を英国の委任統治領に限定されず、〈未縮小、未分割のパレスチナ〉に樹立さるべきだ——と。つまり新生国家の領土はエレッツ・イスラエル（ダヴィデ、ソロモン王時代の領域）

を復活し、トランスヨルダンのかなりの部分を併呑することになる。

またもやパレスチナをめぐる決議案が、米議会に提出された。まだモイン暗殺の衝撃が生々しい時期だけに、英国政府は神経を逆撫でされる。その頃、ヒトラル打倒の戦争は最終段階に入った。米英ソ連合側軍勢は広大な占領地を解放し、東と西からドイツ本国に迫る。もはや第三帝国の敗北が疑いないとしても、米英両国は一層の結束を固めなければならない。資本主義、共産主義体制の大国は共通の敵を相手に戦時同盟を結んだが、早くも戦後の対立が予見されたからである。¹⁹

1945年2月、ロウザヴァルト、チャーチル、スタリンの三巨頭はクリミア半島の保養地で黒海の港町ヤルタに集まり、戦後処理について話し合った。その帰路、米国大統領の乗艦はスエズ運河に停泊し、アラブの賓客を迎える場所となる。この会談でサウディ・アラビア国王のイブン＝サウードはロウザヴァルトに向かって断言する。アラブはユダヤに聖地を明け渡すよりも、むしろ死を選ぶだろう——と。

大統領は国王の激しい言葉に驚き、気まずい空気を取り繕うために如才なく調子を合わせた。アラブにとって不都合になるようなことを何一つするつもりはない。米国政府はアラブとユダヤの双方と事前にすべてを相談しなければ、パレスチナの基本政策について変更を加えることはない——と。²⁰

ロウザヴァルトはアラブ世界を訪れて、シオン主義運動に一方的に肩入れする危険性を悟る。だが、帰国後は民主党内からも選挙公約違反として激しい非難にさらされた。大統領に当選できたのは、ユダヤ票のお陰で大票田のニューヨークを確保できたからだ。それ以外の大都市圏でも、シオン主義者の奮闘がなければ、共和党に票が流れたはずだ——と。

米国内の大合唱を懸念して、イブン＝サウードはロウザヴァルト宛てに親書を送った。アラブ諸国が対独戦争で連合側の大義に協力しているのに、その真只中にシオン主義国家の樹立をたくらむのは遺憾である。しかも、門戸開放の美名の下にパレスチナへ大量の移民を送り込んで、アラブ住民を追い立てようとするのは、人類史上でも前代未聞の暴挙ではないか——と。サウディ・アラビアの国王は、アラブ世界の不安と不信を代弁した。

ロウザヴァルトは強硬な申し入れに当惑し、1945年4月5日付の返書で、アラブの意に反することはしないと保証した。だが、その一週間後の4月12日、大統領は四期目の任期を僅か三カ月余り務めただけで急死する。憲法の規定により、副大統領（上院議長）のハリ・トルーマンが後を襲った。合衆国の新元首は議会内の調整工作に長けたが、外交の分野では全くの素人で、何の経倫も持ち合わせていない。

圧力団体の陳情攻勢 この予期せぬ国家指導者の交替は、シオン主義運動にとって、またとない巻き返しの好機となる。欧州の戦乱が大詰めに近づくにつれて、ナチ・ドイツの残虐行為の数々が明るみに出て、米国内で親シオン主義の世論を盛り上げた。新大統領は国務省の専門家からアラブ重視の必要性を説かれる一方で、シオン主義運動の圧力団体から陳情攻勢にさらされる。

トルーマンが大統領に就任してから一カ月とたたない1945年5月7日、ナチ・ドイツは連合国に無条件で降伏した。すでに4月末に、ヒトラーは赤軍包囲下の総統官邸で自殺を遂げている。ついに欧州の戦争は終わった。しかし、アジア・太平洋地域で、対日戦争はまだ続く。7月下旬、米英ソ中四カ国の首脳はベルリン近郊のポツダムで会談し、日本に最後通牒を突き付ける。

パレスチナの門戸開放、ユダヤ国家創建の要求は、対独戦の勝利で一層はずみがついた。トルーマンはポツダムでチャーチルに向かい、出発前に親シオン主義団体から陳情された通り、マクドナルド白書によるユダヤ移民制限の撤廃を求める。しかし、英国首相は友人のモインを暗殺されてから、はっきりとシオン主義運動を見限った。しかも首脳会談の途中で、突然、チャーチルは交渉の当事者能力を失ってしまう。折りから挙行された英国の総選挙で、労働党が大勝したからである。

労働党単独政権の登場は、パレスチナと米国内のシオン主義者から歓迎される。この政党はかねてからユダヤ故国再興運動の社会主義的性格に好感を寄せ、指導部にシオン主義の支持者が少なくなかった。その前年暮れの党大会で採択された決議は、ユダヤ国家を支持し、移民受け入れのためアラブ住民の強制立ち退き（ただし十分な補償を支払うとの条件付きで）まで定めている。

新首相のクレメント・リチャード・アトリは国内政策で産業国有化などの社会主義政策を実行に移すが、チャーチル戦時挙国内閣の副首相を務めただけに、外交面では前任者の基本路線を踏襲する。ただし、予想に反してに外相の要職には親シオン主義傾向の強い人物を退け、挙国内閣の労相アーニスト・ベヴィンを起用した。労働党は政権を手中に収めたものの、パレスチナの今後について、直ちに大会決議を実行に移す訳には行かない。ベヴィンはトルーマンの要求に対して、すぐに態度表明を控えた。

18 難民十万人の即時引き取り

トルーマン 大戦の終了後、米国は世界の最強国にのしあがった。

外交の本音 伝統的盟邦の英国は五年有余の戦乱で、すっかり国力を消耗している。戦時下の同盟国・ソ連はナチ・ドイツに勝ち抜いたものの、膨大な犠牲に耐えねばならなかった。ただ合衆国だけが国土を戦火で荒らされることなく、戦争景気で物質的繁栄を享受できた。この有利な国際環境を背景に、トルーマンは巨頭の一人としてポツダムに赴き、チャーチル、スタリインら個性の強い戦時指導者とやりあう。

1945年 8月16日、つまり日本降伏の翌日、トルーマンは記者会見でポツダム会談の成果を誇らし気に語った。国際政治の榭舞台を踏んでから、もはや彼は外交に疎い大統領ではない。

この自信を深めながら、トルーマンは豪語した。ユダヤ移民の制限撤廃について、米国民の要望を英国首相に十分に伝えた——と。この時の発言はまだ慎重で、問題をまず英国とアラブとの間の交渉に委ねると語り、そこでつい本音を漏らした。治安維持のために米軍兵士を五十万人もパレスチナへ派兵したくない——と。

大統領の発言に関連して国務省が問い合わせたので、戦争省は必要な兵員を試算した。パレスチナの門戸が開放されて、ユダヤ移民が無制限に流入すれば、パレスチナは騒乱状態に陥るだろう。大戦前の三年に及んだ内乱の時期と同じように、アラブ側は武力に訴えても抵抗するに違いない。そのような事態に至れば、少なくとも四十万台の兵力を必要とし、半分を英軍部隊で充当するにしても、情勢次第ではドイツと日本の占領に支障を生ずるかも知れない。米軍兵士の復員に大幅に遅れるだろう——と。

対独戦の終結の翌月、トルーマンはペンシルヴェイニア大学法学部長のアーサー・ハリスンを米国政府代表の資格で戦火で荒廃した欧州に派遣し、難民問題の調査に当たらせる。連合国側は勝者の避けがたい義務として、多数の戦時流民を救済して定住させねばならない。虐殺を免れた五十万の在欧ユダヤ教徒はナチ・ドイツの圧政と戦乱ですべてを失い、ようやく死の淵から引き戻されたものの、帰るべき場所も生計の手段も持たない。

ユダヤ難民 数週間に及ぶ現地調査後、ハリスンは大統領に報告
の聖地移住 書を提出し、ユダヤ難民十万人のパレスチナ移住を勧告する。1920年代の立法措置で、合衆国は人種ごとに移民の枠を割り当てた。

これは何よりもまずアジア人の締め出しを意図したが、同時に離散の民の末裔にも厳しい制限を課す。

米国民の間にユダヤ難民の窮状に同情が高まっていながら、この民主主義国家は英国の委任統治領と同様に、事実上、ヤハウエの信徒に門戸を閉ざしていた。²¹ ハリソンは報告書の中で米国も「適正な人数」を引き取るよう勧告したが、議会が直ちに移民関係の法律改正に動く兆しはなかった。

1945年 8月31日、トルーマンはアトリに書簡を送り、十万人のユダヤ難民をパレスチナに受け入れるよう要請した。僅か半月前、記者会見の席で示した慎重な態度とは大きな変わりようである。その親書は折りから外相会議で訪英中の国務長官ジェイムズ・バーンズを通じてベヴィンに手渡され、ランダンのダウニング街十番地の首相官邸に届けられた。

十万人！英国の首相も外相も仰天する。パレスチナが直接の戦禍を免れ、連合側の後方基地として戦時下の繁栄を享受できたとはいえ、これだけの難民を一度に吸収する能力はとうていない。何よりもまずアラブの反応が問題である。第二次世界大戦前、アラブ側はユダヤ移民の停止を要求し、三年間も武力抵抗を続けたではないか。

1945年 9月の半ば、バーンズはベヴィンに知らせた。十万のユダヤ難民の行き先について、間もなく大統領が声明を発表する——と。盟邦の困難な立場を無視した遣り口に、英外相は憤然とした口調で言い返す。米国が十万の難民をパレスチナに押し付けるなら、治安維持のため米陸軍から四個師団の派兵を求め——と。国務長官は困惑して国際電話で大統領を呼び出し、一方的発表を思いとどまらせた。

アトリは電報と書簡をトルーマンに送り、妥協策としてパレスチナ以外の土地に三万五千人の引き取りを示唆する。大戦の終結後、北アフリカ各地の軍事基地は無用の長物と化した。そこに分散して受け入れれば、当座の解決策となるだろう。さらに英国首相は米国大統領の注意を喚起した。二人の前任者——チャーチルとロウザヴァルトはアラブ側に対して、パレスチナ問題について事前協議を約束している。この厳粛な誓約を反古にするならば、文字通り「中東の全域を燃え立たせる」ことになるだろう——と。

無視できぬ トルーマンはアトリの立場と主張を了承し、しばらく

ユダヤ人口 くの間に、鳴りを静める。だが、折りしもニューヨーク市長の選挙が近付いてきた。これはロウザヴァルトの急死でホワイトハウス入りしてから最初の大きな試練であり、その勝敗に民主党の領袖としての威信が懸かっている。シオン主義団体は市長選を利用して大統領に圧力をかけ、難民十万人のパレスチナ即時移住を要求した。この大都会のユダヤ人口は二百五

十万人を数え、有権者の三分の一を占める。その向背次第で、当落に決定的影響を及ぼすだろう。

そこでホワイトハウスは大票田の威力を無視できず、ダウニング街に事前に通告することなく、トルーマン書簡の内容を公表する。しかも、ご丁寧なことに、大統領の手紙に対して、英国の首相から何の返事も届いていないと解説を加えた。この背信行為と事実誤認に対して、ランダムは怒り狂う。

国務省は戦後の世界秩序の中で中東地域の重要性を認識しているだけに、大統領と側近の独走を憂慮する。米英間に火花が散ったのは、同省の専門家が現地情勢を分析し、国務長官に意見書を出した矢先のことだった。アラブ側は十万人のユダヤ難民をどう解釈するか。パレスチナをシオン主義国家に転換する企てと受けとめるに違いない。そうなれば騒乱は必至で、派兵を必要とする事態に至るかも知れない。従って当分の間、合衆国としてはパレスチナへの大規模移住について慎重に対処すべきだ——と。

さらに国務省は中東各地から公使、総領事を本国に招集し、ウォシントンで外交公館長会議を開催する。出席者はユダヤ難民十万人のパレスチナ移住案に強い危機感を抱き、それぞれ口々に現地の緊迫した反応を伝えた。合衆国がアラブを無視してシオン主義に一方的に肩入れすれば、国益を損なう重大な結果を招きかねない。現にソ連が虎視眈々として、この地域に食い込もうとしている——と。

しかし、大統領の関心は国内政治に向けられ、国際関係よりも地方選挙を優先的に配慮する。トルーマンは並み居る外交官に向かって挨拶した際、本音を遠慮なく言い放った。紳士諸君、皆さんの要望に沿えなくて残念だが、私はシオン主義の成功を切望する数十万、数百万の人々の願いに応えなければならない。これだけの数のアラブ人は、わが選挙民の中にいないのだ——と。²²

米英合同調査団の設置 十万人のユダヤ難民をめぐる、米英両国の関係は極めて気まずいものとなった。ベヴィンは両国間の亀裂を修復するため、米英合同調査団の設置を提案する。ソ連が中東地域に浸透の素振りを見せている際、米国も難民救済やパレスチナ問題の責任の一半を担えば、少しは無責任な言動を慎むだろう。ウォシントンはランダムに同意したが、調査の内容や目的について、あれこれ注文をつけた。合同調査の機会を利用して、ユダヤ難民十万人のパレスチナ移住を公式に裏書きしたかったからである。

この調査団は双方から六人ずつ、合計十二人の委員で構成された。極め付きの親シオン主義者もいれば、厳しい批判派、それに中立派も入っている。合同調査団は真先に欧州の難民収容所を訪れ、ついでパレスチナに回った。三カ月

にわたる現地視察と公聴会の末に、一行はスイスで報告書をまとめる作業に取りかかる。勧告は全会一致で決定し、留保条項や少数意見を付けないと、委員の間に了解ができた。1946年 5月 1日、報告書が米英両国の首都で同時に正式発表される。

その内容は米国と英国の主張を折衷したもので、最大の論点となったユダヤ難民のパレスチナ移住について、十万人分の許可証を即時発行するよう求めている。しかし、将来の政体については、アラブでもユダヤでもないパレスチナ国家の創建を勧告した。さらに土地売買の自由を提唱し、事実上、マクドナルド白書を骨抜きにする。両国政府は公式発表に先立つ十日前に報告書を入手し、それぞれの立場から内容を詳細に検討した。

またモリス・トーマスはアトリを出し抜き、発表前日の 4月30日、十万人分の移住許可証の発給について賛成の態度を一方向的に表明する。彼はシオン主義団体に入れ知恵されて（あるいは圧力に屈して）、報告書の中から都合の良い項目だけを拾いあげた。勧告の内容を短期的見地からすぐ実行に移すものと、長期的見地から考慮（実際は棚上げ）するものとの二種類に分ける。難民十万人のパレスチナ行きは前者に属するから推進し、パレスチナ国家案は後者に属するから等閑に付した。

正式発表日の 5月 1日、アトリは議会で演説し、英国政府の見解を明らかにした。調査報告書については、すべての項目の関連を明確にした上で、全体を検討してみる——と。この回りくどい発言は、勧告に満足できない旨の間接的表現だった。さらに英首相は続ける。パレスチナの現状は十万人もの難民を短期間にとうてい吸収できない。何よりもまず不法移民を援助し、テロ活動を事とするユダヤ過激派団体の解散と武装解除が先決である——と。つい五日前、過激派のレヒは武器を奪うため英軍の宿営地を襲撃し、六人の英兵を殺したばかりだった。

糸 好 の ベヴィンは米英合同調査団の生みの親だったが、その勧告に深く失望する。もしユダヤ難民十万人の即時受け入れを強行すれば、アラブ側は必ず武力で抵抗するに違いない。パレスチナの騒乱状態は、大戦で疲弊した英国に軍事的、財政的重荷を背負わせるばかりか、中東に築き上げた基盤を掘り崩すことになろう。ただ報告書がユダヤ国家の樹立を認めず、二国民一国家案を提唱した点は、英国の年来の方針とベヴィンの主張に一致したが、大した慰めにならなかった。それは将来の課題に過ぎず、当面の緊急事はあくまでも難民問題だからである。

米英合同調査団の努力は全くの徒労に終わった。発足当時、それは諮問に応じて答申を作成する機関ではなく、両国政府の間で合意に至らぬ問題の決定権

を握る筈だった。ベヴィン自身、全会一致の勧告を尊重すると述べたが、どうしても難民十万の即時受け入れを受諾できない。ランダンとウォシングタンは調査報告書を承認も却下もせず、新たに委員会を設置して勧告実施の方策を検討させることにした。その後もユダヤ難民の問題は、両国政府の間にしこりとなって残る。

ベヴィンは米国の偽善的態度に立腹する。難民救済の人道問題が国内政治の地方選挙にからんで、シオン主義団体の横車で本来の目的を見失ってしまった。ユダヤ難民の問題は第一に欧州で解決をはかり、パレスチナから切り離すべきである。まず出身国に再定住を促進し、全く寄る辺のない者は連合国や中立国に分散受け入れを考慮すればよい。1946年6月に開催の労働党大会で、英外相は苦々しく言い放った。米国はニューヨークに十万のユダヤ難民を引き取りたくないの、英国に圧力を加えるのだ——と。²³

ベヴィンは別の機会にも本音を吐いた。ユダヤ教徒は長い行列の先頭に陣取り、特別待遇を要求している——と。ナチ・ドイツの狂信的人種理論の犠牲者はユダヤ教徒だけではなく、放浪民のジプシも多数が虐殺された。東欧のスラヴ系諸国民も劣等視され、強制労働に狩り出された末に、死の淵へ追いやられた。赤軍の捕虜も大量殺害の対象となった。ヒトラルの戦争の惨禍を被ったのは、ユダヤ教徒だけにとどまらなかった。しかし、英外相の発言は反セム主義思想の吐露として、シオン主義者の絶好の攻撃目標となる。

19 ユダヤ抵抗運動の激化

労働党政権の中東政策 第二次世界大戦の終結後、パレスチナ在住のユダヤ活動家の間に幻滅感がひろがった。ヒトラルはついに打倒されたものの、念願の独立国家は実現の見通しが立ちそうもない。戦争中にチャーチルはヴァイツマン構想に同意したが、すでに首相の座を去っている。しかも親友モインの暗殺後は、シオン主義運動を見限ってしまった。アトリ内閣は労働党の親シオン主義的路線にもかかわらず、マクドナルド白書に固執して公約を実行に移そうとはしない。いや、ベヴィン外相は戦後の困難な時代に英国の将来像を描けば、パレスチナ問題についてますます慎重にならざるを得なかった。

1940年代の目まぐるしく変化する国際環境の中で、昨日までの味方は今日の仮想敵国となった。戦後間もなく米英両国は〈大西洋同盟〉を形成して、ソ連の勢力拡大に対抗する。トルコ、ギリシャ、イランが両陣営の力の接点となると、中東は大戦中に増して一層の戦略的重要性を帯びるに至った。1945年の秋にベヴィンが練り上げた新政策は、この地域に従来通り英国の影響力保持を想定する。

しかし、戦後の新時代の雰囲気を反映して、ランゲンはアラブ諸国との外交関係を洗い直さねばならない。それまで英国は各地の専制的統治者と不平等条約を締結し、アラブ世界の大部分を支配下に置く。そして、イラクとエジプトの実例が示す通り、第二次世界大戦中には英国の強大な軍事力を誇示して内政に干渉できた。1945年3月、中東の七カ国は〈アラブ連盟〉を結成し、ランゲンと新たな関係を集团的に結ぶ。²⁴

労働党政権の外交政策は、過去の帝国主義的方策を排した。スルターン、シェイク、パシャなどアラブ世界の伝統的支配者よりも、アラブ人民と友好関係を樹立しなければならない。ベヴィンは社会主義者として、対アラブ外交方針に自己流の理想を盛り込んだ。時代錯誤の権力者の忠誠をつなぎとめる補助金にかわって、社会改革や経済開発に役立つ援助を供与すべきである。これはソ連の勢力浸透を阻止するのに貢献するだろう——と。

中東地域は欧亜をつなぐ空陸海の連絡拠点として、第二次世界大戦後も戦略的価値を減ずることはない。しかも地下資源の石油は、軍事的にも経済的にも一層の重要性を増している。折りからランゲンはカーヒラと条約改訂の交渉を始めた。もし英軍がエジプトから撤退することになれば、パレスチナは軍用基

地の移転先として最適候補地に挙げられよう。この観点から英軍部はベヴィン構想の骨子——中東地域の保持——に賛成する。

ユダヤ武装集団 パレスチナのユダヤ過激派は大戦中に対英の戦線統——武力闘争を続け、戦後もテロ活動をやめなかった。英兵の間に戦後の戦死者が増加すれば、駐屯軍の士気を阻喪させるだろう。英国政府は治安維持のため大軍の釘づけを余儀なくされ、復員が大幅に遅れよう。そのうちに世論の批判と巨額の財政負担に耐えられず、最後には委任統治の放棄に追い込まれるだろう——。これが抵抗活動の狙いだった。

しかし、ユダヤ武装集団は相互に不信感を抱き、対英闘争の足並みを揃えられない。それには理由があった。戦争中——とりわけカーヒラでモインが暗殺されてからは、ユダヤ機構と翼下の自衛組織ハーガナーはテロ分子を捕らえ、英官憲に引き渡す。この同胞相克の時期は、のちに〈狩猟の季節〉と呼ばれた。戦後、ハーガナーの穏健方針は内部から離反を招き、少なからぬ人数が脱退して過激派に加わる。そこで、この対英協力機関の非公然軍事部門は、組織防衛のためにも武闘路線の採用を迫られた。

ベン＝グリオンは英労働党政権にはっきり見切りをつけ、武力闘争の決意を固めた。ユダヤ難民十万人の移住を勝ち取るために、尋常な手段では英国政府の態度変更を期待できない。いまやハーガナーは他の過激派武装集団と同様に、積極的な軍事活動を始める。だが、もともとがアラブの襲撃に対抗する自衛団だけに、防御を得意としても攻勢に不向きだった。そこで傘下の強襲部隊〈パルマッハ〉が、遊撃戦の主役を務める。これは戦時中に英軍の黙認の下に編成され、連合側側の戦争努力に協力した。²⁵

ユダヤ機構の実力者ベン＝グリオンは合法・非合法の二面を使い分け、一方でエルサレム執行部の最高責任者として高等弁務官と折衝しながら、他方で地下の軍隊の司令官として軍事作戦を指揮する。彼はランダン執行部の会議に出席した帰路、ヴァイツマンにも決して明かすことのできない任務を帯びてパリに立ち寄った。ハーガナーは秘密司令部をフランスの首都に設置し、そこから軍事活動の指令を発していたのである。

1945年10月、パルマッハは不法移民の収容所を急襲し、約二百人の密入国者の逃走を助けた。またレバノンとの国境に近い場所で、ユダヤ亡命者の越境を手引きして、英軍兵士と銃撃戦を演ずる。その頃、武装集団の大同団結が具体化した。過去の対立と憎悪を一挙に解消できない。イルグーンもレヒも組織を解散せず、独自性を維持しながら連合戦線の戦列に参加する。だが、共同作戦の戦果は、予想以上に大きかった。

10月31日の深夜から11月1日の未明にかけて、ユダヤ武装集団の各派は役割

を分担し合い、百五十カ所以上で 同時多発的に破壊活動を展開した。パルマッハは鉄道を寸断したばかりか、密入国取り締まり船を泊地で沈める。イルグーンは操車場で貨物列車と蒸気機関車を爆破し、英兵一人とアラブ人二人を殺した。レヒは石油精製工場の設備に損害を与え、三人のアラブ人を殺害した。

武装蜂起の背後に ベヴィンは激怒してヴァイツマンを呼び付け、嚴重な警告を発した。いまや対英翼賛機関が過激派と組んで、公然と委任統治体制に刃を向けている。パレスナのユダヤ社会は、英国に宣戦を布告するつもりか？ これまで英国政府は問題の全面的解決を図ろうとして尽力してきたが、その努力を今後は放棄せねばならない。暴力の脅迫の下で、とうてい交渉はできないからである——と。英諜報機関は暗号解読によって、武装蜂起の背後にユダヤ機構の影をはっきりと見出していた。

国際シオン主義運動の長老は抗弁する。もともと暴力の支持派は一握りに過ぎなかったが、英国の政策のせいで急増してしまった。ユダヤ機構のランダン執行部は、昨夜、暴力非難の声明を発表したばかりだ。しかし、同胞に自制を訴えようにも、英国の方針がユダヤ教徒の将来を破滅に陥れると受け取られている現状では、とうてい無理である。ユダヤ難民はパレスチナ行きを認められぬまま、いまも欧州の収容所で死につつある——と。

当時の高等弁務官アラン・カニングムは側近の進言を斥けて、ユダヤ機構が破壊活動に関与した証拠をつかみながら、エルサレム執行部の幹部逮捕など強硬措置を控えた。この生粋の職業軍人は武力を背景に性急な対抗手段に訴えても、パレスチナのユダヤ社会全体を敵に回すだけと判断したからである。ナチドイツは占領地でパルチザン活動を抑止するため、住民に対して残虐な報復を辞さなかった。だが、英軍はユダヤ過激派のテロ活動を封ずるのに、独軍ほどの強硬策を取れない。²⁶

パレスチナの治安を回復するために、英本国から第六空挺師団が急派される。ほんの一年前、この部隊は連合軍のノルマンディ上陸作戦で尖兵を務め、さらに欧州各地に転戦してヒトラルの軍勢と戦った。だが、歴戦の勇士にとって、今度の任務は勝手が違う。テラヴィヴの街頭で敵意に充ちたユダヤ群衆の罵声を浴びながら、投石の雨にじっと耐えなければならない。

続発する 反英連合戦線の大枠内で、各武装集団は戦果を競った。

破壊活動 1945年11月の末近く、ハーガナーは沿岸警備隊の基地を襲撃し、密入国船の見張り所を爆破した。犯人は警官隊に追跡され、近くの開拓農園に逃げ込む。農民たちは武闘派をかくまい、警官の立ち入りを拒否した。軍隊が派遣されて農園を包囲すると、ユダヤ側から銃弾の洗礼を浴びる。ハーガナーはもはやアラブ人と戦う自衛組織でなく、かつての保護者に公然と銃口

を向けた。一昔前、英軍兵士は哨戒任務で開拓地に立ち寄ると、住民から歓待されたものだった。

1945年の暮れ、イルグーンはエルサレムとハイファで警察署を攻撃し、十人の警官と兵士を殺害する。翌年の2月、レヒは軍資金調達のため銀行を襲撃し、二人の同胞の生命を奪った。さらに警察高官の暗殺を試みたが、失敗に終わる。パルマッハは不法移民船の取り締まりを妨害するため、聖書ゆかりのカルメル山の海軍電波探知基地を破壊した。勢いに乗って三カ所で警察署を襲ったが、逆に反撃されて四人の死者を出す。²⁷ イルグーンも負けずに三カ所の英空軍基地に潜入して爆薬を仕掛け、英軍兵士の人命には損害を与えなかったものの、二十二機の軍用飛行機を破壊した。

1946年 3月、米英合同調査団がパレスチナを訪れ、ベン＝グリオンやゴルダ・マイアスン（のちにメイアルと改姓、1969年～1974年の首相）らユダヤ機構エルサレム執行部の面々から事情を聴取する。いずれも臆面もなく対英協力機関と破壊活動の関連を否定した。調査団の滞在期間中、テロ活動は下火となる。しかし、1946年 5月 1日、公式報告書が発表されると、破壊活動はまたもや燃え上がった。その勧告が十万人の即時移住を勧告する一方で、ユダヤ国家の樹立を明確に斥けたからである。

報告書の発表から十数日、各地で破壊活動が続発し、テロの連鎖反応を起こす。まず、ハーガナーは十カ所で鉄道橋を爆破した。このためパレスチナとシリア、トランスヨルダンを結ぶ鉄道輸送は停止し、経済活動に深刻な影響を招く。続いてレヒはハイファの鉄道工場を襲撃し、機関車などを破壊した。イルグーンは目標を施設に定めず、直接に英将兵を狙った。エルサレムとテラヴィヴで、十一人の将校を捕らえる。英軍の捕虜たちは人質として、獄中の同志の奪還に役立つ。

イルグーンの新戦術は、折りから訪英中のベン＝グリオンを苦しい立場に追い込む。この戦闘的指導者は一方でハーガナーの破壊活動を指揮しながらも、他方では対英世論工作から英兵の生命に可能な限り危害を加えぬよう指示していた。彼は植民地相のジョージ・ホールと会った際、ユダヤ機構とテロリズムのつながりを否定する。そして、パレスチナに電報を打って、この種の暴力行為を公式に非難し、人質の釈放を訴えると約束せねばならなかった。

大量逮捕と 家宅捜査 カニンガム高等弁務官は抵抗運動の鎮圧に慎重だったが、破壊活動の続発で堪忍袋の緒が切れた。1946年 6月29日の早朝、ユダヤ教の安息日を狙って、ユダヤ機構事務所の家宅捜査と幹部の一斉逮捕に踏み切る。英委任統治の翼賛団体は抵抗運動の聖域と化していたが、警官と兵士の土足に踏みこまれた。暁の急襲でパレスチナ全土で

約三千人が拘束され、寝室から獄窓へ連行された。この強権発動は〈アガサ作戦〉の暗号名で呼ばれる。

折りしもヴァイツマンはエルサレムに滞在中だったが、官憲は対英協調路線の大御所に敬意を払う。マイアスンも拘禁されずに済んだ。この高名な女性闘士の行動は他の幹部同様に知れ渡っていたが、その名前が逮捕予定の危険人物名簿から漏れていた。ベン＝グリオンはパリにいたので、難を免れた。過激派指導者のベギンは危ういところで虎口を脱し、地下に潜入して次の作戦を準備する。

カニングムの強硬策で、ユダヤ抵抗運動は一時的に打撃をこうむる。しかし、英治安当局はユダヤ機構の家宅捜査で入手した押収書類から、武器の隠し場所や兵力の配置をつかめなかった。多数の公的指導者、テロ活動の容疑者を逮捕したにもかかわらず、非公然の活動家を網の目から逃していた。英政庁は間もなくアガサ作戦の失敗を思い知らされる。

エルサレム旧市街のヤッフォ門の近くに、ダヴィデの塔がそびえ立つ。それと谷を隔てて向かい合う場所に、ダヴィデ王ホテルが建っている。この重厚な石造建築は新市街の一角に偉容を誇り、英委任統治当局の権威を象徴していた。それは支配層の社交の場、賓客の宿泊所だけではなく、南側の一翼に英政庁、軍司令部、諜報機関が事務所を構えていたからである。暁の大作戦からまだ一カ月とたたぬ 7月22日の白昼、ベギンの率いるイルグーンはホテルの爆破に成功し、英国の面目を失わせた。

テロ分子はアラブ人に変装してホテルの内部に入りこむと、銃を突き付けて従業員を地階の厨房に押し込む。そして牛乳缶に隠した高性能爆薬を政庁の事務所の真下にある喫茶店に運びこんだ。続いて起きた強烈な大爆発で、さしも堅固な建物も根底から揺らぐ。ホテルの南西の一翼は、一階から六階まで跡形もなく崩れ落ちた。死者の数は、アラブ人が四十一人、英国人が二十八人、ユダヤ教徒が十七人、その他が五人で、合計九十一人に達する。この容赦ないなテロ活動は、多数の罪なき人々を巻き込み、同胞まで犠牲に供するのを辞さなかった。²⁸

〈第四部の註と参考文献〉

1 この引用箇所は若干の語句を省略してある。ビルトモア宣言は、次の資料集による。Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), The Arab Israel Reader: A Documentay History of the Middle East Conflict, Revised and updated edition (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、79頁]

2 ヴァイツマンはビルトモア宣言の全面支持を表明したが、その内容がすぐに実現できると考えず、むしろ最大限の要求表明と受け止めた。一方、ベン＝グリオンはビルトモア宣言をシオン主義運動の新しい綱領として重要視した。この評価の違いからも、二人の対立は急速に深まり、後者はユダヤ国家再興運動の指導部から前者の追い落としを図る。〔Walter Laqueur, A History of Zionism (New York: Schocken Books, 1976年)、547頁]

3 ポウランドの崩壊後、運命の手は一人のシオン主義活動家をパレスチナへ導く。その人物——メナヘム・ベギンは英委任統治領で地下の武装集団を指揮し、ついにはイスラエルの首相になった。

ドイツ軍のポウランド侵攻後、ベギンは隣国リヌーエイニアの首都ヴィルナへ逃亡した。1940年、バルト三国がソ連に併合されると、NKVD (ソ連の秘密警察) に逮捕され、強制労働に服する。独ソ戦争の勃発後、ポウランド系囚人は釈放されて、ドイツ軍と戦うことになった。彼はロシアで編成された亡命ポウランド人部隊に加わる。その後、司令官のヴラジスロウ・アングス将軍が赤軍と確執を起こしたので、部隊は英国の仲介によってソ連を去り、イラン、イラク、トランスヨルダン経由でパレスチナに移動した。こうして熱烈なシオン主義活動家は、1942年、神の約束の地にたどり着く。〔Eric Silver, Begin: A Biography (London: Weidenfeld and Nicholson, 1974年)、21~39頁]

4 1939年5月、チャーチルは下院でマクドナルド白書を批判し、「バルファ宣言を侵害、かつ否認するもの」と述べた。この発言はシオン主義者に絶好の宣伝材料として利用され、ビルトモア宣言の第六項にそっくり引用されている。〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), 前掲の資料集、78~79頁]

5 1940年5月、チャーチルの戦時内閣はパレスチナで六箇中隊のユダヤ部隊を認可した。だが、その実現はずるずると延期され、ついに立ち消えとなる。独ソ戦の開始後、英国は新しい味方に軍事援助を与えるのに精一杯で、ユダヤ部隊に必要な装備にも事欠いた。〔Nicholas Bethell, The Palestine Triangle: The Struggle between the British, the Jews and the Arabs, 1935-48 (Tel Aviv: Steimatzky's Agency, 1979年)、90頁、109頁]

ようやく大戦の末期、将校百五十人、兵士三千五百人から成るユダヤ旅団が編成されてイタリで戦ったが、その存在は「シオン主義外交の最大の政治的成果」と解釈された。〔Walter Laqueur, 前掲書、540~541頁]

6 米国内の活動家は連邦議会の議員に働きかける前に、多数の州議会で、親シオン主義的決議の採択に成功した。〔George Lenczowski, The Middle East in World Affairs, Fourth edition (Ithaca: Cornell University Press, 1982年)、400頁]

7 英国に対する配慮から、ユダヤ機構と世界シオン主義会議は、それぞれパレスチナ

への密入国に反対した。1930年代の後半、在欧のシオン主義者は〈非合法移民委員会〉（略称・モサド）を設立し、ドイツ第三帝国の治安警察（SD）と秘密警察（Gestapo）の協力を得て、ユーゴスラヴィア、ギリシャ、ルーマニア、バルゲアリアの港から同胞を英委任統治領に送り出す。〔Francis R. Nicosia, The Third Reich and the Palestine Question (Austin: University of Texas Press, 1985年)、159~163頁〕

欧州動乱の開始後、ボールカン半島に成立した親独ファシスト政権は本質的に反セム主義的であり、自国内のユダヤ系市民を厄介者視して国外脱出をむしろ奨励した。

第二次世界大戦に先立つ五年間に、シオン主義者の支援団体は密航船を調達し、約二万人（別の推計では三万から四万人）に達する移住者を欧州からパレスチナの海岸まで運んだ。その一艘の〈タイガ・ヒル〉号は千四百人以上の難民を乗せてルーマニアの港から船出し、地中海の洋上で別の船から数百人の難民を移乗させた。同号は目的地の近くで英海軍の哨戒艇から砲撃され、難民の二人が死亡した。だが、どうにか追っ手の追跡を逃れて、1939年9月1日、すなわちドイツのポーランド侵攻の当日、テラヴィヴの浜辺の浅瀬に乗り上げる。難民たちは待ち受けていた地元の救援団体の助けで、砂浜にたどり着いた。〔Mordechai Naor, Haapala: Clandestine Immigration (Tel Aviv: Ministry of Defense Publication House and IDF Museum, 1987年)、29~30頁〕

8 パトリア号の惨事から五十年を経過した1990年、イスラエルの新聞は次のような生存者の回想談を掲載した。

1940年 3月、ドイツ第三帝国の親衛隊将校アードルフ・アイヒマン（第二次世界大戦後、南米に逃亡したが、イスラエルの特務機関に発見され、身柄をイスラエルに移された。裁判の結果、戦時中の残虐行為の責任を問われて死刑となる）は、ドイツ当局者と在欧ユダヤ社会の代表者との会談を斡旋し、これがユダヤ亡命希望者にとって国外脱出の最後の機会になると強調した。

在欧シオン主義団体はギリシャで三隻の船を借り上げ、ルーマニアの港へ回航させる。ユダヤ難民は幾つかの集合地からドイツ当局者の監視の下で、バルゲアリアとハンガリの国境を越えて、ようやく乗船地にたどり着く。難民船は英委任統治下のパレスチナのハイファ港に接近したところで、英海軍の巡視艇に停船を命じられた。そして、難民たちは囚人船のパトリア号に移乗させられ、インド洋のモーリシャス島に送られることになった。囚われの船客は行き先を知って抗議の集団断食を実行し、陸上の同胞は同情の同盟罷業を決行した。

ハーガナーの工作人員はパトリア号の出港を阻止するため、船底に爆薬を仕掛けた。難民たちは爆発の予定時刻に船室から出て、上甲板に集まる。だが、爆発の威力は予想以上に強烈で船体に大穴をあけ、大量の浸水を招いた。浮かぶ牢獄は急速に傾き、間もなく沈没した。パトリア号は戦利品としてフランスから英国の手に渡ると、一年近く無人のまま係留され、錆のため船体の腐食が進行していた。

死者の数は二百六十人にのぼったが、遺体が回収されたのは二百九人とどまった。千五百人の生存者は「英国王陛下の政府の例外的仁慈」によってモーリシャス島に配流されることなく、パレスチナの密入国者収容所に入れられた。〔The Jerusalem Post, International edition, 1990年12月 8日付、9頁〕

9 ハーガナーのAとBは再統一に向けて交渉を続け、1937年の春、Bの上級指導者た

ちは復帰を望んだ。しかし、若手の強硬派はBの独立性を維持するよう主張し、内部抗争が激化する。総勢三千人のうち約八百人がAに帰参したが、残りは民族軍事組織の新名称の下に結集した。〔Samuel Katz, Days of Fire: The Secret Story of the Making of Israel (Tel Aviv: Steimatzky's Agency, 1968年)、15~16頁〕

10 アブラハム・シュテルンはポウランド出身で、熱烈な反英闘士であり、同時に詩人でもあった。彼は英国と協力してはユダヤ独立を達成できぬと信じ、ヒトラルとの提携すら夢想した。そのため密使をシリアに派遣し、枢軸側のスパイと接触を試みたが、この奇想天外な企ては失敗に終わった。〔Samuel Katz, 前掲書、55~56頁〕

シュテルンは1942年2月、テラヴィヴの隠れ家に潜伏中、英官憲に逮捕された。連行される際、彼が窓に向かって突進したので、その場で射殺される。起爆装置に身を投げかけて自爆するのではないかと、警官隊は思いこんだからである。〔Nicholas Bethell, 前掲書、128頁〕

11 1940年、イタリが参戦すると、英国はイラークにイタリとの外交関係を断絶するよう要求した。その頃、バグダードに亡命中のフセイニがイタリ大使館に出入りし、ドイツと連絡を取っていたからである。当時の首相は民族主義者のラシード・アリーでフセイニの行動を黙認したばかりか、英国の内政干渉を排除するためにも、欧州戦争に局外中立を保つよう試みる。軍部の中では親独派の勢力が強く、イタリとの断交の見返りとしてパレスチナ問題をアラブ側に有利に解決するよう迫った。その後の政局の混乱の中で、王室が英国の保護を求めて首都から逃亡したので、イラーク軍は英空軍基地を包囲する。そこには英国人婦女子が引き揚げのために集結していた。英軍は迅速に行動を起こし、空から攻撃を加えると共に、トランスヨルダンから増援部隊を派遣する。イラーク王室のハーシム家は英軍に守られて王宮に復帰したが、国土は大戦の終了まで事実上の占領下に置かれた。前マフティのフセイニはイランに逃れて、日本大使館にかくまわれる。〔Phebe Marr, The Modern History of Iraq (Boulder: Westview Press, 1985年)、82~86頁〕

12 大戦中のエジプトは、連合国側の巨大な後方補給基地となった。しかし、国民感情は一般に親独的で、カーヒラの街頭で反英示威行進が独軍の勝利を叫ぶ。この情勢から民意の動向を察知して、国王も大臣も英国に押し付けられた不平等条約を尊重する気になれず、英国の危機感をかきたてた。〔Arthur Goldschmidt, Jr. A Concise History of the Middle East, Second edition, revised and updated (Boulder: Westview Press, 1983年)、222頁〕

13 釈放された囚人の中に、後のイスラエル国防軍幕僚長、国防相、外相のダーヤーンがいた。彼はハーガナーの一員で、幹部養成の研修中に逮捕された。〔Moshe Dayan, Story of My Life (London: Sphere Books, 1978年)、49~63頁〕

14 1940年1月、ナチ・ドイツの政府、軍の高官はベルリン郊外の行楽地で会議を開き、ユダヤ囚人の大量虐殺を能率よく遂行するために、毒ガス室付きの絶滅収容所の建設を決定した。こうしてユダヤ問題の〈最終的解決〉策が推進される。〔J. A. S. Grenville, A World History of the Twentieth Century: Volume I, Western Dominance, 1900-1945 (Hanover: University Press of New England, 1984年)、514~515頁〕

15 ベギンの伝記作者は、後のイスラエル首相に浴びせかけられる非難——前テロリスト——をかわすため、ベギンの青年闘士時代の言動を弁護している。

その記述に従えば、ベギン指揮下の武装集団イルグーンの闘いは、軍事的手段による政治的闘争であった。政治家としてのベギンは武装闘争路線に自ら制限を課し、彼の地下の軍隊が大英帝国を敵に回しているのではないと考える。彼は他の反英武装闘争集団の代表と統一をめぐるって会談した際、宣伝文書に「英帝国主義」の表現を使わぬよう主張した、相手（その一人のイツハク・シャミルは、後にイスラエル首相となる）が反問すると、ベギンは「圧政」がよいと答えた。ベギンの主張によれば、エルサレムの英委任統治当局が英国の反シオン主義政策の責任を第一義的に負うべきであり、抵抗闘争の標的はランダンの英国政府ではない。本国政府はユダヤの大義にもっと同情的な方向へ政策を転換できる筈だ——と。ただし、この議論は相手の納得を得られなかった。

1944年10月、ベギンがハーガナーの司令官（学生時代からの知り合いだった）と五時間になたって秘密会談を開いた際にも、旧友に持論を繰り返した。イルグーンは英国に対してではなく、圧政に宣戦を布告したのだ。英国は我々の敵ではない——と。〔Eric Silver, 前掲書、43~44頁〕

16 チャーチルは回顧録の中で、ユダヤ過激派のテロ活動を「忘恩の憎むべき行為」と非難している。〔Winston S. Churchill, The Second World War and an Epilogue on the Years 1945 to 1957 (London: Cassell, 1959年)、972頁〕

17 第一次世界大戦後、ヴァイツマンはファイサルと協定を締結し、パレスチナに関するユダヤとアラブの合意達成を可能と信じた。東アラブの独立が実現せず、両者の合意が立ち消えになった後でも、ヴァイツマンはこの考えを捨て切れず、金銭で問題の解決を思い付く。その時、彼の許に、耳寄りな話が伝わる。石油開発が始まる前、イブン＝サウードは財政的に不如意だった。ユダヤ側が二千万英ポンドを提供すれば、砂漠の王はパレスチナ在住のアラブ人を広大なアラビア半島に引き取り、聖地をシオン主義者に引き渡すだろう——と。この夢のような話は、ある英国人が火元だった。彼は冒険家、探検家、山師で、サウード家に深く食い込む。その話が回り回って、チャーチルからロウザヴァルトに伝わった。大統領はヴァイツマンに頼まれてわざわざ特使を派遣し、パレスチナの金銭取り引きの可能性を打診する。イブン＝サウードが怒りを爆発させたので、この構想は沙汰やみとなった。そこでロウザヴァルトはパレスチナの将来について、事前協議を約束する。〔David Holden and Richard Johns, The House of Saud (London: Pan Books, 1983年)、133~134頁〕

18 この時の共和党の対抗馬はニューヨーク州知事のトマス・デューイだったので、ロウザヴァルト陣営は苦戦を覚悟した。選挙結果は民主党の大統領候補が三十六州で四百三十二人の選挙人を獲得したのに対し、共和党の候補者は十二州で九十九選挙人を得たに過ぎない。しかし、一般投票の差はもっと接近し、ロウザヴァルトの得票数二千五百万に対して、デューイのそれは二千二百万に迫り、大接戦だった。〔Oscar Theodore Barck, Jr. and Nelson Manfred Blake, Since 1900: A History of The United States in Our Time (New York: Macmillan, 1950年)、731~735頁〕

19 1945年4月、米国の駐ソ大使エイヴァラル・ハラマンは大戦末期の情勢を分析し、やがて合衆国がファシズムあるいはナチズムと同様に危険な相手（ソ連の共産主義）とイデオロギー戦争に直面するだろうと預言した。海軍長官ジェームズ・フォリスタルはソ連の平和的意図を信頼せず、合衆国がすぐに防備を解かないで、戦後も大軍を維持するよう提

唱した。元駐日大使で国務長官代行のジョージ・グルーは自著で悲観的見解を展開し、世界大戦の結末がドイツと日本から全体主義的独裁と権力をソ連の手に移すだけなら、この戦時中の味方が合衆国にとって将来は枢軸国と同様に重大な脅威となるだろうと警告を発した。〔Foster Rhea Dulles, America's Rise to World Power, 1898-1954 (New York: Harper & Brothers, 1954年)、219~220頁〕

20 大統領と国王は会談の成果に満足して別れたが、両者の間に基本的な誤解を残す。ロウザヴァルトが個人的見解を語ったのに対して、サワード家の当主は米国の名誉を賭けた発言と解釈したからである。この食い違いは大統領の死後になって、ようやく明らかになった。〔David Holden and Richard Johns, 前掲書、138頁〕

21 1933年、ヒトラルが政権を掌握してからナチ支配の崩壊に至る十二年間に、米国は二十七万五千人のドイツ人亡命者を受け入れ、そのうちの十八万人がユダヤ教徒だった。同じ期間、英国は三十万人を迎え入れ、そのうち七万人がユダヤ教徒だった。米国は対独戦争の終結後、ユダヤ移住者の入国規制を強化し、ドイツ降伏の1945年5月から翌年9月までの一年四カ月間に、僅か五千七百十八人を受け入れたに過ぎない。〔Ritchie Owendale, The Origins of the Arab-Israeli Wars (London: Longman, 1985年)、95頁〕

22 この発言は国務省の公式記録にとどめられてなく、ウィリアム・エディ陸軍大佐の著書に引用されているだけである。当時、エディは国務省に勤務していたが、1947年の暮れに辞職してから間もなく、アラビア砂漠で操業の米国石油会社に迎えられ、反シオン主義の立場からウォシントンで政界工作に従事した。〔Michael J. Cohen, Palestine and the Great Powers (Princeton: Princeton University Press, 1982年)、51頁〕

23 この発言をとらえて、米国のシオン主義団体は上院で審議中の対英借款を阻止しようと工作した。〔Ritchie Owendale, 前掲書、94頁〕

24 1941年、イードン英外相はアラブの統合に賛意を表明し、関係諸国から歓迎される。もともとアラブ連盟の構想は、緩い国家連合の形成によってアラブ民族主義を手なづける意図をこめており、イラークやエジプトの対英不平等条約の改訂運動の鎮静化を狙った。〔Peter Partner, A Short Political Guide to the Arab World (London: Pall Mall Press, 1960年)、49頁〕

しかし、シオン主義者はアラブ連盟を将来のユダヤ国家に対する脅威と受け止める。

25 独軍がギリシャを占領したばかりか、地中海のクリート島まで手中に収めると、パレスチナの英軍に危機意識が高まった。シリアとレバノンに駐屯のフランス軍はナチ・ドイツに協力のヴィシ政権に忠誠を誓っているため、状況次第では中東の一角に独軍を迎え入れると危惧された。パルマッハの挺身隊は英軍に協力して、レバノン北部の港町トリポリの精油所を攻撃するため、小船でハイファ港から出発したが、そのまま消息を絶った。〔Nicholas Bethell, 前掲書、103~104頁〕

ダーヤーンは独眼の将軍として知られ、いつも片目に黒い眼帯をかけていた。1941年、パルマッハの一員として連合軍の案内役を務め、レバノンでフランス軍と戦った際に目に負傷したからである。〔Moshe Dayan, 前掲書、64~74頁〕

26 英帝国参謀総長のバーナド・モントゴメリ元帥はパレスチナ情勢悪化の原因を高等弁務官の弱腰に求め、軍部を代表してアトリ内閣に強硬措置を講ずるよう迫ったが、同意を得られなかった。ユダヤ過激派のテロリストが死刑を宣告されても、実際に処刑される

のは稀だった。この武人はかつてカーヒラで英第八軍を指揮し、独軍戦車部隊のエジプト侵攻を撃退しただけに、中東情勢に精通していた。彼は死刑執行こそ英国から優柔不断の印象を拭う最良の方策と考え、駐留軍の士気を高めるためにも武断策の採用を強く主張した。〔Nicholas Bethell, 前掲書、290頁〕

27 パレスチナのユダヤ社会は四人のテロリストの死を深く悼み、国家名士なみの葬儀を営んだので、高等弁務官を始め英政庁当局者の神経を逆撫でする。約五万人のユダヤ住民が葬列の通過する道路沿いに並び、ユダヤ兵士や警官まで行列に加わった。〔Nicholas Bethell, 前掲書、227頁〕

29 イルグーンは爆発前に電話でホテルに警告したが、英側が面子から避難命令を出さなかったと、大惨事の責任を英国側に転嫁する。ハーガナーの放送は、次の噂話を伝えた。英政庁の高官はホテルの支配人から警報を知らされた際、「ユダヤ教徒に命令を発することはあっても、逆に命令されることはあり得ない」と述べて適切な措置を怠った——と。〔Samuel Katz, 前掲書、94頁〕

第五部

国際連合主導のパレスチナ分割

20 国際連合の判断

ランダン会議の決裂 1947年 2月19日、アトリ内閣はパレスチナ問題の自主解決を断念し、国際連合の判断に委ねると下院で発表した。労働党政権は過去一年半にわたって、十万人のユダヤ難民問題で明け暮れる。前年の夏からアラブ諸国、シオン主義団体の代表をランダンに招き、断続的に個別会談を開いた。ベヴィン外相は最終案を提示し、両者の歩み寄りを求める。だが、双方から拒否されて、もはや万策尽きた。

英国の提案がまとまるまで、外務省と植民地省の見解対立で、内容は二転三転した。最終提案はそれまでに浮かんで消えた諸案の最大公約数を取り、特に目新しいものではない。それは次の二点に要約される。すなわち、二年間で十万人のユダヤ難民がパレスチナに受け入れられ、その後の移民枠は両者の合意で決めて、不調の場合には国際連合の仲裁を求める。五年の移行期間中、パレスチナは信託統治下に置かれ、その後はアラブでもユダヤでもない単一国家として独立する――と。

アラブ側としては、この案をとうてい受諾できない。第二次世界大戦中にユダヤ教徒のこうむった災厄は同情に値するとしても、なぜ欧州のキリスト教社会が犯した罪を、中東のイスラーム社会が償わねばならぬのか。十万の難民のパレスチナ入りを認めれば、やがて百万の移民が後に続くだろう。シオン主義者側も頭からベヴィン案に反対する。当面は十万人が移住できても、二年後の保証が全くない。それに単一国家の独立は、政治的シオン主義の究極目的――ユダヤ国家の創設――とは根本から相容れないからである。英国政府は当事者能力の喪失を自ら認め、第三者の判断を仰ぐ。¹

国際連合は1945年の春に発足したばかりで、前身の国際連盟の厄介な遺産を背負いこむ。英国の委任統治は連盟規約と密接に関連しているので、統治権の放棄や変更には国際的合意を必要とした。1947年 5月、新しい国際機構は米国のニューヨーク州に招集した特別会で英国政府の要請を受け入れ、十一カ国で構成のパレスチナ問題特別委員会を設置した。

パレスチナ分割でユダヤ国家を バルフア宣言の発表から三十年、委任統治の公式開始から四半世紀、この時期に至って英国政府は自ら蒔いた紛争の種の収穫を刈り取らねばならない。米英合同調査団がパレスチナを訪れた前後には、英国の支配態勢は完全に末期的症状を呈する。テロ活動の続発に耐えかねて、3月1日、英治安当局は戒厳令を

布告したものの、政治、外交的配慮から半月後に解除せねばならない。パレスチナ駐屯の英軍兵士は当局の優柔不断な態度に怒り、軍紀に公然と逆らって街頭で通りすがりのユダヤ住民を袋だたきにし、商店を打ち壊す。

その前年、ユダヤ機構は幹部逮捕と家宅捜査の打撃から立ち直るため、ベン＝グリオンの提唱で未逮捕者をパリに集め、ランダンとエルサレム両執行部の合同会議を開く。ヴァイツマンは眼の手術を理由に出席を断った。二人の対立はまだ修復可能の余地を残していたが、この高齢の対英協調主義者は指導性を喪失し、最後には実権のない名目的地位に祭りあげられる。²

このパリ会議で、ユダヤ機構は独自の分割案を作成し、ビルトモア宣言以来の路線を変更する。それまで国際シオン主義運動はパレスチナ全土のユダヤ国家化をめざすだけでなく、その領土的野心を英委任統治領の境界内に限定しなかった。トランスヨルダンのアブダッラー首長は第一次世界大戦中から不平等条約の改訂を要求していたが、1946年3月、アマーとランダンとの間に新たな関係が樹立される。その結果、ヨルダン川の東岸では英国の委任統治が廃止され、砂漠の首長国は完全主権の独立国となった。シオン主義者はエレッツ・イスラエルにユダヤ国家の創建を主張していただけに、声を大にして新条約の締結を非難する。

ユダヤ機構の分割案は二年後に実現したイスラエル国家の領域とほぼ一致するが、エルサレムまでは要求していなかった。この青写真は米国に伝えられ、トルーマンの了承を取り付ける。さらに、同じ年の暮れ、スイスのバーザルで開催された第二次世界大戦後初の世界シオン主義会議でも採択され、ユダヤ側の正式案になった。³

1946年9月、英国政府は手詰まり状態を打開するため、ユダヤ機構とアラブ諸国にランダン円卓会議へ参加を求める。ユダヤ側は出席に応じなかった。議題を独自の分割案に限定するよう迫り、英国に拒否されたからである。アラブ側は従来通り態度を変えず、マクドナルド白書の完全履行を求めた。円卓会議はユダヤ側の不在のまま、ひとまず開会したものの、英国とアラブ諸国の内部調整の必要から、しばらく延会となる。

トルーマンの支持声明 1946年は米国の中間選挙の年に当たり、またもやトルーマン大統領に強い政治的圧力が加えられる。非ユダヤ教徒の親シオン主義団体は合併で〈米国キリスト教徒パレスチナ委員会〉と名乗り、政界に影響力を増大した。またウォシントン駐在の英大使が交替したのは、英国の態度軟化と解釈された。新任のアーチ・クラーク・カーは、親シオン主義的心情の持ち主として知られていたからである。

その年の10月5日は、ユダヤ暦でヨーム・キップール（大贖罪の日）に当たっ

た。この聖祝日を前に、民主党のニューヨーク州知事候補と上院議員候補の二人はホワイトハウスに駆け込み、大統領にシオン主義支持の態度表明を迫る。共和党の対抗馬が大票田のユダヤ有権者に向けて、罪滅ぼしの日にふさわしい行動を起こしそうな気配だったからである。選挙の結末を心配して、トルーマンは圧力に屈した。ユダヤ教徒の政治献金が民主党の財政に大きく寄与しているだけに、圧力団体の意向に逆らえない。

そこで前日の10月4日、共和党を出し抜いて、大統領声明が出される。パレスチナ分割によるユダヤ国家の創建、難民十万人の即時移住——シオン主義者の作成した筋書き通りだった。トルーマンの一方的言動はアトリを怒らせ、両国間の信頼関係に亀裂をもたらす。英首相はランダン円卓会議に及ぼす悪影響を恐れ、米大統領に声明の発表延期を求めたが、すっかり無視された。

英国政府はアラブ側の提案を検討するため、10月初めに円卓会議を休会にする。ベヴィンはヴァイツマンらのユダヤ代表団と非公式ながら会談し、アラブ側が円卓会議に復帰する前に、ユダヤ側と実質的交渉に入ることも考慮していた。そして、善意の証として拘禁中のユダヤ機構幹部の釈放を検討する。ところが、米国大統領の声明は円卓会議を決裂と断じ、全く事実関係を誤認していた。トルーマンとシオン主義者の画策にもかかわらず、民主党は選挙で敗北を喫する。

不法移民の急増 英国政府がパレスチナ問題の解決を国際連合の判断に委ねてから、現地の情勢は急速に悪化の一途をたどった。ユダヤ過激派は英国の統治能力喪失を印象づけるために、テロ活動をますます強化する。乳と蜜の流れる地に、犠牲者の血が絶えることなく流れた。英国人の政庁、軍関係者は家族を本国に帰し、鉄条網の内側に立てこもる。前年の秋、ユダヤ機構の幹部が釈放されて以来、ハーガナーとイルグーン、レヒの関係は緊張した。英国政府は釈放の条件として、テロ分子との絶縁を強く要求する。再びパレスチナに〈狩猟の季節〉が訪れた。

そこでハーガナーは活動の重点を武装闘争から不法移住の推進に転換し、難民の密入国を組織化する。〈鉄のカーテン〉⁴ が戦後の欧州を東西に分断してからも、その東側から米英仏三国の占領地に向かって、ユダヤ難民の行列が引きも切らず続いた。ポーランドやルーマニアに成立したばかりの共産主義政権は、新体制に忠誠の定かでない少数派信仰集団を意図的に西側へ追い出す。その結果、ドイツとオーストリアに急造の収容所は超満員となり、十万人の即時移住論に拍車をかけた。⁵

ユダヤ難民は欠乏と抑圧を体験してきただけに、大半が大西洋の彼方の自由の天地に憧れる。しかし、移民法改正の動きが出始めたものの、合衆国の門戸

は半ば閉ざれて狭い。ハーガナーの要員は難民収容所の内部で宣伝活動を活発化し、現地訪問の国際連合パレスチナ問題特別委員会の聴き取り調査に対して、難民の行く先はシオンの地以外にないと回答させる。ユダヤ国家の実現を図るために、難民の大群を希望地の米国に向かわせてはならなかった。

またもや英海軍の艦艇は、ユダヤ難民船の取り締まりに忙殺される。戦時中とは異なり、航海の自由の原則から、他国の船籍の難民船を公海で臨検や捕獲できず、それが沿岸三海里の領海内に入るまで待たねばならない。英国政府は戦後にアラブ側の反対を押し切り、マクドナルド白書で認めた移民枠の未消化分として、月に千五百人の移住を認めたが、不法移民の数はそれを上回る勢いだった。難民といいながらも、この時期の入国者には生活力のない高齢者や婦女子ではなく、屈強の若者が目立った。ハーガナーは将来の軍事対決に備えて、特別に戦闘要員を選抜したからである。

二十世紀の 1947年 7月、パルマッハ出身の船長の指揮下、四千
出エジプト 五百人のポウランド系ユダヤ難民を満載した船が、フランスの小港からパレスチナの岸辺をめざす。この船はもともとアメリカのチェサピーク湾の渡し舟で、『旧約聖書』の「出エジプト記」にちなんで〈エクサダス1947年〉号と命名された。やがて密航船は、哨戒中の英海軍艦船に発見される。駆逐艦が強行接舷で水兵の一隊を移乗させると、難民は激しく抵抗して多数の負傷者と死者まで出す。

二十世紀のエクサダス号は喫水の浅い平底船なので、駆逐艦の航行できぬ浅海に入り込み、浜辺に乗り上げて難民を逃がす予定だった。船長はテラヴィヴ近くの海岸に船を突っこんで数百人を逃亡させるよりも、敢えて英国海軍に捕獲される方を選ぶ。⁶ 丁度その時、国際連合パレスチナ問題特別委員会の代表は、現地視察に来ていた。ユダヤ難民船の運命は絶好の宣伝材料として、世界の同情を集めることができるだろう。その目論見は外れることなく、予想以上の効果を上げた。

英当局はエクサダス号の密航者をひとまずハイファ港で下ろし、すぐに別々の囚人船に分乗させる。その目的地はサイプラス島でもモーリシャス島でもなく、出発地のフランスの港だった。難民は下船を拒否して、船内に立てこもる。この抵抗は大々的に報じられ、英国に不利な国際世論を形成した。最終的にユダヤ難民は、説得に応じてフランスに定住した一部の者を除き、ドイツのハンブルク港に移送された。これだけの人数を一度に収容できる施設は、英国内になかったからである。しかし、ヒトラルの迫害の生き残りを虐殺者の国に送り込むとは――と、この密航船事件はシオン主義者に絶好の非難材料を提供する結果となった。⁷

国際連合のパレスチナ問題特別委員会がどのような勧告をまとめるか、容易に予断を許さなかった。しかし、エクサダス号の事件が人道問題として喧伝されたために、シオン主義者と同調者が主張するように、パレスチナの分割とユダヤ国家の樹立こそ難民問題の最上の解決策として、国際世論に強く印象づけられる。アメリカ国内の親シオン主義団体は声高に正義と人道を叫んだが、無税の寄付金がパレスチナで流血のテロ活動を助け、アラブ人の民族自決権を奪っている事実には、少しも良心の痛みを感じなかった。⁸

21 国際連合特別委員会の勧告案

委任統治 1947年 8月31日、国際連合のパレスチナ問題特別委員会の**終結へ**は勧告案を提出した。この特別委員会は米国やソ連の両大国を排除し、十一の中立諸国で構成されている。同じ年の 5月15日に発足して以来、その代表団は三カ月半の短時日で報告書を作成しなければならなかった。まずパレスチナの現地に五週間滞在してアラブとユダヤの双方から意見を聴取し、さらに欧州に飛んでドイツとオーストリア各地の難民収容所を訪れた後、スイスのジュネーブで会合を重ねて、ようやく期限切れ間際に報告書をまとめ上げる。

英委任統治の終結やパレスチナの早期独立などの十一項目について、特別委員会は満場一致で勧告案を採択した。ところが、最も重要な将来の政体に関して、意見が大きく分かれる。多数派（カナダ、チェコスロヴァキア、グワターマラ、ホランド、パルー、スウィードン、ユルグアイ）の七カ国は、パレスチナの分割による問題解決を主張した。

この多数派案によれば、パレスチナはアラブ国家とユダヤ国家に分割され、聖都エルサレムはどちらにも属さず、国際連合の信託統治下に置かれる。両国は経済連合で結ばれ、二年間の移行期間後に独立する。独立の達成まで国際連合の承認の下で、英国が引き続いて統治する。その期間中、一定人数のユダヤ移民の受け入れを認める――と。⁹

一方、少数派（インド、イラン、ユーゴスラヴィア）の三カ国は、パレスチナに連邦の樹立を提唱した。これはアラブとユダヤの二つの国家から成り、エルサレムを連邦の首都とする。新国家は三年以内の移行期間を経てから創設され、その間の統治と独立準備の責務は国連総会で決めた機関に委ねる。連邦政府は国防、外交、通貨などの分野に全面的権限を有し、アラブとユダヤの両国家はそれぞれの領域で、完全な地方自治権を行使する――と。

国際社会の関心は、多数派の分割案に集中した。その作成に米ソの両大国が直接に関与しなかったものの、欧米諸国主導の提案は当時の世界の趨勢に合致していたからである。第二次世界大戦後の新国際秩序において、旧植民地や被占領地の新興国家が大きな発言権と影響力を発揮するまでには、なお十数年の時日を要する。パレスチナの将来が国際連合の判断に委ねられた際、アラブ諸国は委任統治の終結と即時独立の決議案で対抗したが、二十四対十四（棄権十）の大差で敗れた。

不公正な 多数派案

英国の委任統治下、ユダヤ側の買収地はパレスチナの地図をまだらに染めあげる。しかし、第二次世界大戦の終了時に、その面積はまだ全土の一割にも達していなかった。ユダヤ住民は英国支配下の二十五年間にかなり増加したとはいえ、やっと総人口の三分の一程度に過ぎない。ユダヤ入植地の小島がアラブの大海に点在しているので、分割の線引きは極めて難しかった。原案がシオン主義国家の領域に可能な限りユダヤ居住地を取り入れようと苦心したので、国境線は地形を無視して不自然に曲がりくねる。

このため国土面積は現地の実情を無視して、はなはだしく均衡を欠いた。ユダヤ国家は五千八百平方マイルの土地を割り当てられるのに、アラブ国家は四千五百平方マイルの土地を与えられるだけである。シオン主義国家は四十九万八千のユダヤ人口を擁しながら、同時にほぼ同数の四十九万七千のアラブ人を〈少数民族〉として抱え込む。それに引き替え、アラブ国家は八十五万を超える人口のうち、ユダヤ住民の数は一万にも達しない。¹⁰

この多数派案は、かつて英国の作成した二つの分割試案よりも、ずっとユダヤ側に有利だった。1937年7月、ピール調査団の作成した原案は、北部のレバナン国境寄りの全域を含んでいたとはいえ、南部の広大なネゲヴ砂漠を除外していた。1944年11月、チャーチル内閣の関係閣僚懇談会はパレスチナの分割で合意に達したが、カーヒラ駐在中東担当相のモインがユダヤ過激派に暗殺されたため、その企てを放棄する。幻の分割案はピール調査団の原案に準じたものだったが、北辺のガリラヤ地方をユダヤ国家の領域から除外していた。

アラブ側としては1930年代から一貫してパレスチナの分割に反対を唱えてきただけに、このような不公正な勧告を絶対に受け入れられない。アラブ連盟は加盟各国の代表を急いでベイルートに招集し、多数派の分割案がパレスチナ人の本来の権利を侵害するばかりか、近隣アラブ諸国の安全を脅かす——と主張した。カニンガム高等弁務官は現地の不穏な空気を読み取り、エルサレムから本国政府に警報を発する。分割を押し付けようとするいかなる試みも、大戦前の騒乱を繰り返すことになろう——と。

国際連合パレスチナ問題特別委員会の報告について、世界シオン主義会議はスイスのチューリヒで大会を開催し、表決の結果、五十一対十六の大差で分割案支持の決議を採択した。特別委員会が勧告案をまとめる前、ベン＝グリオンはユダヤ機構を代表して公聴会で陳述した際に、まず高飛車に要求を吊り上げる。パレスチナを分割せずに、その全土にユダヤ国家を樹立すべきだ——と。しかし、この最大限の要求を三日後には切り下げて、分割による解決を示唆した。ユダヤ機構が前年夏に独自の分割案を機関決定していたからである。

英国の早期撤退 英国政府はパレスチナ問題を国際連合に持ち込んだ際に、何の条件も付けず、その判断を尊重する筈だった。しかし、外相のベヴィンは自力で問題の解決を諦めながらも、分割案をどうしても容認できない。もし、多数派の勧告に同調すれば、立ちどころにアラブ諸国の信用を失ってしまうからである。しかも、さらに二年間も委任統治を続け、分割実行の責任を担わされることになれば、治安維持のために駐屯軍を増強せねばならない。軍部の試算によれば、新たに一箇師団の兵力を必要とした。

世界大戦の終結から満二年を経ながらも、当時の英国は戦争の痛手から回復していなかった。労働党政権は国民に厳しい耐乏生活を押し付け、食肉の配給削減にまで追い込まれる。国家財政は破産に瀕し、米国からの借款でどうにか息をつぐ有様だった。その一方でパレスチナの乾いた荒野は戦後すでに一億英ポンドの巨費を吸いこみ、その後もどれだけの軍費を必要とするか、全く見当もつかない。¹¹

特別委員会の報告が発表された三週間後の1947年 9月20日、英国政府はパレスチナから全面的に手を引くよう閣議で決定した。すでに国際社会は委任統治の終結について、意見の一致を見ており、ランダンとしても重荷を早く下ろしたい。しかしながら、多数派の分割案がベヴィンの断言通り「明白にアラブ側に不公正」であるだけに、英国は軽々に承服しがたく、まして分割を監視する責務まで担わされることになれば、否応なく武力衝突に巻き込まれるだろう。情勢がここに至っては、後は野となれ山となれ、ともかく撤退するのが先決だ――これが英当局者の偽りない真情だった。

その前月、インドとパーキスタンが分離・独立した際に、英国はヒンズー、イスラーム両教徒の対立に何の解決をもたらさず、後に流血の大混乱を残したまま、南アジアの亜大陸から撤兵した。パレスチナでも同じ事態が繰り返されようとしている。アラブとユダヤの双方が将来の政体をめぐって合意に至らなくとも(両者の不一致は決定的だった)、高等弁務官と属僚、軍司令官と将兵は早い時期に本国へ引き揚げる。英国は三十年に及ぶ統治の終わりに、敢えて火中の栗を拾おうとしなかった。

パレスチナの放棄は、大戦後の英国で、帝国の権威失墜と見做されなかった。実際、労働党政権の方針は広汎な世論の支持を得て、保守党の議員や新聞からも歓迎される。もう若者を無駄な死の危険にさらさずに済む。当時、二人の下士官がイルグーンに捕われて無惨な最後を遂げただけに、早期撤兵は何よりも国民の念願に叶った。¹² 軍隊の引き揚げは非生産的な支出を削減でき、アトリ政権がめざす生活水準向上の原資に振り向けられよう。折りしも国際連合の安全保障理事会が英軍基地に関するエジプトの提訴を却下したので、英国は引き

続いてスエズ運河沿いに軍事施設を維持でき、パレスチナに急いで基地を移転することもなくなった。

国際司法裁判所の判断を求めて 1947年 9月、国際連合は特別委員会の報告を検討するため、新たにパレスチナ問題臨時委員会を設置する。英植民地相のアーサー・クリーチ＝ジョウンズはみずから米国に赴き、総会の議場で態度を表明した。英国政府としてはアラブとユダヤの間で合意に達した計画の実現を保証するが、そうでない場合には計画の履行を無理と考えざるを得ない——と。つまり、多数派の分割案の責任を負えぬと、あらかじめ釘を刺す。さらに植民地相は確言した。たとえ問題の解決に至らなくとも、英国はパレスチナから引き揚げる——と。

新設の臨時委員会は加盟国を網羅する大組織で、内部に三つの小委員会が置かれた。第一小委員会は分割案をまとめた国々に米ソ両大国などを加え、多数派の勧告を検討する。第二小委員会は連邦国家案を作成した三国とアラブ六カ国から成り、少数派の勧告を審議する。第三小委員会は相反する両案の接点を探る筈だったが、ほとんど活動しなかった。

第一小委員会が多数の威力で分割を推進しようとする動きに対抗し、第二小委員会は国際法や国連憲章に照らして疑問を投げかけ、国際司法裁判所の判断を求めるよう提案した。¹³ その提起した問題点は全部で八項目に及び、まず現地住民の固有の権利について述べ、さらに第一次世界大戦中からの経緯を論じ、最後に国際連合の権限を鋭く衝く。以下に列挙したのは、各項目の要旨である。

- a 現地の（アラブ）住民はパレスチナの地に本源的な権利を有し、その将来の国家形態や政体の決定に当たって同様の権利を持っているのではないか。
- b 英国が第一次世界大戦中にアラブ側に与えた独立の誓約と保証は、パレスチナには適用されないのか。
- c 現地住民の同意なく発せられたバルファ宣言は、いったい有効か、どうか。かつパレスチナの住民を拘束するか、どうか。また、前述の誓約と保証に背馳しないか。
- d パレスチナ委任統治に関する国際連盟の協約はユダヤ教徒の民族的故地の樹立を定めているが、アラブ人の自治の振興、その権利と地位の保全に関する条項と矛盾なく両立できるか、どうか。
- e パレスチナ委任統治の法的根拠は、国際連盟の解散で消滅したのではないか。委任統治国の英国は、パレスチナの住民を正当に代表する政府に権力を引き渡すことこそ、義務ではないか。

- f パレスチナの分割構想は住民の大多数の同意を得ておらず、国際連盟の規約と委任統治の協約に違反しないか。

最後の二項目は、平和維持機構そのものに向けられた。

- g パレスチナの住民の大多数の合意なくして、国際連合は分割などの解決案を勧告する資格を持つのか。
- h 国際連合、あるいは、その加盟国は、パレスチナの将来の政体に関して、とりわけ住民の願望に反し、かつ住民の同意なく採択された提案を押し付けたり、勧告したりできるのか、どうか。

多数決で押し切る 第二小委員会は前述の八項目を決議案に盛り込み、第三者機関に公正な法的判断を求める。だが、国際社会の大勢は国際司法裁判所の関与を嫌い、上述の疑問点を数の威力で押し切った。11月24日、臨時委員会は二十五対十八（棄権十一）の表決で、ことごとく葬り去る。だが、最後の項目だけは、二十一対二十（棄権十三）のきわどい票差で可決された。¹⁴

そこで第二小委員会はユダヤ難民について決議案を提出する。新たに特別委員会を設置し、国連加盟国に難民の受け入れ人数を割り当て、あるいは難民を元の居住国に送還するよう提案した。この案は十六対十六（棄権二十六）の賛否同数で否決された。第二小委員会の最後の決議案——パレスチナに連邦国家を樹立——は、二十九対十二（棄権十四）の大差で否決される。

パレスチナ問題臨時委員会は多数派の分割案を審議し、国境線の一部を手直しする。この修正で港町のヤッフォはアラブ側の飛び地となり、ユダヤ国家に取り込まれるアラブ人口が七万五千人ほど減った。11月25日、臨時委員会は第一小委員会の修正報告を二十五対十三（棄権十七）で可決する。だが、パレスチナの分割勧告は総会決議として、改めて採択されねばならない。

多数派の勧告は少数派よりも倍近い賛成票を得たが、その一方で棄権票もきわめて多かった。英国は問題を国際連合に持ち込んだ当事者の立場から、すべての採決で意志を表示しなかった。国連憲章第十八条の規定によると、重要事項は三分の二の特別多数決で決定される。臨時委員会の表決結果は、必要な票数より一票少ない。この日からシオン主義者は総会決議の成立のため、なりふり構わぬ票集めに狂奔する。執拗な政界工作でトルーマンを動かし、中小国に露骨な圧力をかけた。

22 命運決する二大国の動向

米ソ両大国が、パレスチナの難問題はランダンに解決できない分割に賛成のまま、国際連合に持ち込まれた。聖地の命運は最後にマスクヴァとウォシグタンで決まる。1947年10月11日には米国が、二日後にはソ連が、それぞれ別々の思惑から、臨時委員会で分割案に賛成の態度を表明した。

第二次世界大戦後の二大強国の支持を得て、多数意見のパレスチナ分割勧告に弾みがつく。両国とも友好国や従属国に強い影響力を行使し、国際連合総会の投票で聖地の分割案が三分の二の特別多数を制するのに貢献した。

英国政府がユダヤ側の武装抵抗で統治能力を喪失した末に、この世界機構に判断を仰いだ理由の一つは、パレスチナ問題の手っ取り早い解決策——分割を自らの手で実行したくなかったからである。実際、植民地省、現地の政庁、軍部の一部には、分割論が根強くはびこっていた。だが、アラブに対する外交的、戦略的配慮から、ベヴィン外相は分割支持論者を押さえ込む。¹⁵

政治的シオン主義運動はパレスチナ問題の国際連合持ち込みをめぐり、英国の意図に強い疑念を抱く。これは一種の脅迫であり、策略に違いない。ランダンは国際世論を形ばかり尊重するだけで、委任統治の返上を本気で考えていない。この世界平和維持機構は効果的な解決策を見出せぬまま、パレスチナの難問を元に差し戻すだろう。そこで、英国はパレスチナ統治の白紙委任状を得て、民族的故地の樹立の義務から免れ、さらには従来 of 形式的な国際監視の枠さえ外されて、直轄植民地のように好き勝手に支配するだろう——と。

ベン＝グリオンらユダヤ機構の執行部は、パレスチナ問題の国際化を警戒し、むしろ英委任統治の存続を願った。ベヴィンがランダン円卓会議でユダヤ側の分割案を拒否しただけに、当面、ユダヤ国家の実現は望み薄である。それなら性急に独立を求めるよりも、しばらくの間、英国の保護を享受する方が有利だろう——と。

ただし、ユダヤ側としては、次の基本線を譲ることはできない。英国政府は1939年のマクドナルド白書を破棄し、土地売買の規制、移民の制限を解除しなければならない。つまり、バルファ宣言とパレスチナ委任統治の協約を厳正に履行し、民族的故地の樹立に向けて尽力すべきである。白書に盛り込まれたパレスチナ単一国家の構想は、アラブの優位、ユダヤの劣勢を固定化するだけに論外である——と。

ソ連の 1947年 5月14日 (奇しくもイスラエル独立の一年前)、ソ連の態度豹変 連の国連代表アンドレイ・グロムイコは特別総会で演説し、パレスチナの分割支持をほのめかす。この爆弾発言は、英国とアラブ諸国だけでなく、全世界を驚かせた。ランダンが国際連合にパレスチナ問題を持ち込んだのは、マスクヴァの反対を見越してのことだったからである。まだ特別委員会が正式に発足する前で、公然たる分割論は各国代表の口の端に上っていなかった。

ロシアのユダヤ社会から多数の革命家が輩出したが、1917年のボルシェヴィキ革命後、ソ連政府は国際シオン主義運動を英帝国主義の下僕として警戒してきた。つい半月ほど前まで、ソ連の宣伝機関はアラブ諸国に迎合し、ユダヤ国家再興に非難の声を浴びせ掛けたばかりだった。パレスチナにシオン主義国家を樹立する陰謀は、ユダヤ・ブルジョワの見果てぬ夢に過ぎない——と。¹⁶

この時のグロムイコは三段構えの論法で、パレスチナの分割に間接的賛意を表明した。第二次世界大戦中にユダヤ教徒がこうむった災厄を考えれば、建国の権利を否定するのは不当であろう。ユダヤもアラブも同等の権利を有する単一国家の樹立は、問題解決の一つの方策として留意に値する。しかし、国際連合の内部に新設の特別委員会が単一国家案を実現不可能と決定するなら、次善の策としてパレスチナの分割による二つの独立自治国家案を検討するのにやぶさかでない——と。

ソ連の態度豹変に、アラブ世界は驚倒した。ランダン円卓会議が決裂した際、アラブ側はパレスチナ問題の国際連合持ち込みに好意的反応を示す。当時の国際情勢では、分割による解決策が多数国の支持を得るとは、とうてい考えられなかったからである。ベヴィン外交の胸算用も、あらかじめソ連の分割反対を織り込んでいた。だが、グロムイコ発言は国際世論の底流を変え、ユダヤ国家の建国に大きく寄与する。

アラブ世界の新聞はグロムイコ演説に怒り狂い、真っ向から悪罵の声を浴びせかけた。ソ連は (革命的) 諸原則を安値でたたき売り、まるで帝国主義の代表のような口を利く——と。クレムリンは従来の方針を全面転換して、こともあろうにシオン主義の肩を持った。アラブの知識層は国際共産主義の宗家に期待を寄せていただけに、その権謀術数に深く失望する。

ソ連の意図は英国の覇権に揺さぶりをかけ、中東地域に楔を打ち込むことかも知れない。だが、アラブ世界の一般大衆はもとより、専制的支配者さえ強硬に反対しているユダヤ国家の創設に、ソ連がなぜ旗振り役を買って出たのか。グロムイコの言動は意表を衝き、アラブ諸国はもとより、米英両国とも真意を計りかねた。¹⁷

米国のユダヤ難民十万の受け入れ問題は大西洋同盟の結束に亀
二元外交 裂を生じ、その後も両国の首脳部に感情的しこりを残す。
米国は難題の国連持ち込みに乗り気でなく、マーシャル国務長官はベヴィン外
相の遣り口に遺憾の意を表明した。パレスチナ紛争が当事者の中で決着を見ず
に、どうして国際政治の場で解決できようか。マーシャルは大戦中に陸軍参謀
総長としてシオン主義者の無理押しに歯止めをかけたが、今度は外交の総責任
者として再びユダヤ問題に関与せねばならない。

国務省は大手石油会社の利益代弁者としばしば非難された通り、アラビア半
島の石油権益を考慮して、シオン主義者の横車に批判的だった。国務省の専門
家は英外務省の同僚と同じく、国際連合での論議に楽観的見通しを抱く。仮に
分割案が提出されても、十分な支持を得られないで立ち消えとなるだろう――
と。ところが、ソ連が態度を急変して以来、形勢は怪しくなった。

だが、米国の外交方針は、国務省の一存だけでは決まらない。ホワイトハウ
スには、政治任命の親シオン主義的補佐官が控えている。トルーマンはユダヤ
国家再興運動を全面的に支持した訳ではないが、選挙がらみの政治的配慮から
側近の進言に従い、難民十万人の即時移住とユダヤ国家の創建を提唱せねばなら
なかった。パレスチナ問題が国際連合の議場で論ぜられるようになると、国
務省の活動は大統領の過去の発言に束縛される。

1947年 9月17日、国連総会が新たにパレスチナ問題臨時委員会の設置を決め
た際、マーシャルは特別委員会の報告書について、米国の態度を公式に表明し
た。しかし、その歯切れは至って良くない。米国政府としては全会一致の勧告
(英委任統治の終結、パレスチナの早期独立)を尊重するだけでなく、多数派
の勧告(分割によるユダヤとアラブの二国家案)にも重きを置く――と。

つまり、ウォシグタンは国際社会の大勢に従って、敢えて異論を唱えない。
ただし、それは精神的支援にとどまる。実際、米国が分割を積極的に支持して
いると受け取られぬよう、マーシャルは細心の注意を払う。もし、先頭に立っ
て旗振り役を務めれば、とんだ重荷――治安維持のための米軍派遣――を背負
わされかねないからである。

その後、国際連合の米国代表団は分割案の採択を他国に強要せぬよう、国務
省から訓令を受けた。多数派の勧告はあまりにもアラブに不利なだけに手直し
を必要とし、原案のままでは国連総会で三分の二の支持を集められるか、当時
の票読みでは疑わしかった。その場合、米国としては大国の責任から、代案を
考慮しなければならない。成立の不確実な解決策にあまり深入りしないのが、
得策というべきだろう。

米国のシオン主義者は国務官僚の消極的態度に不満をたぎらせ、トルーマン

に圧力を加える。多数の上院議員が動員されてホワイトハウスに書簡攻勢をかけ、パレスチナの分割に賛同するよう申し入れた。一年後に大統領選挙を控え、トルーマンはユダヤ票の向背に気を遣う。彼はロウザヴェルトの急死で思いがけず合衆国の最高の地位に昇っただけに、二期目は国民の信託を得て国家元首の地位に就きたい。

トルーマンはシオン主義者の意を迎えて、米国代表団の一員に親ユダヤ傾向で知られる人物を送り込み、ホワイトハウスと緊密に連絡を取る特別任務に従事させた。この人事でトルーマンは国務省を経由せず、国際連合からじかに報告を受けることができる。その後、大統領はパレスチナ分割の実現に向けて、自ら積極的に行動を起こす。10月11日、トルーマンから直々の指示を受けて、米国代表団はマーシャル発言よりも踏み込んで、公式に分割推進の立場を宣言せねばならなかった。

大詰めが近付くにつれて、トルーマンはシオン主義者の圧力に屈し、交渉の過程で〈個人的に〉口をはさむ。米国代表団はホワイトハウスと国務省から相矛盾する訓令を受けて途方に暮れ、時には会議の席で面目を失う。代表団は分割論議の円滑な進展をめざし、アラブに一方的に不利な分割の線引きを手直しするよう努力したが、大統領の直接介入で水泡に帰した。¹⁸

強引な一票集票工作 1947年11月25日、パレスチナの分割案は一部修正されて、ひとまず臨時委員会で可決された。賛成票は反対票を大きく引き離れたものの、予想以上に棄権票が多い。この採決結果に、シオン主義者は恐慌状態に陥る。総会の特別多数決に必要な数に、僅か一票だけ足りなかったからである。翌26日、分割案は正式に総会に提出された。

この議題が本会議ですぐに討論、採決に付されたら、結末は前日の投票結果を反映したことだろう。分割案は葬り去られ、ユダヤ国家再興運動に大打撃となったに違いない。総会の雰囲気も将来を見越して、微妙に変わり始める。棄権国の中にはどっちつかずの態度を改め、はっきりと反対に回ろうとする動きさえ出てきた。シオン主義者は賛成国の一部に頼み込み、議事引き延ばしのため討論演説で長広舌を振るってもらう。

本会議は時間切れで延会となり、採決を後日に持ち越す。翌27日は感謝祭の休日で、この世界機構も所在地の習慣に従った。シオン主義者は貴重な時間を得て、集票活動に全力を挙げる。トルーマンは自ら国務省に指示を発し、外交的圧力を行使して、必要な支持数の確保を厳命した。米国の政治家、実業家も戦列に参加し、露骨な脅迫と利益誘導で票集めに貢献する。

切り崩しの対象には、フィリピンズ、ギリシャ、ライビアリア、ハイティ、イーシオウピア、中国の六カ国が選定された。とりわけ最初の二カ国は米国と

歴史的に深い因縁を持つか、あるいは軍事的、財政的に依存度を高めているだけに、国務省もシオン主義者も外交的圧力をかけやすい。

フィリピンズ代表は臨時委員会を欠席して採決に加わらなかったが、本会議の初日に出席して格調高い演説で感銘を与えた。パレスチナの解体は国連憲章の基本原理に反するだけに、いかなる分割案も支持できない——と。ギリシャ代表は臨時委員会で棄権したが、次の理由から本会議で反対を表明する。パレスチナの分割を実行すれば、何の決定を下さぬよりも、はるかに大きな騒乱を引き起こすだろう——と。

フィリピンズは十九世紀の末に米国の植民地となり、第二次世界大戦中に日本に占領されて名目的独立を与えられる。戦後、改めて独立したが、相変わらず旧宗主国の強い影響下にあった。

米国連邦最高裁判所のフランク・マーフィとフェリックス・フランクファタの両判事はフィリピンズの駐米大使と面談し、態度変更を強硬に迫る。さらにカルロ・ロハス大統領に電報を打ち、強い語調で警告した。いつまでも分割反対に固執するなら、フィリピンズは数百万のアメリカの友人を孤立させることになるだろう——と。十人の上院議員も二人の判事になって、同じ趣旨の電報を送った。マニラは旧宗主国の強い圧力に屈服し、代表団に分割支持の訓令を発する。

ギリシャは英軍によって独軍から解放されたのも束の間、やがて左翼ゲリラの武装蜂起で内戦状態に陥った。大戦の終結後、英国は政府軍を支援したが、パレスチナの出費に耐えかねて、米国に軍事援助を肩代わりしてもらおう。ウォシingtonはトルーマン教書を発表して、ソ連の勢力拡大に実力で対抗の決意を明らかにした。それだけにアテーナイは簡単に説得に応じると思われた。シオン主義者はギリシャ系の有力実業家に依頼して工作を進め、援助の削減や打ち切りをほのめかす。ところが、ギリシャ代表は節を曲げずに、本会議で分割案に反対票を投じた。

他の中小国には、もっと露骨な圧力が加えられる。西アフリカのライビアリアは1847年に米国の支援の下で解放奴隷によって建国され、経済的にゴム農園に依存していた。シオン主義者は元国務長官のエドワード・ステッティニアスを通じ、同国で操業中の米国籍ゴム会社に唯一の産物の不買を暗示する。会社の経営者は黒人国の大統領に急を告げ、分割賛成に態度を変更するよう申し入れた。もしも要求が聞き入れられねば、同社はゴム園の拡張計画を再考せざるを得ないだろう——と。ライビアリアは経済的締め上げを恐れ、米国の言いなりとなる。

分割決議の採択 感謝祭の翌日の11月28日、国連総会の本会議が再開されたが、この日も採決までには至らなかった。パレスチナの命運を決する表決は、29日に持ち越される。しかし、この二日間の舞台裏工作で米国は賛成国の数を増やし、一方ではソ連も東欧の票田を一括して固める。アラブ、イスラーム諸国の代表は次々に議場で発言し、大国の横暴ぶりを代わる代わる非難した。米国の外交的圧力は、議場内にすっかり知れ渡っていた。

1947年11月29日の午後、国連総会の本会議は歴史的投票を始める。傍聴席にはシオン主義者が詰め掛け、分割の賛成演説に拍手喝采を送った。アラブ諸国の代表団が発言すると、聴衆から野次を飛ばされる。三十三対十三、棄権十。分割決議は有効票の三分の二を制し、ついに採択された。投票結果は議場からラジオで全世界に放送され、直ちにパレスチナに伝わった。¹⁹

アラブ諸国の代表団はこぞって総会決議の有効性を否認し、行動の自由を留保すると宣言してから一斉に退場する。パレスチナの分割はもはや特別委員会の多数派の勧告でなく、この時から米国の計画そのものと見做された。この瞬間からアメリカはユダヤ国家と運命共同体を形成する。

ほんの数日前の臨時委員会で棄権した十七カ国のうち、ライビアリア、ハイティ、ベルジウム、フランス、リュクサンプール、ホランド、ニュージーランドの七カ国が賛成に態度を変更した。イーシオウピアや中国は、切り崩し工作の優先対象だったにもかかわらず、前回と同様に棄権した。チリは臨時委員会で分割に賛成票を投じたが、総会の表決では棄権に回る。さらにアラブは貴重な一票を失った。サイアム（現在のタイランド）は臨時委員会で分割に反対したが、折りしも起きた革命のために、国連代表は新政権から資格を否認されてしまう。

国連総会はシオン主義者の、そしてトルーマンの大勝利で幕を閉じ、パレスチナにユダヤ国家の創設を承認する。だが、分割決議はパレスチナ問題に真の解決をもたらすどころか、中東の一角を長い年月にわたって戦乱状態に陥れる。決議案可決の実況放送を聴いて、エルサレムで、テラヴィヴで、そして各地の開拓農園で、ユダヤ住民は喜びのあまり戸外に飛び出して踊り狂う。だが、流血の武力衝突は、目前に迫っていた。

23 ついに内戦状態に

予期された アラブ対ユダヤの武力対決は分割決議の採択された
武力衝突 翌日から始まり、たちまちパレスチナ全土を内戦状態に陥れる。まだ前夜の興奮さめやらぬ11月30日、旧約時代の古い歴史を秘めたロッドの町近くで、アラブ武装集団にユダヤ住民を乗せたバスが襲撃されて、七人の死者を出した。12月2日、アラブ暴徒はエルサレムのユダヤ商店街に焼き打ちをかけ、商品を略奪する。いまや聖地の二つの社会は、互いに仇敵同士として睨み合う。

数日後、ユダヤ側が攻勢に出た。北部の港湾工業都市ハイファで、アラブ側のバスが爆弾を投げこまれ、六人の死者と三十人の負傷者を出す。さらに郊外の海辺の村が襲われ、十二人のアラブ人が殺された。これらの惨事はほんの序曲に過ぎず、武力衝突がパレスチナ全土で続発した。双方とも血の報復を呼号して、無差別の暴力行為に訴える。市場の雑踏の真只中で、喫茶店の混み合う露台で、突然、爆弾が炸裂して罪のない人々の生命を奪った。狙撃者が物陰に隠れて、歩行者を標的にする。

パレスチナが流血の闘技場と化すのは、事前に容易に予想できた。現地住民の大多数が反対しているのに、国際連合はみずから設立した司法機関の意見を求める手間さえ惜しんで、当事者の一方にだけ有利な方策を多数決で強要する。アラブ諸国は分割の合法性を否定し、総会決議に拘束されぬと宣言した。パレスチナのアラブ人が祖先伝来の地を奪われまいと、実力で分割の阻止に立ち上がれば、ユダヤ住民は千載一遇の好機を逃がさず、祖国再興の悲願達成をめざして武力で対抗する。

国際連合はパレスチナ問題の解決どころか、紛争の原因を作り出しただけで、戦乱の防止に全く無力だった。米国はシオン主義者の策動で強引な集票工作に成功したが、みずから分割実現の責任を担おうとしなかった。トルーマンはユダヤ国家の樹立のために、紛糾の地へ米軍の派遣まで考えなかった。しかも英国が監視役を引き受けなかったので、分割の難事業は仲裁役を欠いたまま敵対者同士に委ねられる。もはや両者の武力対決は避けられなかった。

12月11日、英国政府は撤退の日程を発表する。国連総会の決議は英委任統治の終了と英軍部隊の撤兵の最終期限を1948年8月1日までと定めていたが、アトリ政権はパレスチナから可能な限り早く手を引くため予定を大幅に繰り上げ、委任統治の終結を5月15日と決めた。英軍の将兵は両者の衝突に巻き込まれる

ことなく、無事に本国へ引き揚げる順番を待ちわびる。

統一を欠く アラブ側の宗教的指導者で前マフティのフセイニは、
アラブ陣営 この機会にパレスチナの地から外来ユダヤ教徒の一掃を狙う。しかし、亡命の身だけに英委任統治下の故郷に戻ることができず、北隣のレバノンに陣取る。彼の従兄弟のアブダルカデル・アル＝フセイニがエルサレムの付近でゲリラ活動を始め、高名なアラブ民族主義の闘士に代わって武力闘争の実際の指揮を執った。

北部のガリラヤ地方では、別の武装団体が〈アラブ解放軍〉と称して、独自の武力闘争を始める。その指導者のファウジ・アル＝カウクジは大戦前の反英闘争の古強者で、アラブ連盟の支援を受けた。兵士の主力はパレスチナ人ではなく、シリア出身者で占められる。南部のガザ地方でも、ゲリラ組織がエジプトの〈イスラーム教徒同胞団〉の影響を受けてうごめき出す。

この他にも数多くの武装集団が生まれ、それぞれ反シオン主義の武力活動を開始する。ところが、アラブ側の諸勢力は相互の連絡を欠き、パレスチナの分割とユダヤ国家の創建に反対の統一戦線を結成できなかった。この非常時にもフセイニ家とナシャンビ家の古い反目が再発し、両派は協同作戦どころか武力衝突さえ引き起こす。闘争の主導権をめぐり、フセイニはアラブ連盟と対立を深める。

当時のアラブ側は大戦前の反英武装闘争の痛手からまだ回復せず、有能な指導的人材を欠いた。1936年から1939年にかけて、実に千数百人が戦闘の犠牲者となり、約五十人が処刑される。さらに多数の幹部級闘士が海外追放の身となり、委任統治の終結まで釈放されなかった。この間、英治安当局が騒乱の再発防止のため武器の押収に努めた結果、アラブ側は貧弱な装備しかなかった。

それに比較すれば、シオン主義者はユダヤ機構の下に結集し、地下の軍隊ハーガナーが相当な自衛力を保有していた。大戦前、英当局はアラブの武装蜂起を鎮圧するため、ユダヤ側に武器を与えて補助兵力として利用する。こうして〈ユダヤ開拓地警察〉が誕生し、農園の武装を固めた。その後、イルグーンやレヒの過激派が対英武力闘争を始めると、英駐屯軍は逆に武器狩りを実施せねばならない。大量の銃火器を没収したものの、ユダヤ側を全面的に武装解除できなかった。

連絡路 実際、パレスチナのシオン主義者たちは良く組織され、綿密な計画を立案し、そして明確な展望を抱いていた。国際連合が分割決議を採択すると、すぐにユダヤ側は当面の軍事方針を決定する。これは〈C計画〉と呼ばれ、まず交通網の確保をめざす。ユダヤ居住地は、都会であれ、開拓地であれ、孤立化させてはならない。

アラブ側は道路に障害物を設け、近くの山谷に潜んで待ち伏せする。そして通りがかりのユダヤ側の車輛に銃弾を浴びせかけ、積み荷を略奪した。²⁰ 辺地の開拓農園は補給線を断たれ、包囲の重圧感に耐えながら、援軍の到来を待ちわびる。純軍事的見地に立てば、僻地の農園から撤収した方が賢明に違いない。貴重な戦力を分散せずに済み、補給の問題もなくなるからである。しかし、この軍事方針は連絡路を守り抜き、開拓農民の士気を高めたばかりか、ユダヤ社会全体の愛国的感情を鼓舞する。

国際連合の総会決議による分割案では、ほとんどの農園がユダヤ国家の領域内に取り込まれるが、それでも三十五の開拓地がアラブ側の領域に残された。ユダヤ側は〈C計画〉に基いて一つも放棄しようとはせず、連絡路を確保して補給の維持に努める。開拓農園はシオン主義を象徴する出城であり、また防御や出撃の拠点として戦略的にも有用だった。

この計画は受け身の防御に徹することなく、積極的な反撃も想定する。これで自衛組織のハーガナーは伝統的な〈自制〉の方針を改め、それ以後は〈積極的防衛〉に乗り出す。ゲリラの攻撃を受ければ直ちに反撃するばかりか、その根拠地まで追撃をかける。こうして〈報復〉の概念は、ユダヤ側の軍事思想の中核を形成し、今日に至っている。

武力衝突が始まってから一カ月を経過した1947年12月末、ハーガナーとパルマッハの大部隊は港湾工業都市ハイファ郊外の村落を攻撃し、六十人以上のアラブ住民を殺害する。犠牲者の中には、多くの女性と子供がいた。この無差別虐殺は、港近くの石油精製工場で働くユダヤ労働者が攻撃された事件の報復として、遂行された。多数のアラブ住民が恐慌状態に陥って、この雑居都市から避難し始める。

当初、アラブ側が時と場所を選んで攻撃を仕掛けたが、やがてユダヤ側は効果的な反撃に成功する。無理な地図の色分けの結果、ユダヤ国家は四十数万人のアラブ人を抱えこむはずだった。それだけにシオン主義者の強硬派は人口構成の〈純化〉をねらい、アラブ人を可能な限り新国家の外に追い出そうとたくらむ。その目的を達成するには、テロ活動が最も有効な手段だった。

1948年4月9日の夜から10日にかけて、イルダーンとレヒはエルサレム近郊のアラブ村落デイル・ヤーシーンを占領し、二百五十四人の住民を虐殺する。この村はハーガナーと不可侵協定を結び、アラブ武装集団の立ち入りを拒否していた。しかし、ユダヤ過激派は村に攻撃を加えて占領し、生き残りの住民を見せしめのためにエルサレムの町で引き回す。そして村に戻ると、婦女子も容赦せずに片端から射殺した。²¹

この血の惨劇はアラブ住民に甚大な心理的影響を及ぼし、ユダヤ新国家に居

残る場合の運命を予期させる。多数のアラブ人が恐怖心に駆られ、土地も財産も捨ててユダヤ領域の外に避難を始めた。パレスチナ難民問題の起源は、この時にさかのぼる。

新しい軍事戦略 その少し前の1948年4月1日、ユダヤ機構とハーガナーは新たな軍事方針の〈D計画〉を策定した。これは〈C計画〉よりさらに進んで、国際連合総会のパレスチナ分割決議でユダヤ国家に割り当てられた領域の確保だけでなく、その外側の地域——つまり、アラブ領域の内側——で占領した土地の支配も意図する。新方針の下でユダヤ側は〈ナックション作戦〉を発動し、テラヴィヴとエルサレム間の街道を保持しようと試みた。²²

当時、エルサレム旧市街のユダヤ居住区はアラブの武装集団に包囲され、連絡路を絶たれて孤立していた。パレスチナ分割案では、聖都はアラブとユダヤ国家のどちらにも属さず、国際連合の管轄下の都市国家になるはずだった。しかし、ユダヤ側は血の代償を払っても、ダヴィデの都の占領をめざす。ユダヤ国家の再興には、やはりシオンの丘を確保せねばならない。

ユダヤ側が〈D計画〉に従ってエルサレムに通ずる回廊を支配すれば、アラブ国家の領域は真二つに分断されよう。前マフティの従兄弟でゲリラ隊長のアブダルカデルは武装集団を率いて街道沿いの村に立てこもり、ハーガナーの進撃を阻む。デイル・ヤーシオン村の虐殺は、この作戦の過程で派生した。ユダヤ機構は過激派の行為を厳しく非難し、この惨劇への関与を否定した。

イルゲーンの最高指導者ベギンは、公然と大虐殺を正当化する。デイル・ヤーシオンの勝利がなければ、ユダヤ国家は誕生しなかつたらう——と。この惨劇に加えて、このゲリラ隊長が流れ弾で戦死を遂げると、アラブ側の士気は急速に衰えた。〈ナックション作戦〉は推定十万のアラブ人を追い立て、予想外の成果を挙げる。

英軍の撤退 一方、アラブ側も血の報復を果たした。4月13日、エルサレム旧市街の城壁外でユダヤ側のバスに待ち伏せ攻撃を加え、八十数人を殺す。犠牲者の大半は医師と看護婦で、郊外の展望山の病院に向かう途中だった。イエスが昇天したと伝えられる橄欖山から尾根伝いに北へ行けば、やがて展望山に至る。その名の通り、この高地から眼下に聖都を一目で見渡すことができる。この地区にヘブライ大学と病院があった。

周辺交通は、英軍の警備下に置かれていた。ユダヤの輸送隊はアラブの武装集団に急襲されると、すぐ近くの英軍哨所に救いを求める。だが、英兵は襲撃を傍観するだけで、敢えて衝突に介入しなかつた。二台のバスは火炎に包まれ、乗客は射殺か焼死かの運命に見舞われる。²³

英軍は撤兵を間近に控え、板ばさみの苦しい立場に追い込まれた。何をしても、しなくても、アラブとユダヤの双方から非難される。一方から虐殺に手を貸すのかと罵倒されれば、他方からは不公正な分割を支援するのか——という具合に。英軍の現地指揮官は部下の安全を気遣って、局地的衝突に巻き込まれないよう心を砕く。だが、急速な治安の悪化のため、時にはやむを得ず出動しなければならなかった。

1947年の暮れから、英軍部隊は段階的に撤退を開始する。二つの敵対勢力は虎視眈々と、時期の到来を窺った。旧駐屯地を確保すれば、軍事的に有利な場所を押えるばかりか、後に残された大量の軍需物資まで手中にできる。各部隊は撤退の日取りを秘密にしていたが、ユダヤ側の諜報活動、あるいは買収行為で、しばしば極秘の日程が漏れた。

1948年 4月21日、港町のハイファに駐屯の第六空挺師団が撤兵を始める。この英軍部隊はユダヤとアラブ区域の中間に陣取って両勢力を引き離していたが、引き揚げのために港近くに集結した。アラブ側は当日の朝になって突然の撤退を通告されたが、ユダヤ側は事前に部隊の移動を知って英軍陣地を占拠する。そして、この獲得したばかりの要衝から、アラブ区域に対して波状攻撃を仕掛けた。

アラブ側は不意を衝かれ、たちまち不利な形勢に追い込まれる。援軍が近隣地区から駆け付けようとしたが、撤兵中の英軍に道路を封鎖されて町までたどり着けない。英軍部隊は武力衝突を見守るだけで、ここでも直接介入を控えた。数日間の市街戦の後、英軍司令官が休戦交渉を斡旋すると、ユダヤ側は相手に降伏と武器の引き渡しを要求する。

デイル・ヤーシンの惨劇は、ほんの二週間前の出来事だった。勝者の言いなりになれば、どんな運命が待ち受けていることか。アラブ住民は恐怖におののき、一斉に避難を始める。だが、三方をユダヤの軍勢に囲まれて、海路で脱出するしかない。五日間の休戦期間に、英国船が約十万人のアラブ難民を運んだ。²⁴

ユダヤ側 委任統治の最後の日が近づくにつれて、ユダヤ側の優勢の勝利はだれの目にも明らかになった。地下の軍隊ハーガナーは事実上の新国軍として、旅団規模で軍事行動を展開する。イルグーンは時には別個に、時にはハーガナーと共同で、アラブの町や村に攻撃を加えた。ユダヤ側は〈D計画〉で想定した通り、パレスチナ分割案のユダヤ領域を支配下に収めたばかりか、アラブ領域まで蚕食する。

古い港町ヤッフォは周囲をユダヤ領域に取り囲まれ、アラブ国家の飛び地となるはずだった。隣接のテラヴィヴはユダヤ商工業の中心地として発展してき

ただけに、すぐ近くのアラブ人口集中地に脅威を感ずる。実際、このアラブの拠点から、しばしば銃弾や迫撃砲弾が東欧風の大都会に撃ち込まれた。

この刺を抜き取ろうとして、ハーガナーとイルグーンがヤッフォに攻撃を仕掛けた。この時ばかりは英軍が中に割って入り、ユダヤ側に戦闘停止を要求して戦車と大砲で威嚇する。この介入で停戦が成立したものの、半月後に英国の委任統治は終わった。アラブの町は頼るべき保護者を失って開城するしかなく、住民の大半が南方のガザ地帯に逃亡する。ここでもデール・ヤーシーンの心理的効果は絶大だった。

ユダヤ側の士気は、相次ぐ勝利で高まる。大都市のほとんどを占領したばかりか、多数のアラブ住民をユダヤ領域から放逐した。しかし、近隣のアラブ諸国は英委任統治の終了後、ただちに軍事介入に踏み切ると宣言している。新たな敵はゲリラとは異なって相当に手強いと覚悟せねばならず、最悪の場合には戦況の逆転も予想される。ユダヤ側は第一段階で有利に事をすすめても、決して安心できなかった。

米務省はパレスチナ情勢を憂慮し、武力衝突が激化して間もない1947年12月5日、中東へ武器の輸出を禁止する。同省の政策立案者たちはシオン主義と同調者たちの強引な遣り口やホワイトハウスの弱腰に憤慨しただけに、巻き返しを図った。分割の失敗は火を見るより明らかで、無理押しすれば、米国の国益を損なうだろう。流血の事態を何とか打開するため、ともかく新しい手を打たねばならない――と。

米国の要請で国際連合の特別総会が招集され、パレスチナ情勢の対策を模索する。英委任統治の暫定存続、分割に代わる信託統治など、ぎりぎりの土壇場になって、さまざま解決策が飛び出す。しかし、トルーマンは国務官僚の反対を押し切って、既定方針を変えなかった。²⁵ パレスチナは混沌とした情勢のまま、1948年5月14日、運命の日を迎える。

〈第五部の註と参考文献〉

1 ベヴィンは国際連合の判断を求めるに至った経緯を下院で説明した際に、国際問題が地方選挙とからめられては解決できないと述べ、暗にトルーマンを当てこすって拍手喝采を浴びた。〔Ritchie Owendale, The Origins of Arab-Israeli Wars (London: Longman, 1985年)、100頁〕

2 実際にヴァイツマンは入院しなければならなかったが、彼の欠席は事実上の失脚を招いた。それまでヴァイツマンが苦心しながら英国政府と進めていた交渉の責任を負えない——と、ベン＝グリオンは会議に出席の執行部の面々に断言したからである。〔Michael J. Cohen, Palestine and the Great Powers, 1945-1948 (Princeton: Princeton University Press, 1982年)、141頁〕

ユダヤ国家のイスラエルが実現した際、このシオン主義運動の長老は飾り物の大統領に祭り上げられた。

3 この大会の参加者は、半数近くがアメリカ代表団で占められた。開会演説でヴァイツマンが暴力行為を強く批判したので、米国代表たちの反撥を買い、その親英的傾向を攻撃される。彼は役員選挙で会長に再選されず、苦い敗北感に浸った。ヴァイツマンの長年の功績を称えて、会長の地位は空席のままとなったが、失意の彼には何の慰めにもならなかった。〔Walter Laqueur, A History of Zionism (New York: Schocken Books, 1976年)、574~576頁〕

4 1945年 5月、チャーチルはトルーマン宛ての電報〈鉄のカーテン〉の表現を初めて用いた。大戦後、チャーチルは米国を訪問し、1946年 3月、ミズーリ州のウェストミンスター大学で演説し、この表現を繰り返す。〔Winston S. Churchill, The Second World War and an Epilogue on the Years 1945 to 1957 (London: Cassell, 1959年)、931~932頁、954~955頁〕

5 歴史に仮定は無意味であるが、多数のイスラエル人が次の見解に同意している。もし英国が米英合同調査団の勧告を尊重し、十万人の全部でなくとも、ある程度まとまった人数をパレスチナに引き取れば、米国も移民法を改正してユダヤ難民に門戸を開放しただろう。そうなれば、シオン主義運動の内部で穏健派が勢力を回復して、テロ活動は影を潜めたかも知れない——と。〔Nicholas Bethell, The Palestine Triangle: The Struggle between the British, the Jews and the Arabs, 1935-1948 (Tel Aviv: Steimatzky's Agency, 1979年)、237頁〕

6 1947年 7月18日の夜、難民船がパレスチナの岸辺に近付くと、ハーガナーの地下放送「イスラエルの声」は船上から陸上の聴取者に直接に呼びかけ、団長の声に続いて亡命者たちの歌声を流した。このラジオ局は次に難民船の到着を知らせ、翌朝の放送再開時刻を聴取者に予告する。だが、その時刻になっても、放送は沈黙したままだった。難民船が英海軍の駆逐艦隊に追跡された末に拿捕されたからである。〔Mordechai Naor, Haapala: Clandestine Immigration (Tel Aviv: Ministry of Defense Publishing House and IDF Museum, 1987年)、77~78頁〕

7 フランス共産党機関紙の『リュマニテ』は、この難民送還船を「浮かぶアウシュヴィッツ強制収容所」と報じた。〔Nicholas Bethell, 前掲書、336頁〕

この難民船の物語は後に映画化され、多数の観客を動員する。日本では『栄光への脱出』の題名で、1960年代に上映された。

8 ハーガナーは米国の親シオン主義団体の献金で、ユダヤ難民のパレスチナ密入国を促進する。難民船の大半は米国の港から出発し、乗組員も米国市民が多かった。アトリ首相はトルーマン大統領に強い語調の書簡を送り、無税の寄付金で購入された武器がパレスチナで英兵を撃つのに用いられている事実を指摘した。これに対して、米国政府は可能な対策を検討中と答えるだけで、余剰兵器の買いあさりに禁止措置を取らなかった。さらに寄付金の免税廃止は厄介な法律問題を引き起こすとの理由から手をこまねくばかりで、米国船が不法移民の輸送に使用されるとしても、その売却や出港を阻止できないと回答した。〔Rithchie Owendale, 前掲書、101頁〕

9 報告書が完成した段階で、オーストラリアは多数派の提案に署名しなかったが、後に態度を翻して分割案に同調した。この勧告自体は二年間の移行期間中に、パレスチナへ受け入れるユダヤ移民の人数を明示していない。だが、その総数を十五万人とすることで、提案国の間で了解がいった。パレスチナ問題特別委員会の報告書は、次の資料集による。

〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), The Arab-Israel Reader: A Documentary History of the Middle East Conflict, Revised and updated edition (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、108~112頁〕

10 ユダヤ国家に組み入れられる四十九万八千人のアラブ人口のうち、九万人はパレスチナ南部のネゲヴ砂漠に居住の遊牧民だった。〔Michael J. Cohen, 前掲書、273頁〕

第二次世界大戦が終結する前年の1944年の統計によると、ユダヤ側の所有地はパレスチナ全土の6.5%に過ぎなかった。〔The ABC of the Palestine Problem, Part 1, 1896-1949 (Beirut: The Arab Women's Information Committee)、41頁〕

大戦後も土地売買は原則として禁止されていたので、パレスチナ分割決議の採択当時でも、この比率はほとんど変化していない。それどころかユダヤ側の土地は英政庁からの借地も含んでいたため、実際の所有面積はもっと少なかった。

パレスチナ問題特別委員会の分割案は、概して肥沃な土地をユダヤ側に、不毛の地をアラブ側に割り当てた。しかも換金作物として貴重な柑橘類の果樹園は、ほとんどがユダヤ国家の領域に編入されることになったが、その面積の半分はアラブ人の地主の所有だった。〔Nicholas Bethell, 前掲書、1979年、344~346頁〕

11 蔵相のヒュー・ドールタンは財政窮迫を理由に、パレスチナの放棄と早期撤兵を閣議で提唱する。同時に現地情勢の悪化に伴って、反セム主義の風潮が英本国にひろまるのを憂慮した。〔Michael J. Cohen, 前掲書、268頁、276頁〕

この労働党の政治家は親シオン主義者として知られ、1944年の党大会がユダヤ入植者のためアラブ人の立ち退きを決議に盛り込んだ際、その原案作成に尽力した。さらに対独戦勝利後の総選挙では、戦後の復興や社会改革の国内問題よりも、もっぱらユダヤ国家の樹立ばかり論じた。〔Rithie Owendale, 前掲書、1984年)、83頁〕

チャーチルの退陣でアトリ政権が成立した際、ドールタンは日頃の言動から外相に起用されると予想されたが、国王の強い意向で当時の最重要課題のパレスチナ問題を直接に担

当する閣僚から外され、その代わりに要職の蔵相に任命された。〔Nicholas Bethell, 前掲書、201~202頁〕 だが、ドールタンは念願の外相の椅子を逃したために、かえって年来の親シオン主義的信念を実現できた。

12 1947年 5月 4日、イルグーンは大胆不敵にもアッコー監獄の厚い壁を爆破し、囚われの同志を奪還する。米国のシオン主義者にとって、その宣伝効果は絶大で、ニューヨーク発行の各紙には脱獄を称賛する全面広告が掲載されるほどだった。英外務省はロンドン駐在の米国大使に対して、この広告が英国、アラブ、ユダヤのいずれを問わず、連日のように人命の損失をもたらすテロ活動を支持し、かつ資金集めを呼び掛けていると嚴重に警告した。さらに、この種の広告が友好国の新聞に公然と掲載されるのは黙視できないと述べ、米国政府が広告差し止めのために〈効果的な措置〉を取るよう要求した。〔Nicholas Bethell, 前掲書、308~309頁〕

この脱獄作戦は綿密に計画され、外部と呼応して実行に移された。ユダヤ側は逃亡要員をあらかじめ指名し、選ばれた囚人だけが獄外に脱走する。しかし、収容中のアラブ囚人が混乱に乗じて二百人以上も逃亡したのは、この作戦の予期せぬ副産物だった。脱獄は報道機関によって大々的に報じられたが、実際には退路を英軍に封鎖されて、ユダヤ脱獄囚のうち九人が射殺され、八人が逮捕された。主犯の三人は英軍事法廷で死刑を宣告され、1947年 7月29日、絞首台に送られる。

イルグーンは英国に〈宣戦布告〉を発してただけに、三人の死刑囚を戦争捕虜として処遇するよう要求したが、もちろん聴き入れられない。そこで人質として英軍諜報部隊の下士官二人を捕らえる。同志が処刑された後、ユダヤ過激派は二人の英兵を監禁先の隠れ家で殺し、近くの林に遺体を吊り下げ、その下に地雷を仕掛けた。英軍の捜索隊が死体収容のために綱を切断したところ、遺体が地雷の上に落下して爆発を引き起こす。捜索隊は死者こそ出さなかったが、隊長が負傷した。

この惨事は英本国の世論に大きな衝撃を及ぼし、パレスチナ放棄の機運を促進する。英議会は夏休みで休会中にもかかわらず招集され、与野党を問わず早期撤兵で一致した。イルグーンのとテロ活動は目的を達成したが、パレスチナと英本国で激烈な反応を呼び起こす。テラヴィヴで英国人の警官と兵士が暴れ回り、ユダヤ住民の通行人を袋だたきにしたり、商店を打ち壊したりした。ロンドン、マンチスタ、リヴァプールなどの大都市でも、反セム主義の示威行進が暴動に転化し、ユダヤ系商店や教会堂を襲う。〔Michael J. Cohen, 前掲書、245~246頁〕

13 第二小委員会の勧告は、次の書物に掲載のテキストによる。〔Henry Cattán, Pal-
estine and International Law: The Legal Aspects of the Arab-Israeli Conflict
(London: Longman, 1973年)、47~49頁〕

14 エルサレム生まれの法学者ヘンリ・カッタンは国際司法裁判所の助言を求めようとせぬことについて、国際法の忌避は正義を否定するものであり、パレスチナ分割決議から法的価値を奪っている――と厳しい批判を加えている。〔Henry Cattán, 前掲書、49頁〕

15 例えば、クリーチ＝ジョウンズは1946年秋に植民地相に任命された当時、親シオン主義者として知られ、実際にドールタン蔵相と語らって、分割こそ唯一の解決策と主張する覚書を閣議に提出したことさえあった。しかし、ベン＝グリオンらの高すぎる要求（百二十万人のユダヤ移民受け入れ！）は、植民地相の立場を困難に陥れ、ついには彼をベヴィ

ン外相の意見に同調させるに至った。間もなくクリーチ＝ジョウンズはチャーチルと同じように、シオン主義から遠ざかる。〔Nicholas Bethell, 前掲書、293~296頁〕

16 革命後、労農政府はユダヤ問題担当人民委員（閣僚）を任命し、社会主義国家の内部に第二のパレスチナを創設するよう試みる。実際に1920年代の末頃、ソ連領北アジアのビロビジャンに特別居住区が設けられ、ソ連内のユダヤ文化の中心地、行く行くはユダヤ共和国になると想定された。しかし、数千人のユダヤ教徒が現地に来たものの、間もなく失望して去ってしまう。その失敗の原因はソ連当局の杜撰な計画に帰せられるが、最大の理由はロシアのユダヤ教徒が第二のシオンをアムア河畔に築きたくなかったからである。〔Walter Laqueur, 前掲書、427~428頁〕

1958年、ソ連のニキタ・フルシチョフ首相はビロビジャンのユダヤ人口が目標の三十万人に遠く及ばない事実を認め、失敗の原因として「ユダヤ個人主義」を非難した。1985年、このユダヤ人口は一万二千に過ぎない。〔Martin Gilbert, Jew-ish History Atlas, Third edition (London: Weidenfeld and Nicolson, 1985年、92頁)

マスクヴァはシオン主義に一貫して敵意を示し続けたが、それは対アラブ関係を顧慮したのではなく、パレスチナへ数百万のユダヤ人の移住を許可すれば、ソ連の民族政策の破綻を認めるのも同然だからである。〔Walter Laqueur, 前掲書、432頁〕

ソ連が崩壊する前、政治的シオン主義は「ユダヤ・ブルジョワ民族主義の最も反動的な形態」と規定された。〔V. Benevolensky, "Pseudosocialist Variety of Zionism", Asia and Africa Today, May-June, 1987 (Moscow: The USSR Academy of Sciences, 1987年)、93頁〕

17 反シオン主義の急先鋒のソ連が態度を急変したことについて、英外務省はマスクヴァの立場に基本的変化はないと判断した。ソ連はひとまず分割に賛成しておいて、その後の情勢次第で外交方針を急転換するだろう。つまり、パレスチナが分割されずに英国の単独委任統治から数カ国の共同統治下に置かれる事態にでもなれば、ソ連は中東の英国勢力圏内に公然と割り込みを要求するだろう——と。米國務長官のマーシャルはグロムイコの演説にもかかわらず、究極的にソ連は分割提案に反対票を投ずるだろうと信じた。ともあれ、グロムイコの態度表明はパレスチナ分割の里程碑となり、ランダンの最後の期待を打ち砕く。ソ連の反対で分割が不可能となれば、国際連合は問題を英国に差し戻し、パレスチナ統治の白紙委任状を与える——と、ベヴィンら外務省の当局者は、内心で期待していた。〔Michel J. Cohen, 前掲書、261~262頁〕

18 米國務省はユダヤ側に一方的に有利なパレスチナ問題特別委員会の分割勧告案を手直しするため、ネゲヴ砂漠をアラブ側に帰属させるよう試みる。ユダヤ機構も米国の強硬姿勢に押されて、この点で妥協を考慮した。第一小委員会が開催された日、國務次官補は米国の代表団に対して、たとえ表決に敗れようとも、ネゲヴ問題で筋を通すよう訓令を発した。ところが、トルーマン大統領はみずから電話をかけ、ネゲヴの帰属について特別委員会の原案に賛成するよう〈個人的に〉指示する。米代表団は別々の指令を国家元首と直属上司から受け、議場でどっちつかずの態度を取るしかなかった。トルーマンは折りから滞米中のヴァイツマンとひそかに会った際、ネゲヴ砂漠の重要性を説明されて、その主張に簡単に同調する。この荒野はユダヤ国家の将来の発展を託す空閑地であり、エジプトが新国家の船舶のスエズ運河航行を拒否する場合、アジアとアフリカに通ずる海への出口と

なる——と。〔Michel J. Cohen, 前掲書、289~290頁〕

19 国際法学者のヘンリ・カッタンは、この表決について次の通り非難している。パレスチナ分割決議は本質的に政治的決定であり、法、正義、民主主義の原理に反し、シオン主義者とその盟友の無理押しと圧力を通じて構想され、策略をめぐらされ、かつ採択されたものである——と。〔Henry Cattan, 前掲書、56頁〕

20 現在もなおテラヴィヴからエルサレムへ通ずる街道には、ユダヤ側の車輛の残骸が保存されて、当時の激戦をしのばせる。輸送隊の車輛は手造りの装甲を施していたが、アラブ側の銃火に対してほとんど無力だった。しかし、聖都に食糧や水を補給するため、ユダヤ側は大きな犠牲に耐え忍びながら、護送部隊を送り込んだ。

21 ユダヤ機構とハーガナー司令部は虐殺に遺憾の意を表し、同時に惨事の責任を否定した。しかし、アラブ側は事件の意味を次の通り受け取る。この残虐行為はベン＝グリオンとハーガナー上級幹部の承認を得て、アラブ住民を恐怖に陥れ、居住地から追い立てるために遂行された——と。未来のイスラエル首相ベギンは後に部下の行為を“英雄的”と称え、多数のアラブ住民がユダヤ国家の領域から逃亡した原因を、この血の惨劇に見出した。〔Ritchie Owendale, 前掲書、120~121頁〕

兵士らに告げよ、汝らはイスラエルの歴史をつくった。その攻撃と征服とで。勝利の日まで、かく続けよ。デイル・ヤーシーンと同じように至る所で、我らは攻撃をかけ、敵を打ちのめすだろう。神よ、神は我らを征服のために選びたもうた。

エルサレム近郊の“大勝利”の報に接して、ベギンはイルグーンの司令部に上記の賞詞を与え、かつベン＝グリオンを「狭量な偽善者」と批判した。その後、三十年を経ても、ベギンは主張する。これは通常の軍事作戦で、部下の兵士は勇敢に正々堂々と戦い、かつ非戦闘員の損害を最小限に止めるべく努力した——と。〔Eric Silver, Begin: A Biography (London: Weidenfeld and Nicolson, 1984年)、88頁〕

1983年にイスラエル大統領に選出されたハイム・ヘルツォーグ（イスラエル国防軍諜報部長、国際連合駐在大使を歴任）は自著の中で、この村の名がアラブ側の残虐行為を正当化するために繰り返し利用された——と述べている。〔Chaim Herzog, The Arab-Israeli Wars: War and Peace in the Middle East from the War of Independence to Lebanon (London: Arms and Armour Press, 1984年)、31頁〕

この虐殺の死者の総数は、論者によってまちまちである。ユダヤ側は公正な調査の妨害を意図し、第一報の死者は一人に過ぎなかった。しかし、翌日になって国際赤十字は二百五十四の遺体を発見した。〔Christopher Sykes, Cross Road to Israel (London, 1965年、416~417頁) この数字は、前掲の The ABC of Palestine Problem, Part 1, 1896-1949 の46頁に引用されている。

ヘルツォーグは自著の中で、この惨劇に十三行を割き、戦闘の過程で二百人以上の村人が殺されたと伝えられる——とだけ簡単に述べている。〔Chaim Herzog, 前掲書、31頁〕

ベギンの伝記作者は死者の真の数を不明としながらも、伝説が統計数字を膨らませたと述べ、百十六人説を関係者の証言として紹介している。〔Eric Silver, 前掲書、95~96頁〕

惨劇の舞台となった村は、後に家屋が取り壊され、その跡地に精神病院が建てられた。〔Sabri Jiryis, The Arabs in Israel (Beirut: The Institute for Palestine Studies, 1969年)、91頁〕

22 イスラエルと米国の戦史家は、この〈D計画〉をハーガナーにとって「革命の出発点」と評価している。新戦略はアラブ村落の恒久的奪取と住民の追い出しを狙い、まさに「急進的な新機軸」だった。新しい軍事計画に基づく〈ナックション作戦〉で、ハーガナーは初めて大規模な攻勢に出て、従来の防御一点張りの方針から脱却する。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, The Israeli Army (London: Allen Lane, 1975年)、31頁〕

23 展望山はローマ、十字軍、トルコ、英国の支配時代から軍事的に重要視されたが、現代では学術研究の場所として知られている。1925年、この山上にヘブライ大学が設立され、1939年には病院と看護学校が開設された。〔Sylvia Mann, Our Visit to Jerusalem, Herzlia: Palphot, 1985年)、68頁〕

現在、病院には新しい病棟が立ち並び、周辺の道路も整備されて、往時の面影をとどめていない。だが、旧道をたどってアラブ村落を通り抜けると、道端に追悼の石碑を見出す。その表面に犠牲者の名前がヘブライ文字で記されている。

24 ハイファのユダヤ市長はアラブ住民に町にとどまるよう説得したが、無駄な努力に終わった。前マフティのフセイニとアラブ解放軍が退去を指示したからである。避難民は携帯の荷物の中に武器を忍ばせていないか、英軍とハーガナーの兵士から点検され、ハイファ湾の対岸のアッコーに船で渡った。この十字軍以来の古い歴史の港町から、晴れた日にはハイファの灯火が望見できる。やがてアラブ諸国の正規軍が介入して勝利を収めれば、彼らはすぐに帰宅できると信じていた。だが、四週間後には寄留先の町もユダヤ側に占領されてしまう。〔Chaim Herzog, 前掲書、35頁。Samuel Katz, Days of Fire: The Secret Story of the Making of Israel (Jerusalem: Steimatzky's Agency)、218頁〕

25 トルーマンはパレスチナ問題について大統領としての見識に欠け、国務官僚の専門的提言よりも側近の政治的進言に容易に動かされて、選挙がらみの圧力にしばしば屈した。彼が外交方針をたびたび変更したことをめぐり、米国の政治学者は次の通り弁護する。

当時、ベルリン封鎖やチェコスロヴァキアの政変などで、米国とソ連の関係は急速に悪化した。パレスチナ情勢は、米国の世界戦略から見れば、副次的問題に過ぎず、大統領の主要な関心事ではなかった。トルーマンが不得意の分野について多様な意見に耳を傾けたので、政府の内外から活発な工作を招き、首尾一貫せぬ決定を下す結果になった。〔Steven L. Spiegel, The Other Arab-Israeli Conflict: Making America's Middle East Policy, from Truman to Regan (Chicago: The University of Chicago Press, 1985年)、16~49頁〕

第六部

イスラエルの建国と中東動乱

24 イスラエルの独立宣言

本来の権利を強調 西暦1948年 5月14日（ユダヤ暦5708年イーヤール月5日）の金曜日、内戦の真只中でユダヤ国家が誕生した。英国の委任統治が終結する当日の午後四時、国民評議会はテラヴィヴでイスラエルの独立を宣言する。古い国名が二十世紀の半ばによみがえった。この時刻、パレスチナはまだ公式には英国の支配下にあったが、シオン主義者側には急がねばならぬ事情があった。

ユダヤ教の安息日は金曜日の日没に始まり、土曜日の日没まで続く。国家樹立の大事業といえども、この神聖な日には慎まねばならない。さらに英国の権威が消滅した翌15日になれば、アラブ諸国の軍勢は一斉に侵攻を始めるだろう。とうてい建国式典を挙げる余裕はない。そこでユダヤ側は先手を打ち、委任統治の終結まで八時間を残して独立宣言に踏み切った。

その前日、隣接のアラブ港湾都市ヤッフォが降伏して、ユダヤの大都会テラヴィヴは軍事的脅威から解放される。この歴史的式典の会場には、ロスチャイルド大通りの博物館が充てられた。大広間に参集した面々を前に、ベン＝グリオンは臨時政府の首相として、独立宣言を朗読する。イスラエルの地は、ユダヤの民の発祥の地である。この土地から放逐されても、ユダヤの民は離散先の国々で約束の地を信じつつ、いつの日にか故地へ帰って民族的自由を取り戻すよう祈り、また願い続けた――と。

この独立宣言は、ユダヤ教徒の〈権利〉を繰り返して強調する。1897年、ヘルツルの招集した第一回世界シオン主義会議は、民族的再生の権利を宣言した。この権利はやがてバルファ宣言で認められ、さらに国際連盟によって再確認された。その後、ユダヤ国家再興の必要性はヒトラル・ドイツの大迫害で改めて実証され、虐殺から生き残った者はたゆむことなく権利を主張し続けた。国際連合は総会決議を採択し、ユダヤの民に独立国家創建の権利を承認している。すべての国民と同様に、ユダヤの民が主権国家において独立の実在となるのは、その本来の権利である――と。

そこで独立宣言は、またもや権利を確認する。われわれ国民評議会の構成員は、英委任統治の終了する本日、パレスチナに在住のユダヤの民と世界シオン主義運動を代表して、この厳粛な会合に参集し、ユダヤの民の本来の・歴史的権利と国際連合の総会決議に基づいて、ここにユダヤ国家の樹立を宣言し、イスラエル国と称する――と。¹

米国が直ちに承認 ベン＝グリオンの朗読は、十五分ほどで終わった。この歴史的瞬間を記録した写真には、ヘルツルの肖像画が壁に高く掲げられ、その下で臨時政府の首相が演説している。『ユダヤ国家論』の刊行から半世紀、ついに政治的シオン主義は大目的を達成した。だが、もう一人の功労者ヴァイツマンの姿は、式典の席に見当たらない。この長老は米国に滞在中で、ユダヤ国家の実現に向けて最後の工作に尽力していた。翌々日、彼は新国家の大統領に推戴される。ただし、名誉だけで実権を伴わず――。

建国式典は滞りなく進行し、日没までに余裕を残して終わった。出席者が独立宣言書に署名を済ませた十数分後、ウォシントンから待ちに待った知らせが届く。トルーマンが政府部内の根強い反対論を強引に押し切り、成立したばかりのイスラエルに事実上の承認を与えた――と。戦後世界の最強国から直ちに認証されたのは、シオン主義外交にとって最大の勝利だった。²

その前年の11月、トルーマンはシオン主義者の執拗な圧力に屈し、国際連合でパレスチナの分割に必要な票集めを指示した。国務官僚は大統領の命令に表立って反抗できず、胸中で苦い気持ちを噛みしめねばならない。無理押しの決議が採択されたものの、問題の地は予想通りたちまち流血の戦場となる。しかも、当初はアラブ側が優勢で、ユダヤ側を受け身に追い込む。

ウォシントンの政策立案者の間では、慎重論が急速に台頭し始めた。聖地の分割はアラブ諸国の怒りを買ひ、最悪の場合、西側が中東地域の石油資源を失う事態もあり得る。パレスチナ分割決議の履行が軍事力の裏付けを要するならば、国際連合の加盟国は派兵の責任を分担せねばなるまい。そうなれば、ソ連は国際協力の大義名分の下に、大手を振って中東に進軍できよう。米国がイラン、トルコ、ギリシャでソ連の勢力拡大を抑制しようと苦心しているのに、その努力は全く水泡に帰すだろう――と。

パレスチナ情勢が急速に悪化したので、トルーマンも分割の強行に二の足を踏む。諜報機関の中央情報局は報告書を提出し、分割の実現を不可能と断定的に述べた。大統領の原則的理解を取り付けて、米国代表団は国際連合で方針転換を模索する。英委任統治の終結まで二カ月足らずの1948年 3月19日、米代表は安全保障理事会で演説し、パレスチナ分割実施の一時棚上げと暫定信託統治の導入を提案した。³

内部不統一を暴露 しかし、シオン主義者側も強力な巻き返しに乗り出した。その年の2月、ニューヨーク州の補欠選挙で民主党の上院議員候補が大差で落選した。前回に比べてユダヤ人口の多い地区で、得票が顕著に減少している。トルーマンの側近は選挙結果を分析して、パレスチナへの武器禁輸出令を主要な

敗因と見る。同じ年の11月の大統領選挙を想定すれば、是非ともユダヤ票をつなぎ止めねばならない。

過去数カ月の間、大統領はしつこい要求に手を焼き、シオン主義者との面会を拒んでいた。だが、古い友人の強い頼みを断り切れず、渋々ながら滞米中のヴァイツマンとひそかに会う。ユダヤ国家再興運動の長老は大統領に感銘を与え、新国家の領土にネゲヴ砂漠を組み入れるよう要請し、トルーマンの好意的反応を得た。その翌日、米国代表は秘密会談を全く知らされないまま、既定方針に従ってパレスチナ分割の停止を安全保障理事会に提案する。

またもや米国の行政府は、内部の不統一をみずから暴露する。トルーマンは責任を下僚に転嫁したが、二枚舌の非難を免れるために親シオン主義路線を推進する他ない。ヴァイツマンとの会談の一週間後、大統領は圧力に屈して、記者会見の席で分割支持を改めて表明する。国際連合の舞台裏折衝でも、米国代表団は信用を失墜した。その提案がいつ上部の指示でひっくり返されるか、わかったものではないからである。

暫定信託統治が成功するには、ランダンの協力が不可欠である。しかし、英国政府は冷淡な態度を示すだけで、どんな役割も果たそうとはしなかった。この提案が実行に移されることになれば、国際連合は治安維持部隊をパレスチナに派遣しなければなるまい。米国はソ連を締め出して、米英仏の共同出兵をもくろむ。しかし、英国の世論が早期全面撤兵を迫っているだけに、英軍部隊の残留など論外だった。

立ち消えの 信託統治案 1948年 4月半ば、英委任統治の期限切れを一カ月後に控えて、国際連合の特別総会が米国の要請で招集された。大統領の強い意向でパレスチナの分割を覆さないまでも、米国としては戦火を鎮めるために何らかの手を打たねばならない。そこで総会のパレスチナ分割決議はそのまま触れずに置き、当面の平和実現を図る。この手順で国務省は信託統治案の成立をめざす。

しかし、パレスチナの当事者は、双方とも机上の空論に反対した。アラブ連盟は米国流の妙案を明確に拒否し、その理由の一つにアラブ対信託統治国の紛争発生を挙げる。ユダヤ機構も米国案に乗らず、そのウォシントン駐在部代表のモウシャ・シャートク（後にシャレットと改姓、首相を務める）は国務長官のマーシャルに向かって、信託統治を英委任統治の延長と酷評する。

国際連合の内部では、親米諸国でさえウォシントンの方針転換に気乗り薄だった。うっかり賛成して軍事義務を背負い込みたくないからである。実際、米国の提案を実行するには、相当の軍事力を必要とした。米軍統合参謀本部の見積もりでは、十万の地上部隊、駆逐艦隊、かなりの航空支援兵力を派遣せね

ばならない。米軍だけではとうてい重荷を担い切れず、その一部を他国に肩代わりしてもらわねばなるまい。

第二次世界大戦後、米国は日独両国に占領軍を駐屯させ、さらにソ連に対抗するため海外に部隊を展開していたが、戦時中に築き上げた大軍に比べれば、兵員数を大幅に減らしていた。パレスチナに急いで派兵するとなれば、本国の予備兵力は底を衝いてしまう。大戦の勝利から三年と経たぬうちに、新たに部分動員をかけねばならない。若者の血が遠い異郷で流れることになれば、世論の抵抗は大きいだろう。

停戦実現を図る 国務省は冷徹な事実、換言すれば、信託統治案の非現実性を認めねばならなかった。この提案は正式に総会議題として取り上げられぬまま、間もなく自然消滅の運命をたどる。そこで米国代表団は不評の信託統治にかわって、パレスチナの停戦を提唱した。まず戦火を消し止めるのが眼目で、例の分割決議を取り消さずに措く。そうすれば、分割に賛成した諸国の賛同を得られよう。

この停戦案が成立すれば、パレスチナは分割前の状態に凍結される。国務省の外交は前年から失敗続きだったが、停戦の実現で一定の政治的成果を収めるだろう。しかし、この名案もユダヤとアラブの双方から反撥を買った。前者は移住制限の全廃、アラブ武装集団（内戦の開始以来、近隣諸国は義勇兵の名目で兵員をパレスチナに送り込んでいた）の撤収、外部勢力の浸透防止の保証を要求し、後者はユダヤ移民の即時停止、分割案の完全廃棄、アラブ勢力の追い出し反対を唱えた。

この期に及んで、米国主導の停戦に応ずる気持ちは、ユダヤ側に全くなかった。内戦の当初は不利だった戦況も、軍事作戦の〈D計画〉発動で、有利に展開している。ハイファなどの大都市から、多数のアラブ人口を放逐し、分割決議で定められたユダヤ国家の領域を確保したばかりか、アラブ国家の領域にも支配地を拡大した。ここで武器を置くことはない。これがシオン主義者の偽りない真情である。

停戦問題を取り上げた安全保障理事会の席で、思いがけぬことに、ソ連だけがユダヤ側の立場に理解を示した。米国が停戦の前提条件として徴兵可能な年齢層の移民停止と英軍の監視を提示したところ、ソ連代表のグロムイコはユダヤ側に一方的に不利と批判する。それまで米英両国はソ連のパレスチナ分割支持の態度を単なる策略と見做していた。マスクヴァは好機をとらえてアラブ支持に回り、西側の結束に揺さぶりをかけるだろう——と。ソ連が安全保障理事会の常任理事国として拒否権を持つだけに、その出方次第で新たな波紋を投ずることになるだろう。

国務省は停戦の早期実現を図るため、ユダヤ機構の駐米代表で穏健派のシャートクと交渉し、新しい提案の内容を説明した。5月15日、英委任統治が期限切れとなっても、ユダヤ国家は独立宣言を延期する。同じようにアラブ側も独立を宣言しない。安全保障理事会は停戦委員会を設置して、両者の仲裁に当たらせる。一カ月あたり四千人のユダヤ移民を認めるかわりに、不法移住を取り締まる――と。

シャートクは国務省案の内容をテラヴィヴに伝達し、ベン＝グリオンら最高幹部の判断を仰ぐ。彼はウォシingtonの険悪な情勢から受諾するよう進言し、拒否した場合には、国務省の報復措置や米国ユダヤ社会の献金停止もあり得ると付け加えた。しかし、返事はなかなか来ない。

その間にも、大詰めは近づく。ウォシingtonはランダンに十日間の停戦と十日間の英委任統治の延長を提案したが、ベヴィン外相に素気なく断わられた。5月15日の最終期限があつてこそ、アラブとユダヤに歩み寄りを強いることができる。この十日間に急転直下、平和が実現する保証はない。それに英国議会はパレスチナからの撤収について、すでに関係法律を制定済みだった。

ベン＝グリオンは回答を引き延ばし、その間に軍事面で有利な既成事実を作ろうとした。ようやくテラヴィヴから届いた訓令は、米国案の拒否を指示する。さらにユダヤ機構の実力者はシャートクに電報を送り、最高会議に出席するため直ちにパレスチナへ飛ぶよう求めた。

国務長官のマーシャルは出発間際のシャートクを呼び付け、新国家の独立宣言を断念するよう勧告した。彼は軍人としての専門的立場から忠告する。アラブ諸国が参戦したら、ユダヤ国家にとうてい勝ち目はない――と。国務次官のラバト・ラベットは脅迫めいた警告を発する。ユダヤ側が停戦に応じず、あくまで独立宣言に固執するなら、米国の援助を期待できない――と。シャートクは米側に態度軟化の印象を残し、テラヴィヴに向けて出発した。⁴

裏工作で 早期承認 米国のシオン主義者たちは、例によって例の如く、政界裏工作でユダヤ国家の早期承認を取り付けようと画策する。トルーマンは国務官僚の停戦努力をよそに、側近の進言にぐらついた。大票田のニューヨーク州のユダヤ人口に迎合すれば、大統領選挙を有利に運ぶことができよう。それにソ連を出し抜くこともできる。マスクヴァが国際連合でしきりにユダヤ側の肩を持っているだけに、新国家を真先に承認するかも知れない。そうなれば、米国内の政治的圧力は、トルーマンに耐えがたいほど高まるだろう。

マーシャルもラベットも、トルーマンのイスラエル早期承認論に驚く。いま米国代表団は独立の延期と停戦の実現に向け、国際連合で全力を挙げている。

その一方で、大統領が紛争の当事者の片側だけを支持し、国家として承認を与えるとは……。英委任統治の終了後、どんなユダヤ国家が誕生するのか、果たして戦火をくぐり抜けて存続できるのか、この段階で承認を急ぐことはない。国務長官は憤然として大統領に迫った。もしユダヤ国家を承認するなら、次の選挙で民主党に投票しない——と。

トルーマンは正論に反駁できず、ひとまず引き下がる。しかし、親シオン主義の側近に口説かれ、またもや決心を翻した。ただし、米国が積極的に承認するのでなく、ユダヤ国家の要請に応えた形を取り繕う。5月14日午後、ユダヤ機構は文書を用意し、特使をホワイトハウスの前に待機させた。大統領の最終決定はあまりに唐突で、同盟国と事前に協議したり、あるいは通告したりする時間的余裕さえなかった。いや、国際連合の議場で悪戦苦闘する米国代表団も知らされなかった。

その前々日、シャートクはテラヴィヴに到着すると、すぐにベン＝グリオンの自宅で開催中の会議に加わった。彼はウォシingtonの空港で旅客機に乗り込もうとしたところ、駆け付けたヴァイツマンに呼びとめられ、米国の承認確実との情報を得る。この朗報を会議の席で披露しながら、同時に国務省の厳しい態度を伝えた。彼は穏健派にふさわしく、米国主導の停戦受諾、独立宣言の延期を主張した。

会議は延々と長引き、慎重論と強硬論が伯仲した。しかし、ベン＝グリオン派が僅かに優勢で、六対四の表決で停戦を拒否する。それはユダヤ国家の建国を意味した。もしも十日間の停戦を受け入れれば、国家再興の千載一遇の好機は二度と巡って来ないだろう。さらに、会議は新国家の名称をイスラエルに決定した。

5月14日、ウォシingtonでは国務省の高官と大統領の側近との間で、大激論が交わされる。だが、行政権の総覧者の権威と意志は絶対で、国務官僚のだれも侵犯できない。同じ頃、ニューヨーク郊外の国際連合の議場では、米国代表団が停戦の実現に最後の努力を続け、停戦と独立延期の米国案に過半数の支持獲得の見通しをつけた。

総会の最中、米国代表はウォシingtonからの電話で呼びだされ、ユダヤ国家の承認を知らされる。彼は憤慨のあまり議場に戻らず、建物の外へ飛び出した。残された同僚は何も知らずに、すっかり面目を失う。通信社の電信印刷機が米国のイスラエル承認の速報を伝え、その紙片が議場内で回覧されたからである。米国代表団はお人好しぶりを嘲られ、真摯な努力の二重性を疑われた。⁵

25 アラブ諸国の軍事介入

三方から 1948年 5月14日の朝、最後のパレスチナ高等弁務官カニンガムはエルサレムの政庁前で閲兵を済ませた後、自動車と飛行機を乗り継いで港町のハイファに向かった。同じ日の夕刻、ベン＝グリオンはテラヴィヴでユダヤ国家の独立を宣言し、ダヴィデの星のイスラエル国旗が聖地の空に翻る。その夜遅く、英海軍の巡洋艦はカニンガムらの高官を乗せて出港し、午後十二時頃に新国家の領海外へ出た。かくして四半世紀に及ぶ英委任統治は、紛糾の地に政治的・軍事的混乱を残したまま、名実ともに終わりを告げる。

翌日の 5月15日の未明、近隣のアラブ諸国は一斉に軍事行動を開始し、パレスチナに向かって進撃した。エジプト軍は南からガザ地方とネゲヴ砂漠に兵を進め、トランスヨルダン軍は東からエルサレムに迫る。シリア軍はガリラヤ湖付近の開拓農園に攻撃を加え、レバノン軍は北から旧委任統治領との境界を越えた。イラクとサウディ・アラビアはイスラエルと直接に境界を接していないが、それぞれ遠征軍を派遣する。

新生ユダヤ国家は三方を敵意に充ちた諸国に包囲され、その命運は風前の灯だった。だが、アラブ側は共通の敵を前にしながら、団結どころか内部抗争に明け暮れる。トランスヨルダンのアブダッラー国王が名目的な総司令官の地位に就任したものの、アラブ諸国の軍勢は相互の連絡を欠いて、イスラエル打倒の勇ましい掛け声をよそに、共同作戦に乗り出せなかった。

実際、双方の戦闘能力には、質的な差があった。イスラエル兵士のほとんどは、自警団のハーガナーや他の過激派軍事組織で訓練されていた。さらに第二次世界大戦中に英軍に志願して、実戦の経験を積んだ者も少なくない。中東にナチ・ドイツ軍が迫った際にも、英国はエジプトなどの従属国を心底で信頼せず、新鋭装備を供与しなかった。⁶ 大戦後、フランスがシリアとレバノンから撤退して以来、両国の軍隊は警察力の域を超えない。

ただトランスヨルダンの〈アラブ軍団〉だけが、中東諸国で唯一の実戦経験を持つ。この精鋭軍団は英国人の司令官と将校の指揮下に置かれ、ハーシム家に忠誠を誓う砂漠の遊牧部族から兵員を徴募した。大戦中にはイラク軍の反英蜂起を鎮圧するのに一役買い、またシリアのヴィシ政権派の仏軍と戦う。英国の委任統治の末期には、英軍の一部としてパレスチナで治安維持の任務に当たった。⁷

アブダッラー アラブ連盟は1945年に発足して以来、共通の課題としてパレスチナ問題を優先的に取り上げる。米英合同調査団が報告書をまとめた際に、さらには国際連合のパレスチナ問題特別委員会が聖地分割の原案を作成した後に、加盟国はたびたび会議を招集して対応策を協議した。各国ともユダヤ国家の樹立に反対する点では原則的に合意しながら、それぞれの思惑が複雑に食い違って足並みを揃えられない。

1946年5月、シリアのブルダンでアラブ連盟の理事会が開催され、シオン主義の脅威に軍事行動と経済制裁で対抗することで合意に達した。だが、この種の強硬策が中東における西側の利益に反してはならぬと、出席国の代表は決定事項を秘密にする。それほど当時のアラブ世界の支配層は米英両国に気兼ねし、重大な危機に臨んで言行が必ずしも一致しなかった。

だが、国際連合の情勢は予断を許さなくなった。まずソ連がパレスチナ分割に賛成し、米国も遅ればせながら追随する。いよいよユダヤ国家が成立しそうな気配となって、1947年10月、アラブ連盟はシリアのアレイに招集の軍事委員会で加盟国の軍隊を国境周辺に集結し、パレスチナのアラブ住民に物心両面の援助を与えるよう決定した。

この会議の終幕近く、反英・反シオン主義の旗手で、英治安当局の手から逃れたフセイニが駆け付けて、パレスチナ臨時政府の樹立と自らの首班就任を要求する。ところが、前のマフティでパレスチナ独立運動の有力指導者は意外にもアラブ諸国の軍事介入に反対し、サウディ・アラビアとエジプトの賛同を得た。国際連合のパレスチナ問題特別委員会の分割案でアラブに割り当てられた領域に、トランスヨルダンのアブダッラー国王が強い領土的野望を抱き、その併合をもくろんでいるのに対して、フセイニは強く反撥したからである。

1920年代の初頭、英国の対アラブ懐柔策でハーシム家の次男が砂漠の人工国家の首長に任ぜられてから、アブダッラーはヨルダン川の東岸に限定された領土に満足できなかった。第二次世界大戦後、中東からフランス勢力が一掃されたのを機会に、彼は〈大シリア構想〉を打ち出して、旧委任統治領の併合を夢想する。⁸ だが、シリアもレバノンも独立を達成したばかりで、しかも旧支配国から共和政体を取り入れただけに、遊牧部族主体の専制国に併呑されるのには絶対反対だった。

折りも折り、国際連合はパレスチナ問題の解決策として、長年にわたる紛糾の地の分割を画策する。かつてハーシム家は当時の英植民地相チャーチルにヨルダン川のこちら側（シスヨルダン）も要求して、素気なく拒否された。そこはバルファア宣言で約束の民族的故地となるべき土地で、委任統治の下でユダヤ移住者に保留せねばならなかったからである。だが、三十年近い歳月の流れは、

聖地の状況を大きく変えた。この機会を逃さずにシオン主義者と取り引きするならば、トランスヨルダンの支配者は年来の悲願を叶えられよう。

アブダッラーは表向きはシオン主義国家の建国に反対を唱え、アラブ連盟傘下の諸国と歩調を合わせた。しかし、その一方でユダヤ機構と極秘の交渉を始め、1947年11月、国際連合の総会でパレスチナ分割決議が採択される直前、特使のゴルダ・マイアスンとヨルダン溪谷の小さな町でひそかに会う。

秘密会談の席でトランスヨルダンの国王はパレスチナの分割を是認し、彼の真の意図を明らかにした。分割案のアラブ領域を自国領に併合するが、ユダヤ領域には手出しせぬ——と。さらにフセイニこそ共通の敵という認識で、両者は意見の一致を見た。

パレスチナ分割決議が難航の末に可決されると、たちまちユダヤ対アラブの流血事件が続発する。ハーガナーや他の武装集団はアラブ領域を武力で蚕食し、無差別虐殺の恐怖をかきたてる心理作戦で、多数の住民を居住地から放逐した。避難民はヨルダン川を西から東へ渡り、王都アマーンにまで逃げてくる。アブダッラーは周囲の強い圧力から、次第に武力行使に傾いた。

だが、彼の真の意図はユダヤ国家の実現阻止よりも、アラブ領域の併合に他ならない。4月26日、トランスヨルダン議会は国王の意向に添い、アラブ軍団の派兵を承認した。同日、アブダッラーは記者会見の席で決意を表明する。平和的解決に向けた努力は、ことごとく失敗に終わった。残された道は戦争しかない。我が身にパレスチナを救う名誉が課せられた——と。

この戦争宣言の後、未来のイスラエル首相はもう一度、トランスヨルダン国王と会い、先の会談で了解に達した事項の再確認を求める。英委任統治が終結する数日前、彼女はアラブ女性に変装してアマーンを訪れ、取り引きの相手に強い警告を発した。アブダッラーの軍勢がアラブ領域にとどまる限り、ユダヤ側は彼の立場を尊重するが、そうでない場合は、総力を挙げて対決するだろう——と。アブダッラーはイスラエル独立の一年延期を提案したが、即座にはねつけられた。⁹

エジプト 当初、エジプト政府は軍首脳部の勧告を受け入れて、**出兵の思惑** パレスチナへの軍事介入に消極的姿勢を示す。ところが、ファルーク国王じきじきの強い指示で、戦争準備もそこそこに急いで出兵に踏み切る。取り敢えず九箇大隊の派遣軍が編成され、シナイ半島の地中海沿岸部を北上してパレスチナをめざした。

エジプトはアラブ世界の盟主として、ユダヤ国家の樹立を黙視できない。すでに多数のイスラーム教徒同胞団の若者がフセイニの陣営に加わり、パレスチナ南部でゲリラ活動を始めた。さらに一部の将兵は正規軍の制服を脱いで、自

発的に反シオン主義の戦列に参加している。政府と軍部が出兵に二の足を踏めば、内外の批判を免れないだろう。

ファルーク国王は権力を維持するためにも、対外戦争の輝かしい勝利を必要とした。当時、カーヒラとランダンとの間の条約改訂交渉が進展せず、英軍は依然としてエジプトに駐留を継続し、国民の反英民族感情をかきたてる。さらに王室の浪費と側近の不正は民心を離反させ、革命的風潮が社会の底辺にみなぎっていた。この民衆の不満を発散させるためにも、隣接のパレスチナで大勝利を収めなければならない。

それよりもパレスチナの半分がハーシム家に併呑されるのは、ファルークの自尊心を傷つける。遊牧部族の後進国トランスヨルダンが地中海岸まで領土を拡張すれば、アブダッラーは例の大シリア構想に弾みをつけて、ゆくゆくは中東に覇権を唱えるだろう。国際連合の分割案では、パレスチナ南西部のガザ周辺はアラブ領域になっている。そこがエジプト固有の領土のシナイ半島に接するだけに、アブダッラーの手中に落ちるのを座視できない。

サウディ・アラビアの国王イブン＝サウードも、エジプト国王と同じような考えを抱く。¹⁰ サウド王家は伝統的にハーシム王家と敵対関係にあり、1920年代の半ば、アブダッラーの父フセインをイスラーム教の聖地メッカから追い立て、ヒジャーズ王国を瓦解させた。しかし、トランスヨルダンが領土を拡大し、かつシオン主義国家と提携するようになれば、アラビア半島の大国といえども脅威を感じる。

王室同士の対抗意識や妬みの感情が、アラブの連帯意識よりも軍事介入の動機となった。サウディ・アラビアはパレスチナと直接には境界を接していないので、ひとまずエジプトに小兵力の部隊を派遣した。さらにイブン＝サウードはファルークと歩調を合わせてアブダッラーを牽制するため、フセイニを分割案の想定するアラブ国家の元首に擬した。

イラーク アマーンがテラヴィヴと妥協を図り、カーヒラが出兵を
の強硬論 ためらう一方で、独りバグダードだけが強硬論を提唱する。1947年 9月16日、レバノンのソファールにアラブ連盟の緊急会議が招集された際、イラーク代表団はブルダン会議の秘密決定事項——軍事介入と経済制裁——を実行に移すよう迫った。イラークもトランスヨルダンと同様にハーシム家に統治されていたが、バグダードの政府は反英、反シオン主義の国民感情を無視できない。

これに対してサウディ・アラビア代表は異論を唱え、むしろ秘密協定の廃棄を提案する。アラブ世界が実力を顧みずパレスチナに派兵したり、先進国を経済的に締め上げようと試みたりしても必ずや失敗に終わり、かえって世界の笑

い物になるだろう——と。その頃、アラビア半島の石油資源は、米国の会社によって開発がようやく軌道に乗ったばかりである。軽々しく制裁に踏み切って、石油利権の取り消しなどの措置に踏み切れば、制裁の対象となる欧米諸国よりも産油国自身に打撃を与え、ひいてはアラブ連盟にも大きな影響を及ぼすことになりかねない。

この穏健論に対して、イラークは強硬手段に訴えてこそ、事態を有利に導くと主張する。大国がアラブ諸国の反対を無視してシオン主義に肩入れすれば、手痛い報復をこうむるだろう。そのような事態に至れば、米国も中東の石油利権を危うくしかねないと悟って、パレスチナの分割をためらうか、あるいは反対に回るかも知れない——と。

ところが、この議論は当時の国際政治の現実を踏まえず、単なる希望的見通しに過ぎなかった。その翌日、米国のマーシャル国務長官は遠回しの表現ながら、パレスチナの分割支持を表明する。アラブ諸国はそれぞれ国務省に抗議するが、軍事介入の可能性に触れなかった。ただ、イラークだけが公然と武力行使をほのめかす。

1947年11月末、パレスチナ分割決議が国際連合で採択された後、イラーク政府は強硬態度を一段と固める。新情勢に対処するためアラブ連盟の理事会がカーヒラで開催された際、イラークはまたもやブルダン秘密協定の実行と軍事介入を提唱した。これに対してサウディ・アラビアはアラブ諸国の出兵どころか、パレスチナ人への武器供与にさえ消極的だった。エジプト代表も正規軍の派遣に反対したが、義勇兵の出陣に異議をはさまなかった。

バグダードはアラブ連盟の軍事委員会に陸軍の将官を議長として送り込んで、強硬論の主導権を握る。このカーヒラ会議でアラブ諸国はようやく〈間接的〉軍事介入で合意に達し、シリアで訓練中の義勇兵三千の派遣とパレスチナ人に小銃一万丁の供与を決めた。

だが、これには厳しい条件が付く。義勇兵はイラーク軍の指揮下に置かれ、武器はアラブ連盟の承認したパレスチナ人のゲリラ組織にだけ配分される。その狙いは、親フセイニ勢力の排除だった。

イラークが強硬姿勢を示し続けたのは、実は国内の政治危機の反映に他ならなかった。この国はパレスチナと直接には境界を接していないが、政権維持のために反シオン主義の大義名分を掲げねばならない。当時、バグダードの情勢はランダンとの条約改訂をめぐる大揺れに揺れ、1948年1月28日、首相のサーリ・ジャブルは暗殺を恐れて辞任し、トランスヨルダンへ逃亡した。¹¹ それ以来、イラークは軍事介入の立て役者でなくなった。

英委任統治の大詰め近く、アラブ連盟はアマンで会議を開き、緊急対策を

協議する。情勢は悪化する一方だった。ユダヤ側はパレスチナの各地で積極攻勢に出て、アラブ住民を追い立てている。エジプトだけが決断を渋ったものの、大勢の現状認識は一致した。事態がここまで追い込まれば、もはや残された方策はアラブ諸国の軍事介入以外にない——と。

ようやく しかし、トランスヨルダンもエジプトも英国との特殊関係
共同出兵 係を考慮すれば、委任統治の終了以前に正規軍を投入できない。その間にもユダヤ側は武力で勢力範囲を拡大し、戦術的に有利な地歩を固めるだろう。そこでシリア、レバノン、イラクの三国が戦闘部隊を義勇兵の名目で派遣し、分割案のアラブ領域に布陣する。ただし、英軍との接触やユダヤ武装集団との交戦は、可能な限り避けることにした。

さらにアラブ連盟は政治委員会をディマシュクに招集し、最終日の5月14日、米英共同提案の休戦案を拒否する。前年の11月末に国際連合の総会でパレスチナ分割決議が採択されて以来、流血の衝突はすでに半年に及んだ。同日夕刻のイスラエル独立宣言、続いて英委任統治の終了と同時に、パレスチナの内戦は国際紛争に発展する。

土壇場でファルークはエジプトの参戦を決め、アブダッラーもシオン主義勢力との妥協を断念する。アラブ諸国は曲がりなりにも団結を守り、パレスチナ共同出兵に踏み切った。ところが、現実には各国の支配者は歴史的因縁と個人的反目から互いに信頼せず、その軍勢は個別の軍事行動を展開するだけだった。アブダッラーは名目上の最高総司令官だったが、統合司令部の設置されぬまま、他国の軍隊の指揮権を持たない。アラブ連盟の事務局は実際には何の権限もなく、不仲の加盟国の対立を調整するのに忙殺された。

アラブ側の最大の弱点は、パレスチナの未来図を描けないことだった。パレスチナ分割の否認と単一アラブ国家の樹立は、究極の理想である。しかし、その政体について、何の具体的な合意に達していない。まず軍事介入で確保のアラブ領域をどうするか、トランスヨルダンと他のアラブ連盟加盟国の思惑は大きく食い違った。

26 開戦から第一次停戦まで

武器調達 アラブ諸国の参戦で、パレスチナの戦況は新たな局面を
に狂奔 迎える。それまでユダヤ武装集団は重火器を保有しなくとも、軽装備のアラブ遊撃隊を制圧し、支配地を拡大できた。しかし、近隣諸国の正規軍が介入すれば、イスラエルは苦戦を免れまい。アラブ諸国は軍事力の水準で欧米各国に遠く及ばないが、最新型でないまでも装甲車、戦車、航空機を保有している。それに比べれば、ユダヤ国家の軍勢は地下の軍隊から新国軍に衣替えしただけで、近代戦の遂行能力で格段に見劣りした。¹²

第二次世界大戦も終わり近い1945年7月、すでにドイツ第三帝国は連合国の軍門に降り、日本だけが空しい最後の抵抗を続けていた。折りから米国に滞在中のベン＝グリオンは将来を見越し、親シオン主義傾向のユダヤ系資産家たちと懇談して、新国家支援組織の結成を要請する。その結果、農業機械と医療機器の会社が設立されたが、内実はやがてイスラエル国防軍の中核となるハーガナー向けの武器調達機関に他ならなかった。

大戦の終結と共に、米国の戦時景気は、うたかたのように消え去った。多数の軍需工場が閉鎖され、もはや買い手のない余剰軍用物資の山を残す。この仮装会社は安値で武器、弾薬、軍用車輛、さらには艦船から飛行機まで買い漁った。だが、米国政府が中東地域に武器輸出を禁止していたので、これらの軍需物資はパレスチナに合法的に発送できない。

一方、ユダヤ機構は欧州にも買い付け要員を派遣し、ひそかに武器を購入する。地中海の対岸の大陸はつい先頃まで戦火で覆われていただけに、いまやイスラエルにとって恰好の武器供給源となった。とりわけチェコスロヴァキアは武器の輸出に理解を示し、ユダヤ側の戦力増強に貢献する。¹³ 委任統治の末期、英支配体制の弱体化に連れて、武器の密輸船が監視の眼をかいくぐり、パレスチナの岸辺で禁制品をこっそりと陸揚げした。あるいは、国籍不明の輸送機が砂漠の滑走路に着陸し、貴重な積み荷を運びこむ。

5月15日、アラブ諸国は旧英委任統治領に兵を進め、建国直後のイスラエルと全面戦争に突入する。ユダヤ国家が独立を宣言したからには、もはや平和的手段で政治的シオン主義に対抗できない。それまでの度重なる協議にもかかわらず、アラブ連盟はパレスチナに政治統合体を樹立できなかった。つまり、国際連合の総会決議に基いて設立されるユダヤ国家とアラブ国家のうち、前者が独立を宣言したのに、後者はついに実現しなかった。

エジプトはトランスヨルダンの領土的野心に反撥し、パレスチナへ出兵してアラブ領域のうち自国に隣接した土地の占領（あわよくば併合）を狙う。ファルーク国王は遠征軍の出陣を称えて、記念切手の発行を命じた。

開拓農園の攻防戦 エジプト軍の地上部隊は二手に分かれ、シナイ半島からパレスチナ南西部に進撃する。一つの先鋒は地中海沿岸に沿って北上し、まず旧約聖書に登場する大力無双の士師サムソンゆかりのガザをめざす。ファルークの軍勢の最終目的地は、さらに北方のユダヤ商工業都市テラヴィヴだった。この政治的シオン主義の牙城が陥落するなら、新生イスラエルは中枢を喪失し、ペリシテ人の神殿のようにたちまち瓦解するだろう。

もう一つの攻撃の矢は、内陸部のベエルシェバに向けられる。ここはネゲヴ砂漠北部の中心地で、エルサレムに通ずる街道の要衝である。はるかな昔、族長アブラハムは生命の水を求め、この地に井戸を掘ったという。シオン主義者の農民はネゲヴの乾いた大地を耕し、荒れ地を緑の農園に変えた。このオアシス町を占領すれば、聖都への交通路を確保するばかりか、北ネゲヴ一円の開拓地を押さえられよう。

だが、エジプト遠征軍はユダヤ開拓農民の強い抵抗に遭遇し、思いがけぬ苦戦を強いられた。地中海沿岸の道路は入植地の近くを通り、テラヴィヴに至る。最前線への補給路が切断されるのを未然に防ぐため、まずエジプト軍は沿道のユダヤ農園に攻撃を仕掛けた。僅かな人数の農民は貧弱な武器で戦い、正規軍の大部隊の攻勢によく耐え、逆に大きな損害を与える。¹⁴

やがてエジプト軍は副次的目標にこだわり過ぎる愚を悟り、一部の兵力で開拓地を包囲するにとどめた。抵抗拠点が封じ込められる間に、本隊は本来の目的地に向かって進撃する。しかし、開拓農民の果敢な行動はユダヤ側の士気を高めただけでなく、テラヴィヴの防衛のために貴重な時間を稼いだ。その間に防御陣地が構築され、海外から徴兵適齢層の新規移民、それに待ちに待った重火器が到着する。エジプトの遠征軍が途中で手間取っているうちに、イスラエルの戦力は短期間にいちじるしく強化された。

開戦以来、エジプト軍は航空戦力を投入し、空からの攻撃に無防備状態の都市や開拓農園に銃爆撃を加える。ところが、思いがけずイスラエル軍の飛行機が戦場の空に出現し、アラブ側の地上部隊を空襲した。¹⁵ チェカスロウヴァーキアが旧独軍のメッサーシュミット戦闘機を分解したまま供与し、イスラエルは空輸で届いた梱包を開いて、機体を大急ぎで組み立てたからである。それまでエジプトは制空権を一方的に握っていたが、もはや空中の戦闘でも優勢を保てなくなった。

エジプト軍の先鋒部隊はテラヴィヴの南方約四十キロ、ユダヤ国家の領土に少

し食い込んだ地点で停止する。イスラエル軍が橋を爆破して重車輛の進撃を食い止め、さらに空から攻撃を加えたからである。遠征軍の補給線は、すでに危険なまでに伸びきった。この地点でエジプト軍は塹壕を掘り、防御態勢に転じた。ファルーク国王の目算——パレスチナ随一の商工業都市を占領し、独立したばかりのユダヤ国家を屈服させる——は、すっかり外れてしまった。

エジプト軍は地中海沿岸部で戦略目標を達成できなかったものの、内陸部の戦闘で一定の戦果を収めた。その別動隊はイスラーム教徒同胞団の義勇兵と共にベエルシェバを陥れ、海岸寄りの友軍と連絡を付ける。この軍事的成功はネゲヴ地方北部の広大な地域をユダヤ国家から切り離し、砂漠に点在する開拓農園を半年間も孤立状態に追い込む。この間、両国の軍勢は地中海から砂漠に通ずる道路の支配権をめぐる、激しい戦闘を繰り返した。

エルサレム 国際連合のパレスチナ分割決議はアラブとユダヤ両
の 陥 落 国家の独立を認め、エルサレムについては〈特別国際体制〉を想定する。アブダッラーとマイアスンが談合した際、両者は聖都の国際管理に反対する点で、奇妙にも意見の一致を見た。だが、いまや聖都の帰属をめぐる、トランスヨルダンとイスラエルの軍勢は激突する。アラブ軍団は装甲車を繰り出し、古い歴史の城塞都市に攻撃を仕掛けた。

十九世紀の中葉以来、エルサレムの人口は、ユダヤ教徒がイスラーム教徒をしのぐ。そのほとんどが厳格な正統派教徒で、欧州から伝わってきた政治的シオン主義に反対だった。神の約束の地に世俗の国家を樹立するのは、冒瀆行為に他ならぬと信じたからである。だが、イスラエルの建国と共に、過酷な運命がヤハウエの信徒を見舞う。

当初、防御側は攻撃側に手痛い損害を与える。アラブ軍団は近接戦で装甲車を破壊され、先陣に死傷者が続出した。しかし、態勢を立て直して城壁の内部に突入し、聖都のユダヤ居住区を完全に包囲する。ハーガナーとイルグーンの混成部隊は狭い路地から路地へ、家から家への市街戦で善戦し、優勢な正規軍の猛攻を支えた。しかし、ユダヤ側は間断ない砲撃にさらされ、食糧も飲料水も不足し、負傷者の治療もままならない。小兵力の援軍が夜陰に紛れて城内に潜入したが、不利な戦況をとうてい挽回できなかった。

二週間後、正統派教徒の強い要請で、守備側は攻撃側と停戦交渉を始める。5月28日、聖都のユダヤ教徒居住区は降伏した。僅かに生き残った戦闘員は捕虜となり、約千二百人の老人と婦女子はシオン門から城外に退去する。重傷者はアラブ軍団の兵士の手で、担架に乗せられて運び出された。¹⁶ アブダッラー国王は預言者ムハンマドの血統に連なるハーシム家の当主にふさわしく、メッカとメディーナに次ぐイスラーム教の聖地の奪取に成功する。

ラトルン エルサレムの旧市街の西方に、欧州風の町並が広がって
の攻防戦 いる。この新市街は二十世紀に入ってから建設が進められ、テラヴィヴと同様に発展を遂げた。ここにユダヤ機構の本部が置かれ、シオン主義運動の本拠となる。

イスラエルはダヴィデの都の旧市街を喪失したものの、この新市街を確保した。しかし、西エルサレムは補給路を切断されて、すっかり陸の孤島と化す。アラブ軍団の砲兵は射撃目標を旧市街のユダヤ居住区からこちらに移し、包囲下の近代都市に猛砲撃を加える。

英委任統治の終了前、ユダヤ側の武装輸送隊はエルサレムに生活必需品を運搬する途中、しばしばアラブ側に襲撃された。アラブ遊撃隊はラトルンの要衝を確保し、聖都への交通を遮断する。この村はテラヴィヴとエルサレムのほぼ中間に位置し、二大都市間の幹線道路から脇街道が分岐する戦略上の重要地点だった。

アブダッラーは分割後のパレスチナに領土的野心を抱き、自己の勢力圏内で活動するゲリラ組織を疎んずる。このアラブ遊撃隊はトランスヨルダンと対立し、開戦後間もなくラトルンから自発的に撤収した。この時、ユダヤ側がすぐに占領すれば、聖都は封鎖の脅威から解放されたに違いない。しかし、イスラエルの戦争指導部は他の戦線に心を奪われ、みすみす絶好の機会を逃す。アラブ軍団はすかさず進出して、交通の要衝を手中に収めた。

ベン＝グリオンは新国家の首相と国防相を兼ね、政治と戦争の両面で陣頭指揮に立つだけに、エルサレムの危機を深く憂慮する。双子都市の聖都が新旧両市街とも奪われる事態に至れば、シオン主義国家は精神的支柱を喪失するだろう。そうなれば、建国後間もないイスラエルは根底から揺らぎかねない。彼は国防軍に対して厳命を発した。いかなる犠牲を払っても、エルサレム・テラヴィヴ回廊を確保せよ——と。

エルサレム旧市街が陥落する前後の時期に、シオン主義の軍勢は数度にわたってラトルンを攻撃する。1930年代の後半、アラブの武力蜂起でパレスチナ全土が血みどろの戦場と化して以来、英治安当局は要所の警察署を堅固な砦に変えた。いまやアラブ軍団は英委任統治時代の遺産——警察砦に立てこもり、ユダヤ側のすべての強襲を撃退する。攻撃側はゲリラ相手の戦闘と勝手が違い、攻城戦に不慣れた指揮官と兵士に多数の犠牲者を出した。¹⁷

イスラエルは兵員不足を補うため、独立宣言後に上陸したばかりの移民に僅か数日間の軍事訓練を施すだけで、すぐに最前線に派遣しなければならなかった。欧州のユダヤ難民はヒトラルの大虐殺から辛うじて生き延び、ようやく神の約束の地にたどり着いたものの、ただちに死の淵に投げ込まれる。聖地の過

酷な気候の下、未熟な兵士は咽喉の渇きに苦しみ、容易に銃弾の餌食となって荒野に倒れた。

エルサレムの新市街は砲撃に絶え間なくさらされ、ほとんど死の町と化した。死者は墓地に運ばれずに、裏庭や道端に埋葬される。停電と断水は近代都市の機能を奪い、住民を最低限の生活状態に追い込む。封鎖が長引くにつれ、食糧の備蓄は底を衝きかけた。放送局は沈黙し、生き地獄の窮状を外界に広く訴えることもできない。

だが、イスラエルは奇想天外な手段を用いて、封鎖の解除に成功する。ラトランの激戦地から尾根を隔てた向こう側に、間道を新しく建設したからである。この急造の道路は深い谷底までくだり、ついで急な斜面を這いのぼる。普通のトラックは無理でも、四輪駆動のジープなら九十九折りの急坂を通行できた。この一筋の細い補給路から、食糧、飲料水、医薬品、そして武器弾薬が運びこまれ、包囲下のエルサレム新市街を救う。¹⁸

激闘の末に 危機を脱す 国際連合がパレスチナの分割に向かって動いた時期、イラクは軍事介入論の急先鋒で、英委任統治の終結前から多数の義勇兵を聖地に送り込む。その後、対英条約改訂をめぐる政変で、強硬論者の首相、外相が共に罷免されたが、開戦後は従来の主張通り正規軍を派遣した。5月15日、その先陣はガリラヤ湖の南部でヨルダン川を渡ろうと試み、もろくも撃退された。対岸は新生ユダヤ国家の領土で、イスラエル側は防御を固めていたからである。

イラク軍はいったん引き下がり、ヨルダン川の下流の安全な渡河地点から旧委任統治領に進撃する。そこはパレスチナ分割決議によってアラブ側に割り当てられた領域で、何の妨害もなかった。遠征軍はサマリヤ地方の中心地ナブルスに到着すると、敵地に向かって積極的攻勢に出ず、ただ増援軍の到来を待ち受ける。

エルサレムの攻防戦が最高潮に達した時期になって、イラク軍はようやく進撃を開始した。その機甲部隊はサマリヤの山地から海岸平野に出て、地中海岸のナタニヤに向かって前進する。イスラエルは国土を真二つに分断されそうになって、深刻な危機に陥った。イラク軍の先鋒が浜辺から僅か十数地点にまで迫ると、イスラエル軍は必死になって側面を衝き、どうにか進撃を食い止めた。

中部戦線の戦局に、イスラエルの興廃が懸かった。イラク軍の南では、トランスヨルダンのアラブ軍団が新国家の領土を削り取り、次第にテラヴィヴを脅かす。しかし、堅忍不拔のベン＝グリオンが全軍の指揮を執り、ユダヤ国家はどうにか難局を乗り切った。

パレスチナ北辺のガリラヤ地方では、レバノン国境の南側にアラブ領域が逆三角形を成し、その先端部にイエスの生誕地ナザレの町が位置している。英委任統治の末期、ユダヤ側は港町のアッコーなど地中海岸寄りの土地を奪った。5月15日、レバノン軍は国境を越え、イスラエル領の村を占領する。緒戦の勝利はアラブ解放軍を大いに勇気づけた。この非正規部隊はレバノンとシリア出身の義勇兵で組織され、すでにアラブ領域内で活動していた。

シリアはアラブ領域に接していないので、開戦と同時にガリラヤ湖畔のイスラエル領を直接に攻める。これは〈ガリラヤの海〉とも呼ばれ、中東の乾燥地帯では珍しい淡水湖で、ヨルダン川の源泉となっている。十九世紀の末頃、その周辺にロシアから宗教的シオン主義者が入植し、開拓農園を築き上げた。さらに第一次世界大戦後、若者たちが新社会建設の理想に燃えて、私有財産否定の農業共同体（キブツ）を建設する。シリア軍はまず湖岸のユダヤ農園を目標に定め、攻撃を開始した。

機甲部隊と歩兵は砲兵の掩護射撃の下、開拓地に攻撃を掛ける。ガザ地方の戦闘と同様に、ここでも武装農民は優勢な正規軍を相手に回し、文字通り死に物狂いで戦った。戦車と装甲車は防御陣地に突入したものの、火炎瓶の肉薄攻撃で炎上する。歩兵は機甲部隊と密接な協同行動を欠き、鋼鉄の大盾を失って射すくめられた。最後にイスラエル国防軍の増援部隊が到着し、シリア軍を退却に追い込む。¹⁹

ガリラヤ湖畔の激戦でシリア軍はもろくも敗退したが、その十数日後、ささやかながら復讐を果たす。湖の北方に位置する古いユダヤ農園を占領し、イスラエル領内に足掛かりを残したからである。しかし、兵員と装備の損害を考え合わせれば、その代価は極めて高い。

国連調停官の活動 前年の秋、世界平和維持機構は聖地の分割を決めた際、同時に国連パレスチナ監視団を設立して決議の実行に当たらせた。だが、英国がアラブ諸国に対する気兼ねから、終始、非協力に徹したので、この機関は何の成果も上げられなかった。その間にアラブ・ユダヤの武力衝突が続発し、パレスチナは分割の前に流血の騒乱状態に陥る。米英仏など主要国のエルサレム駐在領事が和平の斡旋を試みたが、その努力は実を結ばなかった。

英委任統治の終了日が近づくと、国際連合は臨時総会を招集し、和平達成のために最後の努力を傾ける。時間切れの直前まで、米国代表団は休戦決議の支持票を取りまとめるのに大奮だったが、トルーマン大統領がシオン主義国家に肩入れして事実上の承認を与え、その苦心は水泡に帰した。総会は散会する前、この監視団を廃止し、新たに〈調停官〉の役職を創設した。

初代調停官には、スウェーデン赤十字総裁のフォルク・ベルナドットが任命された。彼は貴族の出身で北欧の王室の血筋を引き、中立国の要人として困難な任務の適任者だった。当初、この人事はイスラエルから、そして米ソ両大国からも歓迎される。²⁰ しかし、彼の真摯な努力は報いられることなく、その解決案は敵対陣営の双方から拒否された。最後に和平の調停者は、ユダヤ過激派の凶弾に倒れる。

安全保障理事会はパレスチナの戦火を消し止めようと、再三にわたって休戦を呼び掛けたが、その度に当事者の双方から無視された。どちらも戦場で有利な地歩を固めたいからである。5月29日、開戦からすでに半月を経て、エルサレム旧市街の命運は決まった。この日、安全保障理事会は英国提案の和平決議案を可決し、強い制裁措置をほのめかす。双方とも戦力を消耗し尽くし、ようやく交渉に応じた。

しかし、休戦条件をめぐって和平会談は難航し、なかなか折り合いがつかない。戦闘はさらに十日以上も続く。この和平決議は、休戦期間中、戦闘員、軍需物資の移動禁止を定めた。イスラエルは引き続いて新規移民の受け入れを認められるが、兵役適齢者の教練や動員をしてはならない。この条件にアラブ側は不満で、まず休戦の前提として、移民の全面停止を要求した。

ユダヤ国家は独立を宣言すると、真先に委任統治の遺物——移民規制令を廃棄する。サイパス島の収容所から、欧州の難民収容所から、移住者が続々とパレスチナの岸辺に上陸した。アラブ側は無制限の移民に対して、強い懸念を示す。このままの状態では、休戦がイスラエルの国力増強に寄与するだけではないか——と。

しかし、イスラエル側の主張に従えば、神の約束の地への移住は本来的、かつ歴史的権利に基き、ユダヤ国家が独立を宣言したからには、主権にかかわる問題で、他国の容喙を許さない。²¹

この難問をめぐり、和平交渉は暗礁に乗り上げる。ベルナドットは局面打開のために、安全保障理事会に移民問題の裁定を要求した。しかし、和平決議の文言は全会一致の賛同を得るため、慎重な言い回しとなっている。明確な定義づけは、決議そのものを根底からぶち壊しかねない。そこで安全保障理事会は争点の解釈権を現地の調停官に委ね、その政治的手腕に期待した。

ベルナドットは敵対陣営の説得に尽力し、ようやく難問を解決に導く。調停の内容は、次の通り双方の立場を取り入れた。休戦の期間中も、新規移民のイスラエル入国は引き続き認められる。ただし、戦闘員と兵役適齢期の男子は国際連合の監視下の収容所に入り、軍事教練を受けてはならない——と。アラブ側も、この調停条件を受け入れた。

四週間の休戦 6月11日、ようやく休戦が発効する。ひとまず戦火は収まったが、その期間は僅か四週間に過ぎない。アラブ諸国が優勢な火力で猛攻を加えたにもかかわらず、新生イスラエルは火の試練に耐え抜いた。その急造の国防軍は近隣諸国の正規軍と互角に戦い、武装農民は開拓地を死守する。ユダヤ国家は瓦解することなく、どうにか生き延びた。

実際、イスラエル国民は建国の意気に燃え、文字通り死に物狂いで戦った。彼らは欧州の迫害と大虐殺から逃れ、やっとの思いで約束の地にたどり着く。そこで壁を背に追い詰められながら、家族のために、新国家のために、必死で挺身する。アラブ側の兵士はシオン主義国家打倒の信念を抱いても、故郷から遠く離れた戦場で苦戦を強いられ、士気も低下しがちだった。

前年の秋、国際連合の総会はパレスチナ分割決議を採択し、みずから戦争の原因を創り出した。この平和維持機構が仲裁に乗り出し、敵同士はいったん銚を収める。いまや調停官の任務は敵対陣営を説得し、戦闘停止に持ち込むだけで終わらない。ベルナドットは四週間の暫定休戦を延長し、流血の地に恒久平和の樹立をめざす。そのためには不公正なパレスチナ分割決議の内容を吟味し、その大幅な変更を検討した。

ベルナドットは戦況を考慮に入れ、ガリラヤとネゲヴの交換を提案する。パレスチナの北辺では、アラブ領域がレバナン国境から逆三角形をなし、アラブ解放軍の活動舞台になっていた。この楔は地中海沿岸のユダヤ領域と内陸のガリラヤ湖周辺の開拓農園を分断でき、イスラエルに潜在的脅威を及ぼす。北部戦線の力関係は、全体的にユダヤ側に有利だった。シリア軍は湖畔のキブツ争奪戦で敗退し、レバナン軍も大した戦果を挙げていない。

一方、南部戦線のネゲヴ砂漠では、戦況はアラブ側に有利に展開している。エジプト軍は高価な代償を払ったとはいえ、要衝のベエルシェバを手中に収め、北ネゲヴに点在する開拓地を包囲した。もともと砂漠の全体がユダヤ側に割り当てられたのは、合理的な分割案とは言い難い。この地方の遊牧民をユダヤ国家に組み入れたばかりか、西アジアと北アフリカのアラブ世界を結ぶ陸路を完全に断ち切ったからである。

さらにベルナドットは聖地保護の特別措置を条件に、エルサレムをアラブ側に編入するよう提案した。すでにダヴィデの都はアラブ軍団の攻撃で陥落し、アブダラーの支配下に置かれている。聖都の喪失はイスラエル側に心情的に受け入れ難くとも、戦局を反映した現実的提案に違いない。調停官は国際連合から託された権限を最大限に行使し、パレスチナ分割決議そのものの大胆な変更を試みた。

イスラエル側はベルナドット提案について、アラブ側の誤れる期待感を助長

し、ユダヤ側の感情を傷つけるもの——と酷評する。その主張に従えば、国際連合のパレスチナ分割決議はユダヤ領域を最小限度まで縮小した。それだけに境界線の変更は必要である。ただし、それはイスラエルの安全を保障するものでなければならない。だからアラブの侵略を撃退して確保した土地は、寸土といえども譲ることはできない——と。

調停官の提案は複雑な思惑を引き起こし、もともと緩いアラブ陣営の結束を乱した。ベルナドットの腹案によれば、ネゲヴ砂漠と地中海岸のガザ地方はアラブ領域に編入される。だが、その支配者にはファルークでなく、アブダッラーが想定された。つまり、エジプトは相当な出血の末に獲得した占領地を保持できず、みすみすトランスヨルダンに横取りされてしまうことになる。²² 結局のところ、ベルナドットの調停案は現実的妙案のようでありながら、イスラエルとアラブの双方から賛同を得られなかった。

27 イスラエルの決定的勝利

休戦中に アラブ諸国もイスラエルも一カ月近い激闘ですっかり戦力増強力を消耗した。四週間の休戦は両陣営に——とりわけ新生ユダヤ国家にとって、またとない息継ぎの機会となる。この期間にイスラエルは陣容を立て直し、休戦の条件に公然と違反して戦力の増強に努めた。開戦前に発注した武器弾薬が続々と到着し、戦闘能力を飛躍的に向上させる。国際連合の監視は名ばかりで、実際はないも同然だった。²³

アブダッラーは最高総司令官の肩書でアラブ諸国の首都を歴訪し、休戦期間満了後の戦闘再開に慎重論を唱える。イスラエルの抗戦能力は予想以上に高く、アラブ側に出血を強いた。武力でユダヤ国家を打倒するには、高い代価を覚悟せねばなるまい。各国とも経済的、軍事的負担に耐えられるだろうか——と。トランスヨルダンはベルナドット提案の最大の受益者であり、シオン主義国家との早期妥協を望んだからである。

ファルークは北ネゲヴとガザ地帯の放棄を受諾できないが、休戦期間の延長には異論なかった。エジプトの遠征軍は一定の戦果を収めたものの、あまりにも損害が大きい。だが、競争相手のハーシム家が和戦の両面で主導権を握るのは、とうてい容認しがたい。アブダッラーが総司令官の資格でエジプト軍の前線視察を申し入れると、ファルークは素気なく拒否した。

アラブ連盟はベルナドットの和平構想をめぐり、協議を重ねる。強硬な主戦論者はシリアとレバナンで、それにサウディ・アラビアが同調した。とりわけ北部のアラブ領域の全体をイスラエルに引き渡すのには、バイルートとディマシクが強く反対する。パレスチナ南部の荒野と引き換えに、血で贖ったガリラヤの肥沃な土地を手放すことができようか——と。サウド王家はハーシム王家のように目先の利害を持たないので、中途半端な妥協を排し、反シオン主義の立場を貫く。

休戦期間の延長にアラブ側が同意しなかったため、パレスチナの戦火は再燃する。イスラエルは和戦両様の構えを示すが、その間にも着々と軍備を拡張した。開戦前、新国軍は満足な重火器もなかったのに、いまや砲兵、機甲部隊、航空隊を擁し、火力でアラブ参戦諸国の正規軍を圧倒する。新到来の移民は上陸地点から訓練所に直行し、休戦条件に違反して軍事教練を受けた。欧米諸国から第二次世界大戦の歴戦の将兵が加わり、飛行機や戦車を操縦する。武器だけでなく兵員でも、イスラエルはアラブ陣営を凌駕した。²⁴

イスラエルの大攻勢 戦争の第二段階で、アラブ側は守勢に回る。今度はイスラエルが攻撃の時と場所を選ぶ番で、戦局の主導権を握った。四週間の休戦は、1948年 7月 9日の金曜日に期限切れとなる。その日の夕暮れ、ユダヤ教の安息日が始まった時、まず北部戦線でシオン主義国家の軍勢はガリラヤ湖北方のシリア軍に攻撃を加えた。この橋頭堡は上ヨルダン川の西岸にあり、ユダヤ領域に食い込んでいる。

イスラエル軍はシリア領に浸透して、この刺を背後から抜き取ろうと試みた。しかし、包囲作戦の意図は察知され、強い反撃に直面する。一部の部隊は敵地に踏みとどまって戦いを続けたが、ついに退却を余儀なくされた。その後も戦況は一進一退を繰り返した末に、最後に振り出しに戻る。攻撃側の狙いは挫折したものの、防御側もすっかり戦力を消耗した。

しかし、イスラエルの軍勢はイエス・キリストゆかりの町ナザレを奪い、ガリラヤ地方のアラブ領域を大きく削り取る。レバナン政府が休戦の延長に反対し、主戦論を唱えたにもかかわらず、その正規軍は戦場の主役になり得なかった。イスラエル国防軍の真の相手は張り子の虎のレバナン軍ではなく、重火器の牙を持つゲリラ組織のアラブ解放軍に他ならない。まず戦闘は小さな村落で火蓋を切る。

ここはガリラヤ地方の中心に位置し、主要街道が地中海の港アッコからガリラヤ湖畔の町テベリヤへ通ずる。この交通の要衝をイスラエル側は急襲し、占領したばかりの村を堅固な防衛陣地に変えた。その戦略的重要性を悟ってアラブの義勇兵部隊は装甲車まで繰り出し、イラク軍航空機の支援の下に何度も奪回を試みた。だが、イスラエル軍は、度重なる猛攻に耐え抜く。

一方、イスラエル軍の別の部隊が、アッコからナザレをめざす。アラブ解放軍は背後を脅かされて、急いで攻撃目標を変更せねばならない。ここでもイスラエル側はアラブの反撃をくじき、ついに退却に追い込む。7月16日、ナザレの町は降伏した。アラブ解放軍は支配地を大幅に縮小し、レバナン国境寄りに兵を引く。

中部戦線でもイスラエル国防軍は大攻勢に出て、トランスヨルダンの精鋭部隊・アラブ軍団に手痛い打撃を加えた。その結果、最前線が東へ大きく移動し、ユダヤ商工業の中心地テラヴィヴは危機を免れる。もはやアラブ側の砲弾は、ここまで届かない。しかし、勢いに乗ったシオン主義国家の軍勢も、エルサレム封鎖の解除にまたもや失敗した。五度目の正面攻撃にもかかわらず、ラトルンの堅塁をどうしても抜けない。

この攻勢でイスラエル国防軍の攻撃の矢は、まずラムレとロッドに向けられた。二つの都市はともに旧約聖書時代からの古い歴史を秘め、地中海の沿岸平

野を南北に貫く鉄道と主要道路が通っている。前者はテラヴィヴの南東二十キロに、後者はその北隣に位置する。ロッド郊外の飛行場は、欧州諸国と直接に航路で結ばれた空の要所だった。パレスチナ分割の線引きでは、いずれの町もアラブ領域に入っている。

休戦の期限切れと共に、イスラエル軍は従来の歩兵部隊に加えて、新編成の機甲旅団と機動突撃隊を投入し、三日間の戦闘で二つの町を陥れた。アラブ側の反撃は、ことごとく撃退される。これで作戦の第一段階は成功裏に終わった。もはやテラヴィヴはアラブ側の直接攻撃、あるいは長距離砲撃の危険にさらされることはない。

第二段階でイスラエルは要衝ラトルンを攻撃し、エルサレムに向かって強行突破を試みた。だが、アラブ軍団は兵力をラムレとロッドの救援に分散せず、むしろラトルンに集中して守りを固める。この戦場でイスラエルの機甲部隊は守備側の対戦車砲で打ちのめされ、随伴の歩兵は攻撃を続行できずに退却した。一方、小兵力の特別攻撃隊がエルサレム旧市街の城門に迫ったが、ここでも撃退される。

南部戦線でも他の戦場と同様に、いや、それ以上の激しさで、イスラエル国防軍とエジプト遠征軍が激突した。前者がネゲヴ砂漠の開拓農園を孤立状態から救おうとすれば、後者は地中海岸のガザと内陸部の占領地ベエルシェバを結ぶ連絡路を切断されまいと反撃する。シオン主義国家の正規軍は積極的攻勢に出て、ベルナドット調停案——ネゲヴ砂漠のアラブ帰属——の実現阻止に懸命となった。

十日間に及ぶ激戦の末に、イスラエルの軍勢はエジプト遠征軍の支配地を中央突破し、北ネゲヴ地方に一筋の連絡路を開く。しかし、後者はエルサレム攻防戦の前例にならい、急いで迂回路を建設して前者の意図を出し抜いた。南部戦線の戦況は痛み分けに終わり、どちらも決定的に優勢な地歩を固め得なかった。だが、損害の大きいエジプト軍は心理的に劣勢となり、受け身の防御態勢に転ずる。

国際連合は再び戦火を消し止めるために仲裁に入り、7月18日に第二次休戦が成立する。旬日の激突は戦争の様相を一変し、イスラエルの軍事的優勢を立証した。とくに航空戦力は目覚ましく強化され、カナダ、アメリカ、南アフリカ国籍のユダヤ教徒の復員軍人が義勇兵として戦闘機や爆撃機に搭乗し、第二次世界大戦の空中戦で鍛えた技量を活用する。開戦時、イスラエルの航空機は連絡用の単発機だけだったが、いまや四発の重爆撃機がカーヒラ、ディマシュク、アマーンなどアラブ諸国の首都に爆弾を投下するに至った。エジプトは報復爆撃を恐れて、テラヴィヴ空襲の停止に追い込まれる。²⁵

ベルナドットは新しい軍事局面を勘案しながら、再び和平の樹立を模索する。迂回路の建設で西エルサレムが命脈を保っているからには、聖都をアラブ側に引き渡す最初の案を改め、新旧市街を共に国際管理下に置く。イスラエルが奪取したラムレとロッドはアラブ側に返還されるが、ロッドは空の連絡路の重要拠点として国際連合の手に委ねられる――と。ただし、ネゲヴとガリラヤの交換は、以前の構想と変わらなかった。

ベン＝グリオンは強硬姿勢を示し、ベルナドットの和平提案に強く反対する。西エルサレムはイスラエルと不可分であり、国際連合にも支配を任せられない。中部戦線で獲得した土地は、テラヴィヴの安全保障に不可欠で、アラブへの返還など論外である。

またイスラエルとしては、ネゲヴを手放すことは絶対にできない。現在のところ、ここは乾いた荒野でも、ゆくゆくは灌漑によって緑の沃野に転じ、新規移住者の定住に必要な空閑地である。その南部はアカバ湾から紅海へ、さらにインド洋に通ずる海の玄関口として、ぜひとも確保しなければならない。この砂漠の帰属をめぐる、ヴァイツマンがトルーマンを説き伏せた経緯があるだけに、ベン＝グリオンは高飛車な態度に出た。

イスラエル国内では、反ベルナドット感情が急速に高まる。国際連合の調停官はアラブ寄りであり、英国の手先に他ならない。もともとパレスチナの分割に反対で、いまや不当な和平案を無理やり押し付ける――と。外務省の高官は調停官を介在させず、アラブ側との直接交渉を企む。新聞は政府の意向を代弁して、ベルナドットの任務を解除せよと主張する。和平の仲裁役はアラブとユダヤの双方を円卓会議に招き、さらに大国の了承を取り付けるために東奔西走したが、ついに努力が実ることはなかった。

ベルナドットを ユダヤ側が暗殺 1948年 9月17日、ベルナドットはエルサレムでユダヤ過激派に襲撃され、同行のフランス人の職員と共に射殺される。三人の犯人は旧英政庁の国連現地事務所近くで調停官の一行を待ち受け、乗ってきたジープで道をふさぐと、ベルナドットの乗用車に銃弾を浴びせ掛けた。目的の達成後、刺客たちは直ちに現場から逃亡し、一人も逮捕されなかった。

この暗殺事件は国際社会に強い衝撃を与え、イスラエルの立場を窮地に陥れる。だが、この機会にベン＝グリオンは過激派の武装集団に対して最終的に解散令を発し、国防軍に武器を引き渡すよう命じた。粛清の嵐は新国家の全土を吹き荒れ、過激派レヒの幹部と構成員の約二百人が拘留される。その結果、臨時政府は国防軍の基盤を固め、文民支配の強化に成功した。²⁶

エジプト 安全保障理事会の第一次休戦決議は四週間の期限付きだった
軍の敗北 たので、満期と同時に戦闘が再開される。その苦い教訓から第二次休戦は期限を切らず、双方に「パレスチナにおける将来の情勢の平和的調停が達成されるまで」銃を収めるよう求めた。しかし、戦争でも平和でもない休戦状態が長引けば長引くほど、イスラエルは苦境に立たされる。少ない人口も、乏しい資源も、すべて戦争のために動員されたので、やがて経済は破綻するだろう。

さらに第一次休戦の条件——兵役適齢期の移民の処遇、武器の輸入禁止——は引き続き有効で、やがてイスラエルの優勢を覆しかねない。ベン＝グリオンは短期決戦の決意を固めた。ネゲヴ砂漠の帰属は和平会談でなく戦場で決する——と。シオン主義国家の軍勢は着々と戦闘準備を整え、南部戦線に兵力を集中した。後は攻撃の機会を窺うだけである。

第二次休戦が成立してから、国際連合は人道的配慮から北ネゲヴのユダヤ開拓地に一定の補給を認めた。それは生活必需品に限り、武器弾薬を除くことはいうまでもない。しかし、イスラエル側は国連監視員の配置を妨げたばかりか、休戦に基く交通の自由を主張して、ひそかに軍需品を孤立状態の武装農園に運びこむ。エジプト軍は敵陣の防備強化に我慢ならず、イスラエルの輸送隊に射撃を加える。

これこそ待ちに待った事態で、ベン＝グリオンは絶好の口実を得た。イスラエル軍は戦闘再開の用意万端を整えていただけに、海陸空の三方から総力を挙げてエジプト軍に襲いかかる。10月15日から22日までの八日間に、ネゲヴ地方の軍事地図は大きく塗り変えられた。攻撃側は開拓地の包囲網を破ったばかりか、逆にエジプト軍の一箇旅団を孤立させる。²⁷ 砂漠の要衝ベエルシェバもイスラエル軍の手に落ち、エルサレムは南からの脅威を免れた。

またもや安全保障理事会は交戦国に停戦を命じ、イスラエルに攻撃開始以前の最前線まで撤兵するよう要求する。だが、ベン＝グリオンは勝者の立場から、この決議に耳を傾けようとしなかった。それどころか、エジプトを決定的敗北に追い込むため、次の作戦準備を命令する。軍事的勝利こそ、ネゲヴの命運を決するだろう。十月攻勢の成果は、まだまだ不十分だった。

12月22日、イスラエルはエジプトに対して最大かつ最後の作戦を発動し、目覚ましい大勝利を収める。もはやシオン主義国家の国防軍は戦場を旧英委任統治領の内部だけに限定することなく、エジプト固有の領土のシナイ半島に深く侵攻し、敵軍の背後を衝く。カーヒラはパレスチナ遠征軍を包囲殲滅の危機から救うために、ついにテラヴィヴに和を乞わねばならなかった。

まず攻撃の矢はイスラエルの手中に落ちたベエルシェバから放たれ、途中の

抵抗拠点を無力化しながら敵地を大きく迂回し、エジプト軍の後方基地に迫った。次の攻撃の矢は解放されたばかりの北ネゲヴ砂漠の開拓地から射られ、地中海沿岸沿いにテラヴィヴへ向かう交通路の切断を狙う。

作戦の意図は的中した。イスラエル軍の先鋒部隊はシナイ半島の最大の町エル＝アリシュに迫り、包囲網の口を閉じようとした。パレスチナのエジプト遠征軍は補給も増援も絶たれ、総崩れの危機に直面しかねない。安全保障理事会は即時停戦とイスラエル軍の撤兵を決議したが、この和平の呼び掛けは勝ち誇る軍勢の耳に届かなかった。

だが、思いがけぬ方面から横槍が入り、対エジプト作戦は終了する。1949年の元旦、駐イスラエル米国大使はシオン主義国家を未承認の英国政府に代わり、ランダンの最後通牒を伝達した。イスラエルがシナイ半島から撤退しなければ、英国は1936年に締結の条約に基づいて、エジプトを救援せねばならない——と。ベン＝グリオンは外交上の配慮から、渋々ながらエル＝アリシュ攻略戦の中止と越境中の全軍の引き揚げを命令した。²⁸

国連斡旋の 停戦会談 ベルナドット調停官の提案したガリラヤとネゲヴの交換は、もはや和平論議の対象となり得ない。イスラエルはエジプトに止どめを刺す前に、このパレスチナ北辺のアラブ領域を自力で奪取したからである。イスラエル軍の攻撃で7月にイエスゆかりのナザレが陥落した後も、ゲリラ組織のアラブ解放軍はレバナン国境の南側に支配地を保持していた。10月28日夜、イスラエル国防軍は東と西からアラブ領域に侵攻し、このゲリラ部隊を包囲の袋に閉じ込めようとする。

北部戦線で戦火が再燃したのは、イスラエルがエジプトに攻撃をかけた一週間後のことだけに、シリアとレバナンの両国を驚かせた。シリア軍が救援に向かったところ、待ち伏せの罠に掛かって大損害を出す。アラブ解放軍は包囲から逃れるため重火器を放棄して敗走し、ゲリラ組織として完全に壊滅した。小兵力のレバナン軍ではイスラエル軍の猛攻を支え切れず、自国の領土内に退却するしかない。

イスラエル軍はアラブ領域を征服した後、勢いに乗ってレバナンへ越境攻撃を加え、リタニ川以南の国境線沿い地帯を占領した。将来、これは停戦協定の取り引き材料となる。イスラエルは北部戦線の戦闘を三日間で片付けたが、シリア軍の橋頭堡だけ手つかずのまま残る。

シオン主義国家との力関係が不利になる一方で、アラブ陣営は支配領域の前途について内部対立を深める。10月1日、アラブ連盟に加盟の親エジプト諸国の後押しで、フセイニの支持者たちはガザの町に集まり、〈全パレスチナ政府〉の樹立を宣言した。この動きに対抗して、二カ月後の12月1日、反フセイニ家

の地方名士は死海近くのエリコで会議を開く。そしてパレスチナのアラブ領域をトランスヨルダンに併合するよう決議し、さらにアブダッラーを統一国家の元首に推戴した。

同じ日、トランスヨルダンとイスラエルとの間の二国間の休戦が発効し、事実上、アブダッラーはシオン主義国家打倒の戦争から手を引く。これでイスラエルは後顧の憂いなく兵力を南部戦線に集結でき、12月下旬の大攻勢でエジプトに最後の一撃を加える。ファルークの軍勢は孤軍奮闘したが、もう盟邦のどこにも援軍を頼めない。

ベルナドットの暗殺後、補佐役のラルフ・バンチが調停官代行となる。彼の斡旋により、エジプトとイスラエルとの間の停戦交渉は、1949年1月13日に地中海のロウダス島で始まり、2月24日、調印に漕ぎつけた。イスラエルは戦況を反映して北ネゲヴ地方を手中に収め、エジプトは地中海沿岸部に長さ五十韞、幅六～九韞の細長い土地を確保できた。アブダッラーの意に反して、このガザ地帯はハーシム家の王国の領域に含まれず、エジプトの軍政下に置かれる。

ベン＝グリオンはファルークの軍勢を打ち破っただけで満足せず、次にネゲヴ全域の併合をめざす。その頃、アマーンはテラヴィヴと和平交渉を始めていたが、南ネゲヴの領有を主張した。相手がアラブ諸国の中で最もシオン主義国家に協調的とはいえ、その要求はイスラエルに受け容れられない。ベン＝グリオンは交渉対象地の武力による実効支配を意図し、国防軍に三箇旅団の派遣を命令する。

アブダッラーの軍勢は砂漠のあちこちの哨所に兵員を配置していたが、戦争の大勢がすでに決ただけに、無益な流血を回避して撤収する。イスラエルの遠征軍は抵抗らしい抵抗をうけることなく、荒野、岩山、渴れ川を越えて進軍し、1949年3月10日、ついにアカバ湾に到達した。ここに人工港のエイラトが建設され、アジアとアフリカに海の門戸を開く。²⁹

第一次中東戦争は、アラブ側の惨敗に終わった。イスラエルは交戦国と個別に交渉をすすめ、別々に停戦協定を締結する。エジプトに続いて、3月23日にレバナンが、4月3日にはトランスヨルダンが、そして最後に7月20日にシリアが調印した。イラクだけは協定を結ばずに、同じハーシム家の統治下のトランスヨルダンに後事を託してパレスチナから兵を引く。

レバナンが早期調印を望んだにもかかわらず、停戦会談は予想以上に難航した。イスラエルが越境中の部隊を引き揚げる見返りに、レバナン国内からシリア軍の撤退とユダヤ領域内のシリア軍陣地の撤去をからめたからである。しかし、バンチの政治力は交渉を妥結に導き、ようやく調印の運びとなった。両国間の国境は従来通りの境界線とし、両側に非武装地帯を設けた。

トランスヨルダンが停戦協定の調印に際し、パレスチナ分割決議によるアラブ領域（ガリラヤ地方とガザ地帯を除いたヨルダン川の西岸全域）の併合について、イスラエルから暗黙の了解を得る。ただし、両国間の境界線の調整用地として、イラク軍の撤退する地域の一部をイスラエルに譲らねばならなかった。聖都エルサレムの旧市街は引き続いてアブダラーの支配下に置かれ、新市街とは無人地帯で隔てられる。

シリアは停戦成立の条件として、イスラエル領内の陣地を維持したかった。その正規軍がガリラヤ湖畔の戦闘で一敗地に塗れただけに、何とか敵地内に足掛かりを残して、体面を保ちたかったからである。だが、最後にバンチの調停を受け入れ、それを含めた国境沿いの土地を非武装地帯とすることで、交渉に決着をつける。二十年後、そこは新たな紛争の発火点となるだろう。

イスラエルは第一次中東戦争に勝ち抜き、神の約束の地にユダヤ国家の基盤を固めた。アラブ諸国との個別的停戦協定は、やがて包括的平和条約の締結に至るだろう——と、当のイスラエルはもとより、欧米諸国も楽観論を抱く。しかし、アラブ陣営は内部に矛盾をはらみながら、シオン主義国家を決して認めようとしなない。

この戦争で多数のパレスチナ住民が離散の民と化し、先祖伝来の地から追い立てられた。アラブ諸国はパレスチナの大義を実現できぬまま、同胞の窮状を無視して、イスラエルと講和することができようか。この難民問題は次の戦乱を呼び起こし、さらに新しい難民を生み出す悪循環に陥る。

〈第六部の註と参考文献〉

1 パレスチナ出身の国際法学者ヘンリ・カッタンは次の理由から、イスラエル独立の法的根拠に疑義を投げかけている。独立宣言は、「在パレスチナのユダヤの民と世界シオン主義会議を代表する」国民評議会の構成員によって発せられた。しかし、古くからパレスチナに在住の正統派ユダヤ教徒は、政治的シオン主義国家の樹立に反対だった。英国の委任統治時代に不法移民が激増した結果、1948年に正規のパレスチナ市民権を保持する者は、ユダヤ人口の三分の一を占めるに過ぎない。在パレスチナのユダヤ教徒の大半は聖地に流入したドイツ、ポーランド、ルーマニア、チェコスロヴァキアの国民で、市民権はもとより政治的権利を持たず、まして独立を宣言する権限も権威もない。さらに世界シオン主義会議のごとき外国の団体は、パレスチナに国家を創建する法的能力も資格も有しない。したがってイスラエル独立の当事者は、国際法の下でパレスチナに関して何の支配力もなく、その宣言自体が無効である——と。〔Henry Cattan, Palestine and International Law: The Legal Aspects of the Arab-Israeli Conflict (London: Longman, 1973年)、87~87頁〕

1988年4月20日付の英字紙『エルサレム・ポスト』は、建国四十周年の記念付録にイスラエル独立宣言の英訳を掲載した。ところが、その文面は1948年5月16日付の『パレスチナ・ポスト』(同紙の前身)に掲載された記事の表現とはかなり異なっている。ベン＝グリオンが朗読した独立宣言の中の「パレスチナ」の代わりに「エレッツ・イスラエル」を用い、「アラブ国家」や「二つの国家」の語句が消えている。〔平山健太郎「改変されたイスラエル建国宣言」『中東研究』1988年12月号、19頁、23頁〕

イスラエルの建国を報じた『パレスチナ・ポスト』の紙面はプラスチック製の盆に印刷され、イスラエル国内や占領下の西岸で観光土産として売られている。ベン＝グリオンが読み上げた独立宣言の主要箇所は、記事の中で次の通り引用されている。

1947年11月29日、国際連合はパレスチナにユダヤ国家とアラブ国家の樹立を決定し、この国土の住民に二つの国家の建国に必要なあらゆる措置を取るよう求めた。

国際連合総会のパレスチナ分割決議によって、ユダヤ国家のイスラエルは建国されたが、アラブ国家はついに誕生しなかった。だが、『エルサレム・ポスト』の英訳を読む限り、国際連合はユダヤ国家の建国だけを認めたかのように誤解される。また、パレスチナとは旧英委任統治領を指すが、エレッツ・イスラエルはダヴィデとソロモン時代の版図を意味し、現代の近隣アラブ諸国に食い込む。

2 イスラエルは米国から法的承認を得るには、1949年1月の第一回総選挙まで待たねばならなかった。独立後間もなくユダヤ国家は一億ドルの経済援助を米国に要請したが、国務官僚は法的承認を与えるまで借款の供与を保留した。〔Steven L. Spiegel, The Other Arab-Israeli Conflict: Making America's Middle East Policy, from Truman to Regan (Chicago: The University of Chicago Press, 1985年)、38頁、40頁〕

3 米務省が分割に代わって信託統治を提案したのは、一つにはソ連の介入の排除を狙ったからである。ソ連は信託統治理事会に所属していないので、この案が実現するならば、パレスチナ問題の討議から締め出される。さらに信託統治はユダヤ国家の樹立を阻止し、その結果、米国とアラブとの仲違い、ひいては中東の戦乱を回避できるだろう——と。このような筋書を、米務省の官僚は作成した。〔Steven L. Spiegel, 前掲書、35頁〕

4 もしもユダヤ機構が米務省の圧力に屈して、イスラエル独立宣言の発表を延期する事態に至れば、イルグーンは独力でも独自の政府樹立の決意を固めた。〔Samuel Katz, Days of Fire: The Secret Story of the Making of Israel (Jerusalem: Steimatzky's Agency, 1968年)、225頁〕

5 イスラエル承認の噂が国際連合の議場に伝わった際、米国代表団は何も知らされずにいたので、この情報を一笑に付す。ところが、通信社の速報が届いたので、キューバ代表は「ポウランドやソ連政府の方がウォシグタンの出来事を良く知っている」と述べて、米国代表団を嘲った。この島国の代表は米国の二枚舌外交に憤慨のあまり、国際連合から脱退すると息巻き、米国代表団に腕尽くで取り押さえられ、昇壇できなかった。この一騒動の後、米国代表は壇上でトルーマン大統領の決定を読み上げる。それはホワイトハウスから正式に届いた文書ではなく、事務総長が紙屑籠に捨てた通信社の電信印刷機の巻取り紙の切れ端だった。米国代表団が大統領に対する抗議の意志表示として集団辞職するのではないかと、マーシャル国務長官は真剣に憂え、一時は慰留工作のために米務省の高官を国際連合の議場に急派しようかと本気で考慮するほどだった。〔Michael J. Cohen, Pal-estine and the Great Powers, 1945-1948 (Princeton: Princeton University Press, 1982年)、386~387頁〕

6 第二次世界大戦中の1941~1942年、独伊軍の戦車部隊がリビアからエジプトに向かって進撃すると、一般国民だけでなく職業軍人の間にも親独反英感情が高まった。前陸軍幕僚長の退役将官がドイツ側に逃亡を試みたとの容疑で、軍法会議にかけられる。のちに大統領となるアンワル・エッ=サダートは若手の将校で、ひそかにドイツ軍と連絡を取ろうと企てたが、失敗に終わった。エジプト政府はファルーク国王の賛同を得て、枢軸側との衝突を避けるため軍隊を国境地帯から撤収する(当時、カーヒラはまだベルリンとローマに宣戦を布告せず、エジプトは法的には中立国だった)。英国はスエズ運河防衛のために大童ただけに、この事態を看過できず、ファルーク国王に最後通牒を突き付けて、反英的首相の更迭と親英派の首班任命を迫った。〔Raphael Israel, Man of Defiance: A Political Biography of Anwar Sadat (London: Weidenfeld and Nicholson, 1985年)、16~17頁〕

なお、エジプトが正式に連合国側に立ってドイツと日本に宣戦布告するのは、大戦も終わり近い1945年2月のことで、それも国際連合への参加資格を得るためだった。

7 1921年、ヨルダン川の東岸の砂漠に、アブダッラーの権威の下にトランスヨルダン首長国が成立する。しかし、各地の部族は首都アマンの威令に必ずしも従わず、しばしば叛乱を起こした。そのため英国が財政援助を与え、治安部隊を創設する。当時のパレスチナ高等弁務官の強い主張により、英国人の将校が指揮を執ることになった。当初、その将兵は七百五十人にすぎなかったが、第二次世界大戦の末期には八千の兵力を擁するまでに拡大する。第二代司令官のジョン・バゲット・グラブはパシャの称号を与えられ、砂漠

の部隊を国内の治安維持から連合側側の補給線の後衛に、さらには国外に派兵されるほどの戦闘能力を持つ精強軍団に仕立て上げた。東はテアラーン、西はカーヒラまでの広い地域で、アラブ軍団は橋、港、鉄道、軍需物資集積所、石油輸送管の警備を任務とし、イラクとシリアでは親独派を相手に戦う。〔Y. T. Toni and Suleiman Mousa, Jordan: Land and People (Amman: Ministry of Culture and Information, The Government of Jordan, 1973年)、37頁、44頁、46頁〕

8 アブダッラーはシリアとレバノンをトランスヨルダンの支配下に置く前段階として、パレスチナの分割に乗じて国連決議の定めたアラブ領域の併呑をもくろむ。そして、ゆくゆくは同じハーシム家のイラクを含めた国家連合を形成して、肥沃な三日月地帯の統一を夢想した。〔George Lenczowski, The Middle East in World Affairs, Fourth edition (Ithaca: Cornell University Press, 1982年)、475頁〕

9 アブダッラー提案の骨子は、次の通りである。イスラエルが独立の宣言を延期する間、パレスチナは統一状態に置かれ、ユダヤ側は自治権を行使できる。一年後、旧英委任統治領はトランスヨルダンと連合し、「ユダヤ・アラブ王国」となる。そこでは国会議員と閣僚の半数は、ユダヤ側に割り当てられる——と。マイアスンがアブダッラーの提案をにべもなく拒否し、代わりに平和条約の締結を提案した後、トランスヨルダンによるアラブ領域の併合を認めた。〔Michael J. Cohen, 前掲書、334頁〕

10 サウード家の当主はシオン主義に対する敵意とハーシム家への対抗意識から、(パレスチナで)ユダヤ側が勝利を収め、アブダッラーがトランスヨルダンの領土を拡大するぐらいなら、むしろ英委任統治の継続を望む——と主張した。〔David Holden and Richard Johns, The House of Saud (London: Pan Books, 1983年)、143頁〕

11 1930年に締結された英・イラク条約は1957年まで有効で、長期にわたって両国間の関係を規定する。この条約はイラク政界に分裂をもたらし、常に紛争の根源となった。1947年、バグダードは期限満了まで十年の歳月を残しながら、ランダンと改訂交渉を始める。その意図は条約の片務性を除去することにより、国内の反対勢力の批判をかわすことだった。やがて交渉は進展し、英軍の撤退、英空軍基地の管轄権などの懸案事項で合意に達した。政府は使節団を英国に派遣し、1948年1月、ポーツマスで正式に調印する。ところが、野党陣営は条約交渉に際して事前の相談にあずからなかったため、改訂論議を国民の前に公開するよう要求した。知識層や一般大衆は単なる改訂でなく、不平等条約そのものの破棄を要求し、広範な反対運動を起こす。これには当時のパレスチナ情勢が深くからみ、国民の反英感情を募らせた。外相がランダンでイラクと英国の関係について発言した際、パレスチナに言及しなかったため、大学生は抗議行動に乗り出す。条約反対運動は反政府暴動に発展し、警察と群衆の衝突で多数の死者を出す。事態収拾のため幼い国王に代わって摂政が調印されたばかりの改訂条約を否認したので、首相は辞任に追い込まれた。

〔Phebe Marr, The Modern History of Iraq (Boulder: Westview Press, 1985年)、101~106頁〕

12 当時の写真によると、アラブ側のゲリラ戦士は弾帯を肩から脇腹にかけて襷状に懸けている。これから明らかなように、その主力兵器は旧式の単発銃だった。ただし、フェウジ・アル＝カワクジの率いるゲリラ組織は数門の野砲を保有し、アラブ諸国の正規軍が軍事介入する前の武力衝突で、ユダヤ農園を砲撃した。

その一隊はエルサレム近くに現れ、旧市街のユダヤ居住区に標準を定めたところで、英委任統治当局の強い圧力のために兵を引く。高等弁務官や軍司令官が英空軍機を出動させ、砲座に爆撃を加えると警告したからである。〔Michael J. Cohen, 前掲書、338頁〕

建国当時、イスラエル軍は九箇旅団を擁したが、その武器は不揃いで、実質的には砲兵も機甲部隊もなく、最大の火力は口径三インチの迫撃砲に過ぎなかった。〔Chaim Herzog, The Arab-Israeli Wars: War and Peace in the Middle East from the War of Independence to Lebanon (London: Arms and Armour Press, 1984年)、48頁〕

13 西欧諸国は米国とソ連にならって新生ユダヤ国家を承認しても、国際連合の武器禁輸決議を尊重して、イスラエルに兵器の売却を控える。ただ東欧のチェコスロヴァキア(1948年の政変でソ連の衛星国となる)だけが、公然と政府間協定に基づいて武器を供給した。また同国はイスラエルの操縦士、落下傘部隊に訓練場を提供した。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, The Israeli Army (London: Allen Lane, 1975年)、65頁〕

14 エジプト軍はテラヴィヴに進撃する途中、ガザ北方の開拓地ヤド・モルデハイを攻撃した。この農業共同生活体は、1943年、シオン主義左派のポウランド出身者の入植に始まり、大戦後は大虐殺から生き残った不法移民を迎え入れた。その名はワルシャワ・ゲットウの蜂起で死んだ二十二歳の同志にちなむ。百数十人の住民から婦人と子供を除けば、戦闘要員は十四歳の少年を含めても約八十人に過ぎず、その武器は数十挺の小銃と三千発の弾丸、二挺の機関銃、四百個の手榴弾、口径二インチの迫撃砲二門と五十発の砲弾、それに火炎瓶だけだった。激しい砲撃と爆撃の後、エジプト軍の歩兵は戦車と装甲車の支援の下で農園に突入を図り、そのたびに撃退されて大損害をこうむる。守備側も大半が死傷したが、六日間にわたってエジプト軍の一箇旅団(その指揮官の一人モハメド・ネギブはやがて軍事革命で首相、そして大統領になる)の前進を食い止めた。最後に開拓農民は入植地を放棄したが、この戦闘は軍事的にも政治的にも大きな成果をもたらす。エジプト軍はテラヴィヴに到達できず、ユダヤ国家は崩壊しなかったからである。〔Amos Elon, The Israelis: Founders and Sons (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、193~194頁〕

〔Margaret Larkin, The Six Days of Yad Mordechai (Yad Mordechai Museum, 1986年)〕
イスラエルの建国から四十年の歳月が過ぎた1988年5月、筆者はヤド・モルデハイ農場を訪れ、古戦場にたたずんだ。丘の上の塹壕には銃が据えられ、眼下の野原に散開するエジプト兵の人形に照準を定めている。農場の一隅には英国製の戦闘機と装甲車の残骸が展示され、往時の激戦をしのばせる。別の丘の上にはコンクリート製の貯水塔が弾痕をとどめて倒壊したまま保存され、その近くにワルシャワ蜂起の英雄モルデハイ・アナルヴィッツの巨大な像が建っている。

15 この空襲は爆弾の不発や機銃の故障のため、実際には大した戦果を挙げなかった。だが、イスラエルが航空戦力を保有しているとは予期されなかつただけに、エジプト遠征軍に絶大な心理的効果を及ぼす。この時の操縦士の一人エゼル・ヴァイツマンはシオン主義運動の長老、そして初代大統領の甥で、のちに航空隊総司令官、さらにベギン政権の国防相となった。〔Chaim Herzog, 前掲書、72~73頁〕

その後、ヴァイツマンはシャミル政権の無任所相を経て、大統領に就任した。

16 攻城戦の始まる前、エルサレム旧市街のユダヤ居住区には、三百人のハーガナー、イルグーン兵士と千五百人の民間人がいた。降伏時、戦闘配置に付ける兵士は三十六人に

まで減少し、残った弾薬は三百発しかなかった。籠城に耐え抜いた民間人の千百九十人は長い列をつくり、律法の巻物を捧げ持つラビ（ユダヤ教の律法学者）に従ってシオンの丘の斜面を下る。アラブ人の群衆は無人の居住区になだれこんで、略奪と焼き打ちを働いた。その結果、五十八のユダヤ教会堂が破壊された。〔Chaim Herzog, 前掲書、62頁〕

降伏後、住民は身の回りの品を包みにまとめ、退去口のシオン門に急ぐ。旧市街の狭い街路は避難民の群れでごったがえし、赤ん坊が押し潰されないために頭上に高く持ち上げねばならぬほどだった。道すがらアラブ人の群衆は同胞虐殺の流言飛語にいきりたち、聖都から追い立てられるユダヤ難民を脅かす。警備のトランスヨルダン兵は退去中のユダヤ住民の保護どころか、彼らの手から包みを奪い取った。〔Leah Abramowitz, “The Other Refugees”, *The Jerusalem Post*, International edition, 1987年10月17日付〕

この文章は、次の本の書評である。〔Puah Shteiner, *Forever My Jerusalem* (Jerusalem: Feldheim Publishers)〕

17 ベン＝グリオンは高級幕僚の反対を押し切り、ラトルンの警察砦に対する正面攻撃を主張した。五回にわたる反復攻撃にもかかわらず、イスラエル側はこの要衝を奪取できず、七百人以上の戦死者を出す。その数は第三次中東戦争（1967年の六日戦争）の犠牲者に匹敵した。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, 前掲書、64頁〕

1988年5月、筆者はラトルンを訪れ、四十年前の決戦に想いを馳せた。5月の半ば、ここでは既に真夏の暑さで、熱風がそよぐと、緩やかな傾斜地の麦畑は黄金色の波のように揺れ動く。この地は古い修道院の所在地として知られ、一筋の街道が丘の裾を巡って、エルサレムに通じている。この牧歌的な田園が血腥い戦場だったとは、現在の静かなたたずまいから信じられない。警察砦の廃屋は丘の上であり、コンクリート造りの堅固な建物は、ところどころに砲弾の直撃で大穴をあけられ、外壁に無数の弾痕をとどめている。その屋上に高く、ダヴィデの星のイスラエル国旗が翻る。砦から眺めると、畑の中に数台の戦車が放置されている。アラブ軍団はここに立て籠り、イスラエル軍の装甲部隊と歩兵の突撃を撃退した。その時以来、戦車は激戦を後世に伝える証拠として、擱座した場所から動くことはない。

イスラエル軍が甚大な損害にもかかわらず警察砦に反復攻撃を加えたのは、アラブ軍団によって遮断された街道の交通を確保するためだった。当時、この幹線道路は西エルサレムの生命線だったが、現在は行き交う車の数が大幅に減ってしまった。高速道路が激戦地の丘の向こうに建設され、地中海岸の大都会テラヴィヴと内陸の聖都エルサレムを結ぶようになったからである。

現在、警察砦の庭は野外の戦争博物館になっており、さまざまな種類のソ連製戦車を展示している。過去の中東諸戦争でアラブ側から捕獲した戦利品で、イスラエルの勝利を誇示する。庭の一角、コンクリート製の高い台座の上に、一台の旧式戦車が載っている。ラトルン攻防戦の記念塔である。そこに野鳩が巣を作り、戦いの空しさを訴えるかのように、しきりに鳴いていた。〔大石悠二「麦秋の古戦場 ラトルンの激戦から四十年」『ヴァンガード』1988年9月号〕

18 第二次世界大戦中、連合国側は中国に軍事援助を送るために、日本海軍の沿岸封鎖を出し抜き、バーマから補給用の道路を建設する。この迂回路は遠いアジアの先例にちなんで〈バーマ公路〉と呼ばれ、第一次休戦の直前に完成した。この休戦は現状維持を目的と

し、成立後は物資の輸送ができない（包囲下の西エルサレム住民に向けて、国際連合の監視下、生活必需品の輸送が認められたが、中身はラトルンでアラブ軍団に点検された）。

しかし、イスラエルは突貫工事で建設されたばかりの間道経由で、民間用の補給物資だけでなく、軍需品や増援部隊を送り込んだ。〔Chaim Herzog, 前掲書、67~68頁、74頁〕

19 激戦地のデゲニアはガリラヤ湖からヨルダン川が流れ出す辺りに位置し、最初のキブツが建設された場所である。後のイスラエル国防軍幕僚長、国防相のダーヤーンは、この地に生まれ、この地で戦う。開拓農園はシリア軍の戦車の攻撃で防衛線を突破されかけたが、土壇場で危機を打開する。増援部隊が湖畔の戦場に大砲を運びこみ、砲撃でシリア軍の兵士を驚かせて、ついに退却に追い込んだからである。〔Moshe Dayan, Story of My Life (London: Sphere Books, 1978年)、19頁、91~96頁〕

20 ソ連はベルナドットの出身国の中立主義を評価し、その政府と同じ路線の堅持を新任の調停官に期待した。米英両国は彼個人の反共姿勢に好感を持ち、ソ連に対する抑止的役割を当て込む。イスラエルは別の理由から、新任の調停官に幻想を抱く。第二次世界大戦の末期、彼がナチ・ドイツと交渉してユダヤ教徒の捕虜釈放に尽力したので、シオン主義国家に同情を寄せてくれるだろう——と。〔Saadia Touval, The Peace Brokers: Mediators in the Arab-Israeli Conflict, 1948-1979 (Princeton: Princeton University Press, 1982年)、26頁〕

1945年 4月、ドイツ第三帝国の敗北が目前に迫った時、ベルナドットは訪独し、秘密警察長官のハインリヒ・ヒムラルに会う。スウェーデンと同じスカンディネイヴィア国家のデンマークとノーウェイは、大戦中、ドイツに占領されていた。彼が両国出身の捕虜（ユダヤ教徒も含む）の釈放を交渉すると、ヒムラルは西部戦線で米英軍に降伏、東部戦線でソ連と戦争継続の単独和平案を切り出した。〔Alan Bullock, Hitler: A Study in Tyranny (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、790~791頁〕

この経歴からも、ベルナドットは調停官として戦時交渉能力を期待された。

21 ヤハウェの信徒のパレスチナ移住は、シオン主義の立場から、単なる移民にとどまらず、神の約束の地への〈帰還〉に他ならない。1950年、イスラエル国会（クネセト）は満場一致で「帰還法」を可決し、第一条で現在の国籍を問わず、「すべてのユダヤ教徒はイスラエルへ移住する権利を有する」と宣言した。

22 国際連合のパレスチナ分割決議は、英委任統治領に独立のアラブ、ユダヤ国家の樹立を想定し、さらに両国で経済連合を形成するよう定めた。ベルナドットは和平達成の基礎として、次の通り国連決議の変更を提案する。すなわち、広義のパレスチナ（トランスヨルダンが分離する前の状態）にアラブ・ユダヤ連邦を樹立し、共通の経済利益の推進、公共諸事業（電報、郵便など）の運営、外交と国防の調整を委ねる。だが、二つの構成単位は、それぞれの分野で完全な支配権を行使できる——と。換言すれば、アラブ領域はアブダラーの王国に併合されてから、ユダヤ国家と連邦を形成する。さらに移民問題に関しては、当初の二年間は双方の専管事項とし、その後は両者の合意による。意見の相違がある場合、問題は信託統治理事会に提出され、その決定は拘束力を持つ。このベルナドット構想をめぐる、アラブ連盟の大勢はトランスヨルダンだけに有利との理由から、イスラエルは移民問題に関する国家主権の観点から、それぞれ反対を唱えた。〔Saadia Touval, 前掲書、31~32頁〕

23 第一次休戦の成立した時、イスラエル側の武器と弾薬の不足は深刻化しただけでなく、一部の兵士は軍服もなければ軍靴もなく、パジャマ姿に裸足の有り様だった。6月15日、最初の船がイスラエルの港に到着し、貴重な軍需物資をもたらす。その積み荷の内訳は、口径七十五ミリの大砲が十門、六十五口径砲が十九門、フランス製の旧式戦車が十台、高射砲が四門、砲弾が四万五千発だった。その後も、大砲、機関銃、自動小銃の武器のほか、ジープ、トラック、ハーフトラック（装甲兵員輸送車で、後輪部分が無限軌道）の車輛、爆撃照準器、爆薬の原料、対戦車ロケット砲を製作する工作機械など、あらゆる軍用物資と資材が続々と運びこまれる。当時のイスラエルの港には重量物陸揚げ用の起重機がなかったので、それも大至急で調達された。〔Larry Collins and Dominique Lapierre, 0 Jerusalem! (London: Crafton Books, 1986年)、545~546頁〕

24 アラブ側は総人口ではイスラエルを圧倒したが、戦場に投入できる将兵は二万一千五百人に過ぎなかった。これに比べると、イスラエルの動員兵力は四万から六万人の間と推定された。〔Peter Mansfield, The Arabs (Harmondsworth: Penguin Books, 1979年)、280頁〕

ベン＝グリオンの日記によると、開戦日の5月15日、自警団のハーガナーだけでも二万九千六百七十七人の兵員を擁した。第一次休戦の成立した7月19日には、イスラエル国防軍の兵力は六万を超えた。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, 前掲書、34頁、42頁〕

25 イスラエルは米空軍払い下げのボーイングB-17爆撃機を闇市場で入手し、チェカスロヴァーキア経由で回送する。これは〈空飛ぶ要塞〉とも呼ばれ、第二次世界大戦中にドイツの都市爆撃に猛威を振るった。この大型飛行機は爆弾をシオン主義国家まで運ぶはずだったが、直前に予定を変更してカーヒラまで遠回りし、二トン半の積み荷を投棄した。実際の被害は軽微だったが、エジプトに心理的動揺を引き起こす。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, 前掲書、66~67頁〕

26 イスラエルの建国後、イルグーンの指導者ベギンはベン＝グリオンの臨時政府と国防軍の権威を認めた。しかし、この過激派武装集団は国防軍の中核となったハーガナーとは英委任統治時代に対立関係にあり、新国家の正規軍に吸収されても簡単に融和できない。第一次休戦の最中、旧米海軍の上陸用舟艇がフランスからパレスチナの浜辺に到着する。この船は米国の親イルグーン団体が寄付し、フランス政府贈与の武器弾薬を満載していた。臨時政府は積み荷の引き渡しを要求し、ハーガナーと武力対決も辞さない。国防軍はベン＝グリオンの命令で輸送船を砲撃し、数千のテラヴィヴ住民の面前で大破・炎上させた。この危機の最中、臨時政府は国防軍以外の武装勢力を禁止し、全戦闘員に新国家へ忠誠を誓うよう命じた。しかし、エルサレムはアラブ軍団の攻撃で孤立状態に陥っていたので、イルグーンなどの武闘集団は解散せずに組織を維持する。ベルナドットの暗殺後、臨時政府はイルグーンに最後通牒を突き付け、組織の解体、武器の没収、全員の国防軍編入を要求した。ベギンはベン＝グリオンの強硬姿勢に屈し、内戦を回避する。〔Samuel Katz, 前掲書、232~238頁、272~280頁〕〔Eric Silver, Begin: A Biography (London: Weidenfeld & Nicolson, 1984年)、97~109頁〕

27 イスラエル軍はファルルージャでエジプト軍の部隊を包囲し、武器を置くよう勧告した。やがてエジプト大統領、そしてアラブ民族主義の旗手となるジャマル・アブダルナーシル中佐は敵の軍使と応対し、降伏の要求をきっぱりと断った。〔Robert Stephens,

Nasser: A Political Biography (Harmondsworth: Penguin Books, 1973年)、81頁]

28 当時、カーヒラが1936年に締結の英国・エジプト条約の改訂を要求して لندنと対立を深めていただけに、条約そのものは破棄されたも同然だった。しかしながら、条約の文言に従えば、エジプトが攻撃された場合、英国は救援の義務を負う。英空軍がシナイ半島の上空にスピットファイヤ戦闘機を送ると、哨戒中のイスラエル機がその四機を撃墜する。(将来のイスラエル航空隊総司令官、国防相、そして大統領のヴァイツマンは、この空中戦に参加した。) さらに英空軍は対空砲火で一機を失ったばかりか、行方不明の僚機を捜索中の飛行機まで射ち落とされた。この武力衝突をめぐる英国の反応が激烈だったので、イスラエルは停戦に応ずる他なかった。〔Chaim Herzog, 前掲書、101~104頁〕

29 前年の1948年12月1日からトランスヨルダンがイスラエルと事実上の休戦状態に入り、さらに正式の停戦交渉を継続中だったので、この海岸に駐屯中のアラブ軍団の小部隊は戦わずに哨所を引き払う。その撤退の二時間後、イスラエル軍の部隊が到着し、シオン主義国家の支配確立を示すために、ダヴィデの星の国旗を掲げた。〔Chaim Herzog, 前掲書、104頁〕

海岸線の長さは約十キロで、付近にソロモン時代の鉱山の遺跡があり、旧約聖書の時代、シーバの女王はエルサレム訪問の際、ここに上陸したと伝えられる。現代のエイラトは常夏の保養地で、同時に石油の輸入港として重要な役割を果たしている。その高層ホテルや巨大な石油貯蔵槽は、ヨルダン側のアカバから望見できる。

この人工港に通ずるティラーン海峡は、その封鎖をめぐる、二度もアラブ・イスラエル戦争の原因となった。

第七部

アラブ民族主義の盛衰

28 中東政治地図の変貌

二十世紀の十字軍国家 第一次中東戦争の敗北でアラブ諸国は苦い屈辱感を味い、国民の間に強い反欧米感情が高まった。当時の国際社会は国際連合の権威を楯にパレスチナの分割を強要し、現地住民の希望を、そして近隣諸国の同胞の声を無視した。かつて英仏の西欧帝国主義列強は密約でオスマン・トルコ帝国の領土を解体し、シリアの南部地方の聖地にシオン主義者の大量移住を認めた。今度は新興の超大国——米国とソ連が別々の思惑からユダヤ国家の独立に賛同し、アラブの軍事攻勢を挫くために物心両面の支援を惜しまない——と。

シオン主義運動がユダヤ国家再興の念願を達成した時期は、第二次世界大戦中にヒトラーとドイツ国家社会主義の犯した虐殺の大罪が明るみに出た直後のことだった。欧州のキリスト教社会は積極的にイスラエルの建国を支持することにより、千年にわたる反セム主義の歴史の免罪符を買おうとする。この時代風潮の中で、ユダヤ国家に批判めいた言動をとれば、たちまちナチズムの支持者と同一視されかねない。

欧州諸国の少数派信仰集団は昔から差別の対象となってきたが、ここで従来の圧迫者側からにわかに同情を集める。各国の復員兵士の間には青春を兵営と戦場で過ごした結果、戦後の生活に適応できぬ者も少なくなかった。ある者は純粋な同情心から、別の者は冒険の機会を求めて、さまざまな動機から義勇兵や傭兵としてシオン主義の陣営に馳せ参じる。政府や武器商人は中東の一角に恰好の市場を見付け、平和の到来で不要になった大量の中古兵器を売り込んだ。新生イスラエルは欧米諸国から物心両面の援助を得て、独立戦争に勝利を収めた。

アラブの立場から見れば、イスラエルは現代の十字軍国家になぞえられよう。十一世紀の末、欧州からの侵略者はエルサレムを占領し、アラブの地の一隅に神権国家を樹立した。二十世紀のそれは西欧の植民地主義から派生し、聖地に帝国主義の飛び地を築く。十九世紀以降、西アジア、北アフリカは欧州のクリスチャン列強に徐々に蚕食され、その強大な軍事力の前に従属を強いられた。この不利な力関係の下で、欧州のキリスト教社会は積年の反セム主義の過ちを償うために、そして第二次世界大戦中にナチ・ドイツによるユダヤ教徒の大量虐殺の阻止に有効な手段を取らなかった心理的負い目の埋め合わせのためにも、中東のイスラーム社会に一方的な犠牲を強要している——と。

再興ユダヤ国家のイスラエルは、人口の大半が欧州からの移住者、その子孫で構成された。周囲とは異質の人種、言語、文化から成る国が、突如として中東の地に出現する。彼らアシュキナジムの価値観、生活様式はロシア、ドイツ、オーストリアの旧帝国の領土内で培われ、パレスチナ在住の正統派ユダヤ教徒セファードイムとも、アラブ人とも全く異なる。このシオン主義国家は欧米諸国の強引な後押しで実現しただけに、その存在自体が排外感情の源泉となり、やがてアラブ民族主義をかきたてる。

アラブ支配 体制の動揺 反シオン主義陣営の敗北は戦場だけでなく銃後でも明白で、アラブ世界の弱点を如実に露呈した。王室同士の妬みと反目は、共通の敵に対して連合戦線を樹立できない。この非常時にも支配層は私腹を肥やすのに汲々とし、相変わらず政争に明け暮れる。各国の政府と軍部は戦争指導の能力に欠け、最前線の将兵に必要な補給も満足にできなかった。¹イスラエルが欧米流の効率的な組織と綿密な計画性を備えていたのに比較すれば、アラブ諸国は出たところ勝負に終始するばかりで、戦術と戦略の両面で圧倒される。シオン主義の勝利——イスラエルの建国は、アラブ参戦国の支配体制を内外から揺さぶる。

第二次世界大戦中にシリアはレバノンと共にフランスから名目的な独立を獲得し、戦後ようやく仏軍の全面撤退を実現した。両国ともアラブ世界で最初の共和制を採用する。国民は外国の支配から解放されたが、パレスチナ分割の国連決議で、つい三十年前の歴史的記憶を新たにした。あの時、英仏両国の秘密取り引きで、不可分の国土の南部地方が切り離され、ユダヤ移民の民族的故地としてに留保された。そこがシオン主義国家に転換するのを、どうして無視できようか。

シリアは開戦前からレバノンと共にゲリラを送りこんで、アラブ領域の確保をねらった。英委任統治の終了から三日後、正規軍がガリラヤ地方に進撃し、建国後間もないイスラエルの打倒をめざす。ところが、その軍事介入はユダヤ開拓農民の強い抵抗に直面し、大きな期待に反して不首尾に終わった。国民は思いがけぬ敗北の恥辱に怒り狂い、停戦協定の調印前に反政府運動の嵐を巻き起こす。1949年4月、軍部は暴動の鎮圧に出動すると、そのまま実力で政権を奪取した。それ以来、この国では軍事政変が続発し、ディマシュクの政府は目まぐるしく交替する。²

レバノンはアラブ世界で例外的に高い人口比率のキリスト教徒を抱え、複雑な宗教構成を政治体制に反映して、クリスチャンとイスラーム教徒が権力を分かち合う。前者の中には後者に対抗するため、シオン主義に好意的な勢力も存在した。だが、寄り合い世帯の政府はアラブ世界の一員としての立場から、近

隣諸国と協調して反イスラエル戦争に参加を決めた。小兵力の正規軍は国境を越えてアラブ領域に兵を進め、ゲリラ部隊のアラブ解放軍と共にパレスチナの北辺を確保する。

ところが、レバノンにはイスラエルの反撃で敗北を喫したばかりか、逆に固有の領土に攻め込まれ、国境地帯を広い範囲にわたって占領される。ベイルートの政府は停戦交渉の結果、どうにか失地を回復したものの、国民感情に敗戦のしこりが残った。この小国ではシリアのように軍事政変こそ起きなかったが、国内に不穏な動きが目立つ。これを抑圧するため政府は強圧的手段に訴えねばならず、もともと国家的統一性に欠ける社会に亀裂をもたらす。

トランスヨルダンはパレスチナ分割の受益国で、停戦協定の成立後、イスラエルの暗黙の了解の下にヨルダン川の西岸に領土を拡大する。1948年12月1日、アブダッラーは占領下のアラブ領域を併合し、やがて国名を〈ハーシム家ヨルダン王国〉と改称した。遊牧民の国家はもはやヨルダン川の向こう側（トランス）の辺境の地でなく、こちら側（シス）の肥沃な地まで支配下に収める。³ その結果、砂漠の君主国は新たに対岸の都市と農村から多数の人口を（それに戦争難民も）抱えこんだ。新しい臣民は相対的に高い民度を誇るだけに、遊牧諸部族の王に忠誠を誓う者ばかりとは限らない。

しかもアブダッラーが早々に仇敵と平和条約の締結を意図すると、国を挙げて——とりわけ新しい国民から——強い反対に直面する。彼は長年の念願を成就すると、今度は地中海に出口を求めた。イスラエルとの秘密交渉で、講和の見返りに港町のハイファに通ずる回廊の割譲を要求する。反対勢力は極秘の交渉内容を暴露し、国王の裏切りを糾弾した。1951年7月20日、ヨルダン国王はパレスチナ人の暗殺者に襲われ、エルサレム旧市街のアル＝アクサ礼拝堂で非業の死を遂げる。

イラクはイスラエルとの停戦協定に調印せず、トランスヨルダンに後事を託してパレスチナから撤兵した。その派遣軍は中部戦線で戦い、一時はシオン主義国家に重大な脅威をもたらす。先鋒部隊がナタニヤ付近で地中海の海岸に迫り、イスラエルの国土を二つに分断しかかったからである。ところが、イラク軍が支配した地域から約四百平方キロの土地は、停戦交渉の結果、軍事境界線の調整用地としてイスラエルに引き渡される。将兵は遠い戦地で苦戦しただけに、帰国後に停戦協定の内容を知って大いに不満だった。

この国では民衆の反英感情がパレスチナ問題をめぐって増幅され、すでに開戦の半年前に対英条約改訂の機会に爆発していた。その結果、同じハーシム家の王室は事態収拾のために新条約の批准を否認し、交渉の責任者の首相と外相の罷免に追いこまれる。さらに派兵は国家財政の窮迫を促し、帰還兵士の忿懣

と相俟って、またもや政治危機が再発しそうな気配だった。だが、実力者のヌーリー・エッ＝サイドが首相に復帰すると、強硬手段で反対勢力を押さえ込む。この強権政治家は親英路線を推進するが、将来、みずから血の代償を支払わねばならない。⁴

エジプトは停戦協定でガザ地帯を確保し、どうにかに面目を保ったものの、戦後の政情は極めて不安定だった。この軍事的敗北の恥辱に加えて、英駐留軍の存在は絶えず民族感情をかきたてる。保守支配層の政府は左右両翼から突き上げられ、1936年に締結のエジプト・英国条約を一方向的に破棄した。この条約はカーヒラに名目的な独立を与えたものの、実際にはランダンへの従属関係を強化していた。反英闘争はスエズ運河地帯ではゲリラ戦に、大都市では暴動に発展した。

第二次世界大戦中、青年将校の一部は軍の内部に秘密結社の〈自由将校団〉を結成し、祖国の完全独立めざして時期の到来を窺う。その指導者のジャマル・アブダルナースィル（以下、ナースィルと表記）中佐はパレスチナで第一線の指揮官として、また負傷して野戦病院に入院の体験から、エジプト支配層の腐敗を実感し、王制転覆を決意した。1952年6月、決起部隊は首都の要所を占領し、無血軍事政変に成功する。⁵ ファルーク国王は退位し、イタリに去った。軍事革命の成功後、自由将校団は政治の表舞台に出ずに、パレスチナ遠征軍の司令官の一人で、国民的信望の高いモハメド・ネギブを担ぐ。

建国後のイスラエル シオン主義国家は独立戦争の試練に耐え抜き、ついに勝利の日を迎えた。国際連合の分割決議は英委任統治領パレスチナの面積の57%をユダヤ国家に割り当てたが、イスラエルは軍事征服で領土を拡張した結果、その80%を支配下に収める。もはや英国もアラブ諸国も、ユダヤ教徒のパレスチナ移住を阻止できない。ベン＝グリオンの臨時政府は独立を宣言すると、何よりもまず英委任統治時代の遺物の移民制限枠を撤廃した。欧州から神の約束の地をめざして、ユダヤ難民の群れが奔流のように殺到する。

真先にナチ・ドイツの虐殺から免れた強制収容所の生き残りが七万人。次にソ連の勢力圏に組み入れられた東欧諸国から三十万人。とくに後者はユダヤ教徒の伝統的職業の仲買人や小商人が中心で、新しい社会経済体制になじめなかった。これら人民民主主義の国々はなお反セム主義の気風を遺し、国内の異端分子を排除するためにも、ある時期までユダヤ系国民のイスラエル移住に積極的に手を貸す。

ところが、シオン主義者の期待に大きく反して、西欧諸国と米国からイスラエルに移住する者はごく少なかった。西欧のユダヤ教徒はそれぞれの社会に同

化し、現在の安穩な生活を捨てて過酷な風土の戦乱の地へ行こうとしない。米国のヤハウエの信徒もユダヤ国家再興運動に同情を惜しまず、多額の献金に応じても、世界最高の豊かな生活を放棄してまで、万事不便な新国家に移住しようとは思わなかった。

その一方で予期せぬ移民の津波が、イスラエルに押し寄せる。シオン主義国家の出現は、アラブ社会に在住のユダヤ教徒に大災厄をもたらした。彼らは西アジア、北アフリカの各地で、千数百年間も少数派の信仰集団としてイスラーム教徒の支配者から保護され、欧州の同信者のように迫害されることは少なく、アラブ人のクリスチャンと同様に多数派のイスラーム教徒と共存していた。

しかし、シオン主義の宣伝機関がアラブ世界のユダヤ教徒に神の約束の地に移住を呼び掛けると、古くからの隣人は疑惑に駆られる。イスラエルの勝利はアラブの心を深く傷つけ、イラク、イエマン、リビア、マロコウなどの各地で、反ユダヤ暴動の連鎖反応を引き起こす。1948年から1951年にかけて、ヤハウエの信徒が約三十万人もアラブ諸国からイスラエルに移住した。⁶

第一次中東戦争は、聖地の人口分布に大変動をもたらす。国際連合のパレスチナ分割決議によると、ユダヤ国家の総人口は約百万人で、アラブ人が半数の五十万人を占めていた。決議の採択後の武力衝突から停戦協定の成立までの間に、多数のアラブ住民が戦火から逃れ、あるいはユダヤ過激派武装集団の襲撃を恐れて、先祖伝来の居住地から立ち退く。やがて平和がよみがえれば、じきに住み慣れた場所に戻ると信じて――。

しかし、その一方で戦後も約十六万のアラブ人がイスラエルの領域に残留し、ユダヤ国家の少数派国民となる運命を敢えて選んだ。イスラエルの独立宣言が宗教、人種を問わぬ社会的、政治的平等を宣言したにもかかわらず、実際にアラブ系イスラエル人は潜在的敵性分子、あるいは二級市民として数々の差別待遇を忍ばねばならない。⁷

アラブ難民の帰還を拒否 停戦協定の締結後、イスラエルは早い時期に交戦国と戦争状態を終結し、アラブ世界から承認を得ようとする。だが、アラブ諸国はユダヤ国家の存在を認めず、平和条約の締結に応じなかった。講和の最大の障害となったのは、パレスチナ難民の帰還問題である。ベン＝グリオンはたとえ一時的でもイスラエルの領域外に逃れた難民の帰還を拒否し、軍事征服の成果を断じて手放そうとしなかった。難民が舞い戻らないように、イスラエル国防軍の工兵隊はアラブ村落で無人の家屋を爆破する。

ユダヤ国家が近隣諸国と平和的共存を願うなら、双方の満足できる国境線を確定せねばならない。イスラエルは停戦協定による軍事境界線を、アラブ側は

パレスチナ分割決議による境界線を国境とするよう、それぞれの立場から主張した。換言すれば、前者は戦争で獲得した占領地を領土に編入することにより、実質的にアラブ難民の帰還を拒否し、後者はかつて否認したパレスチナの分割を事実上追認することにより、イスラエル軍の撤退と難民の帰郷の実現を意図する。

もともとベン＝グリオンはシオン主義国家の版図を国際連合総会のパレスチナ分割決議の枠内に限定せず、対アラブ戦争による領土拡大を想定していた。米国が独立宣言で領土の限界を明示せずに、やがて広大な新大陸の辺境まで主権下に組み入れたのと同様に、イスラエルの独立宣言も、新国家の支配領域を限定しない。ベン＝グリオンの見解は明快だった。ユダヤ国家の純粹性を保持し、しかも新規移民の吸収を考慮すれば、軍事的征服地を絶対に放棄できず、ましてアラブ難民の引き取りなど論外である——と。

パレスチナの戦火がまだ燃え続けた1948年12月11日、国際連合の総会はベルナドットの遺志を受け継いで、アラブ難民の帰還（希望せぬ者には補償金の支払い）を決議したが、イスラエルに無視される。翌年5月11日、シオン主義国家は欧米の大国などから〈平和愛好国〉と認定され、この世界平和維持機構に加盟を認められた。その際、イスラエル代表はパレスチナ分割、アラブ難民の帰還に関する諸決議の履行を表明したが、単なる口約束に終わった。⁸

戦後、イスラエルとアラブ交戦諸国は正式の国境を画定しなかったため、やがて暫定的な軍事境界線がそのまま固定化する。これは停戦時の最前線で、住民の生活圏を分断した。その結果、さまざまな不都合が生ずる。たとえば、農家は耕地から、放牧地は家畜の水飲み場から、切り離された。アラブ農民が野良に出ようとして、遊牧民が羊の群れを追っているうちに、境界線の侵犯者としてイスラエル側から銃弾を浴びる。

この不合理な暫定境界線をはきんで、古くからの住民と新しい支配者の間に紛争が続発した。難民はもとの居住地に戻るできないまま、イスラエルの官憲に土地や家屋を没収される。やがて抵抗運動が家と財産を失った者の間に組織され、境界線沿いに衝突事件を引き起こす。アラブ側の襲撃はユダヤ側の過剰報復を招き、早期講和の可能性はすっかり遠のいてしまった。イスラエルは近隣諸国の敵意に囲まれ、中東の国際社会で孤立を続ける。

イスラエル 1949年1月、イスラエルは最初の総選挙を**西側陣営に参加** 実施し、ベン＝グリオンの率いるマパイ党（労働党）が第一党となった。この党は労働総同盟を母体とし、第二インタナショナルの系列に連なる。建国の功労者は国民の信託を得て引き続いて最高指導者の地位にとどまり、中東地域で最初の社会主義政党主導の政権を樹立する。

だが、その政策は混合経済体制を採用し、外国企業の投資を積極的に促した。

イスラエルは米ソ超大国の積極的支持で誕生したが、間もなく冷戦の激化で外交路線の選択を迫られる。初代外相のモウシャ・シャレット（旧名シャートク、ユダヤ機構の前駐米代表）は中立外交路線を採用し、東西両陣営のどちらにも與しなかった。左派の中には思想信条から、もしくは、かつて見捨てたロシアの大地への郷愁から、ソ連との友好推進を望む論者も少なくない。⁹

だが、イスラエルが経済建設の困難な事業を進めるには、建国の際と同様に米国の支持を是非とも必要とした。その強力なユダヤ圧力団体が政治面で影響力を行使し、財政面で支援してくれなければ、中東のシオン主義国家はアラブ諸国の敵意に囲まれながら生き延びられまい。イスラエルの多党制、自由選挙、議会制民主主義、言論の自由は、米国の価値観に合致したが、ソ連のそれとは相容れない。

やがてクレムリンの態度は急変し、公然と反シオン主義の宣伝を強化する。ソ連がパレスチナの分割を支持したのは、中東における英国の覇権に楔を打ち込む権謀術数からだった。もともとソ連支配下のコミンテルン（第三インタナショナル）は第二インタナショナルと対立関係にあり、シオン主義に反対を唱えていた。それがユダヤ労働者を資本主義打倒の闘争から逸脱させている——との理由からである。間もなくソ連と東欧諸国はユダヤ教徒に出国の扉を閉ざし、事実上、イスラエルへの移住を禁止した。¹⁰

マパイ党政権は急速に西側陣営に傾き、アラブ側から帝国主義の橋頭堡と非難される。エジプトやイラクが外国の軍事基地をめぐる反西側感情を高めている時期、ベン＝グリオンは暫定国境の安全保障を条件として、米国に基地提供を申し入れた。米國務省はソ連の脅威を説いていたが、アラブ世界の反響を恐れてせつかくの申し出を断る。米国がイスラエルと軍事同盟を締結すれば、中東地域の武力紛争に自動的に巻き込まれかねないからである。

29 アラブ民族主義の嵐

軍事境界線 1950年 5月25日、米英仏の西側諸国は三国宣言を発
の恒久化 し、アラブ諸国とイスラエルへの武器供与に制限を
課した。この措置は仇敵同士の軍備拡大競争を抑え、中東地域の緊張緩和をめ
ざす。同時に三国は軍事境界線の侵犯に対して共同行動を取るよう約束し、イ
スラエルの軍事征服の成果を追認した。つまり、西側陣営は停戦時の境界を事
実上の国境と見做し、仮に中東の戦火が再燃した場合、シオン主義国家の支援
を保証する。

時代は朝鮮戦争の前夜だった。一カ月後、米ソ両超大国の対立は、遠い東ア
ジアの半島で火を噴く。それより前、西側陣営は西アジアでソ連の浸透を恐れ、
中東情勢の鎮静化を意図した。そのために最も手っ取り早い方法は、ユダヤ国
家の勝利を既成事実として承認し、アラブ対イスラエルの力関係の現状維持を
図ることである。そのうちに親西側のアラブ権力者は態度を軟化させ、シオン
主義者と妥協するだろう——と。

ところが、この目論見は三国の希望的観測に過ぎず、中東地域の実情からは
ずれていた。敗戦の屈辱感と相俟って、アラブ民族主義をかきたてる。王室も政
治家も自己の身の安全を思えば、反シオン主義の世論を無視できない。第一次
世界大戦後、東アラブが西欧列強に従属を余儀なくされた現代史の文脈から、
この三国宣言は切り離して考えられなかった。

シオン主義国家の脅威に対抗するには、何よりもアラブ陣営の団結が必要で
ある。これはパレスチナ戦争の敗北から得た苦い教訓で、だれも異論を唱える
ことができない。アラブ世界は共通の言語、文化を持ち、イスラーム教徒が人
口の大多数を占める。その国境線は十九世紀以降、西欧帝国主義列強の手で引
かれた人工境界に他ならない。かつてのウマイヤ、アッバース王朝が築いたイ
スラーム大帝国のように、現代のアラブ世界が統一を果たせば、ユダヤ国家の
下風に立つことはない——と。

しかし、西欧帝国主義の遺産とはいえ、それぞれの国家が成立してから数十年
の歳月を経ており、各国の権力者の利害と野望は錯綜している。いかにアラ
ブ統合の必要性が説かれても、国家の統治権や長い間に培われた特権を簡単に
放棄することはない。各国の支配者は相変わらず反目し合い、結束してイスラ
エルに対抗できなかった。だが、アラブ民族主義、汎アラブ主義の理想は、や

がてナイル河畔出身の一人の人物に具現される。彼は西側陣営の大国を相手に一歩も譲らず、シオン主義国家と真正面から対決する。

ナーシル 1952年 7月、エジプト陸軍の自由将校団が軍事政変の**権力奪取**に成功した際、立役者のナーシル中佐は国内的にも国際的にも無名の軍人に過ぎなかった。当面の首班に青年将校が担ぎ出したネギブ中將は五十代半ばの円熟期に達し、その温厚な性格から国民の信望を集める。この将軍はパレスチナ遠征軍の指揮官として、イスラエルにも欧米諸国にも名前をよく知られていた。二年後、革命の真の指導者は上官を仮の権力の座から追い落とし、みずから政治、軍事、外交の実権を握る。

革命当時、自由将校団は政界の浄化や軍部の肅正を主張するだけで、明確な政治・経済理論も具体的な社会改革案もなかった。しかし、外国軍隊の駐留による半独立状態、敗戦の責任を回避する軍部、派閥抗争に明け暮れる政界、腐敗した王室と陰謀渦巻く宮廷、極端な貧富の格差、富裕な不在地主と貧しい小作農民——など祖国の実情に憤り、若手軍人は素朴な正義感から体制打倒に立ち上がる。

しばらくの間、政治に未経験の軍人は旧勢力の協力を必要とし、国王の友人で前首相のアリー・マヒールに文民政権を担当させた。しかし、この保守政治家は在任一カ月ほどで解任される。革命派が試みた最初の改革の農地解放に反対したからである。その後はネギブが首相に就任して政令を発し、土地所有の限度を二百フェッダン（約八十ヘクタール）と定めた。

革命から半年を経た1953年 1月、全政党の解散令が布告されて、代議制を否定する。国民の声は〈解放大集会〉の場で政治に反映されることになった。この大衆動員組織の事務局長に、ナーシルは就任する。同じ年の 6月、王制が正式に廃止されると共に、ネギブ首相は共和国大統領を兼任した。この時、ナーシルは副首相兼内相として入閣し、先輩の陰で着々と足場を固める。

ほどなく政治路線をめぐる、二人の違いは表面化した。ネギブは権力保持のため旧勢力と妥協を図り、議会民主制に復帰を考慮する。さらに彼個人の支持基盤を拡大するため、右翼のイスラーム教徒同胞団を取り込もうとした。軍事革命がみすみす骨抜きされるのを、ナーシルと革新将校は断じて容認できない。激しい権力闘争の末に、1954年11月、ネギブは失脚した。¹¹

アラブ世界の中枢部に起きた軍事革命に対し、当初、欧米諸国は好感を寄せる。西側陣営はソ連の影響波及を阻止するのに懸命で、この観点からナーシルを評価した。エジプトの軍事政権の性格は民族主義的で、腐敗した旧勢力ばかりでなく、左右両翼にも厳しい。とりわけ共産黨員は厳しく弾圧され、処刑や投獄の憂き目に遭っている。その手段が西欧型民主主義の価値基準に反して

も、自由将校団の基本方針が反共である限り、欧米諸国にとって大した問題でなかった。

イスラエルも別の観点から、エジプトの軍事政権に期待感を抱く。第一次中東戦争の終結から数年を経たのに、国王と既成政治家は大衆の熱狂的排外主義、盲目的強硬論を恐れて、イスラエルと平和条約の締結を切り出すどころではない。しかし、軍事政権なら彼我の実力を認識して、外交面で現実的路線を採用するだろう——と。実際、両国は非公式の接触を始めた。

不死身の英雄に ナースィルは民族主義者として何よりも外国軍隊の撤退を急務と考え、英国と条約改訂交渉を再開する。ランダンはカーヒラに譲歩した。ソ連の浸透に対抗するため、これ以上、エジプトの反英感情を悪化させてはならない。それに1936年に締結の条約（1951年、ウオフト党政権が一方的に破棄）は、間もなく二十年の有効期限が満了する。英国政府と軍部は一部の国会議員の強い反対論を押し切り、エジプトから撤兵に踏み切った。

1954年10月、ネギブが大統領の地位から追われる少し前、ナースィルは軍事政権を代表して英・エジプト協定に調印する。これで旧条約は公式に撤廃された。英駐屯軍は協定に従って、スエズ運河地帯の基地から二十カ月以内に撤退する。1882年、英国が内乱に乗じて占領して以来、実に七十数年ぶりにエジプトは英軍の存在から解放されることになった。

まだ無名の青年将校の時代から、ナースィルは折りに触れて持論を繰り返す。外国軍隊が駐留する限り、その国の主権はないも同然だ——と。これでエジプトは名実ともに独立国家の体裁を整え、国民の民族的誇りを満足させる。ナースィルの名はアラブ民族主義の旗手としてエジプト一国にとどまらず、イラクやヨルダンなど他のアラブ諸国でもよく知られるに至った。これらの国々では、王家と側近の権力者は英国と深く結び付き、その軍事基地の存在を容認して、国民の不満を買っていたからである。

英軍の撤退はアラブ民族主義の勝利と称賛される一方で、エジプト国内でイスラーム教徒同胞団と共産党の双方から批判された。この協定はエジプトを西側の対ソ防衛陣に引き留め、旧条約の焼き直しに過ぎない——と。実際、新条約ではアラブ連盟の加盟国やトルコが攻撃された場合、英軍はスエズ運河地帯の軍事基地を〈再活性化〉できる。それに備えて正規軍の将兵に代わり、英民間人の保安要員が基地の管理に当たるよう取り決められた。

1954年10月26日、エジプトの軍事政権は英軍の撤退を祝い、大衆を新協定の支持に動員するため、ナイル河口の港湾都市・アル＝イスカンデリーヤ（英語名・アリグザードリア）で大集会を開催する。この時、イスラーム教徒の過

激派はナースィルの暗殺を試みたが、間一髪のところまで失敗に終わった。この軍事革命の立役者は生命を狙われながら豪胆かつ沈着に振る舞い、恐慌状態に陥った大群衆に深い感銘を与える。それ以来、ナースィルは不死身の英雄視され、11月14日、ネギブを追放して最高指導者の地位に昇った。¹²

軍事同盟 その後のナースィルの行動範囲はエジプトだけに限定されず、広くアラブ世界に、そして第三世界にまで及ぶ。彼はネギブとの権力闘争に忙しい時代から、早くも視界を国境の外側に拡大していた。ナースィル独自の世界観は、小冊子『革命の哲学』にまとめられた。その歴史的・地理的条件から、エジプトはアラブ圏、アフリカ圏、イスラーム圏の重なる場所に位置している。これらの地域でエジプトは最大の人口を擁し、イスラーム神学研究の中心地であり、文化の中枢であるだけに、本来的にアラブ世界の盟主の役割を果す――と。

この見解は革命の輸出を理論づけるものとして、英仏両国から警戒された。もはや大英帝国の夢を追う時代ではなくなったが、 لندنはアフリカの植民地、東アラブの親英諸国に築き上げた利権を掌中から失いたくない。パリもアフリカに植民地を保有しており、地中海の南岸でアラブ人の抵抗運動に直面する。1954年11月1日、アルジャリアの民族解放戦線は独立をめざして、フランスに対して武装闘争に踏み切った。

1955年2月、ナースィルはユーゴスラヴィア大統領のプロウザヴィッチ・ティートウと会談し、さらにインド首相のジャワーハラル・ネイルーと親交を結んで、国際的視野をひろげる。エジプトの軍人政治家は二人の老練な先輩から多くの知恵を学んだ。それぞれはソ連のスタリイン主義、英国の植民地主義と闘った経験から、東西両陣営の対立に巻き込まれる愚かしさを説き、ナースィルに深い影響を与える。

1955年4月、ナースィルはインドウニシアのバンドウングで開催されたアジア・アフリカ会議に出席して、世界情勢の認識を一段と深めた。この会議には第二次世界大戦後に西欧の植民地支配から脱した二十四カ国が参加し、反帝国主義、反軍事同盟の決議を採択する。この機会をとらえて、エジプトはパレスチナ情勢について出席国の理解を得、新興国の間にイスラエル非難の国際世論を形成するのに成功した。

いまやナースィルは第三世界の有力な指導者の一人として、非同盟・中立主義を積極的に推進する。 لندنとカーヒラが英軍の撤退協定に調印した時期を頂点として、両国間の関係は急速に疎遠となった。英国は中東地域に対ソ防衛陣を構築するには、ナースィル以外の人物を籠絡する必要に迫られる。それに打ってつけの親英政治家がいた。イラクの実力者サイードである。

第二次世界大戦後、反ヒトラルの共同戦線はナチ・ドイツ打倒の目標を達成すると、東西両陣営に分裂した。西側諸国はソ連を封じ込めるために、北大西洋条約機構（NATO）と東南アジア条約機構（SEATO）の軍事同盟を結成する。このように対ソ包囲網は東と西に形成されたが、まだ南が空いていた。アラブ民族主義がイスラエルの建国とパレスチナ戦争の敗北で強く刺激されたにもかかわらず、英国は中東地域を相変わらず勢力圏と見做し、ここに軍事同盟の設立を意図する。

折りしも、トルコ（1952年にNATOへ加盟）は北方からの脅威に備えて、1954年4月、パーキスタンと協定を締結し、新しい軍事条約機構の礎石を置いた。翌1955年2月、今度はイラクがトルコと防衛条約を締結する。これを基盤として、3月には英国が、半年後の9月にはパーキスタンが、続いてイランが加わった。米国は正式に加盟せず、オブザーヴァの資格で参加する。この軍事同盟はイラクの首都にちなんで、バグダード条約機構と命名され、西側陣営の積極的支援を受けて、冷戦構造の上に成立した。

西アジアにおける反共軍事同盟の形成に、徹頭徹尾、ナーズィルは強硬な反対を唱えた。汎アラブ主義の立場から、これを他国の問題と黙視する訳には行かない。ましてイラクが近隣のアラブ国家に加盟を勧誘するとあっては、なおさらである。アラブ諸国が欧米主導の軍事同盟に加入し、対立する陣営の一方に加担して、どうして帝国主義の呪縛から脱することができようか。エジプトはカーヒラで開催のアラブ連盟の会議の席で、さらにバグダードに特使を派遣して翻意を促したが、サイードは聴き入れなかった。

バグダード条約体制の発足を阻止できなかったものの、ナーズィルの努力は無駄でなかった。イラクが同じハーシム王家のヨルダンに加盟を求めると、国内の批判勢力は猛反対に立ち上がる。若い国王のフセインは政情不安を乗り切るため、この軍事条約に参加を断念したばかりか、アラブ軍団の英国人総司令官グラブ・パシャを解任した。いつまでもヨルダンが英国の従属国に甘んじていないと、内外に印象づけようとしたからである。¹³

イスラエル その間にアラブ対イスラエルの関係は、薄日が差し
と対立激化 た短い期間を除いて、再び険悪化の一途をたどる。敗戦の屈辱感は歳月の経過で風化せず、むしろ新たに増幅された。軍事境界線で頻発する小競り合いに、ユダヤ国家は常に無差別報復の強硬手段で対抗し、アラブ側に甚大な損害を加えたからである。ベン＝グリオンは確信した。優勢な武力の誇示と行使によってのみ仇敵に実力闘争を断念させ、そして平和条約の交渉の場に引き出せる――と。しかし、イスラエルの過剰報復はしばしば国際的非難を招き、時にはナチ・ドイツの残虐行為になぞらえられた。¹³

1954年 1月、建国の功労者ベン＝グリオンは首相兼国防相を辞任し、ネゲヴ砂漠のキブツに隠退した。後継首相には外相のシャレットが選任され、前任者とは異なって報復作戦を控え、柔軟な外交方針を推進する。停戦協定の調印からすでに五年近い歳月が流れて、ナーシールも関係改善に積極的な意欲を抱く。双方は秘密交渉を開始し、歩み寄り可能な妥協点をさぐった。

もちろん、アラブ側は国内世論に対する配慮から、急に掌を翻してイスラエルの承認に踏み切る訳には行かない。だが、ユダヤ国家に事実上の承認を与えてから、国際連合の斡旋で講和条約の交渉に入ることも可能だった。歴史に仮定は無意味であるが、双方の合意で軍事境界線が手直しされて正式の国境として確定し、アラブ難民が故郷に戻ることになったら、中東和平は実現したに違いない。

しかし、イスラエルの政治家と軍部の確執は、和平成立の可能性を根底から覆す。ナーシールが英国政府を相手に交渉を進めていた頃、イスラエルの諜報機関は英軍の撤退を阻止するため、エジプト国内で破壊工作を実行した。現地のユダヤ社会から協力者が雇われ、米国の文化施設に放火する。その目的はエジプト軍事政権の不安定ぶりを内外に印象づけ、カーヒラとランダンの交渉を中断に追い込むことだった。

イスラエルの軍部はエジプトの脅威を過大に評価し、その軍事力に足枷をはめようと試みる。英軍が今後もスエズ地帯の基地に駐屯し続ければ、その存在は緩衝的役割を果たすだけでなく、想定されるエジプトの攻撃を抑止するだろう——と。そのためには手段を選ばず、建国の恩人ともいうべき超大国の在外広報機関を標的にする。

エジプトの治安当局はスパイ網を摘発し、イスラエルの仕組んだ陰謀の全貌を暴露した。公開裁判の結果、主犯は死刑を宣告される。欧米諸国で助命運動が起き、シャレット自身も減刑を訴えたので、ナーシールも一時は特赦を考慮した。しかし、彼の命を狙ったイスラーム教徒同胞団のテロリストが、少し前に処刑されたばかりである。この嘆願運動は実を結ばず、イスラエル国内で反エジプト感情を煽りたてた。

シャレット首相の和平努力は、この事件で失敗に終わる。国防相のピンハス・ラヴォンが引責辞職し、イスラエルの政界は大揺れに揺れた。この政治危機を收拾するため、1955年 2月、ベン＝グリオンが農耕生活から政界に復帰し、空席の国防相に就任した。¹⁵

イスラエル建国の父の老政治家は古巣に戻ると、直ちに強硬政策を復活して、ガザ地帯のエジプト軍基地の攻撃を命令する。国防軍の士気を高揚し、アラブ諸国を威圧するために——。

ソ連製武器を大量購入 第一次中東戦争の手痛い敗北にもかかわらず、エジプトは停戦協定でパレスチナ南西部の地中海に面したガザ地帯を確保して軍政下に置く。この細長い半砂漠の地域は、もともとの住民に加えて多数の難民の流入で、人口密集地と化した。ユダヤ国家の支配はここまで及ばなかったものの、新旧両住民は苦難の日々を過ごす。難民は仮住まいの収容所で、帰還の日を無為に待ちわびる。

難民の若者はまともな働き場所もないまま、今日の生活に絶望し、明日への希望を武器に託す。エジプト軍から小火器を供与され、軍事教練を受けた。彼らはフィダイーン（フィダイの複数形、アラビア語で「自己犠牲の戦士」を意味する）と呼ばれ、復讐の機会を窺って、軍事境界線の向こうの故郷に潜入する。ベン＝グリオンは過剰報復の方針を復活し、ゲリラの掃討よりも背後の黒幕を一挙にたたき。

1955年 2月28日、イスラエル軍はガザ市近くのエジプト軍駐屯地を急襲し、死者二十八人の大損害を加える。攻撃側も無傷ではなく、八人の戦死者を出した。この大規模な正規軍同士の衝突は、停戦協定の成立後、初めてのことだった。いまやイスラエル軍の報復作戦はアラブ村落や難民収容所に向けられるのではなく、エジプト軍の基地や哨所そのものを狙う。

ガザ事件の勃発以来、ナーシルは軍備充実の緊急性を痛感する。エジプト軍はパレスチナ遠征で虎の子の重装備を失い、武器弾薬を大量に消耗した。弾薬の備蓄はほとんどなくなり、数時間の戦闘で撃ち尽くすだろう。作戦行動に耐える航空機は、僅か六機に減ってしまった。イスラエルの脅威に対抗するために、軍需物資の補充と兵器の近代化を急がねばならない。

エジプトはまず西側から武器の調達を凶ったが、米英両国は1950年の三国宣言を口実に体よく断った。ナーシルは改めて思い知らされる。イスラエルは西側の秘蔵っ子であり、中東地域における戦略拠点に他ならない。エジプトが反ソ十字軍のバグダード条約機構に反対したばかりに、ここで見事に仕返しされた――と。

そこでナーシルは武器の供給源を東側に求めて、アジア・アフリカ会議に出席した折りに、中華人民共和国国務院総理の周恩来にクレムリンへの橋渡しを依頼する。ソ連は冷戦体制下の国際政治の権謀術数から、反共軍事政権の武器購入の申し入れに応じた。1955年 9月、エジプトは西側の過敏な反応を顧慮した上で、ソ連との直接取り引きを避け、チェコスロヴァキアと協定を締結した。やがてナイル特産の綿と交換に、大量のソ連製兵器がイスカンデリーヤ港で陸揚げされる。¹⁶

一触即発の危機 イスラエルはエジプトの急速な軍備強化を脅威と受け止めて、フランスから大量の武器を購入した。カーヒラとプラハが武器協定を締結する前から、イスラエル国防省高官のシモン・ペレス（後に首相）はフランス国防省と内務省（アルジャリア問題を所管）と折衝を重ねて、ジェット機や戦車を買付ける。フランス外務省は三国宣言の武器禁輸の手前、この商談に乗り気でなかった。しかし、武器売却は軍需産業に大きな利益をもたらし、同時にアラブ民族主義を牽制するのに役立つ。

一方、シャレットの努力は、期待に反して実を結ばなかった。両国の関係改善の試金石として、1954年9月、イスラエル貨物船がスエズ運河の通過を試み、エジプト海軍に捕獲される。軍事革命以前から歴代のエジプト政府はダヴィデの星の国旗を掲げた船はもとより、第三国の船舶でもイスラエルの港に立ち寄る限り、スエズ運河の通行を拒否した。

その頃、ナーシルが英軍の撤兵交渉を進め、西側陣営と友好関係を維持していたので、シャレットは相手の柔軟な出方を待ち、スエズ運河の無害航行に賭ける。しかし、エジプトの態度は相変わらず固く、イスラエルの期待を打ち砕いた。それどころか、1955年9月、ナーシルがティラーン海峡を封鎖し、イスラエル船舶はアカバ湾の最奥部のエイラト港に出入りできなくなった。

この海峡はシナイ半島の南端とアラビア半島の中の狭い水路で、そこを通る船は必ずエジプトかサウディ・アラビアの領海に立ち入らなければならない。エジプト軍はシナイ半島の先端、アカバ湾口を押えるシャルムエッセイクに砲台を築き、ティラーン海峡を射程内に収めた。このためイスラエルの南の門戸エイラトはアジア、アフリカ諸国との貿易航路だけでなく、ペルシア湾からの石油の輸入路を断ち切られてしまう。

1955年秋、イスラエルで第三回総選挙が挙行され、マパイ党は引き続いて第一党となった。しかし、現有勢力から五議席も減ったのは、対エジプト宥和政策への批判と解釈される。在任二年足らずで穏健派のシャレットは退陣し、強硬派のベン＝グリオンが首相に返り咲いて国防相を兼任した。¹⁷ 彼は権力の座に復帰する前の国防相時代、ダーヤーン幕僚長に指示を出して、エジプト攻撃の作戦計画を立案させる。

ベン＝グリオンは首相に就任すると、この計画を閣議に直ちに提出した。宿敵がソ連製の武器で戦力を増強する前にたたき、ティラーン海峡を武力で解放する――と。だが、閣僚の大多数が即時開戦案を時期尚早と斥けたので、この時は戦端を開くに至らなかった。一方、ベン＝グリオン得意の報復作戦はエジプトだけでなく、ヨルダン、シリアを対象に荒れ狂う。イスラエル対アラブ関係は、一触即発の危機をはらむようになった。

ナイル河の エジプトの軍事政権は社会改革に乗り出し、まず土地解放の実施により、貧しい小作農民に救いの手を差し延べる。しかし、都市住民を含めた国民の支持をつなぎとめるには、生活水準の全体的向上を図らねばならない。エジプトは経済的自立を達成してこそ、帝国主義から真の独立を獲得できよう。それには天恵の資源——ナイルの水を利用するのが、もっとも手っ取り早い方策である。このアフリカ随一の大河は、古代からエジプト文明を育ててきた。

二十世紀の初頭、英国人の土木技師は中流の景勝地アスワーンに堰堤を建設し、ナイルの水の近代的利用を始めた。それから半世紀、軍事政権は旧堰の上流に大規模な高ダムの建設を構想する。二十世紀のピラミッドは、高さは約百十呎、幅は四千呎の巨大な岩石積み上げ方式の堰堤である。そこから得られる灌漑用水は四十万平方呎の砂漠を耕地に変え、同時に水力発電はエジプトの工業化を促進するだろう。

その気宇壮大な計画の成否に、ナースィルは軍事革命政権の未来を賭ける。ところが、エジプトは慢性的な財政危機に苦しみ、とうてい自力で巨額の建設費を賄えず、外国の援助を当て込むしかない。堰堤建設の技術的困難や完成後の経済的効用について、専門家の間で疑問がなかった訳ではない。米国はテナシー溪谷開発の実績を持つだけにナセルの構想に乗り気だったが、一方、英国はナイル治水の長い経験から慎重に構える。

当時の西側陣営は躍起になって、エジプトの軍事政権を反ソ防衛陣に取り込もうとしているところだった。マスクヴァが武器売却に続いて堰堤建設に援助をほのめかしたので、ウォシグタンもランダンもカーヒラの歓心を買うため、アスワーン計画に資材や資金面で協力を約束する。巨大な堰堤の建設は二期に分かれ、完成まで少なくとも十年の歳月を要するだろう。工費の見積もりは膨れあがり、約十三億米ドルと積算された。

この大規模な開発計画の第一期分として、国際復興開発銀行（世界銀行）が二億ドルを融資する。ただし、それには米国と英国の借款供与が前提条件だった。前者は五千六百万ドル、後者は千四百万ドルの分担を申し出る。エジプトは巨額の融資を受ける代償として、債権者から経済面でさまざまな制約を課せられることになる。アスワーンの堰堤建設計画は財政の自主性を奪い、反ソ親米英路線の確認を迫る踏み絵となった。¹⁸

西側が借款 エジプト軍事革命の半年後、米国では共和党が民主
供与を撤回 党に代わって政権を担当する。軍人出身のドワイト・
デイヴィッド・アイザンハウアが大統領に就任し、ジョン・フォスタ・ダリスを
国務長官に任命した。米国外交の新しい最高責任者は強い反共の信念の持ち主

で、彼独特の性癖として物事を白と黒とに明確に分ける。世界は敵と味方に二分され、第三の陣営を認めない。ダリス自身の表現を借りれば、中立主義などは〈非道徳的〉に他ならなかった。

ナーシルは全権の掌握後、ウォシingtonから反共民族主義者として評価される。ところが、米国の立場から見れば、この軍人出身の政治家は親米英の外交路線から逸脱し、反ソ軍事同盟のバグダード条約に反対した。そればかりか、アジア・アフリカ会議に出席して、非同盟・中立主義を唱える。エジプトの反西側宣伝は電波に乗ってアラブ世界を惑わせ、とうとうヨルダンがバグダード条約に参加を見合わせてしまった……。

ダリスに我慢ならなかったのは、ナーシルがこともあろうにソ連製の武器を大量に買い付け、中東とアフリカの門戸をクレムリンに開放したことである。そればかりか、1956年 5月16日、カーヒラは北京の共産党政権の承認に踏み切り、ウォシingtonの神経を逆撫です。19 ナイル河の堰堤建設をめぐるても、エジプトは米英両国から一層有利な条件を引き出すために、ソ連の申し出に気のある素振りを示す。西側陣営としては、交渉相手に手厳しい教訓を与えねばならない。

ナーシルは大事業の実現をはかるために、ここで大幅な譲歩を決意する。1956年 7月19日、ウォシington駐在のエジプト大使はダリスに会い、米英両国の提示した融資条件の受け入れを伝える予定だった。ナーシルは大局的見地から妥協し、西側の課した条件をすべて呑む。ところが、米國務長官はアスワーンの大堰堤建設に協力の態度を翻し、大使に借款供与の撤回を通告する。この一方的措置に、英国政府もすぐに追随した。

この時、ナーシルはユーゴスラヴィアに滞在中で、ティートウとネイルーと会談していた。米国の急激な方針変更は、エジプトがナイル河の利水について上流のスーダーンと合意に至っていないこと、その弱体な経済力では大事業の遂行に無理を生ずることなど――を口実に掲げる。しかし、ダリスの性急な措置はエジプト一国を対象にした経済制裁でなく、非同盟・中立主義に対する挑戦と解釈された。

スエズ運河の国有化 この明々白々な侮辱にナセルは激怒し、建設費の自力調達を決意する。西側の協力がなくとも、アスワーンの国家的事業は何としてもやり遂げねばならない。エジプトは対抗策を練り、ひそかに準備を進める。

ウォシingtonの屈辱から一週間過ぎた7月26日、ファルーク国王追放四周年の記念集会在エジプト第一の港湾都市・イスカンデリーヤで開催された。この機会にナーシルは広場を埋め尽くした大群衆を前に長広舌を振るい、スエ

ズ運河の国有化を発表する。その通行料を堰堤の建設費に充当すれば、もう外国に頭を下げる必要はない——と。

ナーシルの大胆な決定はエジプト国民の溜飲を一挙に下げ、同時にアラブ世界に熱狂の嵐を巻き起こす。スエズ運河こそ英仏帝国主義の象徴であり、植民地主義の生きた見本に他ならない。その国有化はアラブ民族主義の勝利と受け止められ、それまで欧米の大国に抱き続けた劣等感を吹き払う。その一方でナーシルは慎重に事を進め、国有化に伴って適正な補償を約束する。

1869年、建設に約十年の歳月を費やして、スエズ運河は開通した。この国際水路は欧亜を結ぶ連絡路だけに、当初から西欧帝国主義列強の思惑が絡む。まずフランスの外交官フェルディナン・マリ・ド＝レセップスはエジプト都督のサイードと交渉し、1854年、地中海と紅海とを結ぶ運河の掘削権を獲得した。英国は運河の開削に反対で、エジプトの宗主国オスマン・トルコに圧力をかける。帝国最大の植民地インドに通ずる近道が建設され、しかも欧州の対抗国フランスの影響下に置かれるのに不安を抱いたからである。²⁰

ド＝レセップスは外交上はもとより、財務、技術上の難問に直面するが、その一つ一つを辛抱強く克服した。1858年、〈万国スエズ運河航行会社〉が設立され、砂漠の掘削工事と完成後の運営に当たる。その株式は公募され、個人の出資者にはフランス人が多かった。エジプト王室は建設事業を認可しただけに、資本金の半分近くを負担する。サイードの後継者イスマーイールは資金調達のため外国から借金を重ね、彼個人の浪費と相俟って国家財政を破産状態に追い込んだ。

1875年、エジプト王室が金に窮して欧州の株式市場で持ち株を売りに出すと、英国首相のベンジャミン・ディズレイリは議事に諮ることなくユダヤ系の銀行家ロスチャイルドから一億フランを借り入れ、イスマーイールの持ち分をすべて買い取る。この時から英国政府は筆頭株主として、スエズ運河会社の支配権を掌握した。

渠成って水至る。ところが、この水路はエジプトに繁栄どころか、災厄の大波をもたらす。農民は強制労働に駆り立てられ、多数が建設工事の人柱となった。英仏両国は破綻した財政の管理を口実に内政に公然と干渉し、あたかも宗主国のように振る舞う。さらに1882年に英軍は内戦に介入し、エジプト全土を占領下に置く。この軍事行動は、スエズ運河の確保が目的だった。

それ以来、この国際水路は大英帝国の生命線と目され、その防衛のために運河地帯に軍事基地が建設される。1947年のインドの独立後、東洋と西洋をつなぐ海の大動脈は性格を変えた。今度はペルシア湾から欧州大陸に通ずる石油の補給路となり、その重要性を少しも減ずることはない。1956年、英軍はエジブ

トから撤兵を完了したが、有事の際には基地に戻る権利を保留し、あくまでスエズ運河に執念を残す。

ナーシルは主張した。運河会社の年間収入は一億ドルに達するが、エジプトの取り分は僅か三百万ドルに過ぎない。筆頭株主の英国は巨額の配当金をエジプト国外に持ち出し、会社自体も収益を海外投資に振り向けている。このように運河の通行料が外国に搾取されなければ、米英両国の借款に頼らなくとも、アスワン大堰堤の建設費を十分に賄うことができよう——と。

英 仏 の 戦 争 準 備 ウォシグタンは借款供与の撤回で中東危機の原因を作り出したが、スエズ運河の国有化に冷静に対応した。その商船隊は欧州諸国ほど砂漠の水路を利用せず、また石油の輸入に何の障害も生じないからである。それに約百日後の1956年11月6日に大統領選挙を控え、アイザンハウアは再選を確実にするためにも、ナーシルに強硬策で対抗しなかった。米国籍の船舶は星条旗を掲げて平穩に運河を通過し、新設のスエズ運河公社に通行料を払いこむ。

パリはカーヒラの遣り口に激烈に反応した。ギ・モレ首相の社会党主導連立政権は社会主義の基本原則と裏腹に、他国の国有化政策に断固として反対を唱える。その意図はフランス人に多い個人株主の権利を擁護するためでなく、北アフリカの反仏武力闘争を抑圧するためだった。ナーシルの冒険を黙って見過ごせば、アラブ民族主義の勝利と受け止められ、アルジャリアの民族解放闘争を煽り立てるだろう。地中海の対岸の武装蜂起はすでに一年半過ぎたが、火の手は一向に収まりそうもなかった。²¹

ナーシルの『革命の哲学』がフランス語に翻訳されると、この小冊子はヒトラルの『我が闘争』になぞらえられる。エジプトの革命指導者はスエズ運河の国有化で英仏両国の首相から敵役を割り振られ、ナチ・ドイツの独裁者と同一視された。

この単純な類比に英国首相のイーDONは飛び付き、ナーシルを〈ナイル河畔のヒトラル〉と呼ぶ。第二次世界大戦の前夜、英国のチェンイバリン首相はヒトラルの脅迫に屈し、チェカスロウヴァーキアを犠牲にした。だが、この宥和政策は独裁者の野望を膨らますだけで、結局のところ失敗に終わる。この時、イーDONは外相だったが、首相の方針に反対して閣外に去った。

歴史は繰り返す。イーDONは現代史の教訓を信じた。ナイルの独裁者を決して宥和してはならず、武力に訴えても打倒しなければならない——と。英国政府がナーシルの国有化に唯々諾々と従えば、やがて英国籍の船舶は法外な通行料を徴収されたり、イスラエル船の前例のように通過を拒否されたりするだろう。大英帝国はかつて七つの海を支配したが、いまや欧州の一小国に転落し

かねない。

この最悪の事態を仮定する以前に、イードンにはナーシルを毛嫌いする十分な理由があった。あの軍人出身のエジプト大統領はバグダード条約に反対し、アラブ世界の親英的支配者の足元を揺るがしている。東側から大量の武器を買い入れ、中東地域にソ連を引き入れた。カーヒラ放送はアラブ諸国だけでなく、キーニャなどアフリカの植民地にも反西側感情を伝播し、各地の武力闘争を激励している――と。

英仏両国首脳の情勢判断は、凶らずも一致した。とにかく非常手段を用いても、ナーシルを権力の座から引きずり降ろし、エジプトに穏健な政権を樹立せねばならない。1951年3月、イランの上下両院は石油産業の国有化法を制定し、英国のアングロ・イラニアン石油会社を接収した。しかし、米国の中央諜報局（CIA）の策動で、テアラーンの民族主義的急進派政権は崩壊する。この先例は参考になろう。

英仏両国の軍部は合同会議を開き、エジプト侵攻の軍事作戦を立案する。運河の即時奪取には、降下部隊の奇襲攻撃が効果的である。しかし、危険が大き過ぎるので、この案は見送られた。双方は作戦の開始時期を8月15日にひとまず設定する。だが、予備役の召集、艦隊の集結に時間を要し、準備が整わない。そこで予定日を9月26日に、さらに11月5日にまで延期した。

ダリスはイードンやモレと異なり、武力の行使に反対だった。彼は急いで英国政府と協議し、8月16日にランダンで国際会議を開催するよう提案する。ナーシルは招請に応じて出席の意志を表示したが、イードンが個人攻撃を加えたので、間際になってランダン行きをとりやめた。この会議には二十二カ国が参加し、その十八カ国の合意でスエズ運河の〈国際化〉を決める。

実際、スエズ運河の国有化問題は、法律論で英仏側に分が悪かった。運河会社がエジプトの法人なので、英仏両国の権限は及ばない。英軍の撤兵を取り決めた1954年の協定も、スエズ運河がエジプトの主権下にあることを改めて確認している。

しかも、ナーシルは株主に補償を約束したので、私有財産の侵害にならない。そこで西側の会議参加国はエジプトの主権を認め、十分な見返りを約束した上で、運河の国際管理を提唱した。だが、この十八カ国宣言は英仏の軍事力を後ろ楯にした脅迫と受け取られ、ナーシルに拒否される。

ランダンとパリは英仏国籍の水先案内人に引き揚げを指示し、船舶の運河航行を混乱に陥れようとした。スエズ運河公社はソ連など第三国から水先案内人を雇い入れ、狭い水路内の交通を混乱なくさばく。英仏の主張とは正反対に、国有化は自由航行の障害にならぬ事実が逆に立証される。

イスラエル エジプトがスエズ運河の国有化を断行した際、イスラエルの果す役割 ラエルはあまり反応を示さなかった。ユダヤ国家の建国以来、この国際水路はダヴィデの星の旗を締め出してきたからである。ベン＝グリオンはスエズ運河よりもティラーン海峡に向けられ、フランスからの武器購入で着々と軍備増強に努める。六年前の1950年、米英仏の西側三国は武器輸出の制限で、中東の軍事均衡を図った。エジプトとイスラエルの軍拡競争で、三国の共同宣言はすっかり空文となる。

イスラエル軍の首脳は武器取り引きを通じてフランス軍部と親交を深め、ひそかに対エジプト共同作戦の可能性を探る。スエズ危機は大国の支援を期待でき、対エジプト予防戦争のまたとない好機となった。フランス側もイスラエル側の意図を察して、対英軍事交渉の内容を伝達する。ベン＝グリオン首相は内閣改造で和平派のシャレット外相を更迭し、対外折衝の要職にメイアル（旧姓マイアスン、初代駐ソ公使、労相を歴任）を起用した。

彼女は国防軍幕僚長のダーヤーンと共に訪仏し、戦車、装甲車、対戦車ロケットなど砂漠の戦争に欠かせぬ兵器について、相手側から大量供与の約束を取り付ける。イスラエル軍部は装備の拡充で勝利の確信を得、ベン＝グリオン首相兼国防相の指示に従って作戦計画を立案した。もはや戦争目的はティラーン海峡の封鎖を解除するにとどまらず、シナイ半島を制圧してスエズ運河に迫るところまで拡大される。

英仏両国は軍事遠征の意図を隠蔽するため、米国の消極的態度にもかかわらず安全保障理事会にスエズ問題を持ち出した。ダリスは武力行使にあくまでも反対を唱える。フランスとイスラエルの密約に、ここで英国も参加した。10月22日、ベン＝グリオンみずから訪仏し、パリ近郊のセーヴルでモレと会談する。この席にランダンから外相のセルウィン・ロイドが加わった。²²

その三日後、三国は陰謀の合意に達する。戦争の筋書きは、次の通り配役を割り振った。まず、イスラエルがエジプトを攻め、次に英仏が調停者として振る舞う。エジプトは両国の干渉を拒絶するだろう。そこで英仏連合軍はかねての計画通り上陸作戦を開始し、スエズ運河地帯を占領する――と。²³ 開戦日はセーヴル会談の終了の四日後、10月29日の夕刻と決定した。ベン＝グリオンは閣議の多数決で戦争計画の承認を取り付け、予備役将兵の動員を命ずる。

30 侵略者、調停者、防衛者

シナイ半島 1956年10月29日の夕方、イスラエル軍の落下傘部隊に**侵攻開始** はシナイ半島のミトラ峠の東方に降下し、約四百の兵力でエジプト領土の奥深い場所に陣を固めた。この要衝はスエズ運河から約七十キロ離れ、エジプト軍の反撃を食い止めるのに絶好の場所である。この侵攻作戦の目的はセーヴル秘密協定で取り決めた通り、英仏両国に軍事介入の口実を作らせることだった。

当初、エジプト軍の首脳部はイスラエルだけでなく英仏両国までを相手に回す大戦争の序曲とは思ってもよらず、これを大規模な限定攻撃と判断した。その頃、イスラエル軍は陽動作戦としてヨルダンに対して越境攻撃をしきりに繰り返していたので、落下傘部隊の奇襲も対フィダイン報復行動の一環と考えられたからである。²⁴

ところが、この空挺作戦に引き続いて、イスラエル軍の主力は矛先を東のヨルダンから転じ、反対方向のシナイ半島に向けた。その機甲部隊は国境付近のエジプト軍の哨所を踏みにじって砂漠を横断し、二昼夜後にミトラ峠の落下傘部隊と合流する。ユダヤ国家の軍勢は同時多発的にガザ地帯やシナイ半島北部の地中海の沿岸部の軍事拠点を襲い、さらにアカバ湾の沿岸地方でも攻勢に出る。もはやイスラエルの軍事的意図に、疑う余地はなかった。

10月30日、英仏両国はセーヴルの密約に従って、交戦中の二国に対して厳しい文面の最後通牒を発する。エジプトとイスラエルの軍勢がスエズ運河からそれぞれ十六キロずつ撤退しなければ、英仏両国は武力に訴えても運河の安全を確保するだろう——と。つまり、西欧の二国は交戦国の兵力引き離しを口実に設けて、三カ月前に国有化されたばかりの国際水路を軍事力で奪還しようと試みたのである。

لندنとパリの意図は、あまりにも見え透いていた。エジプトはスエズ運河の東岸、自国領のシナイ半島のあちこちに哨所や駐屯地を設け、正規軍や国境警備隊を配備している。一部の部隊は運河から約二百キロも離れた地点に位置し、係争中の水路の安全航行問題とは全く無縁だった。一方、イスラエル軍の先鋒部隊はミトラ峠の近くには布陣したが、なお運河から遠く離れている。シナイ砂漠の各地で激戦が展開されても、この水路は戦火の脅威に直接さらされていない。

だが、英仏両国は真の意図を隠して調停者を装い、侵略者にも防衛者にも等

しく撤退を要求した。換言すれば、この最後通牒はイスラエル軍にはスエズ運河近くまで進撃を保証し、エジプト軍には固有の領土を放棄して運河の西岸に兵を引くよう強要するのに他ならない。この理不尽な要求をナーシルは英仏の意図通り拒否し、ベン＝グリオンは筋書き通り受諾する。

英仏両国の 最後通牒の期限が切れた10月31日、英仏両軍の爆撃 軍事介入 機はサイプラス、モルタ両島、それに地中海上の航空母艦から出撃し、エジプト各地の空軍基地に波状攻撃を加えた。両国の直接介入でエジプトは多数の軍用機を地上で破壊され、航空戦力のほとんどを喪失する。生き残った飛行機はスーダンやサウディ・アラビアなど近隣のアラブ諸国に逃れ、辛うじて全滅を免れた。

しかし、連合軍の空爆開始は予定よりずっと遅れ、イスラエルの不信を買う。最後通牒は10月29日の夕刻に発せられ、三十六時間の期限は10月31日の早朝に切れた。ところが、実際の爆撃が開始されたのは、同じ日の夕方になってからだった。戦火の拡大を見越して、米国はエジプト在住の自国民をカーヒラ郊外の空港に集めた。その引き揚げが完了するまで、英仏軍は爆撃を延期せねばならなかった。

空の援軍の到来が遅いのにはいらだち、とりわけミトラ峠の先遣隊の孤立を恐れて、ベン＝グリオンは最後通牒の受諾を一時撤回したほどだった。ようやく宿敵の空軍が壊滅したので、イスラエルは前線も銃後も空襲の脅威から解放され、シナイ半島の地上戦に総力を傾注できた。新手の敵の出現で砂漠で苦戦中のエジプト軍が背後を衝かれるのを恐れ、ナーシルは各地の部隊にスエズ運河の西岸まで退却を命令する。²⁵

英仏の参戦と同時にナーシルは捨て身の反撃に出て、スエズ運河の閉鎖を命じた。数十隻の船が砂漠の水路に沈められ、運河の航行を完全に遮断する。イードンとモレは向こう見ずの軍事冒険に乗り出し、最も恐れていた事態を自ら招く。もはや油槽船はペルシア湾から西欧の港に最短路を取れず、アフリカ最南端の喜望岬を大きく迂回せねばならない。西欧の先進工業諸国が中東地域の地下資源にいかにか依存しているか、この機会に凶らずも例証される。

シリアはエジプトとの相互防衛条約に基く義務の発動を申し入れたが、ナーシルの要請で直接参戦を思いとどまった。しかし、自国領内で送油管の中継所を爆破し、兄弟国の抵抗に側面支援を惜しまない。この原油の大動脈はイラクの油田と地中海岸の積み出し港を結び、シリア国内を横断している。一方、アラブの連帯感からアラビア半島の専制王国もナイル河畔の革命共和国に声援を送り、しばらくの間、英仏両国に原油の輸出を禁止した。その年の冬、西欧諸国は燃料不足で震えあがる。

国際社会の対応策 もともとスエズ運河の国有化は、米国の対エジプト借款の撤回に起因する。だが、ウォシントンにとって、ランダンとパリの軍事介入は寝耳に水であった。アイザンハウアもダリスもナーズイルに対して、イードンやモレと共通の認識を抱く。しかし、戦争開始の時期が、あまりにも悪過ぎた。米国では大統領選挙がまさに始まろうとし、アイザンハウアは再選を狙っていたからである。²⁶

ホワイトハウスは中東の戦火に迅速に反応する。早くも10月31日、米国は安全保障理事会に緊急の決議案を提案した。それはまずイスラエル軍の即時撤退、ついで国際連合の加盟国による武力行使や威嚇の自制、そしてイスラエルへの援助停止を呼び掛ける。英仏両国は軍事介入に対する米国の反対をあらかじめ見越して、安全保障理事会が開催される直前まで、西側陣営の最大の盟邦にも最後通牒を隠していた。

この提案は安全保障理事会で多数の支持を得ながら、英仏両常任理事国の拒否権で葬り去られる。ソ連も米国と同じ趣旨の提案を試みたが、同様の憂き目に遭った。国際連合は創設時の理想をよそに、平和維持機構としての機能を失いかける。思いがけぬ西側陣営の内部対立のため、大国中心の安全保障理事会が身動きできなくなったからである。

スエズ危機の深層には、中東地域における米国とソ連の角逐が横たわる。しかし、両超大国は別々の動機から軍事的紛争の収束に向けて、期せずして足並みを揃えた。アイザンハウアは軍人出身の政治家だけに、スエズ・シナイ軍事衝突の危機を深く認識する。この局地戦が中東地域に限定されず、やがて超大国を巻き込んだ世界大戦に拡大しないか――と。実際、ソ連はエジプト攻撃の三国に対して警告を発し、核ロケットの使用をほのめかす。

国際連合ではアラブ世界、アジア・アフリカの新興諸国はもとより、カナダなどの英連邦諸国まで一致して、英・仏・イスラエルの軍事行動を厳しく非難した。設立からすでに十年以上を経過し、国際連合の構成国はパレスチナの分割を決議した時代に比べて、大きな変化を遂げていた。安全保障理事会の手詰まり状態を打開するため、緊急総会がユーゴスラヴィアの提唱で招集され、六十四対五の圧倒的多数で大国の横暴を封ずる。²⁷

1956年11月1日、国際連合の総会は中東情勢の討議を始め、翌11月2日の暁の会議で即時停戦と三国軍の撤退を決議した。さらに総会はカナダの提案に基づき、国連緊急部隊を編成してスエズ運河地帯とシナイ半島に派遣するよう決める。しかし、この間も英仏両国の航空機はナイル河畔の軍事目標に爆弾を投下し、イスラエル軍の戦車は退却中のエジプト軍を追撃し、あるいは孤立した陣地に猛攻を加えた。

国際連合が安全保障理事会と総会で中東の戦火を消し止めるのに躍起になっている一方で、巨大な戦争機械はひとたび回りはじめたら、もはや止めることができない。作戦計画は英仏の両国間で綿密に練り上げられているだけに、発動後の取り消しは不可能だった。すでに英仏海軍の艦隊と護送船団は地中海を東に向かって航行中で、空挺部隊はサイプラス島で待機していた。ところが、国際社会の圧力があまりにも高まったために、11月5日、落下傘部隊は作戦の日程を繰り上げて運河地帯に降下する。

翌6日、ようやくナイル河三角洲の沖合に、大艦隊が姿を現す。軍艦は船脚の遅い輸送船に速度を合わせたので、停泊地のモールタ島やアルジェ港を出てから到着まで一週間近く要し、ほとんど戦機を逸しかけていた。ただちに地中海の浜辺で、英仏軍の敵前上陸が始まる。

エジプト側は民間人にも武器を与えて抵抗したが、艦砲射撃と空爆の圧倒的火力に制圧された。運河北端の港町ポートサイドとポートファハドは、それぞれ英仏上陸部隊の攻撃で陥落する。防御側は大きな損害をこうむり、将兵だけでなく住民の間にも死傷者が続出した。

国際世論は日増しに侵攻側に不利となった。両国とも急いでスエズ運河奪還の既成事実を作らねばならない。英仏軍の戦車を始めとして種々の軍用車輛は水路沿いの狭い道路をひしめきあいながら、南の方角へ向かって進撃する。めざすは運河南端の港町スエズで、そこを占領しなければ軍事介入の目的は達成できない。もはや首都カーヒラの攻略、ナーシルの打倒、そして親西欧政権の樹立など論外だった。

イスラエルは西欧の二国に先んじて、停戦決議の受け入れを表明する。英仏軍の上陸が始まる以前に、エジプト軍の総退却でイスラエル軍はシナイ半島の全域を占領した。あの最後通牒が口実にした兵力の引き離しは、とうに意味を失っている。これ以上、国際社会を敵に回すのは、戦後処理の問題を考慮すれば決して得策でないからである。

イードン 侵攻軍が海岸から運河沿いに約四十キロほど進撃したところ、突然、英軍部隊は لندن から作戦中止の指示を受けた。イードンは国際世論の圧力と国内の反対に抗し切れず、同盟国にも軍部にも諮ることなく国連総会決議の受諾を決める。停戦は11月7日の午前零時に発効し、英軍の軍事介入に一週間で終止符を打つ。モレは盟邦の一方的戦線離脱に激怒し、イードンに戦争の継続を強く迫った。

しかし、連合軍の陣営に足並みの乱れが生じたからには、いまや共同作戦の遂行は画餅と帰している。仏軍は独力で戦い抜くことはできず、渋々ながら英軍に追随する他ない。スエズ遠征の軍事冒険が竜頭蛇尾に終わった結果、両国

の国際的威信は文字通り地に墜ちる。二十世紀も後半に入って、西欧の旧大国が軍事力を背景に、勝手に振る舞える時代ではなくなっていた。

イードンがナースィル打倒とスエズ運河奪回の戦争に乗り出した際、英国内の世論は真相を知らされぬまま、彼の大胆な（そして無謀な）決断に歓呼の声を上げる。多くの新聞は首相の決断を称賛し、議会は二百七十対二百十八票で軍事行動を支持した。²⁸ しかし、彼の国際情勢の判断には、大きな誤算があった。アイザンハウアは再選をめざす選挙戦に忙殺され、遠いスエズの問題に口出しすることはあるまい。フルシチョフは折りから突発したハンガリ動乱に心を奪われ、中東地域に干渉する余裕はないだろう——と。

ところが、米国は戦火の消し止めに強硬手段を用い、大西洋の対岸の同盟国に厳しい対抗措置を課した。ポンドが米国の外国為替市場で大量に売りに出されたため、戦いの最中、英国は深刻な通貨危機に直面する。しかも、原油の流れが中東地域から途絶したので、別の供給源を手当しなければならない。英国は石油の緊急輸入に米国からの借款を緊急に必要としたが、ウォシグタンはランダンの要請に応ずる前提条件として停戦の実現を強く迫った。イードンは搦め手からの締め上げに音をあげ、国連総会決議に応ずるしかない。

ソ連は西側から干渉されぬ間にハンガリに戦車部隊を送り込み、反ソ蜂起を武力の誇示で強引に抑えこむ。続いて中東の動乱に目を転じ、ランダンとパリ、そしてテラヴィヴに核攻撃の可能性を示唆した。²⁹ その一方で、米国に事態収拾のため共同出兵を提案する。この申し入れをウォシグタンがさすがに断ると、マスクヴァは東側陣営から義勇兵の派遣をほのめかした。

1950年代の半ば、ランダンとウォシグタンはソ連の進出を封ずるため、苦心の末に中東地域に反共の防壁を築き上げる。しかし、イードンの短慮が最大の盟邦から強い不信を買い、一時的とはいえ、米ソ協調の奇妙な事態を招いた。スエズ・シナイ戦争の不名誉な失敗の結果、英国は第一次世界大戦以来、アラブ世界に営々として築き上げた影響力を失う。それはバグダード条約の反対運動、スエズ運河の国有化など一連の動きにもかかわらず、この英首相（皮肉なことに、アラブ連盟の生みの親だった）がアラブ民族主義に基本的理解を欠いた当然の結末に他ならない。

イスラエル 英・仏・イスラエルの三国は対エジプト戦争で共同の戦争目的 謀議をめぐらせたが、それぞれ別々の戦争目的を抱く。英国はスエズ運河を武力で奪還するために、仏国はアルジアリアの抵抗運動を封ずるために——。

一方、イスラエルは全く別個の狙いを秘めていた。英仏両国が参戦の口実にしたスエズ運河の安全航行について、もともとユダヤ国家は大した関心を寄せ

なかった。建国以来、この国際水路はイスラエル船舶の通過を拒否し続けてきたからである。

かねてからベン＝グリオンは対エジプト予防戦争論者で、ひそかに開戦の時期を窺っていた。隣国がソ連製の武器で強大になる前に攻撃を仕掛け、自国の脅威にならぬまでにたたきのめす。そのためには、まずシナイ半島の哨所や陣地などエジプト軍の施設を破壊し、次にガザ地帯を占領してゲリラ活動の根拠地を壊滅させねばならない――と。しかし、最大の目的はティラーン海峡の封鎖解除で、アカバ湾の自由航行を実現することだった。

開戦後、シナイ半島の戦線は中部の砂漠にとどまらず、北部の地中海沿岸部に拡大した。イスラエル軍の猛攻の前に、各地でエジプト軍は大損害をこうむる。ナセルの退却命令で西へ撤収する部隊に、イスラエル軍は空から容赦ない打撃を加えた。機甲部隊の急追で多数の敗残兵が捕虜となり、あるいは砂漠をさまよった末に飢えと乾きで死んだ。ガザ地帯は包囲されて孤立し、もはや援軍の望みを絶たれる。ここのエジプト駐屯軍は多数のパレスチナ人を徴募してただけに最後まで戦ったが、優勢な敵軍に陣地を踏みにじられる。

ミトラ峠の落下傘部隊は増援部隊と合流したのち、大きな損害を出しながらエジプト軍を要衝から駆逐した。³⁰ その後は運河に向かって進撃せず、攻撃方向を転じてスエズ湾沿いに南下を続け、一路、シナイ半島先端のシャルムエッシェイクをめざした。一方、別の部隊はエイラト付近でエジプト領に侵攻すると、アカバ湾沿いの難路を同じ目的地に向けて行軍する。

ここの守備隊は二方面から敵を迎え、孤塁に立て籠って絶望的な抵抗を続けた。だが、敗北は時間の問題だった。11月5日朝、エジプト軍最後の拠点シャルムエッシェイクが陥落し、シナイ半島の戦闘は終わる。英仏連合軍が地中海の海岸に上陸する前日のことだった。これでティラーン海峡は封鎖を解除され、船舶の自由航行が復活する。イスラエルは英仏両国とは異なり、戦争目的をひとまず達成した。

ナーシルの外交的勝利 この戦争でエジプトは軍事的敗北を喫する。シナイ半島の全域をイスラエル軍に占領されたばかりか、スエズ運河の四分の一を英仏軍に制圧された。虎の子の空軍は連合軍の空襲で撃滅され、陸軍は退却の途中に大量の重火器を失う。装備の損害だけでなく、人命の損失も多大だった。僅か一週間の戦闘で、死者の数は民間人も含めて推定三千に達する。イスラエル軍も約二百人の戦死者を出したが、英軍のそれは十六人、仏軍はただの十人に過ぎない。³¹

しかし、ナーシルは軍事的敗北を外交的勝利に変えた。侵攻側は世界世論の猛烈な非難を浴び、国際社会で完全に孤立する。エジプトは西側陣営の内部

対立に乗じて、巧みに米国を取り込んだ。クレムリンの対三国核ロケット警告、米ソ共同出兵案の反響を利用しながら、カーヒラはマスクヴァに一定の距離を置き、ウォシグタンを味方に付ける。さらに停戦の実現に向けて、大多数の国連加盟国の支持を獲得した。

ナーシルの人気は、エジプト国内はもとよりアラブ世界の全域で、計り知れないほど高まった。このアラブ民族主義の旗手は、英雄サラハッディーン（サラディン）の再来に他ならず、二十世紀の十字軍、すなわち西欧植民地主義と帝国主義、それにシオン主義の軍勢を見事に撃ち破った——と。ナーシルが自ら調印した対英条約は破棄され、運河地帯の英軍基地は莫大な軍事物資と共にエジプトの手中に移る。無謀な戦争の結果、英国の残存勢力はナイル河畔から完全に払拭された。

英仏両国はスエズ運河地帯に居座りを画策し、国連緊急部隊に侵攻軍の編入を試みる。しかし、英連邦のカナダ、インドの強い反対に直面し、この意図を実現できなかった。両国とも年末までにエジプトから撤兵を完了する。西欧の二国のスエズ遠征は何を得ることもなく、散々な不首尾に終わった。

イスラエルは勝利の果実を手放そうとせず、なかなか撤兵に応じないばかりか、ガザ地帯の併合さえ企んだ。しかし、国際連合の圧力、米国の経済制裁の可能性の前に、1956年12月から翌年1月にかけて、渋々ながらシナイ半島から撤退を開始する。その過程で焦土作戦を実行し、建物、道路、鉄道を爆破した。さらにフィダイーンのゲリラ活動根絶の保証を要求して、それから一カ月あまりガザ地帯に居残る。

1957年3月7日、イスラエル軍の最後の部隊はようやくガザ地帯から撤退し、代わって国連緊急部隊が進駐した。住民は平和維持の混成部隊に敵意を示し、親エジプトの示威行進で手荒く歓迎する。異国の軍隊は催涙弾だけでなく、実弾を空へ発射して、秩序を回復せねばならなかった。翌日の3月8日、シャルムエッセイクの要衝は停戦監視と平和維持の軍勢に明け渡され、イスラエルはエジプトの領土から一兵残らず引き揚げる。

31 ナースィル主義の台頭と挫折

アラブ民族主義 スエズ・シナイ戦争の外交的勝利の結果、
の旗手として ナースィルの威信と声望はアラブ世界で絶頂に達する。あの手痛い軍事的敗北は、少しも問題にならなかった。イスラエルと戦っている真最中に、西欧の二大強国に背後から攻撃された——と説明できるからである。

すでにスエズ運河の国有化以来、彼の人気は熱狂的な高まりを示していたが、これで大衆の間に揺るぎない支持基盤を固める。もはやナースィルはエジプトの大統領にとどまらず、北アフリカ、西アジアのイスラーム圏において、国際的指導者の地位を確立した。

この軍人出身の権力者はもともと強固な反共主義者で、その信念をのちのちまで持ち続ける。しかしながら、同時に変わり身の速い現実主義者で、西側を牽制するために必要とあらば、東側から武器の大量購入も辞さなかった。彼は東西両陣営の対立の狭間で独自の政治観を情勢に即して発展させ、やがて独特の〈アラブ社会主義〉体制をナイル河畔に樹立する。

彼の思想と行動は一般に〈ナースィル主義〉の名で概括され、その一端を小冊子の『革命の哲学』で知ることができる。戦争の結果、英仏植民地主義の残滓が一掃されて以来、アラブ民衆の間で過大なまでの期待感が、この立役者に寄せられた。実際、ナースィル主義は体系的な政治・経済変革の理論ではなかったが、大衆の心に根深い反西欧感情を代弁していた。

いまやナースィルはアラブ民族主義の旗手として、革命的、進歩的、そして反封建闘争の先頭に立つ。西欧帝国主義からの完全独立、困襲と貧困からの脱却……。大衆の期待感は、ますます高まった。この指導者の下にアラブ世界が大団結すれば、対イスラエル雪辱戦の勝利は疑いない——と。各国の反体制勢力はエジプト大統領の言動を自己に都合よく解釈し、それぞれが〈ナースィル主義者〉と自称した。

この風潮は各国の伝統的支配層に脅威をもたらし、ナースィルの名前を冠した急進派の活動に強い警戒心を呼び起こす。第一次世界大戦でオスマン・トルコ帝国の支配が崩壊して以来、各国の権力者は西欧勢力と結び付いて地位と特権を維持してきた。アラブ民族主義運動の新たなうねりを前にして、親西側諸国——とりわけイラクやレバノン——は従来の英仏両国に替わって、米国に保護者の役割を求める。

西側陣営の巻き返し 米国は戦争の火消し役を務め、英仏両国を抑えこんだ。しかし、血は水よりも濃い。ウォシントンではマスクヴァの出方を注視し、間もなくランダン、パリと関係を修復する。戦前から米国はエジプト中立主義をソ連共産主義の別動隊として危険視したが、戦後はナースィル主義の急速な台頭で改めて危機感に取りつかれる。英仏両国の退場で中東地域に生じた政治的・外交的・軍事的真空状態を、ソ連が満たすのではないかと。

戦争の終結から僅か二カ月後の1957年 1月 5日、アイザンハウアは年頭教書で中東地域に年間二億ドルの経済援助の支出を求め、さらに大統領に米軍派遣の権限を付与するよう議会に要求した。その目的について、米国大統領は断言する。国際共産主義に支配されたいかなる国からの明白な武力侵略に対抗するため、援助を希望し、かつ要請する国家の領土保全と政治的独立の保障と保護のため——と。³²

この外交方針はアイザンハウア・ドクトリンと呼ばれ、バグダード条約の場合と同様に、アラブ世界を東西両陣営の対決に巻き込む。当初、この米国の新中東政策に対して、ナースィルは批判を控え目にとどめた。まだイスラエル軍がガザ地帯とシナイ半島の先端に居座り、その全面撤退の実現までに米国の外交的、経済的圧力を必要としたからである。1957年 3月、ベン＝グリオンが占領地から総引き揚げを命令したので、ナースィルに遠慮は無用となった。

ナースィルの立場から見れば、アイザンハウアの政策表明は、エジプトの孤立化をめざす陰謀に他ならない。英仏両国はアラブ民族主義の高まりを全く理解せず、武力でナースィルをアラブの指導的地位から追い落とそうとした。手段は異なるようでも、米国の新政策も同様なことを意図している——と。カーヒラの宣伝放送〈アラブの声〉は強力な電波で、各地のナースィル主義者たちに直接に訴えかけて、アラブ世界の隅々にまで米国の中東政策に反対の見解を流布した。

実際、アイザンハウアもダリスもアラブ世界の实情に疎く、共産主義と急進的民族主義を混同し、折りから上げ潮のナースィル主義を敵視する。一方、伝統的支配層は国内の反体制運動に直面しているだけに、反共の立場を鮮明にして米国の経済援助と軍事的支援を当て込んだ。

アラブ諸国の動揺 アイザンハウアの中東政策は一種の踏み絵として、国際共産主義（この間接的表現は、言うまでもなくソ連を指す）に対する態度表明を迫り、アラブ世界を紛糾の渦中に投げ込む。イラクはバグダード条約機構の主要な柱で、ソ連のすぐ南に位置するだけに、米国の新方針に異存のあろうはずがない。だが、スエズ動乱の後、学生運動が

街頭で荒れ狂って、同盟罷業も続発する。サイド首相は事態収拾のため、一時的に政権の座から降り、態度表明どころではなかった。

隣国のヨルダンでも、青年国王のフセインは困難な立場に追い込まれる。ほんの一年前、彼は権力維持のためにアラブ民族主義を利用し、軍隊から英国人の指揮官を追放した。だが、将兵の一部にはナースィル主義の熱心な同調者がおり、半ば公然と王制の転覆を狙う。さらにスエズ・シナイ戦争直前の総選挙で成立した内閣は、ナースィルの非同盟・積極的中立路線を評価し、ソ連と外交関係の樹立を画策した。

結局のところ、フセインは王室に忠誠な遊牧部族の力で軍部を粛清し、ついで1957年4月には中立主義指向の内閣を解任する。³³ その間、米海軍の第六艦隊は東地中海で軍事力を誇示し、必要ならば直接介入の構えを見せた。フセインはアイザンハウア・ドクトリンを公式に受け入れなかったが、米国から武力による保護と経済援助を引き出す。ヨルダンの危機は、ナースィル主義の最初の挫折と解釈された。

レバナンは米国の中東政策を受け入れた唯一の国で、1957年3月、協定調印に漕ぎつける。この地中海岸の小国はアラブ世界で例外的に、キリスト教徒がイスラーム教徒よりも多かった。トルコの支配下、クリスチャンは自治権を享受し、西欧諸国と特殊関係を結んで、その庇護下に入る。第一次世界大戦後、仏委任統治の下でレバナンはシリアから分離され、キリスト教徒が人口の過半数を制した。

第二次世界大戦中の反仏独立運動の過程で、キリスト、イスラーム両教徒の代表は協約を結び、当時の人口統計に見合う形で政治権力を宗派ごとに分配した。その結果、大統領は最大勢力のキリスト教マロン派に、首相はイスラーム教スンナ派に割り振られ、その他の要職も勢力比に応じて占められる。独立後のレバナンはアラブ世界の一員でありながら、キリスト教を通じて親西欧の色彩を濃く帯びていた。

憲法の規定によれば、国家元首の任期は一期（六年）限りだった。ところが大統領のカミュ・シャムウーンは再選を狙い、任期満了の一年前の1957年に憲法改訂を画策する。政治権力の微妙な均衡が崩れるのを恐れ、他の宗派は反対運動に乗り出した。シャムウーンは再選阻止の活動をナースィル主義者の策略に違いないと疑い、その背後に〈国際共産主義〉の黒い影を見出す。レバナン国内の政争は、アイザンハウアの新中東政策にからんで、にわかに国際問題に発展した。

この国の正規軍は弱体で、各宗派が私兵を抱える。大統領再選問題は武装集団の衝突となって火を噴き、もともと統一性に欠けるレバナンを内乱状態に陥

れた。シャムーンがアイザンハウアに出兵を要請したので、1958年7月15日、米国人の生命保護の名目で、米海兵隊の第一陣約三千六百人が首都ベイルートの浜辺に上陸し、その後、増援部隊が到着する。だが、米軍部隊は内戦に介入することなく、海岸と空港付近に布陣するだけだった。

シャムーンは米国の意向に従って再選断念を公式に表明し、7月31日に正規軍の最高司令官フアド・シェハブが次期大統領に選出された。³⁴ これでレバナンの内戦は収束に向かい、米軍も10月に撤退を完了する。しかし、アイザンハウア・ドクトリンの発表から約二年、米国は中東地域を西側の勢力圏に収めようとして、ソ連に軍事力を見せ付けた。それは同時にナースィル主義の伝播を阻止するために、アイザンハウアが仕組んだ挑戦だった。

エジプトとシリアの合邦 1958年2月1日、シリアとエジプトは合邦を宣し、新しい国名を〈統合アラブ共和国〉と称した。³⁵ これは両国の諸制度を残したままの緩い国家連合でなく、軍事、行政、立法面で一体化した完全統合である。ナースィルは新国家の大統領に就任し、アラブの統一に向けて大きく前進する。

ナースィル主義の新共和国は三千万（北部地域＝旧シリアが五百万、南部地域＝旧エジプトが二千五百万）の人口を擁し、見掛けは堂々たる大国である。その出現はイラク、ヨルダン、レバナンの親西側諸国を深刻な危機感の淵に陥れた。イスラエルも脅威を感ずる。地図を見れば明らかな通り、シオン主義国家は北と南の両面から挟み撃ちされかねない。それに急進国家の統合はパレスチナ人を鼓舞し、反シオン主義の実力行使に駆り立てるだろう

しかしながら、エジプトとシリアの国家統合は、もともと矛盾をはらんでいた。その樹立はアラブの統一という高邁な理想からではなく、シリア政界の権力闘争——共産党とバース党（アラブ復興党）との角逐に始まる。後者は前者の勢力伸長を抑え込むために、ナースィルの大衆的人気を利用した。しかも奇妙なことに、両政党とも民衆の支持を得るために、互いに声高にアラブの統一を叫ぶ。

シリアはナイル河とチグリス・ユーフラテス両大河の流域に発達した二つの文明圏の中間に位置し、古代からエジプトとメソポタミアの二大勢力に翻弄される。時代が二十世紀の中葉となっても、この国の政治家は親エジプトと親イラクの両派に大別された。シリアの内政は絶えずアラブ世界内部の外交関係に規定され、常に二者択一を迫られる。また軍部は政治に深く関与し、武力で歴代の政権の命運を握る。

シリアは高い文化水準を誇り、アラブ民族主義の揺籃だった。仏委任統治下、若い留学生はパリで西欧の近代政治思想の洗礼を受け、帰国後に政治団体を結

成して反仏解放闘争の戦列に加わる。そして、西欧帝国主義列強によって引かれた人工国境を否定し、汎アラブ主義を主張した。この政党はシリア国内にとどまらず、イラク、ヨルダン、レバナンにも根を張り、のちに社会主義政党と合同して支持基盤を拡大する。³⁶

1954年 2月、シリアの軍部独裁政権は、またもや軍事政変で打倒された。久しぶりに立憲政治が復活すると、多数の政党は活動の自由を取り戻す。その合従連衡の中から、やがて親エジプト派が親イラク派を押え込んで、政界の実権を握った。ディマシュクはバグダード条約、スエズ運河の国有化をめぐる、常にカーヒラに支援を惜しまない。スエズ・シナイ戦争後のアラブ民族主義の高まりと共に、シリアのナースィル主義者はますます勢いついた。

三つ巴の 権力闘争 1957年、アイザンハウアの中東政策によって、シリアはアラブ世界で孤立感を深める。隣接のイラク、ヨルダン、レバナンはいずれも米国に傾いた。親西側諸国の圧力に対抗して、ディマシュクはカーヒラとマスクヴァの支持を当て込む。その結果、シリアの中立主義的連立政権は、真っ二つに割れた。親エジプト派はバース党と古くからの民族主義的政党、親ソ派は共産党——この対立に軍部がからむ。

この複雑な内部情勢は、米国に早まった判断をもたらす。³⁷ シリアがますますにもソ連の衛星国になるのではないかと。アイザンハウアは周辺諸国を唆し、武力でシリア政府の転覆さえ検討した。バース党も別の理由から、米国と同様の結論に達する。共産党が強くなり過ぎて政治の主導権を奪い、ディマシュクはマスクヴァの下僕になるのではあるまいかと。

そこでバース党はナースィルに接近し、共産党の勢力を抑制するために、シリアとエジプトの合邦を求めた。共産党も競争相手を出し抜くために、両国の統合を主張する。その真の意図は表向き理想論を唱えて、実現を不可能にすることだった。同志が兄弟国でどのように弾圧されているか、良く知っているからである。それぞれの独自性を残した国家連合ならともかく、全面統合はナースィルが拒否するに違いない——と。

ここで軍部も合邦論議に一枚加わり、軍首脳部がカーヒラを訪れてナースィルに会う。バース党出身の外相も後を追ひ、会談に出席した。ディマシュクの文民政府は軍の政治関与の歴史を知り過ぎているだけに、事態がここまで進展すると、性急な合邦に慎重な閣僚も口を閉ざすしかない。

アラブの大同団結は、ナースィル年来の悲願である。しかし、現実に照らし合わせると、あまりにも困難が大きい。近隣のアラブ諸国はシリア国内の抑圧された親西側勢力と結び、軍事介入に踏み切りはしないか。米国はアイザンハウア・ドクトリンを振りかざして、どのように反応するだろうか。ナースィルは

何度もためらった末に、友邦の申し出に絶対的条件を課した。両国の合併は緩い連邦や国家連合ではなく、行政機構も国連代表権も完全に一体化した全面統合でなければならない——と。

もはや両国の合邦は、停められない形勢となった。バース党はナーシルの要求——全政党の解散さえ受諾する。革命後のエジプトでは、政党活動はすっかり息の根を止められた。政治結社は翼賛団体の〈国民同盟〉（後に〈アラブ社会主義者同盟〉と改称）だけとなっている。バース党はナーシルの力で共産党を押さえ込めば、その後は自由に振る舞えると信じた。共産党は危険を悟り、地下に潜行する。

1958年1月末、軍部の圧力でシリア政府の閣僚はカーヒラに赴き、エジプト側との合同閣議で正式に国家統合を決定した。半月後、この歴史的合邦は国民投票に付され、両国で99.9%の賛成票を獲得した。ナーシルが新発足の統合アラブ共和国の大統領としてシリアを訪れると、行く先々で民衆の熱狂的歓迎を受ける。

ナーシル主義の国家がアラブの広汎な統合をめざせば、近隣諸国を引き込まずには済まない。親西側のイラクはアラブ急進勢力の結集を脅威と受け止め、シリアとエジプトの合邦から僅か二週間後、同じハーシム王家のヨルダンと〈アラブ国家連合〉を形成した。

一方、シリアとエジプトの合邦は、思いもよらぬ方角から反響を呼び起こす。アラビア半島の一隅から、専制首長国のイエマンがナーシル主義の共和国に提携を申し入れた。この小国は険しい山岳地帯に位置し、イマーム（イスラーム教の指導者で首長を兼ねる）のアハメドが、長い年月にわたって神権体制を維持していた。この中世的宗教国家と進歩的共和国は緩い連合体を結成し、もっともらしく〈統合アラブ国家〉と称する。

イラク 1958年7月14日、イラクの王制と政権は、突然の**軍事革命**で崩壊した。ヨルダンとの“王様連合”は結成から半年と経たぬうちに脆くも瓦解し、バグダード条約機構の主要な柱はあっけなく倒壊する。幼王のファイサルを始め王族は皆殺しの憂き目に遭い、首相のサイードも女装して逃亡中に殺された。

統合アラブ共和国が成立してから五カ月余り、イラクはナーシル主義の拡大に不安を抱く。親欧米派のサイード首相は軍部に対して、二箇旅団をヨルダンの北部に移動するよう命じた。その目的はまず国内の治安を固め、次にレバノンのシャムウン大統領を支援することである。ところが、レバノンへ出兵するにはシリアを通過せねばならず、ナーシル主義の統合アラブ共和国と一戦は避けられない。

王室と政府の伝統的な親西側路線と裏腹に、軍の内部ではナースィル主義者がひそかに地歩を固めていた。アブダルカーリム・カーシム准将とアブダルサラーム・アーリフ大佐の部隊は命令に反して目的地に向かわず、方角を変更してバグダードへ進撃する。王制廃止と共和国樹立の宣言後、二人の軍人は首相兼国防相、副首相にそれぞれ就任して権力を分かち合った。³⁸

イラクの軍事革命はアイザンハウア・ドクトリンに痛烈な打撃を加え、アラブ世界の隅々までナースィル主義の勝利を印象づける。西側陣営はソ連の進出を抑制するという口実の下に、アラブ民族主義を国際共産主義の亜流と見做し、中東地域を米国の軍事的秩序に従属させようと試みた。だが、イラクの親欧米体制の転覆で、その目論見は見事に外れてしまう。

ヨルダンとレバナンは、イラクの新情勢で共に窮地に陥った。両国でナースィル主義者は勢いづき、反政府運動の火の手が盛んとなる。フセインの要請を受けて、英国はヨルダンへ兵員を緊急空輸した。こともあろうに、輸送機の編隊はイスラエルの許可を得て、その領空を飛行する。一方、米国はシャムウンからの救援の求めに応じ、ベイルートの浜辺に海兵隊を上陸させる。

アラブの大同団結は、イラク革命の成功で、すっかり条件が整うかに見えた。当初、カーシムは統合アラブ共和国への参加を匂わせ、民衆の期待に答える素振りを示す。だが、カーヒラ、ディマシュク、バグダードの三都は、容易にアラブ民族主義の太い鎖で結ばれなかった。アリーフは熱心なナースィル主義者だけに、革命の同志のカーシムに早期合邦を迫る。やがて両者の対立が表面化し、後者は副首相の地位を追われて失脚した。

王制時代、イラクの共産党はたびたび弾圧を受けて地下に潜行したが、革命後は公然と政治活動を始める。カーシムは自己の権力を維持するため、その組織力と行動力を利用し、ついでソ連と関係を改善する。一方、ナイル河畔とチグリス・ユーフラテス流域の対立は、王政打倒後も再燃した。1959年3月、親ナースィル派の将兵はイラク北部のモウサルで決起したが、逆にカーシムの軍勢に鎮圧される。

革命後、ナースィルはカーシムに軍事援助を惜しまなかったが、いまや一転して容共的態度を非難する。両者の対立は、もはや抜き差しならない。その年の始めから、ナースィルはシリアとエジプトで共産黨員と同調者の大量逮捕に踏み切った。彼は断言する。共産主義者はイラクの共産化を図るため、ぞくぞくとバグダードへ押し寄せている。アラブ諸国はイラクから赤化し、やがて肥沃な三日月地帯が共産主義に支配されるだろう——と。このナースィルの言動は、エジプトとソ連との関係を悪化させた。³⁹

統合共和国 1961年 9月28日、統合アラブ共和国の北部地域（シリア）で陸軍の一部が決起し、ディマシュク市内の放送局や軍司令部を占領する。そして副大統領のアブダルハーキム・アーミル元帥、第一軍団司令官のジャマル・ファイサル将軍などエジプト出身の高官を人質として捕らえた。当初、軍事政変の首謀者は体制の内部改革を提唱し、アーミルとの交渉を求める。だが、その真の狙いはシリアの独立を回復し、エジプトの支配から脱することだった。

エジプトはシリアの脱退を阻止しようと、武力行使を準備する。⁴⁰ だが、覆水は盆に返らない。一週間後、ナーシル主義の共和国は分解を遂げた。ディマシュクの人質は釈放され、無事にカーヒラに戻る。アラブ民族主義の旗手として、ナーシルの威信は地に墜ちた。アラブの統一の大理想がこともあろうに、お膝元から不信を突き付けられたからである。統合アラブ共和国は片翼を失ったが、そのままエジプトの国名として存続した。

アラブの統一の夢は、なぜ三年半で破れてしまったのか。シリア側から見れば、理想と現実の落差があまりにも大きかった。エジプト出身の高級軍人と官僚は統合共和国の北部地域を属領と見なし、あたかも征服者のように振る舞う。バース党の思惑はすっかり外れた。ナーシルの力で共産党を押さえ込んだ後には、自分たちの天下が到来すると期待していたからである。

シリアの経済界は反エジプトの決起を支持する。合邦後の蜜月時代、実業家は左翼勢力の弾圧を歓迎した。また、ナーシルが政略から北部地域の農工業開発に投資を惜しまなかったので、大盤振る舞いの分け前を得る。だが、1960年代に入ると、シリアの有産階級はエジプト流の社会主義路線の押し付け——農地改革と企業の国有化——に強く反撥した。将兵の一部は軍のエジプト化に不満を抱き、ひそかに蜂起の時機を窺う。⁴¹

アラブの統一の理想を掲げながら、両国の間には基本的な見解の相違があった。もともとシリアは一枚岩の国家でなく、主要都市を中心に地域割拠の傾向が強い。トルコやフランスの統治下、民族主義者が汎アラブ主義の声を挙げたのは、外国支配に対する抵抗の表れであり、地域ごとの独自性を否定するものではなかった。一方、古い昔からエジプトはナイル河の流域と河口の三角洲に中央集権国家を形成し、その伝統は現代も生きている。したがって、アラブの統合とは、エジプト主導下の大同団結を意味した。

統合共和国からの脱退をめぐり、シリアのバース党は内部で意見が分かれる。しかし、主流派は分離を強く主張し、アラブ統合の破産を裏書する文書に署名した。この友党の裏切りと変節に、ナーシルは怒り、そして悲しむ。その日から将来にわたって、この屈辱を決して忘れることはないだろう。

エジプトのアラブ世界の指導者として、ナーシルはまさ
イエマン出兵 に四面楚歌の状態に陥った。サウード家やハー
シム家の〈反動的〉な君主だけでなく、イラクに加えてシリアの〈革命的〉
な軍人と政治家までが敵に回る。この窮状に追い討ちを掛けるように、間もなく
イエマンは統合共和国（いまやエジプトの別名となった）との国家連合を解
消した。神権的統治者のアハメドがアラブ社会主義批判の諷刺詩を発表し、ナ
ースィルを当てこすったからである。

ナーシルは孤立感を深めたばかりか、汎アラブ主義の旗手としての声望を
失墜した。広大なアラブ世界でエジプト支持するのは、アルジャリア一国に過
ぎない。だが、思いがけないことに、ナーシルに復讐の機会がめぐってくる。
老齡のアハメドの死後、1962年 9月26日、イエマン軍の若手将校は暴君的専制
支配の打倒に決起し、君主制の廃止と共和国の樹立を宣言する。

当初、この軍事革命は成功と思われ、王宮警備隊長のアブダッラー・サッラ
ル准将が全権を掌握した。決起部隊の砲撃で、首都サーナーの宮殿は崩壊する。
ところが、アハメドの後継者で新首長のモハメドは奇跡的に生き延び、山岳地
帯へ脱出した。そして、新イマームに忠誠な部族の支持を得て、革命体制に巻
き返しの戦いを挑む。それから五年間、かつてローマ人が〈幸福のアラビア〉
と呼んだイエマンの地に、血生臭い内戦が荒れ狂う。

イエマンの革命政権は、エジプトに救援を求めた。サッラルが非同盟と積極
的中立主義に共鳴しているだけに、ナーシルとしては助力を惜しむ理由がない。
武器や軍需物資の供与だけでなく、エジプト軍が紅海を越えてアラビア半
島の南端の地まで派兵された。⁴² やがて王党派は陸続きのサウディ・アラビア
から援助を受け、反革命の抵抗を長期持久戦に持ち込む。

戦況は一進一退で、双方に甚大な出血を強いる。米国や国際連合の仲介で和
平達成の機会は何度かあったが、相互不信から実を結ばなかった。エジプトの
イエマン軍事介入はナーシルの大きな外交的失策で、巨額の戦費支出に苦し
むだけでなく、僻遠の地に精鋭部隊を釘づけされる。エジプト軍総司令官のア
ーミル元帥は勝利の幻想にとらわれて一層の増派をナーシルに要求し、イス
ラエル向けの戦力をいたずらに消耗するばかりだった。

その頃、ナーシルは〈アラブ革命〉と〈アラブの連帯〉の緊急度を比較す
れば、前者を第一義的に、後者を副次的と考える。つまり、シオン主義国家と
の決戦よりも、アラブ〈反動勢力〉の打倒が優先する――と。ところが、イエ
マン国民は長引く戦乱に疲れ果てて、革命派の内部にもエジプト批判勢力が台
頭した。サッラル体制を擁護するために、ナーシルは腕尽くの内政干渉を強
行しなければならなかった。

1964年 9月と1965年 8月に、エジプトとサウディ・アラビアは首脳会談で停戦の合意に達しながら、肝腎の当事者同士が妥協しないために、結局のところ、和平実現に至らなかった。エジプト軍の大規模な平定作戦は戦果を挙げ得ず、無差別の砲爆撃に巻き込まれた民衆に憎悪の念を植え付ける。ナーシールのアラブ革命優先理論は破綻し、イエマンの王党派を最後まで敗北に追い込めなかった。エジプトが不名誉な干渉戦争から足を洗ったのは、1967年の対イスラエル戦争に敗北を喫した後のことである。

再び統合を模索へ イラクとの反目、シリアの離反、イエマン出兵の失敗など、1960年代の最初の数年間、ナーシールは汎アラブ主義の理想を掲げる一方で、逆に挫折と後退を重ねる。だが、アラブ陣営の急進派が国内で権力闘争を繰り返した結果、国際関係の潮流は再び彼に有利な回り合わせとなった。

1963年 2月 8日、イラク軍の一部はバグダードで市街戦の末にカーシム政権を打倒し、軍人出身の独裁政治家を処刑する。軍事政変の首謀者アーリフは五年前の革命の際、カーシムの盟友だったが、その親ナーシール主義的傾向のために副首相の地位を追われた。その後、死刑囚として長い獄中生活を過ごす。政権奪取に成功後、アーリフは陸軍元帥に昇進し、革命指導国民評議会の議長に就任した。

アラブ世界の国際的政党として、バース党はイラクでも勢力を伸ばし、数千の武装民兵を擁するほどだった。新政権はナーシール主義者のアーリフを担ぎながら、バース党が主導権を握る。彼らはシリアの分離主義的同志とは異なり、汎アラブ主義の立党精神に忠実だった。新体制の下で粛清が始まり、カーシム派や共産党員は片端から逮捕され、容赦なく処刑される。⁴³

イラクの新情勢は、間もなく隣国に波及した。同じ年の 3月、シリアでもバース党は軍の力を借りて政権奪取に成功する。両国のバース党はエジプトに対して、過去の失敗にこだわらず、新たなアラブの連帯を求めた。三国の代表団はカーヒラで一堂に会し、政治的統合の可能性を模索する。

しかし、ナーシールは内心でバース党に深い不信感を抱き、性急な再統合に慎重な態度を示す。五年前、アラブ世界の大同団結は、エジプトとシリアの合邦で歴史的な第一歩を踏み出した。イラクも軍事革命の成功後、これに加わる素振りを見せる。ところが、三国の統一は成らず、しかもシリアが統合共和国から脱退した。その苦い教訓と屈辱を、ナーシールは心に抱き続ける。

ナーシールは当時の国際情勢に照らして、三国の統合の得失を冷静に計算する。エジプト、シリア、イラクのアラブ急進派が一体化すれば、各国の民衆は熱狂的に歓迎するだろう。彼はアラブの大同団結の立役者として、再び歓呼

の声を浴びるに違いない。しかし、東西両陣営から厳しい反応があることは、あらかじめ覚悟せねばならない。とりわけイラクは難題を抱えている。

統合が実現すれば、植民地主義の残滓は一掃せねばならない。そこで外国石油会社の利権に手を付ければ、西側の強い反撥は必至である。それだけではない。ソ連はイラクの共産党弾圧に不快感を表明してきた。また三国が軍事的にまとまれば、イスラエルは脅威と受け止めよう。新統合国家の圧力で、仮にヨルダンの王制が崩壊すれば、なおさらのことである。さらにトルコとイランも隣接の新国家に敵意を示すだろう。

1963年 4月17日、三国の代表団は会議の決裂を回避するため、一種の妥協案を作成した。エジプト、シリア、イラクは連邦を形成し、五カ月以内に国民投票で大統領を選出し、同時に憲法と統合憲章を採択する。それから二十カ月以内に上下両院の選挙を実施する――と。ところが、この共同宣言が発表されて間もなく、三国の底流は急速に変わり始めた。⁴⁴

とくにシリアとイラクでは、バース党内部の左右両派、親ナーシル派の統合論者が三つ巴となり、権力闘争に明け暮れる。シリアのバース党急進派はエジプトを排除し、シリアとイラクの統合実現を画策した。1963年 7月、バース党員の軍人アミン・エル＝ハフィズが政権を握り、党内の穏健分子を追放する。新たな軍事政変の試みは失敗に終わり、対エジプト協調派は二十七人の大量処刑で血の代償を払わねばならなかった。

ナーシルは三国統合の将来に見切りを付け、真正面からバース党を非難する。イラクの国家元首のアーリフ元帥はカーヒラとディマシュクを訪問し、シリアとエジプトの関係修復を試みる。だが、この和解仲介の旅は、結局のところ無駄な努力に過ぎなかった。それよりも、バース党と軍部の対立で、イラク自体が騒乱状態に陥る。

イラクのバース党はシリアの兄弟党とは異なり、軍の内部に支持基盤がなかった。党の強硬派は軍部に全幅の信頼を置かず、代わりに自前の武装民兵を訓練する。やがてバース党の私兵は政敵の共産党員を粛清し、首都のバグダードを恐怖のどん底に陥れた。アーリフの実弟で陸軍准将のアブダルラハマーン・アーリフは兄を窮地から救うため、バース党の政府を打倒し、私兵団をたたきのめす。

1963年、アラブ世界の急進派陣営は、統合の大きな期待をよそに、不信と憎悪で混沌状態に陥った。ナーシル主義は得意の絶頂から転げ落ち、かつての影響力を喪失する。汎アラブ主義の掛け声は空しく響き渡るだけで、実際には分裂と抗争をもたらすだけだった。この間、イスラエルはアラブの軍事的包囲を免れ、建国十五年を迎えて、中東の一角に着々と地歩を固める。

〈第七部の註と参考文献〉

1 後にエジプト革命を担った二人の軍人——ネギブとナーシルは回想録で、パレスチナ戦争当時の準備不足と混乱を描写している。ネギブは部隊を率いてガザ地帯の鉄道終点まで来ると、それから先の兵員輸送に地元民から貨物自動車を借り上げねばならず、牽引用のトラクタを見付けられなかったので、六ポンド砲を置き去りにして前線に向かった。

英国製の火器は弾薬不足に悩み、戦車も予備部品を欠いた。第一次休戦中、エジプトもイスラエルと同様に国際連合の禁令を犯して武器を闇市場で調達したが、欠陥製品をつかまされた。イタリ製の手榴弾は投げる前に爆発し、スペイン製の野砲は砲弾をまともに発射できなかった。最前線の兵士は不信の念を抱く。国王や政府高官が欠陥兵器の取り引きで、不当利得を得ているのではあるまいか——と。

ナーシルがガザにたどり着いた際、調理設備がないため、部下に温かい食事を食べさせられなかった。彼は千エジプト・ポンドを与えられただけで、兵士の給食用にチーズやオリヴの実を買わねばならなかった。前線の指揮官はカーヒラから相矛盾する命令を受け、途方に暮れる。戦争の初期、無謀な攻撃命令が、現地の実情を知らぬまま、後方からしばしば届いた。機甲部隊の掩護や事前の偵察もないのに、守りの固いイスラエル軍陣地の正面攻撃に歩兵を投入せよ——と。カーヒラの宣伝放送は大勝利を伝えるばかりで、戦況の真実を隠蔽した。〔Robert Stephens, Nasser: A Political Biography (Harmondsworth: Penguin Books, 1973年)、77~78頁〕

2 シリアの政権はフランスの支配に抵抗した民族主義者で構成され、パレスチナ軍事介入の失敗がなければ、もっと長い期間にわたって存続できる筈だった。ところが、完全独立の達成後、反仏闘争の担い手たちは権力維持に汲々として、時代の変化に適切に対応できない。国民は敗北の屈辱に憤って反政府暴動を起こし、首相を辞任に追い込む。だが、政界の主流派は非難をそらすため、軍部に責任を転嫁した。1949年3月末、陸軍幕僚長のフスニ・ザイム（ガリラヤ湖畔の戦闘でシリア軍を指揮）は無血軍事政変に成功し、有力政治家の逮捕、憲法の停止、議会の解散などの強硬手段で全権を掌握する。だが、この軍事政権は半年と続かず、8月半ば、別の軍事政変で、ザイムは失脚の末に処刑された。この時は軍人が政治の表舞台に出ず、文民政権が誕生する。四カ月後の12月中旬、アディブ・シシャクリ中佐が決起し、実に一年間に三度目の軍事政変を起こす。当初、彼も政党政治家を首相に任命して、背後から政界を操った。だが、この軍人はやがて自ら国家元首に就任するなど権力を一身に集中して、独裁化の道を歩んだ。その専制政治に対する反撥が高まり、1954年2月末の軍事政変で、シシャクリは国外に逃亡を余儀なくされた。〔George Lenczowski, The Middle East in World Affairs, Fourth edition (Ithaca: Cornell University Press, 1982年)、327~335頁〕

3 アブダッラー国王はアラブ軍団の占領地から地方有力者を集め、その要望に応える形で、ヨルダン川の兩岸の統合を画策する。1949年の暮れまでに三回の集会を開き、併合の機運を盛り上げた。さらに選挙法の改正で議会は議席の定数を倍増し、王国の新領土にも同数の議席が割り当てられた。議会は選挙後に招集された初会合で、ヨルダン川西岸の

アラブ領域（ガザ地帯を除く）の併合を満場一致で承認する。〔Y. T. Toni and Suleiman Mousa, The Hashemite Kingdom of Jordan: Land and People (Amman: Ministry of Culture and Information, The Government of Jordan)、53~54頁〕

エジプトのファルーク国王などはアブダッラーの領土拡大に反対で、ヨルダンがアラブ連盟から除名されかねないほどだった。同じハーシム家のイラクも不快感を抱き、一時は両国間の関係に緊張をもたらす。

4 パレスチナ問題は、部族、宗派、思想的対立の激しいイラクで、国民的一致を取り付ける唯一の材料だった。イラク軍の撤退にからんで、共産党主導の同盟罷業と政治的示威行進が続発すると、サイード首相はすでに服役中の共産主義者を獄中から引き出し、改めて軍事裁判にかけた。1949年2月、再審の被告たちが死刑を執行されると、さしもの反政府運動も沈黙する。一方、この強権政治家は国民の不満をなだめるために、経済を立て直しに乗り出した。英国から三百万ポンドの借款、国内で操業中の外国石油会社から無利子の借金を得て、経済危機の回避に成功する。〔Phebe Marr, The Modern History of Iraq (Boulder: Westview Press, 1985年)、107~108頁〕

5 パレスチナ出兵の軍費は、エジプトの国庫を危機に陥れた。政府は赤字財政克服のために税制改革を持ち出したが、議会で拒否される。増税案が富裕階級出身の議員の利益に反するからである。特権的政治家の腐敗が反体制運動に拍車を掛ける一方で、治安当局の弾圧も厳しさを増した。ファルーク国王が首相を次々に更迭するうちに、1950年春に成立のウォフト党政権は、国民の不満を外に向けるために、英国と条約改訂交渉を始める。その交渉が実りないまま一年半にわたって長引いた後で、1951年10月、エジプト政府は一方的に条約を廃棄した。それ以来、左翼の学生と労働者、右翼のイスラーム教徒同胞団の活動家は英軍の駐屯を非合法と見做し、反英運動を強化する。スエズ運河地帯でエジプト人の基地労働者は英軍のために働くのを拒否し、出入りの商人も物資の供給を停止した。鉄道員、港湾労働者も同調し、英軍の軍需品や兵員の輸送を故意に遅らせた。反英運動の激化は、同時に政府と王室に対する不信の表明を意味する。1952年1月、運河沿いの町イスマーイーリアで、英駐屯軍の指揮官はゲリラを掃討するついでに、エジプト警察と治安部隊の武装解除を要求した。双方の対決は銃撃戦に発展し、エジプト側に五十人以上の死者を出す。その翌日の1月26日、カーヒラで報復の大暴動が発生し、英国系の会社、商店、映画館、ホテルなどが焼き打ちされ、英国人など約三十人の外国人が殺された。〔P. J. Vatikiotis: The History of Egypt: From Muhammad Ali to Sadat, Second edition (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1980年)、366~371頁〕

警官隊が同僚の死を悼んで暴動鎮圧に動かなかったのが、事態は軍の出動で収拾された。この事件は王室と支配層の信用失墜を内外に印象づけ、半年後の軍事革命の伏線となる。

6 アラビア半島の南端のイエマンに、ユダヤ教徒はソロモン王の時代に商人として移住し、さらにローマ軍団によるエルサレムの神殿破壊の後、多数の者が逃れて来た。長い年月、彼らは貧窮状態にあったが、アラブ人から迫害されることは殆どなかった。しかし、イスラエルの建国とアラブ諸国の参戦後、ユダヤ共同体は古い隣人から暴行と略奪の憂き目に遭う。彼らは住み慣れた土地を捨て、徒歩で英国の直轄植民地エイドンに向かった。イスラエルの救援団体はイエマンのアラブ支配者と英植民地当局と交渉し、ユダヤ難民の出国に合意を取り付ける。アラブ側は出国料の現金支払いと財産の接収に満足し、この住

民の大量脱出に異存なかった。1949年 5月から1950年 9月までの間に、イエマンのユダヤ教徒のほぼ全員の四万七千人が空路でイスラエルに移住し、これに三千人がエイドンから加わった。

バビロンの虜囚以後、ユダヤ教徒はメソポタミアに深く根をおろし、時々迫害にさらされながらも、イラクに繁栄した共同体を維持し続ける。ここでもイスラエルの建国はアラブ人の敵意をかきたて、ヤハウエの信徒を投獄、失職、入学拒否の非運に突き落とす。国外移住は死刑の重罪となったが、少数の者はイラン経由でシオンの地をめざした。1950年 3月、突然、イラク政府は出国禁止を解除し、3月9日までに所定の手続きを完了すれば、国外移住を許可すると発表した。そのかわり、イラク国籍を放棄し、財産を処分しなければならない。その代金は、後日、支払われる筈だった。ところが、出国希望者が手続きを済ませた翌日の 3月10日、イラク政府は態度を翻して、ユダヤ教徒の全財産と銀行預金を補償なしで没収した。その後、ユダヤ難民はサイプラス島まで飛行機で運ばれ、そこから海路、あるいは空路でイスラエルに向かう。この経路で1951年12月までに十一万三千人がシオンの地に移住し、この他にイラン経由で八千人がユダヤ国家に入国した。この迫害にもかかわらず、イラクには四千人のユダヤ教徒が残留した。

マロコウ政府はユダヤ教徒の出国に関して首尾一貫した方針を持たなかったので、移住には波があった。それでも、1951年12月までに十二万人がイスラエルに移住した。同じ北アフリカのリビアからは、三万人が出国してユダヤ国家にたどり着いた。〔Chaim Raphael, The Road from Babyron: The Story of Sephardi and Oriental Jews (London: Weidenfeld and Nicolson, 1985年)、232~238頁〕

7 イスラエルは軍事境界線沿いの地域を軍政下に置き、アラブ系イスラエル市民に英委任統治時代の治安維持法規を適用して、さまざまな差別と圧迫を加える。これらの法規は、つい先頃までユダヤ過激派の武装闘争を取り締まるための手段だった。ユダヤ国家の少数派市民は人権を侵害され、市民的自由を奪われた。令状なしの逮捕、拘禁、追放、家屋の取り壊し、土地の没収は、ごく当たり前のことになった。最高裁判所に救済を求めても、国家保安上の理由で却下された。〔Sabri Jiryis, The Arabs in Israel, 1948-1966 (Beirut: The Institute for Palestine Studies, 1969年)、1~54頁〕

8 ベルナドットの暗殺から約三週間後の1948年年12月11日、国際連合は調停官の職を廃止し、かわってパレスチナ和解委員会を設置した。翌1949年 4月末、同委員会はジュネーヴ近郊のロザンヌにアラブ諸国とイスラエルの代表を招き、1949年 5月12日（イスラエルが国連連合に加盟した翌日）、交渉の基礎となる条件について双方から同意を取り付ける。この時に調印された議定書は、国際連合総会の難民帰還に関する決議やパレスチナの分割決議を織り込んでいた。しかし、その後のイスラエルの頑なな態度のため、交渉は一向に進展を見ないまま暗礁に乗り上げる。〔Henry Cattán, Palestine and International Law: The Legal Aspects of the Arab-Israeli Conflict (London: Longman, 1973年)、108~110頁〕

9 建国後のイスラエルは東西どちらの陣営に属するのも好まず、外交面で中立路線を採用した。だが、後に〈中立〉の用語は〈独立〉の慎重な表現に言い換えられる。イスラエルは毛沢東の共産党政権を承認し、1950年にはフランコ体制下のスペインとの外交関係について、大使から領事に格下げの措置を取り消した国際連合総会の決議に対して、ソ連

と共に反対票を投じた。朝鮮戦争の勃発に際して、イスラエルは北側の侵略を非難し、国際連合の旗の下での軍事介入に賛成して医療面で協力する。ところが、西側陣営の戦略的利害が、どの程度までイスラエルの存在と調和できるのか、当時は疑わしかった。〔George Lenczowski、前掲書、418頁〕

10 ソ連は建国後間もないイスラエルに法的承認を与え、新生ユダヤ国家と外交関係を樹立する。初代公使にゴルダ・メイアル（マイアスンから改姓、後に労相、首相を歴任）が任命され、マスクヴァに赴任した。高名なユダヤ系作家イリヤ・エレンブルグはソ連共産党機関紙『プラウダ』に寄稿し、ひとまずユダヤ国家を称賛しながらも、イスラエルの国民とソ連のユダヤ系市民の間には何の関係もないと強調した。しかし、ユダヤ暦の新年に、彼女がマスクヴァのユダヤ教会堂に出掛けると、約五万人の同信者に出迎えられて熱狂的な歓迎を受ける。〔Gold Meir, My Life (London: Futura Publications, 1984年)、204~207頁〕

スタリンは英国の中東支配に揺さぶりをかけるため、アラブ諸国の共産党を犠牲にしてパレスチナの分割を支持した。だが、この自然発生的な歓迎に衝撃を受け、ユダヤ系ソ連人が赤旗よりもダヴィデの星に忠誠心を抱いていると疑う。〈社会主義国〉イスラエルと国際共産主義の総本山との蜜月はすぐに終わりを告げた。クレムリンはユダヤ文化の否定、逮捕と流刑などの強権手段を発動する。ソ連の反シオン主義は反ユダヤ主義に転じ、これに東欧圏の諸国も追随した。〔Maxime Rodinson, Israel and the Arabs (Harmondsworth: Penguin Books, 1973年)、64頁〕

11 ネギブの失脚に至るまでの道程は長かった。1954年 2月24日、ナーシールは上官を共和国大統領、革命評議会議長の要職から追い落とし、自ら首相と議長に就任する。国家元首は空位となった。しかし、軍の一部が将軍を強く支持し、さらに親ネギブ派の大衆が留任要求の示威行進を組織したので、九日後にネギブは大統領に返り咲く。ナーシール派は時を稼ぐため、しばらく譲歩を余儀なくされた。3月5日、革命評議会は制憲議会の選挙を7月に実施し、その一カ月前に戒厳令を解除するよう決定した。ついでネギブは首相と議長の地位を取り戻し、政党解散令を撤回したばかりか、さらには革命指導評議会の廃止（制憲議会の選挙の当日に予定）まで決めた。

ナーシールは巻き返しに転じ、まず、革命防衛のために軍の内部を固め、次に〈解放大集会〉を利用して学生と労働者の動員に成功する。3月29日、革命指導評議会は先の決定を取り消した。4月19日、ナーシールは再び首相になり、主要閣僚を自由将校団で固めた。それから七カ月、ネギブは大統領の地位に引き続きとどまったが、もはや実権を奪われてしまった。〔P. J. Vatikiotis, 前掲書、381~383頁〕

12 1954年10月26日、ナーシールがイスカンデリーヤの広場で大群衆に向かって演説中、イスラーム教徒同胞団の一員が近くから拳銃を発射した。数発の弾丸はナーシールの身体をかすめ、頭上の電球を粉砕する。この革命指導者は奇跡的に暗殺を免れると、側近が逃げ惑うのとは対照的に、壇上から聴衆に呼びかけた。我が身に何が起きようとも、革命は前進し続ける。もし、自分が殺されたら、諸君の一人一人がナーシールになるのだ——と。

この暗殺未遂事件は、彼の個人的威信を計り知れぬほど高める。翌日、ナーシールは生命の危険を顧みず、イスカンデリーヤの市内で、さらには汽車でカーヒラに帰る途中の停車駅で、熱狂的な群衆の前に姿を現した。首都では二十万人が不死身の英雄を出迎え、そ

の帰還を歓迎した。この事件を契機に、エジプトの軍事政権はイスラーム教徒過激派の徹底的弾圧に乗り出す。暗殺未遂犯人の六人が死刑を執行され、数千人が投獄された。イスラーム教徒同胞団はパレスチナ戦争と反英闘争に大きな役割を果たしたが、もはや自由将校団とは共存できない。治安当局は革命政権転覆の陰謀を追及し、背後にネギブの影を見出す。1954年11月14日、この将軍政治家は大統領の地位から追放され、自宅に監禁された。〔Robert Stephens, 前掲書、135~136頁〕〔Derek Hopwood, Egypt: Politics and Society, 1945-1984, Second edition (Winchester: Allen and Unwin, 1985年)、42頁〕

13 アブダッラーの暗殺後、皇太子のタラールが国王に即位した。しかし、1952年8月、精神障害のため在位一年で退位し、まだ十七歳の少年フセインが父の跡目を継ぐ。1955年12月、英国は参謀総長のジェラルド・テンブラ將軍をアマーンに派遣し、英国・ヨルダン条約の改訂、イスラエルの脅威に対抗できる軍備強化の問題とからめて、バグダード条約に参加を誘いかけた。その頃、ヨルダンはイスラエルの報復攻撃にさらされていただけに、この軍事同盟に加入を考慮したところ、国内の強力な反対に直面する。この交渉で英国は三国宣言の手前、フセインの軍事援助の増額要請に応じなかった。そこで、1956年3月1日、二十歳そこそこの国王は軍のアラブ化を断行し、総司令官のグラブと英国人将校を解任する。〔Y. T. Tony and Suleiman Mousa, 前掲書、55~59頁〕

グラブの率いるアラブ軍団は、ヨルダンの左翼陣営から〈進歩派に対する抑圧の道具〉とか〈東アラブにおける英国石油利権の番犬〉などの悪罵を投げ付けられていた。〔Dilip Hiro, Inside the Middle East (London: Routledge & Kegan Paul, 1985年)、160頁〕

14 1953年10月14日の夜から15日の未明にかけて、イスラエル軍の特殊部隊はベン＝グリオンの命令で、ヨルダン領のキビヤ村を急襲した。この作戦はロッド空港の近くで殺されたイスラエル人の母子三人に対する報復で、六十六人のアラブ人を殺害し、四十五戸の家屋を爆破する。犠牲者の大多数は、崩れ落ちた建物の下敷きになった。いつもはユダヤ国家に同情的な米国の新聞も、この時ばかりはイスラエル批判の筆陣を張り、第二次世界大戦中にチェコスロヴァーキアで起きた独軍の虐殺になぞらえる。この時、一人の総統親衛隊指揮官が暗殺された仕返しに、ナチ・ドイツの軍勢は百八十五人の村民を殺害した。〔Ritchie Ovendale, The Origins of Arab-Israeli Wars (London: Longman, 1984年)、133頁〕

この特殊部隊は対ゲリラ作戦用に特別に編成され、第百一部隊と名付けられた。その指揮官は予備役将校のアリエル・シャロンで、ヘブライ大学東洋語学科の学生だった。この部隊は落下傘部隊と合併して第二百二降下大隊と改称し、1950年代の半ばに数々の報復作戦に出動する。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, The Israeli Army (London: Allen Lane, 1975年)、109~113頁〕

その後のシャロンは野戦司令官として勇名を馳せ、退役後に政界入りしてから国防相を務める。1982年にはPLO根絶のためレバノン戦争を仕掛けたが、パレスチナ人難民収容所の虐殺事件の政治的責任を問われ、国防相の要職から無任所相に降格された。

15 ベン＝グリオンは首相を辞任する前日、職業軍人の最高位の国防軍幕僚長にダーヤーンを任命し、また兼任していた国防相の職務をピンハス・ラヴォンに託した。シャレット内閣が発足して間もなく、ラヴォンとダーヤーンの二人は権限争いを始める。国防相は文民支配の原則の完全確立を要求し、幕僚長は軍事面に政治家の介入排除を主張したから

である。国防軍諜報部がエジプト国内で破壊工作に失敗した際、両者の対立は抜き差しならなくなった。ラヴォンは諜報部長のベンジャミン・ギブリからスパイ作戦について何も知らされなかったと主張し、諜報部長は幕僚長を飛び越えて国防相から直接の命令を受けたと反論する。この権力闘争は検閲のため報道されぬまま舞台裏で進行し、最後にベン＝グリオンがダーヤーン派を支持して決着を付けた。1955年2月、ラヴォンはついに辞職に追い込まれ、前首相のベン＝グリオンが国防相として政界に復帰した。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, 前掲書、135~137頁〕

16 イスラエル側の数字では、ソ連はエジプトに二百三十台の戦車、二百台の装甲兵員輸送車、百台の自走砲、五百門の大砲、二百機の航空機（戦闘機、爆撃機、輸送機）を引き渡した。この他にも、駆逐艦、高速魚雷艇、潜水艦を供与する。〔Chaim Herzog, The Arab-Israeli Wars: War and Peace in the Middle East from the War of Independence to Lebanon (London: Arms and Armour Press, 1984年)、112頁〕

エジプト革命で多数の共産主義者が投獄されたので、当初、マスクヴァはカーヒラの軍事政権を敵視して〈ファシスト〉と非難した。しかし、1955年3月、スタリインが死んでから、クレムリンは態度を改め、ネギブやナーシルの〈ブルジョワ民族主義〉を公然と支援した。ソ連政府はエジプト駐在大使に傑出した中東専門家を任命し、両国間の関係改善に努力する。その結果、ソ連はエジプトやアラブ諸国を共産主義の影響下に引き入れようとせず、西欧帝国主義から自立するのを手助けしている——と印象づけるのに成功した。〔Peter Mansfield, The Arabs (Harmondsworth: Penguin Books, 1979年)、296頁〕

17 シャレットは首相の座から降りたが、ベン＝グリオン内閣に外相として入閣した。彼は古巣の外交畑に戻ったものの、首相に復帰したベン＝グリオンの強硬方針と相容れず、一年と経たないうちに辞任に追い込まれた。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, 前掲書、135~137頁〕

18 世界銀行総裁のユージーン・ブラックはナーシルと融資問題について会談し、エジプトの国家予算や貿易収支に厳しい注文をつけた。この融資条件は、エジプト経済を外部の監督下に置くことになる。ナーシルが世界銀行の中立性に疑念を示すと、ブラックは次の通り反論した。この銀行は国際連合の機関で、融資条件はどの国にも等しく適用される——と。だが、この国際公務員は、つい正直な本音を吐いた。米英両国は大出資国だけに、融資審査に強い影響力を及ぼす——と。この時期、ヨルダンのバグダード条約機構加盟問題がアラブ世界を揺さぶっていただけに、ナーシルは西側陣営に対して不信の念を高めた。〔Robert Stephens, 前掲書、172~173頁〕

19 米国はロシア革命後に誕生した共産主義政権を十六年間も承認しなかった。1949年に中華人民共和国が成立し、東欧圏はもとよりインドなどのアジア諸国、北欧三国、西欧の一部の国々から承認されても、米国は台湾の国民党政権を中国の正統政府として遇した。〔Fredrick L. Schuman, International Politics: The Western State System and the World Community, Six edition (Tokyo: Kogakusha, 1958年)、113頁〕

カーヒラが北京を承認したのは、武器の入手先を確保するためだった。当時、このような噂が国際社会に流れた。もしも国際連合が中東地域に武器の禁輸を宣言すれば、ソ連は西側との関係を改善するために、この宣言に同調するかも知れない——と。その場合、ナーシルは新中国から武器を買い入れるよう真剣に考慮した。

20 当時のエジプトは事実上の独立国だったが、名目的にはトルコに服属していた。カーヒラの都督が運河掘削の特許状を与えても、正式にはイスタンブールの皇帝の裁可を得なければならない。フランスの勢力はエジプトの宮廷に根を張り、英国の影響を排除していた。しかし、トルコ本国では、形勢が逆転する。時はクリミア戦争の前夜で、トルコはロシアに対抗するため、英国の強力な支持を必要とした。英国政府がスエズ運河の建設計画に難色を示したので、特許状の裁可は十年間も遅れる。ド＝レセップスはしびれを切らせて、正式の許可を待たずに工事に着手した。〔George Lenczowski, 前掲書、708頁〕

21 北アフリカの植民地の騒乱をめぐって、フランスのモレ政権はナースィルの役割を実質以上に過大に評価した。アルジャリア独立運動指導者の一人アハメド・ベン＝ベッラはカーヒラに本拠を置いて活動し、エジプトの助力を取り付ける。カーヒラ放送は激烈な口調でアラブの連帯を説き、ゲリラの戦闘ぶりを称賛した。しかし、エジプトが実際に供与した武器弾薬は多くなく、アルジャリア側の不満と失望を買う。〔Alistair Horne, A Savage War of Peace: Algeria 1954-1962 (Harmondsworth: Penguin Books, 1979年)、79、85、129頁〕

22 このセーヴル会談にベン＝グリオンはダーヤーンとペレスを伴って出席し、戦争の口火を切るのに合意したが、委任統治時代からの対英不信をめぐえず、最終段階でためらいを見せた。〔Chaim Herzog, 前掲書、114頁〕

英国側は親英アラブ諸国への気兼ねからも、イスラエルの一枚かんだ秘密会談に参加した事実をひた隠しに隠し、真実を閣僚や国会議員にも知らせなかった。だが、真実は間もなく、フランスとイスラエル側から暴露される。

23 この混成軍は英軍の最高司令官の指揮下に置かれ、仏軍の将官が補佐役を務めた。艦隊、航空戦力、上陸部隊も、それぞれ英軍人が責任を負い、仏軍人は介添え役を割り振られた。これは両国の兵力の差を反映している。英軍の五万に対して、仏軍は三万に過ぎなかった。侵攻作戦の準備には、さまざまな困難が生じた。エジプトに近いサイプラス島の港は狭くて出撃基地に使用せず、両国の艦隊と輸送船団は、目的地まで六日の航海を要する遠いモルタ島に集結せねばならなかった。〔Hugh Thomas, The Suez Affair (London: Weidenfeld and Nicolson, 1986年、70~73頁)〕

24 ナースィルの側近で後に情報相になるモハメド・ヘイカルは、当時、エジプト軍の首脳部が情勢判断に迷った事実を記している。イスラエル軍機甲部隊越境の第一報は、落下傘部隊のミトラ峠降下の報告よりも早く、ナースィルの許にもたらされた。しかし、イスラエルの航空隊は地上部隊の支援に出撃しないばかりか、エジプト空軍基地を攻撃する兆候さえ見せない。幾つもの可能性を検討した結果、ナースィルは次の通り事態を解釈した。英仏両国がスエズ運河の国有化をめぐって間もなくエジプトと妥協点に達するだろうと、イスラエルは信じ込んで単独で一戦を挑んだ——と。この判断に基づいてエジプト軍部は英仏軍の侵攻に備えていた精鋭の第四装甲師団を出動させ、スエズ運河を渡ってシナイ砂漠に投入する。

このようにナースィルが判断を誤ったのは、アイザンハウアが西側諸国の不介入を保証したことと、近く開催予定のジュネーヴ会議で、合意達成の見通しがあったからである。当初、ベン＝グリオンが航空隊の出撃を控えたのは、侵攻の真の意図を隠蔽して相手に報復作戦と誤認させ、さらにはテラヴィヴなどの都市に対する報復爆撃を恐れたからだった。

イスラエルの航空戦力は強力でなく、正面切ってエジプト空軍に対抗できなかった。ベン＝グリオンは宿敵の空軍の撃滅を英仏両国に託し、連合軍の爆撃機の傘の下で、シナイ作戦を遂行する。〔Mohamed H. Heikal, Cutting the Lion's Tail: Suez Through Egyptian Eyes (London: Corgi Books, 1988年)、193~194頁、199~200頁〕

25 エジプト陸軍総司令官ハーキム・アーミル元帥はナースィルの退却命令に強硬な反対を唱え、あやうく解任されるどころだった。彼は自由将校団の一員で、ナースィルとは革命の盟友である。この武弁は陸軍士官学校を視察した際、撤退作戦の講義がおこなわれているのを知って激怒し、授業中の教室に乗り込んで強い語調で申し渡した。今後、いかなる軍事状況の下でも、撤退命令が出されることはない——と。総司令官の抵抗を押し切るため、大統領は自ら電話で前線の部隊に退却を命令しなければならなかった。〔Mohamed H. Heikal, 前掲書、197頁〕

26 アイザンハウアとダリスも、イードンやモレと同様に、ナースィルを第二のヒトラルと見做した。スエズ運河の国有化後、米国大統領と國務長官の発言は一貫性を欠き、相矛盾することが多かったので、英仏両国の首相は都合の良い箇所を有利に解釈し、対エジプト武力行使が最後には米国に是認されると思い込む。〔Steven L. Spiegel, The Other Arab-Israeli Conflict: Making America's Middle East Policy, from Truman to Regan (Chicago: The University of Chicago Press, 1985年)、71~72頁〕

27 この決議の採択で、国際連合に加盟の国々の大多数が〈平和のために結集〉し、戦火の消し止めと事態の收拾に積極的役割を果たす。国際連合憲章の第十八条によると、国際平和の維持に関する勧告など、重要問題は三分の二の特別多数決で決せられるが、表決は停戦の実現と緊急部隊の派遣を圧倒的多数で支持した。

28 イードンは国内でも強い反対に直面し、野党はもとより与党からも批判される。スエズ運河が国有化された時、労働党首のヒュー・ゲイツカルは議会でナースィルを非難し、イードンに英国内のエジプト資産を差し押さえるよう要求したほどだった。しかし、軍事冒険の実情が明るみに出につれて、親イスラエル派の多い労働党も、政府攻撃に立ち上がった。ゲイツカルはイードンに面と向かって、首相辞任を迫る。イードンの犯した最大の誤りは、スエズ出兵を正当化するために、実際の情勢を歪めて伝え、国民を意図的に騙したことである。実際にはイスラエル軍の攻撃が遠く離れているにもかかわらず、いまにもスエズ運河が危険にさらされるかのように誇張した。英国は消防士の役割を自任したが、戦争の火に水のかわりに油を注いだ。〔Hugh Thomas, 前掲書、39~40頁、178頁〕

29 11月5日、英仏軍の空挺部隊はポートサイドに降下し、エジプト軍の抵抗拠点に大損害を与えする。現地のエジプト軍指揮官は不利な戦況から、侵攻軍と停戦交渉を始めるのに同意した。この報せがランダンで開会中の下院に伝わると、保守党議員たちは歓呼の声を上げた。ナースィルが降伏したかのように、誤って受け取られたからである。ポートサイドでは拡声器を積んだ自動車が市内を巡回し、宣伝放送で市民の士気を鼓舞した。第三次世界大戦が勃発して、ランダン、パリは核攻撃を受けた——と。その日、ソ連のブルガニン首相はイードン、モレ、ベン＝グリオンに覚書を送り、エジプト攻撃の三国を「あらゆる種類の近代的破壊兵器の使用」で潰滅させる準備ができていると脅迫した。とりわけイスラエルに対して「国家としての存在に疑問符」が付けられると断じた。〔Hugh Thomas, 前掲書、158頁〕

30 ミトラ岬に降下したのも、砂漠を横断して合流したのも、第二百二空挺部隊の将兵だった。部隊の任務は岬の東側に陣取って、エジプト軍の増援を食い止めることで、岬そのものの占領ではなかった。緒戦の段階で岬の占領は戦略的にも戦術的にも不必要と考えられたが、大隊長のシャロン大佐はイスラエル国防軍幕僚長のダーヤーン中將から岬に布陣のエジプト軍と正面衝突を避けるとの条件付きで許可を取り、偵察の名目で小兵力の分遣隊を出動させる。ところが、岬の近くで十字砲火を浴びたので、シャロンは総力を挙げて敵陣を攻撃した。激戦の末にイスラエル軍は岬を制圧して、この要衝からエジプト軍を駆逐する。しかし、人的損害は極めて大きく、三十八人が戦死し、百二十人が負傷した。シャロンの明白な命令違反にもかかわらず、ダーヤーンは何の懲戒処分も科さず、無謀な攻撃を黙認した。その後、第二百二空挺部隊の生き残り兵士は矛先を転じ、シャルムエッセイク攻略戦に参加する。〔Chaim Herzog, 前掲書、117~123頁〕

31 エジプト軍の損害の内訳は、次の通り見積もられている。まず約千人がシナイ半島の戦闘で戦死し、さらに千人が退却の途中で命を失った。この大損害は主として空からの攻撃によるもので、イスラエルの航空隊が英仏両空軍の支援でシナイ砂漠の上空の制空権を確立した結果である。これ以外に、英仏連合軍の上陸地のポートサイドで約千人が死亡し、その多くは民間人だった。これに加えて、四千人が負傷し、六千人が捕虜になった。

〔Paul Harper, *The Suez Crisis* (East Sussex: Wayland, 1986年)、56~57頁〕

戦争犠牲者の数は、論者によって異なる。エジプト側の数字によると、死者の数はエジプトが九百二十一人、イスラエルが二百、英国が二十二、フランスが十人となっている。

〔Mohamed H. Heikal, 前掲書、9頁〕

32 アイザンハウアの新中東政策は、スエズ戦争中にウォシingtonが演じた役割に対する批判とからんで、米国内で反響を呼び起こす。一部の論者は「国際共産主義の明白な侵略」よりも、政情不安の地域で〈国内共産主義〉の転覆活動を危険視した。別の論者は、次のように指摘する。アイザンハウアの政策はアラブ対イスラエル紛争に対処していない——と。米国の石油業界はナースィル主義を脅威と見做してただけに、大統領の決断を歓迎した。その一方で、国務省や中央諜報局（CIA）の中東専門家は、その効果を疑問視した。アイザンハウア・ドクトリンがナースィルと彼の支持者から強い反撥を招き、せつなく戦争中に米国がアラブ世界で獲得した評判を落とす結果となるからである。〔Steven L. Spiegel, 前掲書、84~85頁〕

33 スレイマン・ナブルシ首班の内閣は発足後間もなく英国と条約上の絆を断ち、サウディ・アラビア、シリア、エジプトの三国とアラブ連帯協定を締結する。英駐屯軍はかつての従属国から追い立てられ、1957年の夏までに撤兵を完了した。ヨルダン政府は英国の補助金を失ったかわりに、近隣の友邦から財政援助を受ける。その結果、ハーシム王朝の将来に悲観的見方がひろまり、ヨルダンは遠からず共和国になるとさえ予想された。しかし、エジプトやシリアの急進派共和制国家も、フセイン国王の打倒を得策とは考えなかった。ハーシム王家の転覆はヨルダン川の西岸にパレスチナ国家の樹立を招き、その阻止のため、イスラエルが武力介入するだろうと懸念されたからである。〔Peter Mansfield, 前掲書、306~307頁〕

34 シェハブはキリスト教のマロン派に属したが、正規軍の総司令官として中立を保ち、指揮下の軍隊が宗派闘争に巻き込まれぬよう尽力する。大統領に就任後は「勝者も敗者も

なく」との合い言葉を掲げて、キリスト、イスラーム両教徒の間の微妙な均衡を取り、同時に僅かながら親ナースィル主義的外交政策を採用して、レバノンの政治を巧妙に操った。

〔Itamar Rabinovich, The War for Lebanon, 1970-1985, Revised edition (Ithaca: Cornell University Press, 1985年)、28~29頁〕

35 この国名について、日本の新聞・雑誌・放送は〈アラブ連合共和国〉の訳語を当てたが、本論では新国家の性格から〈統合アラブ共和国〉の訳語を用いる。

36 バース党は1930年代、キリスト教徒のミシェル・アフレクとイスラーム教徒のサラハ・ビタールはパリに留学中、激動の欧州の政治情勢や社会主義思潮に触発され、フランス支配下の故国シリアの現状と未来を憂える。そして、祖国の独立は民族性と固有文化に訴えてこそ実現できると確信するに至った。彼らは主張する。シリアではさまざまな宗派が入り乱れているだけに、民族主義運動が宗教を基盤にすれば、必ずや国民の分裂を招いて、最後に失敗に終わる。従って、各宗派の宗教的エネルギーをアラブ人としての自覚に向けるならば、やがて国家形成の目標を達成するだろう——と。二人はパリからディマシユクに帰った後、間もなくベイルートに移り、そこの米国系大学で教鞭を取るかたわら、この信念を学生に吹き込んだ。第二次世界大戦中、新しいアラブ民族主義運動は、この理念に基いてアラブ各地に地下の組織網を張りめぐらせる。〔Thomas Kiernan, The Arabs: Their History, Aims and Challenge to the Industrialized World (London: Sphere Books, 1984年)、356~361頁〕〔Patrick Seale, The Struggle for Syria: A Study of Post-War Arab Politics, 1945-1958 (New Haven: Yale University Press, 1986年)、148~158頁〕

37 アイザンハウアはダリスと共に〈将棋倒し理論〉を信奉し、自著の中で断言している。シリアがすでに共産主義者の手中に落ちたからには、他のアラブ諸国も同じ運命をほとんど免れない——と。米国はソ連との対立を念頭において、もはやアラブ世界の全体と友好関係を樹立しようとするどころか、アラブ陣営の内部の問題にまで干渉するに至った。〔Steven L. Spiegel, 前掲書、86頁〕

38 当時、アーリフは第二十旅団の大隊長で、部隊内部の軍事政変反対派を制圧し、自ら旅団を率いてバグダードに進撃した。7月14日の早朝、放送局を占領すると、革命成功の第一声を電波に乗せる。カーシムは第十九旅団長で、部下と共にバグダードへ到着したのは、昼頃のことだった。この遅延は、革命の同志の疑惑をかきたてる。カーシムは軍事政変の首尾を危ぶんで、形勢を観望していたのではないか——と。〔Phebe Marr, 前掲書、156~157頁〕

39 ナースィルはイラク情勢を観察して、次の通り判断する。ここでもアラブ民族主義とソ連支援の共産主義の対決が、合邦前のシリアと同様に繰り返されている——と。さらにソ連共産党の第二十一回大会でのフルシチョフ発言に対して、ナースィルは不快感を隠さない。このソ連共産党第一書記が中東情勢に言及し、アラブの〈併合〉や〈民主的自由の抑制〉を批判したからである。その頃、カーヒラがマスクヴァとアスワーン堰堤の建設をめぐる、交渉の最終段階に入っていたので、ナースィルは反論を控え目にせねばならなかった。またフルシチョフはナースィルを酷評する。統合アラブ共和国の大統領は共産主義や共産党について語る時、帝国主義者と同じ言葉で武装している——と。〔Robert Stephens, 前掲書、295~297頁〕

40 アレポウやラタキアなどシリアの主要都市がまだ決起派の手中に落ちていないことを知って、ナーシルは二千人の落下傘部隊と海軍に出動を命令した。だが、間もなく両都市とも駐屯軍が決起側に寝返ったので、飛行機も艦船も中途から引き返す。百二十人の先遣部隊はラタキアに到着すると、一発も撃つことなくナーシルの命令で降伏した。彼は断言する。アラブがアラブと戦うことができようか——と。実際、シリア軍の大半が統合アラブ共和国に忠実でない限り、北部地域の再征服は軍事的にも補給面からも困難だった。〔Robert Stephens, 前掲書、340頁〕

41 ナーシルの経済政策の押し付けは、シリアの生活水準をエジプトなみに引き下げるばかりか、シリア経済を全面的にエジプトに従属させるものと受け止められた。さらにシリアの軍人の中で、人事異動に不満が募る。ナーシルは軍の完全統合を図るため、シリア軍の将校とエジプト軍の将校の人事交流を断行した。前者が名目的に昇進しても実権を与えられず、一方、後者は要職に任命される。エジプト出身の軍人はしばしばシリア人の同僚や上官を無視し、頭越しにカーヒラと連絡を取る。彼らの多くは軍の諜報機関に属し、職業軍人としては贅沢な暮らしを享受した。また、両国軍の統合は、シリアの兵器庫から高性能の武器や弾薬をエジプトに移すのが狙いではないか——と取り沙汰され、シリア人の疑惑をかきたてた。〔George Lenczowski, 前掲書、545~549頁〕

42 エジプトのイエマン派遣部隊は最盛期に五万人に達したが、山岳地帯の戦争に不慣れだった。ナーシルが弱体な共和派に挺入れすれば、否応なくイエマンの内政に巻き込まれ、彼の政敵は〈エジプト帝国主義〉非難の声をあげる。しかし、ナーシルは統合アラブ共和国の分解で権威を失墜しただけに、イエマン革命を支援することにより、アラブ世界の主導権を取り戻したかった。〔Peter Mansfield, 前掲書、324~325頁〕

43 カーシム政権は後に共産党を弾圧し、ソ連の新聞から非難される。だが、両国は外交関係は断絶することなく、ソ連からイラクへ武器の供給が続いた。バース党は軍部のアーフ派と協力してカーシム政権を打倒すると、返す刀で多数の共産党員を血祭りにあげる。マスクヴァはバグダードの新体制をすぐに承認したが、思いがけぬ事態に驚き、イラクの同志に対する〈血の恐怖〉を強く非難した。〔Dilip Hiro, 前掲書、277~278頁〕

44 エジプトとシリアの合邦が瓦解し、ナーシルは苦い屈辱をなめながら、なぜ三国統合の交渉に応じたのか、その理由は必ずしも明確ではない。英国の中東現代史家は、次の通り述べている。ナーシルはアラブ統合の一種の象徴となったため、たとえ（統合を裏切った）シリアからでも再統一の申し入れを斥ける訳には行かなかった。ナーシルは1950年代に造り上げられた彼自身の虚像から逃れられなかった——と。〔Peter Mansfield, 前掲書、328頁〕

第八部

六日戦争の破局

32 パレスチナ抵抗運動の発展

アラブ首脳会議の開催 1964年1月、アラブ世界の国王、首長、大統領、首相はナースィルの招請でカーヒラに参集し、第一回アラブ首脳会議を開催する。西アジア、北アフリカの元首級要人たちが政治体制の相違を問わず出席し、アラブ世界の直面する問題について意見を交換するのは、前例のないことだった。会議は五日間の日程では合意に至らず、八カ月後の1964年9月、海港のイスカンデリーヤに会場を移して再開された。

過去三年間、アラブ世界の急進派陣営は大揺れに揺れ、統合どころか分裂を深める。ナースィルはバース党と対立を繰り返し、そのたびに威信を傷つけられた。今後も彼がアラブ世界の指導的地位を維持しようとするなら、急進派諸国だけでなく、守旧派諸国とも友好関係を樹立せねばならない。〈革命的〉であれ、〈反動的〉であれ、すべての国々が結束できるのは、対イスラエル問題である。

その頃、ヨルダン川の分水問題をめぐり、アラブ諸国に協調の機運が熟し始めた。この聖なる川はシリア、ヨルダン、イスラエル領内の泉、小川の水をまとめてガリラヤ湖にそそぎこみ、ここから再び流れ出して兩岸の耕作地を潤しながら死海に至る。イスラエルはアラブ側の反対を無視して、この淡水湖から取水用の工事を始めた。1963年、揚水機場、導水路が完工し、いよいよ水の汲み上げを開始する。

1950年代の半ば、米国は利水専門家を派遣して、ヨルダン川の水資源の高度利用の可能性を調査させた。その案は調査団長にちなんでジョンストン計画と呼ばれ、アラブ・イスラエルの双方に一定の取水量を割り当てる。だが、アラブ側は、計画そのものを拒否した。イスラエルの取水はヨルダン川の流量を低下させるばかりか、水中の塩分濃度を上昇させて、沿岸の農耕地の灌漑に大きな支障を生ずるだろう—との理由からである。

国土の大半が砂漠のヨルダンでは、大規模農業が可能な場所は、この川沿いの地域以外にない。そこは〈ヨルダンのパン籠〉と呼ばれるほどの穀倉地帯で、周辺の乾いた丘陵地と対照的に、緑の帯を形成している。灌漑用水さえ確保できれば、亜熱帯性気候の下で三毛作も可能である。穀物のほかに、野菜、果物の栽培も盛んだった。

アラブ諸国がヨルダン水系の共同開発を拒否したのは、それがシオン主義国家の承認につながるのを恐れたからである。イスラエルは単独で取水工事に着

工し、既成事実を造りあげた。そこでアラブ側はイスラエルの意図を出し抜くため、応分の費用を分担しあい、ガリラヤ湖の上流の二地点で川筋変更の工事に取り掛かった。

その土木工事はレバノンとシリア領内で上ヨルダン川の支流に堰を築き、川の水がガリラヤ湖に達する前に灌漑用水路に流し込む。この分流計画が実現すれば、天然の貯水池の水位は流入量の減少で大幅に低下するだろう。生命の水はイスラエル側に奪われることなく、アラブ側の農地を潤すだろう。しかし、イスラエル軍は建設の進捗状況を見守り、建設現場に砲爆撃を浴びせる。アラブ諸国の意図は、これで頓挫してしまった。¹

パレスチナ 角 解 放 機 構 アラブ世界が対立と抗争を繰り返している間に、イスラエルはガリラヤ湖から取水を始めた。その貴重な真水はトンネルや導管を通じて地中海岸の平野まで送水され、農業だけでなく、工業用水、飲料水として利用される。ヴァイツマンもベン＝グリオンもシオン主義国家の未来を南部のネゲヴ砂漠に託し、その緑化を夢想した。ヨルダン川とガリラヤ湖の水で不毛の乾燥地を農地に変えれば、全世界からユダヤ移民を吸収できる――と。

アラブ三国の統合計画がご破算となって以来、カーヒラはディマシュクの強硬路線に手を焼く。バース党は軍部と提携して、尖鋭化の一途をたどった。もしシリアがヨルダン川の水争いでイスラエルと衝突を引き起こせば、エジプトとしては看過できない。だが、イエマンに精鋭部隊を派遣している現状で、どうしてシリアへ援軍を送ることができようか。ナーシルはシナイ・スエズ戦争の教訓から、イスラエル国防軍の実力をよく認識していた。

アラブ首脳会議はイスラエルの軍事的脅威に対抗するため、統合司令部の設立を決定した。エジプト軍の将官が総司令官に就任し、非常時に各国の軍隊の指揮を執る。第一次中東戦争の際、アラブ諸国の軍勢は相互に協力しないまま、イスラエル軍に各個撃破されてしまった。この過去の失敗は、再び繰り返されてはなるまい。だが、この軍事協力態勢の真の意図は、シリアのバース党と軍部の跳ね上がりを抑制することだった。

実際、アラブ首脳会議は、ナーシルの戦争回避の意思を確認する場となった。だが、エジプトがアラブ世界の指導国を自任すれば、イスラエルの軍事力に怖じけづいたと誤解されてはならない。そこでナーシルはパレスチナ問題を取り上げ、内外の批判を巧みにそらす。シオン主義国家の建国で故地から追われた同胞を見捨てることなく、その代表団体をアラブの兄弟国全体で支援しよう――と。²

この構想にヨルダンは強い難色を示す。フセイン国王の祖父アブダッラーは

国際連合の決議に基くアラブ領域の大半を併合し、その地のパレスチナ人にヨルダンの市民権を与えた。その結果、国王の新臣民はヨルダン国民の半数以上を占め、砂漠の遊牧部族の人口を上回るに至った。代表団体の設立はパレスチナ系住民を別個の政治的存在として認めることになり、ハーシム家の王冠に対する忠誠を危うくするだろう。

そこでナーシルはフセインを説得し、彼の懸念を解くのに苦勞する。新設のパレスチナ人団体は亡命政権ではなく、国内の活動に一定の制限を課す——と。ヨルダン国王は首脳会議の大勢に逆らえず、渋々ながら応ずるしかなかった。だが、この保証が当てにならぬことを、間もなく思い知るだろう。

1964年の5月から6月にかけて、パレスチナ人の代表者はヨルダン統治下の東エルサレムに参集し、〈ムナッザマト・アル＝タハリール・アル＝フィラスチニヤ〉（パレスチナ解放機構＝英文略称・PLO）の結成を宣言した。ナーシルの強い推挙で、法曹家のアハメド・エッ＝シュケイリーが総裁に就任する。³ この団体はアラブ連盟に正式の一員として迎えられ、その財政支援を受けることになった。

パレスチナ 難民の窮状 1948年の第一次中東戦争で、シオン主義者は念願の独立国家を樹立する。だが、イスラエルの建国は新たな離散の民を生み出し、聖地に祝福どころか怨恨と憎悪を招く。パレスチナ難民は戦火を逃れて一時的に故郷を離れ、我が家へ帰る日を待ちわびつつ、そのまま十数年も収容所で暮らす。ユダヤ国家は国際連合の諸決議を無視し、難民の帰郷を認めなかった。

難民は安全な場所を求めて、ハーシム王家支配下のヨルダン川の西岸地域やエジプト統治下のガザ地帯、レバノン、シリアにたどりつく。近隣諸国は突然の人口移動に驚き、同胞の受け入れに大苦となった。町外れの荒れ地に急造の収容所は満足な設備もなく、当初、難民は天幕や洞穴で雨露と砂塵をしのがねばならなかった。やがて流浪の民は木箱やトタン板の廃品を寄せ集め、小さな掘っ立て小屋を造り上げる。

だが、これは人間の住む場所としては、あまりにも不十分だった。難民は落ち着きを取り戻すと、もう少しましな住居の建築に取り掛かった。その壁は石の塊を泥で塗り固め、亜熱帯の暑熱を遮る。この建物は五～六坪四方の一室だけで、小さな明かり取り窓が一つあるに過ぎない。そこに十人程度の大家族が寝起きし、狭い部屋で重なり合うように暮らす。こうして難民収容所は自己増殖を遂げて、巨大なスラム街に発展した。

1950年、国際連合は難民救済事業機関（英文略称・UNRWA）を設立し、パレスチナに援助の手をさしのべる。生計の手段を失った家族に無料で食糧を

配給し、子供たちに教育を施し、病人のために診療所を開設した。しかし、この人道主義的機関は慢性的な資金不足に悩み、十分に活動できない。1967年の前半までに、難民収容所はヨルダン、シリア、レバノン、エジプト施政下のガザ地帯に五十以上も散在し、その人口は五十三万三千人にのぼった。⁴

英国の委任統治時代、パレスチナのアラブ社会は農業に基礎を置いていた。農民は戦乱のためにユダヤ国家の外側に放逐されてからも、故郷の土地を忘れることなく、一日千秋の思いで村へ帰る日を待つ。しかし、その願いが叶うことはなかった。その子弟はまともな職業に就く機会もないまま、難民収容所で無為に日々を過ごす。

難民の中でも能力と幸運に恵まれた者は、収容所の外に新しい人生を切り拓き、主としてアラブ世界の石油産出国へ移住した。とりわけペルシア湾岸の新興国は国家建設のために人材を必要としていたので、教育程度の比較的高いパレスチナ人を公務員、教師、技師、軍人として迎え入れる。また、商才に長けて、新天地で実業家や商人として成功した者も少なくない。しかし、彼らは受け入れ国で厚遇されても、失われた故地を決して忘れることなく、その出身地に誇りを持ち続ける。

アラブ諸国はパレスチナの同胞の流入を拒みはしなかったが、一般国民から難民を隔離し、その社会に同化させようとはしなかった。実際、近隣の各国とも貧しく、何よりも経済的に吸収能力を欠いた。それぞれの国の支配者にとって、難民の悲惨な生活は雄弁にシオン主義の脅威を語りかけ、国内の不満を外部にそらすのに役立つ。

この窮状の中から、パレスチナ民族意識が次第に形成される。もともとパレスチナの地名は、シリアの南部地方を指す。そこの住民は大シリアの一員としての意識を抱いても、独自の民族感情を育まなかった。第一次世界大戦後、東アラブの地は戦時中の誓約に反して、英仏両国に分割される。シリア南部は英国の委任統治下に入り、母なる地から切り離された。やがてユダヤ教徒の移住に抵抗する過程で、パレスチナ独自の民族意識が住民の心に芽生える。イスラエルの建国以後、この意識は過酷な現実の中で、ますます強固になった。⁵

武装闘争 パレスチナ解放機構（PLO）はナーシルの提唱で設立され、アラブ連盟の庇護下に置かれた。その設立の目的は四分五裂のアラブ世界全体の関心をイスラエルに向けて盛り上げ、折りから上げ潮のパレスチナ民族意識を手なづけるよう意図していた。実際、汎アラブ主義が声を大にして説かれる時代、パレスチナ独自の民族主義は反動視されかねない。PLOはナーシル主義の翼賛団体に過ぎなかった。

PLOは村落の伝統的支配者、名望家、医師・弁護士などの有力者をヨルダ

ンとガザ地帯から集めたほか、外国居住のパレスチナ人をも傘下に収める。当時、左派の諸団体がいくつか存在したが、エジプトの息のかかった団体の性格に疑念を抱き、いずれも加盟を保留した。その一つのアル＝ファタハはPLOに先んじて解放闘争の口火を切り、やがては組織自体を乗っ取る。

パレスチナ解放機構は官製団体とはいえ、単なる親睦、情報交換、連絡の機関ではなく、その名称の通りパレスチナの解放を目的に明確に掲げる。しかし、ナーシルはシュケイリーの後見役として、武力解放闘争を許さなかった。ゲリラがエジプト統治下のガザ地帯から出撃すれば、イスラエルの報復を招くばかりか、停戦監視の国連緊急部隊を困難な立場に陥れるからである。PLOは難民収容所から若者を義勇兵として徴募し、パレスチナ解放軍（英文略称・PLA）を編成した。だが、この武装集団はアラブ諸国の軍隊に組み入れられ、独自の作戦行動を認められなかった。

ファタハの 軍事行動 1965年 1月 2日、ファタハに所属の三人のフィダイーンが夜の闇に紛れてヨルダン川の浅瀬を渡り、イスラエル領内に深く潜入する。ゲリラ戦士はイスラエル国営用水公社の導水路に爆薬を仕掛け、国境警備隊の兵士の目をかいくぐって無事に出発点のヨルダン領に戻った。だが、予想通りの爆発は起きず、ガリラヤ湖の水を無駄に地面に流すことはなかった。公社の職員が水路に不審物を発見し、雷管を抜いたからである。

翌日、ベイルート発行の日刊新聞各紙は大見出しで水路の爆破を報じ、反イスラエルの地下秘密組織ファタハに脚光を浴びせた。その前夜、新聞社の郵便受けに爆破成功の軍事公報第一号が入れてあり、各紙の編集者は事実を確認せぬまま紙面に掲載したからである。この報道はアラブ世界にたちまち伝わり、称賛と非難を引き起こす。とりわけエジプトとヨルダンは武装活動に批判を加え、逆にシリアは喝采を送った。

ファタハは爆破（未遂）事件を〈パレスチナ革命の号砲〉と称したが、最初の軍事行動の幕切れは悲劇に終わる。イスラエルの国境警備隊は侵入者の足跡をたどり、ヨルダン川の岸辺まで来たところで追跡をあきらめた。ところが、フィダイーンはヨルダンの警備兵に遭遇し、武器の引き渡しを拒んだため、その一人が射殺される。こうして反イスラエル直接行動の戦士は、皮肉にもアラブの同胞の手にかかって倒れた。⁶

第二次中東戦争（スエズ・シナイ戦役）の後、ガザ地帯で地下組織が若者の間に結成され、〈ハラカート・アル＝タハリール・アル＝フィルスタニ〉（パレスチナ解放運動）と称した。この秘密結社の名称をローマ字で表記し、その頭文字のHATAFをアラビア語風に右から左へ読めば、ファタハとなる。そ

れは偶然にも、アラビア語で勝利を意味した。その組織員はもはやアラブ諸国に期待も幻想も抱かず、武力による故地の自力解放をめざす。⁷

指導者のヤーシル・アラファートは1929年の生まれ、カーヒラで大学教育を受け、パレスチナ留学生連盟の会長を務めるなど、学生時代から組織力に秀でていた。やがてクウェイトに移住し、土木技師として水道局に雇われる。その後、みずから建設会社を設立し、経営者としても成功した。しかし、彼は産油国で一応の経済的満足を得ても、解放闘争を断念することなく、ファタハの組織強化を図る。

パレスチナ人は亡国の非運に苦しみながら、かつての欧州のユダヤ教徒と同じように教育投資を惜しまなかった。アラブ世界の高等教育機関はもとより欧州各国の大学に、多数の能力のある青年が学ぶ。アラファートは西独に留学中の学生に接触し、地下組織に参加を勧誘した。やがて留学生の中から、未来の幹部級戦士を獲得する。ファタハは自力解放を叫びながら、実際にはシリアとエジプトの対立を利用し、ディマシュクの助力を得た。

PLOの設立から半年後、いよいよファタハは独自の軍事行動を決行する。あの水路爆破が失敗に終わった後も、イスラエル領内で破壊活動を繰り返した。1965年中にファタハは三十五の破壊活動を決行し、民間の目標に多少の損害を与える。そのたびに例の軍事公報は大戦果を発表するが、実際以上に成果を誇張していた。フィダイーンは根拠地をシリアに置き、多くの場合、ヨルダンを経由してイスラエルに潜入する。

ファタハの目的はイスラエルを挑発することにより、その大規模な報復行動を引き出すことだった。そうなれば、親西側のヨルダンも反撃に立ち上がり、慎重派のエジプトも黙視できず、やがてアラブ世界の全体が対イスラエル戦争に参加するだろう。シオン主義国家がアラブの総攻撃にさらされれば、必ずや敗北を喫し、パレスチナの解放は実現するに違いない——と。

しかし、ファタハの戦略はエジプトを始めとするアラブ諸国から不評を買い、とりわけレバノンとヨルダンで厳しい取り締まりを招く。その結果、フィダイーンの出撃回数は減少を余儀なくされた。この武装集団はパレスチナ革命を呼号したが、ヨルダン国内の同胞はもとよりイスラエルのアラブ系住民からも支持を得られなかった。人民革命による民衆の蜂起——という図式は、夢想に過ぎなかった。

だが、アラファート指導の武装闘争はPLOを出し抜き、忘れられかけたパレスチナ問題を世界の世論に訴えかける契機となった。1966年5月、イスラエルはファタハの攪乱戦術を安全保障理事会に提訴する。この武装集団はアラブ諸国から厄介者扱いされながら、いまや国際社会に存在を知られるに至った。

33 限定報復から全面对決へ

大規模な報復攻撃 1960年代の半ば、ディマシュクのバース党政権はますます鋭化し、基本的に反共的姿勢を維持しながら、軍事面でマスクヴァに大きく傾いた。かつてエジプトがソ連製の武器で軍備を固めたように、シリアも同じ装備で戦力を増強し、イスラエルに脅威感を与える。フィダイーン集団のファタハは自力闘争を主張していたが、いまや公然とディマシュクの庇護下に入り、ソ連製の近代兵器でゲリラ活動に挺身した。

パレスチナ抵抗運動の激化はシオン主義国家を揺さぶり、とりわけ人里離れた開拓地の人心に不安感を醸成する。イスラエルは大規模な報復に乗り出し、しばしばヨルダンに越境攻撃を加えた。フィダイーンはシリアの根拠地から出撃すると、ヨルダン領経由で潜入したからである。1966年11月、イスラエル国防軍のゲリラ討伐作戦は、ヘブロン近郊の村落サムーでヨルダン王国軍の反撃を招き、双方とも戦車と航空機を繰り出す本格的戦闘に発展した。⁸

このサムーの激戦はヨルダン側には甚大な損害を出し、同時にハーシム家支配下のパレスチナ住民の間に憤激の嵐を巻き起こす。反イスラエルの示威行進は反政府暴動となって各地に拡大し、フセイン国王の威信を失墜させた。ヨルダン政府は武力抵抗派に弾圧を加え、ファタハの活動家だけでなく、PLOの構成員も片端から逮捕する。ついにアマーンとディマシュクは、外交関係を断絶するに至った。

シリアの首脳部は、強硬発言を繰り返す。人民解放戦争は無制限の戦いであり、シオン主義の基地を破壊するだろう。我々は平和を求めず、受け入れもしない。望むところは、戦争であり、奪われた土地の回復である。我々は侵略者を永久に追い出し、海にたたきこむために、この地を我が血で濡らすよう決意を固めた。イスラエル、帝国主義、人民のあらゆる敵に対して、解放戦争を戦い抜かねばならない——と。⁹

しかし、ナースィルは盟友の勇ましい主戦論に耳を貸そうとせず、施政下のガザ地帯でパレスチナ人に武器を与えて訓練しながら、決してゲリラ活動を許さなかった。エジプトはイエマンに大軍を派遣し、イスラエルと戦う余裕は到底ない。それにスエズ戦争から十年間も、国連緊急部隊がガザ地帯とシナイ半島に駐屯し、仇敵同士の兵力引き離しに貢献してきた。シリア流の人民戦争論に同調すれば、真先に平和維持の多国籍部隊を紛争に巻き込むことになる。そのような事態は、国際社会の世論形成に不利となるに違いない。

ファタハなど抵抗組織の狙いは、フィダイーン活動の激化でイスラエルの攻撃を誘発することだった。大規模な報復作戦が続発すれば、慎重派のエジプトも事態を黙視できず、やがて武力行使に追い込まれよう。ひとたび対イスラエル戦争が始まれば、アラブ諸国は否応なしに戦列に参加せざるを得まい。新たな全面戦争は、アラブ側の大勝利に終わるだろう。ついでにヨルダンやサウディ・アラビアの〈アラブ反動派〉は、人民戦争の勝利の暁にはシオン主義国家と同様に瓦解するに違いない――と。

イスラエル首脳 1967年春、パレスチナ北辺のガリラヤ湖周
の強硬発言 辺で、にわかに緊張が高まった。シリアの正規軍はゴラン高原に布陣し、眼下にイスラエル側の農地を見下ろして、そこに砲弾を撃ち込む。¹⁰

ここは1948年の休戦協定で非武装の無人地帯となっていたが、ユダヤ開拓農民は畑を境界線に達するまで耕作した。さらにシリア軍の砲兵隊は長射程砲を導入し、遠距離から国境越しに砲撃を繰り返す。

ゲリラ活動の激化に対して、イスラエルは軍事力の弱体なヨルダン（時にはレバナン）に厳しい報復攻撃を加えたが、フィダイーンの黒幕のシリアに反撃しなかった。イスラエルとヨルダンとの境界は、約五百㊦にも達する。川幅の狭いヨルダン川以外に、天然の障害がない地形だけに、イスラエル側は好きな場所を選んで敵地に容易に侵攻できた。

しかし、イスラエルとシリアとの国境線は、たかだか数十㊦に過ぎない。湖畔の低地から高原上の相手を攻めるのは、地形上はなはだ不利だった。しかも、ディマシュクがマスクヴァを後ろ楯としているだけに、その軍事力はあなどりがたい。もし、衝突が発生したら、国際的波紋は大きいだろう。シリアはイスラエルの慎重姿勢を、相手の弱さの現れと解釈した。

1967年 4月 7日、イスラエル国防軍は度重なる砲撃をもはや黙視できず、フランス製のミステール戦闘爆撃機を発進させ、空からシリア軍の砲兵陣地を急襲する。シリア空軍はソ連製のミグ戦闘機で邀撃し、激しい空中戦がゴラン高原の上空で展開された。その結果、シリア側は六機を撃墜される。イスラエル側は一機の損失もなく、ついでにディマシュクの上空を飛行し、大勝利を誇示した。

この軍事衝突は両国間の緊張を一挙に高めた。やがて中東地域は全面戦争の破局に向かって、急な坂道を転がり落ちる。1967年 5月中旬、イスラエル首相のレーヴィー・エシュコルは一連の発言で、シリアに警告を発した。いかなる国家もイスラエル領土内で破壊活動を援助、教唆するならば、報復を免れないだろう。いかなる国境もアラブ側が平穏ならば、イスラエル側も平穏だろう。

イスラエルはシリアに対して、4月7日の衝突以上の手酷い教訓を与えることになるかも知れない——と。

イスラエル国防軍幕僚長のイツハク・ラビン（後に首相）も記者会見の席で、強硬姿勢を示す。シリアの現体制が政権の座にある限り、ファタハのゲリラ活動は続くだろう。イスラエルは軍事挑発に受け身でなく、エジプトの軍事介入の危険を冒しても、シリアの首都ディマシュクに侵攻して敵対政権の転覆も辞さない——と。イスラエル首脳が発言は欧米の通信社・新聞社を經由して大きく増幅され、戦争不可避の印象を与えた。¹¹

国連緊急部隊の撤収を要求 この緊迫した情勢をめぐり、エジプト軍の諜報機関はナーシルに報告する。イスラエル軍がガリラヤ湖近くの北部国境付近に大軍を集結中で、その兵力は十一から十三箇旅団に達する——と。シリアの国防相もエジプトの同役に類似の情報を伝達し、攻撃開始日を5月16日か17日と想定した。同じ頃、エジプト国会議員団がマスクヴァを訪問した際、ソ連当局者から同じ内容の話を伝えられる。

イスラエルは兵力集中の噂を真向から否定した。その地域の兵力は、せいぜい数箇中隊に過ぎない。エシュコルは実情視察のためイスラエル駐在のソ連大使に現地招待を申し入れたが、相手から素気なく拒否される。国連休戦監視団は調査隊をガリラヤ地方に送り、大軍集結の情報を否定した。¹²

しかし、真偽の疑わしい情報はアラブ世界の世論を沸騰させ、もはや引っ込みがつかない。ここでエジプトが立ち上がらなければ、ナーシルは臆病者の烙印を押されるだろう。1964年のアラブ首脳会議はナーシルの提唱でPLOの設立を認めたが、同時にエジプトの不戦の意思を確認する場となった。エジプトはPLO傘下のパレスチナ人の武装に手を貸したが、ガザ地帯からゲリラの出撃を厳しく規制し、無用の挑発を避ける。

実際、エジプトの慎重な態度は、アラブ世界の〈急進派〉からよりも、むしろ〈反動派〉から強く批判された。ヨルダン国内でゲリラ活動を取り締まっているのに、いつもイスラエルの報復攻撃にさらされる。ファタハなどの武装集団はシリアを根拠地としながら、ヨルダン領を經由してイスラエルに潜入したからである。しかし、仇敵の報復作戦が他国の領土に向けられている限り、エジプトはただ傍観するばかりで動こうとはしない——と。

この損な役割にいらだち、ヨルダンの対外宣伝放送は、ナーシルの痛い所を衝く。エジプトは臆病風に吹かれて、国連緊急部隊の背後に隠れている。しかもイスラエル船はダヴィデの星の国旗を掲げ、白昼堂々とティラーン海峡を通過している。それでもエジプトはアラブ世界の盟主を自任するつもりなのであろうか——と。

シリアの危機に直面し、ついにナーシルも決断に踏み切った。1967年 5月14日、エジプト軍はスエズ運河を渡ってナイ半島に進軍し、翌々日、イスラエル国境沿いの国連緊急部隊に哨所から撤収を迫る。この唐突な通告を現地指揮官は拒否し、国際連合本部の命令にのみ従うと回答した。¹³ この時、カーヒラの要求は国境線沿いの哨所を対象とし、ガザ地帯やティラーン海峡の監視所に言及していない。

国連緊急部隊はスエズ・シナイ戦争の終結から十年以上も古戦場に駐留し、エジプト、イスラエルの兵力を引き離していた。イスラエルが勝者の立場から自国領に外国軍隊の立ち入りを拒否したので、緊急部隊はエジプト領内だけに進駐し、国境付近で平和維持の監視業務に就く。エジプト側はスエズ・シナイ戦争の停戦とイスラエル側の撤兵の経緯から、シナイ砂漠には小兵力を配置するにとどめていた。

交渉の場所は、シナイ半島の現地から国際連合本部の所在地ニューヨークへ移る。事務総長のウ・タントは平和維持部隊の部分的撤退を認めず、全面撤収か否かに論点を絞った。国際連合はエジプトとの合意により、その主権を制限する形で多国籍部隊を駐屯させている。いまやカーヒラは固有の領土内に国連緊急部隊の存続を望んでいない。従って、ナーシルが撤兵を要求するなら、全部隊を対象にすべきである——と。

ウ・タントはイスラエルや西側諸国の反対を無視し、軍隊の派遣国でもカナダとスウェーデンの反対を押し切って、国連緊急部隊の総引き揚げを命令する。国際連合の総会も安全保障理事会も、この問題を討議するために招集されなかった。¹⁴ 事務総長の早まった決断は、後々まで批判を引き起こす。間もなくシナイ半島のエジプト軍は八万の大兵力となり、イスラエルの南の国境を脅かすに至った。

ティラーン 海峡の封鎖 1967年 5月21日、ナーシルはティラーン海峡の封鎖を発表する。国連緊急部隊の撤収をめぐる事態收拾のため、ウ・タントはカーヒラに向う途上、この重大決定をパリで聞いた。エジプト軍の分遣隊はシナイ半島南端のシャルムエッセイクに進撃し、ティラーン海峡に臨む哨所を接収する。イスラエルはエジプトの措置を国家存亡の危機と受け止め、予備役将兵の全面動員を命令した。歴史は繰り返す。1956年、ベン＝グリオンが開戦の意志を固めたのは、スエズ運河のためではなく、ティラーン海峡の封鎖解除を意図したからであった。

またもやナーシルは大喝采を浴び、アラブ世界の英雄になる。シナイ半島のエジプト軍はガリラヤ湖周辺のイスラエル軍を牽制し、そのシリア侵攻作戦を断念させるだろう。それどころかティラーン海峡の封鎖で、イスラエルは経

済的に首筋を絞め上げられ、すっかり弱体化するに違いない。いまこそシオン主義国家撃滅の好機である——と。

1967年 5月26日、エジプトの有力紙『アル＝アハラム』は長文の社説を掲げ、戦争不可避論を唱えた。統合アラブ共和国とイスラエルは、武力衝突以外に方策はない。この衝突は、いつ、どこでも、起こり得る。両国軍が対峙するシナイ砂漠の国境線沿いで、北はガザ地帯から南はアカバ湾（ティラーン海峡）に至る地域の海陸空で——と。筆者のモハメド・ハッサネイン・ヘイカルがナーシルの代弁者として知られているだけに、その論調はエジプト大統領の決意を反映するものと解釈された。¹⁵

もはやシリアの危機は、雲散霧消してしまう。第一次中東戦争の敗北から足掛け二十年、スエズ・シナイ戦争から十年余、思いがけず復讐の機会が、エジプトにめぐってきた。今度の戦争こそ宿敵イスラエルを打倒し、過去の屈辱感を拭い去るだろう。アラブ世界は反シオン主義の聖戦に立ち上がり、その団結力が立証されるに違いない——と。

1967年 5月29日、ナーシルは国会で演説し、戦争目的を明確にする。準備はすべて完了した。いつでもイスラエルと対決できる。当面の問題は、アカバ湾でも、ティラーン海峡でも、そして国連緊急部隊の撤退でもなく、パレスチナ人の権利である。1948年、イスラエルは米英両国と提携し、パレスチナを侵略した。アラブ人はパレスチナから追い立てられ、権利を奪われ、財産を略奪された。我々はパレスチナ人の権利の全面回復を要求する——と。¹⁶

ヨルダンも情勢の変化を悟り、機敏に時流に乗った。5月30日、突然、フセイン国王はカーヒラへ飛び、ナーシルと和解する。両国の元首は統合軍事司令部の設置に合意し、直ちに相互防衛条約に調印した。もし対イスラエル戦争が勃発すれば、ヨルダン軍はエジプト軍の将官の指揮下に置かれる。これでカーヒラ、アマン、それにディマシュクは軍事条約の太い絆で結ばれ、アラブ三国のイスラエル包囲網ができあがった。

同じ日の夕刻、フセインはカーヒラからアマンに帰る。その際、ナーシルとの関係修復の生き証人として、PLO総裁のシュケイリーが同行した。アラブ陣営の内部に、劇的な変化が起きる。それまでの反目を忘れて、急進派も守旧派も大同団結した。イラク、クウェイト、スーダン、アルジャリアなど、イスラエルと国境を接しない国々も、反イスラエル戦争に部隊の派遣を約束する。

イスラエルは孤立感を一段と深めた。いまや三方を敵意に満ちた国々に取り囲まれ、ひしひしと包囲の重圧を感じる。カーヒラ、ディマシュク、バグダード、アマンの宣伝放送は激烈な口調で、好戦的気風を煽り立てた。「必ずや

イスラエル人を殲滅し、婦女子も容赦はしない」「ユダヤ教徒を一人残らず、地中海にたたきこむ」「シオン主義国家は、地図から抹殺されよう」。不吉な預言が電波に乗って、中東全域に伝えられた。

イスラエル 当初、イスラエル政府と軍部はナースィルの意図を**の戦争態勢** 付度し、単に力の誇示にとどまると判断した。しかし、事態がティラーン海峡の封鎖にまで発展したので、エジプトの脅威を真剣に受け止める。彼我の軍事力を比較すれば、数量的にはアラブ側が有利だった。このまま空しく時を過ごせば、情勢はますます不利になるだろう。国防軍は短期決戦をめざし、戦闘準備を固める。しかし、先制攻撃は政治的判断から取りやめになった。

当時、エシュコル首相は労働党主導の連立政権を率い、同時に国防相を兼務していた。彼はロシアの出身で第一次世界大戦の直前にパレスチナへ渡り、開拓農民としてキブツで働く。政界入りしてからは農相や蔵相を経験したが、軍事には全くの素人だった。その政治的態度は協調を重んじたが、平時の国家指導者としては適任でも、非常時には決断に欠く憾みがあった。

ティラーン海峡の封鎖宣言後、イスラエル軍部は即戦態勢を固めた。予備役の部分動員は全面動員に切り替えられ、市民兵は職場や大学から兵営にぞくぞくと集合する。しかし、直ちに戦端は開かれなかった。エシュコルが危機の打開をすぐ武力に訴えずに、まず外交努力に全力を傾注したからである。外相のアッバ・エバンが特使としてパリ、ランダン、ウォシグタンを歴訪し、イスラエルの立場を説明して西側諸国の支持を求める。

しかし、スエズ・シナイ戦争から十年以上の歳月を経て、一昔前の同盟国はすっかり様変わりしていた。かつてフランスはイスラエルに気前よく大量の武器を供給したが、今度は代金支払い済みの兵器まで引き渡しを停止する。大統領のシャルル・ド＝ゴールはアルジャリアの独立を認め、長年の戦争に終始符を打った。この軍人出身の政治家はイスラエルの自制を強く求め、少なくとも最初の一発を撃たぬよう勧告する。

英国首相のハラルド・ウィルソンはド＝ゴールよりも好意的態度でイスラエルの外相を迎え、ナースィルの措置を非難する。しかし、ティラーン海峡の無害航行権については英国だけでは解決できず、米国の協力取り付けを必要とした。すでにランダンはウォシグタンと協議を始めていたが、具体策が実るのはまだ先のことだった。

エシュコルの特使は欧州で確約を得られぬまま、最後には米国大統領のリンダン・ベインズ・ジャンソンを訪ねる。米国は海運諸国の合意で商船隊を軍の護衛下に置き、ティラーン海峡の強行通過を検討した。この案に英国、ホラン

ド、オーストラリアの三カ国が賛意を表しただけで、大多数の国々は乗り気ではなかった。ジャンソンは遠来の客に口先ではイスラエル支持を繰り返して表明したものの、決して言質を取られぬよう発言を慎む。その頃、米国はベトナム戦争に深入りし、新たな軍事介入の余裕は到底なかったからである。

1967年 5月25日、開戦間近の虚報が国際社会を電撃のように走り抜け、米ソ両国は別々の思惑から危機の回避に歩調を合わせた。エジプトがイスラエル攻撃に踏み切るとの情報にうろたえて、二超大国の首脳はナースィルに強く自制を求める。カーヒラ駐在のソ連大使は本国からの緊急指示で、早朝にもかかわらずナースィルに面会し、クレムリンの意を尽くす。少なくともアラブ側が戦争の口火を切らぬように――と。ナースィルは腹心の副大統領ザカリア・モヒエディンを米国に特使として派遣し、戦争回避に誠意を示した。

米ソ両国ともイスラエルに外交的圧力をかけ、事態の平和的解決を要求した。エシュコル政権の閣議で、非戦論と主戦論をめぐって、激論が交わされる。戦争か平和か、閣僚の意見は九対九に二分された。首相自身は開戦不可避論に傾くが、決断に踏み切れず、事態を静観するばかりだった。5月28日、エシュコル自ら放送を通じて、国民に情勢を説明する。だが、それは彼の優柔不断を印象づけるだけだった。¹⁷

この間、エシュコル首相に対して、軍部も国民も不満を急速に募らせる。イスラエルが西側陣営の支持取り付けに空しく時間を過ごすうちに、エジプトは確実に軍事力を増強している。国家指導態勢をもっと強化しなければ、この危機を乗り切れまい――と。エシュコル個人の支持者でさえ批判に回り、内閣改造による挙国一致政権を提唱した。

6月 1日の夜、エシュコルは反対陣営から二人の実力者を入閣させ、政権の基盤を拡大した。首相は国防相の兼任をやめ、ラフィ党から前国防軍幕僚長のダーヤーンを迎え、軍事面の全権を委ねた。さらに右翼で強硬派の論客ベギンが無任所相に起用される。これで定数百二十の国会議員のうち、百十二人が与党に組み入れられた。

ダーヤーンの任命は国民に熱狂を巻き起こし、将兵の士気を一気に高めた。この独眼龍の将軍は1956年のスエズ・シナイ戦争を勝利に導き、今度の危機に際して衆望を一身に集める。新国防相は議会から投票で正式の信任を受ける暇もないまま、閣議で詳細な作戦計画を説明した。6月 4日、挙国一致政権は暁の閣議で開戦を決定し、その時期について首相と国防相に全権を委任する。ダーヤーンは無駄に時を過ごさず、直ちに全軍に総攻撃を命令した。¹⁸

34 イスラエルの電撃的勝利

奇襲攻撃 1967年 6月 5日、イスラエルとアラブ三国は運命の朝の**戦果** 迎え、宣戦布告のないまま、戦争状態に突入する。カーヒラ時間の午前七時四十五分、イスラエルの航空隊は宿敵に先制攻撃を仕掛けた。爆撃機、戦闘機の大群は電波探知を避けるため超低空で飛行し、攻撃目標のエジプト空軍基地に殺到する。ダーヤーンの奇襲攻撃は見事に成功し、完全にナーシルの虚を衝いた。第三次中東戦争は、このようにして始まる。

イスラエル機の反復集中攻撃で、エジプト機は飛び上がって反撃する間もなく、大半が地上で破壊されてしまう。戦端の開始から数時間で、アラブ世界最大の空軍はもろくも壊滅した。これでエルサレムやテラヴィヴなどイスラエルの諸都市は、エジプト機の空襲の脅威からすっかり解放された。¹⁹

宿敵の厳戒態勢にもかかわらず、先制攻撃が成功したのは、イスラエル得意の諜報活動の賜物である。第一波の銃爆撃が始まった時、エジプト空軍の偵察機は早朝の哨戒任務を終え、地上で翼を休めていた。空軍基地の幹部将校は自宅から出勤の途上にあり、防御と反撃の指揮を執ることができない。イスラエルの攻撃は警戒の緩んだ短い時間帯を狙い、奇襲の成果を最大限に挙げる。

航空隊の出撃から半時間後、地上部隊も作戦を開始し、ガザ地帯とシナイ半島に侵攻した。エジプト軍の陣地は地雷原と鉄条網で守りを固め、敵軍の来襲に備える。だが、イスラエル軍の戦車は正面攻撃を避け、側面の通過不可能と思われた砂丘を乗り越えて敵陣の背後に回った。エジプト側は堅固な防御線を各地で寸断され、援軍の反撃も阻止される。イスラエルの機甲部隊は最前線を突破すると、一路西へ西へとスエズ運河をめざす。²⁰

指揮系統 エジプト軍の敗因は、何よりも指揮系統の混乱に求めら**の混乱** れる。その朝、最高司令官のアーミル元帥は前線の視察に出かけ、空軍司令官や参謀将校を引き連れて、カーヒラからシナイ半島の現地に向かう途中だった。このためアーミルの乗機が飛行中、各地の高射砲陣地は射撃を厳禁される。駐屯地の部隊長は出迎えのため任地を離れ、飛行場に集まっていた。留守役の下級将校は不意の敵襲にうろたえ、ほとんどなす術を知らない。

緒戦の一時間半、戦局の帰趨を決する大事な時期に、エジプト三軍の総司令官は連絡を断つ。アーミル一行の乗機は銃爆撃下の目的地に着陸できず、戦場の上空をさまよった末に、やっとカーヒラまで引き返した。この間、総司令部

は適切な反撃命令を出せぬまま、貴重な時間が空しく失われる。陸軍は防衛陣地を強襲され、空軍はソ連製の新鋭軍用機の数々を地上で粉碎された。とりわけ制空権の喪失は、やがて地上戦の勝敗を決定する。

元帥がやっと指揮所に戻った後、エジプト軍は陣容を建て直すどころか、統帥の混乱に拍車をかけた。アーミルは最前線の司令官を信頼せず、後方から直接命令を発する。このためシナイ半島の部隊は現地情勢に即応できず、みすみす戦機を失ったばかりか、甚大な損害を出した。

エジプト軍部は実際の戦況を隠蔽し、戦意昂揚のため誇大な戦果を発表する。カーヒラ放送は敵機を五十機も撃墜したと報じ、エジプト国民だけでなく大統領まで惑わせた。ナーシルが惨敗の実情を知らされたのは、夕方になってからのことだった。アーミルが早まってシナイ半島の全軍に退却命令を発すると、ナーシルは逆に徹底抗戦を指示する。全面撤退か戦闘続行か、最前線の指揮官は相矛盾する命令を受けて途方に暮れた。²¹

やがてシナイ半島のエジプト軍は総崩れとなり、スエズ運河に向かって敗走を始める。イスラエル軍の機甲部隊は追撃の手を緩めず、同時に航空隊は空から容赦ない打撃を見舞った。十万の精鋭部隊は退却の途上、重火器も車輛も失って、ただの烏合の衆と化す。敗残兵は武器を捨て、酷熱の砂漠を徒歩で西へ向かった。多数の兵士が荒野をさすらい、やがて飢えと渇きで倒れる。

一方、危機の焦点・ティラーン海峡の封鎖を解除するため、イスラエル軍部は海陸両面の作戦を発動した。6月7日、水雷艇の戦隊はアカバ湾を南下し、輸送機は落下傘部隊を搭載して、目的地のシャルムエッセイクに向かう。だが、エジプト軍の守備隊が事前に撤退を完了していたので、この要衝はもぬけの殻となっていた。イスラエル軍は一発も撃つことなく、一滴の血を流すこともなく、今度の戦争の発火点を占領する。

同じ日、イスラエル軍の先鋒はスエズ運河に到達し、東岸にダヴィデの星のイスラエル国旗が翻る。1956年の第二次中東戦争の際と同じように、この砂漠の水路は閉鎖された。やがてシナイ半島の全域が、イスラエルの手中に落ちる。一方、ガザ地帯のエジプト軍は完全に包囲され、脱出の望みを失った。その配下のパレスチナ人部隊は故郷の地で奮戦し、難民収容所の住民も武器を手に抵抗するが、間もなく優勢なイスラエル軍に圧倒される。

ヨルダン アラブ三国の包囲陣の中で、ヨルダンは最も弱い環だ**の参戦** た。イスラエルはヨルダンの局外中立を期待し、軍事的に刺激せぬよう配慮する。実際、緒戦の段階で精鋭部隊をシナイ半島の戦場に投入したので、第二戦線に十分な兵力を回す余裕はない。エシュコル首相は国際連合の休戦監視団を通じて、フセイン国王に軍事行動を控えるよう勧告した。

そちらが積極的攻勢に出ない限り、こちらも攻撃を控えるだろう——と。

しかし、フセインはナーズィルとの約束を守り、締結したばかりの相互防衛条約に従って、エシュコルの申し入れに砲爆撃で回答する。ヨルダンはエジプトの誇大な戦果発表を鵜呑みにして信じこみ、シオン主義国家打倒の戦列に参加した。もしフセインがここで参戦をためらったなら、国民と将兵から強い反撥を買って、ハーシム王家の支配体制は揺らいだことだろう。

6月5日の午後、イスラエルの航空隊はエジプトから矛先をヨルダンに転じ、その貧弱な空軍を一撃で粉碎した。頭上に乱舞する敵機の数から察して、フセインは本気で思い込む。ついに米英両国がイスラエル支援のため軍事介入に踏み切った——と。盟邦の大統領の言を信ずれば、イスラエル航空隊はエジプト攻撃の際に甚大な損害をこうむり、ヨルダン攻撃の余力がない筈である。

1956年のスエズ・シナイ戦争に際して、英仏両国はイスラエルのエジプト攻撃に加担し、優勢な空軍力で制空権を握る。その傘の下で、イスラエル軍はシナイ半島を席卷できた。フセインはアラブの一員として、その歴史を忘れない。ヨルダンは介入の事実を確認せぬまま、英国と外交関係を断絶する。アラブ世界の多数の国々も西側の軍事介入を非難し、米英両国と断交に踏み切った。

イスラエル国防軍とヨルダンのアラブ軍団は、1948年の第一次中東戦争から二十年ぶりに激突した。サマリア地方の丘陵地で、ガリラヤ湖の南部で、戦車同士の激戦が展開される。イスラエルの機甲部隊は強力な反撃に直面し、一時は苦戦に陥った。しかし、空爆の支援で窮地から救われる。フセインの軍勢は空からの掩護のないまま敗退し、ヨルダン川を渡って、その東岸に退却した。

イスラエルはヨルダンと戦端を開いた機会をとらえ、エルサレムの完全占領をめざす。あの独立戦争の際、聖都のユダヤ教徒は十数日の籠城の末に降伏し、生存者の全員が旧市街から放逐された。今度の戦争では、開戦から二日目の朝、イスラエル軍は橄欖山の高地を確保し、眼下にエルサレムを見渡す。二千年近い昔、ここにローマ軍団は陣取り、将軍ティトスの指揮下、ダヴィデの都を攻め落とす。

いまやユダヤの軍勢が聖都を攻撃する番で、激戦の末に城門の一つのステパノ門に迫る。ヨルダン軍は市街戦を避けて、抵抗拠点を放棄して撤収した。イスラエル軍の先鋒は城内に突入すると、何よりもまず〈嘆きの壁〉に向かう。足掛け二十年に及ぶヨルダンの支配下、この高い石壁の前でユダヤ教徒は祈りを捧げることができなかった。これはソロモン王の築いた神殿の遺構の一部で、唯一神信仰の聖所となっていた。

エルサレムの陥落後もイスラエル軍は追撃の手を緩めず、ヨルダン川の西岸一帯を制圧し、ついに天然の境界の川辺に達する。それ以上は深追いせず、破

竹の急進撃を停止した。²² フセインの王国は祖父アブダッラーの時代と同じく、ヨルダン川の向こう岸（トランスヨルダン）に支配地を縮小する。シオン主義国家は宿敵エジプトの大軍を打ちのめしたのに続いて、ハーシム家の軍勢にも大勝利を収めた。こうして旧英委任統治領パレスチナの全域が、イスラエルに征服される。

停戦決議の採択 中東の戦火が燃え上がった時、ニューヨークはまだ夜明け前だった。午前三時過ぎ、イスラエルの国連代表は安全保障理事会議長のデンマーク外交官ハンス・タボルをたたき起こし、戦争の勃発を通報する。エジプト軍が空陸で攻撃を始め、イスラエル軍はこれを撃退中——と。²³ 続いて十数分後、エジプト代表も開戦を議長に知らせる。ただし、攻撃の方向は正反対だった。イスラエルが「裏切りの、計画的侵略」を仕掛けてきた——と。

安全保障理事会は、すぐに緊急会議を招集した。ソ連はアジア・アフリカの新興国の支持を取り付け、停戦決議案を提出する。その内容はイスラエルを厳しく非難し、その軍勢を開戦前の位置まで引き下げるよう要求した。戦争を始めたのはイスラエルであり、占領地から撤収しなければ、侵略が容認されることになる——と。

一方、米英両国はソ連の提案に対して、即時無条件停戦を主張する。米国代表は反論した。開戦前の原状回復を要求するなら、それは6月5日でなく、5月16日以前の状態に戻すべきである。すなわち国連緊急部隊をシナイ半島とガザ地帯に呼び返し、さらにアカバ湾の封鎖も解除しなければならない。イスラエルが先に攻撃を仕掛けたかどうかは問題でなく、危機の根源はナースィルの行動にあるのだ——と。

当初、ナースィルは無条件であれ、条件付きであれ、大国主導の停戦決議案に同意せず、継戦の決意を固めた。空軍が奇襲攻撃で大損害をこうむったとはいえ、陸軍はまだシナイ半島の各地で奮戦している。簡単に鉾を収めることはできない。一方、イスラエルも期待以上の戦果を挙げたからには、戦争目的の完全達成まで停戦に応じようとはしなかった。

世界平和維持機構の討議は東西両陣営の思惑をからめ、すぐには実を結ばなかった。しかし、エジプトもヨルダンも戦争を続行すればするほど、ますます多くの将兵と装備、それに領土を失う。6月6日、ソ連は軍事情勢の急速な悪化を懸念し、停戦の条件からイスラエル軍の撤退を取り下げた。ここに東西両陣営の妥協が成立して、安全保障理事会は即時停戦とすべての軍事行動の停止を満場一致で可決する。

しかし、戦火はすぐに消えない。イスラエルはひとまず停戦決議を受諾した

ものの、同時にアラブ側の決議受け入れを条件とした。ヨルダンも停戦を受諾し、エジプトは回答せず、シリアは拒否する。これでイスラエルは絶好の口実を得、停戦の実施を数日先まで持ち越す。この短い期間を利用して、勝ち戦の戦利品を最大限に掌中に収める。

翌6月7日、イスラエルは国際社会の圧力をよそに、停戦前の大攻勢に出た。ヨルダン川の西岸を席卷し、聖都エルサレムの旧市街を占領した。シナイ半島では要衝のミトラ峠を抑え、エジプト軍の退路を断つ。また、半島先端のシャルムエッセイクに無血入城し、ティラーン海峡の封鎖を解除した。そこで安全保障理事会はソ連の強い主張を取り入れ、強硬な文言の停戦決議を改めて採択する。

シナイ半島の失陥は、もはや時間の問題となった。6月8日、ついにナーシルも停戦に応じ、国会で停戦決議の受諾を発表する。それまでエジプト政府と軍部は不利な戦況を伝えず、大勝利の宣伝ばかり放送で流していた。それだけに大統領が敗北を公式に認めたのは、国民に大きな衝撃を与える。だが、戦争はまだ終わらず、翌6月9日の早朝、イスラエル軍の機甲部隊はスエズ運河の東岸に集結し、カーヒラを脅かす。²⁴

シリア軍の敗北 シリアの政府と軍部は対イスラエル強硬路線を採用して、第三次中東戦争の原因を作り出した。まずファタハのゲリラ活動を援助し、さらに国境付近で砲撃を繰り返して、ついに大規模な軍事報復を招く。さらにイスラエル軍の兵力集中説を流して、エジプトを戦争に引き込んだ。ところが、みずから戦争の危機を造り出しながら、一向に戦場で戦果を挙げなかった。

6月5日、盟邦エジプトが奇襲攻撃に打ちのめされた後、シリアも砲門を開いて対イスラエル戦争の戦列に加わる。そして小兵力の部隊が国境近くの開拓農に威力偵察を試みたものの、武装農民の抵抗で簡単に撃退された。一方、爆撃機は地中海岸の工業港湾都市ハイファの精油所を空襲する。その日の午後、イスラエル航空隊の出動で、シリアの空軍はヨルダンのそれと同じ運命をたどって潰滅した。

その後、シリア軍は積極的攻勢をあきらめ、ゴラン高原に立てこもる。ヨルダンがアラブ三国の相互防衛条約に基いて救援を求めても、シリアはイスラエルに牽制行動を起こそうとはしなかった。しかし、相変わらず強硬姿勢を維持して、安全保障理事会の停戦決議を拒否する。この間、フセインは早くも脱落して停戦に応じ、やがてナーシルも追従せねばならなかった。

エジプトとヨルダンの両国が停戦決議を受諾したからには、イスラエルの敵はシリアだけとなった。しかし、ダーヤーン国防相は慎重な姿勢を示し、シリ

ア攻撃をためらう。ここで相手に決定的打撃を加えれば、ソ連の介入を招くかも知れない。それに最後の決戦場・ゴラン高原は、ヨルダン川西岸の平坦地や緩やかな丘陵地帯とは異なり、極めて攻めにくい地形で、その奪取には相当な犠牲を覚悟せねばなるまい。

ゴラン高原はヘルモン山の麓からガリラヤ湖の東岸にかけて、北から南に延びる広大な熔岩台地である。その西端は急斜面となって、上ヨルダン川沿いの溪谷と天然の貯水地のガリラヤ湖になだれこむ。シリア軍は高原の各地に要塞を築き、強固な防衛線を引いた。ここからの砲撃はイスラエル北辺の住民に脅威を与え、開戦後はますます激しくなった。

6月9日の未明、さしも強硬なシリアも不利な情勢を悟り、停戦決議の受け入れを表明した。だが、その朝、イスラエルはダーヤーンの決断で、ゴラン高原に総攻撃を開始する。シリア軍の十字砲火の真只中、イスラエル軍の戦車と歩兵は地雷原を突破し、鉄条網を乗り越えて、敵陣に突入した。イスラエルの航空隊は制空権を確保しているだけに、容易に地上部隊を支援できた。

6月10日の朝、シリア軍の抵抗は不意にやんだ。ディマシュク放送が高原の主要都市クネイトラの陥落を報じたからである。この放送でシリア軍は意気消沈し、あちこちで陣地を放棄して退却した。だが、実際にイスラエル軍の尖兵はまだクネイトラから遠く、その日の午後になってようやく目的地に到着し、そこを無血占領する。停戦が発効した時には、イスラエル軍はディマシュクから約六十キロの地点にまで到達した。²⁵

イスラエル 不敗の神話 第三次中東戦争は僅か六日間続いただけで、アラブ側の大敗北に終わった。この戦争は日数にちなんで、〈六日戦争〉と呼ばれる。イスラエルは南、東、北部の戦線で目覚ましい勝利を収め、いずれの方面でも有利な既成事実を作り上げてから鉾を収めた。その結果、シオン主義国家はスエズ運河、ヨルダン川、ゴラン高原まで領域を押しひろげ、旧英委任統治領よりも支配地が大きくなる。

旧約聖書の記述によると、神の約束の地はユーフラテス河からエジプトの大河にまで及ぶ。イスラエルは短時日の軍事的征服で、それに匹敵する領土を獲得した。シオン主義国家は1947年11月29日のパレスチナ分割決議の枠内に版図をとどめず、かつてのアメリカ合衆国のように広大な辺境を想定する。また、その独立宣言が「ユダヤの民の本来的、歴史的権利」を主張しているだけに、建国当初から膨張主義的衝動を内部に秘めていた。²⁶

アラブ側は思いもかけぬ大敗北に、ただ茫然自失するばかりだった。パレスチナ奪回、ユダヤ国家打倒の夢は破れ、屈辱の奈落に落ち込む。戦争前、カーヒラやディマシュクの宣伝放送が激烈な口調で復讐の聖戦を呼び掛けただけに、

アラブ諸国の民衆は勝利の幻想を抱いた。だが、敗戦の結果、新たに約五十万人のアラブ難民が生み出され、ヨルダン川を西から東へ渡ったり、ゴラン高原から追い立てられたりした。

六日戦争の後、イスラエル不敗の神話が創られる。少年ダヴィデがペリシテ人の巨人ゴリアテをただの一撃で殺したように、ユダヤ国家はアラブ世界の盟主エジプトを先制攻撃で打ちのめし、続いてヨルダンとシリアを破った。アラブ世界は三度も戦争に敗れ、もはやシオン主義国家の敵ではない——と。

実際、イスラエルの勝利の代償は、驚くほど安上がりで済んだ。三方面の戦闘で戦死者は合計七百人足らず、負傷者は二千五百に過ぎない。一方、アラブ三国の人的損害は約二十倍の一万五千、負傷者は十倍以上の二万七千と推定される。それに戦車、自走砲、大砲など、高価な重装備が戦利品として勝者の手に渡った。

6月9日、ナーシルは敗北の全責任を背負い、放送を通じて大統領の辞任を発表する。しかし、エジプト国民はナイル河畔の英雄を見捨てなかった。大群衆がカーヒラの街頭を練り歩き、郊外の私邸まで切れ目のない行列を作る。数十万人が各地から首都に流れ込み、ナーシルの名前を叫んで翻意を促した。翌6月10日、大統領は国会演説で辞意を撤回し、国民の歓呼を浴びる。²⁷

しかし、エジプト軍首脳は敗戦の責任を負わねばならず、アーミル元帥を始めとして多数の司令官が解任され、あるいは軍法会議にかけられる。この肅軍措置に、軍部は不満だった。大統領が最高司令官の主張に従い、イスラエルに対して先制攻撃に踏み切れば、必ず勝ったのに——と。ナーシルは反論する。エジプトが最初の一発を撃てば、ソ連の支持を失うばかりか、米国の直接介入を招いただらう——と。

将校団の一部はアーミルの復帰と敗因追及の調査取りやめを策動して、ひそかにナーシルの失脚をたくらむ。だが、陰謀は露見し、前戦首相、内相、師団長、諜報部長が逮捕された。首謀者は特別法廷で裁かれ、終身刑や長期の重労働刑の判決を宣告された。敗軍の将は自宅に軟禁されていたが、裁判や投獄の屈辱よりも、名誉ある自決を選んだ。ナーシルは革命の同志で、最も親しい友人を失う。しかし、軍内部の反対勢力を一掃し、改めてエジプト民衆の間に支持基盤を見出した。

〈第八部の註と参考文献〉

1 ティラーン海峡の封鎖と同様に、イスラエルはヨルダン川支流の流路変更を戦争行為と宣言する。砲兵は遠距離からシリア領内の建設作業現場を砲撃し、戦車も出動して近接距離から砲弾を撃ちこんだ。レバノン領内の工事現場は大砲の射程外にあったので、爆撃機が空から攻撃を加えた。〔Chaim Herzog, The Arab-Israeli Wars: War and Peace in the Middle East from the War of Independence to Lebanon (London: Arms and Armour Press, 1984年)、147頁〕

2 反イスラエル陣営で、パレスチナ問題が全く等閑に付されていた訳ではない。カーシムはナーシルとアラブ世界の主導権を争い、パレスチナ人の組織化を思いつく。彼はイラク在住者にパレスチナの旅券を交付し、義勇兵を募集した。この動きに対抗して、ナーシルはカーヒラに〈パレスチナの声〉放送局を開設した。〔Maxime Rodinson, Israel and the Arabs (Harmondsworth: Penguin Books, 1973年)、114頁〕

3 シュケイリーはパレスチナ北部の港町アッコの出身で、扇動演説に長けた。一時、彼はサウディ・アラビアの外務省に迎えられ、国連代表を務める。ところが、本国政府の許可なく、西側陣営攻撃に長広舌を振り過ぎて解任された。〔John Laffin, Fedayeen: The Arab-Israeli Dilemma (London: Cassell, 1973年)、8頁〕

彼はPLO総裁に就任後も、ユダヤ教徒を残らず地中海にたたきこむなどと大言壮語し、無用の誤解を招いた。

4 UNRWAの定義によると、難民とは1948年の戦争（第一次中東戦争）の勃発時に少なくとも二年間パレスチナに住み、この戦争の結果、住居と生計手段を失った者をいう。難民に認定された者は、一カ月に一人当たり次の食糧配給を受けた。小麦粉十匁、乾燥野菜六百匁、米五百匁、砂糖六百匁、脂肪三百七十五匁。冬季には乾燥野菜三百匁、小麦粉四百匁が、それぞれ追加された。だが、栄養不足は顕著で、とりわけ子供たちの体重は軽かった。難民の分布は1967年に、ヨルダンに54僞、ガザ地帯に23僞、レバノンに12僞、シリアに11僞だった。ガザ地帯のラファハ難民収容所は最大の規模で、その人口は四万六千人に達した。〔Gerard Chaliand, The Palestinian Resistance (Harmondsworth: Penguin Books, 1972年)、36~37頁〕

5 パレスチナ系米国人の作家は、同胞の民族意識について、次の通り述べている。いかなるパレスチナ人にとっても、その故国が独自性を有していることに、疑問の余地はない。確かにパレスチナは第一次世界大戦までオスマン・トルコ帝国の一部であり、独立していなかった。だが、その住民は自らをパレスチナ人と思い、シリア、レバノン、トランスヨルダン人と自分たちとをはっきりと区別していた。パレスチナ人の自己確認は、1880年代以降のユダヤ移民の流入に対抗する形で明確になった——と。〔Edward W. Said, The Question of Palestine (New York: Times Books, 1979年)、117頁〕

6 政治的宣伝は伝説や神話を創作し、この最初の武力行動には異説がある。まず六人のフィダイーンがシリアで訓練を受け、レバノン経由でイスラエルに潜入する筈だった。だが、最後の瞬間になって、そのうちの数人が怖じ気づき、レバノンの治安当局に自首す

る。この結果、六人全員が逮捕され、決死隊の攻撃は幻となった。ところが、バイルートの新聞が爆破成功と大々的に報じたので、ファタハは全アラブの称賛を集める。レバノン当局はアラファートらの幹部を逮捕し、四十日間も拘留した。第一波の攻撃が内部からの裏切りで失敗した翌日、ゲリラの第二波がヨルダンから出撃する。五人のフィダイーンのうち二人が脱落したが、残りの三人はイスラエル潜入に成功し、水路に爆薬を仕掛けた。帰路、国境警備隊に追跡されるが、なんとか振り切って、無事にヨルダン川を渡る。しかし、爆発物は雷管を抜かれて、不発に終わった。ファタハが水路に損害を与えたのは、第一波の失敗から二週間も過ぎてからのことである。この時、ゲリラの一人が、ヨルダンの兵士に射殺された。〔Jilian Becker, The PLO: The Rise and Fall of the Palestine Liberation Organization (London: Weidenfeld and Nicolson, 1984年)、45頁〕

7 ファタハは軍事部門のアッシファ（嵐）の名で、対イスラエル破壊活動を実行に移した。エジプトの統制下にあった新聞や放送は、次の誹謗中傷を伝える。アッシファは西側諜報機関によって設立され、かつ資金を供与されている。それは西側諸国とイスラエルに奉仕し、まだ準備不足のアラブ諸国を戦争に追い込んで、敗北に陥れようとたくらんでいる。アッシファと手を組むのは、みな裏切り者ばかりだ——と。

8 1950年代の報復攻撃は、特殊部隊が夜間に実施した。しかし、この越境作戦は白昼に遂行され、フィダイーンの隠れ家と見做された四十戸の家屋を爆破する。その際、アラビア語を話す兵士の呼びかけで、住民は家の中から追い出され、安全な場所に集められた。そこまでの作戦はあらかじめ綿密に練り上げられた手順に従い、無血で進行する。だが、ヨルダン王国軍の歩兵部隊が軍用車輛に分乗して駆け付けたので、イスラエル国防軍の戦車部隊は砲火を浴びせて、多大の人的損害を与えた。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, The Israeli Army (London: Allen Lane, 1975年)、210頁〕

9 イスラエルはアラブ世界の政治指導者、軍人の発言内容、新聞・放送の論調を克明に調べ上げ、エバン外相が国連総会の演説で引用しつつ、相手側の好戦的態度を非難する論拠とした。この人民戦争論は、1966年 5月22日、シリアのアル=アタッシ大統領が国境警備の将兵に呼びかけ、二日後、アッサド国防相が過激な言辞で補足したのを、一つの文章にまとめた。〔“Abba Eban’s Speech at the Special Assembly of the United Nations, June 19, 1967”〕〔Walter Laqueur and Barry Rubin (Eds.), The Israel-Arab Reader: A Documentary History of the Middle East Conflict (Harmondsworth: Penguin Books, 1984年)、210~211頁〕

10 1988年 5月、筆者はイスラエル占領下のゴラン高原に入り、1967年の中東戦争の戦跡をめぐった。シリア軍の砲座跡からは、上ガリラヤ地方の田園を眼下に一望に収める。六日戦争勃発の二カ月前、この陣地はイスラエル機の空襲で破壊された。それから二十一年を経過したのに、付近の野原は地雷の危険のため立ち入り禁止となっていた。

11 1967年 5月12日、米国のUP通信社はエルサレム発の特電で、イスラエル高官の発言を引用しながら、事態が戦争の瀬戸際にあると報じた。この記事は欧米諸国の新聞に掲載され、反響を巻き起こす。イタリの『ユニタ』紙もエジプト政府権威筋の発言に基き、危機を誇大に伝えた。イスラエルの目的は、シリアの社会主義政権の打倒だけでなく、エジプト政府の転覆、さらにはサイプラスの軍事政変を企てるばかりか、イエマンの革命闘争に対抗し、ギリシャのファシズムに挺入れすることにある——と。奇妙なことに、ソ連

の『プラウダ』や『イズヴェスチヤ』の両紙は半年も前から、イスラエルの兵力集中とシリア政権打倒の記事をたびたび掲載した。〔Walter Laqueur, The Road to War: The Origin and Aftermath of the Arab-Israeli Conflict 1967/8 (Harmondsworth: Penguin Books, 1970年)、86頁、88~89頁〕

12 国連事務総長のウ・タントは現地の休戦監視団の調査結果に基づき、安全保障理事会に兵力集中の事実はないと報告した。英国の『オブザーヴァ』紙のカーヒラ特派員は、現地の国連高官の発言を次のように伝えている。イスラエル軍は僅か数時間で国境地帯に部隊を派遣できるので、兵力集結がないとの判断はイスラエルのシリアに対する意図（ディマシク攻撃と政権転覆）を否定する決定的証拠とはならない。休戦監視団の報告内容については、現地の国連関係者のすべてが賛成した訳ではない——と。〔Robert Stephens, Nasser: A Political Biography (Harmondsworth: Penguin Books, 1973年)、468~469頁〕

13 インド軍は国連緊急部隊の一翼を形成し、1957年3月、イスラエル軍の撤退の後を追って、地雷を除去したり、道路を修復したりしながら、シナイ半島を横断し、国境付近で平和維持の任務に就いた。派遣軍参謀長の回想記によると、国連緊急部隊は昼間は国境から五輦、夜間は二輦のエジプト領内で、平和維持の責任を担った。ナースィルの要求通りに撤収すれば、戦闘の発生は火を見るより明らかだった。実際、部隊の一部は引き揚げを待つ間に戦火に巻き込まれ、帰国を前に十三人の戦死者を出した。〔Indarjit Rikhye, “United Nations Peacekeeping Operations and India,” Indian Quarterly (New Delhi: Indian Council of World Affairs, Vol. XLI, Nos. 3 & 4, July-December 1985)、306頁〕

14 1967年6月27日、ウ・タント国連事務総長は国連緊急部隊の撤収について、長文の報告書を提出した。その中で、撤退が軽率かつ性急で、ナースィルを驚かせるほどだった——との批判に、次の通り弁明している。

国連事務総長は、総会決議によって設立された〈国連緊急部隊に関する諮問委員会〉と協議の末、事務総長の権限において、撤退を決定した。委員会は問題の総会持ち込みを諮らなかつたし、その構成国の政府はいずれも、総会あるいは安全保障理事会の招集を要請しなかつた。定例総会の開催は、エジプトの緊急部隊撤収要求から四カ月前のことであり、また特別総会を招集しても、このような論議の多い問題が三分の二以上の特別多数決で解決できるか、どうか、はなはだ疑問であった。

安全保障理事会との協議について、事務総長は情勢報告を同理事会に提出した。その後、安全保障理事会が開催されながら、何の措置も取られていない。このような情勢から、事務総長としては、総会あるいは安全保障理事会を招集しても無益であり、その必要もないと判断した。〔U Thant, “Report on the Withdrawal of the United Nations Emergency Force,” Walter Laqueur, 前掲書の付録I、327~362頁〕

15 ヘイカルはナースィルの青年将校時代から親交を深め、後に情報相として大統領の公式スポークスマンとなる。それだけに、この社説はナースィルの事前了解の下に掲載されたと、外交問題分析者に受け止められた。だが、この戦争不可避論はナースィルの意見ではなかつたと、ヘイカル自身、英国人の新聞記者に語っている。〔Robert Stephens, 前掲書、481頁の脚註〕

16 この強硬な演説にもかかわらず、ナースィルは戦争勃発の可能性を低く見積もっていた。彼自身の発言によると、エジプト軍のシナイ進軍の際に20崙、ティラーン海峡の封

鎖の際に 50～80機で、100機と確信したのは、エシュコル内閣が改造で挙国一致政権に変貌した1967年 6月に入ってからである。〔Robert Stephens, 前掲書、477頁〕

17 放送の当日、エシュコル首相は軍の将官級の幹部を集めて懇談する。だが、その消極的態度は、軍部の共感を得られなかった。指揮官たちはさまざまな不満を表明した。将兵は砂漠の中で待機させられ、士気が急速に低下している。最前線の部隊は攻撃準備を完了しているのに、最後の瞬間に命令が取り消される。落下傘部隊の兵士は輸送機に何度も乗り降りさせられるうちに、すっかり嫌気が差して機内に居座ってしまった。このような状態では、戦闘精神を高く維持できない。脱走の例も、いくつか出始めている——と。この心理的要因とは別に、軍事的見地から待ちの姿勢がいかに危険か、国防軍の首脳は首相を説得しようと試みた。しかし、エシュコルが事態静観の態度を変えなかったため、軍人たちは深く失望する。その結果、軍事政変の噂さえ流れるほどだった。〔Walter Laqueur, 前掲書、166～167頁〕

18 ダーヤーンは自叙伝の中で、国防相に任命された経緯について、次の通り述べている。1967年 5月30日、フセインがナースィルと和解し、防衛条約を締結するに至って、ついにエシュコルは国防相の兼任をやめるよう決意した。首相は労働党書記長のゴルダ・メイアルの支持を得て、国防相にイーガル・アロン（1956年のスエズ・シナイ戦争の際、国防軍幕僚長だったダーヤーンの下で、南部方面司令官を務める）を起用し、ダーヤーンを副首相に任命する内閣改造案を提示した。ダーヤーンは実権のない顧問的地位を即座に断り、逆に南部方面司令官としてエジプト軍と戦いたいと申し出た。労働党の内部では、首相や書記長の意見に反して、ダーヤーンを国防相に推す声が高まった。エシュコルは党内の大勢に従って、この元国防軍幕僚長を国防相の重職に推挙した。〔Moshe Dayan, Story of My Life (London: Sphere Books, 1978年)、335～337頁〕

19 この奇襲攻撃でエジプトは十九の空軍基地を爆撃され、行動可能な三百四十の軍用機のうち実に三百九機を破壊された。この中にツポレフ16長距離爆撃機、イリュージンⅡ中距離爆撃機など五十七機が含まれている。〔Chaim Herzog, 前掲書、152～153頁〕

20 エジプト陸軍はソ連流の軍事理論を採用し、イスラエル軍の来襲に備えていた。それは〈盾と矛〉戦術と呼ばれ、まず〈盾部隊〉が堅固な陣地を拠点に、大砲、迫撃砲、対戦車砲の射撃と、地雷原、鉄条網の障害物で相手の襲来を阻止し、次に〈矛部隊〉の戦車が反撃に乗り出して敵を駆逐する。この戦術は抽象論としてはもっともらしかったが、イスラエル軍の猛攻でエジプト軍は二十四時間以内に盾を破られ、矛を折られてしまった。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, 前掲書、233～236頁〕

21 当初、エジプト軍最高司令部は、イスラエルの奇襲で受けた損害の状況を把握できなかった。しかも、それが明らかになった段階でも、軍首脳は大統領に報告するのを怠った。ナースィルは真実を知った後でも、イスラエル軍の進撃をシナイ半島で食い止め、スエズ運河を防衛できると信じた。開戦から二日目の午後六時、最高司令官のアーミル元帥は命令を発した。シナイ半島の全域から、スエズ運河の西岸へ即時撤退せよ——と。十一年前、ナースィルは兵力を温存して英仏軍の上陸に備えるため、アーミルの反対を押し切り、シナイ半島から退却を命令した。だが、この時にはナースィルはアーミルの即時全面撤退命令を知ると、自ら最高司令部に乗り込み、この命令を取り消す。大統領からの直接指示で、エジプト陸軍参謀長は段階的退却案を作成した。ところが、最高司令官は大統領

の指示を無視し、即時全面撤退を再び命令した。〔Robert Stephans, 前掲書、497頁〕

22 イスラエル軍の機甲部隊の一部はヨルダン川の東岸まで進出したが、ダーヤーン国防相の命令で西岸に引き返した。米国大使がヨルダン政府の意を受け、アマーンに向かって進撃しないよう緊急に要請したからである。ダーヤーンはヨルダン川に架かった橋の爆破を命じ、西岸にとどまる意思表示を明確にした。〔Moshe Dayan, 前掲書、370頁〕

23 イスラエルのエバン外相は安全保障理事会で演説し、同じ話を繰り返す。そして、国際連合憲章第五十一条に基く自衛権の発動と主張した。その後、イスラエルは態度を変え、エジプトから先に攻撃されなかった事実を認める。だが、次のように強弁した。イスラエルは攻撃を受ける危険にさらされたからこそ、先制攻撃に踏み切った——と。〔Henry Cattan, Palestine and International Law: The Legal Aspects of the Arab-Israeli Conflict (London: Longman, 1973年)、128頁〕

24 ダーヤーン国防相はエシュコル首相や国防軍幕僚長と協議の末に、スエズ運河から二十哩の地点でイスラエル軍の進撃を停止するよう決定した。エジプト軍のシナイ半島再進出を阻止し、同時にスエズ運河の船舶航行に支障を招かないためである。ところが、停戦決議受諾後も、エジプト軍の一部の部隊が運河近くで抵抗を続け、また、米国が安全保障理事会で交戦国の双方に運河から十哩ずつ引き下がる内容の決議案を提出しそうな気配だったので、イスラエル軍は運河の水際まで前進した。〔Moshe Dayan, 前掲書、367頁〕

ナーズィルが戦争後の国会演説で認めた通り、エジプト軍の敗北でカーヒラへの道は開かれ、もはや抵抗できない状況だった。正規軍の潰滅後、残るは民兵組織だけで、五千人の市民が小銃で武装し、ポートサイドなど運河沿いの都市の防衛に当たった。〔Robert Stephans, 前掲書、502~503頁〕

25 ディマシュク放送の意図について、さまざまな説があるが、次の解釈はうなずける。シリア政府は国際連合で大国主導の即時現状停戦を実現し、イスラエル軍の大攻勢を食い止めるよう望んだから——と。6月10日午後六時の停戦発効時に、イスラエル軍は政治的配慮の限界近くの線まで、ディマシュクに向かって進撃した。それ以上の前進はソ連の警告で論外であり、米国も暗黙のうちにソ連の立場を支持した。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, 前掲書、281頁〕

26 六日戦争の結果、旧約聖書ゆかりのユデア地方とサマリア地方（ヨルダン川の西岸）が、イスラエルの支配下に入ったので、狂信的ユダヤ教徒は〈神の約束の地〉に入植を強行する。この措置は、やがて政府から追認される。その後、狂信派は労働党主導の連立内閣にかわったリクード右翼政権さえも軟弱と非難し、対アラブ地下活動を始めた。そして、アラブ人市長の暗殺まで実行し、最後にエルサレムのウマル礼拝堂を爆破する陰謀までめぐらせた。〔Ehud Sprinzak, "Fundamentalism, Terrorism, and Democracy: The Case of Gush Emunin," New Outlook, 1988年9/10月号、8~14頁〕

27 この示威行進はナーズィル支持派によって組織されたといわれた（実際、反対派はやめさせようと試みた）が、その規模といい、民衆感情の深さといい、官製の示威行動の域を超えた。ナーズィルはエジプトを敗北に導いたが、ナーズィルのいないエジプトは考えられなかった。〔Derek Hopwood, Egypt: Politics and Society, 1954-1984, Second edition (Winchester, 1985年)、77頁〕

第九部

停戦後の新たな戦争

35 難民武闘集団の反撃

講和の前提条件 僅か六日間の電撃戦で、イスラエルは勝利の美酒に酔い痴れる。東部戦線ではヨルダン川までのパレスチナ全土が、南部戦線ではペリシテ人ゆかりのガザ地帯はもとよりシナイ半島の全域が、いまやダヴィデの星の国旗の支配下に置かれた。アラブ軍団の堅陣はエリコの城壁よりも脆く崩れ、パロ（ファラオ）の軍勢が紅海の大波に溺れたのと同じように、ナーシルの軍隊は砂の海に滅びた。戦争の最終局面で、イスラエル軍は強敵のシリア軍をゴラン高原から駆逐し、ディマシュクの城門に迫る。

開戦前のアラブ三国は、武器、兵員の両面で、シオン主義国家よりも遥かに優勢だった。しかし、イスラエルは奇襲攻撃で劣勢を一挙に挽回し、その後は優れた用兵で相手の精鋭部隊を敗走させる。この奇跡的勝利を眼のあたりにして、多数の国民は信じた。モーセの時代と同様に、大いなる神の手がイスラエルの民の上に下された——と。この信念は唯一神の信仰を一層固め、やがてイスラエル国内にユダヤ原理主義の台頭を招いた。

アラブ側は勝利の期待感を裏切られ、第一次中東戦争から数えて、これで三度目の敗戦の屈辱感を噛みしめる。最初の対イスラエル戦争は、欧米諸国（ソ連と、その衛星国まで含めて）の武器供給と義勇兵派遣がなければ、勝ったはずだ。二度目はエジプト一国が兄弟国の援軍を断って孤軍奮闘し、シオン主義国家と英仏両大国を敵に回した。相手がイスラエルだけなら、戦局の帰趨は別なものとなったに違いない。しかし、今度は弁解の余地なく、アラブ側の完敗だった。エジプト、シリア、ヨルダンで強力なイスラエル包囲陣を形成し、軍事的に絶対優勢と信じこんでいたからである。

イスラエルのエシュコル首相は決して戦争を望んだ訳ではないが、ダーヤーン国防相の采配の結果、勝利の果実を手にした。この穏健派の政治家は占領地を取り引き材料に、和平の確立を考える。その前提条件として、まずアラブ諸国はシオン主義国家を承認せねばならない。そして講和条約が締結されるならば、国際連合総会のパレスチナ分割決議から二十年ぶりに、中東の地に平和がよみがえるだろう——と。

戦火の余燼がまだくすぶる1967年 6月19日、エシュコルの挙国一致内閣は四項目の和平条件を閣議決定する。三日後、その内容は米国政府に伝達されたが、当時、公表されなかった。主要な内容は、次の通りである。イスラエルはシナイ半島から撤兵するかわりに、エジプトは同半島を非武装化しなければなら

い。ティラーン海峡とスエズ運河の自由航行権は、イスラエル船舶に保証されるべきである。またイスラエルはゴラン高原から撤収するが、そこはシナイと同様に非武装化されねばならぬ——と。

このようにエジプトとシリアについては、イスラエルは占領地を返還し、昔から国際的に確立した国境まで兵を引く。ところが、ヨルダン川西岸とガザ地帯については、難民問題とからめて別途に考慮し、その返還を明確にしなかった。強硬派のベギン無任所相がエレッツ・イスラエル（イスラエルの地＝旧約聖書に記された神の約束の地）の保持を主張し、占領地の部分的返還にさえ絶対反対の立場を堅持したからである。

他方、アラブ側は敗戦の屈辱感に浸り、早期講和を望まなかった。敗者の立場からといえども、勝者の課す一方的条件を呑む訳には行かない。六日戦争の停戦から二カ月後の1967年8月中旬、アラブ諸国はスーダンの首都カーツームで首脳会議を開催し、敗北後の善後策を協議した。そして、従来の強硬方針を再確認し、さらに次の三原則を宣言する。まずイスラエルとの平和はあり得ず、次にイスラエルを承認することなく、最後にパレスチナをめぐってイスラエルと交渉せず——と。¹

戦争は国家間の関係を根底から揺れ動かし、外交の手詰まり状態を打開する好機ともなり得る。しかし、この時はイスラエルの閣内不一致とアラブ諸国の〈三つの拒否〉で、中東和平の機運は急速に消え去った。六日戦争の敗者と勝者が対等の立場で交渉できるまでには、両者の力関係を是正せねばならない。そのためには、新たな局地的軍事衝突と全面戦争を必要とするだろう。

安保理決議 1967年11月22日、国際連合の安全保障理事会は決議 242号の採択 議 242号を採択し、世界平和維持機構として六日戦争の後始末をつけた。それ以来、この決議は中東和平の基本的条件を盛り込む文書として重要視される。

この決議は第一に占領地からイスラエルの撤退を要求し、第二に「（中東）地域のすべての国の主権、領土保全、政治的独立の尊重と容認、ならびに安全かつ承認された境界の内側で平和裏に生存する権利」との慎重な表現で、イスラエルの生存権を認めた。つまり、アラブ側がこの決議を受け入れれば、シオン主義国家に事実上の承認を与えることになる。

この決議は英国代表によって起草され、米ソ両大国の妥協の産物に他ならなかった。その文言は玉虫色で、立場次第でどうにでも都合良く解釈できる。問題のイスラエル軍の撤退にしても、決議文を素直に読むならば、六日戦争の征服地の放棄と受け取れよう。しかし、英語の正文が不明瞭なために、イスラエルは全面撤退を求められているのではないと強弁した。²

さらにイスラエルは前段の撤退と後段の承認を切り離さず、決議を全体として解釈する。とりわけ「安全かつ承認された国境」にこだわり、撤退実現の前提条件と主張した。結局、イスラエルは決議の採択から四半世紀以上も、ヨルダン川の西岸、ガザ地帯、それにゴラン高原に居座った。（シナイ半島は兵力段階的引き離しの後、平和条約の締結で、エジプトに全面返還された。）

アラブ諸国はイスラエルの撤退をかねてから求めてきただけに、この決議の前段に異存はない。しかし、後段の「すべての国」という表現の中に、イスラエルが含まれる。したがって、この決議はイスラエルの存在を暗黙のうちに裏付け、かつ承認するものと解釈されるだけに、カーツーム首脳会議の決定に反する。アラブ諸国としては、迂闊には賛成できない。しかも、当時の安全保障理事会の非常任理事国にアラブ世界は一国も入ってなく、表現の細かな折衝に全く関与していなかった。³

さらに重大なことに、この決議から肝腎な点が欠落していた。イスラエルの建国によって、また今度の戦争のために居住地から追われた住民について、この決議は「難民問題の公正な解決の実現」と述べるだけにとどまっている。積年のアラブ・イスラエル対決の根本原因は、単なるパレスチナ難民の問題にすりかえられてしまった。決議が国連憲章の理想をうたいあげ、「公正かつ永続的平和の確立」などの美辞麗句を連ねているだけに、パレスチナ人の失望と怒りをかきたてる。

六日戦争の結果、多数の難民が生み出され、ヨルダン川の西岸から東岸へ渡る。その中には不運にも、一生に二度も難民になった者さえ少なくない。住民の中には土地と財産を放棄できず、敢えて故郷に残留する者もいた。一方、シナイ半島が短時日にイスラエル軍の手中に落ちたため、ガザ地帯の住民は遠いエジプトまで逃れようもない。もとの居住者も第一次中東戦争の難民も、共に異国の軍勢の支配下に入った。さらにゴラン高原のシリア農民も、先祖伝来の土地から追い立てられた。

難民の最大の受け入れ国は、ヨルダンだった。この砂漠の王国は聖都エルサレムやイエス生誕の地ベツレヘムなど西岸の観光資源を失ったばかりか、ヨルダン川沿いの灌漑農地を奪われる。この経済的打撃に加えて、またもや多数の家なき民が押し寄せて来た。働き盛りの壮年も、元気溢れる若者も、急造の難民収容所で、現在と未来に絶望して日々を過ごす。この挫折感は、やがてフィダイーンの温床となった。

イスラエルは占領地の返還要求を封ずるために、ガザ地帯やヨルダン川の西岸に開拓農園や住宅地を次々に建設した。このように既成事実を造り上げて、占領地の併合を狙う。（シナイ半島の農園は、返還に際して撤去された。）

ゲリラ活動の激化 エジプト、シリア、ヨルダンの正規軍は潰滅状態に陥り、もはやイスラエルの敵ではなくなった。ここ当分の間、武力で失地回復は望めない。だが、パレスチナ人のゲリラはアラブ諸国の敗北にめげず、執拗に遊撃戦を挑んだ。ファタハの戦士は夜陰に紛れて、ヨルダン川の浅瀬を渡り、占領地の道路に地雷を埋設する。東岸から迫撃砲やソ連製のカチューシャ・ロケットを撃ち込む。この武装集団は破壊活動を通じて、故国の自力解放をめざす。しかし、実際にはシリアの支援に頼らざるを得なかった。

その頃、アジア大陸の反対側のインドシナ半島では、ベトナム戦争がたけなわだった。南ベトナム解放民族戦線の戦略・戦術は、中東の地でも参考として取り入れられる。東南アジアの熱帯密林は、ゲリラ部隊が潜むのに好都合だった。しかし、西アジアの荒れ野は樹木のない裸地で、フィダイーン活動を覆い隠さない。ゲリラはヘリコプタで空から容易に発見され、地上部隊に狩り立てられた。さらにイスラエル軍はヨルダン川沿いに金網を張りめぐらせ、それに並行して哨戒用の道路を建設する。フィダイーンが首尾よく金網を突破しても、路上に足跡を残して、たちまち追跡された。

ダーヤーン国防相は占領地を軍政下に置き、飴と鞭の政策を採用した。イスラエルの官憲は従来の支配体制を温存し、住民を間接的に統治する。そして、反イスラエルでない限り、かなりの自由を認めた。ハーシム王家の専制支配に比べれば、占領体制は一見したところ開明的、民主的な装いを凝らす。しかし、その一方でゲリラ活動には仮借ない報復を加え、協力者を厳罰に処した。⁴

ベトナムでゲリラは魚にたとえられ、人民の海を泳ぐ。だが、ここでは英委任統治時代の法令が適用されて、フィダイーンを匿ったり、食糧を与えたりした者の家屋は、懲罰のため占領軍に爆破された。イスラエルのスパイが地下組織内に潜入し、その通報で活動家は一網打尽にされる。ファタハの努力にもかかわらず、西岸の占領地で人民の支持の海は干上がり、ゲリラと同調者が片端から捕らえられた。

しかし、数十万のパレスチナ難民が存在する限り、ゲリラ活動の根を絶つことはできない。六日戦争の前後、ファタハ以外に幾つもの新組織が旗揚げし、故地の武力解放をめざしながら、離合集散を繰り返す。ところが、これらの武装集団は闘争方針や理論をめぐる、相互の反目と対立が激しく、共通の大目的のために大同団結できなかつた。だが、イスラエル占領体制の確立は、ゲリラ組織の間に協力関係強化の機運を促す。

敗戦の半年後、三つの武装集団が合同して、パレスチナ解放人民戦線（英文略称・PFLP）を結成する。先発のファタハが本質的に民族主義的で、イス

ラーム教徒で構成されていたのに比べ、この新組織は無神論のマルクス主義に立脚し、対イスラエル武力闘争だけでなく、アラブ世界の社会革命を提唱する。さらに1968年4月、シリア政府は国内に在住のパレスチナ人の一部を組織化し、武装集団のエッ＝サーイカ（雷鳴）の結成に手を貸した。

やがてヨルダン川の東岸のあちこちに武装勢力が根拠地を設置し、対岸の占領地に出撃したり、イスラエル軍と砲火を応酬したりする。ハーシム王家の臣民は報復攻撃の巻き添えとなり、ついに家屋も農地も放棄して安全な奥地へ逃亡した。ヨルダン溪谷はゲリラの解放区となり、王国政府の権威も及ばぬほどになる。しかし、フセイン国王は敗戦で西岸を失ったからには、武装集団の活動を黙認するしかない。

シリアとエジプトの大国はフィダイーンを訓練し、武器と資金を供与しても、自国領土内からの出撃を許さなかった。そこでパレスチナ人の武装勢力は、ヨルダン同様に小国のレバノンにも根拠地を築く。ヘルモン山麓の地方はイスラエルと境を接しているが、事実上、ファタハの領土になり、バイルートの政府の権威と施政が及ばなくなった。パレスチナ難民は収容所の防備を固め、他国の領土内に事実上の独立国を樹立するに至った。

カラーメー イスラエル軍はゲリラの動きを絶えず監視し、その**の 激 戦** 戦力増強に神経を尖らせる。とりわけ夜間のロケット攻撃が激化すると、国境近くの住民は地下室で不安な夜を過ごさねばならなかった。イスラエル側もゲリラの攻撃に即応し、砲爆撃の返報に忙しい。だが、フィダイーンの破壊活動は、やむことなかった。イスラエル側は時機の到来を窺い、大規模な討伐作戦に乗り出す。

1968年3月18日、通学バスが地雷に乗り上げて爆破された。二人の児童が死に、約三十人が負傷する。その三日後の早朝、イスラエル軍は報復のため越境作戦を発動し、東岸の町カラーメーを攻撃する。ここはヨルダン川の下流に位置し、ファタハの軍事拠点となっていた。イスラエル軍の戦車、装甲車は二手に分かれて渡河し、難民収容所を挟み撃ちする。さらにゲリラの退路を断つために、ヘリコプターの空挺部隊が投入されて背後に回った。

しかし、イスラエル軍はフィダイーンの捨身の抵抗に直面し、さらにヨルダンの正規軍とも衝突する。フセイン国王の軍勢はヨルダン川を見下ろす丘の上に陣取り、六日戦争の仇敵に砲弾の雨を降らせた。激戦の末にイスラエル軍はファタハの軍事拠点を完全に破壊し、死者百五十～二百人の損害を加えてから西岸へ兵を引く。だが、二台の擱座した戦車を回収できず、戦場に放棄せねばならなかった。

もともとイスラエル軍は作戦目的をヨルダン川東岸のゲリラ拠点の粉碎に限

定し、カラーメーの町自体の占領を意図してなかった。しかし、戦死者約三十、負傷者約七十の損害を出したのは、討伐作戦としては大きな誤算で、後で国内の強い批判を受ける。この人的損害は主として、ヨルダン正規軍と交戦した際にこうむった。

イスラエル軍の引き揚げは予定の行動だったが、それはフィダイーンの眼に敗走と映る。ファタハの宣伝機関は戦闘の結末をゲリラ側の大勝利と報じ、アラブ世界に大々的に伝えた。勇敢なゲリラ戦士がイスラエル軍の大部隊と戦い、敵に大損害を与えた末に、ついにヨルダン川の向こう岸へ撃退した――と。この報道はアラブ諸国に興奮の嵐を巻き起こし、六日戦争の惨敗以来の屈辱感を一挙に吹き飛ばす。⁵

戦場に取り残されたイスラエル軍の戦車は、勝利の動かぬ証拠としてアマーシオンへ運ばれて、繁華街の広場に展示された。フセイン国王はゲリラに称賛の言葉を贈り、「われわれのすべてが間もなくフィダイーンとなるだろう」と述べる。カラーメーの地名は難民収容所で無為の日々を過ごす若者の心をゆさぶり、多数の青年がゲリラを志願してファタハの事務所前に長蛇の列を作った。いまやフィダイーンは社会的に存在を認められ、若者たちにとって武装集団の一員に迎えられるのは、大きな名誉となる。

P L O パレスチナ解放機構 (P L O) は、ファタハを筆頭とするフィダイーン勢力の急速な台頭に伴い、ゲリラ集団の連合体に変貌した。六日戦争の敗北から半年後、P L O 創立以来の最高指導者シュケイリーは退陣に追い込まれる。彼はナースィルによって総裁の地位に据えられたが、その大言壮語癖、非民主的運営、財政上の疑惑などで、すっかり信用を失墜していた。

もともと P L O は構成員にシュケイリー好みの有力者や社会的名士を任命しただけに、武装集団の若い闘士とは無縁の存在だった。六日戦争の敗北後、フィダイーンの活動がカーツームのアラブ首脳会議で評価されると、P L O は自己の存在意義を証明するためにも武力闘争をめざす。しかし、傘下のパレスチナ解放軍 (P L A) はエジプト、シリア、イラクの正規軍に組み込まれ、その行動を厳しく規制されていた。

カラーメーの激戦の五日前、ファタハと幾つかの組織は P L O に参加を求められたが、いずれも申し出を断る。各派とも加入の見返りとして最高議決機関のパレスチナ国民評議会 (英文略称・P N C) の議席の半分を割り当てられるくらいで満足せず、解放機構の全面的主導権を欲したからである。

一時期、ファタハは他の武装集団に呼び掛け、P L O とは別個に新組織の結成をもくろんだ。間もなくカラーメーの戦闘が勃発し、ファタハの威信は天を

衝く勢いとなった。そこで武装集団は続々とP L Oに加盟し、1968年 6月にカーヒラで開催のP N Cに出席した。この時、安全保障理事会決議 242号は、第一の当事者たるパレスチナ人から明確に拒否される。翌1969年 2月、ファタハの代表ヤシール・アラファートがP L O執行部の議長に選任された。フィダイーン勢力の実権掌握で、ナースィルの提唱で設立された団体は、名実共に解放闘争の推進役となる。⁶

かつてナースィルは統合アラブ共和国から脱退したシリアの庇護下のファタハを快く思わず、その武力解放の主張がパレスチナ民族主義に偏向してアラブ統一の足並みを乱す――とさえ考えた。しかし、六日戦争に敗れてからは、ゲリラの軍事力と政治力に高い評価を与える。

P L Oは改組によって自立性を高め、同時に戦闘的になった。1968年 7月に採択のパレスチナ国民憲章は、イスラエルに占領された故地の武力解放を呼号し、第九条で次の通り宣言する。

武装闘争はパレスチナ解放の唯一の方法である。したがって、それは全体的戦略であり、単なる戦術段階にとどまらない。パレスチナ・アラブ人は国土の解放とその地への帰還をめざして武装闘争を継続し、かつ武装人民革命に挺身する限りない覚悟と確固たる決意を確認する。また、パレスチナ・アラブ人は次の権利を確認する。すなわち、パレスチナにおいて正常なる生活を送る権利、さらにパレスチナの国土における民族自決権と主権を行使する権利を――。

さらに憲章の第十条はフィダイーン活動を鼓舞し、「特別攻撃隊の行動はパレスチナの人民解放戦争の中核を構成する」と述べ、また第十五条は不吉な語調で、次の通り武力解放の意義を説く。

アラブの視点から見れば、パレスチナの解放は民族的義務であり、アラブ国土に対するシオン主義的、帝国主義的侵略の撃退をめざし、かつパレスチナにおけるシオン主義の根絶を目的とする。この目的に向けてパレスチナ人を前衛としつつ、アラブの人民と政府は全責任を担う。

パレスチナ人武装集団の勢力伸長は、ヨルダン王国の官憲と摩擦を引き起こす。フィダイーンは難民収容所の内部だけでなく、王都アマーンの街路でも武器を携帯し、我が物顔で行動する。また道路で検問を実施し、商人に資金調達

のために献金を迫る。1968年11月2日、バルファ宣言の記念日に、アマーンの米国大使館が群衆に襲撃された。治安出動のヨルダン軍とフィダイーン勢力は、ついに武力衝突に至る。

この事件を契機に、ヨルダン政府・軍部とPLOの関係は急速に悪化した。だが、この時にはフセインが妥協を図り、ナースィルに調停を依頼する。両者の間に協定が締結され、ひとまず危機は回避された。⁷ フィダイーンは王国の法令を遵順し、難民収容所の外で軍服の着用武器の携帯をせぬよう約束する。しかし、この協定は難民収容所の治外法権を容認し、王国の領域内でPLOを別個の国家と認めたも同然だった。カラーメーの蜜月はとっくに終わり、やがてフセインの軍勢とフィダイーン勢力は互いに血を流す。

36 消耗戦争の攻防

占領地の武力奪回 六日戦争の迅速な勝利で、イスラエル軍はスエズ運河の東岸に達した。エジプト軍は固有の国土のシナイ半島を放棄した後、運河の西岸でようやく態勢を立て直す。安全保障理事会の介入で停戦が成立したものの、敵対する軍勢は細い一筋の水路を挟んで睨み合う。戦火がいったん消えてから僅か三週間後の1967年 7月 1日、両軍はスエズ運河越しに激しい砲火を応酬する。この軍事衝突は停戦協定を反古にただけでなく、戦後の戦争の開始を告げる号砲となった。

この正規軍同士の対決は、後にナースィルによって〈消耗戦争〉と名付けられ、実に三年以上も続く。前半は運河地帯で断続的衝突が繰り返され、後半はイスラエル機の連続的空襲でエジプト全土が戦場になった。ナースィルは次の通り想定する。軍事対決が長引いてイスラエルに絶えず出血を強いれば、人口の少ないシオン主義国家は消耗の末に、最後に占領地を手放さざるを得ないだろう——と。このナースィルの戦略は、思惑違いに終わる。戦力の勝るイスラエルの逆襲で、エジプトは目的を達成できず、相手よりもずっと大きな損害をこうむった。

運河の東方の国土が占領されたのは、エジプトにとって二度目の体験である。1956年のスエズ危機の際、シオン主義国家は英仏両国の露払い役を務め、シナイ半島の全域を占領した。ところが、米国とソ連の超大国が凶らずも歩調を揃えた国際情勢の下で、戦場の敗者は軍事的敗北を外交的勝利に転換する。イスラエルは国際連合の圧力と米国の経済制裁の可能性の前に、渋々ながら撤退に追い込まれる。

しかし、今度は事情がすっかり変化し、国際世論はエジプトに不利だった。アラブ陣営の好戦的言辞と軍事的圧力の前に、シオン主義国家は国家存亡の危機に瀕し、西側の同情を集める。イスラエルが追い詰められた末に、先制攻撃の成功で一方的勝利を収めると、米国や西欧諸国の政策決定者は内心で快哉を叫び、イスラエルに本気で占領地から撤退を求めようとはしなかった。

戦後間もなくエシュコル政権は和平案を閣議で決定し、シナイ半島の非武装化、ティラーン海峡とスエズ運河の自由航行権の保証と引き替えに、エジプトの国土から撤兵する方針を決めた。しかし、相手が歩み寄りを見せぬ以上、占領地の返還を急ぐことはない。運河東岸の広大な砂漠が支配下に入った結果、イスラエルは防衛線をずっと南に押し広げ、安全保障を確立できた。将来、エ

ジプトが復讐戦を仕掛ける事態に至っても、この緩衝地帯のお陰で十分に余裕をもって反撃できよう。

イスラエル軍がスエズ運河の東岸に居座り続ける限り、この国際水路の再開は不可能である。エジプトは国有化した運河を自由に運営できず、国家的威信を失墜したばかりか、船舶通行料の外貨収入を失った。さらにシナイ半島の油田も敵手に落ちたため、貴重な国産原油の供給量が激減した。イスラエルがシナイ半島に腰を落ち着ければ、やがて国際社会は既成事実として認めてしまうのではあるまいか――。ナースィルは占領の恒久化を危惧した。

1967年 9月、ナセルはカーツームのアラブ首脳会議から帰国すると、カーヒラの国会前広場で大群衆を前に演説し、シナイ半島の武力奪回を誓う。そして、首脳会議で採択された三つの拒否（イスラエルとの平和はあり得ず、イスラエルを承認せず、イスラエルと交渉せず）に、もう一項目を付け加えた。パレスチナ人民の正統な権利には、いかなる譲歩もあり得ない――と。

砲撃 ナースィルは国土奪回のために、三段階の戦略を構想した。

の応酬 第一の段階は防御で、彼我の力関係から相手の攻撃を受け身で阻止する。第二の段階は反撃で、時と場所を選んで攻勢に出る。そして最後の段階は解放で、シナイ半島の占領地を奪還する――と。この戦略でイスラエル軍をエジプト固有の国土からすぐに撤退に追い込めなくとも、運河越しの砲撃で対岸の敵を絶えず攪乱すれば、国際社会の関心を引き起こすだろう。そのうちに占領地の返還が軍事力によらずとも、外交的、政治的手段で実現できるかも知れない。

1967年 7月11日、最初の砲撃戦から十日後、国際連合は運河の両岸に哨所を設け、停戦の監視に当たった。イスラエルはエジプトの反応を試す。その解釈によると、軍事境界線は国際水路の中央を走っている。だから運河の東岸寄りに舟を浮かべても、停戦線の侵犯にならない――と。エジプト側は相手の出方を挑発と受け止め、イスラエルの舟艇に砲火を浴びせる。両軍の小競り合いは、砲撃と空中戦に発展した。エジプト側は七機を撃墜される。

同じ年の 9月、イスラエルの船舶がスエズ湾を航行中、エジプト支配下の島から砲撃された。イスラエルは報復として、運河沿いのイスマーイーリア市と運河南端のスエズ市を砲撃する。両軍の衝突は正規軍同士の戦闘に終わらず、とうとう民間人を巻き込んだ。六日戦争の際、イスラエル軍が対岸に現れても、両市の住民は住み慣れた町に踏み止どまったが、いまや家屋と土地を捨てて安全な場所に疎開せねばならなくなった。

戦後の戦争はますます激化し、10月21日、イスラエル海軍の旗艦エイラト号が撃沈される。エジプト海軍のミサイル発射艇はスエズ運河の北端のポートサ

イード港に潜み、沖合を航行中の敵艦にソ連製の誘導弾を発射する。三発のミサイルに直撃されて、イスラエルの軍艦は沈没した。人的損害は極めて大きく、乗組員の総数百九十九人のうち、死亡と行方不明者の合計は四十七人にのぼり、負傷者も九十人に達した。⁸

エイラト号の爆沈から四日後、イスラエルは報復作戦を発動する。それを予期して、エジプトは地中海岸の海軍基地の防御を固めた。しかし、仕返し之刃はポートサイドでなく、運河の南端のスエズへ向けられる。エジプト最大の精油所が激しい砲撃の標的となり、数日間にわたって燃え続けた。人的損害は小さかったが、経済的な打撃は計り知れない。

その後も運河越しの砲撃戦、特別攻撃隊の渡河と待ち伏せ攻撃、地雷の埋設など、双方の小競り合いは続く。イスラエルはヨルダン渓谷のフィダイーンに対処するのと同様に、エジプトの攻撃に常に数倍の報復攻撃で報いる。占領地奪回戦略の第一段階は、ナースィルの構想通り受け身に回らねばならなかった。しかし、相手を絶えず緊張状態に置き、同時に兵士と国民に国土奪還の決意を植え付ける。

防御線 六日戦争の惨敗から早くも一年が過ぎ、その間にエジプトは
の築造 陣容の立て直しを完了した。ソ連は中東の友邦を見捨てる訳には行かず、種々の戦争機械——戦車、航空機、対空兵器、大砲、弾薬を惜しまずに供与する。エジプト軍は戦場で失った重火器を補充し、さらに新鋭兵器で装備された。多数の軍事顧問団がナイル河畔に派遣され、エジプト兵に新型兵器の操作を伝授する。

いよいよ対イスラエル戦略の第二段階——反撃の時期が到来した。再生エジプト陸軍は運河沿いに十五万の大軍を展開し、東岸のイスラエル軍と対峙する。しかし、上陸用舟艇や架橋設備が揃わないので、大規模な渡河作戦の敢行を将来に持ち越す。空軍もイスラエルの奇襲で破壊された航空機を補充したものの、運河上空の制空権を奪われたまま取り戻していない。

エジプト軍部はソ連赤軍の戦術理論を実地に応用し、集中砲撃の威力を試す。百礮に及ぶ運河西岸の最前線には、千門以上の大砲が配置された。1968年 9月 8日、エジプト軍は一斉に砲門を開き、東岸のイスラエル軍陣地に猛烈な砲撃を浴びせかける。その半年前のカラーメーの激戦ほどではないまでも、久し振りにエジプトの民衆は勝利の宣伝に沸き返った。その後もエジプト軍は砲撃を繰り返す、同時に小兵力の部隊を対岸に潜入させる。

ところが、一時的勝利の代償は、またしても高く付く。10月31日の夜、イスラエル軍のヘリコプタは特殊部隊を乗せ、カーヒラの南約五百礮の奥地を急襲し、ナイル河に架かる橋を爆破したばかりか、さらに変電所も破壊した。

それから数カ月の間、運河沿いのエジプト軍は砲撃を中止し、相手の報復攻撃を誘発しないよう自制した。大砲が沈黙している小休止の間に、イスラエルは急造の陣地を恒久的要塞に造り直す。シナイ半島の占領後、イスラエル軍の最前線部隊は運河東岸の砂漠に溝を掘り、土塁を築いて、エジプト軍の渡河作戦に備えた。しかし、この間に合わせの防御線は砲撃に脆く、兵員の休養施設も十分でなかった。

エジプト軍の反攻に備えて、イスラエル軍部では二つの考えが対立した。一つは機甲部隊の指揮官が提唱したもので、シナイ半島の占領軍はエジプト軍の砲撃の射程外まで引き下がり、奥地の安全地帯に基地を設ける。そして、高度の機動力と連絡道路網を整備して措く。もしエジプト軍が運河を渡って来襲するならば、機甲部隊が直ちに基地から出撃して、渡河地点に駆け付け、相手を水路に追い落とす――と。

もう一つの考えは、従来通り部隊を運河の水際に配置する。対岸から砲撃にさらされても、絶えず相手の動向を監視でき、渡河作戦に即座に対抗手段を取ることができる。もしエジプト軍が奇襲で運河の東岸に足場を築くならば、すぐに国際連合の仲介を求めて停戦に持ち込むに違いない。そして、国際世論に訴えて、外交圧力でイスラエル軍の撤退を求めるだろう。そのような事態を防止するために、岸辺の固定的防衛の方が得策である――と。

ダーヤーン国防相や国防軍幕僚長のハイム・バー＝レヴなどイスラエル軍首脳部は、水際防衛案の採用を決定した。スエズ運河東岸の水辺に約十帯の間隔を置いて、要塞が鎖状に建設される。工兵隊は昼夜兼行で工事を進め、シナイ半島の鉄道線路を撤去して地下陣地の支柱に転用した。こうして鋼鉄とコンクリートの頑丈な拠点地完成する。かつて仏独国境の要塞線が発案者の陸相にちなんでマジノ線と呼ばれたように、スエズ運河沿いの防御線はバー＝レヴ線と呼ばれた。

エジプト軍は目と鼻の先で行われている土木工事の意味を悟らず、砲撃で積極的に妨害しなかった。イスラエル側は水際に高い土の壁を築き、工事の進捗状況を覆い隠す。1969年3月、エジプト軍の砲兵が運河越しの猛砲撃を加えたが、イスラエル軍は堅固な要塞に立て籠って大した損害をこうむらなかった。それどころか、エジプト軍の最高司令官は最前線を視察中、イスラエル軍の砲撃で幕僚と共に戦死を遂げる。

1969年5月1日、恒例の労働祭の演説で、ナーシルは宣言した。これまでの砲撃戦で敵陣地の大半をたたきつぶし、いよいよ占領地奪還の第三段階、すなわち解放の時期が到来した――と。

エジプト軍首脳部は〈消耗戦争〉の成果を過大に評価した。もともとイスラ

エル軍が機動攻撃を得意とするだけに、受け身の陣地戦は自ら罠にはまったも同然である。人口の少ない国だけに、世論は兵員の損失に敏感だ。絶え間ない砲撃で死傷者が続出すれば、兵士の士気は低下するだろう。予備役の兵士をいつまでも最前線に釘付けにしておけば、経済活動にも影響が出てくるに違いない――と。

ダーヤーンはナースィルの術策に陥ることなく、決戦場を別な場所を選ぶ。イスラエル軍の特殊部隊は運河から遠く離れた地点を急襲し、アスワーン大堰堤の発電所とカーヒラとを結ぶ高圧送電線の切断に成功した。同時にナイル河の橋を破壊し、後方を攪乱する。9月9日、イスラエル軍の機甲部隊は上陸用舟艇でスエズ湾の西岸に渡り、行く先々で電波探知基地や哨所を破壊した末に、一人の戦死者を出すことなく、出撃地のシナイ半島に引き揚げた。

イスラエル軍の反撃で最大の戦果は、ソ連製の最新鋭の電波探知機器の機密を入手したことである。まず特殊部隊が奇襲攻撃で、基地の守備兵を制圧する。次に巨大な装置を取り外して重量物運搬用のヘリコプタで吊り上げ、占領地まで運び去る。こうして極秘の技術情報がイスラエルに（そして西側に）渡り、対抗手段の開発に役立った。

全土に 六日戦争の勃発と同時に、エジプト空軍は飛び上がる間もなく、**大空襲** く、大半が地上で粉碎された。悪夢のような敗北から一年余、ナースィルの航空戦力はソ連の軍事援助で再建され、戦前の機数を上回る。エジプトの戦闘機はスエズ運河上空に出撃し、爆撃機は対岸の敵陣に爆弾を投下した。だが、イスラエル機に邀撃されて、激しい空中戦の結果、逆に甚大な損害をこうむる。1969年の末までに、ナースィルは制空権の奪回を諦めた。

イスラエル機は運河の上空から敵機を駆逐すると、次に地上攻撃を強化した。特殊部隊の大胆な奇襲攻撃で、相手の対空警戒網には大穴が空いている。戦闘爆撃機はまず対空誘導弾発射基地と高射砲陣地を襲い、エジプトの防空能力を無力化した。そして、今度は運河沿いの砲兵陣地に空から打撃を見舞う。その結果、集中砲撃の威力は目に見えて減殺され、バー＝レヴ防御線の損害を最小限にとどめた。⁹

1970年 1月以降、エジプト全土で激しい空襲が荒れ狂う。米国供与の最新鋭ファントム機は奥地まで深く侵攻し、運河地帯から遠く離れた訓練基地や物資集積所をたたいた。この怪鳥は低空を超音速で飛来し、銃後を最前線と同様の戦場に変える。首都のカーヒラや他の大都市の住民は、まざまざと戦争の恐怖を実感した。イスラエルは攻撃対象を軍事目標に限定したが、工場の誤爆で民間人に八十六人の死者を出す。この深縦爆撃は兵士の士気の低下と民心の離反を狙い、究極的にナースィルの打倒を意図した。

しかし、イスラエルの猛爆はかえってエジプト国民の結束を固め、政治的に逆効果に終わる。ナーシルは空襲の激化と共に極秘裏にマスクヴァを訪問し、最新式の対空誘導弾と邀撃用戦闘機の供与を強く要求した。ソ連は米国との正面衝突を恐れたが、中東地域に築き上げた足場を失わぬためには、盟邦の強い要求に応ずる。やがてミサイルや飛行機が送られただけでなく、その操作要員と操縦士も派遣された。

防空態勢の強化は、やがて奏功する。1970年6月末には二機のファントムが撃墜され、その後の約四十日間に三機が餌食となった。ソ連仕込みの対空砲火網は低空用と高空用の誘導弾に高射機関砲を組み合わせた三段構えで、移動式電波探知機の指示によってイスラエル機の来襲に立ち向かう。エジプトは首都近郊から空の守りを固め、次第に運河地帯まで拡大しようと試みた。

防空楯が砲兵陣地を覆うようになれば、対岸の要塞は再び集中砲撃の標的になりかねない。イスラエルが制空権を失えば、やがてエジプトは第三段階の解放——渡河作戦を決行するだろう。スエズ運河地帯で、空対地の死闘が続いた。イスラエルは地上の電波探知網を電子装置で攪乱しながら、エジプト軍の陣地に爆弾の雨を降らせる。

1970年7月末、イスラエル機はソ連兵の操縦する戦闘機と遭遇し、空中戦で五機も撃ち落とした。この直接的衝突は予期された事件とはいえ、中東地域の緊張を一挙に高める。それまでエジプトの空は米ソ両超大国の新兵器の実験場となっていたが、この屈辱にクレムリンとしては黙って引き下がる訳には行かない。もしソ連がイスラエルに対して積極的な報復行動に出れば、米国も対抗措置を迫られるだろう。

米国の 国際社会は中東情勢の険悪化を憂慮し、和平工作に乗り
和平努力 出した。1967年の秋、安全保障理事会の決議 242号に基いて、スウィードンの外交官グナル・ヤーリンクが国連事務総長の特別代表に任命された。この前駐ソ大使はサイプラスに事務所を開設し、イスラエルとアラブ諸国を歴訪して仲裁に努める。

エジプトとイスラエルの武力対決が激化する間に、米国の大統領はジャンソンからニクソンに交替した。1969年12月、新しい政権の国務長官ウィリアム・ラジャズは仲裁役を買って出て、交戦中の両国に和平案を提示する。だが、双方とも米国の和平努力に応えようとしなかった。¹⁰

翌年春、イスラエルの爆撃が激化すると、ラジャズは改めて停戦を呼び掛ける。米国の新提案は九十日間の休戦、安全保障理事会の決議 242号（エジプトのイスラエル間接承認、イスラエル軍の占領地からの撤退）の受け入れ、ヤーリンクを通じた和平交渉の開始などを骨子としていた。

ナースィルはカーツームのアラブ首脳会議で採択された〈三つの拒否〉の原則にもかかわらず、意外にもラジャズ提案を受諾した。ヨルダンのフセイン国王もすぐに追隨する。シリア、イラク、アルジャリアなどのアラブ強硬派諸国、それにパレスチナ人の武装集団は、アラブの盟主国の変節を強く非難した。ナースィルの側近でさえ事前の相談を受けず、この大胆な決定に驚く。

一方、イスラエル政府は閣内不統一のため、ラジャズ提案に難色を示した。それより先の1969年2月26日、エシュコルは心不全のため現職のまま死去し、労働党書記長のゴルダ・メイアルが首相に就任する。彼女はダーヤーン国防相と共に対エジプト深縦爆撃を推進し、ラジャズの和平工作に抵抗して戦局を拡大した。しかし、米国の強い圧力にいつまでも逆らえず、ソ連機の撃墜事件を潮時に銚を収める。¹¹

ベギン無任所相はエシュコル政権時代に安全保障理事会の決議242号の受け入れに賛成しながら、この時期に至って強硬に異議を唱える。イスラエルの挙国一致政権は1967年の六日戦争の直前に成立し、その後の総選挙で右派閣僚の入閣を増やしたが、ここで米国の和平案の受け入れをめぐる分裂した。右翼政党は連立政権から脱退し、ベギンら六人の閣僚は辞任する。神の約束の地を寸土もアラブに引き渡すな——と。

1970年8月7日、ようやく休戦が成立した。ヤーリンクの司会で、エジプト、ヨルダン、イスラエルの和平会談がニューヨークで開催される。しかし、それは僅か一カ月後に決裂してしまう。イスラエルは主張する。エジプトは停戦協定に違反して、運河地帯に対空誘導弾の発射台を導入した。それを撤去しない限り、交渉には応じられない。エジプトも反論する。イスラエルは運河の東岸に新たに要塞を建設しているではないか——と。

ともかく、消耗戦争は終わりを告げた。六日戦争の終結から休戦成立までの千百四十一日間に、イスラエル側は軍人の死者五百九十四人、負傷者千九百五十九人の人的損害を出す。民間人の死者も百二十七人、負傷者は七百人に達した。人口の少ないシオン主義国家にとって、これは大きな犠牲に違いない。しかし、イスラエルは三国和平交渉の決裂で、シナイ半島の占領地から撤収せずに済んだ。

一方、エジプトの損害は明らかにされていないが、人的損害を惜しまぬ過去の例から、十数倍の犠牲者を出したと推定される。さらに砲爆撃のため六十万人が難民となり、運河地帯から逃亡した。戦後の戦争はイスラエルだけでなく、エジプトにも多大の人的、物的消耗を強いたのである。

37 ヨルダンの内戦

武装集団 1970年 8月 7日、九十日間の休戦が発効した。スエズ運河地帯で、そしてナイル河の三角洲で、もはや砲爆撃の轟音を聞くことはない。僅か三カ月の期限付きとはいえ、和平の到来はエジプトで歓迎される。六日戦争の敗北から三年以上も、戦後の戦争がずるずると続き、国力は疲弊の極に達した。シナイ半島の武力奪還は実現できなかったが、ひとまず民衆は深い安堵感にひたる。

しかし、パレスチナ解放機構（P L O）加盟のフィダイーン勢力は消耗戦争の終結に不安を感じ、激しい焦燥感にとらわれた。カーツーム首脳会議の決定に従い、ナーシルは厳粛に誓った筈ではないか。イスラエルとの平和はあり得ず——と。それなのに米国主導の和平案を受諾するとは、パレスチナ人の抵抗運動を裏切るのではあるまいか。パレスチナ解放人民戦線（P F L P）などの強硬派は、彼の変節を強く非難した。

P L O最高指導者のアラファートは最大のゲリラ組織ファタハを率い、ラジャズ米國務長官の和平提案に反対を表明したが、ナーシル個人に対しては批判を慎む。エジプトの存在は、アラブ陣営であまりにも大きい。軽々しい発言で彼の支持を失う事態に至れば、フィダイーン勢力はカーヒラに見捨てられるだけでなく、アラブ世界の孤児になりかねないからである。

六日戦争後、フィダイーンの果敢な抵抗運動が評価され、P L Oはエジプトの首都に放送局の設置を認められた。その電波は民衆向けの宣伝だけでなく、前線のゲリラに暗号で作戦命令を発する。しかし、P L Oが停戦反対の声を流すと、ナーシルはアラファートに厳しい態度で臨んだ。エジプトの治安当局は放送局の閉鎖を命じ、パレスチナ・ゲリラ勢力の口を封ずる。

同じ頃、P L Oは不満の吐け口をヨルダンに見出し、フセイン国王と対立を深める。フセインがナーシルに追随してラジャズ和平案に乗ると、フィダイーン勢力は不信の念を決定的に固めた。ヨルダンはイスラエルと裏取り引きし、和平の代償に国内のフィダイーン勢力を切り捨てるのではないか——と。

ロジャズ和平提案に先立ち、1970年 4月、米國務省高官のジョウジフ・シスコが中東諸国を訪れ、イスラエルから陸路を取ってアマーンに来るはずだった。P L Oは数万人を動員し、ヨルダンの首都で示威行進を組織する。その大衆行動はやがて暴動に発展し、米国大使館を襲撃した。この事件はフセインの権威失墜を内外に印象づけ、シスコのアマーン訪問は取りやめとなる。

フィダイーン勢力がヨルダン川の西岸に攻撃を仕掛けるたびに、イスラエルは大規模な報復を加える。それはゲリラの根拠地をたたきだけでなく、ヨルダン国民を巻き添えにした。仕返しの砲爆撃は農民の家屋ばかりか、生命線の灌漑施設まで破壊する。王国政府はフィダイーンの行動に規制を課したが、実効を挙げずじまいだった。ゲリラ勢力と王国軍の対立は、何度も武力衝突を引き起こす。

フセインはイスラエルに奪われたヨルダン川の西岸を取り戻すために、そしてアラブ陣営から破門されぬために、しばらくの間、フィダイーンと共存を図らねばならなかった。すでにパレスチナ系住民はヨルダンの人口の過半数に達し、その支持なしではハーシム王家の支配を維持できない。しかし、米国主導の和平実現で西岸の被占領地が返還されるなら、ゲリラの利用価値はなくなるだろう。

過去三年間、ヨルダン政府・軍部がフィダイーンと対立を繰り返すたびに、国王は内閣改造や軍首脳の変更で相手を懐柔した。だが、ゲリラ勢力がパレスチナ革命を呼号するまでに至って、その存在は根本的に王制と相容れない。いまやPLOは大衆行動でフセインの権威を失墜させ、王国内に革命共和国を樹立したも同然となった。現実政治家の国王は戦術的後退を余儀なくされたが、巻き返しの機会をじっと窺う。

民間航空機の連続乗っ取り エジプト、ヨルダンの両国が米国の仲介でイスラエルと和平を達成すれば、パレスチナ難民の窮状は国際社会から忘れ去られてしまうだろう。もはやアラブの大義の掛け声そのものが雲散霧消しかねない。九十日間の休戦成立後、ニューヨークで三国和平会談が開催されている最中、PFLPは西側諸国の民間航空機を同時多発的に乗っ取って、全世界に衝撃を与えた。

1970年9月6日、まずランダン発のイスラエル航空（エル・アル）の旅客機がテラヴィヴに向かう途中、パレスチナ生まれの女性ライラ・ハリドはニカラグア系米国人の同志と乗っ取りを図る。だが、同乗の公安要員は機内で撃ち合いの末に米国人を射殺し、彼女を取り押さえた。旅客機は出発地に引き返し、二十四歳の女性乗っ取り犯の身柄を英国官憲に引き渡す。

同じ日、スイス航空とトランス＝ワールド航空の旅客機が襲われ、ヨルダンの旧英空軍基地の滑走路に着陸を強要される。続いてパン・アメリカン航空のジャンボ旅客機も乗っ取られ、カーヒラ空港に緊急着陸した。三日後の9月9日、今度は英国海外航空の旅客機が狙われ、ヨルダンに向けて針路を変えた。砂漠の〈革命飛行場〉には、乗っ取られた航空機が翼を並べる。

大型旅客機の連続乗っ取り事件は、全世界の耳目を集めた。灼熱の太陽の下

で、数百人の乗客が人質として機内に閉じ込められ、狭苦しい座席に座って身動きもできない。子供も女性も老人も生命を脅かされ、武装集団の取り引き材料に利用されている……。西側の報道機関は改めてパレスチナ難民の窮状を取り上げたが、同時に欧米社会に根強い反アラブ感情をかきたてた。¹²

PFLPは機中の欧米人を自由の身にするかわりに、欧州諸国やイスラエルの獄中に囚われの同志の釈放を要求する。そればかりではなく、究極の目的はエジプトとヨルダンの対イスラエル和平をぶち壊すことにあった。ロジャズ提案の受諾により、パレスチナ問題がアラブ側からも等閑視されるのを恐れたからである。

フィダイーン勢力が航空機の乗っ取りという非常手段に訴えたのは、これが初めてではない。過去にもPLOの急進派はアテネやウィーンなど欧州各地でエル・アルを標的に定め、その旅客機と営業所を襲撃した。この武力活動は一部で成功したものの、多くは失敗に終わる。数十人のテロリストが各国の官憲に逮捕され、裁判で有罪を宣告されて服役中だった。

イスラエルはテロリスト釈放の要求に対して、頭から取り引きを拒否した。英国、西独、スイスの政府は自国民救出のため、国際赤十字やアラブ陣営の仲介で、乗っ取り犯と交渉を始める。まず、空のゲリラはエジプトで人質の拘束を解き、米国の大型旅客機を爆破する。PFLPのフィダイーンはヨルダンでも乗客の大半を自由の身にした後、旅客機を爆薬で吹き飛ばした。だが、乗客のユダヤ教徒など約四十人を秘密の隠れ家に連れ去る。

フィダイーンと王国軍との対決 この一連の事件は、フセイン国王の無力ぶりを改めて印象づけた。国王の軍勢は出動したものの、ただ飛行場を遠巻きに包囲するだけで手出しできない。政府は閣僚に親フィダイーン派を抱えているので、強硬手段に訴えるのを回避した。ヨルダン王国軍の主力部隊はハーシム王家に忠実な遊牧部族の出身者で構成されているだけに、国王の優柔不断と政府の弱腰にいらだつ。

しかし、フセインの忍耐にも限度があった。PFLPの旅客機の乗っ取りと機体の爆破で、国王は面目を失う。しかし、西側の報道機関が一週間にわたる人質の恐怖の日々を大々的に伝えたので、フセインはゲリラの実力排除に絶好の口実を得た。アラブ諸国のほとんどが公式には乗っ取り事件を非難したので、ヨルダンが武力で事態を収拾しても、孤立化することはない。

フィダイーン勢力は人質奪取作戦の成功に気を良くし、対イスラエル闘争よりもパレスチナ革命に突っ走る。旅客機爆破から三日後の9月15日、PFLPはヨルダン北部の地方都市イルビードに〈人民政府〉の樹立を宣言し、国王の権威に真っ向から挑戦した。その夜、フセインは文民政府を解任し、全土を戒

厳令下に置く。新たに任命された軍事内閣は王党派の軍人で固められたが、フセインの真の意図を隠すために、首班にパレスチナ人の将官が就任した。

翌日の早朝、ヨルダン軍は国王の命令を受けて、フィダイーン勢力に対して軍事行動を起こす。戦車、装甲車が難民収容所やパレスチナ人居住区に向かって進撃し、砲兵隊は照準をフィダイーンの軍事拠点に合わせた。破局に至るまでの数カ月、フセインはハーシム王家に忠実な遊牧部族から信頼できる兵士を集め、ひそかにゲリラ特別部隊を編成する。王党派の将兵はイスラエルよりもフィダイーンに敵意を抱き、時期の到来を待ちわびていた。

P L Oの内部でアラファートの率いる主流派ファタハは、中央の統制に服さぬP F L Pの冒険主義的行動に批判的だった。だが、旅客機連続乗っ取りの反響が内外であまりにも大きかったので、アラファートも正面切って非難できない。彼は武装集団の連合体のP L Oを一つにまとめ、その最高指導者の地位を維持するために、P F L Pの過激な手段も容認せざるを得なかった。

フィダイーン勢力はイスラエルの報復空襲の激化につれてヨルダン川沿いの解放区からアマーン周辺に移動し、難民収容所やパレスチナ人居住区を軍事拠点に変えた。イスラエルの航空機が飛来しても、非戦闘員の人口密集地に無差別爆撃を加えることはないと思っていたからである。

しかし、ヨルダン王国軍の砲兵はゲリラの聖域にためらいなく射撃を浴びせ、機甲部隊と歩兵は難民収容所に突入して抵抗拠点を掃討した。アマーンでも激しい市街戦が展開され、フィダイーンの立て籠もる家屋は徹底的に破壊された。このアラブの同士討ちで、パレスチナ人に数千の死者を出す。

国際化の危機 フィダイーン勢力と王国軍の戦闘は、やがて〈ヨルダンの内戦〉と呼ばれる。だが、この戦火は同時に国際化の危機をはらんでいた。P L Oがアラブ強硬派諸国の支持を得てハーシム王家の支配体制を転覆しようものなら、米国とイスラエルはヨルダンに軍事介入を辞さない。アマーンはアラブ世界で数少ないウォシingtonの友であり、米国の中東政策に一定の理解を示してきたからである。もし非妥協的な〈革命共和国〉がヨルダン川の東岸に樹立されて、西岸の占領地の奪還とシオン主義国家の打倒をめざせば、イスラエルは軍事的にも外交的にも大きな脅威と受けとめ、武力に訴えるに違いない。

1968年、アラブ連盟はイスラエルの脅威に対抗するためヨルダンに合同司令部を設置し、王国内に一万二千のイラク軍と六千のシリア軍を駐留させた。両国ともアラブ進歩陣営の旗手を自任しているだけに、フィダイーン勢力がアラブ反動派の軍隊に掃滅されるのを、決して黙視しないだろう。両国の派遣軍がP L Oに加担すれば、力関係はヨルダン王国軍に著しく不利となる。

イラクとヨルダンの両国はかつて英国の後押しでハーシム家の二兄弟——ファイサルとアブダッラーによって統治され、バグダードの王家が1958年の軍事革命で転覆されてからも、深い因縁で結ばれていた。バグダード放送が常にパレスチナの大義を訴えていただけに、そのヨルダン駐留部隊はPLOに味方するのではないかと期待された。しかし、イラクの機甲部隊は内戦に中立を保ち、フィダイーン勢力を見殺しにして本国に撤収する。

シリアのバース党左派政権はロジャズの和平提案に応じたナーシルとフセインを強く非難しただけに、アラブ進歩陣営の面目からもパレスチナ・ゲリラに声援を送った。9月20日、シリア陸軍の機甲部隊が出動し、ヨルダン北部に侵攻する。この部隊はパレスチナ解放軍（PLA）に擬装し、名目上はシリア軍そのものではなかった。PLAは紙の上ではPLOの正規軍だったが、アラブ諸国の軍隊に組み込まれて、各国の指揮下に置かれていた。

この軍事介入はフィダイーン勢力の心強い援軍とならず、逆にディマシュクの内部亀裂を露呈する。シリアとヨルダン両国の戦車部隊は国境近くで衝突し、どちらも相手に優勢となり得なかった。シリア国防相のハフェズ・アル＝アッサド中將は空軍の出動を拒否し、敢えて戦機を逸する。この元空軍司令官の国防相は、国際情勢の判断を誤らなかつた。空爆による戦局の拡大が米国とイスラエルの直接介入を招く——と。¹³

実際、米軍は本土から戦闘部隊をトルコに空輸し、いつでもヨルダンの内戦に干渉できるよう派兵準備を整えた。米第六艦隊は東地中海に出動し、軍事力の誇示を怠らない。一方、ウォシグタンはマスクヴァに外交的圧力をかけ、ディマシュクに影響力の行使を求める。イスラエルはいつでもヨルダン川の東岸に出兵する構えを見せ、さらにシリアと境を接する占領下のゴラン高原に大軍を送り込んだ。

9月21日、フセインは航空隊に出動を命じ、空から反撃を開始する。ヨルダンの航空兵力は六日戦争の際に、イスラエルの一撃で壊滅した。ようやく再建された空軍は、アラブ陣営の同士討ちに大戦果を挙げる。シリア軍の戦車は味方の戦闘機の支援のないまま、一方的に打ちのめされた。ヨルダン軍は貴重な機甲部隊を消耗することなく、ゲリラ相手の戦闘に振り向ける。

フセインは内憂外患に直面しながらも、内戦を契機に王権の確立を図る。王国軍とフィダイーンとの戦闘で、イラク軍は動かず、シリア軍は撃退された。ナーシルはロジャズ和平案を受諾しただけに、フセインの立場を支持せねばならない。フィダイーンは捨て身の抵抗を試みたが、なにしろ多勢に無勢で、激戦の末に次々に拠点を奪われる。

ヨルダン王国軍の猛攻により、パレスチナ人の難民収容所では非戦闘員の老

人、女性、子供の間には死傷者が続出し、食糧も飲料水も医薬品も不足した。この兄弟殺しの悲劇は、やがて〈暗黒の九月〉と呼ばれる。その不吉な響きは間もなくテロ活動の激化に形を変え、中東地域だけでなく欧州諸国をも大きく揺さぶった。¹⁴

ナーシル エジプト大統領は苦しい立場に追い込まれる。**フィ**
の急死 ダイーン勢力はロジャズ提案に反対し、九十日間の休戦成立を妨害した。しかし、ナーシルはアラブ陣営の指導者としてパレスチナの大義を叫んできただけに、この流血の惨事を黙視できない。それにヨルダンの内戦が激化すれば、イスラエルはロジャズ提案の受諾を取り消すかも知れず、せっかくの和平努力は水泡と帰すだろう――と。

カーヒラはアマーンに対し、戦闘中止を繰り返し呼び掛けた。さらにナーシルは仲裁のため腹心の軍司令官をヨルダンに急派し、フセインとアラファートに和解を訴える。しかし、ヨルダンの軍首脳は一挙にゲリラ勢力の掃滅を図り、停戦に応じようとはしなかった。これまでのような安易な妥協は問題を将来に持ち越すだけで、根本的解決にならないと信じたからである。

アラブ連盟は四カ国の首相、国防相などから成る調査団をアマーンに派遣し、戦火の消し止めに尽力する。ナーシルはアラブ諸国から国王、首長、大統領をカーヒラに招き、和平実現のため首脳会議を開催した。その席にフセインもアラファートも呼ばれて、出席の各国元首の面前で激論を交わす。その間にもヨルダン国内では戦闘が続き、おびただしい血が流れた。ようやく9月27日になって、ナーシルの仲裁で、双方は停戦の合意に漕ぎつける。

翌日、アラブ諸国の首脳は続々と帰国した。ナーシルは空港の見送りから帰宅した直後、心臓発作で急死する。過去数年間、エジプト大統領は健康の悪化に苦しんでいたが、アラブ陣営の同士討ちの仲裁に精魂尽き果て、ついに命を縮めてしまった。PLOは時折り彼と対立したとはいえ、その発足以来の掛け替えない保護者を失う。¹⁵

フセインとアラファートはアマーンに戻り、10月13日、カーヒラ合意に基づいて、改めて停戦協定を締結する。それはヨルダンの国土でフセインの権威を確認し、フィダイーンの行動に厳しい制約を課した。武装集団は各地の根拠地を解体し、武器の携帯と制服の着用を禁止された。さらにヨルダンの法律の遵守を求められる。

いまやフィダイーン勢力が組織の温存を図るならば、ヨルダンの王制を尊重する他ない。そして、いたずらに王国軍との衝突に武力を消耗せず、イスラエルとの対決に全力を挙げるべきで、これこそが生き延びるための唯一の道だった。一方、フセインは和解の証左として捕虜を釈放し、旅客機乗っ取りの首謀

者に恩赦令を発する。しかし、双方の不信感が根深いだけに、平和共存の日々は長続きしなかった。

ナーシルの死後、PLOは後ろ楯を失った。彼ほど強い影響力をフセインに行使できる人物は、他にだれもいない。それに王国軍とフィダイーン勢力の力関係は、決定的に変化していた。停戦成立から二カ月後の1970年12月、仲裁役のいないまま、早くも兄弟殺しの戦闘が再燃する。翌年の1971年早々、フセインの軍勢は積極的攻勢に出て、各地でフィダイーン勢力を攻撃した。

それから半年間、王国軍の容赦ないゲリラ狩り作戦で、多数のフィダイーンが殺されるか、それとも捕虜になった。約二百人が討伐部隊に追われてヨルダン川を渡り、宿敵イスラエルの官憲に投降する。こうして1971年7月末までに、PLOはフセインの領土から一掃された。生き残った者はシリアを経由してレバノンに移り、この小さな共和国に新たな根拠地を築く。¹⁶

1970年の秋、建国から二十二年余を経過して、イスラエルは中東地域に軍事的覇権を確立した。最大の強敵エジプトは六日戦争に続く消耗戦争でも敗北を喫し、米国の調停を受け入れるしかなかった。ある時期までパレスチナ人の武装集団は安全保障の攪乱要因となったが、ヨルダンの内戦で弱体化し、もはや脅威となり得ない。アラブ陣営の同士討ちの結果、イスラエルは労せずして優勢な立場を固める。かつての好戦的掛け声をよそに、シリアもイラクも慎重に構えて動こうとはしない。

この新局面の下で、イスラエルは安全保障理事会の決議242号を無視し、占領地に居座り続ける。アラブ陣営は自信を喪失し、戦争で失った国土を奪還する能力にも気力にも欠けた。だが、シオン主義国家が軍事力を過信した時に、政治・外交上の傲りを生ずる。武力による平和は、1970年から僅か三年しか続かなかった。1973年秋の新しい中東大動乱は、またもやイスラエルを存亡の危機に陥れる。

〈第九部の註と参考文献〉

1 カートゥームのアラブ首脳会議は拒否三原則を採択し、強硬姿勢を再確認したかに見えるが、内実は穏健派の主張が通った。ナーシルもフセインも、非妥協的なアルジャリアと会議に欠席のシリアを除く全アラブ諸国から支持され、イスラエルの撤退を軍事的手段よりも政治的手段で実現するのに合意した。

三つの拒否は、つぎのように柔軟に解釈できる。すなわち、イスラエルと正式の平和条約を締結しないが、和平状態を否定するものではない。直接交渉こそしないが、第三国の仲介まで否定するものではない。シオン主義国家を法的に承認しないが、国家としての存在を否定するものではない——と。

この三項目の枠内で、エジプト大統領もヨルダン国王も、以前より数歩踏み込んで、中東紛争の解決に尽力する意向を明らかにした。具体的には、イスラエルとの戦争状態の終結、イスラエル国家の存在の事実上の承認（ただし、その領土を六日戦争前の境界線内に限定）、その安全保障をめぐる国際的保証の受け入れ——などの諸条件が、政治的解決の前提となった。〔Robert Stephans, Nasser: A Political Biography (Harmondsworth: Penguin Books, 1973年)、523頁〕

2 この決議の英語正文は“(i) Withdrawal of Israeli armed forces from territories of recent conflict;”と表現し、territoriesの前に冠詞を欠いている。そこでイスラエルは強引な解釈を試み、この決議が占領地からの全面的撤退を求めているのではない——と主張した。国際連合の公用語の一つの仏語の正文は、不定冠詞の複数形を用いている。この点を仏代表団から指摘されると、イスラエル代表団はやり返した。受諾したのは英語の正文で、仏語のそれではない——と。〔Conor Cruise O'Brien, The Siege: The Saga of Israel and Zionism (London: Paladin Grafton Books, 1984年)、418頁〕

イスラエル元首相のゴルダ・メリアルも回想録の中で、次の解釈を主張している。この決議が、すべての占領地からイスラエル軍の撤兵を求めているのではない——と。〔Golda Meir, My Life (London: Futuma, 1984年)、311頁〕

イスラエルの解釈は奇弁を弄しているようでも、実は米国の支持を得ていた。安全保障理事会が英国提出の決議案の文案を詰めた際、ソ連はアラブ陣営の意を体して、all the territoriesと表現するよう求めた。だが、米国の強い反対に直面したので、allを削り、せめてtheを残すよう提案した。それでも米国の譲歩を引き出せず、英国案の原文に同意するしかなかった。

3 六日戦争の戦後処理に関して、ソ連は安全保障理事会でアラブ側に有利な決議案の採択を画策した。その草案はイスラエルに侵略者の烙印を押し、戦争責任を全面的にかぶせて、アラブ側の戦時損害を補償させるばかりか、シナイ半島、ヨルダン川の西岸、ガザ地帯、ゴラン高原の全占領地からの即時無条件撤退を要求した。だが、このような内容の決議案は、安全保障理事会で可決される見込みがなかった。

そこでソ連は作戦を変更し、問題を総会に持ち込んだ。アラブ寄りの決議案は安全保障理事会で、親イスラエルの米国の反対、つまり拒否権の発動によって容易に否決される。

しかし、総会で東欧圏、イスラーム諸国、第三世界の支持を結集できれば、三分の二の特別多数決でアラブに有利な決議案の可決も可能である。

1967年6月から7月にかけて、国際連合の舞台裏ではさまざまな外交工作が展開された。アラブ諸国はソ連に後押しされ、戦争責任の所在、賠償金の支払い、占領地からの全面撤退に固執し、イスラエル支持の西側諸国の反対に直面した。この駆け引きと並行しながら、米国とソ連は直接折衝を重ね、両国間だけの了解点に達した。米ソ合意の決議草案は、アラブ側に向けて占領軍の「遅滞ない撤退」の条項を盛り込み、イスラエル向けに「独立国民国家の存続」の文言を用意した。

ところが、米ソ両大国主導の決議案は総会に上程される前に、思いがけぬことに当のアラブ陣営から反対された。イスラエルはソ連とアラブ諸国の足並みの乱れに乗り、国際社会の合意が成立しないのを口実に、占領地に居座った。

ソ連は原則論にこだわり続ければ、逆にイスラエルの占領を恒久化させる結果になると悟り、問題を総会から安全保障理事会に差し戻し、英国案に拒否権を発動することなく賛成した。〔大石 悠二「国際連合安全保障理事会決議242号と中東和平の展望」『広島平和科学』十三号（広島大学平和科学研究センター、1990年3月）〕

4 ダーヤーンは回想録の中で、イスラエル占領当局の善政を自賛している。軍政の施行後、ダーヤーンはヨルダン川の西岸とガザ地帯の占領地で、アラブ住民の旅行制限を撤廃した。治安当局者はゲリラの浸透を恐れて反対したが、国防相の方針を変更できなかった。その結果、西岸で収穫された野菜と果物は、ヨルダン川を渡って遠くクウェイトやイラクまで出荷される。また、ガザ地帯のアラブ住民はイスラエルに職を見つけて居住地から出勤でき、従来よりずっと高い収入を得られるようになった。〔Moshe Dayan, Story of My Life (London: Sphere Books, 1978年)、400~406頁〕

占領はそれから二十五年以上も続き、イスラエルの労働市場に二重構造をもたらした。低賃金のアラブ労働者は建設現場に不可欠な存在だったが、景気や治安情勢によって、いつでも解雇された。

5 カラーメーの激戦の五年後、第四次中東戦争の際に、筆者は現地を訪れた。家屋は破壊されたままで、復興の気配は見られなかった。平らな廃墟の中に、イスラーム礼拝堂の尖塔が立っている。その壁には無数の弾痕が残り、激しい戦闘をしのばせた。

味方の士気を高揚させるために、敵の損害を誇張するのは、宣伝戦の常である。フィダイーン側は僅か三百の小兵力で一万二千のイスラエル軍と戦い、死傷者五百の大損害を与えて敗走させた——と、当時のファタハの機関紙は報じた。

イスラエルのヘルツォーグ前大統領は、六日戦争の後、ヨルダン川西岸の初代軍政長官に任命された。この職業軍人出身の政治家は自著の中で、カラーメーの戦闘においてイスラエル軍の「いくらかの戦術的誤り」を認めているが、それにもかかわらず、作戦の目的は達成されたと主張する。彼の記述によると、ヨルダン軍の戦死者は四十人、ゲリラの戦死者は二百人、百五十人のフィダイーン容疑者がイスラエルに連行された。イスラエル軍の損害は、戦死者が二十八人、負傷者が六十九人。四台の戦車と二台の装甲車が破壊され、一機の航空機が撃墜された（搭乗員は救出）。〔Chaim Herzog, The Arab-Israeli Wars: War and Peace in the Middle East from the War of Independence to Lebanon(London: Arms and Armour Press, 1984年)、204~205頁〕

ヨルダン王国情報文化省の資料は、イスラエル軍の死傷者を二百、ヨルダン側は戦死二十、負傷六十五の数字を挙げている。〔Y. T. Toni and Suleiman Mousa, Jordan: Land and People (Amman: The Ministry of Culture and Information, The Hashemite Kingdom of Jordan)、65頁〕

反PLOの立場で知られる英国の女流作家は、ヨルダン軍の戦死百、負傷九十、フィダイーンの戦死百七十、捕虜二百と述べている。またカラーメー攻撃の牽制作戦として、イスラエル軍は同じ日に死海の南部のゲリラ訓練所を急襲し、一兵の損害を出さずに、四十人のヨルダン兵、二十人のフィダイーンを殺害した。〔Jillian Becker, The PLO: The Rise and Fall of the Palestine Liberation Organization (London: Weidenfeld and Nicolson, 1984年)、63頁〕

6 フィダイーン勢力がPLOを内部から乗っ取ったことは、執行部の構成から明らかである。十一人の執行委員の内訳は、ファタハが議長のアラファートを含めて四人、サーイカが二人で、過半数を占めた。残りの五人は無所属だったが、そのうちの三人が親ファタハ、一人が親サーイカの態度を示す。PNCの代議員は、定数百五人のうち、ファタハが三十三、サーイカが十二を占めた。PFLPもサーイカと同じ人数を割り当てられたが、それに不満で大会に出席しなかった。〔Gerard Chaliand, The Palestinian Resistance (Harmondsworth: Penguin Books, 1972年)、56~58頁〕

7 1968年2月、イスラエル軍が報復攻撃で灌漑施設を破壊した後、ヨルダン王国政府は同年3月、6月、10月の三度にわたって、フィダイーンの活動に制限を課す。最後のそれは特に厳しく、ヨルダンの都市でフィダイーンの軍服着用と武器携帯の禁止、武装集団の車輛の乗入れ禁止、王国軍による検問と捜索などを定めた。この措置にフィダイーン勢力は強く反撥し、同年11月2日のバルファ宣言記念日に、アマーンで大規模な街頭抗議行動を繰りひろげ、米国大使館を襲撃する。王国軍は武力で暴動を鎮圧し、ファイダイーン側に約三十人の死者を出した。この衝突後、フィダイーン勢力は一時的に妥協を図り、王国政府と協定を締結した。この合意は、都市でゲリラ兵士の軍服着用と武器携帯、車輛の乗入れ禁止を再確認するなど、フセイン国王の立場を貫いている。同時に、この協定はゲリラ活動に対する王国軍の協力と援助を盛り込んだので、それからの一年間、フィダイーン勢力は対イスラエル破壊活動に専念し、王国軍と武力衝突をほとんど起こさなくなった。〔Clinton Bailey, Jordan's Palestinian Challenge, 1942-1983: A Political History (Boulder: Westview Press, 1984年)、38~42頁〕

8 この海戦は新時代の到来を告げた。エイラト号は第二次世界大戦中に就役した英海軍の駆逐艦で、1956年、イスラエルに売却された。六日戦争後もシナイ半島の沖合の地中海を哨戒し、エジプト海軍の水雷艇を撃沈する。この敗北に懲りて、エジプトのミサイル艇は外洋に出撃せず、ポートサイド港に停泊したまま、約二十五海里離れた海上の目標に誘導弾を発射した。エイラト号は急いで回避行動を取ったが、続けざまに二発の直撃を受ける。同艦は機関の破損と停電で航行不能に陥り、船体が大きく傾斜した。しかし、すぐには沈没せず、僚艦の救助を待つ。それから二時間後、三発目の誘導弾が命中して、この駆逐艦は火災と爆発を起こして沈んだ。イスラエル海軍の旗艦は、ミサイルで撃沈された史上初の軍艦となった。〔Chaim Herzog, 前掲書、198頁〕

9 イスラエル機の爆撃はエジプト陸軍の砲兵に大損害を与え、味方の人的損害を著し

く減少させる。空の大攻勢の始まる前の1969年7月、イスラエル群の地上部隊は運河地帯で百六人の死傷者を出したのに、8月には六十五人、9月には四十七人、10月には五十六人、11月には僅か三十九人、12月には三十人まで減少した。いまやイスラエル軍は戦局の主導権を握って、エジプト軍に渡河作戦を断念させる。ナースィルの期待したように、イスラエル側が人命の消耗に耐えられず、運河地帯から撤兵に追い込まれるのは、夢物語になった。〔Edward Luttwak and Dan Horowitz, *The Israeli Army* (London: Allen Lane, 1975年)、322頁〕

10 ラジャズの最初の提案は、エジプトとイスラエルの双方から拒否される。この和平案は従来の国境線を敵対国同士の境界とし、換言すれば、イスラエルにシナイ半島の放棄を求めたので、エジプトにとっては決して不利な内容ではなかった。しかし、ナースィルは次の三つの理由から、ラジャズの和平提案を斥ける。まず、同案がイスラエルに対して、シナイ半島の南端のシャルムエッセイクとガザ地帯からの撤退を明確に要求せず、将来の交渉に委ねたこと。次に、この案が事実上の単独講和を提唱し、エジプトをアラブ諸国から切り離そうと狙っていること。最後に、ラジャズ提案がヨルダン川の西岸からイスラエル軍の同時撤退を求めず、さらにパレスチナ難民問題の公正な解決を図ろうとしていないので、安全保障理事会の242号決議からも後退していること。

しかし、1970年に入ると、ナースィルの態度は軟化し、何よりも先にイスラエル軍の撤退を——という従来の主張を取り下げた。そして、ラジャズ提案が安全保障理事会の242号決議に盛り込まれた内容を網羅し、かつ撤兵の段階的実行を確約するならば、エジプトはシナイ半島からの撤兵開始以前に和平協定に調印するのによぶさかでない。ただし、カーツームのアラブ首脳会議の決定に従って、イスラエルと直接交渉をせず、二国間の平和条約を締結せず、外交上の承認もしない。しかし、国際連合の仲裁者を通じた間接交渉には応ずる——と。

一方、イスラエルはアラブ諸国との個別的直接交渉に固執し、講和条約の締結とイスラエルの法的承認を取り付けない限り、占領地からの撤退を拒否した。さらにスエズ運河とティラン海峡の自由航行権は、イスラエル船舶に完全に保証されなければならない。争点の難民問題は、パレスチナ人をイスラエルに送還するのではなく、アラブ諸国に定住させることによって、解決されるべきである。イスラエルは六日戦争の勃発当時の境界線まで兵を引くことなく、安全保障理事会の決議242号が述べている通り、「安全を保障し、かつ(国際的に)承認された国境」が撤兵以前に交渉で画定されるべきである——と。〔Robert Stephans, 前掲書、468~469頁〕

11 メイアル首相は米ソ英仏の四カ国による中東和平会議の開催に強硬に反対し、提唱者のラジャズ国務長官に向かって、四大国の仲裁がイスラエルの安全を保障しないと力説した。彼女は回想録の中で外交辞令に包みながらも、同盟国の外交責任者を辛辣に批評している。ラジャズがアラブ対イスラエル戦争の背景を全く理解していない——と。〔Golda Meir, 前掲書、320~321頁〕

1967年末、イスラエル国防軍幕僚長のイツハク・ラビンは退役し、ほどなくウォシントン駐在の大使に任命された。彼はダーヤーン国防相と共に六日戦争を勝利に導き、今度は軍人出身の外交官として最大の同盟国と軍事関係を強化する。ラビンはメイアルに重用されたので、しばしば直属上司の外相を無視して重要情報を首相に直接に報告した。この

イスラエル大使は官僚機構の壁と外交儀礼を破り、当事者のラジャズ國務長官を飛び越えて、大統領補佐官のヘンリ・キッシンジャを通じてニクソン大統領に連絡した。1969年秋、メイアルがウォシントンを訪れる前、ラビンはキッシンジャからの情報として、米国から新鋭兵器の供与を引き出すためには、対エジプト軍事行動を抑制せずに、むしろ強化するよう進言した。さらに、この駐米大使は首相にエジプトの深縦爆撃を具申したので、メイアルは空襲の目標拡大を米国大統領の示唆と受け取る。この二元外交は、両国間の正常な関係を著しく阻害した。1970年春、國務省が停戦実現のためファントム戦闘爆撃機の引き渡し停止を通告した際、大使館はホワイトハウスに直訴したが、何の返事も戻って来なかった。米国の官僚機構は正常化し、國務省が外交問題に関して責任を担うようになった。〔Corner Cruise O'Brien, 前掲書、494~498頁〕

12 この民間機の連続乗っ取り事件まで、フィダイーンは英委任統治時代のユダヤ過激派の戦術を踏襲した。後のイスラエル首相ベギンの率いるイルグーンがテロリズムの対象を英国の官憲や将兵に絞ったのと同様に、ゲリラ活動の対象をイスラエル人やシオン主義の同調者だけに限定した。ところが、ここで初めて第三者、つまり西側の市民まで巻き込む。この新局面は人質の範囲を拡大し、パレスチナ難民問題の責任を欧米諸国に問いかける。実際、アラブ人の立場から見れば、西側諸国はパレスチナ難民に対して道義的責任を負うべきであるのに、ヒトラルの迫害をめぐる欧州諸国の罪の意識をつぐなうため、アラブの土地を取り上げてイスラエルに引き渡したばかりか、この問題解決に国際連合憲章の原則適用を渋っている——と。〔Ritchie Owendale, The Origins of The Arab-Israeli Wars (London: Longman, 1984年)、188頁〕

13 六日戦争の敗北後も相変わらず、シリアのバース党政権は派閥抗争に明け暮れていた。ジェディード大統領派は労働組合、学生団体、報道機関の支持を取り付け、その一方で、アッサド国防相派は軍部を握っていた。ヨルダンの内戦をめぐる、国防相の不介入方針は、フィダイーン勢力を敗北に追い込む。フセイン国王がパレスチナ・ゲリラを制圧した後、シリアのバース党は臨時党大会を開催して国防相の辞任を要求した。ところが、1970年11月16日、アッサドは指揮下の部隊を動員し、無血軍事政変に成功した。〔Dilip Hiro, Inside the Middle East (London: Routledge & Kegan Paul, 1982年)、44頁〕

アッサドは首相とバース党書記長の地位を握り、後に大統領に就任する。それから四半世紀にわたり、彼はシリアの最高権力者として、政治と軍事の全権を掌握している。

14 ヨルダンの内戦がフィダイーン勢力の敗北に終わってから一年二カ月後、ヨルダン首相のワスフィ・テルはカーヒラで開催のアラブ諸国防衛会議に出席した。1971年11月28日、四人のパレスチナ青年は〈暗黒の九月〉と称する団体の名において、復讐のためにフセイン国王の名代を暗殺する。その後もファタハ内部の反アラファート戦闘的分子は〈パレスチナ革命の敵〉を襲撃し、ヨルダンの駐英大使を狙撃したり、ヨルダン航空の旅客機の乗っ取りなど、武力行動に訴えた。その後、このテロ組織はフィダイーン勢力から分離し、PFLPやサーイカなどの武闘集団からも不満分子を吸収し、独自の軍事作戦を敢行する。1972年には欧州で精油所や送油管の爆破、外国居住の王党派ヨルダン人の暗殺などの破壊工作を実行した。1972年5月9日、男女二人ずつのテロリストはベルジャム航空の旅客機を乗っ取り、イスラエルの空港で約百人の乗客と乗員と引き換えに六百十七人のパレスチナ囚人の釈放を要求する。イスラエル当局は取り引きに応ずる態度を示し

ながら、実際は特殊部隊の兵士が空港の整備員に変装して食糧と飲料水の補給や機体の修理に見せ掛けて、突然、機内に突入した。その場で乗っ取り犯の男性二人は射殺され、女性二人も逮捕される。その年の9月、武闘集団の〈暗黒の九月〉は報復作戦に乗り出し、折りから西独のミュンヘンで開催中のオリンピック大会のイスラエル選手村を武力で占拠した。八人のアラブ人は機関銃と手榴弾で武装し、イスラエルの選手と警備員の二人を射殺した後、九人の人質と二百人の政治犯との交換を要求する。西独治安当局とテロリストたちの交渉は長引き、いくつかのアラブ諸国の仲介も不調に終わった。最後にゲリラたちはエジプトへ出発することになり、人質のイスラエル人と一緒にヘリコプタで空港まで運ばれた。アラブ人たちが用意の旅客機を点検した直後、西独治安部隊の狙撃兵は発砲して二人を倒す。その後の銃撃戦の混乱に続き、ヘリコプタは手榴弾の爆発で炎に包まれ、人質の全員が死亡した。ミュンヘンの惨劇の直後、イスラエル軍は大規模な報復攻撃を加え、シリアとレバノンの難民収容所を空襲する。この爆撃で女性や子供を含め、約三百人のパレスチナ人が犠牲となった。さらにイスラエル軍はレバノン南部に地上攻撃を仕掛け、ゲリラの拠点を破壊した。この越境作戦に弱体なレバノン正規軍は太刀打ちできず、約五十人の損害を出す。〔John K. Cooley, Green March, Black September: The Story of the Palestinian Arabs (London: Frank Cass, 1973年)、123~129頁〕

15 アラブ世界の世論は市街戦の惨状に心を痛めた。アマン市内の道路には犠牲者の死体が埋葬されぬまま散乱している——と報じられたからである。死者の数の見積もりは、宣伝目的から誇張されて、当初、二万人に達すると伝えられた。1970年9月27日、アラブ首脳会議がヨルダンの内戦収拾のためにカーヒラで開催されると、フィダイーン側は和平成立の条件にフセインの退位を主張した。アラファートは「血の海が両者（ヨルダン軍とゲリラ勢力）を隔てた」からには、以後、フセインとの協力関係の継続を不可能と断言する。ナースィルは不倶戴天の敵同士を宥めるのに心を砕き、長時間の会議と精神的緊張で心身ともに消耗した。首脳会議が休憩に入っている間にも、ナースィルは舞台裏の調停工作を続け、アラブ連盟の現地調査団が作成した休戦協定案に同意を与える。その時、アラファートは仲裁者のエジプト大統領に緊急の情報を届けた。ヨルダン軍がアマンの支配権を奪取するために、一時停戦の約束を破って大攻勢を始めた——と。ナースィルはアラファートを控室に招き、フィダイーン救出のためにエジプト軍の軍事介入を期待できぬことを悟らせ、首脳会議再開の前に休戦協定案の受諾を迫った。こうなるとは、PLOの最高指導者もエジプトとアラブ世界全体の意向に逆らえず、ヨルダン国王との和解に応ずるしかなかった。〔Robert Stephens, 前掲書、553~555頁〕

16 ヨルダン軍はフィダイーンに対する攻撃を〈実弾演習〉と発表し、大砲と重機関銃の銃砲弾を浴びせた。フィダイーン側も迫撃砲で応戦したが、多勢に無勢で、次々に陣地を奪われる。戦闘は短期間で終了したものの、おびただしい血が流れた。フィダイーンは二百人の戦死者を出し、二千三百人が捕虜になった。そのうち千五百五十人は武装解除後、ヨルダン、シリア、イラクの難民収容所へ帰るのを許された。ほとんどがファタハに所属の〈善玉フィダイーン〉で、二度とフセイン国王に銃を向けることはあるまいと判断されたからである。残りの七百五十人はPFLPの構成員だけに、〈悪玉フィダイーン〉と見做されて、投獄の憂き目に遭った。〔John Laffin, Fedayeen: The Arab-Israeli Dilemma (London: Cassell, 1973年)、67~68頁〕

結 語

結 語

イスラエルは1967年の六日戦争と、それに続く消耗戦争の勝利で、さらには1970年のヨルダンの内戦によるアラブ世界の混乱で、中東地域に揺るぎない軍事的覇権を確立した。いまやイスラエルは米国の代理の地位を脱し、最も信頼できる軍事同盟国として、新しい中東国際秩序を形成する。冷戦体制の下で、強大なユダヤ国家の存在は、親ソ的アラブ諸国を牽制し、米国の世界戦略に貢献した。

本論の記述はひとまず1970年で終わるが、その後の出来事を略述して、本論の結語としたい。

アラブの反撃 1973年10月6日、エジプトとシリアは呼応してイスラエルを南と北から挟撃し、第四次中東戦争（アラブ側はヒジュラ暦の断食月にちなんでラマダン戦争、イスラエル側はユダヤ教の祝祭日からヨム・キプール戦争と呼ぶ）が始まった。今度の戦争は過去の軍事対決とは様相をすっかり異にし、アラブ側が奇襲戦法で戦闘の主導権を奪う。

エジプト軍はスエズ運河を渡ってシナイ半島に、シリア軍はゴラン高原に突入して、それぞれイスラエル占領下の国土奪還をめざす。ヨルダンは前回の敗北の苦い経験に懲りて、直接参戦を控えた。アラブ側の緒戦の勝利はめざましく、イスラエル不敗の神話を打ち砕く。

だが、イスラエルは米国の緊急軍事援助で手痛い打撃から立ち直り、やがて反撃に転じた。北部戦線ではシリア軍の戦車隊の猛攻を撃退し、開戦前よりも占領地を拡大する。南部戦線ではスエズ運河を東から西へ渡り、カーヒラまでわずか百キロの地点に達して、シナイ半島に進出のエジプト軍の補給路を背後から断つ。10月24日、安全保障理事会の調停で停戦が成立し、どちらも決定的勝利を収めぬまま、戦火は消し止められた。

しかし、この第四次中東戦争でアラブ側は過去の屈辱を拭い去り、六日戦争（第三次中東戦争）の惨敗で失った自信を取り戻す。さらにアラブ世界の産油国は石油を外交的武器として利用し、エジプトとシリアを側面から支援した。まずイスラエル支持国には完全禁輸を実施し、次に立場の曖昧な国には供給量を削減する。同時に原油の大幅な生産制限と価格吊り上げに踏み切り、先進工業諸国を恐慌状態に陥れた。西欧諸国や日本は従来態度を改め、パレスチナの大義に共感する立場を表明しなければならなかった。

第四次中東戦争と石油危機の結果、アラブ陣営は国際社会で発言権を一挙に

高め、それにつれてP L Oの地位も向上する。翌1974年、国際連合の総会は独立と主権に関するパレスチナ人の権利を認め、この抵抗組織をオブザーヴァとして迎え入れた。アラブ諸国も首脳会議を開催し、P L Oをパレスチナ人の唯一・正統の代表と認める。さらに戦後処理の具体策として、イスラエル占領下のガザ地帯とヨルダン川の西岸にパレスチナ独立国家を樹立することに合意した。ところが、イスラエルと米国はP L Oをテロリスト集団として敵視し、この構想を全く相手にしなかった。

エジプトの 単独講和 1979年 3月、米国の仲介の下で、エジプトはイスラエルと平和条約をホワイトハウスで締結し、ユダヤ国家を承認する。アラブ陣営はこぞって盟邦の裏切りと変節を非難したが、この単独講和を阻止できなかった。

六日戦争の敗北後、エジプトがシナイ半島の返還を条件にして、和平会談を提案した際、イスラエルは勝者の立場から撥ねつける。そこでエジプトは相手を交渉の席に引き出すには、軍事的に優位——少なくとも対等の立場に立つ必要性を悟り、1973年の秋に新たな戦争を挑んだ。その停戦から五年半の歳月が流れ、アラブ世界の盟主国は中東和平の第一歩を踏み出す。

1970年、ナースィル大統領がヨルダンの内戦収拾に精根尽き果てて急死した後、副大統領のアンワル・エッ=サダートが昇格して後継者となった。就任当初、彼は前任者の路線の踏襲を誓ったが、実際には脱ナースィル化を図り、親ソ派の政敵を粛清した。それだけではなく、エジプトからソ連の軍事顧問団を追放して、イスラエルと米国の判断を迷わせる。

第四次中東戦争の停戦後、サダートのエジプトは米国に傾き、もはやソ連の代理ではなくなった。マスクヴァはカーヒラに不信の念を抱いて、武器供与を停止する。1977年11月、突如、サダートはエルサレムを訪問し、イスラエル国会で和平を提唱して、アラブ世界から破門された。米国大統領のジミ・カータは中東和平実現の好機を逸さず、1978年 9月、サダートとベギンをメアリランド州の山荘に招き、この大統領別邸にちなんだキャンプ・デイヴィッド協定を成立させる。

事態は急進展した。半年後、この協定に基いて、サダートは対イスラエル講和条約に調印する。アラブの盟主国は平和の代償を支払った。それは過去三十年の軍事対決で大きな犠牲に耐え忍びながらも追求した戦争目的——パレスチナの大義を放棄したことである。サダートが和平交渉の前に明言した条件にもかかわらず、パレスチナ独立国家は平和条約の文言から消え、民族自決の大原則は単なる住民自治にすりかわった。一方、この単独講和の成立で、エジプトはイスラエル占領下のシナイ半島を取り戻す。

ところが、両国の和解は中東地域に平和をもたらすことなく、逆に次の戦争の引き金となった。1982年4月、イスラエルはシナイ半島の段階的返還を完了し、仇敵のエジプトを外交的に骨抜きにすると、すぐに軍事的冒険に乗り出した。同年6月、隣国のレバナンに侵攻して、パレスチナ抵抗運動の根絶をもくろむ。PLOは非力な小国の内部に解放区を築き、シオン主義国家に対して武装闘争を継続していた。イスラエル軍はPLOの主力部隊を首都ベイルートに追い込み、陸と空と海の三方から猛砲火を浴びせる。しかし、フィダインは八十八日間の包囲戦に耐え抜き、ようやく米国の調停によって、停戦と名誉ある撤兵を実現した。

この第五次中東戦争（レバナン戦争）の結果、PLOは軍事的に大打撃を受け、抵抗闘争の本拠地を喪失する。レバナン駐屯のシリア軍はイスラエル軍と衝突したが、米国製新鋭兵器の圧倒的な破壊力に対抗できなかった。他のアラブ諸国は救援の手を差し延べず、もはやパレスチナの大義に口をつぐむ。イスラエルの軍事的覇権は、ここで改めて確認された。

騒乱から 独立宣言へ 1987年11月、パレスチナ住民とイスラエル官憲との間に、ガザ地帯で衝突事件が起きた。これが発火点となって、抵抗運動が占領地で燃え上がる。この騒乱はインティファダと呼ばれ、アラビア語で蜂起を意味する。

六日戦争から二十年、住民は初めて占領体制に公然と反抗し、武器を持たぬまま投石で抵抗を続けた。イスラエルは警察力だけで鎮圧できず、正規軍が治安維持に出動し、催涙弾やゴム弾にとどまらず、実弾射撃を群衆に浴びせかける。さらに一般住民の外出禁止、指導者の予防拘禁や国外追放、家屋の爆破などの強硬手段まで用いた。だが、反イスラエルの民衆蜂起は六年にわたって継続し、1993年秋までに約千二百人の犠牲者を出す。

この流血の騒乱は半恒久的占領に対する不満の爆発であり、長年の従属から脱して独立を求める民族的抵抗に他ならない。インティファダの開始から丸一年を経過した1988年11月、PLOは最高決定機関のパレスチナ国民評議会を友好国のアルジャーリアで開催し、満場一致で独立宣言を採択した。しかし、新生〈パレスチナ国〉の版図は現実にイスラエルの占領下であり、国土と国民に新国家の実効支配が及ばなかった。

冷戦終結と 湾岸戦争 1989年秋、東欧諸国を襲った政治的、経済的大変動に伴い、米ソ両超大国の首脳は地中海の小島モルタで会談し、冷戦体制に終止符を打つ。米国とソ連の和解は世界平和に大きく寄与したが、中東地域に自動的に平和をもたらすことなく、むしろ新たな緊張を持ち込んだ。クレムリンは社会主義経済の行き詰まりに直面し、その立て直

しのためにホワイトハウスの歓心を買おうとして、ソ連国内のユダヤ教徒にイスラエル移住を認めたからである。

それまでソ連からイスラエルへの移住が全くなかった訳ではないが、出国申請から査証の取得まで長い期間を要した。出国希望者は反体制思想の持主だったため、官憲の監視や圧迫に耐えなければならなかった。ところが、ソ連の解体に伴う混乱に連れて、新しい移住者は政治的、宗教的信念からではなく、経済的に破綻した社会（そこでは伝統的な反ユダヤ感情が復活しつつある）から逃れることを第一の動機にしている。

旧ソ連系の移住希望者は百万人に達すると見積もられ、パレスチナのアラブ住民に現実的脅威と受け止められた。まず、新移民の増大は、イスラエルで出稼ぎ中のアラブ労働者に、深刻な失業問題をもたらす。そればかりではない。イスラエル政府が新規移住者用の住宅を建設するために、占領地でパレスチナ人の所有地をさらに取り上げるのではあるまいか――と。

1990年 8月、イラクのクウェイト侵攻はアラブ世界に大波瀾を巻き起こし、パレスチナ人に束の間の希望を与えたものの、すぐに苦しい立場に追い込んだ。イラクのサダム・フセイン大統領はアラブ世界の民衆から支持を取り付けようと、対イスラエル戦争を呼号する。米国がクウェイトに関する安全保障理事会の諸決議に基いて武力行使を正当化したのを逆手に取り、ヨルダン在住のパレスチナ人は大集会を開き、安全保障理事会決議 242号に盛り込まれたイスラエル軍の占領地撤退を要求して、イスラエルの決議無視に経済制裁や武力行使の措置を取らない米国の〈二重規範〉に強く反撥した。

湾岸戦争でイラクはイスラエルにミサイルを撃ち込んだものの、ユダヤ国家を戦争に引きずり込むのに失敗した。米国がイスラエルに報復を思いとどまらせ、アラブ諸国を反イラク陣営につなぎとめたからである。かつてのマスクヴァはバグダードの盟友だったが、冷戦終結後の新国際情勢下、ウォシントンに歩調を合わせてフセイン包囲陣に参加した。アラブ諸国も大半が米国を筆頭とする西側諸国の強硬策に同調し、イラクを敵に回す。1991年 2月、湾岸戦争が多国籍軍の一方的勝利に終わると、PLOはイラクを支持したばかりに国際社会ですっかり孤立した。

和平会議から 暫定自治合意へ 湾岸戦争は中東地域の軍事的、政治的、外交的構図に劇的変化をもたらし、1991年10月末から11月にかけて、スペインの首都マドリドで中東和平会議が開催された。この国際会議は1991年 7月の米ソ首脳会談で合意の結果、実現の運びとなったもので、冷戦後の国際情勢を反映して両国の共同招請の体裁を繕ったが、実質的には米国が切り回す。

米國務長官のジェイムズ・ベイカはアラブ諸国とイスラエルを何度も歴訪し、和平会議への参加を要請した。シリアは六日戦争で固有の領土のゴラン高原を奪われ、レバナン戦争でも手痛い敗北を喫しただけに、対イスラエル強硬派の筆頭だったが、冷戦後のソ連の力量低下を見て取り、意外にも米国の勧誘に応じた。イスラエルは和平会議で占領地の返還を迫られたくなかったが、米国の圧力に屈して渋々ながら出席せざるを得なかった。ブッシュ大統領はシャミル首相に対して、ソ連からの移住者向け住宅建設費用の債務保証を切り札に、会議参加を取り付けたのである。

パレスチナ人はヨルダンと合同代表団を結成し、ようやく和平会議に出席できた。しかし、六日戦争後、アラブ諸国によってパレスチナ人の唯一・正統の代表と承認されたPLOは会議の席から排除され、さらにイスラエルによって一方的に併合された東エルサレムの出身者も代表団から締め出された。

中東和平会議は回を重ねたが、実質的にはほとんど進展しなかった。シャミルが後に公然と語った通り、イスラエル側の意図は会議の引き延ばしで占領地の返還を無期限に将来に持ち越すことだった。だが、1992年7月の総選挙でシャミル政権は退陣し、ラビン首相の率いる労働党主導の連立内閣が発足する。新政権は選挙公約に従って和平の実現に積極的意欲を示したが、インティファダに対して相変わらず強硬態度で臨む。

1993年秋、事態は急転直下した。和平会議自体は行き詰まり状態に陥っていたが、ノーウェイの秘密仲介でイスラエルとPLOは相互承認に踏み切り、ガザ地帯とエリコ地区からイスラエル軍の撤退と占領地の暫定自治で合意に達する。9月13日、ラビンとアラファートは米国の首都に赴き、ホワイトハウスで協定に調印した。

その合意文書によれば、まず占領地にはパレスチナ自治機関が設立され、次に住民の選挙が実施される。そして、五年間の移行期間中の遅くとも三年以内に、イスラエルとパレスチナの両者はガザ地帯とヨルダン川の西岸の「恒久的地位」について交渉を始める。

仇敵同士の和解は歓迎すべきだが、中東和平の達成までに紆余曲折をたどらねばなるまい。イスラエルがガザ地帯を手放したのは、インティファダの鎮圧に手を焼いたからである。ここではイスラーム原理主義運動のハマスが勢力を伸ばし、占領体制反対闘争の主役となった。イスラエルの治安当局は、一時、この勢力をPLOに代わって手なづけようと試みる。だが、ハマスの活動家が民族的抵抗に挺身すると、イスラエルはこれまで絶対に交渉相手と認めなかった“テロリスト集団”のPLOと妥協の道を選んだ。

PLOは湾岸戦争でイラクを支持したため、アラブ産油諸国から援助を打

ち切られて財政的に窮迫していた。アラファートは組織の危機を悟り、これまで同胞に犠牲を強いた強硬策を放棄し、PLO指導部内の根強い反対論を押し切って、暫定自治に同意した。パレスチナの大義は、他ならぬ当事者によって反古にされたのである。

実際、この合意はパレスチナ人の民族自決権、つまり独立国家の樹立を明言せず、問題を将来に持ち越す。アラファートの支持者たちは暫定自治の終了後、独立の悲願を達成できるかのように、過大な幻想を抱いている。だが、ラビン首相が断言したように、イスラエルはパレスチナに自治を与えても、独立を認めていない。パレスチナ難民の帰還、占領地内部のユダヤ開拓地の将来、イスラエルに一方的に併合されたエルサレムなど、懸案事項はすべて今後の交渉にゆだねられ、紛争の火種を先送りするだけである。暫定自治が暫定平和に終わる可能性も排除できない。

イスラエルとPLOの歩み寄りは評価されるべきであるが、安全保障理事会決議 242号、その他の国連諸決議に謳われ、暫定自治協定にも記されているような「公正にして、かつ永続的、包括的平和」の実現までには、まだ時の検証待たねばなるまい。

イスラエルとPLOが暫定自治協定に調印してから一年余、1994年10月26日、ヨルダンとイスラエルは両国の国境地帯で平和条約を締結する。米国大統領のビル・クリントンが、エジプト・イスラエル講和条約の際のカータ大統領と同様に、その調印に立ち会った。彼の出席が雄弁に物語るように、冷戦の終結とソ連の自壊後、米国は唯一の超大国として、ウォシントン主導の平和を中東地域に課すのに成功した。この和平の基礎固めは、既に四半世紀前の1970年、イスラエルが軍事的覇権を確立した時期にまでさかのぼる。

#

資料一覽

【第一次資料】

(公刊外交文書、國際連合文書)

Department of States. Foreign Relations of the United States, Diplomatic Papers 1945, Volume I: General: The United Nations. Washington: U. S. Government Printing Office, 1967.

----- . Foreign Relations of the United States, Diplomatic Papers 1945, Volume VII: The Near East and Africa. Washington: U. S. Government Printing Office, 1969.

----- . Foreign Relations of the United States 1946, Volume VII: The Near East and Africa. Washington: U. S. Government Printing Office, 1969.

----- . Foreign Relations of the United States 1947, Volume I: General: The United Nations. Washington: U. S. Government Printing Office, 1973.

----- . Foreign Relations of the United States 1947, Volume V: The Near East and Africa. Washington: U. S. Government Printing Office, 1971.

----- . Foreign Relations of the United States 1948, Volume I: General: The United Nations Part I, Part II. Washington: U. S. Government Printing Office, 1975, 1976.

----- . Foreign Relations of the United States 1955-57, Volume XIV: Arab-Israeli Dispute 1955.

Volume XV: Arab-Israeli Dispute January 1-July , 1956.

Volume XVI: Suez Crisis July -December , 1956.

Volume XVII: Arab-Israeli Dispute 1957.

Washington: U. S. Government Printing Office, 1989, 1989, 1990, 1990.

----- . Foreign Relations of the United States, 1958-1960, Volume XII: Arab-Israeli Dispute; United Arab Republic; North Africa. Washington: U. S. Government Printing Office, 1992.

Department of State. Multinational Peace Making in the Middle East. Washington: Foreign Service Institute, 1984.

United Nations. "United Nations Special Committee on Palestine Report to the General Assembly" Official Records of the Second Session of the General Assembly Supplement No. . New York, 1947.

----- . Security Council Official Records (Twenty-Second Year). New York, 1967.

----- . The United Nations and the Question of Palestine. New York, 1989.

----- . Yearbook of the United Nations 1946-47. New York, 1947.

United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees in the Near East.

United Nations General Assembly Resolutions Regarding Assistance to Palestine Refugees.

(資料集)

The Arab Women's Information Committee. The ABC of Palestine Problem: Part I, 1896-1949. Beirut, undated.

----- . The Arabs Under Israel Occupation 1970. Beirut, undated.

Benvenisti, Meron. The West Bank Data Project: A Survey of Israel's Policies.

Washington: American Enterprise Institute for Public Policy Research, 1984.

Council for Foreign Relations. Documents on American Foreign Relations 1957.

New York: Harper & Broders, 1958.

----- . Documents on American Foreign Relations 1967. New York: Simon and Schuster, 1968.

(新聞、ニューズレター)

الثورة Althawra. Damascus.

الأهرام Al-Aharam. Cairo.

النهار Al-Nahar. Beirut.

Arab News. Jeddah.

Arab Times. Kuwait.

أشراق الأضواء Ashraq Al-Aswat. London.

The Dawn, Al-Fajr: Palestinian Weekly. Jerusalem.

The Daily Star. Beirut.

The Egyptian Gazette. Cairo.



Ha'aretz. Tel Aviv.



Al-Hayat. London.

International Herald Tribune. Paris.

Israel and Palestine Political Report. Paris.

The Jerusalem Post International Edition. Jerusalem.

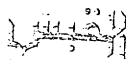
Mediterranean News. Valletta.

Middle East International. London.

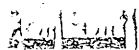
L'Orient-Le Jour. Beyrouth.

The Other Israel. Holon.

Le Progres Egyptien. Le Caire.



Al-Qabas. Kuwait.



Al-Seyassah. Kuwait.

(雑誌)

The Asia Africa Today. Moscow.

Foreign Affairs. Washington.

Middle East Business Weekly. London.

Middle East Report. London.

New Outlook. Tel Aviv.

Washington Report on the Middle East Affairs. Washington.

『現代の中東』東京：アジア経済研究所

『中東研究』東京：中東調査会

(回顧錄)

- Carter, Jimmy. The Blood of Abraham: Insights into the Middle East. Boston: Houghton Mifflin, 1985.
- . Keeping Faith: Memoirs of a President. New York: Bantam Books, 1982.
- Churchill, Winston S. The Second World War and an Epilogue on the Years of 1945 to 1957. London: Cassell, 1959.
- Dayan, Moshe. Story of My Life. London: Sphere Books, 1978.
- Eden, Anthony. Full Circle: The Memoirs of the Rt. Hon. Sir Anthony Eden. Boston: Houghton Mifflin, 1960.
- Eisenhower, Dwight D. The White House Years. Vol. I: Mandate for Change, 1953-56. New York: Doubleday, 1963.
- . The White House Years. Vol. II: Waging Peace 1956-61. New York: Doubleday, 1965.
- Kissinger, Henry. White House Years. Boston: Little, Brown, 1979.
- . Years of Upheaval. Boston: Little, Brown, 1982.
- Macmillan, Harold. Riding the Storm, 1956-1959. New York: Harper & Row, 1971.
- Meir, Golda. My Life. London: Futura Publications, 1984.
- Nixon, Richard. The Memoirs of Richard Nixon. 2 vols. New York: Warner Books, 1978.
- . Real Peace. Boston: Little, Brown, 1983.
- Rabin, Yitzhak. The Rabin Memoirs. Boston: Little, Brown, 1979.
- Sadat, Anwar el-. In Search of Identity: An Autobiography. New York: Harper Colophon Books.

(歷史地圖)

- Gilbert, Martin. The Jews of Russia: Their History in Maps and Photographs. Jerusalem: Steimatzky and the Jerusalem Post, 1979.
- . Jewish History Atlas. London: Weidenfeld and Nicolson, 1985.
- . The Arab-Israeli Conflict: Its History in Maps. London: Weidenfeld and Nicolson, 1979.
- McEvedy, Colin. The Penguin Atlas of Recent History: Europe since 1815.

Harmondsworth: Penguin Books.

Kinder, Hermann and Hilgemann, Werner. The Penguin Atlas of World History: Volume 1, From the Beginning to the Eve of the French Revolution. Harmondsworth: Penguin Books, 1979.

May, Herbert G. (Ed.). Oxford Bible Atlas. Oxford: Oxford University Press, 1984.

【第二次資料】

(研究書、ルポルタージュ、伝記)

Avineri, Shlomo. Moses Hess: Prophet of Communism and Zionism. New York: New York University Press, 1985.

—————. The Making of Modern Zionism: The Intellectual Origins of the Jewish State. New York: The Basic Books.

Bailey, Clinton. Jordan's Palestinian Challenge, 1948-1983: A Political History. Boulder: Westview Press, 1984.

Balfour-Paul, Glen. The End of Empire in the Middle East: Britain's Relinquishment of Power in Her Last Three Arab Dependancies. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.

Barck Jr., Oscar Theodore. and Blake, Manfred Nelson. Since 1900: A History of The United States of America in Our Times. New York: Macmillan, 1950.

Barnett, Michael N. Confronting the Cost of War: Military Power, State, and Society in Egypt and Israel. Princeton: Princeton University Press, 1992.

Becker, Jillian. The PLO: The Rise and Fall of the Palestine Liberation Organization. London: Weidenfeld and Nicolson, 1984.

Ben-Porat, Yeshayahu. and others. Kippur: An Account of Israel's 1973 War. Tel Aviv: Special Edition Publishers, 1973.

Bethel, Nicholas. The Palestine Triangle: The Stuggle between the British, the Jews and the Arabs, 1935-48. Jerusalem: Steimatzky's Agency, 1979.

Blumberg, Arnold. Zion before Zionism, 1838-1880. Syracuse: Syracuse University Press, 1985.

- Brockelmann, Carl (Ed.). History of the Islamic Peoples. London: Routledge & Kegan Paul, 1982.
- Bromley, Simmon. Rethinking Middle East Politics: State Formation and Development. Cambridge: Polity Press, 1994.
- Brown, L. Carl. International Politics and the Middle East: Old Rules, Dangerous Games. Princeton: Princeton University Press, 1984.
- Bruun, Geoffrey. The World in the Twentieth Century. Boston: D. C. Heath and Company, 1957.
- Bullock, Allan. Hitler: A Study in Tyranny. Harmondsworth: Penguin Books, 1984.
- Calvocoressi, Peter and Wint, Guy. Total War: Causes and Courses of the Second World War. Harmondsworth: Penguin Books, 1974.
- Cattan, Henry. Palestine and International Law: The Legal Aspects of the Arab-Israeli Conflict. London: Longman, 1973.
- Chalian, Gerard. The Palestine Resistance. Harmondsworth: Penguin Books, 1972.
- Chomsky, Noam. The Fateful Triangle. Montreal, Black Rose Books, 1984.
- Cohen, Michael J. Palestine and the Great Power. Princeton: Princeton University Press, 1982.
- Collins, Larry and Lapiere, Dominique. O Jerusalem! London: Grafton Books, 1986.
- Cooley, John K. Green March, Black September: The Story of the Palestinian Arabs. London: Frank Cass, 1973.
- Dallek, Robert (Ed.). The Dynamics of World Power: A Documentary History of U. S. Foreign Policy 1945-1973. New York: Chelsea House Publisher, 1973.
- Dawidowicz, Lucy S. The War Against the Jews, 1933-1945. Harmondsworth: Penguin Books, 1987.
- Delvin, John F. Syria: Modern State in an Ancient Land. Boulder: Westview Press, 1983.
- Dolan, David. Holy War for the Promised Land: Israel's Struggle for Survive. Nashville: Thomas Nelson, 1991.
- Donner, Fred McGraw. The Early Islamic Conquests. Princeton: Princeton University Press, 1981.
- Dulles, Foster Rhea. America's Rise to World Power, 1984-1954. New York: Harper & Brothers, 1955.
- Elon, Amos. The Israelis: Founders and Sons. Harmondsworth: Penguin Books, 1984.
- Falls, Cyril. The Great War: 1914-1918. New York: Capricorn Books, 1959.
- Freeth, Zahra. A New Look at Kuwait. London: George Allen and Unwin, 1972.

- Fromkin, David. A Peace to End All Peace: The Fall of the Ottoman Empire and the Creation of the Modern Middle East. New York: Avon Books, 1989.
- Gabriel, Richard A. Operation Peace for Galilee: The Israel-PLO War in Lebanon. New York: Hill and Wang, 1984.
- Gavron, Daniel. Israel after Begin: Israel's Options in the Aftermath of the Lebanon War. Boston: Houghton Mifflin Company, 1984.
- Gerner, Deborah J. One Land, Two People: The Conflict over Palestine. Boulder: Westview Press, 1991.
- Gerson, L. Louis. The American Secretaries of State and Their Diplomacy Volume XVI, John Foster Dulles. New York: Cooper Square Publishers, 1967.
- Gilmour, David. Lebanon: The Fractured Country. New York: St. Martin's Press, 1984.
- Gooch, G. P. A History of Our Time. Oxford: Oxford University Press, 1960.
- Goldschmidt Jr., Arthur. A Concise History of the Middle East. Boulder: Westview Press, 1983.
- Gopal, Krishan and Gopal, Kokila. West Asia and North Africa: A Documentary Study of Major Crises 1947-78. New Delhi: V. I. Publications, 1981.
- Grant, Michael. The History of Ancient Israel. New York: Charles Scribner's Sons, 1984.
- Grenville, J. A. S. A World History of the Twentieth Century, Volume I: Western Dominance, 1900-1945. Hanover: University Press of England, 1984.
- Grunberger, Richard. A Social History of the Third Reich. Harmondsworth: Penguin Books, 1984.
- Guillaume, Alfred. Islam. Harmondsworth: Penguin Books, 1981.
- Hadawi, Sami. Bitter Harvest: A Modern History of Palestine. New York: Olive Branch Press, 1989.
- Halabi, Rafik. The West Bank Story. New York: Harcourt Brace Javanovich, Publishers, 1982.
- Harttung, Arnold. (Ed.). Documents on the Arab-Israel Conflict: The Resolutions of the United Nations Organization 1978-1990. Berlin: Berlin Verlag Arno Spitz gmbH, 1993.
- Harper, Paul. The Suez Crisis. East Sussex: Wayland, 1986.
- Hart, Alan. Arafat: A Political Biography. Blomington: Indiana University Press, 1989.
- Hart, B. H. Liddell. History of the First World War. London: Pan Books, 1982.

- Heikal, Mohamed H. Cutting Lion's Tail: Suez Through Egyptian Eyes. London: Corgi Books, 1988.
- Heller, Mark A. A Palestinian State: The Implications for Israel. Cambridge: Harvard University Press, 1983.
- Herzog, Chaim. The Arab-Israeli Wars: War and Peace in the Middle East from the War of Independence to Lebanon. London: Arms and Armour, 1984.
- Hilo, Dilip. Inside the Middle East. London: Routledge & Kegan Paul, 1985.
- Hitti, Philip K. History of the Arabs: From the Earliest Times to the Present. London: Macmillan, 1991.
- Holden, David., and Johns, Richard. The House of Saud. London: Pan Books, 1983.
- Holt, P. M., Lambton, Ann K. S., and Lewis, Bernard (Eds). The Cambridge History of Islam, Volume IA: The Central Islamic Land from Pre-Islamic Times to the First World War. London: Cambridge University Press, 1980.
- Hopwood, Derek. Egypt: Politics and Society, 1945-1984. Winchester: Allen & Unwin, 1985.
- Horne, Alistair. A Savage War of Peace: Algeria 1954-1962. Harmondsworth: Penguin Books, 1979.
- Israel, Raphael. Man of Defiance: A Political Biography of Anwar Sadat. London: Weidenfeld and Nicolson, 1985.
- Israel, Tareq Y. International Relations of the Contemporary Middle East. Syracuse: Syracuse University Press, 1986.
- Jansen, G. H. Zionism, Israel and Asian Nationalism. Beirut: The Institute for Palestine Studies, 1971.
- Jansen, Michael. The Battle of Beirut: Why Israel Invaded Lebanon. London: Zed Press, 1982.
- Jiryis, Sabri. The Arabs in Israel. Beirut: The Institute for Palestine Studies, 1969.
- . Democratic Freedoms in Israel. Beirut: The Institute for Palestine Studies, 1971.
- Joll, James. Europe Since 1870: An International History. Harmondsworth: Penguin Books, 1983.
- Johnson, Paul. A History of the Jews. London: Weidenfeld and Nicolson, 1987.
- Kaufman, Gerald. Inside the Promised Land: A Personal View of Today's Israel. Aldershot: Wildwood House, 1986.
- Katz, Samuel. Days of Fire: The Secret Story of the Making of Israel. Jerusalem:

- Steimatzky's Agency, 1968.
- Katz, Steven T. Post-Holocaust Dialogues: Critical Studies in Modern Jewish Thought. New York: New York University Press, 1983.
- Kellerman, Aharon. Society and Settlement: Jewish Land of Israel in the Twentieth Century. New York: State University of New York Press, 1993.
- Kent, Marian (Ed.). The Great Power and the End of the Ottoman Empire. London: George Allen and Unwin, 1984.
- Kimmerling, Baruch. Zionism and Economy. Cambridge: Schenkman, 1983.
- Klernan, Thomas. The Arabs: Their History, Aims and Challenge to the Industrialized World. London: Sphere Books, 1984.
- Laffin, John. Fedayeen: The Arab-Israeli Dilemma. London: Cassell, 1973.
- Larkin, Margaret. The Six Days of Yad Mordechai. Yad Mordechai Museum, 1986.
- Laqueur, Walter. A History of Zionism. New York: Schocken Books, 1976.
- . The Road to War: The Origin and Aftermath of the Arab-Israeli Wars, 1967/8. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- Laqueur, Walter and Rubin, Barry. The Israel-Arab Reader: A Documentary History of the Middle East Conflict.
- Lawrence, T. E. Seven Pillars of Wisdom. Harmondsworth: Penguin Books, 1985.
- Lenczowski, George. The Middle East in World Affairs. Ithaca: Cornell University Press, 1982.
- . American Presidents and the Middle East. Durham: Duke University Press, 1990.
- Lewis, Bernard. The Middle East and the West. New York: Harper and Row, Publishers, 1966.
- Lockman, Zachary and Beinin, Joel (Eds.). Intifada: The Palaestianian Uprising against Israeli Occupation. Boston: South End Press, 1989.
- Luttwak, Edward, and Horowitz, Dan. The Israeli Army. London: Allen Lane, 1975.
- Mann, Sylvia. Our Visit to Jerusalem. Herzlia, 1985.
- Mansfield, Peter. The Arabs. Harmondsworth: Penguin Books, 1978.
- Marantz, Paul. and Steinberg, Blema S., Superpower Involvement in the Middle East: Dynamics of Foreign Policy. Boulder: Westview Press, 1985.
- Marr, Phebe. The Modern History of Iraq. Boulder: Westview Press.
- Marr, Phebe and Lewis William (Eds.). Riding the Tiger: The Middle East Challenge After the Cold War. Boulder: Westview Press, 1993.
- McCagg, William O. A History of Habsburg Jews. 1679-1918. Bloomington:

- Indiana University Press, 1992.
- Mikdash, Zuhayr. The Community of Oil Exporting Countries: A Study in Governmental Co-operation. London: George Allen & Unwin, 1972.
- Miller, Max. Introducing the Holy Land. Macon: Mercer University Press, 1982.
- Miller, Ylana N., Government and Society in Palestine, 1920-1948. Austin: University of Texas Press, 1985.
- Naor, Mordechai. Haapala: Clandestine Immigration. Tel Aviv: Ministry of Defense Publishing House and IDF Museum, 1987.
- Nicosia, Francis R. The Third Reich and the Palestine Question. Austin: University of Texas Press, 1985.
- Norman, Theodore. An Outstretched Arm: A History of the Jewish Colonization Association. London: Routledge & Kegan Paul, 1985.
- O'Brien, Conor Cruise. The Siege: The Saga of Israel and Zionism. London: Paladin Grafton Books, 1988.
- Odell, Peter R. Oil and World Power. Harmondsworth: Penguin Books, 1981.
- Ovendale, Ritchie. The Origins of Arab-Israeli Wars. London: Longman, 1985.
- Palmer, Alan. The Decline and Fall of the Ottoman Empire. London: John Murray, 1992.
- Partner, Peter. A Short Political Guide to the Arab World. London: Paul Wall Press, 1960.
- Peretz, Don. Intifada: The Palestinian Uprising. Boulder: Westview Press, 1990.
- Pipes, Daniel. Greater Syria: The History of an Ambition. Oxford: Oxford University Press, 1990.
- Quandt, William B. Camp David: Peacemaking and Politics. Washington, D. C.: The Brookings Institution, 1986.
- . Peace Process: American Diplomacy and the Arab-Israeli Conflict since 1967. Washington, D. C.: The Brookings Institution, 1993.
- Randal, Jonathan C. Going All the Way: Christian Warlords, Israeli Adventurers, and the War in Lebanon. New York: The Viking Press, 1983.
- Raphael, Chaim. The Road from Babylon: The Story of Sephardi and Oriental Jews. London: Weidenfeld and Nicolson, 1985.
- Rauch, Georg von. A History of Soviet Russia. London: Thames and Hudson, 1957.
- Ravinovich, Itamar. The War for Lebanon, 1970-1985. Ithaca: Cornell University Press, 1985.
- Reich, Bernard. Israel: Land of Tradition and Conflict. Boulder: Westview Press,

- 1985.
- Reinharz, Jehuda. Chaim Weizmann: The Making of a Zionist Leader. Oxford: Oxford University Press, 1985.
- Rodinson, Maxime. Israel and the Arabs. Harmondsworth: Penguin Books, 1973.
- . Mohammed. Harmondsworth: Penguin Books, 1973.
- Royle, Trevor. Glubb Pasha. London: Abacus, 1992.
- Rubin, Barry. The Arab States and the Palestine Conflict. Syracuse: Syracuse University Press, 1982.
- . Revolution Until Victory?: The Politics and History of the PLO. Cambridge: Harvard University Press, 1994.
- Ruthven, Malise. Islam in the World. Harmondsworth: Penguin Books, 1984.
- Sachar, Howard M. A History of Israel Volume II: From the Aftermath of the Yom Kippur War. Oxford: Oxford University Press, 1987.
- Said, Edwards W. The Question of Palestine. New York: The New York Times Books, 1979.
- Schacht, Joseph. and Bosworth, C. E. (Eds.). The Legacy of Islam. Oxford: Oxford University Press, 1982.
- Schuman, Frederick L. International Politics: The Western State System and the World Community. New York, McGraw-Hill, 1958.
- Seale, Patrick. The Struggle for Syria: A Study of Post-War Arab Politics, 1945-1958. New Haven: Yale University Press, 1986.
- Sharkansky, Ira. Ancient and Modern Israel: An Exploration of Political Parallels. Albany: State University of New York Press, 1991.
- Shipler, David K. Arab and Jew: Wounded Spirits in a Promised Land. London: Bloomsbury, 1988.
- Sicherman, Harvey. Palestinian Autonomy, Self-Government, & Peace. Boulder: Westview Press, 1993.
- Silver, Eric. Begin: A Biography. London: Weidenfeld and Nicolson, 1984.
- Sluglett, Marion-Farouk and Sluglett, Peter. Iraq Since 1958: From Revolution to Dictatorship. New York, I. B. Tarius & Co., 1990.
- Spiegel, Steven L. The Other Arab-Israeli Conflict: Making America's Middle East Policy, from Truman to Regan. Chicago: University of Chicago Press, 1985.
- Stein, Kenneth W. The Land Question in Palestine, 1917-1939. Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Stephens, Robert. Nasser: A Political Biography. Harmondsworth: Penguin Books,

1973.

- Taylor, Alan R. The Superpowers and the Middle East. Syracuse: Syracuse University Press, 1991.
- Tessler, Mark. A History of the Israeli-Palestinian Conflict. Bloomington: Indiana University Press, 1994.
- Teveth, Shabatai. Ben-Gurion: The Burning Ground, 1886-1948. London: Robert Hale, 1987.
- Tillman, Seth. The United States in the Middle East: Interests and Obstacles. Bloomington: Indiana University Press, 1982.
- Thomas, Hugh. The Suez Affairs. London: Weidenfeld and Nicolson, 1986.
- Toni, Y. T., and Mousa, Suleiman. Jordan: Land and People. Amman: Ministry of Culture and Information, Government of the Hashemite Kingdom of Jordan.
- Touval, Saadia. The Peace Brokers: Mediators in the Arab-Israeli Conflict, 1948-1979. Princeton: Princeton University Press, 1982.
- Vatikiotis, P. J. The History of Egypt: From Muhammad Ali to Sadat. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1980.
- Vocke, Harald. The Lebanese War: Its Origins and Political Dimension. London: C. Hurst and Company, 1978.
- Waterbury, John. The Egypt of Naser and Sadat: The Political Economy of Two Regimes. Princeton: Princeton University Press, 1983.

(日本語研究書)

- 伊能 武次 『エジプトの現代政治』東京：朔北社、1993年。
- 板垣 雄三 『中東パースペクティブ』東京：第三書館、1990年。
- 梅津 和郎 『紛争地域現代史① 総論・中東——紛争地域と世界』東京：同文館出版、1993年。
- 池田 明史 『イスラエル国家の諸問題』東京：アジア経済研究所、1994年。
- 石田 友雄 『ユダヤ人と中東問題』東京：六興出版、1978年。
- 小田 英郎 富田 広士 (編) 『中東・アフリカ現代史——民主化、宗教、軍部、政党』勁草書房、1993年。
- 岡崎 正孝 (編) 『中東世界——国際関係と民族問題』東京：世界思想社、1992年。
- 岡村 徹志 『パレスチナ・アラブ——その歴史と現在』東京：三省堂、1984年。

- 甲斐 静馬 『新版 中東戦争』東京：三省堂、1876年。
- 木村 喜博 『東アラブ国家形成の研究』東京：アジア経済研究所、1987年。
- 小山 茂樹 『中東で何が起きているか』東京：サイマル出版会、1980年。
- 清水 学(編) 『現代中東の政治構造』東京：アジア経済研究所、1985年。
- 長沢 栄治(編) 『東アラブ社会変容の構図』東京：アジア経済研究所、1990年。
- 永田 雄三 加賀谷 寛 勝藤 猛 『中東現代史 1』東京：山川出版社、1982年。
- 林 武 『ナセル小伝』東京：日本国際問題研究所、1973年。
- 藤田 進 『蘇るパレスチナ——語り始めた難民たちの証言』東京：東京大学出版会、1991年。
- 堀江 薫雄 (編) 『地域研究講座 現代の世界⑥ 中東』東京：ダイヤモンド社、1970年。

(筆者の著作と論稿)

- 大石悠二 『アラブ現代史—パレスチナの悲劇』東京：泰流社、1984年。
- 『戦いの時 和平の時—中東紛争起源史』東京：PMC出版、1992年。
- 「パレスチナ国家の独立宣言と中東和平の展望」(Proclamation of the Independence of the State of Palestine and the Prospect for Peace in the Middle East) 『広島平和科学』第11号、広島：広島大学平和科学研究センター、1988年。
- 「国際連合安全保障理事会決議242号と中東和平の展望」(The United Nations Security Council Resolution 242 in the Context of the Middle East Peace Process) 『広島平和科学』第13号、広島：広島大学平和科学研究センター、1990年。

#